

奇譚クラス

新しい風俗文献誌

11月号



November-'68

11

奇譚クラブ 奇譚クラブ 昭和四十三年十一月号

奇譚クラブ 昭和四十三年十一月号 定価三〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三〇円

11月号 ¥ 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齢の花恥しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の宴を団先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSファンの熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端 (静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽 (二度の嫌がらせ)
 - 第三章 美人探偵 (落花紛々)
 - 第四章 美人探偵 (落花紛々)
 - 第五章 救済者 (羞恥地獄)
 - 第六章 救援の失敗 (逆転)
 - 第七章 好餌 (京子の屈伏)
 - 第八章 悪魔の哄笑 (毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室 (悪鬼の饗宴)
 - 第十章 翻弄 (屈辱と羞恥)
 - 第十一章 蛇の執念 (裸踊り)
- 本篇
- 第十二章 姉妹危し (屈辱の狼)
 - 第十三章 調教師 (遂に京子も)
 - 第十四章 美津子受難 (二人の)
 - 第十五章 結末 (美津子の屈伏)
 - 第十六章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第十七章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第十八章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第十九章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第二十章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第二十一章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第二十二章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第二十三章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第二十四章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第二十五章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第二十六章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第二十七章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第二十八章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第二十九章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第三十章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第三十一章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第三十二章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第三十三章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第三十四章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第三十五章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第三十六章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第三十七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第三十八章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第三十九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第四十章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第四十一章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第四十二章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第四十三章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第四十四章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第四十五章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第四十六章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第四十七章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第四十八章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第四十九章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第五十章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第五十一章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第五十二章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第五十三章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第五十四章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第五十五章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第五十六章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第五十七章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第五十八章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第五十九章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第六十章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第六十一章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第六十二章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第六十三章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第六十四章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第六十五章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第六十六章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第六十七章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第六十八章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第六十九章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第七十章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第七十一章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第七十二章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第七十三章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第七十四章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第七十五章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第七十六章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第七十七章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第七十八章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第七十九章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第八十章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第八十一章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第八十二章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第八十三章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第八十四章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第八十五章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第八十六章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第八十七章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第八十八章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第八十九章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第九十章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第九十一章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第九十二章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)
 - 第九十三章 身代金奪取の失敗 (小夜子の受難)
 - 第九十四章 涙の宣誓文 (美女と木馬)
 - 第九十五章 恐怖の逆転劇 (悪魔の)
 - 第九十六章 脱走の失敗 (美津子の)
 - 第九十七章 華やかな饗宴 (悪魔の)
 - 第九十八章 地獄屋敷へ新顔 (新た)
 - 第九十九章 翻弄されるカッパル (美少年と美少女)
 - 第一百章 一万円的身代金 (正気づいた小夜子)

限定版 写真集

山原清子 妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

美しき縛しめ 第七集

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版 (思わず息をのむ凄じポーズ満載)

限定版 写真集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

美しき縛しめ 第八集

女斗と緊縛競艶写真特集

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

○ファンに要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集

山原清子 妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる 写真集

美しき縛しめ 第九集

モデル 清楚な美女乃々子 山原清子 真白で肉づきのよい女体が黒光りする革具或は褐色の牛革具によって厳重に縛しめられる、さまざまな姿態を七十二葉の華麗なフォトによってグラビア写真集として、ここに提供します。

△女性刑罰拷問特集 (日本篇) 「略号美5」は売切。本集も残部少し。すぐお申込みを。御申込先はいずれも大阪阿倍野局私書部第十四号寅田京二へ。

限定版 グラビア印刷 M 結集アルバム

M フォト・「女王様に飼育される日々」

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までのMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの方々に提供します。発行以来数ヶ月、すでに残りわずかになりました。売切れになりますと絶対に入手は出来ませんし再版はいたしません。未入手の方は、どうか今のうちに是非お申込み願います。

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
箕田京二宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛を見せる(川越美佐子)
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
26 湯責めにあう女(山原 清子)
27 変型高手小手縛(川越美佐子)
28 洋子をいじめて(木村 洋子)
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
31 均斉のとれた体(佐々木真弓)
32 涙責めの熱演(ローズ秋山)
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
41 責め抜いた挙句(安井喜久子)
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
43 全裸の股間縛り(山原 清子)
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
45 パンティを剥く(大塚 啓子)
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
53 剥がされた布片(金原奈加子)
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
55 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
56 高手小手の裸女(左近麻里子)
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
59 悶える全身縛り(一宮百合子)
60 伸びやかな素足(一宮百合子)
61 卓上の人身御供(左近麻里子)
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調猿轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 激しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)



奇譚クラブ

△第三卷第十二号・通刊第二四六号▽

(昭和四十三年) 十一月号 目次

△本 文▽

本誌自肅の徹底……………	編集部……………	(9)
創作「ふれいばおい」……………	花影 叢……………	(10)
こころのうさ ぐるてすくえれじい……………	夜乃 探郎……………	(23)
これみていまんご 珍書探訪記……………	斎藤 夜居……………	(26)
告白 フェチに想う……………	季節風太郎……………	(31)
連載小説「大噴火」……………	千葉 青鬼……………	(32)
おこし漫文「絶体絶命」……………	牧 高志……………	(40)
SMカメラ・ハントⅡ続・佐々木真弓の巻……………	辻村 隆……………	(46)
「悦痴(エッチ)な季節」……………	芳野 眉美……………	(70)
濡れにぞ濡れし△GRクラブ▽……………	弾 六夫……………	(78)
告白 ゴムに魅せられて……………	黒淵 嬰一……………	(84)
贗作平家物語「都還」……………	予世場良三……………	(100)
随想 ルール違反……………	白鳥 大蔵……………	(102)
連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄……………		

奇クサロン……………編集部構成……………(233)

白人娘を責める……………	編集部……………	
サロン楽我記(第五十三回)……………	辻村 隆……………	
編集部だより……………	辻村 隆……………	
「徳川女刑罰史」ロケ日記……………	辻村 隆……………	
小竹一浩様に「私のM感」……………	愛知 葉子……………	
奇特な男「汚物掃除」……………	岩田浩二郎……………	
映画通信「秘録おんな蔵」……………	東山 映史……………	
映画観賞感 拷問シーン……………	早木 夢二……………	
投稿者並に編集部に見る……………	徒 然……………	
イメージ画「ブランコ」……………	春川ナミオ……………	
十月号「狂執」について……………	呪 詠……………	
私達の記録「ゆりこのポーズ」……………	山口 登……………	
短歌「さらし刑」……………	高村 初子……………	
私たち夫婦のブレイ……………	渡辺 定春……………	
提案 本誌読物のアンコールを……………	香川 泳三……………	
新造品「高級ジュース」……………	呑気 放亭……………	
イメージ画「SM流生花」……………	さそり達也……………	
ひそやかに……………	清瀬 某……………	
「本誌自肅の徹底」について……………	大島三十七……………	
人間の残忍性に思う……………	西山 尚志……………	
僕のイメージ画集「哲学的な舌」……………	室井亜砂路……………	
ある会話……………	山下 一夫……………	
K・K誌の今後と文学的向上……………	無田口一郎……………	
負けおし「SM小説とは?」……………	予世場良三……………	

ルポ「女子大・馬術部探訪記」……………	佐野 寿……………	(111)
漫談千一夜物語「薔薇と蜜蜂」……………	田代 俊夫……………	(116)
妖譚「鈴音の影」……………	秤 蕩也……………	(122)
里子の物語「瓦 礫」……………	芳野 眉美……………	(134)
告白禁じられた楽しみ……………	並原 新一……………	(143)
鬼六談義「秋の風」……………	団 鬼六……………	(146)
法律雑考 レイ国裁判……………	井上 俊彦……………	(152)
マニアのノート 私はその香りに酔う……………	かず・とやま……………	(156)
ピンク映画シナリオ「肉体手形」……………	団 鬼六……………	(164)
文叢跋渉 女は強い……………	原 砂土……………	(184)
告白 私の浣腸体験……………	浅野かつみ……………	(189)
S・C・R・回答欄「パイプカット」について……………	弓削 達人……………	(192)
狙われたバックナンバー……………	とやま生……………	(193)
あぶ・らぶす・こんと 街中での発芽……………	水沢 登……………	(194)
続・妻を縛らせるの記……………	風流極道軒……………	(198)
連載小説「花と蛇」……………	団 鬼六……………	(210)
緊急ルポ 東映京都作品……………		
「徳川女刑罰史」のスターを縛る……………	辻村 隆……………	(220)
(目次カット「官鳥の夢」……………)	室井亜砂路……………	
(扉カット「鞭のイメージ」……………)	日本 武士……………	

〔最新版〕 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はくの字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出脛を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 罵られる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

奇譚クラブ

昭和43年11月号

(1968年・11月号<第22巻第12号・通刊第246号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



ある男の、ある場所での、

ある時の、ある悟り。

ぶ
れ
い

ぼ
お
い

花
影
叢

東京の千駄ヶ谷といえば、戦後に林立したさかさクラゲをもって名が高い。なかならずこのそれはデラックスなことでは知られてゐる。三時間のご休憩で小さい方の聖徳太子三枚、翌午前十一時までの一泊をとれば五枚ではいい部屋はとれない。大きな太子が要るところとぐらいざらで、また客の方もはなはだ払いっぷりがよくなるムードになっている。値段だけは都心の高級ホテルと変らないわけだがしかしまあそんなことはどうでもよい。

本篇の主人公、西田慶——氏はさかさクラゲの主人であった。あったと過去形をつかうのは、一年ほど前にやめているからである。

さらにその一年前、慶氏はヨーロッパ・アメリカの観光事業を視察かたがた彼の地に遊び、ドライヴインと道路の結びつき、及び観光地におけるアパートメントホテルなるものに、感銘をうける場所があった。帰朝後、さっそくにウェスト観光株式会社を設立し社長におさまるや、現物出資のさかさクラゲをば、アパートメントホテルに改造したのである。名づけてウェストマンション。

敷地一〇〇三平方メートル。建坪、延六四八八平方メートル。地上八階、地下二階の堂々たる本処におさまった資本金二億の会社々々

長である。もとさかさクラゲの主人といつても馬鹿にはならない。本年とって三十五才の男盛り。一七二CM七〇キロの体軀はまずスマートであり、何やら政治家を志している作家のようにフェースの方も万ざらではない、とくればこれで女に持てなければよほどどうかしている。ほっておいても、蜜にあつまる蟻。色事に不自由な日常をさらに勉勵。

一道に徹すれば万事の奥儀おのずから明らかならんとスポツカーを駈つて東奔西走の毎日を送ってきたというご仁。

慶氏、生れついでにのさかさクラゲ屋ではなく、戦時中は霞ガ浦の予科練、あこがれの七ツボタンにありついたが、かんじんの飛行機にはついにさわったことすらなく、ひたすら防空壕の穴ほり、松根油の原料作りと、スコップの扱いのみ一人前にしこまれていた。その間に東京下町の裏長屋の生家は灰。両親は近くの小学校地下室で蒸しあげられて、天涯の孤児となった不運をなげくまでもなく、俺もやがては特攻と、眼尻決していたのだが、八月十五日、ハイそれまで、という訳でリュックサック一個を背に、瓦礫の東京へ投げだされた。

新宿は野津組マーケット根城のチンピラ闊

屋、進駐軍物資の流通の尻尾などにとりついて、右往左往していたが、露店仲間の顔見知り元陸軍大佐なるジイさんがいた。千駄ヶ谷は焼あとの防空壕、母なしのひとり娘、小児麻痺でビッコひく家事がいたいたしく、ひと目見た時から可憐の情おこり、またちょっといじめてやりたい気もした。

財産税で、焼けトタンの小屋が野草にかくれた三百坪の土地を、とりあげられかかった時、無気力なジイさんの肩をたたき、おのれの有金、大部分の足らないところは、義理不義理糸ほどの縁先で恐喝がましいことまで承知でかき集めて納税。やっと間にあったナとかなんとか、二十五ワットの電球のもと、あまった銭であやしげな、肉のすき焼きなど囲み、笑いあって、すっかり一家の気分。酔った勢いでビッコ娘を近くの神宮外苑にさそいだし、強引に萎えた足ひらかせ、その夜から入りむこ同然。朝になれば、娘の作るぞう水すするのもジイさんに先がけるしまつ。佐賀県士族の元大佐、さすがに浮浪児あがりにしてやられたわいと多少いまいましてにがい顔だったが、娘の方はもっぱらうれし気に男にまめまめしく、不自由な肢でひるまはいそいそまわり廻り、夜は遠慮がちだが、哀、

愛、とほそく泣き、幸福の声ふるわす。アルコール血中に欠かせない、ふるえ手の元大佐いち夜、安もののバクダン仕入れてニコニコ顔。ひとり野草の上の月に眺めいていたが翌朝何のあいさつもなく冷たくなっていた。ひとり静かに頓死してしまったらしい。いよいよひとり身となった娘、ひたすら男にすがりついて、捨てないでと月並にいう文句も、その夜からしばらくは切実な響きがあった。

さてここに愛の巣。茎くろき夏草にかくれた千駄ヶ谷村、神宮外苑の空の下にささやき合う男女めあてに、三疊に仕切った戦前の州崎か玉の井の様式おもわせる建物草の上に首突きだし、いまだかぼそいネオンでさかさクラゲを標示しはじめたとみるや、これがなかなかの繁盛ぶり。はてこんなところで旅館など商売になるものかと怪しんだが、他人の土台石まで崩しかねないさまを見てはじっとしていられない。そうなると浮浪児出身だけあって勝負の決断はやく、近くのいっぱい飲み屋で知りあった大工をくどきおとし、支払いはのぼしのぼし、見せかけの本建築をでっちあげた。形あらわれるやいなや押すな押すな盛況。呆れる暇もなくにわか番頭。くるくるコマネズミになって動かなければならな

かったが、おかげで男と女の熱気に破裂してしまいかねないバラックも、一年たたぬまに増築、改築。三百坪の野草たちまち腥風に枯れ果てた。

女中をやとい、男の番頭はこうるさいので帳場も女。男っ気はボーイラーマンにおのれだけ。やっとな態勢とこのうと、帳場から大佐遺児月子もさがらせ、別地に建てた邸に、別に女中つきでおさまらせて奥様。やがて日に三度ほど帳場をのぞけばよいくらいの暇なご身分とかわった。金だけは、面白いようにザクザク流れこんでくる。ポストンバッグに集まった新円つめこんで銀行へ運べば、追従笑いで当座がひらかれ、他の銀行からも係長クラスがやって来ては、月子を奥様々とチャホヤする。

改築増築はつづいていて、縁のあった大工のおっさんが専門の係りのように詰めきりだが、建築には手間もこらず材料も金をかけない。もっぱら見せかけの化粧板、タイル。裏へ廻れば映画のセットよろしくひよろひよろの柱骨、ベニヤ板むきだしというさまだが、要するに建物はていさいが第一なのだという慶氏の腹。さかさクラゲはそれでよかった。二階のバスから、階下の床の間に湯がもった

ら、天井裏に時ならぬ煙、異臭流れたりはしよつ中だが、御影石張りこんだ玄関、照明、そなえつけのテレビ、ベッド、冷蔵庫などは同業に先がけての完備。要するにこけおどかし。客はそれで満足して帰っていく。

やがて、かんじんの帳場のオールドミスに手をつけて公然の妾。眼鏡かけた大がらの鈍い女だが、るいのないくらい忠実なところを買って据えた。もっとも忠実といっても女だから、男でもできればどうかかわかりはしない。大して気はすすまなかつたが、手をつけておけば、その点もまず大丈夫だろうと踏んだ。よしんばおかしい事になって来ても、からだで交りがわかうというものだ。そろそろ女に関しては、いっぱしになって来たつもりの慶氏、これも哲学である。

坐して喰うにあまる態勢がととのってみると、あとは暇つぶしを外に見つけるほかはない。麻雀、ゴルフ、小唄、ボーリング、水上スキー、ヨット。三十越えかけてみれば、そうそう若い連中かき集めてキャアキャアするのも飽きがくるし、みっともない。つまるところは喰いものと女。妾は帳場ひとりと思つたが、ついついひっかかりでつづいてしまう女、美容院のマダム、小料理屋のおかみ、と

考えてみれば、下町の職人の子らしいみみっちさと、薄情にてっし切れないところがあらわれて、どれも元手はいらずにかえつてもうけ入りという勘定高い結果だった。

道楽はカー。ポンテのキャデの成金趣味から欧州車、レーシングカー。ゴルフ場めぐりに全国まわる計画をたてて北海道まで行つたが、朝の早起きも飽きて、もっぱら夜のハング。宵のうち、こじんまりと背広きこんでは札幌の出張社員のふりして、女子大生スタイルのぷりぷりした道産子ひっかけるのも若がえって楽しめる。車に乗せて、湖のほとりのホテルへ連れこめば、どうやら相手は出張の会社員らしくないと、警戒するふうだが、できた後は始めのエキゾチックな印象あとかたもない、しめっぽい日本の女である。

ということではエキゾチズム求めて、いよいよ海外。まだ外貨は自由に持ちだせないが闇ドルふところに、しこんで香港を手はじめに、ハワイ、台北。足をのばして北欧まわりコペンハーゲン、パリ。ストックホルムの駅の売店でふと見かけた雑誌。大胆にも、ズバリ堂々とあらわしたグラビヤフォート。胸をつかれてそっとめくったうちはおぼこなもので、こんなものはコペンハーゲン空港売店で

いくらでも買えるとなわかってみれば興も失せる。ハンブルグは飾り窓の女。パリーの娼婦は果てたあと、ぴちゃぴちゃ洗うのがなんとも味気なく、シロウトの女が目につくが、言葉がままならない引け目、どうにも手が日本にないように出てこない。いらいらするだけで変なカジノにまぎれこみ、元来ない博才を承知で無駄金まきあげられたり、どうもヨーロッパは、しょうにあわんと帆をまいた。

出直してアメリカ。ニューヨークのグリニッジビレッジは汗くさいだけだった。ロスへとんでもどり、借りうけたアパートメントホテル。阿呆づらしてプレイボーイたぐいのグラフ雑誌、見るともなくページくっていると一葉の写真が目についた。プレイクラブとかタイトル読めるわけではないが、何やらの広告であるらしい。女が後手に縛られて、うしろに尻を突きだし、哀願の目むけているのは皮衣裳をまとった黒髪の大女。振りかぶった手に鞭がにぎられ、宙を切ろうとしている写真の構図であった。なんとかクラブ、電話番号がついている。

日本の旅行社の当地の若者、いっしょに飲んだりしてポン友というほどに親しくなっていたのをさっそく呼んで広告の説明を求める

と、男女の趣味的な交際クラブであるというサディズムとかマゾヒズムとかフェチズムとか、同好の士を歓迎するという。電話かけさせ出かけることにしたが、あいにくその夜はポン友、パーティーがあるとかで都合がつかない。ままよ、とひとりで地図頼りに出かけた。

似たようなアパートメントホテルのドア。ブザーを鳴らすと、紅毛にしては小柄、漫画の野球小僧といったところだが、目に陰があり、口がとがり、とんと烏天狗。うさんくさそうに上から下、視線を往復させたが、どうやらおめがねにパスしたらしくプリーズ……

慶氏、持参の雑誌のページひろげて、当ってくださいの怪しげな単語、知っている限り並べたてれば、とにかく通じたらしく、リビングルームのソファに、まずは待たされた。

金をとられて烏天狗氏の狗相、何やら愛想をうかべたかに見えるや、電話にとりつき、ぺらぺらはじまった。はじめはせいぜい聞き耳たてていたが、そのうち面倒になって窓からカルフォルニアの空を見る。曇り空のスマッグ、高速道路、林立するビルの間は、東京と違い大まかだが果ては見えない。ソファのふわふわした坐りごころ頼りなく、考えて見

れば心ぼそいが、まあ道具だてはどうだろうと、しょせんは人間がくらしていく箱に過ぎまい。天狗氏、電話がおわると身ぶり手ぶりドアから消えてしまった。

たかをくくって構えてはいるが、やはりひとり心もとなく待つことしばし。やがてドアがノックの音もなく開き金髪の長身の女、立ちあらわれた。青い目がひとと慶氏を見る。シェークスピア劇の所作のように手を広げ、抑揚のあるセリフをのべた。相変らずちんぷんかんぷんの慶氏だが、おう来たか、とか殿様になったつもりで日本語つかい、負けてはいないつもり。彼女が隣りのベッドルームへ行きかけるのについていこうとすると、手を振って拒否された。どうも勝手がちがう。がこうなればソファにおとなしくまた待つほかはないようで、つまらないふくれっ面で坐りなおした。しかし待つまでもなく、ベッドルームのドアひらき、いよいよ開演かと胸ときめかすと、立ち現れた金髪嬢、ぴったりに身についた皮の衣裳をスラリと着こんで、堂々として立ち上がった。

例の写真の鞭もった女の姿である。こいつはいかん。慶氏いささかあわてた。あわてたが口で説明してもわかる事でもない。おれの

目あては、その裸の白い尻振りたてで、ぴしぴしいじめられている女、そいつだ。といおうとするのだが、口もごもごするだけで通ずるも通じないもない。早くも金髪恐ろしげに眼光らせて、やおら手の鞭ふるって床をたたいた。床一面のフェルト、ぼすつと無気味に鳴り、慶氏を問答無用とふるえあがらせた。

馬でもあるまいし、こんな鞭をまともにくらったら、皮膚に肉ついたままちぎれ飛んでしまう。立ちほだかった長身。六フィートはあろう。女とはいえ立ちむかって勝てる相手ではなさそうだし、鞭という兇器さえ持ちあわせた敵だ。早くも慶氏は逃げ腰になった。

そのようすをどう受けとったか、女は鞭を振りかぶって威かしつつ慶氏に近づき猿臂をのびして、やおら慶氏をとらえにかかった。本能的に横つとびに逃げた。ソファをなかに追いかけることがはじまった。女はいっこうに急いようすはない。慶氏としては、いささか滑稽だがふざけているわけではない。女の手の、まだ直接は自分にはむかってこない鞭の秘めている力は、空気を切る時の音の凄味で充分にわかる。なんとか相手の誤解をとこうという焦りがあったが、逃げはじめてからは、そんな余裕も失せた。冷汗がひたひたに浮

く。ところが鍵がかかっていると思っていたドアのノブを廻すと簡単にあいてしまった。外はひるまの閑散の気を沈もらせているホテルの長い廊下である。

ほっとした。とにかく後手にドアをしめて現実にかえった。女が追ってドアにとりつくかと思うとそんな気配もない。

アパートメントホテルを出て、曇り日ながら白く眼を射る道路の光の反射にからだをさらすと、はじめてだまされた気がした。金はとられっぱなし。女の鞭におどかされて、ていよく追っぱらわれた恰好である。しかし考えてみると、写真に出ていたようにあの女のポーズと鞭に、ひれ伏して快楽を得る男女もいるに違いない。万ざらインチキときめつけるわけにはいかない。慶氏の早とちりか、言葉の通じないための行き違いかもしれなかった。となると惜しくなる。もう一度あの部屋にとって返してとは思うが、あの女がまだがん張っているだろう。とにかくポン友をもう一度わずらわして、こちらの意図と相手の内容をはじめにあわせておかなければ話にならないと分別した。

その夜、ナイトクラブで慶氏は、女子大学生と名乗る若い娘を拾った。いや、拾われた

のは、どうやら慶氏の方らしい。

「ハニー。コンニチワ」

いきなり声をかけられてギョツとした。どうやら女のこにひどく臆病になっていたらしい。金髪の、ソバカスだらけの鼻の、これは一見にして少女である。気やすく前に坐ったところはプロのようだが、そうは見えない。しかし見る目に自信がなくなりかけていたので、そんな乳くさい小娘にも少し威圧感をおぼえ、慶氏、内心舌うちした。

娘は片言の日本語を喋る。むろんまとまった話しは通じないようだが、大学で日本文学の近松をならっているという。ゼンとか狂言とかいうのだが、それには慶氏の方がチンプンカンブンだ。それでも娘の方はいっこうおかまいなく、大阪町人がどうのこうの、とペラとはいかずペエラペエラとやる。アルコールが入ると慶氏も調子をとりもどし、こちらは片言まで行かない単語をでたらめ並べのイングリッシュ。妙な幻覚的なテンポの席になつてしまい、二人ともメートルがあがった。あとは慶氏のアパートメントのベッドまで片言のまま直通であった。

ロリータという小説がベストセラーになりロシア人の偏執が苦笑まじりの話題になって

いた。

この娘は夏休みで、シカゴの親戚へ行くという。車でロッキーを越えたいというのが希望であった。そのヴァカンスのパトロンをどうやらさがしていて慶氏に目をつけたというのが本音らしい。キャロル・ベーカーほどに美人でもないが、少しは少女っぽく、しろうとっぽいロリータである。

日中は担々と陽の炎にやけるコンクリートの道をレンタカーで走る道中がはじまった。暗くなればドライヴインのネオンの下にとまる。ロリータをなぞる。が中味はやはり子供だけあって好奇心は強いらしく、いわれるままに四ツ這いになったりはするが、テレビを見てキャッキョウ笑っている時ほどの精彩はない。ソバカスの鼻をくしくしくと縮めてくしゃみでもしかけるようにクシヨクシヨンするくらいのところである。

ひるまのドライブがむしろ面倒くさくなりかけてロッキーを越え、果てなくつづく小麦畑やとうもろこしの実りが、いかにも放つたらかしで勝手に育っている原野。人家のペンキ色をみかけると、なつかしく見えはじめて、ようようミシシッピーに行き当った。セントルイス。娘も片言の日本語にあきたらし

く、ここから舟で行く、という。

「グバイ。ミスターウエスト」

慶氏もレンタカーはうり出して、行きあたりばったりの飛行機。あっけなくマイアミに着いた。これもアパートメントホテル。ヴァカンスのアメリカのサラリーマンらしい大勢は海岸の小屋泊りで釣。気のきいた者はヨット、アクアラング。金持ちは人影少ないプールの水前に居眠りしている。ひとまわりしただけで海見る気も失せ、慶氏もプールのパラスの下組に入り、コカコーラちびりちびりしていると、サンガラスの美人しきりにポーズしてしゃなりしゃなりとはじめた。ほう、どうやらデモストレーションだわいと、ロリータに声かけられてビクツとした慶氏も今度は落ちついて見られ、むしろこっちから手を出さず、むこうがどう細工してくるか楽しみにした。細工も何もない。その夜のダイニングでテーブルがあってしまい、あとはバー・マティニからベッド。

ロスへ連れていけ、とおっしゃる。テレビ女優になりハリウッドへ乗りこむそう。よいコネクションはないであろうや。そのころさしや壮。コネはないが、ロスまでくらは面倒みよう。さっそくダグラス機上の二

人とはなった。

サンガラス嬢がハリウッドのしかるべき筋へめぐりこめたかどうかはわからない。ロスのもとのアパートメント。何やら古巣へもどった気がして、しばらくげんなりした。プレイボーイも楽ではない。と思いだすのもトシであろうか。と連想は例のクラブへと戻っていった。

けっきょく旅行疲れであろう。退嬰的な考えに三日ほどぐずぐずしていたが、思い決して例のポン友に連絡した。とにかくアパートメントに来て貰い、目前の電話で、恐らく烏天狗氏と思われる男と、今度はクラブ活動内容にまで立ちいった質疑かわし、同クラブ会員ということになった。とりあえず二日後の夜、秘密ショウが催され、それに招待されるとのこと。ショウの内容は、白人女と黒人の男の実演でサディズムが主題。必ず、ご満足いただけるものと存じ上げる……とか。

因果物の見世物口上につられて木戸くぐるていだが、期待はずれでもともととも考え直し、さて二日後の夕べ。

○

白い壁のようにかわいて見える肌、内部のボツタリ重そうな脂肪分を包んでいる。近

くにまざまざ見る肌壁は意外にきたない。しみが浮きあがり、毛穴がポツポツ黒くならんでいる。毛穴からそよぐ生毛も茶褐色でそれぞれ渦を小さく巻いているように見える。くねる肢態のよじれた部分は肉がこぶになり段々と層を作り、谷間の筋に薄黒く汚れた垢の集りのような色をしみつけて、筋が異動すると、それがひとつの動作であった。

首に犬に使う首輪はめられた白人の女、これは見事に油でもひいたように黒光りし、人相もさだかではない男の手に鎖ひかれて、よろよろ特製のハイヒールでもあろう足もとおぼつかなく立ちあらわれて、そのショウがはじまった。

慶氏が皮衣裳の女におどかされたりリビングルーム。隣りの寝室とのさかいのカーテンコールがとりはらわれたところへ、ソファ腰掛けなど配し、中央にとられた床面、純い照明と角度をかえたスポット幾筋が集まり、そこが舞台というわけだった。まず前金よりの会費なるものを、烏天狗氏に要領よくまきあげられ、ガン首ならべた同輩の会員たちはげ頭の銀行員ふうの男、連れのこれはオールドミスふうの赤毛の女、下町の店主らしい男、などすばやくチェックしたが、会話を

かわすでもなく腰かけのひとつにおさまリサイドテーブル、こちらの意向を聞いてウイスキー・ストレートと揃った。ショウがはじまると周囲が気にかからなくなった。バーボン口にしきりに運び、クラッカーチーズ嚙って口がいそがしくなっていくのも気忘れ、照明に浮いた白い女体もっぱら追いかけて夢中となった。

まず鎖にひかれ、鞭に強要されての四ツ這い。むくむくした臀部をもちあげて黒い手の検査をうける。ひとしきり検査役の動きが済むと、黒い手がぴしゃりと尻を一撃、次にうつった。巻きつくような鞭の動き。かんまんにまといつくと見えるのだが、かなりの衝撃をあたえているらしく、肌ふるえが伝わり走る。ようやく悲鳴もれはじめ、何やらボール一個ひもにつながつた物がどこからかとりだされると、女の口をふさいだ。せいっぱいこじあけられた唇に、あごが喉にひつつき嘔がツツとそこを這う。眼尻も黒くぬめって光っている。それからあやにからんだ皮製の紐が解かれ、どこでどうなるかわからないが、うまい具合に女のトルソしめつけて装填された。紐と紐の中間がふくらんで誇示され、紐は皮膚のくびれに埋没していく。巨大に飛び

だした乳房、層をなしてくびれた腹から腰、腿まで締めあげて膝もとぎせぬガニ股の姿になった。

凄惨というより滑稽。女体の過度に強調された奇型がかくして生れた。アフリカの土人には女の性能力を増させるために幼時から外科的な作術をし、ついにはあたり前の感覚では異様な滑稽感をさそうに終る観光的見世物に墮す風習など伝わっているそうだが、これも同じ作為から生れた奇型でもあろうか、なにと考えるうちは余裕があり、奇型がいよいよ奇妙な動きにかわると、ふくれあがった欲望の形そのものが毒気のような空気で周囲を満たした。息ぐるしいたたかいがはじまりつつあった。

人どうしというより獣に怪人が襲いかかるような形であった。異常な雰囲気は黒い体に汗が噴き出し流れはじめて、ますます異常さを加えた。

慶氏ははじめ黒人が白人女のどこを攻撃しているか見ても理解していなかった。

ひとしきり角度を保っていた斗争の、ある段階で様相は展開した。白くふくれあがったものは宙にうかび、一端のみを接点に漂った照明のせい、重力に反した奇術が行われて

いる錯覚にとらえられる。慶氏は目に入った汗をこすってぬぐった。漂いだした白いものをはっきりとらえようと思うのだが、目がかすんで焦点がぼけていく。とまっているうちにまたわれを忘れた。

黒人の白っ茶い足の裏からのびた肢から腰へかけての筋肉が鋼鉄の釣橋のピアノ線のように張り、突端に地上へのつながりがある肉塊は、その接点ひとつで完全に宙に浮いて見える。

奇術？ は、フィルム回転が停止したように止った。ひどく静かになった。止っていたのは、しかし長い時間ではなかった。ふいにある種の運動選手の動きのように黒人の下肢がはねると、二個はもとの二人にかえった女はしかし自由を獲得したわけではない。もとの単独でくくりあげられた奇型に戻った。黒人は女の背を引いて、慶氏たちからはうしろむきにさせ、うずくまらせた。

展示された白人女の奇型は、始めとすっかり変った感じがする。顔にたとえてみれば、目と口の中間にポカッと黒い空洞を見たら、異和感というより見たものの頭のなかに空洞があり、そのために鼻というものが欠落してしまったといった感じが強いのではないであ

ろうか。

……

女のいましめがはずされていった。しかしそれは、ほとんど無意味なことだった。

酒にひどく酔って帰って来たように慶氏は帰途もよくおぼえていないありさまで、アパートメントの自分のベッドに寝つき、目ざめてから、ショウはまたよみがえり、頭の中で何かはじまったようだった。しかし慶氏らしくなく、行動にまずとりかかる事も忘れて、ぼんやりしていた。

三日後に別のクラブの烏天狗氏らしいと思える男の声で電話があった。

話しはどうもトンチンカンになる。しかしまた招待されているらしいことはわかったので、日時だけをくどくたしかめて電話をきいた。不思議に同じようなショウを見たいという期待はなかった。それで烏天狗氏の声をきいても胸ときめく事もなかったのだが、やはりこれを待って三日間ぼんやりしていたような気もするのである。

「ミス・ウエリントン」

と紹介されたその女を見て慶氏は、これがミスか、と思った。赤毛の鼻の高い典型的な毛唐顔はしかたがないとして、映画のバイキ

ングに男役で出てもよさそうな骨格のたくましさには、欲情の何のいいだす前に威圧された、異和感が先だつ。手をさしだすので仕方なくこちらを出して握ったが、手の大きさも巾もこちらを、つつみこむようにぶあつい。ニッと笑ったようだが、赤鬼が歯をむいたように、今にもとって喰われるといった状況の方が切実感があつた。

その赤鬼女とプレイをするか、という。プレイ？

ソファに坐りなおした、なおいぶかしげな表情を慶氏の顔にみてとった烏天狗氏は、立ちあがって部屋の隅のデスクから紙袋を持ってきた、テーブルの上に写真を並べはじめた。

プレイなんかのたぐいの雑誌で見るような写真だが、そもそもこのクラブへひき寄せられた契機をつくったような、女が裸にむかれて皮紐などでくくられたポーズの写真より、少し露骨なものらしいので手にとってみる。

ポーズにもいろいろある。前夜のショウで白人女がされたような極端な奇型のもの。鎖やかせなどの道具をつけたもの。よくよく見ると、その被写体はどうも全部、ミス・ウエリントンらしい。苦しそうな無理なポーズをとらされているが、表情は変化に乏しい。やは

り赤面のバイキングである。一枚、小さな足のせ椅子に四ツ這いに手足をくぐられ、ウェストをシートに密着して固定させているために、臀部が突き立てられた姿になっているのがある。斜めうしろからとられた顔に影ができ、女のおびえのような表情が見える。ポーズもそれがもっともよい。

ミス・ウエリントンはニッと一回笑んだ時顔を見せただけで、ソファの隅でじっとしてうつむいている。顔や体はごついが性格は内気なのかもしれない。話しのやりとりは、やはり烏天狗氏とかわすはかはない。

烏天狗氏がしきりに強調する『プレイ』というものはどういうことなのか、慶氏には呑みこめない。この前のショウは夜のことであった。観客ともいふべき数人の男たちの存在も、慶氏にはいくらか心を救わせるものがあった。ショウに入る前に用意されていたアルコールも、酔うほどには飲まなかったが心身を開放させるには役だったに違いない。だが今日はひるみである。三日間のぼんやりした空白期間に、ついショウから持ちこした気分を延長させて、のこのこ電話一本でやって来たわけなのだが、女ひとりを横にはなはだビジネスライクな烏天狗氏とむかいあっている

と、うまうまとセールスマンの奇妙な誘惑にひっかかりたくないという抵抗感がおこる。『二百ドル』

でそのプレイが出来るといふ。結局なんの汗のいって金をまきあげにかかっているだけではないのか。金で女を買うのなら、割りのあうタマではない。二百ドルが惜しいわけではないが、ようするに気が進まない。

写真を手に考えこんだようす、を見てとった烏天狗氏は、

「OK、百ドル」

たたき売りのバツタよろしく、半畳を入れて来た。

交渉は成立した。今は気が進まないが、こういうのもやっておいて悪くないという考えもあるのだ。

烏天狗氏は女に支度をさせるといって寝室に追いこんだ。そうして雑談の間に、『百ドル』の内容をとりきめた。四ツ這いの形に固定させた女のむきだされた背・尻・ももなどに鞭をあてることができるという。ほかにプレイとしては浣腸、ろうそくによる火責め、さまざま、拘束器具によるものなどがあるが、百ドルでは鞭うちだけだ、という。けっきょく慶氏は二百ドル払わされた。

寝室へ入った。女はすでに一糸まとわぬ姿になってうずくまるようにひかえていた。ベッドの上には鞭や縄などの品がでている。

烏天狗氏はそれからすばやく動いた。サイドの椅子に女を縛りつけて鞭を慶氏に手わたして片目をつぶってみせ、出ていった。ドアは内側からは開くが自然にロックする。

慶氏はそうして御膳だてされ、いま自由をうばわれて慶氏の視線に何もかもさらされた恰好の女体に特別な感動もおぼえなかった。博物館のウィンドー越しにセツトされおさまり返った仏像などを見るのと大差ない。ただウィンドーのガラスがはずれていて守衛がいけないだけの話だ。

巨大な骨格の臀部であった。近づいてみると、白くなめらかに見える肌はそばかすのようなしみが点々としていて、ところどころ、できもののあとのような、シコリがもりあがり、そこでは毛穴が黒くポツポツ開いて見え決して、なめらかとはいえないがたいし、色素がたまり、鉄色に沈んでいる。不自然で偉大な隆起は、滑稽な点景であった。手にした鞭は一メートルほど。手ごろに握れる手元から先が細まり、材質はグラスファイバーでもあろうか弾性を持ち、よくしなる。柄から皮紐が

十数本ほどたれている。これは短く五十センチくらいだ。柄の先で偉大な隆起を突いてみた。ポコッと穴があいたようになった。穴があいたわけではなく少しひっこんだのだ。それがはじめての赤鬼嬢の動きだった。しかし全体の感情はどうもわからない。慶氏は女体の頭の方へまわり、赤毛をつかんで顔をのぞきこんでみた。いつの間にしたのか皮の猿ぐつわを口から頬にがっしりはめられている。声をたてさせない用心でもあろうか。

バイキング面はますます長く奇怪なものになっている。涙ぐんだ目が、その時チラッと慶氏を見あげた。もともと表情のよくわからない空色の瞳だ。はっきり感情をうけとったわけではないが、図体の大きい犬が尾をまいてしおれたような、妙に媚びたような哀願の色が流れたのを慶氏はとらえた。

すると慶氏の胸のうちに反射して、むくむくと湧き上って来たものがあった。鞭を持つ手を振りあげて鋭くうちおろしていた。びしりとしぶとい手応えで、慶氏の手の方が痺れた。

憎たらしい感じだ。夢中で第二撃を振りおろした。今度は女の動揺が伝ってきた。髪をつかまれていた頭が激しく動こうとした。動

きにあわせて、痛撃の手を振った。背を越えて尻の頂きに皮は集中してはじけるようだった。女は呻いた。声にはならないがぐもった唸りのようなものがひびいた。空色の瞳がぼけてあふれる水が眼窩を濡らしたのを慶氏は見た。慶氏のところは沸騰したようにたけり立った。

何かなんでもあらあらしく痛めつけて、女の媚を地になすりつけ、泥まみれにしてやりたい衝動が突きあがって来た。髪をつかんでまたがった。首ががっくり下って不安定になるのをしめつけておいて、鞭を振りかぶり、双丘の片方に狙いをつけて振りおろした。しかしこの恰好は腰がきまらないので途中で力が抜ける。

ただやたらに鞭うつだけでは手が疲れるだけなので、方針を少し変えた。柄の先を利用して、くびれてひっこんでいるところ、腋の下から横腹などを、軽く突くことから始まり、思いつくままにぐりぐりこじって行く。逃げられるはずはないのだが、こびとがもぐりこんでいて攻撃にあうと、くもの子を散らして逃げていくような肌の下のごめきを追いかけて、追いつめて行く。

女の肌はしめって赤らみ、熱をもってふくらみ、やがて汗となってとけはじめた。胸の喘ぎが腹から背を波うたせる。赤毛が燃えたとてゆれる。

ひとしきり突きこじったあと、ひと鞭くれと波動が激しくはずんだ。そしてまた、ぐりぐり責めつけていく。見えている足の裏がキーンとすばまり、足の指があくように動いた。

前にまわると、首をのけぞらしてそれ以上あかない口から、よだれを流しつつ唸っている。髪をつかんであお向かせると瞳をこちらへむけたようだったが、眼窩が濡れそびれて焦点のありかもわからない面相であった。うなじに結ばれた皮紐をといた。口の中から瓜型の詰めものがつながって出て来た。思わずそうしたのだろう、金魚が水中でするように濡れてひとまわり大きくなって見える口をパクパクした。

一度はやってみたいと無意識のうちに希んでいた虐待プレイに違いはない。それが誘導的に実現した訳だが、しかし何か物足りないくすぶりかけてしかし爆発に達しない。自分の思うとおりにしながら、なお何かしたりない思い、というより何ひとつ思いどおりには

なっていない焦だちが、ちろちろ赤い炎をあげはじめた。

慶氏はぐるぐる女体の周囲をまわりはじめた。しどど汗に濡れそびれたその偉大な赤毛の背肌を見ていると、逆に自分の方がいいように頤使されている気がしてくる。いくら打ったか数をおぼえていないが、手にだるい痺れがあった。ごつい尻が赤らんだ筋をつけてふくらんでいるだけで、対手の方はいっこうにダメージを受けたようすもない。特に縞模様のはっきりしているところを柄の先でこじってみた。

ヒャッ！

とか

クキヤッ！

とか

いきなり悲鳴が高くほとばしり、慶氏を仰天させた。そうだ、口があき、声が出るようになっていいるのだ。慶氏はおぼえず辺りを見廻し、首をすくめた。

アパートメントの一部屋の寝室、ツウイン

・ベッド……

薄い空色の合成繊維製のカーテン。

アメリカ。

ロスアンジェルス。

カーテンを少しひいて外を見てみた。外は灰色の空であった。三十階ほどのビルの二十三階にこの部屋はあるのだ。窓もあけなければ路は見えない。といってこの高さが空間に孤立しているわけではない。ガラスとコンクリートの大きな棺桶のようなビルが、空を切って立っている。このビルもむこうから見れば同じような景観になるであろう。人の気配はない。人間はあまりにも小さい。

少し気の抜けた思いでもとに戻った。こちらのアメリカは白い肌を斑らに赤くして這いつくばっている。

慶氏は、おのれに目を落すと、おもむろに攻撃にかかった。

○

いきなり足もとにひれ伏して、慶氏の足の甲に唇おしつけた。

姿に似合わぬ、小鳥のさえずりのようなほそい声で女は喋った。ゆっくりいわれれば、どうにかその意をくみとるぐらいに言葉を聞き分けられるようになって来た慶氏も女のかん高い早口にあうと、てんで歯がたたない。ミス・ウエリントンこと赤毛の女の訪問うけて挨拶かわしたまではよいが、そのあとわけがわからない。ドアの外に、慶氏よりはたし

かにひと、ふたまわりは大きいウエリントン嬢の巨軀を見たときから気を吞まれていた。

慶氏のとまどいを見てとったかどうか、彼女は身振り手振りこそひかえ目だったが、何事かピヤフヤはじめた。ひとしきり勝手に喋りまくったあと、床にひざまずいたのだ。

上目使いに慶氏を見る瞳は早くも濡れて、慶氏といえども彼女の訪問の意図がどの辺にあるのか悟らずにはいられない。言葉ははじめから不必要なのだ。しかし普通のやり方を彼女が望んでいないことも明らかである。あいにく烏天狗氏の部屋にそなわっていたような小道具の用意がなかった。

と彼女は持参のバッグをひらき、金属製のものをひとつかみとりだした。丸い環があり鎖がある。いずれも装身具のようにきやしゃなものだが使途は拘束のためのものらしい。それから立ちあがってビジネススーツふうの衣裳を自分でとりはじめた。

スリップ、ブラジャー、ガーターまではずし胸をかかえこんでふたたびうずくまった。慶氏は環をとりあげてみた。手錠であるらしい。半月形に割れて、円にもどると爪で固定される構造になっている。

慶氏は腰をあげて女の腕をつかみ逆手にね

じあげた。手首に錠をまわしてとめた。手錠は二つが短い鎖でつながっている。左右を逆手にしてとめるとうしろ手に自由のきかない姿勢になる。それだけで拘束の目的は充分のようだが、まだ鎖や環があまっている。環は手錠よりひとまわり大きく構造は同じだ。ただ鎖がずるずると長くつながっていて、その中間に皮バンドがついている。ひどく短いバンドだ。ももに巻ける程度である。ももとすると、ひとつであるのはおかしい。環は足錠であろう。ももぐらいのところといえば首か？ にしては足錠との間が短か過ぎるようだが、と首をひねった。がうずくまった恰好を見て納得した。短くともこの恰好なら間にあう。足首を出させて錠をはめ、首につなぐと曲げた両膝に首をつつこんだ恰好になる。首のうしろからまだ長い鎖がのびていた。途中に輪があり、ちょっと考えて手錠をぐいと引きあげて連結した。それでできたらしい。

あとは考える必要はない。

慶氏は自分の腰から皮バンドを引き抜いてわずかにパンティのまといについている隆起めがけて打ちふるった。自分の動きと、しぶとい手応えで兇暴な発作にかられたように情感が波だった。女は顔で床をなめ、高々とかが

げた臀部をうちふるわし、例の姿に似ぬ漫画的な繊い声をあげてこたえた。白い肌に薄ら赤い条がはしり、ゆっくり消える前にまた飛び散り、やがて一面でふくれたように紅色がみなぎった。慶氏は最後の布に手をかけた。女の腰が逃げる。つるつと丸味が飛びだし、うろたえた少女の顔のように微妙に動き立ちなずんだ。

「私、みす・うえりんとんハ仮名ニテ、まりあまっきんはいんつナル当年トッテ三〇才。さんふらんしすこ、こおん・すとれいち商会ニ秘書トシテ勤メル者デアル。カネテヒトリ胸ノウちに抱キツツケテキタアコガレノ男性ヲ貴下ニ見イダシ、喜ビニタエズ。前後ヲカエリミルコトモ忘レ、本日訪レタリ。ドウゾソノ心ヲ哀レンデ、貴下ノ奴隷トシテカタワラニ置カレタク、願ウ次第デアル。希望、貴下ニ入レラレルヤ否ヤ？」

レストランのテーブルを囲み、旅行社のボン友呼びだして通訳を頼み、女の話しを聞くに要約して以上のようなになる。

それで今日のふいの再会は烏天狗氏のさしがねではなく彼女自身の意志によることがわかったが、慶氏としてはためらい、とまどわざるを得ない。いいにくい事を第三者を仲に

おいて云い、度胸をきめたのだろう、慶氏の表情の動きを少しでも逃すまいと前にのりだしたマリヤは空色の瞳をすえている。

「希望ヲイレタキモ、余ハ旅行中の外国人ニテ近ク帰国ノ途ニツカネバナライナイ」

「帰国ノ件ハ了解シタ。ソレマデの期間、メイドトシテ契約シ、貴下の快樂ノスベテニ協力、奉仕シタイ」

「さんふらんしすこノ勤務先ハドウスルツモリカ？」

「現在一カ月ノ休暇ヲトッテ、ソノ二週メデアル。休暇ハ延長デキル」

契約は成立した。明日より二週間、住みこみで勤める。自分のとったホテルを引きはらってくるから、といっていそいそ出ていった。見送って慶氏、いささか呆然とボン友の顔を眺めた。

「なんだ、またゴツイのを拾ったな」

「アア」と返事も気が抜ける。

「それに、奴隷とか奉仕とか奇妙な事をいつてたな」

説明も面倒である。

臀部脹れあがるまでぶちのめしたあと、鎖ひいて寝室、リビング、バスルームまで引きずりまわし四肢を蛙のようにひろげてのび

てしまったあと、慶氏の方も死んだように長
くのびてしまった。一時間ほどで女の方も
どもぞしてきた。もう動けば反吐が出そうだ
と音をあげながら、女のいましめとて解放
した。女はシャワーをあげにいった。それか
らしばらくして、ようやく慶氏も落着きとり
もどし、シャワーをあげ出て来たのだが、女
は大きな体でいそいそしく、当然のように腕
とりついてくる。そこで考えたあげく、ポン
友を呼んだのである。

「飲もう」

何か、シャワーをあびたはずなのに、べと
ついているような気がしてかなわない。アル
コールで消毒だと勢いつけて立ちあがった。
下町、チャイナ・タウン、痛飲して夜明けに
もどり、気がつくときふつか酔い、頭にズキン
ズキン鉄塊を打ちこまれるようにドアがたた
かれている。ブザーも伴奏する。あの女め！
ドアをあけるとごつい男ふたり。ギョッとす
ると、作業服来たふたりは無遠慮にズカズカ
踏みこんで来て、何か喚くようにいう。大き
な荷物をもっている。

犬小屋だという。そんなものは注文しない
という。「間違いない。ミスター西田、
どうぞサインを」というなり作業にとりかか

り、たちまち大きな箱型ひとつ組立ててしま
った。勘定はすでにすんでいるというが、む
かつ腹をたてて文句いおうにも言葉がすんな
り口に出ず、相手に通じぬままに二人はさっ
さと帰ってしまった。

ベッドにもどりと頭の痛みをおさえ、ようや
くまたうとうとしだすと、ブザー。腹をたて
る余力もなくドアひくと、今度はまぎれもな
く赤毛のマリヤ。両腕に買物包みかかえこん
で立っている。

犬小屋は私のベッドだという。

怒るより呆れる。ベッドにもどるといそい
そついて来るが、感情いっこう伝わらず、青
い目丸くして心配顔。さっそくひたいに冷蔵
庫の氷包みをあてたり、マッサージこころみ
ようとしたり、こうるさい介抱ぶり。瘤たて
た慶氏が怒鳴ると、巨体ひれ伏しておびえた
表情。犬め。くそいまましい雌犬め！ や
けになって飛び起き、乱暴にマリヤの衣服は
ぎとると、四ツ這いに尻たてさせてピシリピ
シリ。汗が滝と流れる。

それからは夜と昼の区別、切れ目がなくな
り白い肌見るとゲップが出た。なんとも頑丈
巖のごとき肉塊に増悪ムラムラこみあげて、
またやけくそに鞭ふるいこづきまわすが、ど

っちがほんとうのところ責められているのか
わからない。どうやらあそこの路次裏この
のれん、花屋に肉屋と案内されてついて来た
なかで、女の好むところはやはり臀部おっ立
てての鞭うちらしいとわかったが、赤脹れの
双丘、紫色にうつる限界しめす前にこちらの
腕が萎えてしまう。歓楽極まって哀傷多し。

過ぎるは及ばざるごとく、力萎え心身虚脱
すると生きているのも面倒になってくる。こ
の点は女の方が根性うわてで、アベ定なる佳
人は執着する一点をついに見いだしたそうだ
が、男のエロスはどうやら死神と同居してい
るらしい。慶氏いささか悟るところあって、
ふたつみつある太陽のもとにさまよい出、飛
行機会社に太平洋路線の座席を予約し、因縁
あるポン友呼びだして、女に印導わたした。

ロサンゼルス・エアポート。

見おくりのポン友と赤毛、驚いたことにい
つの間にか二人淫靡の眼からませて、何やら
示しあわせたらしく、待合の小部屋で薄物の
コートを取らせ中味を見せた。

肌に喰いこんだ金鎖のブラジャーとパンテ
ー。一陣の腥風、部屋に満ちて、慶氏思わず
鼻をしかめた。



こころのウサをうたう

ぐろてすくえれじい

夜 乃 探 郎

真黒な世界。狭いきゅうくつな世界。そして

水びたしの世界。その暗黒の世界から押流され、血の糸が切断され、未熟の烙印を押された時、早くも原野にのたれ死にの約束のもと、呪われた男の呪われた漂流劇の序章となった……生殖と弔歌の波に迎えられて。

流されて流されて、またいま、われはうたわんグロテスクエレジイ。

掌にかくれるグラスの底に、僅かにたゆとう酒に溺れ、幻想に引き寄せられては押し返えされ、押し上げられては叩き落とされる木の葉船。すばらしきポインの丘に鋭い歯と爪を想い、そそと歩む腰細き美女の後姿に、フトギロチンの刃を彩るものがダブる。朦朧とした頭を振れば、街のネオンが五色の鞭とな

ってとび跳ねる。

マダ生キテタンデスネ。相モカワラズ好キデスナ。

イヤ、死ンジマッタ。コイツハ、酒ト心中シタヌケガラサ。

酒場で飲まずに墓場で飲もう。ぬけがらのふるさとでさ。どうせ酒など死に水だ。ネオンは騒々しいが、墓場の月は静かだ。だいいち青く美しい。墓石のカウンターでラッパ飲みもまたオツな……もんだが、やっぱり淋しい。飲み残りのピンをポイと捨てかけたが、やめた。もったいない。大事に持ちなおしてスタコラサッサと逆戻り。街の夜を仰いでため息。ネオンは美しく活気がある。……チョ

ッ、ダラシネエノ……。

地獄という名の酒場は仮面に隠れ、パラダイスを名乗る酒場ばかり。ダラシねえのはどこのどいつだ? とばかりに澄し込んだ呪われた男。意味もないニヒルでもない笑いをそのつもりで浮かべマダムの薄いドレスを透してみえる胸のクラゲに刺されてシビレ、おいハイヤーだ。マダム、行こうよ。そんなコワイ顔すんな。レコードを買いにサ。地獄の栄光と悪魔讃美のレコードを……。この店にフサワシイ新盤が出るんだろ? マダムの表情が変わって、シートにクラゲが余計揺れる。今度は刺さずに手の中で踊らしながら、わたし夜はお店の中ばかりでしょ。街の灯がグー

ンときちゃう。……とはまたキザな。テヤガンデイ、さっきの眼付を忘れたか、あのコワイ眼付をサ。肚の中と仮面とはこんなにも違う。ならばこちらキザといこう。……夜があるんだね……。

うらぶれて、またうらぶれた呪われし男。その黒い心と眼は、昼の世界に夜を見る。夜の世界に地獄を見、その深淵に幻を見る。

パチンコ屋ノ通りノツキアタリガ駅前ノ広場。ソコノ横ノバス会社ノ裏側ヲスコシ行クト薄暗イ小路ニ出ル。積木細工ノヨウナ家が並ンデ、ドギツク光ルネオンヲ感ジル辺リガ地獄ノ天国デス。怖イ天使、イヤ恐ロシイ優姫ノ姿ガチラホラ眼ニツクト、駈ケダシタクナリマス、ソノ姫ノソバヘ。……ヤア、オナツカシイ。ヤア、オ元氣デ。

灯は、消え去る時の一瞬こそ美しきとはだれの言葉だっけ？ この辺りの天国も、近いうちに霧消するかも？ だから美しい？ 泥化粧にぬたかった天使のどこが美しい？ 化粧した顔？ 荒れた肌？ 媚びる風情？ 冗談じゃない、心さ。逆境に負けない心。うしろ指にもくじけないで、文字通り生きるために体当りしてる心意気さ……おう、キザよ。

着物のぬぎ方がぎこちない。天降ってまだ間がない？ 大きく吐いた熱いため息。一日の食にありつけた安心感？ 夜の天使達は生きるためにここに居り、呪われた男は魂をクサラセにここに来る。おらぁチョット変ってるぜ。不思議そうに見上げる風情はカマトト天使か？ こうしたいんだ。破れ畳に白いポリウムがずるずる引きずられる。白い両足が猛烈に暴れて、掴まれた黒い手をフットパス。くると起き上るなり最初に蹴られた尻をなぜながら睨みつける。ナニスンダヨウ。この天使は田舎の天国出身らしい。天降りの際、習って来なかったの？ 本当に知らないとはなさない。呪われた男の呪われた心にまたもや吹き抜ける一じんの秋風。かくては甲斐なしとばかり、再び襲いかかったとたん白いポリウムが風を起し、捕えるべき黒い手が捕えられて、破れ畳をなめたのは呪われた男。ああ、またいやに強い天使よ。止してくれ、おらぁMじゃねえ。

男いのちの純情にわざと背を向けた……つもりの呪われた男にとって、窓の外に広がる夜空にも星はない。イヤなくなつた。でもボンヤリ眺めるうちに、星のあった昔のことを思い出す。ガラじゃないとは分っている。だ

が思い出してくるのを追い帰すことはない。たまにやそんな時間があっても墓場から魂が怒ってくることもあるまいさ。思い出そう、砂漠にも泪があると感じたことを。枯れきつた呪われたわが心にも、まだしばらく出せる血があったと感じたことを。そして、水色のドレスの裾をひるがえしながら、月の世界へ行きたいと呟いていた美少女K子のことを……そう、わびしい病室でひっそりと、月に向って独り昇天して行ったわが唯一の星、K子。己れをわざと傷つけ、その血でペンを染め得たとウヌボレタ呪われた男。これこそ人間の心の叫びなりとした詩人氣どりの呪われた男。自己満足にうつつを抜かし、孤独をうたい上げては誇示していた呪われた男。そのうたを聞かされたK子が、いかに心の傷を受けたかをも知らず、いかに絶望的な気持ちに陥ったかをも察せず、キザなスタイリストでエゴイストの呪われた男。残されしは何？ 敗北のうた？ 地獄への道標？

左から右へ黄色の光が走り、それを追ってまたたく赤色の閃光。一瞬の暗黒の後に輝く五色の彩光。痴呆の如く眺める呪われた男の呪われた脳に、何かを想わせ、何かを幻想させるイルミネーション。光りを受けた呪われた眼底に浮かぶものは何？ フランス映画？

ピカデリーサーカス？ 過ぎ来し人生？ 生
と死の争い？ 鞭による女の悲鳴？ のたう
つ女の気持？ 被虐に開花する女の歓喜？
己れの歪んだ気持？ 狂おしい天国へのいざ
ない？ 地獄への階段？……

呪われし男の流されるところ。それはごく
ありふれた夜の街以外にないだろう。どこに
でもある軽薄な巷だ。ただ、人の心を浮き立
たせ、生活のための鎧を脱がせ、節度のため
の衣類を捨てさせ、押し込めていた本能の叫
びを、肌一杯にみなぎらせしめようとする巷
だ。そしてそれを餌に、醜い本性をチラツカ
セル内面夜叉の巷なのだ。何が憩いだ。何が
歓楽だ。何が明日の活力だ！ わらわすな。
こんな薄べらなごまかしで人間の心が憩える
んなら、だれが悩んだりするものか！ こん
な化け街はきつと天の神の怒りに触れるぞ。
そら云わないこっちゃない、揺れだした。呪
われた男がちゃんと立っていられない程フラ
フラしてるじゃないか。天の怒りだ。そうだ
神が街をゆさぶっているんだ。みる、ネオン
が、建物が、囲りの人間が、みなグラグラ揺
れている。いい気味だ。神は、呪われた……
いや、ただ独りマットゥだった男を救いに来
たんだ。満されぬまま長い間、悩み苦しんで
いた男を迎えに来たんだ。ざまあみる。化け

街も、化け人間もだんだんに消えて行く、霧
のように……。フッフフ、バイバイ。

そーら来た。やって来た。暗闇の彼方から
漆黒のベールの裾をひるがえした美女が。……
……すばらしい美女、あの輝く肌の白さはどう
だ。あの柔らかな曲線の流れはどうだ。じっ
と見詰めて微笑む眸はどうだ。めらめら燃え
上る炎のような唇はどうだ。K子のこの見違
える変貌ぶりはどうだ。見えない？ そうだ
ろうよ、君に見えるワケはない。マットゥな
男だけを迎えに来た美女なんだから……

しなやかな腕が差し伸ばされた。眼の前に
捧げられたものは縄だ。金色に輝く絹でより
上げられた縄の束だ。見事な柔肌によく似合
う。ふっくらした肌に噛みこむにはもってこ
いのものだ。神秘的なマスクと神秘的な柔肌一杯
にみなぎるこの挑発はどうだ。よろしい、使
者の顔を立ててあげよう。そのしなやかな五
体を金色に彩った物体にしてあげよう。そし
てずっしりとした重みを両手に抱えて、神の
指令通りアブの祭壇に捧げ挙げよう。ほら赤
い火花が、キミの白肌を照して染めた。美し
いよ。そんなに悶えてくれなくても、その後
手の姿だけで、神の意にそむくことはないん
だよ。それだけでも十分美しいけれど、もし
キミが、鮮血の彩りをつけ加えることを望む
のなら、喜んで選ばれた男としての労をとる

うじゃないか……。喜んで、このベルトで力
一杯その柔肌を……。キミ、どこへ行った？
キミ、キミよ。素肌を縛られたままで、どこ
へ行ったの？ キミ、出ておいで。帰ってお
いで。キミ、キミったらキミ！……

だれのこと？ 眼の前に二重三重にダブッ
た化け者の顔が迫る。お金に縛られた哀れな
キミは、ずっとここに居るわ。そんなに呼ば
なくたって聞こえててよ。ニイツと白い歯
がのぞく。笑ったつもりかね、あれが。ふら
つく足を戸口まで運ぶ。またどうぞ。ちくし
よう。もう少し優しく叩け。そういう時には
軽くやるもんだ。これじゃまるでドヤシつけ
てのタタキ出しだ。ちよっ、消えた筈の街が
あるとは。霧になった筈のネオンが光ってや
がらあ。こんな要らないものが残ってて、現
われた筈の天使が消えるとは情けない。
やはり帰ろう、青い月のもとへ。冷く沈黙
している墓のもとへ。流されて、流されて……
……求める祭壇は見当らず、供うる女体は更に
影なし。呪われし男の行手は尚遠く、地獄の
砂漠をさまよいつつ、魂眠る墓地に向い、ふ
らつく足を踏み出そうとする。いずれの日か
流れつくことだろう。

(カット・室井亜砂路画)

これみていまんご

珍書探訪記

齋 藤 夜 居

私は以前から秘密文献の流布経路や、その途中における改竄行為の実際などに就いて、今迄に知った事柄に就いて本誌に発表して、読者各位の参考にもなることなので、いつかはお知らせしたいと思っていた。然し乍ら、「稿談性風俗資料入門」や「探奇考料」においては、とにかく文献そのものを示すのが先きになって、その説明と紹介に追われるような気持ちになってしまった。一部の読者の方々からは、おもしろい本を自分で独り占めしないで、我々同好者たちに貸与の方法を考えてくれたっていいじゃないか。又は、わざわざ奇譚クラブ編集長の箕田京二氏に私の住所を

たずねて、それから文献借用したいとの申し越しもあったり、時には何処で住所を知ったのか直接来訪という強引な方もあり、男色関係の資料を持っていたら貸してくれ、等々：まるで私が、軟派文献の倉庫の管理人かとカシン違いされているような人たちは十指にかぞえる程あった。直接ひとに手紙を送り問うことは仲々ある意味では勇気が必要とすること、それは熱心さの余りよくよく思いつめた行為だということは、私は自分にも体験があるので、それらの方々の勝手な言分も黙って聞いてはいたが——、結果的には言語同断ともいうべき、失礼きわまる方もあった。また

著作などあるコレクターで、拙宅からある種の文献を持ち出し、いまだに返却に応じない人もある。困ったことになった。——然し、うれしい話もきいた。

今は故人になられたので発表しても差支えあるまいと思うが、私の知人の艶笑資料のかくれた収集家などは、ある時フトした機縁から作家山本周五郎氏と識り、需めに応じ無修正ヌード写真を五百枚提供されたが、山本氏はずいぶん高額の金円を送って来られ、それには——近来、こんな美しいヌードを拝見させて頂き、作家としてこんな嬉しいことはなかった。久しぶりに若やいだ気持も湧き、ほ

んとうに有がたかった。お礼を申し上げますと書かれた信書を頂き、私にだいぶ自慢し見せたが、この気持をもたなかったら性風俗資料の良品など絶対に入手も保存もまっとうな鑑賞もできるものではない。——但、そうした物、飯を食う商売をしている所謂性学大家のことは別で、私の言いたい点はいくまでもアマチュアの話である。私など本誌に約二年間も何かしら載せて頂き、原稿書きと思われる方々もあるが、それは飛んだまちがいである。この間も医家でもしろい有益な筆はくだけているが真摯なセックス随筆家として知られ

た、『結婚の分析』や『女患』の著者西島実氏とお会いした折にも、先生は欠かさず書店から本誌を購入され、医業や精神分析研究の参考資料とされて居られるが、私の稿料の話をしたら、まるで学術雑誌並の薄謝だなア：と驚くだけだった。私は、性的出版物に就いては先ず正しい親切な紹介が第一の要務だから「知らせる」と「伝える」ことが先きだから、我欲の仕事でやって来たのではない、という自説を開陳したのである。私は本誌読者欄に二、三散見した拙稿に対する不用論には今迄は黙っていたが、私の意図した点を汲み取れない方々もずいぶん居られるのだな、と思い初めはイヤな気持がした。それから、やや失望を感じたのである。

最近、私は阿部定さんにお会いしお話を聞いたが、変態性慾なんていう程大げさに、△性▽に関するやってみたいことと、やりたい事と、やったことは妙な色眼鏡で見るべきではないと、つくづく感じたのである。

正義感の強い正直な女性だと思った。詳しいことは自家宣伝で申し訳ないが、私家版雑誌『愛書家くらぶ』に発表したいと、思っている。今迄世の中に知られていない新事実も幾つか発見したのでそれも知らせたい。阿部さんは本年六十三才、例の「菊水」をやめてから、親友の某女と一緒に浅草竜泉寺附近で、「おにぎり屋」を経営されている——。とにかく、セックスの変態に就いては今迄みたい

に好奇心をそそる式の売らん哉読物や、現今横行するくだらない週刊誌式の筆法はもう古いのだから、せめて本誌読者程に深く突っこんで考えようとする方たちは、性的ジャーナリズムに踊らされないだけの気持になって欲しいと思っている。

○

根気強く、忍耐強く、自分の生活を幸福にしようという気持が持続できなければ、性資料の本物は入手できない、とお伝えしたい。

私は本誌先号(42・12月号)に、秘稿「おいらん」について少し触れたが、その梗概を知る為の雑誌『あまとりあ』の誌号をも示して置いたので、特志の方はそれに拠られるとして、まったく秘文献が流布されて行く裏話をきくと、まるで人生の流転生活を思わずに

「おいらん」

あまとりあ誌発表
当時のタイトルページ

はいられなくなる……。もっとも分り易い引例としては、荷風の「四畳半」問題で、終戦直後に版行して事件を起した松川本のテキストが何であったか？ ということである。荷風直筆の稿本は恐らくは麻布の偏奇館焼亡の際に灰になった筈だから、猪場毅の写本が原本ということになる、が、之は一本ではなく所謂直筆と称するのが三本流布されている。いずれも戦前の話で、一本は猪場から直筆と信じ切って買ったギャラリー・Gが速ぐに譲った先の某富豪本で、これをA本とする。この写本はその後同人が門外不出で秘蔵しているから、これは世の中に出ていない。その後、うまい汁を吸った猪場は更にもう一書偽造してGに持参する。文人である以上まして筆豆克明な性格の荷風のことであるから、同じ本が二冊あっても不思議はないと考え、何よりその筆蹟と印章には疑点をはさむ余地が全然なかったので、これをも求めた。これは画家東郷青児が購い、のちに式場隆三郎に割愛したのが、B本。更に猪場はまったく図々しいにも程があるにしても、三本目の偽写本四畳半を又してもその店に持込んできた。まったく恐れ入った話で、流石のGも、此処で初めて偽書と悟って断った——これがC本で

ある。猪場がこの書C本を誰れに売ったか、永遠の謎で、転売経路の途中までは判明しているのだが、之を取扱ったという、古本屋や古書愛好家があり、戦後に荷風の小説「来訪者」——荷風が猪場筆誅のために書いた創作とか——が発表され、荷風日記が公開される迄は、勿論直筆稿本として通行していたと思われるし、戦時中にも古本屋の手で、直筆とは云わなかったが、C本による四畳半写本が十数冊出ている。さあこうなると大変だ。誤写読みちがいが出るのは当然で、正確にはA・B・C三本を照合しなければ、猪場盗写の△定本▽すらできない結果が生じるのである——。文献というのは、総てそうした運命を辿って来て今日存在しているのである。事柄は違っても、この経路というのは仏教聖典において然り、あらゆる古典籍にも通じて云える事でもあるが……。

然し、「四畳半」も文献として取扱っている中はまだ無事で、多少の語句や句読点のちがいで済まされるが、事件後は活版本が、それも極く少数流布されただけなのに、今度は一般社会の話題となっていてから（本誌42年5月号48頁拙稿参照）、町の春本屋の手に渡り、とにかく作れば売れるのだから、文字を知らない素人から、セミプロまで飛んでもない△海賊版▽を作り出す、もうこうなったら文学でなくなるとは当然で、矢鱈にスーハーハア、という無用（あるいは有用）の会話が多くなり、ガリ版鉄筆のまずい春画を入れたりして、たいへんに結構な、分り易い読物となってしまうのである。荷風の四畳半については、これを生涯の研究として真剣に取り組んで居られる研究者もあることで、余聞めいた事柄はこれ迄としても、私感ではあるがひとつの書物の歴史としても、今日では猪場偽写の荷風真筆本というものが一箇の奇書として存在することを認めたいと思う。

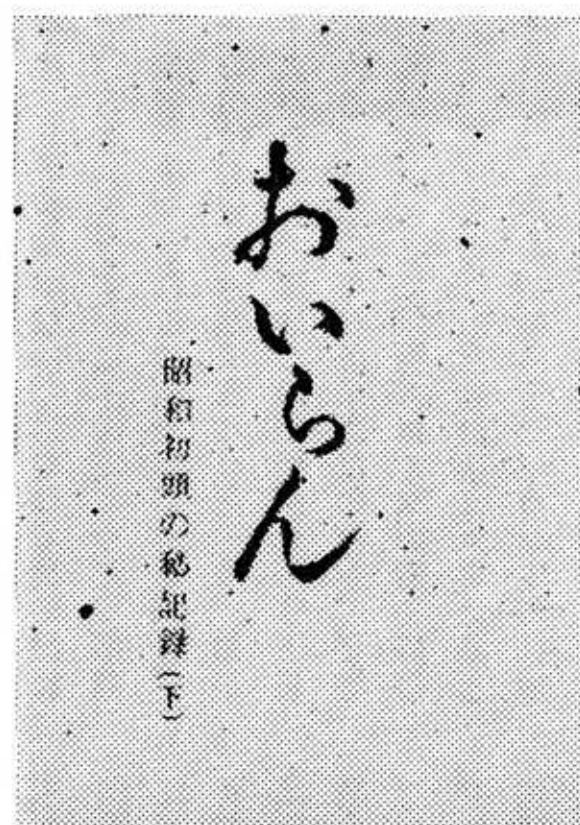
さて、始めに述べた「おいらん」の事であるが、『新生』誌の廃刊は実に惜しむべきことだが、おいらん特輯号初編と中編が刊行されながら、下編については、この方面の書誌通にも余り知られていないし、第一そういうものがあるか無いか、ということすら分らなかった所、「性風俗資料入門」を毎号欠かさず読んでいるという奇特な収書家より、『おいらん昭和初頭の秘記録（下）』の提供を得たので次に紹介する。

本文孔版タイプ、中編より続いて一八一頁より始まり三一頁了っている、従って約

一三〇頁からの長篇物である。副題を「香に匂う」とあり、春子の巻、妙子の巻、の二篇にわかれている。「おいらん」上・中は文体もすぐれて居り、特に昭和初期の風俗資料としても内容に富んでいて、人生に対する倦怠と焦燥と、むなしく散って行く青春の火花のように、男女の△性△の哀愁といったものが感じられ、低級な亀戸娼街のおんなを描いた場面に於いてすら、妙にきらびやかな花魁幻想とでも云えば云い得べき、妖かしの美が存在して、並々ならぬスネ者の筆力を感じさせるが、其処に作者平井蒼太説の伝説が流布されたりするのだが、この下編にはそうした妖奇美が少なく、ごく通俗的な安っぽい女肉としての女の性が語られているだけ——。どうして、同じ願名が附けられたのか、不思議であるばかりでなく、描写を安易なものとする為に日記体の文章になって居り、これだけでも随分拙劣な表現方法である。

上編にある「おいらん」序文は短いものだが、作者の性的生活の自序伝で「おいらん」とは題しても、各土地々々の女郎買の報告が主体で、本筋から離れて淫売、女給、素人女そして、果ては我が女房に迄脱線するかも知れませぬが、其辺の処は、あらかじめ御諒解を願

珍本「おいらん」(下) 表紙黄色。題字赤刷。



って置きます。「著者横川三郎」とあり、相

当の伏線が張ってあるので、次に紹介するようには遊女相手のお話ではないが、とにかく真正銘の記録があって、それが別人の手で歪曲されたものと、見るべきではないか。△種本△が無くてはこの種の文献だって編纂できないから……又、筆耕者がいたずらに私意を挿むことは、民俗学などにおける民間伝承の説話が、流布されて行く経路にも似ているようである。

「おいらん」の下は場面描写のみに大半が終始しているので話の筋はしごく簡単なもの、

純春本型。私という記録者の小悪魔的な淫猥行状記とでも称すべきもので、私は結婚一年にして、既に妻の肉体になんの魅力も感じなくなり、内証に、変った肉体を求めて以前のよう遊び始めてみたが、まるで感興が起きない。カサカサに荒れはてた商売女の肌には、不景気な餅菓子屋の店頭で晒された、宵ごしの饅頭ほどの価値も見られない。なるほど性的技巧は、素人に比して卓越してもいようなが、それとても、肉体あつての技巧ではないか。と考えるよう

にもなり、女に対する悪度胸も相当に据って来た齡ごろでもあり、素人の女の肉に飢え、商売そっちのけで、女の尻を追っかけ廻していた頃の日記で、放埒に明け暮れた赤裸々な自分の姿をいささか断片的ではあるが綴ったものだ——。という前書より始る日記で、登場人物は次の通り、

私 玩具製造

妻 妊娠中、女工を兼っている

吉田春子 女工、のちに女給

春子の夫 職工、彼女より十五年上

妙子 妻の妹、次の巻の主人公

この一覧表でも判るように、家庭内を中心に繰り展げられる痴情絵巻で、おいらん初中編にあるような、放浪生活中における刹那的な燃え上る情慾の描写ではなく、固着した慾念だけにかかられているひどくこせこせした男の話で、特に女体の陰処に狂的な迄に執拗ネチネチと、またたどしく描写を繰り返す場面が多く、この点だけが特色といえまいえるかも知れない。

吉田春子というのは、夫が十五も年上で性生活にも不満があったばかりか、玩具の賃仕事になどに通ってくる位だから、経済的にも不如意であった。夫と二人で二階借の生活をしている。私は毎晩飽き果てた妻の肉体を抱くのが遂に耐えきれず、なんとかして素人に手を出したいという旺んな慾求も手伝って、仕事の方の手不足を口実に春子をやとったのだった。……そして、ある日妻の留守中に難なく素早くものにしてしまう。如何にも新味のない読み古した春本の定石といった物語である。春子を征服した私は次に魔手を妻の妹の妙子に伸ばす、妊娠中で幾分神経症気味の妻に催眠剤をのませて熟睡させて、妙子の床に忍び込んで之またまんと処女をせしめてしまう……。表紙に「昭和初頭の秘記録」

とありながら、時代をおもわせる風俗描写もなく、文中には「態位」「ラーゲ」「温泉旅館」「ノイローゼ」などという新語が飛び出して来たりする。本当に「新生」発表のおいらん稿本に続くものか、刊行事情その他すべて判然としない珍書である。篇中に腰巻にまつわる艶笑コントめいた話があるので、オプ・シーン以外の珍らしさという意味で、次に成べく原文に近いかたちで引く、

私は適当に汚れた腰巻——に欲情をかんじる、或いはこれは私ひとりの趣味かも知れないが……。しかし、私にとっては非常に重大なことなのである。真新しい腰巻なんぞは、凡そ意味がない。目につく程に汚れている腰巻もさすがに不潔でイヤだ。腰巻に色情を挑発されるのが当然である限り、此の気持もまた当然であろうと思う。男が十人寄れば五人迄はこの気持が分ろうと思われる。だからこれは余計な事だが、腰巻泥棒が洗濯された腰巻ブロースの類を盗むのは、適当に汚れた品物が手に入らぬ為とはいえ、無意味であろう。ドロボー諸公の不本意さがさこそと察しられる。この泥棒と反対に、汚れすぎた一件を面白い方法で蒐めている話があった。あるクリ

ーニング屋の外交員が、お得意先（主に花柳界であったそうな）の腰巻を、失くしたと言っては、つらい思いをして謝罪したり或いは弁償の痛手を堪え忍びながら、我が手に入れていたという事実談である。アタマのよい彼は、その戦利品の恰度下腹部に当る部分だけを切り取り、それを自分の下着のこれまた陰陽合致する部分に縫いつけていた。そして、この事によって彼は昼夜をわかつた花街の中の名指しの姐さんとかそんでいる、という実感を味わっていたとか。

変態性慾のうちの典型的なフェティシズムという所であろう。女性の衣服や下着には勿論常に女性の身体とは密接な関係があるけれども、腰巻という全く生命のない物品によって、その性的興味を集中していることはやはり異常者であろうが、尋常の性慾生活の心理のうちにだって誰しも必ず潜んでいることだが、実行迄はしない。その点を明らかに書いて、登場人物が喋ったりする、赤裸々な表現が艶笑読物の味で、同時にセックスの真実が如何に伝えられ難いかということも併せて痛感させられる挿話である。

（未完）

フエチに想う

季節風太郎

わたしのように、空想上のみのフエチシズム愛好者というか、フエチ的読物を好む性向をどう診断されるものかは知らない。しかし、わたしにとって、フエチ的作品のない雑誌類はまことにつまらない。

もう十年もの昔、ある雑誌で、中年男が便所に仕掛けをして若い女のメンス綿を手に入れる情景を見付け、強い衝撃を受けると共に、重たい、そのくせ刺激のある奇妙な世界の存在を知った。それは、はじめて江戸川乱歩の小説を読み、あのタブーであったが故に惹かれた中学時代の気持に通じる想いだったことが、懐しく思い出されるのだが、以後、陰に陽？に、わたしは、この種の読み物を求めるようになった。

わたしにとって「風俗誌」とは、フエチシズム的な世界が秘められている雑誌を意味するようになったのだ。

公園の片隅にあるクモの巣だらけの便所が、白い妖しい花の咲く温室に思えたり、陽光に晒されればたちまちにして溶け去ってしまう氷のような、はかないツカの間の

天国を、このフエチの世界に見出しては奇妙な感傷に耽ったりするのだ。だが、体験を望む気持は湧かない。

美女の神酒。若い女性のパンティ。それらに憧れる人間の持つ、共通した哀しい影の記録が、なぜか、体験をもたぬわたしの気持をかきたてる。この気持は、単に異常をのぞく好奇心という性質のものとは違うような気がするのだ。わたし自身がわからないままに、何か哀愁の混った悲願とでもいうような複雑な気持が伝わってくるように感じて、奇妙に引込まれてしまう。

本誌上に載るものにも同様に感じるが、わたしの性質上か、ともすればじめついた悲哀的な暗さに陥りやすいのに引きくらべて、誌上のフエチは明るく消化し、ゆうゆうと散歩している感じである。体験者と想念者の違いかも知れないが、妙に深刻ぶっしてしまうわたしの癖を考える時、フト、フエチ愛好とは、哀歌か歓歌か？の疑点に突き当たる。やはりこれも、それぞれの自由ということだろうか。

フエチ体験者は、体験したから欲求不満が解消され、バラ色の人生を感得して明るくなれたのかも知れない。私のように体験しようとは思わず、ただその情景を頭に描いては強く惹かれるのみというのは、タブー視しているからには違いなと思うが、反面、そのタブー視があるから魅力を覚えるのだらうとも思う。もしかりに、フエチが公然となされてよいものになれば、わたしのこの現在の感受性は反応しなくなるのではなからうか。

こう考えてみると、ことフエチに限らずアブノーマル全般についても同様な気がする。いや、ノーマルとされていることでも同じことだろう。いつでもすぐに望むことが叶うとなれば、そこには感激も悦びもなくなるのが普通ではないだろうか。一生懸命に働いてささやかな生活向上を願っている気持こそ充実したもので、その間に描く夢が楽しいことはいうまでもないだろう。その意味では既成のお金持は不幸だ。想像だけの私は、陰性には違いない。フエチシズム愛好者ともいえないかも知れないが、この種の読物を求める気持の強いのは事実なのだ。フエチシストには申し訳ないが、やはりタブーであって欲しい。

捕 獲

「ホイップ・アンテナ浮上！」

という号令がかかる。

途端に、セレクトイングレシーバーに入っていた長波ラジオの音がびっくりする程大きくなった。イタリーから、モナコから、マルセイユからの、或いは音楽であり或は政治的プロパガンダであり、又、男の声であったり女の声であったりした。無線士は短波無線の受信装置に切りかえ、ゆっくり微動ダイヤルを廻して必要な波長に合わせていった。非常

に指向性の強い電波がカンヌの方向から入りはじめた。勿論暗号である。暗号士が直ちに翻訳する。

X、ヨテイ アス 二一〇〇 ポイント
六三六N クロワゼットミサキヨリ
ホカク 五七ノミコミ ソノタヘンコウ
ナシ オワリ

無線を発信したのは、ミセス・ウィリーだった。彼女はホテルMの海に面したベランダに腰かけて、トランジスタラジオのようなのをいじっていた。それから出た電波が仲間



第二回

・・・前号まで・・・

新津謙介は国際担当の捜査官。最近世界中に起っている美女ばかりの事故死、失踪事件の間に奇妙な類似があるのに疑いを持ち、パリの国際司法警察機構へ調査に行く。その前に、横浜で全裸のフランス人を助けようとしながら失敗したいきさつがあるが、パリへ来てその女ジョセフィーヌの妹、マリーと会うことが出来た。マリーはカンヌでウィリー夫人のパーティーのホステスに採用された。パーティーの前日、カンヌの遥か沖合で、全くそっくりな二人のウィリー夫人が入れ代った。パーティーはキャロリーヌ二世号という快遊ヨットの船上で行われる。

の潜水艦に受信されたのである。

その日は、早朝から大わらわで準備をしなければならなかった。たった一晚であるとはいえ、毎年開かれるミセス・ウィリーのパーティは定評があったし、今回は特に費用に物惜しみをしなかったから、あらゆる点で仕度が大げさになってしまったのである。

ヨットには山海の珍味、美酒が山のように積み込まれた。ぜい沢なインテリアの専門の女性デザイナーによって、ヨットの中とは信じられないような、重厚さで仕上げられていた。その上、可愛いセーラースタイルの若いホステッセスが錦上に花を添えていたものである。

全部女性ばかりという、振れ込みだったので、操船要員を除いて乗組員も女性であり、客も又女性ばかりの筈だった。

午後六時の予定が三十分程遅れてヨット・キャロリーヌ二世号は漸く纜を解いた。

船上には招待客の殆んどが集っていたが、陸上に残った見送りの男性達と声高にしばしの別れを告げ合っている。男達にしても、せめて今宵一夜は、のびのびと過ごせそうだと

いう期待があるのかもしれない。たしかにその別れはホンの一晚でしかあり得なかったから明るく笑い顔ばかりだったのである。

キャロリーヌ二世はエンジンだけで滑るように走った。岸に沿ってナプール湾を抜ける六キロばかりの間は美事な眺望だった。古代の城壁、色とりどりの海浜、そしてその背景にあるホテルの群。そして、眼にしみ入るような木々の緑。どれ一つをとっても、リゾー・カンヌの名をほいままにさせるに足る景観だった。それだからこそ、人々はしばし声もなく夕闇に暮れて行くカンヌをいとおしんでいた。しかも、誰もが意識しなかったとはいえ、限られた数人を除いて、今を限りの見納めだったのである。

クロワゼット岬を過ぎる頃から、ヨットは次第に舷を南に向けて行った。人人はモナコへ行くのだと考えていたけれども、実際のところ、船は全速力で岸を離れようとしていたのである。船長でさえミセス・ウィリーの真意をはかり兼ねていたくらいだった。しかしいつものように、彼女の胸の中に何か人をおどろかすような、とっぴな、いたずらが秘密

のうちに計画されているのではないかというような漠然とした期待で、船長はじめコースに関しては疑っても見なかった。

すべてがきわめて順調に終始しているようであった。ひろいサロンでは、もう大分アルコールが廻ってきたらしく談話の声も一段と甲高くなってきた。

客達の間を縫うようにして乳下から臍のあたりをむき出しにしたデザインのセーラー服を着ている例の娘たちが忙しそうに行き来していた。

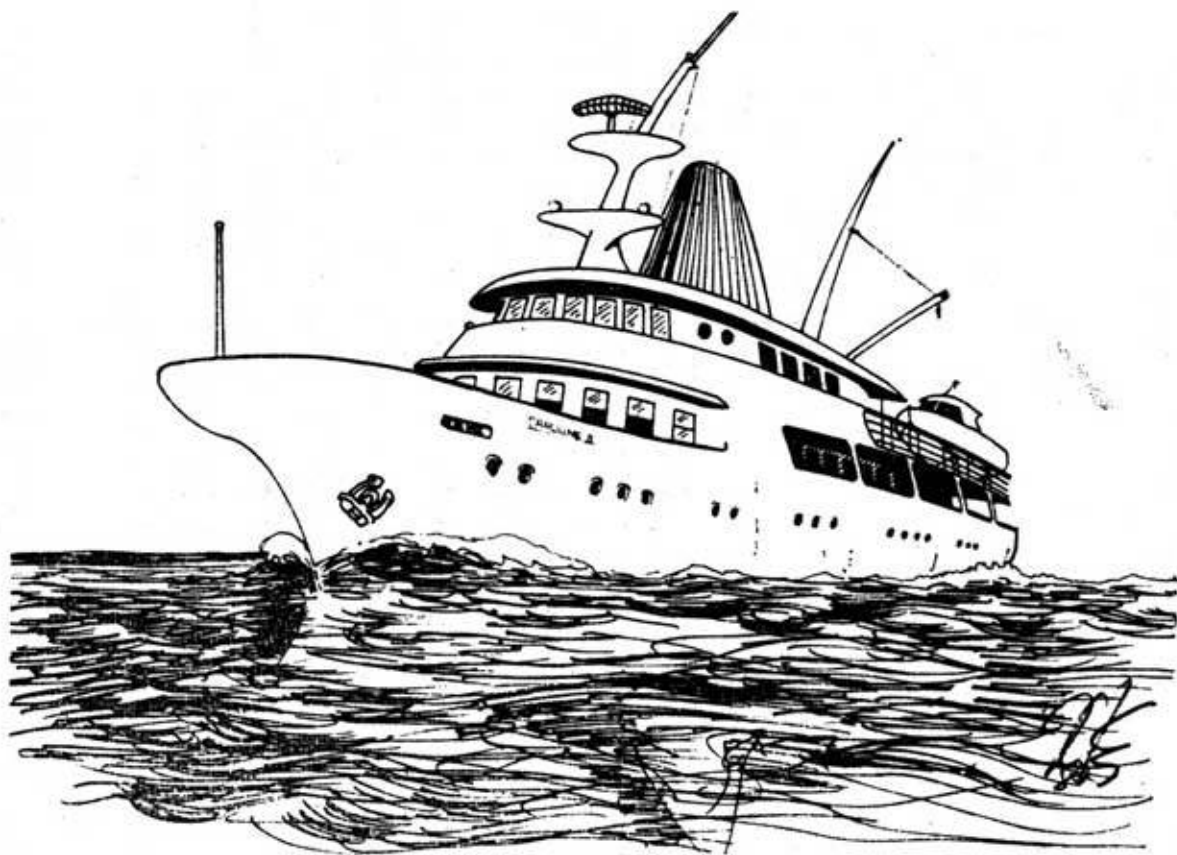
「今年度の日本映画は全般に低調でしたね。カンヌでは羅生門以来の光輝ある伝統がありますのに、近頃の不振は本当に残念なことですわ」

日本から来た女優の望月レイ子が、たどたどしいフランス語で話している相手は、スエーデンの女流監督アン・クリスチャンセンである。彼女は年配者らしく落ちついた声で答えた。

「時流でしょう。北欧ではセックスとか裸体とかが少しも不自然でない段階に来ておりますのに、お国の日本では、まだまだ何かに固執しているように思われます。表現の自由を制限する既往の道徳が、盲腸のように残って

いるようです。その点で、日本の映画人の方々はお気の毒ですね」

向うの一隅では、何杯かのシャンペンで頬を桃色に染めた若いダンサーの一群が、ゴー



ゴーのメロディに乗って、ガクン、ガクンと身体を上下させていた。

音楽のテンポが早くなるにつれて、サロンの中の熱気は次第に上昇していった。

「くるしいわ。顔が火のよう」

両手で顔をはさむようにしながら、イギリスのスクリプター、ジュリー・シェリバンがよろけるようにタラップを上った。

夜空は雲一つなく晴れて、降るように星が輝いていた。サロンの狂騒に加わりたくない人達は、甲板のそこかしこに坐って、静かに夜の更けるのを楽しんでいた。

中国女優の王明齡もその一人だった。彼女はフランス語が不得手だったから、余計人をさげたくなっていたのである。デッキエアに倚って、快い振動にうつうつと睡りにさそわれていった彼女は、どれほどたったかわからないままフト目をさました。目の床に酔いつぶれたジュリー・シェリバンがうつ伏せになっていた。

そのとき、もし彼女がサロンに降りて

行ったら、きっと異様な光景に目をみはったにちがいない。ジャンジャン鳴っているのはジュークボックスだけで、人々は例外なく倒れ伏していたからである。船橋では船長のポールが舵輪の下にうずくまって大肝をかいていたし、機関室でも機関助手のチャンが長々とねそべっていた。つまり、五百トンの快遊ヨット、キャロリーヌ二世号は幽霊船さながらに操り手のないまま、ひたすら南航を続けていたのである。

下手人はミセス・ウィリーその人だった。彼女は最上甲板にあるライフボートの影にひそんで睡眠性の毒ガスを換気孔に送り込んでいた。エアコンディショナーのファンは、忽ち船内に催眠ガスを充満させた。

従って、王明齡のような甲板に出ていた何人かは、ガスを吸わなくて済んだわけだが、反面、彼女達は夜のふけるにつれて、自然とねむってしまったから同じことだったといわなければならない。

で、ミセス・ウィリーを除いては、明齡だけが海面の異常に気づいた乗客だったことになる。

ヨットの右舷、しかも舷側すれすれの海面を割って直径一メートルばかりの鉄筒がザワ

ザワと突き出して来たかと思うと、全く同じスピードで平行して走りはじめた。

鉄筒の上についたハッチが開く、人影が軽業師のような身軽さでヨットの甲板へ飛び移ってきた。ロープが投げられて円筒は舷側に繋ぎとめられる。円筒の中から、わらわらと人影が湧き出してきた。

明齡は恐怖のあまり、わなわなと唇をふるわせるばかり。そしてデッキチェアの上に磔にされたように、身動きも出来ないでいた。

人影のうちの何人かはブリッジにかけ上った。そこではミセス・ウィリーが鉄筒との繋留を首尾よくさせるために、ただ一人舵輪をしつかりとおさえていた。

もう一組の人影は簡単な防毒マスクを銜えて機関室へ降りて行くと、たちまちエンジンを停止させてしまった。

全く「人影」と呼ぶにふさわしい一団だった。まっ黒なウェットスーツに、これもまっ黒なマスクでスッポリ頭部を蔽っていたからである。これでは誰と誰とを区別することも出来まいと思うくらいなのに、彼等は秩序正しくテキパキと、仕事を片づけて行くのだった。仕事といっても、ねむりこんでいる人間を一人一人運び上げて、鉄筒の入口に投げ込

む作業である。自然その近くに立って犠牲者の首実験をしているのが指揮者だとわかってくる。ミセス・ウィリーがそれだった。女頭目というところか。そういえば、ウェットスーツに身をかためた連中も悉く女性らしい。豊かな胸やなめらかな腰の流れがそれを証明していた。しかし、その行動には女性らしい躊躇や、ひかえ目な態度は全然見られない。軍人のような規律が厳然と彼女等を支配しているように思われた。

「これは残しておけ」

ミセス・ウィリーが英語で命令した。ひきずられて来たのは白髪的女流監督、アン・クリスチャンセンだった。恐ろしいことが始まった。残しておけ——といわれた者たちは、そのまま近くの船室へ連れ込まれると、満々と海水をはった浴槽の中に頭から突っ込まされてしまう。そして完全に溺死してしまうまでおさえつけておかれるのである。

すでに甲板には「人工的」に溺死させられたポール船長、その他の男女が河岸の魚のようにならべて横たえられていた。

ミセス・ウィリー達の関心は、主として若くて美しい女達を鉄筒の中に投げ入れることに向けられているようだった。但し例外はな

いわけでない。たくましい機関助手のチャンは兎に角溺死させられないで済んだ。

作業は約三十分で終わった。必要なものを全部鉄筒の中にとり込んだ闖入者達は一団となってミセス・ウィリーの命令を待った。

「K十八号、前へ出て覆面をとりなさい」
氷のように冷やかな彼女の声に、一人前に出た人影が、小さきみに身体を慄わしながら覆面を脱いだ。それは、あのかえ玉のウィリーだった。

「スキューバをぬげ」

と命じながら、自分も手早くカルダンモードのデラックスなドレスを惜しげもなく足下におとし、次々と身につけた下着をかなぐり棄て全裸になったミセス・ウィリーは、脱いだ衣類を邪慳に爪先で蹴とばすように前におも出し、

「さ、早くこれを着なさい」

と言った。ハスキーな声が、何となく威圧的だった。かえ玉の方は、何故か齒の根も合わぬといった様子で、おそれおのきながらそれでも一生懸命になってミセス・ウィリーの脱ぎ棄てた下着からドレスを身に纏った。数々の豪華な装身具もつけかえられた。

一方は美しい裸身を惜し気もなく大気にさ

らしているミセス・ウィリー、一方は彼女の着ていたものの全部を満艦飾のようにかざったかえ玉。とはいっても、命令者と被命令者との懸隔は一目瞭然だった。

十数名の黒い人影が二人の周囲を囲んでいた。そして次に起るべき怖い命令を予感するかのよう、身動き一つ出来ないで立ちすくんでいた。

俄然、裸のミセス・ウィリーがますますおし殺したような声で云った。

「マスターからの命令を伝える！……K十八号、おまえは特殊任務に服務中、与えられた指命の範囲を逸脱している。つまり、おまえはランドー伯爵と恋に落ちた」

突然、ドレスのウィリーがひざまずき、手をおし揉むようにねじまげながら叫んだ。

「おお、おゆるし下さい。わたしは決して、決して、あのひととは、そんな関係じゃなかったんです」

フン、とせせら笑うような態度で裸の女が傲然といった。

「ウソをおっしゃい！ おまえの身体に埋め込んだ監視用発信器のことを忘れたの。なんならテープを聞かせようか」

夜明けに近づいたのか、幽かな光りが漂い

始め、哀れなかえ玉の絶望にゆがんだ顔をほのかに照らした。

「早くッ、夜が明けるわ」

裸のウィリーが叫んだ。ハッとしたように廻りの人垣が崩れた。悲痛な声を残してかえ玉のウィリーが手とり足とり引摺られて行った。絶叫がしばらくバスルームで続いていたかと思うと、やがて信じられないほどの静寂があたりを支配した。

びしょ濡れになったドレスの死体が一つ再び引摺られて来ると、ポール船長の隣りに並べられた。

「艦へ戻れ！」

いつの間にか緊急用の斧を手にしたミセス・ウィリーが叫んだ。もはやミセス・ウィリーはこの世でただ一人に戻ったわけである。

黒服の女たちは、サッと胸に手をあてて敬礼すると、風のように鉄筒の中へ吸い込まれて行った。ただ一人、生きてキャロリーヌ二世号の甲板に残った彼女は、睡ったように伸びている彼女の分身を見おろしていたが、やおら斧を振りかぶるとガッシリとその下腹部を目がけて打ち込んだ。鈍い音がして、パッと血が飛んだ。返り血をあびて、ミセス・ウィリーのまっ白な裸身が赤く彩られた。

ゾツとするような光景だった。吸血鬼のような女は、平気でドレスの創口に指を突込むと、何やら体内を探りまわしていたが、ややあって、三五ミリフィルムのケースのような小さな固型物をつまみ出すと、血まみれのそれをポイと海面へ放り棄てた。

「これで証拠はなくなった。この創口だって爆発の時に受けたものだと思われるにちがいない」

つぶやくように、ウィリーが言った。そして、甲板から身を躍らせて海中にとび込む。静かに鉄筒が近づいて海面すれすれの高さにハッチを開いた。ミセス・ウィリーが鉄筒の内側へ入り込んだときに、彼女の血まみれの裸身は海水に洗い流されて、もとの通りの美しさをとり戻していた。

アマゾン女兵

ズシンと腹の底まで響くような破裂音が伝わってきた。ペリスコープの視野の中で、キャロリーヌ二世号が粉々に飛び散るのが見えた。そして、数分後には、海面に漂っているのはいくつもの残骸と油の輪とそして点々と浮かぶ屍体だけだった。

「出発、水中深度百、全速
西三十度南」

刺すような声で命令を下
しながら、ペリスコープか
ら目を離れた女性の顔は、
あきらかに、日本人であっ
た。

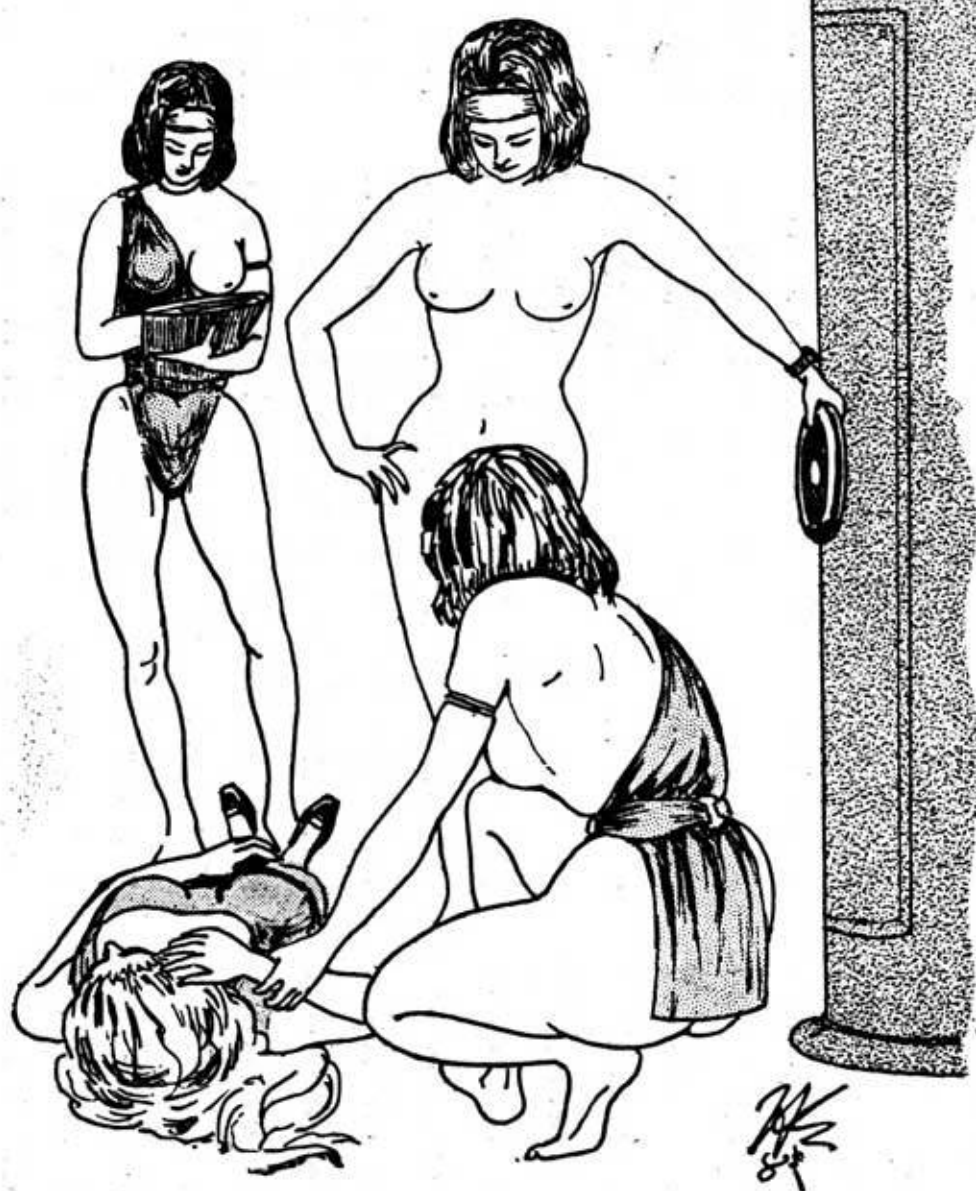
「深度百、ようそう」

「全速、ようそう」

「針路、西三十度南、よう
そう」

次々と復唱が返ってくる
のを聞き流しながら、その
美しい女性は楚々とした裸
身を余すところなく曝しな
がら次室へ続くハッチの方
へ歩み寄った。

司令室の中は、ペリスコープを中央にして
周囲の壁には複雑な計器類がビッシリとはめ
こまれていた。そして、その各々の前に担当
者がすわって、針の目盛を注視していた。こ
れらは皆専門に訓練された潜水艦乗員らしく
男性ばかりだった。更によく見ると、彼等も
全裸で、しかも腰に巾広のベルトが施錠され
ていて、それが太い鎖で椅子と連繫され、立



つことはおろか、床にねることも出来ないよ
うになっている。更に、首にはカラーのよう
な鉄製首輪がとりつけられていた。何のこ
とはない。中世のガリイ船の漕者のように男達
は緊縛された裸身を鞭打たれながら強制労働
に服しているらしいのである。

命令や表示がすべて英語で行われているこ
とと、艦籍表の国旗からA国海軍の潜水艦ら

しいことはすぐにも想像でき
た。しかし、そのすぐ下に刻
み込まれていた艦名「ネプチ
ューン」が読みとれたとすれ
ば、すぐに、アッ、あの艦の
ことか、とすぐ思い出される
筈である。

A国の誇る原子力潜水艦、
「ネプチューン号」(三、七
五〇トン)が、艦長のスコッ
ト中佐以下百二十九名を乗せ
て、大西洋アゾレス諸島附近
で行方不明になってしまった
事件は、それ程まだ耳新しい
ことであった。

A国はその豊富な軍事力を
総動員して必死に搜索を行ったが杳として行
方がわからず、遂に沈没と推定せざるを得な
くなってしまうたのであった。

だから、キャロリーヌ二世号に襲いかかっ
た海賊船のような潜水艦が、ネプチューン号
だったとすると、同艦は沈没したのではなく
何者かに略奪されたにちがいない。原子力潜
水艦は一旦燃料を搭載すると三年間も補給し

ないで航行出来る能力がある。しかも連続二カ月以上も潜航が可能のように環境制御が行われているから、文字通り神出鬼没の活動が可能となるわけである。

ペリスコープを覗いていた美しい日本女性
が防水隔壁をまたいで這入って行ったのは先程の司令室の前方にある一区画だった。

司令室が計器類を見やすいように薄暗くしてあるのに比べて、ここは思い切り明るい日光色に輝いていた。凡そ三十平方メートルもあろうか、潜水艦の中とは思えない程広々としていた。中央に直径一メートルばかりの鉄筒が立っていて、嚴重な防水扉が外され、太い樹木の洞穴のような口をポツカリと開いていた。

この鉄筒こそ、あの可哀想なキャロリーヌ二世号の舷側に横付けされ、数十名の虜囚を呑み込んだシューケル型の昇降機だった。それを裏書きするかのように、鉄筒周辺の床には魚市場の床に水揚げされた魚のように気を喪ったままでゴロゴロ転っている犠牲者達の姿があった。そして、それらをまたぐようにしながらせわしげに動いている数名の裸形の女性達があった。ひととき赤毛の目立つのが言うまでもなく、ミセス・ウィリーにちがいない。

い。その他はいずれ劣らず粒揃いの日本美人ばかりだった。

「ごくろうさま。よくやってくれました」

刺すような声の女は、静かにあゆみ寄りながら日本語で言った。すると、ミセス・ウィリーを除いた女達は電気に打たれたように直立して不動の姿勢をとると、左手で胸をおさえるようにした。それが敬礼であるらしい。

彼女達は裸形とはいっても、ギリシャ神話のアマゾン女兵士が着けていたというチュニツクのようなナメシ皮の布切れを纏っていたのである。アマゾンの女兵士は弓を射るときその豊かな右の乳房が邪魔にならないように予かじめ切りとっておくという習慣があったというが、この廿世紀のアマゾンたちには自らの美しさを傷つけるという野蛮な風俗はない。腰と股間をしっかりと締めつけた布で右の乳房だけをブラジャーのように包み、更に右肩から背部に垂らし腰間を蔽うだけの簡単なデザインなのである。

たしかに彼女等は、この異様なグループの女兵士だったのである。軍人であるから制服を着ているわけだし、ヘアスタイルもショートカットを乱さないように同じリボンでしば

っている。そのリボンの色や材質で階級を表わすようになっていた。

それにしても綺麗な兵士たちである。航空会社のスチュアーデスなども美人をそろえてはいるが、それに比べてもひけをとらないどころか、鉄のような規律、しなやかな中に強靱な体力を秘める均斉のとれた体軀は、はるかに前者を抜き去っているといえよう。

しかし、上には上があるもので、そうした彼女等の美しさを束にしたところで、今、司令室からきた女に比べたら、たちまち色あせたものとなってしまふ。第一、その女性には威厳があった。人を支配することに馴れきったという落着きがあった。

日本人にはめずらしい彫りの深い眼のあたりの陰影、決して高くはないがやや反り気味に形よくまとまった鼻、心持ち大きめだがそれだけに意示の強さを示す唇、これらが総合されて、ガンダーラの仏像に見るような少々硬いつめたい、美しさをたたえていたのである。彼女だけは、ミセス・ウィリーと同じく身体に何一つ着ていなかった。それだけに、きたえ抜かれた運動選手のような、エネルギーを内包した肉体の美しさが、ほとんど、これ以上ぜい背がとれたら女体としての魅力を

なくしてしまいそうなギリギリの限界までひきしめられ鍛えぬかれた美しさが、余すところもなくむき出しにされていたのであった。ヌーディストの国かもしれない。ここでは高位の者ほど身につける衣服装飾が減って行くようであった。全く美しい肉体以上に美しいものはあり得ないし、そのように美しい肉体の持主ならば何を好きこのんで自ら蔽いかくす必要があるだろうか。

「エミー。丁度名簿との照合が終ったところです。五十七名一人も欠けておりません。捕獲状態も良好です」

赤毛のウィリーが英語でいった。彼女の丁寧な話し振りにあっても、司令室から来た日本女性が彼女よりはるかに高位であることがうかがえるのだった。

「オーケー、ミセス・ウィリー。今回は豊漁でしたね。質のよいのが多いからマスターもお喜びになるでしょう」

ややアメリカ風のくだけた発音で微笑を泛べながら、エミーと呼ばれた女はウィリーの労をねぎらう。ウィリーの顔がパツと紅潮して彼女の感激を示していた。自らの賞詞がウィリーに与えた効果をゆっくりたしかめるよ

うに注目しながら、

「ところで、ミセス・ウィリー、あなたの厄介な分身が死んでしまったので、もう、あなたは永久に地上には帰れなくなってしまいましたね」

「もちろんです。それこそ私の心からの希望なのですから」

ミセス・ウィリーの答える声音はハズンでいた。

「それは当然のことでしたね」

エミー司令は破顔して、

「あなたにはウィリー博士がいらっしゃるか、むしろこれからはお二人でお暮しになれる希望が出てくるのですからね」

「はい。しかし、それもマスターのお心のままですわ」

「その通りです。すばらしいわたくしたちの国では、すべてがマスターのお心のままなのですから」

といって、ふたたび床にねている犠牲者たちを見廻りはじめた。アマゾンの兵士たちは甲斐々々しく、その左右について彼女の見易いように手伝うのだった。

「望月レイ子、二十一才。採点B A B B」

書記係の兵士がいった。司令が丁度死んだ

ようになっていた望月レイ子の前に立ったときである。

一寸かがんで、スカートをまくってみてから、司令は首を横に振った。すぐに二人の女兵士が細長い麻袋のようなものを望月レイ子の頭からかぶせてしまい足首のところできり合わせる。そこで、望月レイ子の身体は芋虫のようになってしまった。

次に立ったのは王明齡の前である。

「これはいい。一等取扱い」

といわれて、意思のない王明齡は、兵士たちにかつがれて部屋を出て行ってしまふ。

捕獲された獲物の取扱いに、一等から三等まである。それは、あとで説明することにして、結局、その室内には麻袋に包まれた五十五人が転がされることになった。言いかえれば、一等扱いに格上げされたのは王明齡だけであったし、男のチャニは逆に三等に廻ってしまった。つまり、この二人を除いた五十五人が二等扱いになる。

とや角するうちにも、艦は水中百メートルの深度を、二十五ノットの高速で、まっしぐらにジブラルタルに向ってたい。

(未完)

絶体絶命

おこし……慢文……



文と絵・牧高志

漢和辞典をひくと、他に比較べるものがないことを、まず「絶対」と云い、文字通り死んでしまうことを「絶命」と書いてある。そして、逃るる手段なき大究迫の場合のことを「絶体絶命」と呼称するとある。

要するに、それ自体まぎれもなくクライマックスでありながら、しかも、どうにもならないハメに押しやられたことを指して云う言葉だと思われるが、昔から和服を着た女性が風速十何米かの烈風にあふられると、正にそ

の通りで、あられもなく立往生している風俗画が未だに伝わっている。

もちろん、このような危急場面の版画化は一般好事家ばかりでなく、ほかには娯楽の少なかった昔ならばこそ、およそ男と名がつけば宛ら肌身の護り札かのように大いに珍重されたのだろう。

ところが端的に申して、筆者はころざしながらその努力がまだまだ足りないと思え、なかなかこれにはと思う快心の絵が手元に蒐らない。ならば、いっそのこと昭和のモデルを使って、自ら作成する手もあるが、現実には容易ではなさそうだ。

先般、東京神田で開催された、古書の展示即売会で買求めた珍本の中に、筆法の是否はともかく、ここで云う絶体絶命的に近い絵が載っていた。模写した表題のカットがそれで、明治四十年十月一日発行、東京滑稽新聞第八百六号の色付き裏表紙である。

髪形の形から見て堅気の娘さんというよりはむしろ花柳界の若い妓らしく、添え書きの俳句にいわく、

へ木枯に据つくろうや小傾世……とある。小傾世と断つてあるからには、本傾世（城）ではなくて、花なら蕾と云ったところだ。紺の

大柄鹿の子模様を着物にピンクの長襦袢を重ねているが、真正面から、もろにあふりあげた一陣の風に、真赤なお腰巻が捲くりあげられ、真白い二本の脛がゾロリ露出している。

ただ女の表情から見れば、いつでも何処でも毎度のこと、いちいち恥ずかしがってはおられませんわ……という顔である。残念ながら絵中の人物はこれだけで、ほかに男衆が助平面して、眺めているというのではないので、恐らくは小唄か踊りのお稽古帰りに、谷中の墓地あたりで独り吹きあげられた？ ものだろう。

ともあれ、女性にはこんな一面もあるという証拠で、筆者の旧知体験にもとずくと、どう考えてもどうかと思われる個所で着飾った和服の女に遭遇し、こちらが目を覆いたくなる絶命的な情景が、しばしばあった。

熱海城の裏側に景色のよい見晴し台があって、長い急な石の階段がある。そこを新婚さんと思われる女性が登っていく。いくらパンティ族の昭和の女性でも、和服を着れば一応ご遠慮願って然るべき処を、これを見てよと……ないしは、ぜひ見て頂戴と云わんばかりに裾をちらつかせるのは困惑？ するが、肉体狂なら当然目の保養となるところを生じ

かこちらが着物狂と来ているから、ついパツパツと蹴ちらした布は正絹か人絹か、はては交織かなんて詮議したくなる……それを木石ならぬ、SEXとがっちり結びつけて、じっくり評定しようとするから、事は初めから面倒だ。

谷中？ の姐さんが、またここでも捲くられましたのよ……と両手で押さえる、真赤なご自分の腰巻もさることながら、熱海城の新婚さんでも、筆者がいたずら半分に撮ったネガを引伸してみると、三月早々とみえて一越の派手な訪問着の下に、鶴と松かなんかを柄に泳がせた緋の衾せ長襦袢を着て、それが無情にひらいて、その下には定尺通り真赤なお腰巻をしめていた。熱海か伊豆の温泉宿が初夜だとすれば、恐らく先輩諸兄姉の心からなるアドバイスで、窮屈な和服を着通したに違いない。それが、断崖絶壁に沿うて下から強烈に吹きあげる、初春の寒風に裾をなぶられたとあっては堪ったものではない。谷中の姐さん以上の情景を演じたのであるが、残念ながら居合わせた観光客の中には、奇特な浮世絵師がおらなかったと見えて、その後それらしき版画にはお目にかかっていない。

明治四十二年五月五日、東京東陽堂から発

行された、第三百九十六号の風俗画報に依ると、その口絵として井川洗崖氏の色彩版「花吹雪」が一きわ異彩を放っている。国運を賭した日露の戦争も無事終結して、やがて訪れた桜花のシーズン。それとばかりに繰り出した花見客に、着飾った娘達がキャッキャッと遊び戯れわねている情景だが、この方は谷中？ の姐さんに較べると、余っ程おとなしい。渦を巻いて襲いかかる桜吹雪に、捲くれるきものの裾を、両手で押さえているところは、木枯の場面とさして変らないが、下半分を赤の長襦袢だけで防禦し、白い脛はおろか当然締めおる筈のお腰も、全然見えていない。早い話が、肩を抜いた阿波踊の姐さんを寄ってたかつて吹雪責めにした恰好と思えばよい。

ただ周知の通り、この頃の女性は胴長の脚短かの、裸にすれば寧ろみにくい身体を持ち主が多かったので、一躍、欧米なみとなった戦後の八頭身に較べると、むやみに脛を出さない方が基本的には奥ゆかしいのかも知れない。幻滅の悲哀を一步手前の赤い布れで防いだ恰好である。

筆者は本テーマで云う「風と和服の女」に執拗に喰い下って、その生態を見極めんもの

と、四季折々のチャンス逃さず8ミリカメラで撮りまくっているが、一般スチール写真と違って、これまた快心の作には程遠く、例えば風のよく吹きまくる東京浅草寺境内で、運よく着飾った新春の女性群にぶつかったとしても、舞い上る砂塵には、つい辟易してスタコラ退散するなど、よしんば望遠レンズを使うにせよ、あの雑踏では至難の業という訳で、未だに虎穴に入って美しき虎児を獲ておらない有様である。

同じ絶体絶命でも、まかり間違うと命にかかわるといふ物騒な場面は、もちろんのんきに対岸の火事見と洒落れる訳にはいかないが、昭和七年十二月十六日、東京は日本橋の白木屋百貨店の失火は、高層建築のデパート初の火事とあって当時、筆者も刻々と放送されるニュースに耳を傾けたものである。

ただここで問題視されたのは、後世たたかれた、かの有名な女店員の服装であって、洋品売場はあっても和服を着た女店員である限りノーパンティのお腰一枚というのが当時の制服？ でもあったので、いったんこのような非常事態が起きれば、桜吹雪の騒ぎどころか、一瞬急転してこの世の生地獄となったのである。

以下、真疑はさて置き、伝え聞いたところを述べてみよう。

五階の玩具売場の窓から着物の反物を継ぎ合せてぶら下げ、これを伝って下の歩道へ降りようとする悲愴さ……。咄嗟に洋品売場のパンティを失敬して腰の防備を固める余裕も恐らくなかったであろう。あッ、一人の上っぱりを着た小柄な女が窓の外柵を跨ぎ、不活潑にひっかかる和服の裾を直し直しながら、身体を前に乗り出すようにして反物の端を掴みました。そして懸命に下を凝視して見ます……。煙は渦を巻いて、ともすれば身体が見えなくなる程襲いかかってきますが、もちろん、おいそれと軽く飛び降り得る高さではありません。ぶら下りましたッ。自重を利用して少しでも下へと交互に両手を擦り動かしますが、演習ならともかくズバリ本番では、スルスルどころか……。火事場に起り易い無情の突風に着物の裾がパッパッとあふられ、派手な花模様の赤い長襦袢にメリンスの真紅のお腰巻（当時二十台の女性は、申合わせたように真赤なお腰巻を身につけていた）まで、云ってみれば赤いホーズキの実を葉っぱごと逆さにむいたような恰好となったから大変……火煙の恐怖よりは、何千という野次馬を前

にしてのこの羞恥は、死にまさるものであったのだらう……。離すべからざる両手を、裾を押さえようとして、ついに離してしまったのである。

一人の女性が、まだ地上に降り切ってしまわないうちに、二人、三人とぶら下っては、いかな純綿正絹の反物と云えども堪ったものではない。たちまち寸断して、これまた落下していった。丁度、滝壺めがけて、ちぎり立てのバラの花かダリアの花を方一杯、放り投げたかのように……。

フランスでの火事場でも、丁度これと同じような絶体絶命さが演じられたことがあったが、和服ほどの優美さが無いのは当然としても、当然あるべき筈のパンティがなかったというフランス女性の心理には、日本婦人以上の何処かマセたものが生来あるものらしい。端的に云って、露出症でありながら群衆の前で自らオーバーに騒ぎ立て、しかも危い綱渡りをしながら内心、群衆からのハネ返えりを巧みに総合して、挙句の果ては、シュミーズ一枚、ノーパンティの美を開陳して両手を離す……。と云った離れ業は命取りと云っても、本人達は案外それで本望だったのかも知れない。因みに、この時の報道写真は無修正とは

いかなかったようである。

日本古来の浮世絵にも、こうした絶体絶命？に近い絵がないでもない。ただ枕絵ならともかく、公やけに街頭でスッカリ露わす訳には到底いかないから、緋縮緬の湯文字を派手になびかせる処でどれも終っている。

染料のさえなかった昔でも、女の子の裾が空っ風にあふられて目前に赤い下着がチラチラしては、三下野郎はもちろん、何やら塾の大先生といえども、のどをカラカラにしたことだろうが、こんな情景を今流行の漫画で表現してみると、火事場の悲愴美？よりももっとずっと朗らかで、おおようなものとなる。

主婦の友社の専属漫画家であった田中比左良氏の著書、「女性美建立」（昭和四年、中央美術社発行）に依ると、氏独得の曲線美を使って女性の百態を描いたなかに、新婚男女の情感と題する漫画がある。文章を紹介しよう。

「風がひどくて新妻が裳裾を気にするので、そんな恰好を他の異性に注視されるのが残念だから風上を歩いて風を防ごうとしたが駄目だったので廻れ右！君、風下の方を散歩しようよ」これは筆者（田中氏）の親友、新婚

者の実談ですが、新婚男女の情感というものは、何んてデリケートなものでしょう……と結んでいる。

何んと云っても昭和の初め頃は、今と違って世の中が多分に去勢されていたので、こんなところが精一杯のエロ味だったかも知れない。長めの羽織を着、襟巻をした若妻が正面風に裾をあふられ、赤い長襦袢からお腰まで捲くられ、裾を押えた右手の力も及ばず、左脚の脛が膝頭のあたりまで露出している。もっとも、こうした風景は新婚さんだから気を惹くのであって、四国八十八個所の霊所を巡る年配のお遍路さんでは全然、鼻もひっかけられないことであろう。

今は故人となった、川柳漫画の大家、谷脇素文画伯の川柳漫画「浮世さまさま」（昭和元年、講談社発行）の目次で「若夫婦」と題し、やはり季節は冬から春先にかけて都大路で吹きまくる砂塵に、旦那は帽子を空高く吹き飛ばされ、彼女は懸命に裳裾を押えている漫画がある。幸福の絶頂を、少々街頭へ出て冷やかしのなさいと云わんばかりに、へニア人につれなしつらし向い風（維想楼）とある。

同じ漫画でも、考えさせる比喻を必ず加え

て描いたのが下川四天氏であって、氏の女性画は何んともなくプンプン人間臭いから妙だ。

著書「裸の世相と女」（昭和四年、中央美術社発行）の中で、帯が大正末期から段々胸高に締めあがるようになったのを、いち早くとらえ次のように一発天声人語を放っている。

「帯を紋付のところへ締めた長襦袢風のものも現われそうだ。風が吹くたびに男の方が心配で心配でならないという服装であるが、そこがつけ目だと云うに至っては目をつぶっているより外はない……」云々。略画風に、耳かくしの若い女性が長い振袖を着た後ろ姿が描かれているが、果せるかな帯は襟足の近くにハネ上っている。

また、氏は伝統のコシマキについては、礼讃者よりはむしろ警告者の立場を取り……お腰はいけません。ズロースを用いなさい……と云っている。

……デパートで毎日、落とす毛は大変な数でそのため掃除夫は大いに困っているが、ともあれ私（下川氏）は風紀上から断然、ズロースを用いることをおすすしたい。どんな階段を上下しても大丈夫な様に……と。

筆者の見たところ、当時の東京では、六大デパートと称する百貨店が点在して居り、し

かも今のうちに、高層な展望台はなかったから、どんな階段をと云っても、むき出しの屋上塔の階段を除けば、さして問題視されないのを、およそ階段と名のつく処をご婦人が歩いては、と警告するのは、ただ事ではない。

下から見上げるデバ亀は常時いないにせよ、気になる言葉である。要するに、現在のようになり下りの便利なエスカレーターのない頃だから、いちいち階段を登ったり下ったりしているうちについて腰紐が緩るみ帯がガタガタして、前身が開いてくることを指したものと思うが、ご心配の掃除夫泣かせのものは何を召されようとも落ちるのではあるまいか。

下川凹天氏は、また「職業意識」と題してある意味の絶体絶命である女性の裸体化を、次のように解説している。

「モデルが画家と往来で会う。実に礼儀正しいものである。一寸赤い湯文字が見えても顔を赤らめ恥かしがるが、それが一度アトリエに入ると御覧の如くである……休憩時間中、先生の前で御覧の通り（つまり素裸でストープに平気で手をかざしている）のまま世間話を平気でする」

さきほどのフランスの女性ではないが、ひくにひかれぬ絶体絶命さは実にこのように力

強いものなのである。

文献と云う程のものではないが、挙げ序でに加えて貰いたいものに、明治四十三年博文館から発行された「スケッチ画集」第二集に更衣と題し岡野栄氏の筆で

「吹き返すうらめづらしき更衣

と文句を添えて、島田髪の小娘が右手に牡丹か芍薬の花を持ち、左手で捲くり上る裾を押さえているスケッチが載っている。新しい処では、寺本忠雄著の「夫婦絵草紙」（昭和四十一年あまとりあ社発行）に

「向い風、手のいそがしい女連れ

で、どうにもならない娘達の困惑風景が描かれているし、同じ著者のもので「艶句 女絵草子（昭和四十二年芳賀書店発行）では

「向かい風 娘半分泣いてくる……

は、砂や塵が眼の中に入って泣いたのではなくて、あちらを押さえるところから、こちらをうまく押さえたつもりがまた開いちゃったのよ……で、つい泣き出したと云う、男性に取って何んと、もったいない素振りであるうかと思われる一駒である。

古老ばかりで今更、明治百年を語り合う訳ではないけれども、確かに男でも女でも服装に関しては、戦前は今より開放的であった

ことは本当で、どうせ溜り場のY談位には評価されるかも知れないが、無法松ならぬ街の一人力車夫のお話で、本テーマを閉幕したいと思う。

頑固親爺で人情には弱いが無類の色事が好きなのが女房に云わすれば玉に瑕。鉄環がゴムタイヤと変って乗心地満点の大正末期のと……。ご存知の通り、客は下駄ばきか草履ばきで車に乗って、やつこらさと腰を掛けるが、休暇で帰郷するか料亭を鞍替えする時には、何某かの行李や信立袋がチッキとなり、それを必ず客の膝を割って押し込むのが常例だ。荷物が大きくて、かさばればかさばる程客の膝を左右に出来るだけ広げさせてギューギュー押し込むから、ハカマをつけた野郎か女学生ならまアまアのところを、前合わせの着物を着た若妻や芸妓さんでは堪ったものではない。

「今日はお客さん荷物が多うござんすなア。こうつと……仕方ありません。奥へこれを積んでその前にこれとこれに乗せますから、窮屈でも脚をうんと開いて貰いましょうか。どっこいしょ……と。もう一寸入りませんか？膝頭をもう少し持ち上げるように外の方へ曲げてみて下さい。お腰が見えるって？ いい

ではありませんか。どうせお客さんと車夫の二人連れ。のんきに行きましょ。ふくら脛が当たりますか？ それじゃこの塵掃らい

の羽毛でも、はさんでみて下さい。よござんすかね。それじゃ、その前にこれを二個こゝろ積み上げてと、最後にこれ（布）を懸けて……

〔実話〕と〔体験〕懸賞原稿募集

▽題名と内容▽

- 一、私はこのような変わった体験をした。
- 一、私はこのような、不思議なことを見聞した。或は自分で経験した。
- 一、私はこのような奇妙な探訪をした。
- 一、私はこんな珍奇な研究をしている。
- 一、私はこのような怪奇な経験をした。
- 一、私は人間の靈魂の存在を信じている。
- 一、妖怪変化が私を苦しめている。
- 一、私の見聞した怪奇談或は珍妙な実話。
- 一、私はこんな犯罪を犯した。
- 一、私はこのような変わった蒐集をしている。
- 一、私の趣向は、こんなに変わっている。

▽規定と賞金△

- 一、右に掲げたような△題名と内容▽の原稿を書いてみようと思われる方は、原稿用紙三十枚乃至百枚ぐらいの範囲内でまとめて投稿下されるようお願いいたします。

- 一、写真或は絵画などの資料がありましたら原稿に添付下されば幸いです。若し原稿を書くことが不得手の際は、素材、資料の提供にても結構ですから、その旨御連絡下さい。
- 一、本規定により応募下さった投稿者の方々全部の方に対して、採否に拘らず編集部作成の女体緊縛フォト（或はMフォト）を折返えし贈呈いたします。贈呈枚数は原稿の枚数に応じて加減いたします。
- 一、誌上に掲載しました原稿につきましては一篇につき五千円以上三万円までの賞金を掲載と同時に贈呈いたします。資料のみ提供の場合も以上に準じて賞金を呈します。
- 一、締切りは毎月十五日。応募作品には、必ず△実話と体験▽懸賞応募と附記又は添記して下さい。原則として「応募原稿」の返却の求めには応じかねます。景品或は賞金を贈呈する関係上、連絡先は必ず明記下さるようお願いいたします。

……いいですか？ 梶棒をあげますよ……」
てな具合である。

「だから、あつしはその時、女の着物をさアツと一目で見えてしまふんですよ。下着が汚れていちゃ、その芸妓は何処へ行ったって売れませんや、ヘッヘッヘッ……。旦那、それがもういいけませんや。昭和ももう末でさア。それに間の抜けた人力車なんてものは遠の昔にお払いばこと来ては、もう金輪際あつしらの出る幕じゃござんせんや……」

十代で紺のもも引に饅頭笠をかぶり梶棒をにぎって、生活が懸ったとは云え、好きで何千という女を車に乗せては絶体絶命化した一代のリキシヤマン……あんたは、けだし幸福でしたよ。芝居ならいざ知らず、もう二度と女の膝を拡げることなんか出来やしませんからね。

思えば明治大正遠くなりにけりである。別にここで彼の法要を営む訳けではないが、大往生を遂げて眠ったところがビーチの丘の絶壁の墓地。夏ならば、たとえ時代は代ろうと曲線美妖しく跳躍する数千の女性群を眺められるだろう。この絶景の好所から見下す花模様様にヘッヘッヘッ……と骨を鳴らして独りほくそえんでいることだろう。合掌。――完――

S M カメラ・ハント

続 佐々木真弓の巻

悦^{エツ}痴^チな季節

辻村

隆

真夏の夜の九時——。大阪ミナミのクラブ「U」の、仄暗いルックスのボックスには、珍しく私ひとり。御指名は、いわずと知れた清子こと佐々木真弓である。電話の甘い媚声に誘われて、ノコノコとカモになるべくやってきた次第である。

「あら、オジサマ、やっぱり来てくれたのね。感激だわ、嬉しいわ」

現われるや、いきなり私のひたいにチュッと華々しく音をたててキスすると、満面に嬌笑を浮かべて、体をすりよせてきた。

数カ月の間に、夜のホステスの磨きが一段

様子であった。

とかかった佐々木真弓である。油絵具をぶちまけて、滅多矢鱈にひっかき廻したような図柄の、ノースリーブのミニワンピースの色彩

「きつと来てくれはると思ったわ。電話でお約束したとおり、私オジサマのいうこと何でもきく」

は、これが昨今流行の、サイケ調というやつであろうか。夜の化粧も一段と濃さを増し、

「もう一度、思い切り縛って、虐めてやろうと思ってネ」

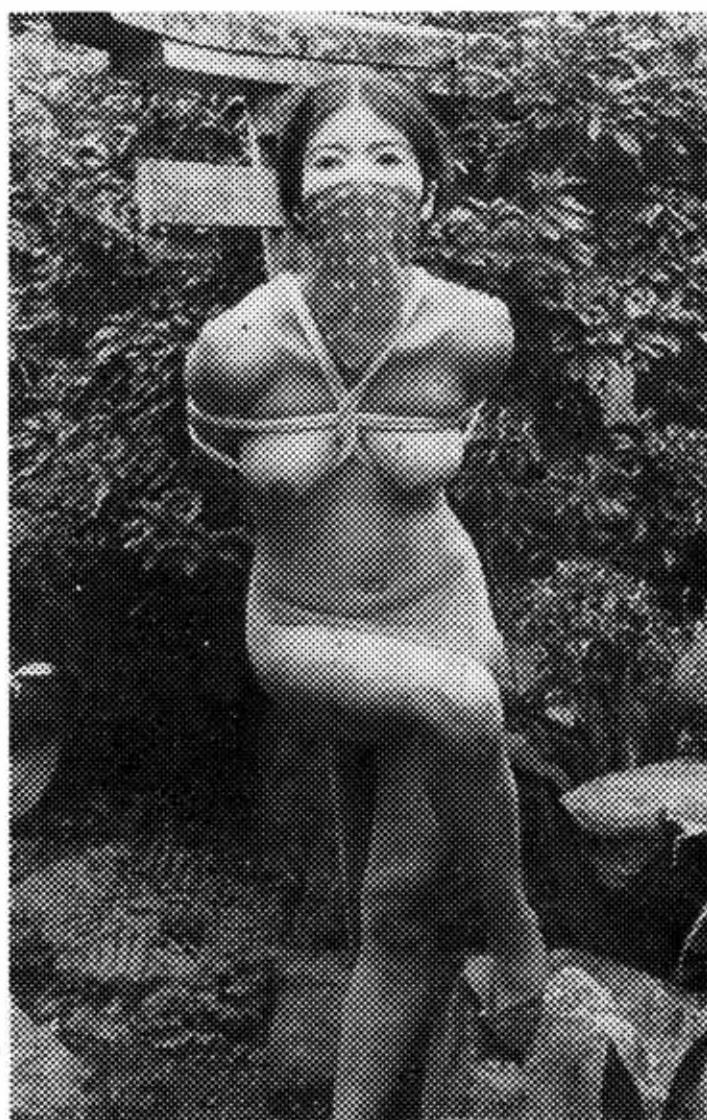
最早そこには、かつてのケメ子として登場した時のイメージは跡型もない、見事な変貌ぶりであった。

「ええわ、縛って縛って。オジサマに思いきり縛られてる夢、每晚みてたんよ」

私は無言でニヤリと笑う。口で云わなくても、私の態度で、彼女はすっかりゴキゲンな

うまいことをいう。いつしか変な大阪弁もチャンと板についた口調になってきた。

「どう、長田君も来たかね」



「来ないわ、電話は二応したんだけど。どうせ新しい彼女のオシリでも、追っ掛け廻しているんですよ。私もう、あの人のこと何とも思っていないわ。彼だって、私に関心もっていないんだから、それでいいのよ」

ムンムンむせかえるような、若い体臭を撒きちらせて、ヒタと寄り添ったまま、ボーイの運んで来たビールを手際よくついだ。

「どうして店を変えたの？」

私の問いに、刹那、黒眼勝ちの瞳がキラリと光る。

「前にいたキタのチャイナサロンより、ここの方が稼ぎがいいから。……と、いうのは表

向きの口上で、オジサマだから本当のこというけど、わたし、恋人に引っ張られたの」

「恋人？ ヒモかい……」

「心配しないで。ヒモじゃないから。そりゃお客さんの中にも、好きな男性は幾人かいるけど、恋人なんてもんじゃないわ。私の恋人はオンナ、それも私とおない年の女の子。どう、驚いたでしょう。ウシシシシ」

どうも人の意表を、つきたがる子である。

女性同志というと、

「レスかい？」

「こんな世界には案外多いのよ。男性不信の結果からかも知れないけど。でもまあそんなところね。あの子真剣なもんだから、とうとう離れられなくて……。今、天下茶屋のアパートで、あの子と二人で同棲中なの。それで無論、豊中市のアパートは引き払ったわ」

「こりゃ又、妙な方面に進展しだしたもんだな。じゃあケメ子、じゃなかった、今はキヨ

子だね。キヨ子は男性に興味を持たなくなったの」

「持たないどころか大ありよ。鵜の目、鷹の目で、結婚出来そうな相手物色中だもの。でないと第一、こんな男性相手のお仕事出来っこないでしょう。私の恋人のあの子、この店でミチルというんだけど、あの子だって過去二度結婚して、三度も中絶しているわ。今でもオトコが好きなくせに、男性不信病にかかって、その挙句が私とこんな仲になってしまったのよ。最初はヘンな気持だったけど、もうすっかり馴れてしまったわ。女同志キッスしたり、おっぱいさわったりなんてヘンだものね。でもあの子のテクニックには、すっかり参ったわ」

「その秘戯のテクニックとかやらを聞かせてくれよ」

「エッチね、あいかわらずオジサマは——」
「エッチはそっちの方じゃなかったかね。若い女と女が、夜っぴて秘術をつくして、痴態の限り、それで悦こんでいる。エッチとはね字で書いてこうだよ」

私は小さい手帳を、ズボンのポケットよりとり出すと、鉛筆を引き抜いて、空白欄に、「悦痴」と書いて、仮名を振ってやった。

「あらッ、漢字ではこう書くの。私は又、ヘンタイのローマ字の頭文字かと思ってたわ」
「こんな世界の女達から見れば、遊びにくる男共はみんな、大なり小なりエッチだろう。となると、男はすべてこれ、オール変態ということになるじゃないか。エッチの語源はこうなんだよ。キヨ子等のように女同志で、痴戯に耽って悦ぶのもエッチなら、痴漢が悦ぶ行為もエッチ。すなわちエッチとは読んで字の如く、悦痴なんだ」

「オジサマの新学説だわね。ハレンチの世の中、すべからくエッチ時代ね。辻村さんもエッチ、私もエッチ、ミチルもエッチ。ああ、ハプニング時代万才！ だわ」

私は段々愉快になって来た。エッチに「悦痴」の字を当て嵌めて考えると、男性これすべてエッチならざるはなし。まるで私の娘のような年頃の佐々木真弓すら、みずからエッチを自認する調子のよさである。女もまた、一皮むけば、これすべてエッチな動物ではなからうか。私の奇妙なこじつけ論も、こうなると、何だか真実性が出てきて面白いものであった。

「どうだエッチ娘。そのミチルとやらとの、レスのプレイぶりを残らず白状してしまえ。」

白状しないと、プレイの時、逆吊りに縛り上げて、ローソクでじりじり焼いて、パイパンにしようぞ」

芝居がかって脅す。

「カンニン、泣かさないうで。何でも白状するわ。どんなこと？」

「男役は、どちらだ」

「わたしよ」

「ハテ、面妖な。誘い込まれたキヨ子の方が男役とは」

「ミチルは、いろいろとわたしにしてほしがるのよ。サービスを強要するの」

「どんなサービスを？」

「いろいろあるけど、大体、男が女にするようなこと。例えば……」

筆にするのは憚ることを、彼女は熱い吐息を吹きつけるようにして、私の耳許で綿々と囁き続けた。聞いている私の方が赤くなる思いだ。

「さてはこいつ、バージンではなかりしか。」

経験豊富なこの魔女奴！

私は小柄な清子を深々と抱いて、彼女の鼻先を、パチンと指で弾いてやった。ケメ子から、突如として男性型の水前寺清子ファンに変貌したのも、案外こんな処に原因があった

のかも知れない。

「いやーん、いたい——ッ。いえいえといったから白状したのにオジサマったらいやッ。わたし、オジサマに縛られて、シャシンとられたことミチルに話してやったの」

「私だけじゃない。長田君の方が多いはずだよ」

「彼のことも全部オジサマがやったことにして話したわ」

「ひどい奴だ。それで彼女、どうだった」
「スゴく興味もったわ。自分も縛って虐めて欲しいなんていって、わたしに縛ってくれていたのよ」

「俄然、興味が湧くね。ミチルって子、呼べないかい」

「指名つけてくれはる？」

「いいともさ、呼んでくれ。そのミチル嬢から、トイチハイチの模様を、こと細かくきいてやろう」

「何、そのトイチハイチって？」

「知りたい年頃なんだな。君等二人でチョネチョネやってることさ。メンナイ千鳥ともいうがね」

「何のことだか、さっぱり判らないわ。じゃあすぐ呼んで来ますけど、あの子の前で、あ

んまり変なコト喋っちゃダメよ」

水前寺ファンの清子さんは流し目を送って立ち上ると、ボーイに連絡にいった。

あからさまなレスボスの実体を、ミチルというその子から聞けそうで、私の胸はいつしか熱っぽく弾み始める。この佐々木真弓という娘は、奇妙

に風俗趣味を横溢させている。何でも、体でジカに体験してやろうという、積極的な探究心と、猟奇的な好奇心をどんらんにはき出しにした感じであった。

数分後、清子のあとについて現われたミチルという女性、確かにオンナ型のレスであった。むしろ想像した以上に女らしく、黒髪は無難作に長く垂れて哀愁をかげらせ、清子にくらべてかなり大柄な、均整のとれた細おもての美女であった。到底、清子とは同年令と思えぬ性の年輪の深さを体の隅々に匂わせていた。胸の隆起、腰線のボリュームが、哀愁の細おもての容姿とは別もののように、男



性遍歴を如実に物語っていた。

はにかんだ笑顔で会釈すると、向い側のボックスにそっと腰をおろす。私が煙草をとり出すと、手馴れた手付でマッチをすって近附けてきた。

「ミチルですよ、どうぞよろしく。キヨ子ちゃん、いろいろ御無理を申しまして……」

関連もなく私は、かつて見た映画『棺の中の悦楽』の、被虐にのたうつホステス役の八木昌子を想起させた。

「まるで青い鳥の少女みたいだ」

「ええ、それにあやかりたくて」

「ところが、チルチルはそうおいそれとは、

いなかったってわけだね」

「世の中はそんなに甘いもんやオマヘンワですわ。だまされてばかりなんです」

横から清子が口を出す。

「オジサマ、知らないかなあ、ミチルを」

「うん、こんな美しい人、始めてだ」

「お世辞いってもダメ。ミチル唯今、男性キライ病なんだから。ホラ、オジサンが始めて私のアパートに来たあの晩、お風呂に入っている時、ドアを叩いた人あるでしょう。あの時、邪魔をしたのがミチルよ」

「ああ、あの時の。私はびっくりして慌てて隠れたので、顔はみなかったけど、たしか、えーと、洋子さんとかいった」

「そうよ、本名は沢田洋子。弟が突然やってきたとかいって、私の部屋をあけさせた子なんよ。本当に弟だったか、どうか、未だに怪しんでいるんだけど」

「まあ、ひどい事。本当に弟なのよ」

ミチルが横から口を挟む。

「うん、まあそれでいいわ。もう済んでしまったことなんだから。あれから一カ月許りしてから、恋人になっちゃったの」

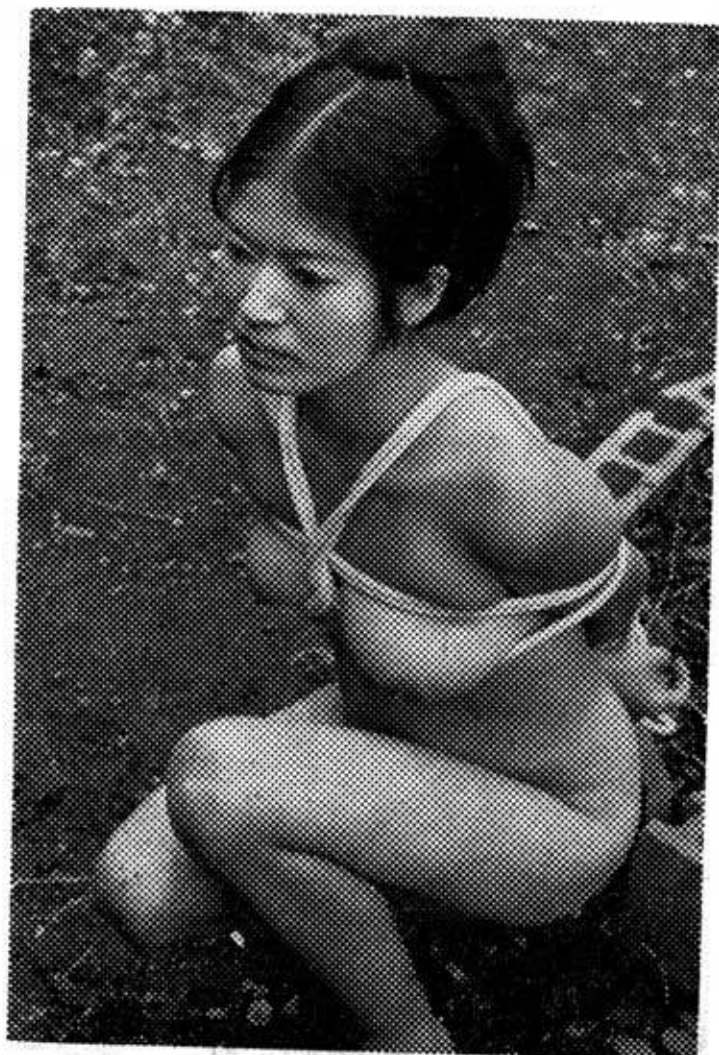
「その節は本当にお邪魔して、申しわけありませんでしたわ」

ミチルこと沢田洋子は、改めて私に挨拶をした。

佐々木真弓と、始めてプレイタイムをもった夜、彼女のアパートで、正に始めようとした時、前触れもなく訪れた娘は彼女であったのか。（『ケメ子早春譜』参照）

「二人のなれそめは？ そもそのもの——」

「ミチルの彼氏が、酔って怒鳴り込んできた時、私の部屋にかくまってやったの。ひとつのお布団で二人並んで寝たら、夜中にミチルが抱きついてきたの。可哀想だから慰さめてやってるうちに、段々ヘンになったの。そうでしょうミチル」



微かにうなずいたミチル、首筋まで真赤にしてうつむいたままだである。尚も清子は洒々と喋べる。

「ミチル話したでしょ。あの夜、私を縛って散々虐めてシャシンとった人はこのオジサマなのよ。ミチルとの仲もすっかり喋べっちゃった」

あけすけに話す真弓に、私も照れ、ミチルはパツと頬を染めて、真弓にたしなめるように手を振った。

「いいじゃない。このオジサマは、とびきりの悦痴だから、何でも聞きたがってるのよ。私達の仲のことも、それから二人してのいろいろのことも」

「そんなこといっちゃダメよ。二人だけの、秘密なのに」

「だって、私とオジサマとのプレイのこと、みんなミチルに話したでしょう。ミチルったら、すぐくハッスルして、縛って欲しいっていったくせに」

「いや、いや、きかないわ」
真赤になってミチルは耳

を蔽う。この場の状況の限りでは、ミチルの方が遥かにウブで、過去の男性遍歴も、激しいレスボスの耽溺も、ミチル自身からは感じとれなかった。いつしか男役が身についた真弓の、無意識のうちのサジスチックな嗜虐がこんなかたちで露呈されていたのかも知れなかった。ミチルより持ちかけた同性愛とはいえ、彼女は所詮受身的な女性のタイプであった。

私は数カ月の断層に、心理的にMよりSに変貌していった真弓の性格が面白かった。二十才になった許りのこの女性には、好奇に対する順応性というか、探求心が殊更に強いように思われた。

ミチルは、恐らく被虐タイプの女性であろう。許されるならば、彼女を犇々と縛り上げてみたい慾望が激しく渦を巻き出した。私はいつしか、それを口に出していた。

「ミチルちゃんは縛られるということに興味あるの？」

「……………」

うつむいた俤、返事はかえらなかった。

「真弓に縛られたのだろう？」

「ええ」

「どうして縛ってくれなんていったの？ そ

の心理が知りたいな」

「真弓にだったら、何をされてもいいような気持ちになったからですわ」

「私だったら」

「男の方は、もう懲りごり……」

「余程ひどいめにあったと見えるね。男性のためにも一言弁解しておきたいけど、世の中の男、すべてがすべて、ミチルちゃんの相手になったような男ばかりでもないよ」

「そりゃ、そうでしょうけど、最初は優しくても、いつか本性が出るでしょう。私はいつも散々くいものにされ、弄ばれてきすぎましたもの。女同志の気心の知れた仲なら、安心ですわ」

「遍歴の果ての行きついたところだね」

ミチルは淋しい顔になって、かげった笑みをかすかに泛べた。彼女の男性不信が、なにかによって打破されない限り、恐らく彼女をいくらか口説いても、私の手で縄をかけることは無理な様な気がした。

ヒモのような男達によって目覚めた、性の執着が、男性を毛嫌いし乍らも、如何ともしがたいセックスの悶えに、そのはけ口を、真弓にぶつけたといったのが真相であろう。だから彼女は自から真弓に行動を起こしなが

ら、自分は性の悩みを解決させる、謂わば男性のセックスの代替物を、真弓に求めているに違いなかった。緊縛とか被虐めいた一連の行為も、真弓の歓心を買いたい許りの、易々諾々の結果であるのかも知れなかった。

私はミチルの体内に潜む、爛熟しきった、すべてを知り尽した、女の性の悲しいさがを見出した思いだった。女心の微妙な深淵の底を知らず、いい調子で、せっせと男役を勤めている真弓は、可愛いピエロであった。ひとかどレスの世界を知った様でいながら、その実何も知らないに等しかった。真性のレスビアンなら全然男性シャットアウトなのだ。しかしミチルの場合、男のよさを知り尽し、愛憎の果てのレスへの変貌であったから、おのずからそこに真性のレスとの違いがある筈であった。恐らくは、クイリニングスやジギタチオのテクニックを伴う、生々しい夜の斗いが続けられていることは想像に難くなかった。

尚も突込んで、いろいろと聞き出したかったが、折しもミチルに指名がついて呼ぶ声。それを機に彼女は立ち上って会釈すると、離れていった。所詮は真弓につながる路傍の石に過ぎない女性であった。

「どう、あの子、すごいでしょう」

ケメ子、改め清子こと佐々木真弓は、レスの世界をさもひけらかせて、得意そうにいった。何も知らないで踊らされているというのに――。

私は二人の夜の激しさを追求することをやめた。水を向ければ、この娘は平然としゃべるかも知れない。そこに無邪気な恬淡さがあった。消え入りたそうな、羞恥にすぐむミチルとは甚だ対照的であった。あの娘はレスを通して感激する性の喜悦を、なまなましく肉体に受けとめているだけに、真弓のように恬淡になれなかったに違いなかった。

「オジサマ、もっともつとすごい話教えたげる。だからカンパンの十一時まで待って。私今夜はともううれしいの。私の体あげましようか」

媚態に頬をほてらせ、私の顔に赤い苺の唇を近かじかとよせ、軽い洋酒の匂いをそこはかとなく漂わせながら、この小妖精は、こんなアバンチュールを、男心をそるようについてつけた。既に身についた夜の蝶のテクニクかも知れない。こんな世界のむなしさはり相好を崩してうなずいていたのである。

縄もカメラもない。遊ぶだけのひとときかも知れないが、偶にはそんな気分にもひたってみたかった。一度縛った女ということが、私を真弓に惹きつけていった。

× × ×

約束の正午を一寸廻った頃、待合場所である梅田のホテル阪神のロビーに、佐々木真弓はサングラスをかけて颯爽と現われた。淡いグリーン一色の超ミニスタイル。全体的に細っそりした小柄のタイプだけに、それが又よく似合う。

待合せの智恵が、冷房のきいた、ちょっと洒落たこんな場所を探し当てたのである。キタのチャイナサロンで勤める間に、真弓は随分ここを利用したらしい様子で、物馴れたふるまい振りであった。ホテル阪神の道路を隔てて、大きい有料駐車場がある。その道路は寸時にして、大阪市内をつらぬく高速道路に連結している。

デラックスな外車の並ぶ間隙から、私はちっぽけな軽自動車をスルスルと吐き出す。

「あら、ミニね」

一寸軽蔑に似た真弓の眩やきであった。急に膨脹する交通量になやまされ、極く最近この小型車に乗換えた許りであった。ひとつ

は、私の格納していた近くのモータープールが閉鎖されて、アパートに建て変わったため、やむなくわが家の入口を改造して、車をいれざるを得なくなったための小型化でもある。

ハイウェイの場合はコンプレックスを感じるが、市内をめまぐるしく走る場合、軽自動車の方が、反って便利のいいこともあった。未だ五〇〇キロも走っていない、塗料の匂いのプンプンする新車である。しかし若い女の子の場合、やはり軽自動車よりも、パリッとした外車に憧れるのは当然であるかも知れなかった。

「何処へ行くの？」

「まあ、任しておいてくれよ。生駒山麓あたりまで走るから」

「モーター？」

「いやネ、同好者の空き家なんだ」

「冷房してなくて暑いでしょうね」

「真弓はすぐに裸になるのだからいいじゃないか」

「ハダカでも暑いわ。この車だってクーラーないんですよ」

「ぜいたくいいっとなし。余り愚図々々いうと、ひどいめに合わせてやるから」

「カンニン、一寸言っただけよ。ゆうべすこ

く眠れなくて、夜明け前うとうととしただけけど、時間ちゃんと守ったでしょう。褒めてやって下さい、だわ」

「ああ、カンシンカンシン。だから、とても気嫌がいいんだ」

ハイウェイのゲートは、もうすぐ眼の前にあった。車線がYの字に分れていて、右へ走るとミナミの中心へ出る。左へ走ると森小路へ延びている。松下電器の町、門真市を抜けて、四条畷から、生駒の麓をうねうね曲る細い舗装道路が、万国博用につくられている。

将来は京都府下の木津町へ繋いで、京都、奈良から、大阪の都心を抜けて万国博へと貫通する予定になっていた。未だ余り知られていないこの道は、やはり交通量も比較的少なかった。大阪の都心を十分足らずで抜けて、半時間後には早くも生駒山麓の、暑く乾いたアスファルト道を昇っていた。

「ミチルったら、あの夜帰らなかったの、で、気嫌わるかったわ。今日も何処へ行くのってしつこく聞きただすのよ。妬いてるのネ」

「でも、真弓の方から誘ったみたいな恰好だぜ、おとといの夜は」

「きっと淋しかったのだわ」

「出来なくてイライラしていたのだろう。毎

夜なんだろう」

「私、疲れてる夜もあるんだけど、あの子、辛抱しないの。つくづくシンドイなあって思う夜もあるわ」

「触ってもらわないと眠れないんだよ、きつと——」

私の瞼の底に、あの夜の真弓の痴戯がありありと浮かんでくる。

何となく十一時のカンバンまで粘る間、私は、抱きよせた真弓の体をまさぐって、その肌にじかに手を触れ、彼女も又、男心をそらせる位置に手をもって来ていた。それは、この種のクラブで、どのボックスにも見受けられる、客とホステスとのお遊びのテクニクのひとつに過ぎなかった。

夜更けのミナミを、数軒真弓をつれてハシゴして歩いて、生魂界隈のホテル群の一つに身を沈めたのは午前一時に近い。

佐々木真弓は、すっかり私と濡れる気になっていた。仄暗い闇房で、しきりに私を振り立たせようと努力するが、彼女の努力も空しく、私はどうしても、いざとなると、反対に萎縮するのみであった。

私の指が、唇が、真弓をのけぞらせ、汗を



かかせ、目覚めた午前八時までに、真弓は三度うめいて、歓喜に嬌声をあげた。私は遂になすこともなく、只単に真弓に奉仕するだけのむなしさであった。

意馬心猿の焦燥とは逆に、徒らに空を切った努力は、遂に朝まで実らなかった。

「オジサマ、本当にだめなのねえ。少しガツカリしたわ」

「セックスの結びつきがすべてじゃないよ。真弓はすべてを私に呉れたからね。私は私なりに充分満足したよ」

「ああ、縛りね」

縛りなんて言葉を平気でいう。真弓に悦こ

びを与えるに、私は、ホテルの二本の紐で、真弓の体をさまざまに、思いきりつよく縛って指を働かせた。挙句エクスタシーの頂点とみるや、私の革バンドが、強烈に真弓の双丘に飛びかい、激しい音を立てていた。絶叫と呻き、それにダブって喜悦の喘ぎ。そんな行為で私のセックスはすっかり昇華してしまったのである。プレイタイムの合間

を縫って、私は全裸で縛り上げた真弓をベッドで抱えて、ミチルとのテクニクをききただしていた。レスビアンとっていいかどうか、その言葉は適当ではないにしても、同性の二人が、夜にくり抜ける愛技のすさまじさは、私の想像以上のものがあつた。喜悦を漂よわせながら、真弓はうわ言のように喋りつづけた。

「吸うのよ、ミチルの体のあらゆる部分を。特に××××××××××は最高だって」

臆面もなく猥らな言葉を吐きながら、真弓は、熱い吐息を洩らした。

「気が遠くなるんだって、その時。あれ失神

「っていうのかしら」

「ミチルは真弓に何もサービスしないの」

「それが癪なの。自分だけ気が遠くなる程喜んでいながら、私には義理か厄介みたい。ちっともいいことなんてありやしない。反ってオジサマのテクニクに私失神したわ」

「不公平じゃないか」

「だから、癪だから、縛って叩いてやるの。それもいいんだって……」

「むしろ喜ばせているようなもんだ」

「この間×××××を使ったら、すごく喜んでたわ。ミチル自分でもデパートで×××××××××きて、私に使ってくれなんていうんだから、処置なしだわ」

「どうも赤裸々でこれ以上は書けない。要するに、真弓は男性不信を感じていないから健全なのであって、ミチルのていどのいい奉仕者である。」

「いい工合に、ミチルに利用されているんだよ。別れちゃえよ、いっそのこと」

「今のアパートのお金だってミチルが全部出してるし、炊事、洗濯、すべてミチルがやってくれるのよ。私は遊んで、好きなことしておればいいの。だから、それぐらい我慢しくちゃ」

「やれやれ、妙なレスビアン同志だな」

「私が浮気しても怒らないわ。好きなことしてもいいから別れないでくっついて拝むの」

「今夜、私と泊ってても怒らない？」

「と思うわ」

私の涙ぐましい働らきで、縛られた俛、真弓は又ぞろ疼き出したのか、微かな声を立て始めた。身の上じり激しくなる。

車は五〇キロぐらいのスピードで、生駒山麓のカーブを曲折していった。目指す目的地はもう近い。

「あの時に、真弓は怒らないといったじゃないか。しかし、矢張りミチルは怒ってたんだね、泊ったことを」

「そう思っただけのことよ。だって私、ミチルと一緒に外泊したのは、おとこの夜をいれて、たった二度よ」

「あとの一度は誰なんだい？」

「私のパトロン」

「そんなのいるの？」

「冗談よ。いるわけないでしょ。ほんの浮気心でフラフラッとお客さんと一緒。オジサマと同じぐらいの年輩の、会社の部長さんだったけど、矢張りダメなのね。一度が精一杯で

フウフウいつてたわ。昂奮すると心臓の動悸が激しくなるんですって。大きないびきかいて、ポカンと口をあけてぐうぐう寝込んでたから、一ぺんにいやになった」

「ハレンチな女だ」

「ありがと、ほめていただいて」

ケロリとしている。ハレンチを得々としているから始末に終えない可愛い娘だ。

「室内も暑いから、今日は野外で縛ってやるよ」

「ミチルを縛るときの勉強になるわ。オジサマの好きな様にして」

「同好の人が、大阪で仕事を始めたもので家族中全部大阪へ引越して、この山麓に空屋同然の古い家があるんだよ。いつでも使ってくれとの好意なんで、電話で拝借することを頼んだら、O・Kなんだ。ひょっとしたら、忙がしくても彼、来ているかも知れない。いいだろう」

「オジサマだけじゃないのね。羞かしいわ」

「いい人なんだ。勿論、縛りたくてウズウズしている。縛らせてやれよ。その代り、いい客になってくれるよ」

「いいわ、オジサマの信用してる人なら」

「よろめくなよ」

「分らないわ。私惚れっばいから……」

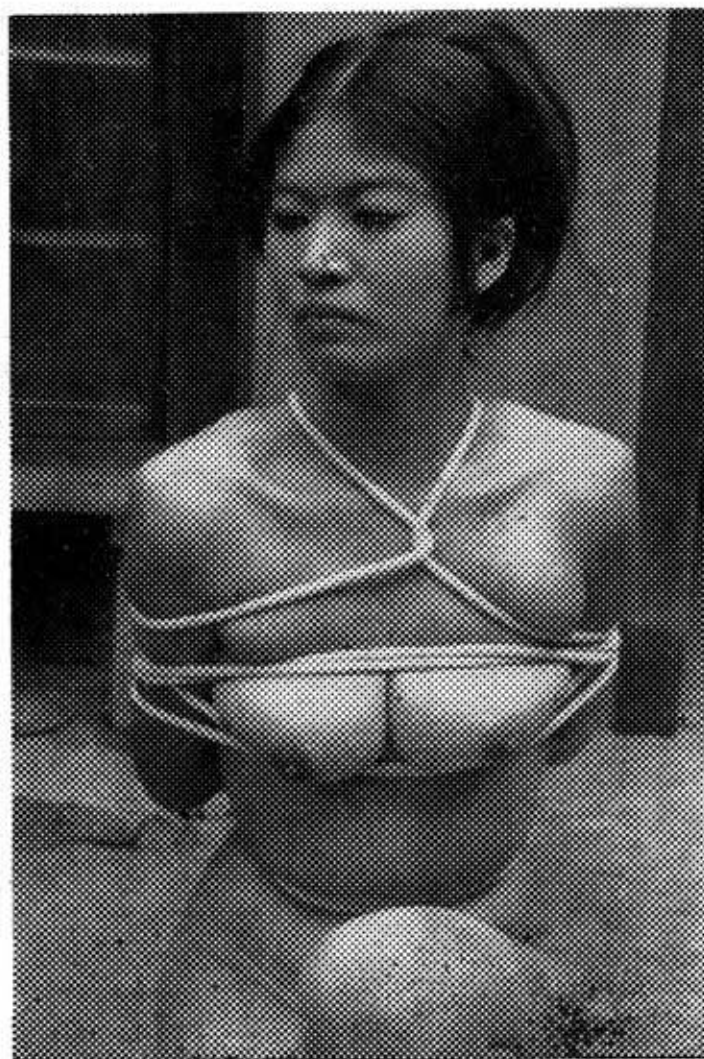
「こいつ」

× × ×

もとはこの辺り、純然たる農家ばかりだったのが、阪奈道路が開通して、生駒台という田園都市風の一面が出来てから、どんどん伸び出し、かなりデラックスな建物が次々と引きもきらず建ち並び始めた。

いずれ都会の生活に飽けば、この地に戻って、風光明媚、空気の新鮮なこの生駒山麓で家を改築して余生を送るつもりなのか、土地会社の誘惑にもめげず、奇クを通じて知り合った同好の士N氏は、生れついたこの故郷の老屋を手離さずにいた。

管理と留守番をかねて、彼が会社在职中、自分の部下だった四十過ぎの子持ちの未亡人を住わせているが、今日は予定の行動で、外出させてあるはずであった。この人、かねて数年前よりの、N氏の隠し女で、且又、彼の過去の唯一のプレイの対照でもあった。N氏にとって、SMプレイはこの人より外に知ら



ないのだから、今日の一件は、正に渡りに舟の、願ってもない機会でもあったのである。

謹厳実直な人で、合成樹脂のメーカーを、定年前に退職すると、在任当時のコネを通じて、最初はブローカーまがいの売り込みであったが、軌道にのりそうなので、思い切って大阪のビルの一室に店を構え、家族ぐるみの商法で、大半は息子にやらせ、大手筋の方のみ引受けているが、順調らしく、車も三台許り持っている。

その一台である、コロナの大阪ナンバーが道路に面してとめてあるのが私の眼にとまった。スピードを落すと、木蔭からN氏があわ

てて飛出して出た。とても五十四、五才とは思えぬ精悍さである。私達を待ちうけていて案内するつもりらしかった。

「よかったよかった。うまく会えましたね。心配していたんですよ」

彼はいかにもホッとした面持ちで、チラリと助手席の真弓に眼をやると、今日の一日、わざわざ仕事の合間を割いて、走って来たことの無駄でなかったことの、安堵の吐息を吐いた。

彼の先導でゆるゆる走る。往還から小道に入ると、彼のコロナは道幅一杯である。そのあとを悠々と私の軽自動車はつづく。

「ここへ車を置いて下さい。家の前まで入りませんので」

申訳なさそうに言って、車を降りた彼は、私の荷物を持ってくれた。荷物といっても、黒い革袋一つである。縄はあるというから持って来ない。野外の予定だが念の為、ストロボだけは準備してある。

農家の入口を今様に改造して、かなり厚い戸がはまっている。左手のくぐりを押すと、無雑作に開いた。

「用心が悪いですね」

「この辺り大丈夫なんです。それにほんの三

十分前までおりましたから」

「何処へ行かれたんです」

「子供と一緒にあやめ池のプールへ行くとか
いってましたよ」

N氏のプレイの対照である、未亡人の顔を
一みみたかったが、いずれその機会もあるに
違いない。そのうち口説き落して、一緒にプ
レイしましょうといっているのだから――。

真弓は物珍らしげに、キョロキョロしながら、
私達についてきた。

土間へ入って風通しのよい上りがまちに腰
をおろす。私はここで真弓を彼に紹介した。

「いくつです」

N氏は無粋に、彼女の年をきいた。

「はたちになったばかりですわ」

「うーん、うちの三女と同じ年だ。どうも子
供とプレイやってるようすな」

彼は幾分照れて、やや薄くなった頭に手を
やって磊落に笑った。

「私も撮っていいですか、下手だけど」

「ええ、勿論いいですとも」

カメラ・ハントする女性との、始めてのプ
レイが嬉しくてたまらぬらしく、年甲斐もな
くN氏はそわそわし、冷蔵庫からコーラをと
り出すと、私達にすすめた。

土間の天井を仰ぐと、がっしりした太い梁
が、年輪を経て黒光りに光っていた。

「あれに逆吊りしたことあるんですよ。いい
でしょう」

「ああ、いいですね。やりたいな是非」

「案外素直に協力してくれますよ。飼育する
のに随分とかかりましたからね。辻村さんと
一緒でも、多分O・Kでしょう。いやといっ
ても私が承知しませんかね」

「愉しみですね。何よりも、あの太い梁がい
い。場所にひかれますねえ。もしお差支えな
かったらフォトみせて下さいな、構いません
でしょうか」

「ああ、いいですとも。でも下手ですよ。ど
うも眼が悪くなりましたね。も一つピントが
うまく合いません。この年で今更カメラいじ
りでもないんですが。今もってきますから」
「私のために準備しておいて下さったのです
ね」

「そうじゃないんです。大阪の方には持ち帰
れませんからね。ちゃんと大切にしまって、
保存してくれていますよ」

N氏はすべて、三人称抜きで喋るが、そ
れで結構通じるのだから面白い。プレイの対
照は、いわずと知れた、その未亡人である。

「もう若くはありませんからね。余り期待し
ないで下さい。それに細い方ですので、ボリ
ュームはありません」

「いやいや、その方が反って被虐感が出ます
よ。勿論、細い方、肥えた方は、人それぞれ
の好みにも異なりますけどね」

喋りながら、奥の間の方で、ガタゴトい
わせていたが、やがて、印画紙のキャビネ箱
を二個持ち出してきた。

「今の処二百枚、ぐらいいんです。どうぞ：

「私、拝見していいかしら」と横から真弓。

「どうします？」私はN氏にきく。

「勿論、いいですとも。ただ、娘さんには、
一寸眼の刺激が強すぎますが」

成程、刺激の強いフォトの数々であった。
この女性とただ二人、この空家でひねもすS
プレイに耽溺したN氏の歓喜が、フォトから
まざまざとにじみ出ていた。セックス責めが
多いのも、特定の女性を撮る場合の特徴で、
N氏の場合、この女性との関係は、夫婦プレ
イの様相を呈していた。

N氏の卑下する程未亡人は悪くなかった。
いやむしろ、盛りを過ぎた女性の、そこはか
となない哀調が、N氏に縋りつこうとする愛情

の発露となって現われ、独特の雰囲気醸し出していった。容貌は、新劇の杉村春子にどこか似かよっていた。

余りうまいともいえないカメラ技術で、引伸しの処理も大分荒かったが、五十才の手習で、ならい覚えたN氏のD・P・Eなら、所詮は望む方が無理であるが、それを超越した気魄の籠った鋭い感覚が随所に、盛り込まれ到底モデル相手では不可能に近い、SとMとのぎりぎりの対決が、強烈なプレイとなつてフォトにまざまざと刻み込まれていた。いう迄もなく殆んどが極端な露出ポーズで、修飾も構成もない赤裸々さで、それだけに肉迫する嗜虐感が犇々と躍動している。



とりわけ庄巻は、野外の大樹への逆吊りであった。N氏ひとり、どうしてやったというのであろうか。フォトを指さして私は感嘆の余りたずねた。

「よくやれましたねえ。お見事というしかありませんが、これは夜なんです。辺りが黒っぽいから」

「ええ、この家の恰度、裏側で囲いも何もありませんが、私の地所なんです。何処からも覗かれる心配のないところなんです。やったのは、今年の六月初旬の午前一時過ぎでしたよ。人に見られる恐れはないが逆吊りが大変でして、滑車で力の限り引き上げて、縄尻をしっかりと引っ張った。足でレリーズを踏んだのです。それまでに、夜、たびたびここで地上のフォトをレリーズで撮ってみて実験しましてね。やっ一枚ものにしました。余り夜の夜中、パッパッと光らせますと、変に思われますので、もっととりたかったが一枚限りです。私の体力では精一杯といったところです。今度舗装道路のご真中で、引廻しをとってみようと思っています」

もっともって聞きたかったし、ゆっくりとフォトを見たかったが、今日の目的でもないで、名残り惜しくフォトを箱に戻した。野に隠れたSの同好者は随分いるものだ。N氏とは、奇くを通じて私に交遊を求めてきた知合いで、大したこともないとかをくくって大阪で一度会ったきりで、今日が二度目である。野外シーンを思いついた時、ふとN氏存在を思い出し、都合のいい時だけ利用しようとした、私の身勝手さであった。

その身勝手さにも拘わらず、N氏は欣欣として、忙しい仕事までも放擲して、急にいい出した今日の日のために、協力して頂いたのである。どうも申し訳ないような気持である。同好者のエゴイズムを過去数々わめきちらし乍ら、私もまた、自分のことになるとこうしたエゴの面もあったのかと瞬時、反省した。「このフォトのようなことは、とても今日のこの子には無理ですよ。未だ二回目ですからね。かなりいい線はゆける筈ですが」

「ええ当然です。物足りないなんて決して思いませんよ。辻村さんの自由に振舞って下さい。私は、ほんの縄解きのお手伝いで結構なんです」

N氏は非常に謙虚であった。かなり私より

年配も上だが、この道に関しては、私の方が先輩だと、自分を殺しておられるのが快かった。ペタンとかま・ちに腰を落した俛、真弓は放心した様に、あらぬ方をみつめていた。どうやらフォートの強烈なる熱気に当てられたらしい。世間を知ったつもりでも、SMのプレイの深さを知らぬ真弓にとっては、矢張り余りにも強い衝撃に違いなかった。

「どうしたい、凄いだろ」

「シヨックね。正にハレンチそのものだわ」

「フフ、ハレンチね。成程ズバリ、ハレンチだ。そのハレンチをこれから真弓にやるつもりだよ」

「カンニン、今日はダメ。もっと勉強してからね」

恐れをなして真弓はうまく逃げた。もっと勉強か——。いい言葉だ、飼育するというより、勉強するという方が遥かに語感がいい。真弓のやや白けた横顔に眼をやって、私はこのフォートを彼女に見せたことが、これからのプレイに対して裏目に出た様な気がした。若い娘に恐怖心を抱かせてはマイナスである。その点、N氏のフォートは余りにもなまなまし過ぎて、美的観念からはやや遠かった。それからの本質であるにしても、いきなり、Sの

階段を一気に駆け昇る事は許されない。緊縛や嗜虐にも順序があつてしかるべきである。

甘美なデラックスなホテルの一室で、情緒たっぷりSMの、セックスを伴うプレイを予想していた真弓にとって、荒れた空屋に近くすんだこの雰囲気でのプレイは、心も浮かなかったに違いなかった。私は、真弓の耳許で、そっと囁やく。

「さあ、早いところここを済ませて、帰りにどこかでゆっくりしようよ。いいね」

洩々彼女はうなずく。N氏が意馬心猿の逸りたった形相をむき出しにして、真新しいかなり太目の丸いロープをとり出してきた。

「足らなかったら、まだまだあります。荒縄もよかったら、裏の納屋にワンスとありますからね」

真弓と私は期せずして顔を見合わせた。確かに夜の蝶にとっては、おおよそ不似合な場所に違いなかった。

やけに暑い。辺りの木立を縫って、降るような蟬時雨が、真夏の気配を一層濃厚にしていた。

× × ×
中庭はかなり広がった。手入れが行き届かないと見えて、夏草の繁茂は激しかった。四

囲をすっかり遮蔽されているので、昼下りとはいえず、外から覗かれる懼れは、先ずないとってよい。家の裏側の、丘陵につながる大樹のあたり、例の未亡人を逆吊りにした場所など、自然でいいのだが、やはりこの時間では人の眼もあって、それは無理なようであった。一旦心をきめると、真弓の行動はテキパキしていた。あっさりと割切ってしまうあたり、近頃の若い娘らしく、最早遅疑候巡はない。N氏のロープは太い割に柔軟であった。

そのロープを握って私はあり合わせのサンダルを拝借して中庭に降り立つ。うしろから真弓が全裸の俛で、一向に憶す気色もなく、未亡人の脱ぎ捨ててあったサンダルをつっかけてついでくる。

中庭の片隅に、小さなホコラがあつて、朱色の剥げた、こじんまりした鳥居が、大きく繁るヒラドに半分姿を没して立っていた。これは恰好の立縛りの柱になる。一瞬そう見究めて、その前で私は真弓を縛り始めた。

長いロープなので二つに折って胸にかけ、豊かなオッパイの隆起を強調させるように、胸で絞って8の字に廻し、肩を通して背で結び、彼女の両手を鳥居柱のうしろで合わせさせた上、手早く縛り終った。二分ばかりで忽ち

立縛りは完成である。飽気ない程の早さにN氏はポカンと見とれている。真弓はされるが俤に、両脚は一応素直に直立させていたが、その脚を組ませて蔽うようにする。ごくありきたりの平凡なポーズである。アクセサリーにと、

「何か猿轡に使うような手拭はありませんかね。何でもいいけれど」

「手拭ならそこにかけてありますが、大分よごれていますね、一寸待って下さい」

彼はすぐさま奥へ引き返して、持ち出してきたのが、水玉模様のネッカチーフ。

「プレイの時、よく使っているんですが」

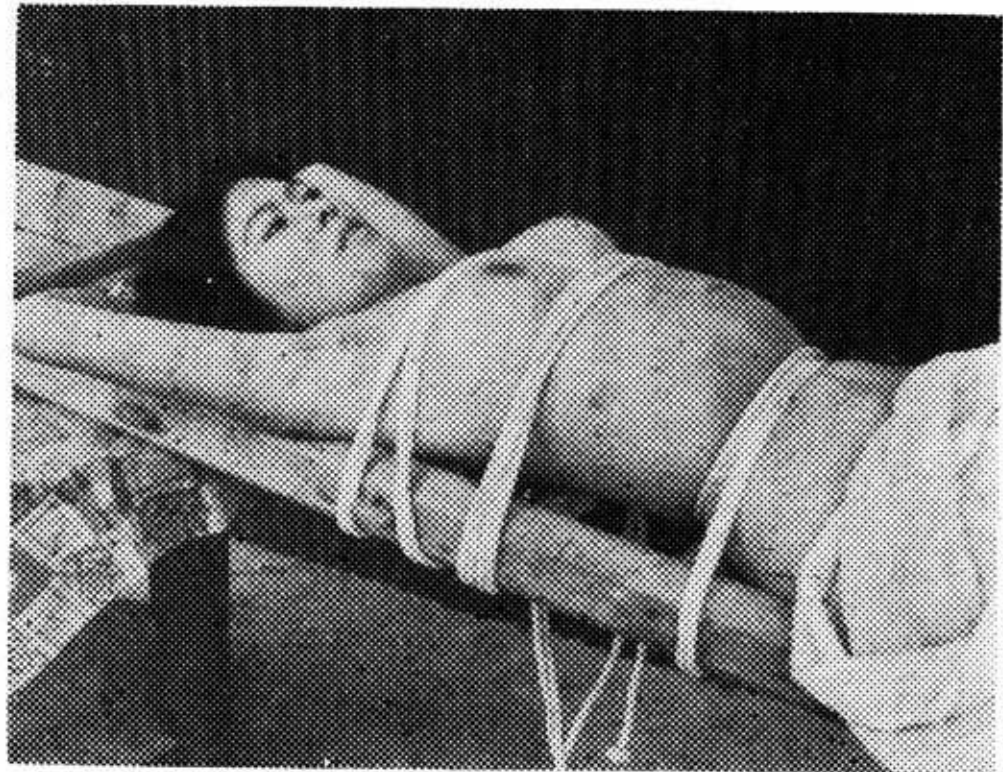
三角にたたんで口を蔽うと、猿轡というよりまるでギャングの覆面もどきである。改めて細くしごいて唇を開かせてかませる。ハントのフोटオとしては珍らしく自然光である。

いつもストロボを使っているから、反って勝手が違う感じである。

真弓の乳房はふっくらと豊かに膨らみ、乳首は小さく桃色づいて、さながら処女の如くかたちよかった。

「わたし、オヘソ少し出ているのよ。だからなるべくオヘソを判っきり撮らないでネ」

始めて撮った時、そうやってハニかんだ彼



女であったが、今改めて白日の下に彼女の全裸を正面から見ると、成程臍窩の凹みは浅かった。しかしそれとても、真弓がはにかむ程のものでもなく、反って愛嬌があった。脚は依然として堅く組み、その部分をカメラに覗かせようとしなかった。

N氏もカメラを構えていたが、私の耳許で声をひそめて、

「彼女、露出をいやがるのでしょうか」

「いいえ、別段そうでもないですよ。無理にこれみよがしに曝け出しもしないが、強いて隠そうともしませんよ」

「じゃあ、あのポーズで、足首を棒で縛っての開股などどうでしょう」

「構いませんよ。何ならやって下さい」

「えッ私が……。そりゃいけない。彼女、厭がるでしょう」

「大丈夫ですよ。ゼスチュアが大分ありますから、どんどんやって行けばいいんです。最初の第一回目で、もっと大胆なのをやっていますからね。それに長田実氏に大分飼育されましたから、かなり強烈なものでも我慢しますよ」

「それを伺って安心しました。じゃあお言葉に甘えて」

準備してあったのか、N氏は直径三センチぐらいの竹の棒を持ち出してくると、私と真弓の顔色を等分にみくらべつつ、彼女の足許にしゃがんだ。

「一寸、縛らせて下さいね」

遠慮がちに真弓に声をかけ、細縄で足首に竹棒を縛り始める。S士の好みは皆同じである。N氏にとっても、過去未亡人を相手に、

強烈きわまるプレイをしてきているから、所詮ハント用のおとなしいポーズは物足りなかったに違いない。彼はこの構図に対し、僅か一、二度シャッターを押したきりであった。

真弓は無表情で、私の顔をじっと見つめていたが、N氏の申し出に拒否はしなかった。築山めいた積石が邪魔をして、両脚は開きにくそうであった。体を横にずらせると、頭が鳥居の横木に当り、この位置での開股縛りはかなり無理なようである。私はじっと見ていた。それでも真弓は、首をねじ曲げて、何とか開股縛りに協力しているが、体が立縛りのまま、くの字に曲り、長時間そのポーズはとれそうもなかった。

左足首を縛り終え、かなり足幅をとらせて右足首を縛り始めていたN氏も、真弓の不安定な姿勢に、無理とさとしてか、その作業を中止して解き出した。

しゃがんだN氏の見上げる眼前に、探求の目的が白日の下に曝け出されていた。そのことだけで、既にN氏の初期の目的は達せられたに違いなかった。彼はフォトをとるより、プレイそのものを楽しむ方であった様だ。それが同好者すべての、本来の姿でもあるのだろうか――。

「やらないんですか？」

「ええ、この場所では、どうも無理ですね。あきらめましたよ」

「やれやれ、暑いのに、どうも御苦勞様」

汗を流して懸命に縛っているN氏のバックを含めて、数枚シャッターをきったが、プライバシーもあって発表出来るものでもない。竹棒を外すと、ついで彼は真弓の後手の縄も解いて、柱から女体を離れた。二の腕に、うっすら紅殻の朱がこびりついている。

改めて両手をしっかり後手に縛ると、縄尻を握って、中庭の中央まで出てきた。ブロッコで囲いをした中に植え込んだ百日草の赤や橙の花が、真弓の背で、暑さに負けて、しょんぼり首を垂れている。

彼は真弓の立ったポーズを、あちこちの角度から撮っていたが、ひとしきり撮り終るのをみて、百日草の前へしゃがませる。この程度の縛り方には、全然痛痒を感じないといった無表情さで、真弓はかがんでポーズをとった。一匹の熊蜂が、ブーンと大きく羽音を響かせて、彼女の身边を舞った時、

「キヤーツ、いやっ、怖いわ」

始めて彼女は驚きの声を発して怖がった。裸身のどこへとまっても、熊蜂の一刺しは、

白い肌を赤く腫れ上らせるに違いなかった。

N氏が口笛を吹き乍ら、蜂を手で叩き落すように追う払う。口笛は蜂が嫌がることを、私は彼の説明で始めて知った。

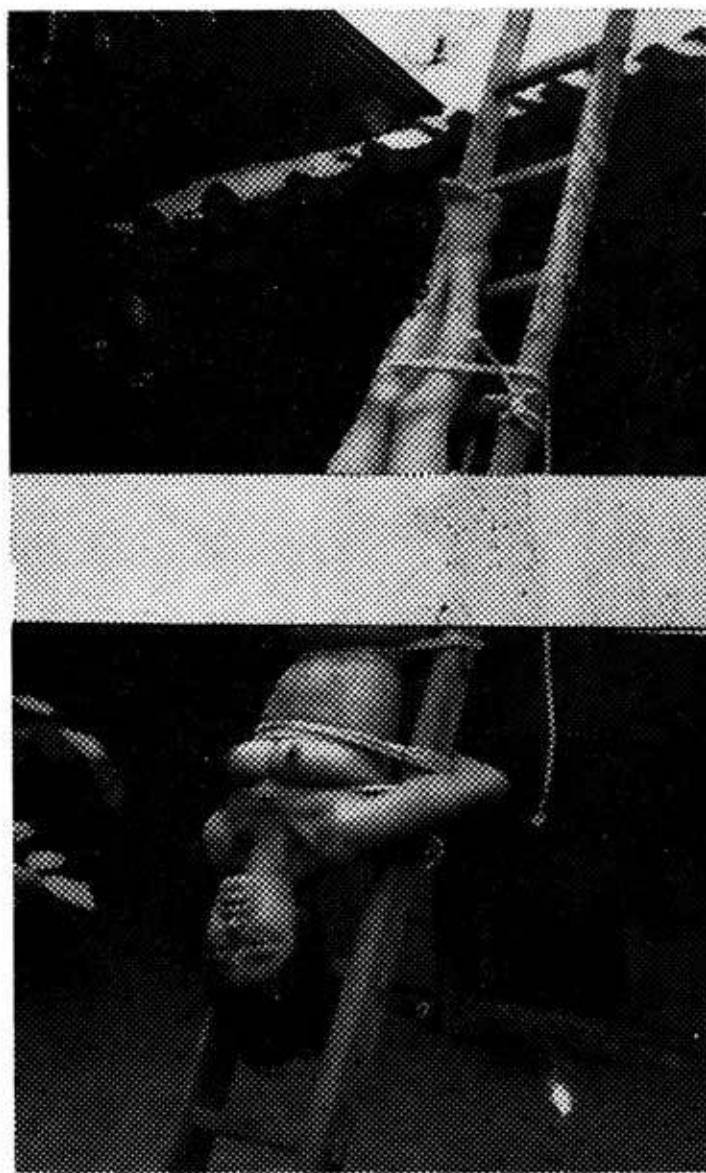
ジリジリ照りつける真夏の陽射しは、一入暑く、油蟬の声も轟しい。

単調な同じ縛り方の尽で、N氏は真弓をあちこちへ引っ張っていった。バックを替えてしきりにシャッターをきっていた。N氏にとっては、それが捨てた廃家への追憶につながるものだった。プレイという点では、未亡人とは雲泥の差があり、これは単なる緊縛モデルの裸体の露出フォトというに過ぎなかったが、若い細身ながら潑刺とした真弓の全裸に、N氏はかつてない喜びを覚えている様子であった。片脚を上げさせたり、塀にもたれさせて上半身をのけぞらせたり、積石に腰を降ろさせて、両脚を一杯に開けさせたりしているその有様は、かつて私も緊縛モデルに求めたのと同じルートであった。

誰しも一度は通るコースである。むしろ微笑みたくような気持で、この五十の坂を越したN氏の汗だくになって撮りつづける姿を、私は漫然と鳥居の傍らから眺めていた。

謙虚に、縄解きで結構、辻村さんの御自由

にといった筈の彼が、さて始まったとなると数十分前の言葉をすっかり忘れ果て、はては私の存在すら意識の外にあるかのように、しきりに真弓にハレンチのポーズをとらせている。同好者のエゴイズムを笑って、自己も又エゴであったと反省した私は、ここにN氏のエゴイズムをまざまざと見せつけられ、彼も又、同好者特有の忘我の範疇に入る人間であることを知って、苦笑せざるを得なかったのである。かつて一度はカメラ・ハントにのつた女性をとる事が、N氏にとっては又とない絶好のチャンスに思われて、眼の色を変える心理も分らなくはなかった。



真弓の動作が、物懶げになって来た。かなりの長時間、日蔭のない炎天下で存分に振り廻されたので疲労をおぼえたに違いなかった。ここらが汐時と私は声をかける。

「一度、休んだらどうですか」

「ああ、そうしましょう、そうしましょう。」

「つい我を忘れて……」
忘我から醒めた様にN氏は、あわててその場で真弓の縄をといた。ぐっしりと、まるで一絞り出来そうなほどシャツを濡らせて、N氏は戻ってくる。

おもやの縁側に並んで腰をおろす。あたふたとN氏は、冷たい飲料水をとりに走った。

「暑いから疲れるだろう」

「好きな人が多いのね」

ポツリと真弓は咳やいた。

長田実——私——塚本鉄三——N氏——。

真弓はこうしたSの人間の洗礼を次々受けて

思わず口をついて出た言葉に違いなかった。

「一度縛り方をかえてよろしいでしょうか」

「あなたがやるのですか」

思わず私は、きき返す。

「あッ、いけなかったでしょうか」

「いいや、どうぞやって下さいよ」

少し調子に乗り過ぎていた様に思ったが、この暑いさなか、彼に任せておいて、それがいい緊縛であれば私もラクである。フツときざした不快感を噛み殺し、私はさりげなく快諾のそぶりを見せた。真弓は黙って私の顔をみつめた。いよいよ無表情は硬くなって、むしろ仏頂面にすらみえる。二人きりの夜の、あの艶然としたこび、媚めいた眸はどこへ消えたというのであろうか。微妙な女心は、この荒涼たる雰囲気硬化しているのかも知れなかった。ましてや、私と二人でプレイするはずで来たのに、肝心の私が手をつかねて、暑さ負けしたようにぼんやり見ていることが真弓にとっては尚更我慢ならなかったのである。私にしても長居は無用という気持が追々強くなってくる。冷房のよく効いたデラックスな密室で、甘い雰囲気はひたり乍ら、悦痴なプレイに二人きりで耽溺したい慾望がもくもくと頭を抬げてくる。単に野外使用の

目的で、軽い気持でここを借りたのが、反って今は後悔めいた様な気持にすらとらわれてくるのであった。

プレイは、再び始まった。一本縄にして、N氏はかなりの長い時間をかけて、炎天下に凝然と立つ真弓を縛っていた。

両手を逆さに高々と縛り上げ、この高手小手縛りは強烈そのものであった。手首の縄を肩から胸へ廻して、逆手を下らないようにして縄は腰へと伸びている。余程、腕や手首が柔軟でないと我慢出来ない。後手縛りのうちでも最も苦痛をとまなう縛り方である。下手をすると、腕の附根が脱臼する恐れもある。N氏も願望に挑戦して、いよいよSの本性を発揮しだした事を私は察知した。銀色にマニキュアした長い爪先が、ピクピクと陽光に輝やいてケイレンしていた。しかし真弓の表情は意外な程平然として、相変らずの無表情さである。この強烈さにたえ得る彼女の体は、予想以上の柔軟さであった。完全にX字型をなした見事な逆手縛りが出来上った。

「痛くない？」

「無理に動かされると、肩の附根が折れるかも知れないわ」

真弓は眉をしかめてみせた。そこにもっと

も痛みを感じるのか、肩の骨が直角にとんがって突き出ている。肩胛骨がぐっと狭ばまって張り出していた。

N氏のひたいは玉の汗が吹き出していた。彼自身、我が手で縛りながら、その見事なうしろの高さに、その強烈さに感嘆していた。

「辛抱出来るの？」

「少しぐらいなら……オジサマより、うんときついわ」

「だろうね」

「無理でしたかね」とN氏。

「私なら一寸、出来ませんね」

「辻村さんはフェミニストですからね、じゃあ早いとこ、とりましょう」

蹲踞の姿勢をとらせ、あわただしくシャッターが、あちこちでなる。

ギラギラ照りつけていた太陽の直射が、すーっとかげり始めた。見上げる青空の彼方、北の空に黒雲がはり出している。或いは夕立の前兆だろうか。

真弓は不思議に汗をかかなかった。むしろ白い肌はさらさらして、尚更に白けてゆくようであった。鼻っ柱にポツリと二、三滴、小さい玉の汗が浮かんでいるに過ぎなかった。そっと私はハンカチで拭いてやる。

しめつけられた両の乳房は、隆起の谷間をピツタリと密着させて、プツンと小さく突き出た乳首は、しゃぶりつきたいような鮮烈さであった。

かなり縄はきついらしく、二の腕に深く喰い込んでいた。銀色の爪が折ふし虚空を掴んでのけぞっていた。

「いたい——」

思い余ったように、真弓は誰にともなく呟やいて、きゅッと眉をしかめた。

「もう解いてやりませんか——」

みかねてN氏に声をかける。数歩下って、カメラの手を休め、緊縛のスタイルをほればれと眺めていたN氏は、我に還った様に、あわててカメラをおくと真弓に近よった。

「ええ、早くほどこきましょう」

さりとて急ぐでもなく、肌にじかに触れる手指の感触をたのしむかのように、彼はポツポツ縄をとき始めた。

さすがにぐったりして、真弓は肩から二の腕にかけて、しきりに撫でさすっていた。

「納屋の横手に、梯子を立てかけておいたのですが、梯子を使つての責めのプレイなんかどうでしょうか」

N氏は流れる汗を拭いもせず、両眼を血走

らせて息を弾ませながらいった。いつの間にか、すっかり彼のペースに巻き込まれている私自身を、その時、発見した。

プレイ用に家を貸してほしいという私の電話があった時から、彼はおそらくプレイの構想をあれこれと練りに練っていたに違いなかった。私に遠慮するようにみせて、その実、老練なN氏は徐々に自分のペースに私を引きずり込んでいたようである。しかし大体似た性格の彼の考えることは、私にとっても亦それに反対する理由はひとつもない。この梯子を使つてのアイデアひとつにしても、むしろ喜んで受けるべき提案であった。

「いいですね、やりましょう」

「そうですか、それじゃあ納屋の前に台を置いて、その上に梯子を横にして、そこへ仰むけになつてもらいましょう」

何から何まで計画通りことを運ぼうとするらしい。トタン張りの納屋の前に、テーブルと空いた木箱を持ち出して来て、位置をはかると、それに梯子を横にしてのせる。

私の手招きでのろのろ歩いて来た真弓は、言われる俚に梯子の上に仰臥した。背骨や腰が、梯子の昇り木にふれて痛いのか、しばらく体を動かしてもじもじしていたが、やっと

姿勢を整のえて目をつむった。さながら狙上の鯉であった。小柄な女体が、彼虐の手を静かに待っていた。彼の手にもう一本同じロープが握られていた。私がやるまでもなく彼はせつせと、日頃頭に描いていたであろう緊縛の作業にとりかかっていた。陽はかげり、遠雷が遠くの空で、おどろおどろと響き轟いてゐる。真弓の体を梯子もろとも縛りつけ、腹部をくびれるほどに強くしめつけていた。縄を継ぎ足すと、両脚の膝頭のあたりで結わいつけていた。僅かの腋毛をあからさまにみせて、真弓は両手を首のうしろで組んで、うなじのじかに昇り木にあたるかたさを避けていた。その両手を彼はやんわりと抜きとると梯子の背面で後手に縛り終えた。

手持不沙汰の私は、そつと露出した腰のあたりにバスタオルをかけてやり、緊縛中を何枚かカメラに納めた。

「さあ、一度立ててみましょう。私は頭の方を持ちますから、脚の方をそつと地面におろして下さい」

「ハイハイ」

もうこうなればいわれる通りするより仕方あるまい。私は何となく助手の様な立場になつてしまった。主客は完全に転倒している。

立てられて、真弓の全身は、ぐっと十センチばかり下つて、両脚のかがとは梯子の昇り木にかかつて、うまく体重をささえた。縄目がきしむのか、チラッと眉をひそめたが、苦痛の声もなく案外淡々としていた。はなれの屋根に立て掛けて、この梯子縛りを数枚とる。むき出された肉体は、かげった陽の下で、くろぐろと鮮烈に私の眼を射た。

「やりますか——」

「えッ、何を？」

「逆さに立てるんですよ」

「この縛り方で、体がもちますかね」

「とも思いますが、以前試しにやってみましたが大丈夫でした」

「それならゆけるでしょう」

この日のために、未亡人に試したという縛り方に、一抹の危惧もないではなかったが、一任することにした。

そろそろと屋根から梯子を外し、かなり力のかかった梯子の、私は真弓の頭部の方を受け持つ。N氏は脚部の方からじりじりと力を籠めて押し上げてゆき、逆さに直立させるとやつと屋根に、立て掛けることに成功した。先程とは逆に真弓の全身はぐぐつとずり下り重量の支えを失なった全裸に、縄がきゅつと

激しく喰い込んでいった。

必死に歯を喰い縛ってこらえているが、苦悶の吐く息が、はげしく私の耳朵を撃った。

梯子利用の逆さはりつけである。一人ではなし得ないし、又ホテルなどの利用では、到底不可能なプレイでもあった。私はもう真弓にいたわりの言葉をかけなかった。その暇もなく、私は縦横無尽に走り廻り、このポーズをカメラに納めていた。疼くような熱い思いがかけ巡り、数枚むちゅうでシャッターをきっていた。

N氏とても、夢にまで見た願望を叶えた嬉しさに、カメラとる手も上の空で、真弓の顔をヒタと凝視しつづけている。

頭はガックリと垂れて顎が出ていた。胸の隆起は、ひとしお息苦しげに弾み、喘ぎ呻く声は高まりつつあった。無表情だった真弓の眉に、このプレイで始めて苦悶の縦じわが迫り、声ならぬ声が、絶え間なく口について流れた。くびれた腹がはげしく浪打ち、その嗜虐の極地に、私もN氏も、汗を拭くのも忘れて、ただ、うっとりで見守るだけであった。

あっと、止めようとしたが、既におそかった。納屋の前に置いてあった、汲みおきの半ば湯と化した温水をたたえたポリバケツをと

り上げたと見るや、N氏はいきなり、真弓の胸から顔をめがけて、ざぶりとぶっかけたのであった。

「あッ、ぐぐぐ……く、くるしい、助けてえオジサン」

真弓は存分に水をのみ込んで、絶叫した。



鼻孔に逆流する温水、ぬれそぼる息苦しさに、真弓ははげしくむせ返り、むせた苦悶がむせび泣きになった。

水を浴びて虚脱したように呆然と突っ立つN氏を督励すると、あわただしく梯子を平面に戻し、台上に横たえる。涙のしずくか、はた又水のしずくか。やや蒼ざめて表情をぬれそぼらせて、真弓は歯を喰い縛ってこの極刑に耐えぬいているようであった。解き放たれても、暫くは、梯子の上でぐったりと横たわっている真弓の可憐な姿であった。

何が起るか分らない——それを人はハプニングと呼ぶ。

今日のプレイは、私の思惑とはおよそかけ離れた、ハプニングプレイに終始してしまった。まるで私のハントの生ぬるさを嘲笑うような、N氏の思いも掛けぬプレイであった。

納屋の釘に薄汚れてぶら下っていた豆絞りの手拭いで流れる汗をやっとふき乍ら、ポツリとN氏はいった。

「子供に買ってやったブランコが、使わずにその俣納屋においてあるのですが、あのブランコの縄を外して、鉄枠の縄の環に、逆さに足を開いて吊るとどうなるでしょうね」

「面白いアイデアですが……」

突飛なアイデアで、食指は動くが、果して真弓がそれを許容するかどうか。私の返事は考え切らざるを得ない。

「足首を縛った縄を、少し長いめにして、鉄枠の環に吊り下げて、揺ると人間ブランコで面白いと思うのですがね。揺すっておいでうしろで針をもって構えていると、体が大きく揺れ動く度、針がチクチクお尻をさして、それによって起る人体の変化を確かめたいなんて考えたりしてるんですよ」

彼は段々と、怖いことを言い出してくる。梯子上でぐったりした真弓は、元の無表情にかえって、まるで他人事のようにN氏の悪魔めいた言葉をきいていた。

やってみたい慾望と、真弓をそっといたわってやりたい、フェミニストめいた気持とが複雑に交錯して、決断がつかねて私の返事は、とまどっていた。

業を煮やした様に、行動にうつるべく、彼は納屋の中へブランコの鉄枠をとり出しに入っていた。

その時——。コトリと母屋の方で音がして私の聴覚はハッと聞き耳をたてる。確かに誰かいる様な人の気配を感じる。さりげなく気付かぬ振りをしてその方に視線をやると、音

を殺した足音らしいものが遠のいていった。

ガラガラと激しい音を立てて、N氏が鉄枠を引摺り出してくる。その耳許に口を寄せ、

「誰かいますよ、おもやの方に——」

「えッ、本当ですか」

「確かに覗いているような人の気配がしましたよ」

「そりゃ大変だ、みてきましょう」

「私もゆきますよ」

真弓も私達の会話で、ハッとした様に胸を両手で抱えたと、あわてて梯子から降りた。

緊縛された、ハレンチな逆立ちポーズを、誰かに見られたという羞恥が、若い娘の心を重く閉ざしたかに見えた。

「何か彼女にさせてやるものありませんか」
とも角、バスタオルを投げかけて、彼に、

きいた。

「女物の、寝巻代りの浴衣が、かかっているはずですよ」

私達は急ぎ足で、おもやに引返した。

N氏は衣紋かけの、細かい柄の浴衣を素早く外すと、真弓の肩にきせかけ、土間を横切って、足早やに表門の方へ小走りに行く。

表の方で声がする。

「何だお前か、どうして帰ってきた。子供は

どうしたんだ」

プレイを中断された腹立たしさで、N氏の声は大きく、荒々しく尖っていた。弁解めいた小さい女の声が微かに聞こえるが、それは判っきりと聞きとれなかった。例の飼育された未亡人に違いなかった。

「どうやら、例のシャシンの女の人が覗いていたらしい」

「まあ、いやだわ。見たいなら見たいで、堂々と出てくればいいのに」

「真弓とあの女性との年代の違いだよ。追いつけられなかったものの、やはり気になったらしい。何しろN氏のプレイの対象は過去あの人だけだったからね。N氏の性格が分っていても、そこは女心、どんなことをしているのか気をもめたのだろう」

「もう帰りましょうか」

「いや、もう一寸待ってみよう。何だか面白くなりそうだ。それにあの凄いプレイの御本人の顔もみたいしさ」

「そうね、私も見てみたい気もするわ」

真弓は悪戯っぽく笑った。去来するのは、先刻見たあのフォートの、プレイ内容のすさまじさであったのかも知れない。真弓をしめつけた縄目は、まだくっきりと彼女の肌を紐状

に染め上げていた。

「梯子での逆さ縛りの気分どうだった」

「気が遠くなりそう。水をぶっかけられた時には、これから先どうされるのかと怖かったわ。オジサマなら、あんなザンコクなこと出来ないでしょう。隣分ひどいオヤジだわ、いうことがひどいじゃない。私を逆吊りにしてブランコ代りにするんだって——。針でプスプスとお尻を突かれちゃ、たまったものじゃないわ。私はゼツタイいやよ、そんなこと——。何か考えることが、常人とは違うのね。まるで化物屋敷みたい」

そのくせ、真弓の瞳はキラキラと輝きわたり、何が起るか分らないというハプニングな興味で、妖しくねっとり濡れ始めていた。雷音は迫りつつあった。辺りはすっかり暗くなり、無気味な夕立前の静けさであった。

× × ×

《附 録》

「ハプニングなプレイ」

N 未亡人の巻

(佐々木真弓のカメラ・ハントは、ここでしばらくカットします。まるで突然変異のよう

に、いきなり思いもかけず持ち上った、N氏と未亡人との、ハプニングプレイ的一幕に、私の心はその方に向かざるを得なくなってしまう。一つの独立したカメラ・ハントとしては短か過ぎるので、ここに付録として挿入します)

その女性の名は知らない。N氏も言わないから、N未亡人と呼ぶより仕方あるまい。

今、N氏は荒れに荒れて、その人の襟がみを引っ掴み、ズルズルと引きずるようにして私達の前に現われた。

「辻村さん、本当に申し訳ない。矢張り仰有るように覗いていたんですよ。さあ、この無礼を皆さんの前で謝りなさい」

どんと押し倒すと、力余ってか、ヨロヨロとよろけた彼女は、その俣縁側から中庭へ転げ落ちてしまった。ワンピースの俣打伏して咄嗟には返事もない。

「まあまあ、どうしたというのです」
なだめるように彼の肩を押えて坐らせる。

「いえね、子供だけプールに放っておいて、そっと帰って来たのです。何でも子供の友達やその母親がいて、一緒に泳ぐというものだから戻ったのです。どうも折角の興味を妨げて、何といたらいいか——」

「この方に留守居の責任があるのですから、帰って来られて当然でしょう」

「でも折角のプレイが中断されて、気分が壊れたのは取り返せませんからね」

「私ならいいですよ。よかったら続けますよ」

「でも、この人がどうかな」

N氏は目顔で真弓をみた。

「私は、もうイヤよ」

いやに判っきりいつてのける。

「まあ、そういわないで、もう少しつき合ってくれよ」

N氏の手前、そういわざるを得ない。

「お前がヘンに覗いたりするからだぞ。それ見ろ」

彼は吐き出すように、打ち伏している女性に言葉を投げつけた。

「承知出来んッ」

怒りの形相から、N氏は、やや顔面蒼白になつていた。

「どうなさるんです」

「みていて下さい。ああ、貴女も一緒にとっくりと見ていて下さいよ」

やおら立ち上ると中庭に降り立ち、まるで彼女を蹴飛ばすような勢いで、納屋に入って

いったかと思うと、一抱えの荒縄をとり出してきた。ハッとして未亡人は、パッと起き上ると、おもやの方へ逃がれようとした。

「待てエーッ」

一声叱咤が飛ぶと、彼女の髪を背後から驚き掴みにして、ずるずると中庭の中央へ引摺ってゆく。真弓は私の体に縋って、息をつめてこの成行を怖そうに見守っていた。

N氏は女を無理矢理振じ伏せると、いきなり薄手のワンピースをビリビリと引裂いてしまった。

「ああ、もうやめて下さい」

私は叫んだ、心とはウラハラに――。

「絶対にとめないで下さい」

敵としてN氏は言うやいなや、つづいてシユミーズも強い力で引きちぎっていった。

女性の胸にブラジャーはなく、むき出しの下は、じかに肌がのぞけた。

羞恥と屈辱に、ハアハア喘いで、必死に遁れようとする未亡人を、そうはさせじと押し倒し、数発の平手打ちが女の頬で炸裂した。

馬乗りになると荒縄で、手当り次第の縛り方で、女体に縄をしめつけていった。もう無茶苦茶としかい様の無い、乱斗の場であった。



「呀ッ、何をなさるんです。やめてエ、皆さんの前でこんなことやめて。ああ、やめて」必死にもがく未亡人を押えつけ、N氏はとうとう、上半身を雁字搦目に縛り上げてしまった。

「いくらなんでも、いやッ、いやですわ」「うるさいッ」

彼は豆絞りの手拭で、きつく彼女の口に猿轡をかませた。あがらい様もなく、彼女は私達から顔をそむけて、くくッと泣いているようであった。N氏の手がパンティに伸び、未亡人の裸身を蔽う、最後の一枚も無残に剥いでしまった。海老のようにかがみ込んで、羞恥にくるまる彼女の両脚を押えつけ、ささくれだった荒縄が、双丘の谷間に這い、太腿へと伸びていった。

土埃と汗と縄くずにまみれて、未亡人の白い裸身は、どす黒く汚れていった。

N氏はセメントばりの地面に痛々しく全裸でころがる未亡人の顔を、よごれたサンダルで踏みじり、果てははづみをつけて蹴転がしていった。

真弓が顔を蔽うと、俄破と私に縋りつく。

刹那、思いもかけず、私の肉体が激しい勢いで、反射神経を活発に働かせ、大脳が怒張を私に反応させた。プレイ数ある中で、こうした現象は珍らしいことであった。ハプニングなプレイが、つくられたハントより如何にたまなましい実感を醸し出すかを、私は歴々とこの時、我が身で感じたのである。

骨のきしみ、そして、くぐもる声なき絶叫――肉のあがき。正にそれは嗜虐に猛り狂う

陰獣のすさまじい血を呼ぶ相剋であった。

私のハント意識は、いつしか無意識のうちに働らいていた。カメラを構えると、この残酷図絵に数枚ピントを合せていたのである。

猛る陰獣は、荒縄を二三本束ねると、それを鞭代りにして、女の裸身をとこる嫌わず、力任せにバシリバシリと打ち据えていた。

N氏の眼中には既に私も真弓もなく、心を占めるのは、狂奔するSの血の猛るに任せてひたぶるに愛する未亡人を責めさいなむ、その一事に全神経を集中していたのである。

精悍な根性をむき出しにした彼は休む間もなく責め続けた。パツと縄鞭をなげ出すや、未亡人の両脚を抱え込んでだし上げ、大きく振り廻して、地面に激しく投げ出していた。私の方を向いてニヤリと笑ったその顔は、ぞっとする凄惨さであった。

土間から農作用の長いビニールホースを引っ張ってくると、ノズルのつけた筒先を彼女に向けた。水道に直結してあったホースの先端から、いきなり水は一条の線となって激しく噴き出し彼女の体に突きささっていった。バシバシ、バシバシと叩きつけるような水勢のはげしさに、みるみる女体は紅ないに染まり始め、のけぞり、悶絶寸前のくぐもれる呻

きの底に、その時私は、彼女の快樂の声をきき、のたうち廻る裸身に溢れる被虐の歓びをその全身から確かに感じとったのである。

雷鳴が一きわたかく近く轟き、と共に、ポツリ、ポツリと大粒の雨が落ち始めたかと思えるや、忽ちにして沛然と、車軸を流すような雷雨が二人に襲いかかり、煙る雨足の中で、俄破とうずくまって、愛人を抱くN氏の姿を雨すだれの中から、私は強い感銘と共にこの眼にヒタと灼きつけたのである。

× × ×

「本当はいい人なんだわ、きっと……」

N氏から佐々木真弓に渡された、プレイの報酬が、予想外に多かったのか、彼女は気嫌よかった。細かい残りの雨が、車のフロントガラスをぬらしていた。

「でも、あの雷のとどろく中で、女の人を責めさいなむ時の、あの方の顔付ったらなかったわ。あれが本当のサジストなのね。考えてみれば、二度と見られない、素晴らしいハプニングなプレイだったわ」

狭い車の中。肩すれすれによせて、真弓はまだ先刻の、あのすさまじいプレイに酔っていた。

N氏と未亡人の、強烈きわまるプレイは、

最後の吐け口を求めて、今も尚つづいているかも知れなかった。

ただただ恐れをなして、私と真弓が辞去する時、未亡人は全身ずぶ濡れに濡れそぼれた尽、土間の黒光りする太い梁に高々と両手を吊り下げられて、うなだれていたのだった。

N氏は髪を掴んで女の顔を起して無情な姿を、まざまざと私に見せつけてくれた。蒼白の頬に、微かに泥がこびりつき、諦観の眼はかたく閉じられて、面長の美しい被虐にたえた素顔は、年令を超越して、私に恋情を起させた。その女の顔はしっかりと私の臉に烙印された。被虐を甘愛し、悦虐におきかえる美しさが溢れていた。

彼女を吊り下げておいた尽、彼は私達を車まで傘をさしかけて、ぬれたパンツ一枚で見送りに来てくれた。

彼女が助手席に乗った時、彼はそっと私の手を引く。何事かと体をよせると、ニヤリと会心の笑みを浮かべて、小声で囁やくようにいった。

「私達のプレイお気に召しましたか。唯一寸あれの帰りが早くて、ブランコが出来ず残念でした」

「では予定の計画、これも？」

「精一杯のささやかなサービスのつもりでしてね。あれにはあらかじめ言い含めてあったのです」

「迫真の演技でしたよ」

「いや、演技じゃありません。出たところ勝負の私の責め方でした。あの子には内緒にしておいて下さいよ。その方が効果的でしょうかね」

「まだ続けるのでしょうか」

「もっと喜ばせてやります」

「見たいな」

「あの子が待っていますよ」

まるで、一から十まで、すっかりお膳立されたスケジュールに、私はまんまと乗ってしまった恰好だが、N氏の夫婦プレイの一幕の御協力で後味はすぐよかった。何もかも承

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞 金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要 項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。
一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に發表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。
一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。
一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに發表の写真撮影し、コンテストの結果は追つて御通知いたします。
一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。
一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に發表します。

知の上でみていたら、或いは私の体内に、あれほどの異常は認めなかったかも知れないからであった。

思えばN氏の心憎い許りの演出であった。

恐らく真弓は計算された演出とは、見抜けるはずもあるまい。いや、彼に真実をきかさかったら、この私すら、すっかり本気で信じこんでいた事だろう。隠れた名プレイヤーが、ここにも一人いた。役者は私より一枚上のようである。

いつしか雨は上っていた。微かな陽射しが雲間から、さんさんと洩れて来た。白昼夢のような昼下りのひととき――。

私の車は阪奈道路に入ろうとしていた。生駒のゲートを入れれば間もなくそこに、連れ込みのモーターがヒソとある。

今日のプレイの吐け口をそこで求めないことには、私のモヤモヤの持ってゆき場所がなかった。

「行こうか――。虐めてやる」

「いいわ。ダメだったらオジサマ、今度こそ承知しないわよ」

うるんだ真弓の瞳が、一入妖しく光って、濡れてシットリと私の心に絡みついていた。

濡れにぞ濡れし……

G R クラブ



芳野

眉美

新聞や雑誌の切抜きを整理していたら、
「変態性欲者の秘密集会」

という大見出しの新聞がでてきた。

「GRクラブの実体」

とあり、新聞は東京毎夕新聞で、昭和三十
二年九月十七日とあるから、かなり古い。

「本紙記者が化けこむ」

とこれまた見出しもノンフィクションであ

る。記事を紹介すると。

△会員組織による変態性欲者ばかりの秘密集
会が、東京の一かくで堂々と行われていると
いう驚くべき事実がある。東京工芸美術研究
会岡本敬(三)と称する男が主催する「GR
クラブ」(中野区大和町三七二)というのが
それで岡本はこれも変態性欲の妻ひろ子(三七)
とコンビで、秘密組織で集ってくる変態男女

会員に「変態桃色遊戯」「会員同士のエロ写
真撮影」などあらゆる変態趣味を、別棟に設
けた特別秘密室で行わせている。以下は本紙
記者が会員に化けて探訪した「変態グループ
GRクラブ」の実体である。▽
ということ、次の見出しは、
「極端なサディとマゾ——密室で展開する狂
態の数々」

(原文のママ、傍点は芳野)

△記者は十四日より八時半ごろ中野区大和町
のGRクラブに着いた。折から中野八幡の九
百年祭で、大和町一帯は祭りの人出でにぎわ
いこの一かくで変態グループの秘密集会があ
るといのが、ピンとこなかった。玄関で呼
び出しのブザーを押すと、岡本の妻ひろ子が
あらわれ「いらっしやいませ」とていねいに
挨拶をした。しかし見なれない記者の顔に、
一瞬、警戒の色をみせ「会員券をお持ちです
か」と鋭く聞いた。

記者が会員券を出すと「誰からの紹介です
か」という、ためらっていると「小島さんで
すか」というので「そうです」とデタラメに
答えた。女は「パパさん」と奥の間の岡本を
呼び「小島さんの紹介ですって」といって記
者を紹介し、会費二百円を受取るとやっと会

合室に案内してくれた。

そこは八畳ぐらいの板張りの間で数人の若い男が椅子に腰かけて、ベランダで演奏している下手なハワイアン音楽を聞いていた。男たちの顔にはどれもこれも変態性欲者特有の陰うつな影がみられ、室内は不健康な空気でみなぎっている感じだ。

マダムひろ子は初対面の記者になれなれしく卑わいな話をしかけ、新入会員にどういう変態趣味があるのか探り出そうとする。そのうちに玄関のブザーが鳴って、四人の男と二人の若い女がドヤドヤ合室に入ってきた。いずれもGRクラブの変態会員だ。ここで同クラブの会員はいったいどういうことをやるのか聞いてみた。

会員には正会員と特別会員の区別があつて正会員は既成会員の紹介で入会費三百円と名簿代三百円計六百円納めれば入会できる。また特別会員は特別会費として五千円納入すればよい仕組みになっているが、強度の変態男女はほとんど特別会員になっている。

しかも同クラブでは細則にもあるように男女の正常な肉体交渉は絶対に禁じられていて会員は規則によって密室で変態遊戯専門にふけるわけだ。このほか、この合室が、日曜

をのぞく毎日午後一時からよる十時まで会員に開放され会員がここで車座になって「座談会」を開くことになっている。

しかも話の内容は苦笑するような罪のないワイ談ではなく、極端なサディズム、マゾヒズムなどの体験談や告白である。

また一カ月二百円の購読料でガリ版刷りのエロ機関紙が会員に配布されきわどい場面の研究をするという常人では考えられないことが同クラブで行われているのだ。

会員同士の痴態を撮影し、蒐集品として保存することは特別会員だけに許されるが、写真の現象、焼付、引伸は、秘密保持からすべて同クラブで行ない、しかもネガフィルムは同クラブが一括して保管することになっている——と、この時マダムひろ子が「シークレットはどうしますか」といって聞きにきた。いうまでもなく秘密会合だ。

はじめてで勝手がわからないからどうすればいいのか、ときくと、「正会員に申込みばいいの」という。そこで別室にいる岡本のところに行く。「住所と職業を偽らないでいて下さい」となかなか要心深い。その上、いろいろ符号を使って変態趣味を聞かれたのは、ちょっと困った。問いつめられ「見る方

がいいですな」と答えると「あなたはSSですね、それなら露出願望の女性がいいでしょう」といった具合だ。

ともかく正会員の申し込みをして合室に戻るとさっきの男女の姿は見えなかった。そういえば、「大久保」と名乗る使用人らしい男の姿もみえない。おそらく別棟の密室に行つたものと思われる。

十時すぎるころにはベランダのバンドも引きあげ、いよいよマダムひろ子を中心とした「座談会」が開かれた。合室の照明は消され、うす暗い室内で車座になって、世にも奇怪な変態性欲者の告白が行われた。▽

長々と引用したが、これが全文である。記者は、密室で展開された狂態の数々を見ていない。そこまで書いていない。

見ていないのがあたりまえなのである。新聞にはGRクラブの玄関と間どりがのっているが、別棟の密室などないのである。

記者は下手くそな素人のハワイアンの演奏にあきれたのか、何もおこらないので拍子抜けしたのか、所在無げにベランダでタバコを吸っていた。一人ではない。

私もそこにいたから知っているのである。新聞に、パーティ券と入会申込書も紹介さ

れている。パーティ券は、

「一九五七年GRクラブ開催記念

ダンスパーティ

親しき友と星の集い

九月十四日土曜日六時～十時

GRクラブ 二百円」

とあり、東京毎夕新聞の記者が、誰からパーティ券を手に入れたのかは知らない。

また、GRクラブの岡本夫妻が、どのような目的で、このパーティを開いたのかも私は知らない。パーティ券にあるように、開催記念と単純に受取っているものなのだろう。

記者をがっかりさせて悪いが、来客は岡本夫妻の友人が多かったように思う。私の知っている限りでは、GRクラブの変態会員と記事にある若い女はいなかった。

要するに、記者が期待した秘密集会はなかったのである。単なるありふれたダンスパーティで、それも退屈きわまりない、パーティとは名ばかりのわけのわからぬ会であった。

バンドが引きあげてから、事実、座談会のようなものがあつた。が、この席に記者はいない。あきれて帰ってしまった。座談会も他愛のないもので、記憶していない。

この記事を書くのに、探訪した記者は、四

苦八苦したのに違いない。どうせウソを書くなら、変態性欲者の痴態とやらをドギツク書けばよかったのである。SMを知らない記者だったのか、空想力のとぼしい男だったのかこんな内容の無い記事しか書けないとは、記者失格の見本のような男だと思う。

ともあれ、マダムひろ子の顔写真までをつけているのだから、岡本夫妻もあわてたことだろう。

岡本夫妻を私が知ったのは、奇クの読者通信である。連絡がとれたのだから、住所がのっていたのだろう。

岡本夫妻を中心にした奇ク愛読者の集りがあり、そこに出席したのが初対面であった。

中野区大和町ではない。忘れた。

出席者は男ばかりで、女はいない。三十二年五月二十六日の日曜日で、GRクラブとしては第二回日の集会だという。私の精神科の主治医であるクレイジードクターも出席している。会長は中富啓子、理事岡本敬、幹事悦

美、とあるが、会長には会ったことがない。

悦美とあるのが岡本夫人ひろ子である。岡本さんの肩書は、齒科医学士となっている。

GRクラブのチャチな会員誌に、佐々木ツトム、山田正男、佐渡麻三、皆川のお子、河

村慶子諸氏の名がみえる。奇クで活躍された方々である。皆川のお子さんには、一度だけお会いした。

六月五日発行の第三号に、

「第二回集会に出席して——アウトサイダーとしての諸問題」

という、私の、わけのわからない投稿があったから転載する。

ハウイルスソンの「アウトサイダー」を拝借して少々こじつけ様と思う。

SなりMなりの傾向を持ち、自分ではノーマルだと思っている人は、アウトサイダーに外ならない。これらの人を、アブノーマルだと呼ぶことは不適當だ。唯、第三者がアブだといっているのにすぎない。

だが、自分の性傾向にコンプレックスを持ち、ノーマルになろうと悩んでいる人は、アウトサイダー以前の問題であり、ここで根本問題を提出する対象にはならない。悩んで、自分の性傾向が簡単に捨てられるぐらいなら問題外だ。アウトサイダーとして、自分の性傾向を楽しむ人だけに限られる。

アウトサイダーの問題は、自由の問題なのだ。自由といっても、いわゆる世間で使われる自由ではない。椎名麟三の自由は、愛、だ

といわれている様に、一人一人が絶えず感じ求めている、「あるもの」に対する仮称なのだ。その人その人の性傾向に応じた生活、即ち、アウトサイダーとしての生活があり、アウトサイダーとしての自由があるはずだ。

問題を集会に出席した二人のアウトサイダーを例にとってしばってみよう。

S氏は、夫人を教育したが失敗し、家庭は家庭として、プレイだけのパートナーを求めている。

M氏は、夫人を離婚し、ある程度の演出の出来るパートナーと交際している。

両氏の共通した点は、教育したり演出したりする不満である。プレイは、あくまで対等でなければならぬ。それではなければ興味は半減する。

集会に出席して、典型的なアウトサイダーの夫婦を知ったことはうれしいことである。結婚してからお互いの性傾向を知ったというのだが、夫はSであり、妻はMであった。あてられに出席したようなものである。

会員の中にも、たとえばそれが教育されたSであり、Mであっても、夫婦生活を楽しんでいる人がいると思う。SM両氏の場合は失敗した例である。夫婦生活はむづかしい。

社会的な地位や家庭のあるインサイダーがその性傾向に於て、アウトサイダーにならないければならないが故に、そこに問題があるのだ。

S氏は夫人の教育に失敗しても、それは愛情の問題ではないといい、M氏は結局自分が大切だから、ありきたりの結婚は出来ないといった。S氏よりM氏の方が自己が強いように思われる。パートナーがみつければ、アウトサイダーの問題は自己の問題となり、結婚生活に入る可能性があるわけだ。

自己を、如何に強く表現するかしないかでその生活、求める自由も違ってくる。シスターボーイやゲイボーイを考えてみても良い。空想的アウトサイダーより、少しはそれに近づいているといっても良いだろう。

ここでSM両氏の生活をとかくいうつもりはない。S氏なりの生活と、M氏なりの生活がある。それで良いのだ。愛情の問題はアウトサイダー以前の問題だ。

バルビュスの「地獄」や、カミュの「異邦人」カフカの「城」「裁判」の主人公の持つ雰囲気が好きで、アウトサイダーとして、少しでもその様な空気に触れてみたいと思ひ集会で種々な話を聞きながら、現在考えている

ことを簡単にまとめてみた。

わかりきったことだが、あくまで根本的な問題で、パートナーをみつめる具体案ではない。プレイだけのパートナーを求めるにしても問題が続出すると思う。

アウトサイダーとして行動するならば、いわゆる従来の道徳や常識には、あてはまらない。インサイダーとアウトサイダーの根本的な考え方の差なのだ。区別して考え、行動に移るべきである。

自己の性傾向に従って、自己を強く表現し行動に移すことはむづかしい。しかし、行動に移してこそ、アウトサイダーとしての生活があり、そこに自由があるのだ。

クラブ活動の重大な意味がここにある。V三十二年頃の私は、かなり理屈っぽい。

S氏やM氏が集会に出席した誰にあたるのか忘れてしまった。とにかく、GRクラブに私も入っていたことがある、という証拠に提出しておくことにした。

三十六年三月号の奇ク「読者の声と通信」に、岡本敬氏の「金色マニアの願い」というのがある。

△私は本来、S及びコプロ能動にあり、それらを適当に昇華処理して只今のところ、アブ

の妖しい世界に満足しております。

私の妻がMであり、私の唯一のフェティッシュが金色マニアであります。本邦で金色マニアは小生と妻しかないのではないかと思っています。

コプロの一部としては糞尿の類ではなく、金歯にたまった歯垢なり、口臭なりにエキサイトします。

写真なら、私には拘束感のある皮のコルセットや金製の鍔、金鎖類による束縛の方がより近代的なセンスを認めます。V

彼の性癖は右の通りである。そして、同時にコルセットをつけた悦美夫人の妖艶な写真が掲載されている。

悦美夫人の告白は、三十八年八月号の奇クに載っている。「黄金マニア」西条悦美がそれである。

△私は、黄金の魅力がたまらない。あの山吹色の色彩と、あの美しい光沢、それは私の胸をふるわす程の魅力があるのです。

又同時に私は腹部に対する被虐を楽しんでいるのです。これはマゾ分野でしょうか。それも金色の金属製のベルトでぎゅうぎゅうと締めつけられたら、尚さら私は被虐の快楽に酔う事でしょう。

私の今愛用しておりますのは、特に注文して作ったオートバイ用のものと同様の物で、それに一面に金色に着色してもらい金具を付けてその飾りとしておりますが、その緊縛感とはとてもたまりません。

私は上下に全部、金歯¹を嵌めております。口紅の色はパーマネントローズを好み、又時としてはダークを用い然も極端に大きく画きます。歯の金冠がきらきらと輝き真紅の唇との奇怪なコントラストをかもし出します。

次にやや大きめの環と鎖での金色の髪かざりをし、首には太い鎖状の首飾²をつけ、変型の大きな金の耳環³をつけます。

それに常に取ったことのない金色の腕環⁴で幅五センチのアールの大きなものを、二の腕に肉も喰こむ程強くしめて止めてあります。かなりの重さであり、始めは腕を伸縮するたびに、しびれる程でしたが、段々と肉に喰いこみ、なれるに従って、さして苦痛でもなくなりましたが、痛い事は変わりありません。なにしろ十四金ですので、手がだるいような重さを感じます。又そのだるさも魅力の一つなのです。

手首には、幅三ミリ程の金の腕環⁵を片方に二つ乃至三つ嵌めます。これも両手首です。

指には人差指から小指まで一センチ以上の幅のカマボコ型指環⁶を二つずつ両手に嵌め、爪には金色マニキュアをし、爪は長くしてあります。

足の爪も同様金色ペデキュアをし、足環⁷として腕環を代用し、これなるべく幅の広い物ばかりを皮膚も見えぬ程に、然も肌に喰入るように嵌めます。

こうして全身をことごとく金色一色でギラギラと飾り立て、全裸で鏡に向うのです。V私のもともと六枚の悦美夫人の全裸の写真がある。全裸といっても、かくすべきところはかくしてあるから、Y写真の類ではない。ワイセツ文書図画頒布罪にはならない。

岡本夫妻からいただいたものである。

金色の品の数々をつけた（告白文に①⑦まで数字をつけておいた）悦美夫人の悩ましく妖しいヌードである。

告白文の続き△今一つの私の性癖として、コプロ趣味的にわざと金歯の沢山入った歯を磨かずに、金歯が汚くくもり、金歯の上部に歯垢が沢山たまり、金歯特有の臭い息にしてみたりします。

嫌やがる少年を抱き、此の臭い口で無理に接吻したら、又此の金歯を年下の少年に歯垢

の掃除や金歯磨をさせたりしたら、との夢のようなことを考えております。V

コプロといっても、悦美夫人のは金歯の歯垢であり、神酒拝受とは違う。

従って、私は、悦美夫人から承諾は得たがとうとう神酒を拝受することは、できなかった。

悦美夫人に、その趣味はないように思う。

東京毎夕新聞の記者にのりこまれた、中野のクラブが新設されたときの会則を紹介すると(三十二年八月の号外より)

1、本会はGRクラブと称し、特別会員、正会員にて運営する。

2、本会はアブ同志の忌憚なき会合と心のつながりを計り、以て幸福なる生活を築く事を目的とする。

3、本会目的に賛同して払込みたる納付金一切は、理由の如何を問わず返金しない。

4、会員はクラブを訪問して会の資料の利用やクラブの会合室に入る事は自由とする。午後一時より午後十時まで。毎週月曜休日。

5、直接プレイ、アブフォト撮影、クラブの分譲品は、特別会員のみとする。場所は必ず当クラブとする。

6、会員のクラブに対する写真のDPは、実費を以て行う。

7、クラブに於て撮影したネガは、クラブにて保管する。

8、会友の文通の転送は全会員に対して行う。

9、会員には会員証を交付する。会員証には写真を添付する。会員はクラブ訪問の時は必ず会員証を明示する。

10、左の場合は、会員の資格を失う。

(イ) 直接又は間接に他会員に迷惑を及ぼした場合。

(ロ) 本会の内容の秘密を他言した場合。

(ハ) 機関誌の受取連絡をせぬ場合。

(ニ) 虚偽又は趣旨に反する行為のあった場合。

正会員 機関誌代二百円(毎月)

維持費 二百円(毎月)

名簿代 三百円(一部)

計七百元也

特別会員 機関誌代二百円(毎月)

維持費 二百円(毎月)

名簿代 無料

申込金一口 五千元

計五千四百円

この号外には、クラブの見取図と入会申込書がのっている。

三十二年といえば、まだ赤線や青線の灯は消えていない。女と寝る値段が、十五分で三百円、五百円、一時間で八百円、千円の頃である。金の価値があった。

その頃、新宿の花園町の青線に、好きな子がいて通っていたから、おぼえているのである。素肌を支那服を着ている子で、下着を着ていなかったのは商売繁盛のせいなのだろうが、支那服一枚というのに魅せられて、ふらふらと会いにいったものである。支那服のFがあるらしく、支那服には今でも弱いのである。十二時頃いくと(深夜の)たいてい十人目ぐらいだったから、彼女も足を開くのが重労働だったに違いない。壁に、寝た男の値段が書いてあって、何人目だかすぐわかった。十人寝たって一万円以下、それを四分六でオカアサンとわかるのだから、あまりかせいだほうではない。今のトルコサンにこんな話をしたら、馬鹿々々しくて、首をかしげてしまう。

話がそれたが、入会申込金五千円の価値をこれで判断していただきたい。

東京毎夕新聞にもこの会則は報じられてい

るが、細則も紹介してあるから転載する。

「禁じられた肉体交渉―痴態撮影は三十分が三百円」

という見出しで、（以下プレイの細則）

1、日時場所は本会の指示に従い、相手には男女の別なく謝礼する。

2、プレイは必ず会を通じて行い、個人的にやらないこと。

3、プレイを行うときはおのおの相手に、会備えつけの用紙による誓約書を交換する。

4、プレイには肉体交渉を禁じ、あくまでもプレイだけとする。また危険防止のため必ずクラブ員が立会うことにし、クラブ員の注意には絶対に従うこと。

5、プレイの時間は三十分を一単位とし、また相手の要求を尊重する。

6、プレイの種類はカタログをみて決めること、相手の年令、タイプ、希望と責める体の部分を指定し、また傷の付かぬ程度とかいうように度合いを決めること。

以上である。

会則と細則を全文発表したのは、GRクラブが、SなりMなりの女を持っていて、それをクラブ員に紹介するという、コールガール組織みたいなものでなく、会則の②にあった

ように、アブ同志の親睦交流をはかり、会員同志のプレイを、クラブでおこなわせるところにあった、ということを読みとっていただきたいからである。

岡本夫妻の主旨はすばらしいものだと思うしかし、こんなことで女の会員が集まるとでも思ったのだろうか。

座談会（私は二度経験したことになるが）に出席した人々は、多くは失望したのに違いない。男同志で話をしたって、どの程度の満足を得られるというのだろう。集会にでかけてきた人達は、現実の女を求めてやってきたのである。SMの女と遊びたい欲求にかられて来ているのに、その具体案は、何もなかった。

GRクラブが自然消滅した所以である。

座談会の折、悦美夫人に縛られ責められた人がいた。岡本夫妻と二対一のプレイをしたわけであろう。悦美夫人も、会員の欲求にこたえてくれたわけである。

それならば、悦美夫人をSの女王にしたてて、積極的にプレイをおこなえばよかったのである。肉体交渉さえなければ、売春にはならない。単なる遊びである。

岡本氏の通信や、悦美夫人の告白によると

悦美夫人はMになる。Mなら、Sの会員が喜こんだわけである。

気になったのは、座談会に出席した男が、ほとんどM傾向にあるという事実である。Sの女王をつくらないことには、SMクラブは発展しないのかもしれない。

SMクラブでは、SMの女を数人持ち、会員の男に売るといふ、コールガールの組織でないと存在することはできないように思う。

SMプレイをしようとする、金のある男はそれなりに社会的地位や、守らなければならないプライバシーがあり、封鎖的なものである。

東京毎夕新聞の記者が、すらすらと乗り込んでこられるような、開放的なクラブでは困るのである。

地下にもぐってこそ、SMクラブは生きられる。

岡本夫妻がえがいたのはSMのユートピアであり、すばらしいことだと思う。だが、会則や細則を読んだかぎりでは、あまりにも稚拙すぎたように思われる。

三十二年七月五日発行の会報によると、桜田門の本庁から刑事がGRクラブを訪ねている。

「現在の社会情勢と法的基準を考慮し、当会の活動もなかなかその限界がむづかしい。当局より来訪を受けたが、もっと個人的な会となるように忠告を受けた」

とある。個人的な会、というだけでよくわからないが、あまり派手にやりなさんな、というところだろう。

開放的すぎて、警察の耳にもすぐ入ったのだらうと思う。

九月廿八日発行の機関誌「GR」の第六号に、中野文男氏の掌短篇があるので機関誌の小品の代表の意味で書きうつすと、

△中央線のG駅で十二時に待つように命じられた私は、既に一時間近く待ち呆けを喰わされていた。

ふとしたことからサディスチン朝川夫人の奴隷にされた。強い刺戟を求める中年マダムの、奇抜な遊戯の実験台になって今日が二日目であった。

前回のことなど思い浮かべ恐怖と期待に変な気持ちに支配されたとき、背中を邪慳に小突かれた。夫人だ。挨拶する間もなくぐんぐん先に歩いて行く。切れ長の目、さげすむような唇の歪み、いつもの冷たい横顔だ。あわて、私もあとに従う。

「ああそうそう、輝男に電話をしてやらなければ。お前も用があるから一緒にお入り」

夫人に続いて電話ボックスに入った私は、襟をつかまれ床に押しつけられた。四つ這いになるのだ。形の良いふくらはぎと素足が、私の見えるもののすべてなのだ。

いきなり右足がサンダルから脱けると、私の頭に乗ってじりじり押して来る。重さに耐えかねて、否応なしに夫人の左足にくちづけさせられた。

前回の訓練で夫人の好みを教えられた。奴隷は、夫人の意志を読みとって、精巧な機械の様に勤めなければならない。足の甲から順に、足指、指の股、足の裏と、女主人の汗とほこりを、飼犬は舐めていくのだ。その間にも夫人はダイヤルを回す。

「ああ、もしもし、輝坊？ 私よ、フフ…」

突然、私は頭をけられた。彼女の足が入れかわる。今、私をけた足が、私の目の前に突きつけられて、指をひろげた。引き続き奉仕の命令だ。私は汗をかき、今は本当の犬のようにハアハア息を吐きながら、夫人の足許でうごめくのだった。

「今度避暑に箱根に連れて行ってあげるわ。可愛い私の坊や。なあに？ えっ、誰か一緒

じゃないかって？ お馬鹿さん、やいているの？ フフ……うちの飼犬のエスをつれているのよ」

物音をさせた罰に、女主人の足指で首筋をギョツと抓られた。V（被虐のフィナーレボックスの中で）

機関誌は会の抱負、企画（夢のような）、連絡、会員通信、投稿といったものである。

残念ながら資料が散逸して、GRクラブのことはこの程度しか私は知らない。

GRクラブの一部を、記念に書いたものであり、主催者の岡本敬氏、悦美夫人を誹謗するものではない。

GRクラブに加入していた方で、面白い話を御存知の方は、お知らせ願えれば、幸いである。

最近、岡本御夫妻のうち、どなたか亡くなられたときいた。

ただ、二人の誌友からきいた話がまるで逆なので、岡本氏なのか、悦美夫人なのかよくわからない。

いずれにしても謹んで哀悼の意を表し、この稿を終る。

告白

ゴムに魅せられて

弾 六 夫



付き合い麻雀を断り切れず、昨夜もまた午前様。相変らずの寝起きの悪さで遅刻寸前。

朝食もそこそこに運良く通りかかったタクシーにとび乗って一路会社へ。昨夜来の雨も上り、朝のすがすがしい空気が車窓より入って来て、ようやく頭がハッキリしかけて来た時突然車がグーッと傾いた。急カーブだ。身体がシートにそって傾いた瞬間、黒いパンツが目に入った。あっ、生理バンド。走る車からじっと目を凝らす。内側の部分に黄色のゴムが当たっている。

カーブを曲り切った車は、無情にもグンとスピードを上げて、私の注目物からみるみるはなれてしまった。

全く数秒間の出来事であるが、とっさに見

とったそれは、かなり昔のデザインで、今時めったに見られるものでなく、走る車の中から目についた偶然が、天の恵みのような気がして運の良さに感激した。それから、一体どのような女性が、着用しているのだろう。普通のパンツと見間違ったのではないだろうか、などと会社につく迄同じことを繰り返して考えていた。

会社での仕事の合い間も、そのことが頭から離れず是非もう一度見てみたいと出掛けるチャンスを得ていたのだが、意地の悪いものでそのような時に限って次から次へと来客があり、とうとう夕方五時半が来てしまった。しかもまだ一人、腰の重い客がじっとして動こうとしない。来客を応待している話

の最中でも、頭の中はすでに朝のことで一杯で、ろくに考えもせずに返事している。今頃はあの黒いバンドも、充分に太陽とそよ風に乾燥し、すでに取り込まれているのではないかとという不安をずっと持ち続けている私にとって、もはや辛抱する限界はとっくに過ぎている。

思いきって「あのーすみません。一寸他に仕事があるもので……」と試みてみた。来客はチラと自分の腕時計に目をやり「それでは私も」とようやく腰を上げて呉れたのでほっとする。にわかに愛想よく挨拶もそこそこに送り出すが早いか、だっとの如く車にとびのり今朝の場所に急行する。

車中の私は今朝と一緒に、どのような女性

の持ち物だろうか。あれをはく時、手にかすかに抵抗を感じつつ、ヒヤリとしたゴム特有の感じが全身をつらぬくのには違いない。女性はそのを一番いやな日（ブルーデー）と呼ぶのはどうしてだろうか……などと、とりとめのないことを考え続けていた。

『あった』未だ干していて呉れた。やっぱり見間違いでなかった。黄色のゴムが内側を覆っている黒色のバンドだ。

つい先日とも照れくさいのを押えて家内に聴いてみたことがある……今でも昔の生理バンドを着用している人があるかどうか。家内の返事としては、生理のきつい人はパットが不安で昔のバンドを使っているだろうが、ほとんどの人はパットが多いとのことだった。

その生理バンドを干してある家は、道路に面した二階建てのアパート風で、それぞれ入口に門札があり、独り住いかして女性名の門札が下っている。しかも今朝はなかったピンクのネグリジェも一緒に干してあった。

首が痛くなる程見上げていると、いきなり内側からさっとドアが開き、二十三、四才の女性が出て来た。うろたえる私をうさくさそうな顔付でじっと見つめる。私は何か自分の目的を見透かされた如く錯覚をして、顔

のほてるのを感じ急ぎ退散しなければならなかった。そして、また頭の中で飛躍的想像が湧く。もしかしたら、案外彼女もゴムフェチではないのだろうか？ まだ若い女性で、あのような古くさいゴムの生理バンドを使っているのは、やはり私のようにゴムにとり憑かれているのではないだろうか？ 室の中には窓外に干すことの出来ないゴム下着などがある、気に入った時それらを着用して楽しんでいるのではないだろうか？

そんな勝手なことを考えている内に、またもや引き返して見たくなりUターンしてみたが、今度こそすでに取り込んでしまっ、ピシッと冷たく窓をとざしていた。

もうずっと昔。私が中学に入学した頃の私の家の庭につき出た便所の横に、黄色いゴムのついた一見フンドシの如く見えるものを干してあるのを見付け、見なれぬものとてそっと手にしてみたことがあった。ツンと鬢付けのような匂いが鼻をつく。何に使うのだろう？ といぶかる間もなく、姉から「何をしているの、そんなものを持って」と叱責の聲がとんで来た。

その時初めて、それが女性専用のものと知ったのだが、その時の姉の顔は真赤になり、

口では何かぶつぶつと文句をいっておりながら、恥ずかしさに消え入りたい風情であったことを、今もはっきりと記憶している。

しかし、そのバンドを手にした時の、手のひらに弾力を感じさすゴムの感触は、その後ずっと私を引きつけた。そのような印象から私は、女性が身につけた物に興味を持つようになり、特にゴムに強く惹きつけられるようになったのかも知れない。

当初南国の女性が色とりどりの、あるいは真白な生ゴムビキニ等を着用して、ギラギラ照りつける太陽のもと、澄みきった青い海を自由に泳ぎ廻っているさまを想像し、私も出来ることなら思う存分にゴム布を身にまとい、ゴム、ゴム、ゴムと大声で叫びながら、街の中をかけ廻りたいような想いにかかれたものだった。

あれから十年はたっていると思うが、ゴムファンおなじみの羽二重地にゴムを引いた美しいレインコートが流行したことがある。通勤に、雨の日の散策に、若く美しい女性が、それぞれ色とりどりの美しいゴム引きレインコートを着て、足には真白いゴムブーツ、または折り返しゴムがついたレインシューズを、プルンプルンとふるわせながら颯爽と歩

く姿は、当時の私には正にゴム天国であり、どれだけ雨天を待ち望んだか、筆舌では表現し難いほどだった。あのゴム特有のツルツルとした動き、サラサラというゴムずれの音、洗濯した後の強烈なゴムの匂い。今思い出しでも嬉しい楽しい雨の日であった。しかし今ではその美しいゴム引きレインコートも、ビニールやエナメルコートに押されてめったに見ることが出来ず、わずかに大雨とか台風の時、それも余程運が良ければの話で、たまに見かける程度。しかも余り若い女性は着ていないのが残念だ。

そのようなことからとうとう勇気を出して単独で女性用の羽二重ゴム引きレインコートを買いに行ったものだった。全く今思い出しでも、よく買えたものと汗顔の思いだが、私が男性だけにレインコート専門店で問い合わせたところ、当然男物を出して来た。私が女性用をというと、瞬間何んとも名状し難い表情で女性用を出して来てくれた。おそらくその時の私の表情は、店員さんとは逆に喜悦の顔をしていたことだろう。正に冷汗三斗の想いで、ピンク、白、黒の三着。デザインは腰部にギャザーのあるラウンドカラーのを求めて包み紙からほのかに匂うゴムの匂いを楽しみ

つつ、心を宙に浮かせたものだった。

夢にまで見、渴望した女性用ゴム引きレインコート。十数年過ぎた今日、なお充分私を狂喜させてくれているが、この魅力の不思議は全く信じられないほどのものだ。早速、素肌に着てみた時の感激。サラサラともスルスルともつかぬゴムズレの音を立てながら、そしてひんやりとした感触に戦慄する想いで全身をつらぬかれつつ真深くゴムフードをかぶり、静かに鏡の前に立ってみた。何んと美しい姿と思えたことか。これが永年望んでいたゴムにまとわれた私の姿だ。これがゴムなんだと何度も自分にいつて聴かせ、想いつくまにそつと肩をなでたり胴を締めたり、時のたつのを忘れていた。

しかし、これも一時のみで終日という訳にもいかず、何かみたされぬ想いのまま、もつと日常肌身につけておられ、しかもおかしくないものをというところから、今度はゴム製パンツかゴムサポータを自分でデザイン、手製でと想いついた。

早速、電話帳の広告欄を調べ、ゴム生地を売ってくれそうな店をピックアップした。

「薄いゴム生地、あるでしょうか」

「はい、ございます」

若い女性のはずむ声が返って来た。受話器を通して、かなり忙がしい店と感ぜられる。

「それで小売りをして頂けますか」

「はい、どうぞお越し下さい」

その返事に私は、別にあわてることもないのに急にせきこんでしまつて「今から行きます」と声もうわずついていた。

丁度夕暮時の交通ラッシュ。仲々目的の店につくことが出来ず、ずい分イライラしたもので、店の前に立てた時にはホッとした。

「先き程電話で……」ときり出したものの、私のゴム偏執を相手に知られているはずはないのに、訳もなく額に汗の出る来るのはどうしたことか。

「どのような生地でしょうか。何にお使いになるのでしょうか」

これには一寸返事に困った。店に入っただんに冷汗が出ているのに、いよいよ全身に汗がふき出すように感じられた。

「機械のカバーに使うのですが、出来るだけ薄い生地が欲しいのです」

それではこれを、と小さなゴム生地見本を出してくれたのを、ひったくるようにとって一枚一枚めくって行った指先に、ジンと来るゴムの感触。プンと店内にたちこめる特有の

香りにつつまれて、赤、白、ピンク、黒、黄等色彩の多いのに驚ろきながら「クリーム、黒、ピンクのおの十メートルずつ下さい」と夢中で注文していた。店内にはアメ色に光る腕のつけ根まであると思われるゴム手袋、同じく腰まで入るゴム長、ゴムの前掛等がズラリと無造作に置いてある。ポーツとなって眺めていた私の背後で突然に「こんちわーまいどー」という声と共に、バサッと横手の台上にアメ色のゴムホースが置かれた。細くきざんでゴムバンドを作る材料らしい。

私の目にはそれ等の何もかもが美しく見えて仕方ない。きよろきよろ見廻していたがふと別のウインドウにゴム生地見本を置いてあるのを見付けた。パラパラとめくって行く内に、一枚極く薄いクリーム色のゴムを見付けた。すばらしい手触りである。これはいいなと感じたとたんに「この生地も十メートル下さい」口が勝手に注文していた。先に私が注文したゴム生地を手際よく計っていたその女性、瞬間心もち顔をあからめながら「あー、それは今ありません。昔の生理バンドに使っていた生地で、今は製造していません」という返事。

人間誰しもないといわれれば、なお欲しく

なるのが人情で、今でも大変残念に思っている。おそらく〇・一五ミリ位いの、本当に感じのよいゴム生地であった。とにかくそれまでにずい分憧れていたゴム生地が入手出来たのだからその喜びも一入であった。

当時は、現在の家内と結婚して一年ばかりの頃だったが、嬉しさのあまり買ってきたばかりのゴム生地をみせたところ「いやー美しい色ね」と手のひらでなでたり足の上に拡げてみたりしていた。私が、すかさずゴムに対する意見を訊いてみたところ「冷めたいし、第一匂いが強烈で臭い」という。私にとって最高の味覚を、こう頭ごなしにやられると家内をゴムマニヤにしてやろうと望んではいるがゲンナリとなってしまい、先ず自分が着用する以外はないと、ゴムパンツから取りかかった。なにしろ自分で自分の下着を作ることは始めてで、型紙もないので心細い話だがいつも着用しているメリヤスのパンツを拡げてやっとな型紙を作り、いよいよゴム生地をカッティングする。特有のあのジャリジャリという音を立てながら……。

指、手、膝、手のひらに絶えずゴムの感触を受け、生地が新しいために、つけてある白い粉のためにすべり易いのを、丁寧にゴム糊

をつけては慎重に作り上げて行った。

未完成ながら一応の型が出来上がったところで着用してみる。本当の出来たて、まだ糊が乾ききっていないのを充分注意しながらそろそろとはいしてみた。ゴム生地の白い粉に助けられても若干抵抗を感じながらゆっくりと足を通していった。何んとも名状しがたい感覚が身体を走り抜ける。ついにはいた。永年望んでいたことがついに実行出来た。自分は今までにゴムパンツをはいているのだ。何故かこれまで、このような感じだろうか、それともあのような感じだろうかなど、ずっと想像し続けて来たことが一度に消えてしまっただけポーツとして何か実感が湧いて来ない。

ようやく一種の放心状態から抜け出して、身のひきしまる想いを与えていたゴムパンツの最後の仕上げにかかった。ようやく一枚のゴムパンツを完成させ、ゴム糊やその他のよごれを石鹸につけては何度も何度も洗った。徐々に本当のゴム面が出て来て、手の中でギューギューと鳴り出す。何かゴムが私に、美しく洗ってくれて有難うと、嬉しさの言葉を投げかけて来る声のようだ。

きれいになって艶々しい念願のものは、私に呼びかけるように輝く。私は水のしたたる

ゴムパンツを口に含んだ。今まで鼻先をくすぐっていたゴムの匂いがパツと口の中に拡がり、舌の上でゴム面がつるつると小気味よく動いている。歯でかんでみた。折り目の間にあった水が勢いよく口の中にとび出す。また歯にはごく軽い弾力が返って来る。

このようにして、パンツから始ったゴム下着作りは、ゴムのタイツ、アンダーシャツ、腕のつけ根までのゴム手袋、ゴム靴下、ゴムズキンとつぎつぎに進んで行ったが、ようやく自分ものを作るのにあきて、いよいよ家内ものにとりかかった。先ず家内にスラックスを出させる。

「そのスラックスをゴムで作るのでしょう。私にはかすつもりでしょうが、いやよ。絶対にはかないから」

何んと腹の立つことをいう家内か。もっと早く同好者の存在を知っておれば、私のゴム好きに合った女性と結婚して、ゴムを中心に幸せな家庭を築いて行ったものを……。今頃はお互いにゴム下着を着て同じマニアの先輩諸氏に種々ご教授を受け、ゴムと共に人生がバラ色に輝いたものを……。などと口の中でブツブツいいながら、白紙の上にスラックスを半分にたたんだものを置いて慎重に型紙を

作った。

これ迄に自分専用のゴム下着を数種類作っている自信から、わりあい簡単に仕事はかどって行く。例によって、ゴム製下着を作る時は一人ゴムの世界に没入してしまい、他のことは何一つ念頭になく、時間のたつのも忘れて深夜までせっせと作業に専念する。全くわれながらあきれほど熱心である。大体の型のが出来上り、いやがる家内に無理やりはかせてみた。「冷めたいからいや」と目もくれないのを「とにかく一度でいいから、はいてみてくれ」

とかなんとかいいながら、素肌にはかせてみたが寸法をあまりきっちりとしすぎたためか、弾力を利用して一寸きつそうだ。引き上げるべくひっぱるとその辺りだけがギュウと伸びて指先から逃げたゴムの端が、家内の肌でパチンと音を立てる。「これは無理よ、きつすぎるわ」それみたことかといわんばかりの文句が出る。唯さえ失敗かなあと、ひやひやしながら、汗びっしょりでなんとかしてはかせようと懸命の私に、次から次へと失望するように、しむけて来る。私は、ますますウロタえる。

こんなはずはないがなあと想った瞬間、旨

い具合に全くウソみたいにさっと上まではけた。私が余り急いではかせたために、ごく薄いゴム生地がどの辺かで二重になっていたものらしいのだった。私は心の底からホッとした。改めて見るゴムスラックスは未完成ながらピッチリと肌にはりついて、ヒップから足首にかけての脚線をそのまま現わしている。なんと美しいことか。

最初は着ることに強く反対した家内も、このようにぴっちりと全体をおおい尽し、しかもその全体をしめつける程良いゴムの弾力には未知の魅力を感じとったに違いない。一人立ったり坐ったりして、不思議そうに眺めたり、なぜたりしていた。

多少はゴムフェチになる素質があるのだろうか、ようやくゴムスラックスを完成した時には前ほど嫌がらなかった。勢いにまかせてゴムスリッパ、ゴムブラウス、ゴムズロースゴムブラジャーを作って行った。これ等の型紙は、主に婦人雑誌や新聞の家庭欄に出ていたのを、根気よくスクラップして参考にしたものだ。

面白いことに、自分でも一枚一枚作るたびに技術が上ったことが分り、昔ゴム長靴の修繕屋が使っていた金具のロールを想い出して

廣作平家物語——(第二回)——



都

還

黒 洌 嬰 一

時限の断層に落ちて、八百年昔の治承年間に迷い込んだ信乃と賀集子。

富士の裾野を二日間放浪して、漸く黄瀬川宿に辿り着いた。

「疲れたわ。お姉様、今日は何日かしら」

痩せて小柄な賀集子は、どこで転んだのか顔も手も泥に汚れ、スラックスの裾は裂け、膝は破れ、片足は跛を曳きながら、それでも例の手提袋を未だ捨てていない。

「治承四年十月二十三日の筈ですよ」

信乃は肥っているから疲労が一層甚しい。

長い髪も、高い鼻の頭も埃に塗れ、和服の裾は海草の如く、草履を失った跣足に血が滲んでいる。

「伊東まで、あと一日。何か食べたいわ」

「あそこに立派な門構えの屋敷が見えるでしょう。行ってみませんか」

× × ×
同じ十月二十三日。

凱旋途上の源頼朝は相模国府（現在の大磯附近）で挙兵以来の論功行賞を行った。

× × ×

寝殿造りを模した大邸宅の奥深い下ノ屋。

「この短刀と印籠は汝等如き女乞食が持ち得る品ではない。拾ったか、盗んだか」

折弓を振り上げながら呶鳴っているのは、

この屋敷の家人頭。

「嘘ではありません。平維盛様から戴いたのです」

信乃と賀集子は荒縄で後ろ手に縛りあげられた。放浪の果て、抵抗の体力も脱走の気力も残ってはいない。

「ここは頼朝卿の御宿を承った松田長者様の

御屋敷だぞ。平家の品を売りに来るとは何たる不逞。目代様の館へ突き出してやる」

「どうやら無償で没収する口実らしい。信乃も賀集子も数人の手で引き伸ばされ、左右から背中を連打された。」

「わたし達、何も悪い事はしていないのよ」賀集子が金属性の声で叫ぶ。途端に臭く汚い布が口腔一杯に詰め込まれた。大きさと感触は痺みたいだ。

「百杖の罰だぞ」

答が鳴る。空気が喰る。

見る間に信乃の和服も賀集子のジャケットも裂け千切れ、鮮血が点々と土間に滴った。

× × ×

大庭景親が片瀬川の畔に梟首された。伊東一族は未決の囚、拘留されている。

× × ×

母屋から渡り廊下を隔てた泉殿の一隅。「素晴らしい短刀です。平泉へ持って行けば高く売れるでしょう」

瘦形で商人風の男が言った。

「元は平維盛卿の持物とか」

答えたのは、よく肥った松田長者。

「これは宋朝の堆朱に金粉を貼った品のようですが、矢張り平家の持物だったのですか」

江戸時代の印籠は国産の薬品袋だが、この時代は文字通り印鑑容器で、殆んどが宋からの輸入品だった。

「平家の陣から来たという女二人から譲り受けました」

実は今、信乃と賀集子を痛めつけ、無償で奪ったばかりの品だ。

「その女達、若しや、よく肥った大女と髪に縮れた小女の二人ではありませんか？」

「その通りです」

「両方共、鼻が高く、瞳は大きく、普通には見られない顔で、痩せた方は宋国風の服を着ているでしょう」

「御存知なのですか。吉次殿」

「何も仰言らずに譲って下さい。その二人と持物一切。価は陸奥の砂金五両と馬五頭」

× × ×

頼朝は鎌倉に一晚休息ただけで常陸に向けて発向した。佐竹義秀を討伐する為だった。而してこの軍事行動は、後世は勿論、当時にも於てさえも批判の対象となった。

佐竹氏は源氏の一族であり、頼朝の挙兵に對し些細な抵抗をしていたが、富士川合戦の勝敗決定した今は敢て討伐せずとも、降伏を勧告すれば容易に領土の一部を抛棄して味方

に加っただろう。

石橋山で頼朝に敵対した坂東諸豪族の大半は富士川合戦前に帰順して味方となり、恩賞を貰う方の立場になっていた。然るに没収領土や占領地は極めて少く、賞賜用には足らなかった。相模国府に於ける論功行賞は本領安堵の程度でしかなかった。

鎌倉新政府の構成要員を団結させる為には相当思い切った領土分配が必要である。そして佐竹氏は富裕広大な奥七郡を持っていた。

佐竹氏の徹底討伐を主張したのは和田、畠山、千葉、三浦、土肥等、関東八平氏を含む坂東諸將達であり、頼朝自身は寛容を欲していた。しかし富士川合戦前に打算と忍耐を以てすべての敵を許した頼朝は今回は冷静な理性を以て同族に対する攻撃を認可決裁した。

× × ×

信乃と賀集子は下ノ屋の柱に縄尻を繋がれている。頭から浴びせられた水に全身濡れ浸り、着衣は破れて襦袢と化し、二人共、半裸同然。背中の皮膚は裂け、血が滲んでいる。

「賀集子さん。酷い目に遭いましたね」

「死にそうだったわ。お姉様はMの性だからいいでしょう」

「叩かれて嬉しいのは作品の上だけです」

「縄が解けたら、この屋敷に火をつけてやりたいわ」

この時、下僕数人を従えた家人頭が姿を現した。

「其方達が盗人でない事が解った。持参の短刀と印籠は御主人が買い求めて下さるぞ」

× × ×

十月二十六日。梶原景時と彼の一族が投降し頼朝は喜んでこれを味方に迎え入れた。

× × ×

一艘の大船が駿河湾を南に向っている。

無装飾だが実用本位で堅牢な構造。巨大な船体。外洋の風浪に耐え得るように強化された甲板。国産の和船ではない。明らかに宋国製。近畿と東北の太平洋岸を往復する陸奥船だった。

「兄者。陸の上は通れませんか」

船頭らしい男が尋ねた。

「足柄から東に源氏の兵が満ち、墨股から西は平家の軍が固めている。とても無理だな」

答えたのは、松田長者の屋敷に居た吉次と呼ばれる商人。

「馬を京へ運ぶ事は出来ませんな」

「京まで曳いて行かなくても鎌倉で売れてしまったよ。問題は、この船の積荷の方だ」

「源氏は思ったより強いようですな。内部の分裂でも起きない限り、簡単には亡びないでしょう。しかし平家が負けるとも思われません。これは長期戦になりますな」

「そうあって欲しいものだ」

この兄弟、只の商人ではなさそうだ。

「処で兄者。あの女達は何者ですか」

「予言者らしいのだ。頼朝卿の前でこう言っただ。平家は富士川から戦わずに退く。その後で義経という弟が現れる、と」

「源氏の内に忍ばせた謀者の通報ですか」

「吉内。俺が義経殿を平泉から連れ出した事を誰かに知られたと思うか？」

「いや。御館様（秀衡）の他は誰にも……」

「すると、あの二人は本当の千里眼という事になる」

「彼奴等は、何処に連れて行って欲しいと申しましたか？」

「伊東へ行きたいのだそう。そこから奴等の国へ行けるとの事だ」

「船は東へ廻しますか？」

「その必要はない。予定通り福原へ行こう。」

あの二人には東国へ帰航の際に伊東へ寄ると言っておいた」

「信じましたか？」

「京や福原が見物出来るから喜んでいたよ」

「大丈夫ですか。相手は千里眼ですぞ」

「得難い巫女だから、高く売れるのだ。顔や姿も悪くないし、年令も老けてはいない。源氏か平家か値の高い方に引き渡してやろう」

「その企に感附いているかも知れませんが」

吉次と吉内の兄弟は幾分、気味悪そうに胴の間を覗き込む。

「やや、あの二人、大変な物を持っているではないか」

古代衣裳の桂衣うちぎを着せられた信乃と賀集子は、薄暗い船倉の中で化粧を直していた。

× × ×

十一月四日。頼朝は佐竹義秀の金砂城に対する攻撃を発令した。自衛でも報復でもない純粹の侵略戦争は、かくて開始された。

× × ×

吉次が猫撫声で挨拶した。

「船中の事とて何も手に入りません。お口には合いかねると思いますが、それは御容赦願って、まずは一献」

こうは言ったが、内心これ以上の饗応はあまるまいという自負が面上に窺われた。信乃と賀集子の前には折敷、膳、椀、合子、瓶子、櫃、鉢の類が並んでいる。

「ごゆるりと、お過ごし下さい」

吉次は白酒一杯だけ相伴して出て行った。

玄米と粟と稗の混った固炊きの主食。

魚と青菜の膾。猪や山芋の煮物。牛蒡や落

の汁物。鮫や海草の乾物を焼いたもの。米粉

の乾菓子。粗製の油で揚げた練菓子。

「種類は多いけれど塩味だけよ。お醤油も、

お砂糖も、胡椒もないのね」

賀集子が小声で言った。

「お米は精白してないし、お刺身も天ぷらも

生れていないようです。日本料理が出来たの

は室町時代だから無理ありません」

信乃が肯定した。

「白菜も馬鈴薯も南瓜も玉葱も、この世界に

はないみたいだわ」

吉次と吉内は昇降階段の蔭に潜み、中の会

話を窺っていた。

「おい、吉内。あの連中、あれ程の料理を何

と不味^{まず}そうに喰べているぞ」

「不思議な者達ですな。平常は何を喰べてい

るのでしょうか。若しかすると、米や魚や野菜

は喰べないのかも知れませんが」

十一月五日。木曾川防衛線に手兵の大部分

を展開し終った維盛は、京へ戻って来た。

古典平家物語では、維盛は富士川から後を

も見ずに逃げ帰り、これに従う者は僅かだっ

たという事になっている。しかし三百六十軒

を騎馬の全力疾走で十五日要したのは変だし

富士川での戦死者は殆んどなかったのに、京

へ到着した者僅少というのも不合理である。

且つ古典では忠度、忠清等の動静が近江出兵

まで不明になっている。彼等は将士と共に木

曾川戦線に残留したのではあるまいか。

頼朝は木曾川要塞線を敢て侵さなかった。

翌年春、行家はこの堅陣に挑戦したが惨敗し

た。そして木曾川戦線は正面攻撃では遂に突

破されなかった。この陣地は二年後に放棄さ

れたが、それは全く別の方面からする迂廻に

依って、首府京都の陥落が決定的となった後

だった。

維盛は新任務のために京へ戻った。第一次

東方派遣軍は木曾川戦線の要塞要員に改編さ

れ、持久状態の打破には新しい野戦軍の準備

が必要だった。要塞線自体も物資や交替要員

の追送補給を欲していた。しかし平家の勢

力圏たる西日本四十余箇国には人的、物的資

源の充分な動員余力があった。

源平の対抗は次の全力衝突を秘めて不気味

な膠着を続けている。

船は熊野灘を航行している。

「船旅は愉快なものでしょう」

吉次が呼びかけた。

「そうね。でも遅くて退屈だわ。五ノットく

らい出ているのかしら」

賀集子は二十世紀の感覚が未だ抜けていな

い。信乃が慌てて話題を転じた。

「この船で福原と陸奥の間を往復して、両方

の物産を商売なさるのですか」

「絹、熊皮、漆、楮などを運び、仏像、銅銭

などを持ち帰っています。陸路では馬に黄金

を積んで行き、馬ごと売ってしまいます」

途端に又も賀集子が口を滑らせた。

「金はいいわね。儲かるでしょう。今に金ブ

ームが起って、パリでは一オンス七十ドルす

るようになるわよ」

吉次は妙な顔。信乃は賀集子を抑制した。

「奥州の金売吉次は源義経を世に出した人物

として歴史に名を残すようになるでしょう」

「私の事を、よく御存知ですな」

口の軽い賀集子が忽ち余計な事を言った。

「もっと知っているわよ。実は秀衡殿の侍で

京の情報を余さず平泉に通知している事」

「御冗談を。私は只の金売商人です」

打ち消しながらも吉次の顔色が変わった。

× × ×

十一月六日。頼朝は悪辣な詐謀を用いて佐竹蔵人を内通させ、この為に義秀は奥州へ逐電、金砂城は陥落した。

× × ×

「玻璃鏡を貼った宝箱を譲って下さるわけには行かないでしょうか」

吉次が言い難そうに申し出た。

「何の事だか、よく解らないのだけれど……」

賀集子、首を傾げる。

「いや、お隠しあるな。化粧の際に用いられた鏡は確に玻璃鏡」

吉次の眼が血走っている。

「賀集子さん。コンパクトの事ではないでしょうか」

信乃が意味を察知した。

「ああ、この事だったの。祇園祭の夜店で買ったのよ。五百円だったわ」

賀集子は手提袋から安物の化粧ケースを取り出し、無雑作に前へ置いた。

「それです。しかしこの鏡と箱は、祇園祭などで売りに出るような品ではありません。貴方達の国で作られた物でしょうか」

京都八坂神社の祇園祭は九世紀以来、有名

な祭典で、奥州の吉次も知っていた。

「本当の事を申しましょう。鏡も箱も、この国では作れない物だと思います」

信乃が巧妙に口を合わせた。

「そうでしょう。この光、滑らかな手触り、正しく玻璃鏡です。しかし箱の材は何ですか。亀の甲でもなし、貝とも違う。軟玉にしては薄いし、象牙とも異なる」

吉次は戸惑いながら蓋を開いた。指先が震えている。

「プラスチックですよ」

確に十二世紀では、ガラス鏡と共に二つとない珍品だった。

「如何でしょう。陸奥の川床より掘り出したばかりの砂金一両で売っては下さらぬか」

「金一両ですって？」

この一両は後世の判金と異り、京目四匁五分の純金であって、貨幣経済未発達の当時としては想像を絶する購買力を持っていた。

「一両では足りませんか。では二両」

「とても、そんな……」

賀集子は仰天して物が言えなくなった。

「三両でも駄目ですか」

「この鏡、そんな値の物ではないのよ」

「そうですか。いや、そうでしょうか。では

四両」

純金粒を詰めた鹿皮の袋が並んだ。

「五両、出します。是非、譲って下さい」

× × ×

十一月七日。頼朝は佐竹氏の旧領たる奥七郡、其他の土地を有功将士に分配した。

古典の記す処では、捕虜の一人が頼朝を面罵し「平家討伐を後にして源氏の同族佐竹氏を亡した」事を責めた。頼朝はこれを斬らず岩瀬与一太郎と名を与えて御家人に加えている。佐竹氏討伐が頼朝の本意でなかった事を示す間接証拠ではあるまいか。

× × ×

船尾楼で舵を把っている吉内が言った。

「兄者。淡路島が見え始めましたぞ」

吉内は甲板の下から上って来た。

「明日は福原へ入港だな」

「あの二人は如何なさいます」

「俺達の正体を知っている油断のならぬ奴等だ。しかし売れば大金になろう。元手もかけたし棄てるのは惜しい。兎に角、逃げられてはいけないから待遇を改めるとしよう」

「縛っておきますか」

× × ×

従一位前太政大臣浄海入道平清盛は雪見御

所と呼ばれる冬季公邸の広廂に立っていた。今年六十三才。名実兼備の独裁者である。

「遂に経ヶ島の港は完成した。宿願の福原遷都も為し遂げた。そして半歳」

娘の徳子は高倉上皇の正妃として安德天皇の母。一門の公卿十六人。殿上人三十余人。諸国の受領、衛府、諸司六十余人。知行国三十余箇国。日本の半分は平家の私領だった。

「父忠盛卿も俺も昔は公卿の番犬だった」

清盛は進歩主義者であり、革命指導者でもあった。彼は地下人階級より起って五百年の伝統を誇る貴族制度に挑戦した。不在地主の公卿は無力を曝露し、無産者である武士は始めて団結の力を自覚した。

「血統の代りに実力が尊重される時代。それが俺の理想だった。俺はそれを実現した」

保元、平治の乱で競争者源氏を蹴落した清盛は、更に治承三年十一月の武力クーデターで後白川法皇を鳥羽殿に幽閉し関白基房以下四十三人の政府高官を免職して軍事独裁政権の確立に成功した。治承四年二月二十一日には高倉天皇に譲位を迫って孫の安德天皇を即位せしめ、五月二十五日には以仁王を擁した源三位入道頼政の武装叛乱を鎮圧。そして六月三日、遂に念願の福原遷都を断行した。こ

れは山門、南都の大寺院勢力から離隔し、京都に根を下した旧貴族勢力を弱体化させ、対宋貿易を平家の手に独占するためだった。

「政権の維持は獲得より困難な事業だな」

平家全盛の頂点に立ちながら清盛は悩む。

「武士とは本来政治に不適当なものなのか」

清盛の末子や孫達は武家の野性を失って、摂関政治の組織中で大臣、大将、納言、参議となり、完全に公卿化していた。

「京の伝統は余りに古く、福原の新都は旧都に近過ぎる。純粹の武家政治は坂東か鎮西の地でなければ育たないのかも知れないな」

平家は日本の半分を国守や本所領主として支配したが、そこには徴税権はあっても警察権がなかった。即ち平時の財政には寄与しても武家の本質たる戦時の実力支配を欠いていた。これを実現したのは後の頼朝だった。

「福原に遷都して僅か半歳。然もこの有様」

富士川戦の失敗と東国源氏の群起。大寺院の抵抗と旧貴族の反対。過渡的政体の弱体性と平家一門の人材欠乏。

「福原の新都で海外発展に専念したかった」

平家にも内大臣重盛がいた。彼は古典に於て清盛と反対性格の保守主義者の如く記されているが、実際は清盛を小型化したような男

だったと思われる。しかし平家中では、大政治家清盛を継ぎ得る唯一の人物だった。その重盛は治承三年八月一日に死んだ。清盛は万機を自ら決裁しなければならなかった。

「少し改革を急ぎ過ぎたな。旧勢力と一時的な妥協が必要になったようだ」

清盛は嘗て頼朝や義経を殺さずに許した。

革命政治家にとって致命的なこの性格が、又も頭を持ち上げた。革命とは、途中で妥協すべきものではないのだ。

「国内問題の解決が先だな。福原の経営は諦めよう。生涯の理想は遂に夢の尽で終るか」

清盛は経ヶ島の築堤を眺めた。

「我が半生を注いでここまで築き上げたあの港も、元の荒磯に戻るのだろうか」

風浪の自然力に抗し、石を沈め、又積み重ねて建設した兵庫の大防波堤は漸く外航船を停泊せしめ得る程になっていた。しかし国内の長期戦を覚悟すれば港の管理は不可能だ。「やあ、輪田の沖に白帆が見える。大船だ。今の季節に来るとは何処の船だろう」

清盛は入港せんとする一艘の船を認めた。「あれは陸奥船だ。金売吉次が来たのかな」

× × ×
信乃と賀集子は荒縄で後ろ手に縛られ、索

具用の丈夫な太綱で足も胴も巻き締められ、革臭い積荷の間に転がされている。

「お姉様。結局、縛られてしまったわね。吉次と吉内の兄弟、いい人だと思ったのに……」

「砂金五両は見せ金でしたわね」

「手提袋だけはそこに残してあるわよ」

「賀集子さん。泳げますか」

「縛られたままで？」

「勿論、解いてから」

「この縄、解けるかしら」

「頼みますよ」

「いつも重労働ね、あたしばかりが」

「賀集子さんは指先が器用だから」

「女流彫刻家の指は器用ではないの？」

「そんな事、言わずに試して下さいよ」

「結び目を見つけたわ」

「解けそうですか？」

「変だわ。太い綱の方が解き易い筈なのに、全然緩まないのよ。結び方が違うのかしら」

「水手結びでしょう。普通の結び方とは逆にかこなっているかも知れませんよ」

× × ×

十一月八日。維盛は福原に到着し、富士川合戦の結果を清盛に報告した。

古典平家物語の記す処では、清盛は大いに

怒り「維盛を鬼界ヶ島に流し、忠清は死刑にせよ」と言って敗戦の責任を追求した事になっている。しかしこれは事実ではあるまい。

関東叛乱政府の早期討滅が不成功に終わったのは維盛の戦術的失敗と言うより僅少な兵力しか与えなかった平家首脳部の戦略的過失、更には兵庫築港や福原遷都に平家の労働力と資源と金と時間を消耗した清盛自身の政治的錯誤に他ならなかった。古来如何なる場合と雖も政治の失敗は戦略で償い得ず、戦略の過失は戦術を以て救済し得ない。政治家の責任は常に最大であり、將軍の責任は前線指揮官より重い。

「墨股川の線を確保したのは上出来だった」

清盛は政治家の責任を痛感しながら、偏愛する嫡孫を叱らずに賞讃した。維盛の消極的性格が幸いした。もし彼が血気に逸って全兵力を喪失していたら、一層重大な結果を招いたに違いない。

「次の戦には必ず勝ちます故、もう一度だけ総大将に任命して下さい。お願いします」

坂東の武力征服には西国の全資源と人力の動員が必要であり、それには充分な準備期間を設けなければならなかった。

「政治的解決を試みよう。攻撃はその次だ」

清盛は関東の低い生産性に着目していた。美濃以西を堅固に守備しつつ、先ず外交交渉次に経済封鎖を行う。坂東武士が土着生活するだけなら関東の資源で充分だが、政府を組織し軍隊を維持するには莫大な資金が要る。新政府を財政的に困窮させれば、内部分裂を起させる事も可能だろう。

「遠大な御計画を承って安堵致しました。さて余計な事かも知れませんが、富士川の陣中で会った不思議な巫女二人の事を申し上げなければなりません。其の者達は戦局の推移を予言し、結果は正にその通りとなりました」

× × ×

「解けそうにないわ。諦めてもいいかしら」

賀集子は唇を噛み、溜息をついて喘いだ。

陰曆十一月というのに汗は桂衣うちぎを通して、全身の縄目をも浸している。

「頑張ってください。見張りがいなくなりました。逃げるなら今の内ですよ」

信乃は縛られた尽で蹲っている。

「甲板が騒々しいわ。荷揚げ作業中なのね」

「船は接岸しているのでしょうか」

自由を奪われて丸一日。既に身体は悪臭を放っている。

「そうだ。思い出したわ。手提袋の中にペン

ナイフがあるのよ」

芋虫の如く縛られた賀集子が、手提袋を狙って床の上で蠕動運動を開始した。

× × ×

金売吉次は雪見御所に清盛を訪ねた。表向きは奥州の金売商人。実は藤原秀衡の全権大使。清盛も粗略には扱えない。坂東経済封鎖は、陸奥守秀衡の協力がなければ不可能だ。

「建礼門院様に献上の品を持参致しました」

吉次は抜目なく交易特権料を納めた。

「玻璃鏡ではないか。徳子が喜ぶであろう」

清盛は錦の袷紗を開いて眼を細くする。国母という地位を別にしても慈愛限りない今年二十四才の次女は清盛の弱点だった。

「交易を御許可願います。舶載の品々は砂金千両、生絹三千匹、熊皮千枚、弓千張、漆千樽、鷲の羽千尻。膠、油の類でございます」

「油断のならぬ奴だ。戦時需要と察したか」

清盛は、商人を優遇した。平家の保護下には多くの大貿易商がいる。古来、地方分権の状態を打破して大統一を実現した独裁支配者は、商業資本の保護税を政府の財源に利用し一方、大商人は小邦分立の自給経済よりも全国一貫の自由流通を望む傾向がある。両者の結合は必然だった。且つ、対宋貿易を文化と

経済の基礎とする清盛の政府は外貨決済の手段を陸奥の黄金に期待し、他方で平泉の都を拡張中の藤原秀衡は宋からの舶載品やその模倣品を無限に欲していた。

「源氏討伐に御入用な武具の材は幾らでも運送致します故、銅銭にて御支払い願います」

当時、日本国内には貨幣経済が急速に浸透しつつあり、これが資本蓄積手段となって、商業の大発展を支えていた。敢て言えば銅本位制。基本通貨は銅銭である。しかるに嘗て奈良の大仏を鑄造した程もあった和銅年間の銅資源は掘り尽くして枯渇し造幣技術も亦拙劣で国産鑄貨は全く流通していなかった。

「時忠に申し付け、宋銭で支払って遣すぞ」

隣国宋では石炭利用に依る金属大量精錬が可能になり、商業の要求に応じて多量の銅銭に加工されていた。陸奥の黄金と引換えで清盛の政府資金となった銅銭もこれである。

「有難うございます。他にもう一つ。世にも得難き巫女を二人、召し連れしました。千里の彼方、十年の先を見通す術者でございます」
「何だ、又も巫女か。今日はよく予言者の話が出る日だな。よからう、明晩連れて参れ。本物だったら高く買い上げるであろう」

× × ×

経ヶ島に続く築堤に篝火が燃えている。船から揚陸した荷物は未だ梱包の尽で浜に並び、隠れる者に都合のよい場所を提供していた。

「お姉様。どうもお待たせ」

裸足の賀集子が駆け寄った。

「何処へ行っていたのですか。危い事はしないで早く逃げましょう」

信乃は大きな木箱の蔭に隠れている。

「縛られたお返しをして来たのよ。今に面白い事が起るわ」

「手提袋が重そうですね」

「艫の船長室に、あたし達の砂金があったから取り戻したの。ついでにこれも貰って来たわ。お姉様の短刀、あたしの印篋」

船尾楼の中で赤い火光が明滅した。

「火事だァ」

怒号が浜を走り抜ける。駆け乱れる人渦。

「それ、今の内に」

信乃と賀集子は山の手へ向って一目散。

× × ×

十一月九日。上総守忠清の軍法会議が開かれ、処分保留に決したと平家物語に見える。但し筆者の推定ではこの頃、彼は木曾川戦線を守備して福原にはいなかった筈である。

× × ×

「船火事は消えたようですね」

「惜しかったわ。みんな燃えればいいのに」

信乃と賀集子は湊川に沿って上った山の手から経ヶ島を眺めている。広大な闇の底に町並の灯が此処彼処。

「そろそろ、朝ですよ」

「明るくなったらどうするの」

海面が白く見え始めた。山や丘が低地と分れかけている。現在の神戸とは違って首府と雖も林や藪は至る所にあり、人家は粗。隠れる場所は沢山ある。

「手提袋に砂金五両が入っているでしょう」

「モチよ」

「わたし達、お金持ちなのですよ」

「五両って大金なの」

賀集子は、赤く擦り剥けた手で重い袋を握り直した。

×

×

×

漸く鎮火した船の上で吉次が呟鳴った。

「あの女達に逃げられたと言うのか。早く捜せ。相国殿の御前に連れて行く御約束の期限は今夜なのだぞッ」

×

×

×

信乃と賀集子は福原の町へ下りて来た。

「何処を見ても工事中だわ」

「オリンピック前の東京みたいですわ」

新都の建設は遷都半歳の今も続いている。

完成直前の姿を見せている大建築群。内裏、衛府、牙門、馬寮、社寺、公卿館、武者所。すべて平家の偉大な権力と財力を象徴する。

東西に延びつつある商舗、住宅。山麓に増加している工事労働者の小屋。整備されている道路、橋梁、福原全域の工事現場は朝日の光と共に騒然たる槌音を奏し始めた。

「元町商店街に出たわよ」

「少し場所が違うようですが」

粗雑な棚が並んでいる。しかし野天の定期市や臨時建築ではない。明らかに常設の市場だった。そして近国の饑饉にも拘らず、ここには食糧も衣料も日用品もあった。

「食堂はないかしら。蝦フライ喰べたいわ」

「ある筈がないでしょう」

「ラーメンでもいいわ」

「無理ですね」

「たこ焼きで我慢するわ」

「それもなさそうですよ」

「お腹が空いて倒れそうよ」

「砂金を銅銭に両替しなければ食物も着物も買えないでしょう。百万円の小切手で卵一箇買うようなものですよ」

「それなら早くしましょう。先刻から変な眼つきの子供が後を付けて来ているから……」

「え、どこに」

「ほら、あの真赤な着物を着た男の子」

「大変。あれは禿童ですよ」

×

×

×

雪見御所の泉殿に若い公達が群れている。

維盛、業盛、師盛、清宗等の顔が見える。

突然、髪を長く垂らし、赤い直垂を着た少年が一人、勾欄の下に駆け寄った。それを見た末席の公達が反射的に立ち上る。

「怪しい二人連れの女を見たと言うのだな。よし、すぐ行く。尾行を続けろ」

若公達は衣冠束帯を手早く脱ぎ棄て、忽ち禿童の赤装束に着替えた。

×

×

×

「禿童とは平家の子弟中から思想、体力の優れた十四、五才の少年ばかり三百人を撰抜して編成した特高警察ですよ」

「少年探偵団は江戸川乱歩の発明ではなかったのね」

信乃と賀集子は結局、何も買わなかった。追跡者を避けようと、平気な風を装いながら自然な歩調で商店街を抜け、山の手へと歩いて行く。

「未だ追って来ますよ」

「赤色だからよく解るわ。ヘヤースタイルは禿童刈り、ユニフォームは赤装束。スパイにしては少し派手過ぎやしないこと？」

信乃と賀集子の時代離れた雰囲気は、隠しても現れるようだ。禿童は二人、三人と増えて来た。それを見ると市人も僧侶も武家の下人も忽ち道を避け、路上には信乃と賀集子の二人だけが残された。

「捜査よりも威嚇が目的だからでしょう」

「でも何故、少年ばかり揃えたのかしら」

禿童の指揮者らしい風格の少年が現れた。

人数は何時の間にか十人を越えている。

「子供は純情だから正しいと信じたら絶対に背きません。それに将来、平家に尽す人材を養成する事も出来るでしょう」

「子供の冒険心を利用出来るし、何より人件費が安いわね」

禿童の半数が足を早めて信乃と賀集子の前に廻り、道を遮った。もう避けられない。

「その異様な風態の女達に相尋ねる。生国と姓名を申せ。又、如何なる目的あって福原を窺うか。かく言うは禿童組頭、無官ノ大夫敦盛であるぞ」

容姿端麗な美少年が進み出て呼びかけた。

「あら。貴方が少年探偵団の団長なのね。可愛らしい坊やなこと」

賀集子は立ち止り、艶然と微笑する。

「笛の名人敦盛殿の名は存じておりました。でも何故、無官なのですか。同年の業盛殿は藏人。知章殿は武蔵守。貴方より若い師盛殿は備中守だと言うのに」

信乃が続けて問い返した。

「官職よりスパイの方が面白いのでしょうか。早く足を洗わないと十七才で殺されるわよ。

死ぬ所は一ノ谷。殺す相手は熊谷次郎直実」

賀集子が更に畳みかけた。禿童達は毒気を抜かれて、しばし呆然。しかし敦盛は、任務を忘れていなかった。

「世迷事を申す怪しい奴。一同、召し捕れ」

× × ×

信乃が暴れ、賀集子が走った。

信乃は剛力。賀集子は敏捷。しかし空腹と

疲労で体力が出せない。相手は少年だが人数が多過ぎた。遂に押し倒され、幾重にも折重って抑えつける。信乃も賀集子も後ろ手に縛りあげられた。全身を締めつけて縦横無秩序に縄が走る。十余人が面白がって我も我もと縛っているようだ。

「引っ立てい」

敦盛の号令で禿童達は歓声をあげ、信乃と賀集子の首に幾本も縄を結び、四方を握って曳き廻し、追い立てた。

「締め殺す気なの。首の縄を緩めてよ」

足は乱れる。窒息の苦痛。

「黙って真直に歩け」

抗議した賀集子は、腰を思い切り蹴られて道の中央に頭から横転した。

「お待ち下さい」

起き上ろうとする眼の前に足が見えた。

「その女達は太相国に献上すべき処を当方より逃げ出したる者。お渡し願います。私は清盛公の黄金を御用立する奥州の吉次」

言葉は丁寧だが腕力で目的を達しようとする態度が窺える。左右の築垣の蔭から忽ち船頭風の男数人が現れ、通さじと道を塞いだ。

× × ×

大人と子供の猛烈な乱闘。

賀集子は大勢に踏まれながら這い出した。

信乃は縄尻を握っている禿童に体当たり。

「静まれ。ここは一院の御所であるぞッ」

第三勢力が介入した。門衛の武者らしい。門内より現れ、抜身の太刀を振り廻す。しかし斬る気はなさそう。威嚇に依って扉前の騒動を追い払うのが目的なのだろう。

「女達が逃げるぞ」

吉次と敦盛が同時に叫んだ。

信乃は禿童二人を肩で突き倒した。敦盛が縄尻を踏みつけたが信乃の重量に曳きずられて大地に転倒。

賀集子は後ろ手で手提袋を素早く拾った。

吉次が大手を拡げて捕えようとしたが、巧妙に下を潜り抜ける。

「先に捕えた方のものだぞ」

信乃と賀集子は既に人渦を掻き分け、縄尻を長く曳き、首からは四本の縄を振り廻しながら乱闘の外へ駆け出している。狭い道路、丘陵の多い地形、林も藪もある。逃げる者は必死。一旦駆け出せば、隠れる地形がいくらかもあり、追跡者は二組あって、互いに牽制していた。

「狼籍者。入ってはならぬ。怖れ多くもここは一院の……」

舎人は信乃の前に立ち塞ったが、一秒で掻き消えた。信乃と賀集子が疾風の如く走り走ると同時に泉水から高々と水柱が奔騰する。

二人の行方は柴垣で遮られていたが、信乃が全重量を叩きつけると忽ち木端微塵に砕け破片は天空高く飛散した。

浅い池を渡り、築山を越え、薬草園を踏み

荒し、塀を押し倒し、灌木林を駆け抜け……

「お姉様、逃げ切ったようよ」

二人は、いつの間にか寝殿造りの高い床下へ潜入していた。

× × ×

「敦盛殿。曲者は如何なされたな」

尋ねたのは大理卿時忠。官は検非違使別当即ち警視総監に相当する。

「怪しき女二名を捕えましたが、金売吉次の

一党が奪いに現れ争う内に逃げられました。この短刀は曲者から奪った品でございます」

敦盛は白鞘の短刀を証拠品に提出した。

「ややッ。その短刀は私が巫女に与えし物」傍にいた維盛が驚いて叫んだ。

「すると維盛殿の言われる富士川の巫女と、金売吉次の連れて来た不世出の女子言者とは同じ人物と言うことになる」

時忠は警察責任者の推理を働かせた。

「庁の武者を総動員しても捕えねばならぬ」最早、少年探偵団の手に合う事件ではない

首都警察官全員に非常呼集が発せられた。

× × ×

「お姉様、少し待ってよ」

「もう少し奥へ行きましょう」

「首の縄が何かに掛みついて動けないの」

「手首の縄は解けそうにありませんか」

信乃と賀集子は縛られた俣で寝殿造りの暗い床下に蹲っている。

「大きな割に人の気配がしない屋敷ね」

「表の方には武者がいたようですが、この上あたりは誰もいないみたいですよ」

「化物屋敷かしら。あ、誰か上にいるわ」突然、床板が剥がされ、光が差し込んだ。

館の住人に発見されたらしい。

「そこな方々、隠れるには及ばぬ。姿を見せられい。其方達は平家の刺客であろうが、驚きはしない。この館に幽閉されし時より覚悟は出来ている。ここで殺されるのも宿業。念仏を誦えつつ斬られようぞ」

仄暗い中に六十才近い法師の顔が見えた。死の恐怖で蒼白となりつつも強いて平静を装う如き顔だった。

「お助け下さい。禿童に追われています」

荒縄で上半身を隙間もなく縛られた女二人が床下から現れた。

「其方達はいったい何者じゃ。朕を殺しに参ったのではないのか。救いに来たのか」

老法師は仰天。賀集子は大いにむくれた。

「こんなに縛られて、救ってあげられるわけがないでしょう。縄を解いて下さいな」

「困ったのう。此処には如何なる刃物も置く事は許されていないのじゃ」

「勿体ぶらずに指で解いたらいいでしょう」

× × ×

「朕は一院雅仁じゃ。一度は十善の帝位を継ぎながら不徳にして臣下清盛のために斯くは幽囚の身となり、死を待つばかりとなった」

「あ、それでは後白川法皇様」

縄を解かれた信乃と賀集子は床に平伏。

「御無礼の段、お許し下さい。なれど御返礼には良いお報せを申し上げます。清盛殿は近い内に陛下の幽囚を解き、都を京に還し、院政を元に復するよう請いに参りましょう」

信乃は謹んで奏上した。

「何と、太政入道が朕に政権を戻すと申すのか。其方達は未来が解るのか。世上には何が起っているのか」

幽囚中の法皇は源氏の挙兵も富士川の合戦も、未だ御存知なかった。

× × ×

十一月十日。除目が行われて権亮少将維盛は右近衛中将に昇進した。負けても年功で進級する先例は昭和二十年まで伝えられ、平家物語作者及び世間一般の批判対象となった。

× × ×

後白川法皇の頬に血色が蘇った。

「よく占ってくれた。院政再開の時が来たら必ず其方達に厚く酬いるであろう。ここには何もないが証としてこの数珠を持つがよい」

世に言う三間板屋の牢御所。実際は相当、広い屋敷で警備も余り嚴重ではない。法皇を奪取しようとする寺院勢力等の手もここまで及ばないからだろう。しかも福原全体が平家の陣営。政権を奪われた失脚の前主権者は如何なる政治情報からも遮断されていた。

「ここを脱け出したら京へ行くがよい。法住寺殿は荒屋敷となっていようが雨露は凌げよう。そこに朕の上洛を待て。朕が再び政権を得たら八条女院領の内より其方達に所領を遣そう。信乃よ、汝には信濃国伴野庄を与え信濃御前と呼ばせよう。賀集子とか、其方には上総国瑞沢庄を授け上総御前と称えよう」

× × ×

この夜、清盛は法皇の牢御所を訪問した。「入道。前非を悔いて罪を謝しに参ったな」

法皇は清盛が未だ一言も発しない前に彼の用件を観破された。

「如何にも仰せの通りにございます」

心内を見透かされた相国は思わず平伏。

「東国、北国が乱れ、公卿、社寺も思うまま

にならぬとあれば都を還すしかあるまい」

「それに相違ありません」

「如何に浄海。平家強しと雖も武力だけで政治は出来ないであろうが」

「恐れ入りました」

頭を下げながら清盛は察知した。

——法皇は余りに知り過ぎておられる。誰かが最新情報を通謀したに違いない。——

× × ×

信乃と賀集子は市女笠の壺装束。漸くこの時代の庶民らしくなってきた。

「あたし達、領主になれるのね。でも、おかしいわ。女の大名なんて」

「平安時代なら女の本所領家も珍しくありませんよ」

「でも福原から出られるかしら。東は生田ノ森、西は三ノ谷。どこにも嚴重な関所があるし、南は海で船は管理されている」

「北が空いていますよ。義経逆落しの鴨越」

× × ×

雪見御所で清盛が時忠に向い呶鳴った。「一院の牢御所附近を徹底的に搜索せよ」

× × ×

経ヶ島の船上で吉次が配下に命令した。

「生田ノ森から京へ向う本街道を監視しろ。」

二人の巫女は必ず我等の手で捕えるのだぞ」
水夫の姿はしているが、何れも奥州藤原家の
武士達である。

敦盛は赤装束の少年を集めて訓令した。

「庁の侍に先を越されては禿童組の恥だぞ。
三ノ谷の関所を見張れ。西国へ行かせるな」

同じ頃。維盛は仲の良い重衡に兵の借用を
申し入れていた。

「お手元の軍兵を貸しては貰えまいか。二人
の巫女を庁の武者や禿童達より先に見つけて
我が手に保護したいのですが」

重衡は快諾した。

「貸すも貸さぬもない。私自身が下知して搜
しましょう」

全福原に非常線が張られたが、指名手配の
当人達は雪見御所のすぐ北を通っていた。

「ここは鉄拐岳の南斜面よ。本当に登るの」

「本気ですよ。縛られた縄はありますか」

「七百八十年待ったらロープウェイが出来て
簡単に登れるようになるのよ」

「さあ、冗談は後にして先に登って下さい」

十一月十一日の朝日が鉄拐岳の山頂を照ら
した。

「右中将殿。あれを御覧下さい」

重衡が崖を縫う一本の綱を発見した。

「正しく富士川の巫女達」

維盛が確認した。賀集子は崖の上で松の樹
に綱を結び、信乃は急斜面を重たそうにクラ
イミング中である。

「停まれ。そこを動くな」

重衡が馬上で弓に鎬矢を番えた。射殺す気
はない。脅すのが目的だ。

「見つかったわよッ」

大雁股が唸りを発し、綱をかすめて赤膚の
土に深々と突き刺さる。賀集子は腰を抜かし
信乃は危く落ちそうになった。

「待たれい、左中将殿」

維盛が重衡の二の矢を制止した。

「そこな巫女殿に物申す。下りて来られい」

維盛、重衡は郎党を従えて崖の下。

賀集子は坂の上。信乃は斜面の中段。

簡単に追いつかれる位置ではない。しかし

追跡側には弓矢を持った兵が二十人はいる。

「平家の行末に関し尋ねたき儀あり、曲げて
おいで下されい。悪しくは計らわず、客人と
して厚く遇するであらう」

若しも後白川法皇との約束がなかったら、
諦めて崖を下りたかも知れない。

「嫌だと言ったらどうしても射ち殺すの？」

賀集子が慄え声で問い返す。

「否。先程の矢に害意はない。あれば、必ず
一矢で射抜いたであらう」

重衡は番えた矢を外して崖際まで進んだ。

「福原に留る事を望まぬとあれば止むを得ぬ
欲する所へ赴かれよ」

賀集子は人権尊重の態度に感謝した。

「有難う」

この間に信乃は、漸く頂上へ辿り着いた。

「重衡様に申し上げます。貴方は今年の暮に
大将となり奈良を攻めるでしょう。戦は勝ち
ます。しかし大仏殿を焼いてはなりません。

東大寺、興福寺に火を放つ時は必ず貴方の武
名も傷つき、清盛公の寿命も危く、平家の運
勢も衰えます。御用心下さい」

信乃と賀集子の姿は崖の向うに消えた。

「再び平家の門を叩きたき折あらば何時なり
と維盛、重衡を尋ねられよ。拒みは致さぬ」

維盛は鉄拐岳に向って叫んだ。

十一月十三日。福原の里内裏が完成し、安
徳天皇と建礼門院が入御せられた。

信乃と賀集子は狛師の小屋で休息と食物にありついた。老いた狛師と十三、四才の少年がいて、焼米や木の実を出してくれた。

「お姉ちゃん、その綺麗な小刀をおくれよ」

息子が賀集子のペンナイフを欲しがった。

「あげるわ。これはステンレスと言って絶対に錆びないのよ」

賀集子は簡単に応じた。

「この国では得られない高価な品なのに」

老人の狛師は代償に鹿の皮や狐の皮を出し食物や藁靴も添えてくれた。

「坊や、名は何と言うの」

小童は光るナイフを貰って喜んでゐる。

「おいらはさぶと言うんだ。驚尾のさぶ」

信乃と賀集子は思わず顔を見合わせた。

「坊やは今に源義経の家来で驚尾三郎経春という立派な侍になるのよ」

× × ×

敦盛は笛を止めて考え込んだ。

「熊谷次郎直実とは、どの何者だろう」

× × ×

信乃と賀集子は老ノ坂に立った。

「やっと京が見えて来ましたね」

「焼米と乾味噌ばかりでよく身体がここまで

保ったものだわ。遠いし、寒いし」

信乃は肩から鹿皮をかけ、賀集子は襟に狐の毛皮を巻いている。

「北の空が燃えているみたいに見えますよ」

「オーロラだわ。中世の日本ではオーロラが見えたのね」

満目の雪原。寒気は膚を刺す。

「道理で寒い筈ですね」

「磁気の北極が日本に近かったそうよ」

だが、漸く辿り着いた旧都の荒涼とした様

は何とした事か。大厦高楼は半ば壊れ、門塀

は崩れ、寺塔は倒れて読経の声も聞こえず、

人煙粗に、街路、河原には斃屍累々。

「これが京の都でしょうか」

「酷いわ。みんな餓えて死んだのかしら」

治承四年の大饑饉は比較的人口稠密で物産

に乏しい旧都附近で最大の暴威を発揮した。

一冬の餓死者、凍死者は四万三千と言われ、

十余万とも称された。

「ともかく法住寺殿を訪ねて見ましょう」

「食べ物があればいいんだけど。もう砂金は

半分しか残っていないのよ」

福原遷都に際し京の諸館は材料として壊さ

れ、或は淀川を下る筏材として分解された。

残った空屋敷は饑民の燃料として焚かれた。

信乃と賀集子が今夜眠るべき屋根があるだろうか。

× × ×

重衡は維盛に向って不満を述べた。

「お言葉なれど、あの巫女が本物とは思えま

せん。父大相国が南都諸寺を本気で攻めさせ

る事はありませんし、戦となっても私が大

将であれば大仏殿を焼かせるような下知は絶

対に致しません」

× × ×

三十三間堂の南東に一群の寺塔がある。

藤原為光の創建にかかる法住寺。嘗ては五

間の堂舎、法華三昧堂、常行三昧堂等があっ

て殷賑を極めた。その後、荒廃したが鳥羽、

後白川両法皇の離宮となって再び繁栄。

しかし今は住む人もない荒屋敷である。

「広い御殿だけど人の気配がしませんね」

「軒が傾いて、屋根も落ちかけているわ」

「天井と床が残っているでしょうか」

「折角、来たのだから入ってみましょうよ」

「妖怪でも出そうだわ」

「おや、誰か住んでいるみたいですよ」

× × ×

十一月十七日。頼朝は常陸から鎌倉に凱旋

し、幕府の組織を着々と公表した。

三浦義澄は三浦介に任命された。朝廷の地方官を無官の頼朝が勝手に発令したわけだ。

侍所別当には和田義盛が就任した。これは御家人統制機関の長官を意味するが、その私的名称にも拘らず、軍政権化しつつある鎌倉政府の国防大臣に相当し、数年後には政所（大蔵省）問注所（大審院）と並ぶ三大機関の一つに成長した。

× × ×

法住寺殿の奥。薄暗いあたりに眼が光る。

「誰か入って来るぞ」

「六波羅の放免ではないか」

「我等の密会に感附いたとは思えないが」

「法住寺殿の内なら安全と思ったに……」

近江源氏的首領山下義経と称する若武者を中心に、堅田の豪族達、延暦寺、東大寺、興福寺の僧兵、園城寺の残党等、反平家ゲリラの頭目共が法皇の御所跡に集っていた。

捜し廻るような足音は表から次第に奥へ、この部屋へと近寄って来る。

× × ×

福原遷都は平家以外のすべてに不評判だった。比叡山や南都の社寺は公卿の参拝が途絶えて収入激減し、移住した公卿は新都の地積過少で館が得られなかった。北は山、南は海

で潮風騒しき不健康地。本来病弱の高倉上皇は環境変化に耐えずして重患に陥られた。

× × ×

信乃と賀集子は後ろ手に縛られ、荒屋敷の床に転がされている。

「平家の謀者奴」

薄暗い寝殿の蔀戸を開けて一步這入った途端、中に潜伏していた十余人が二人の上に折り重った。忽ち縄目が全身を締め上げ、猿轡が口を掩う。そして一言も弁解する隙も与えられないままに引っ叩かれ打ちのめされた。

「生かしてはおけぬ。古井戸に沈めようか」

僧兵が話し交している。狼狽しているのは侵入された側らしい。

「聞いて下さい。わたし達は平家の手先ではありません。法皇様の密使なのです」

漸く信乃の猿轡が外れた。

「法皇様は間もなく法住寺殿へ還御なさいます。わたし達は御殿を調べに来たのです」

何とかして誤解を直さなければならぬ。

「清盛入道が一院の幽閉を解くとは信じられぬ。よしあったとしても都は福原。京の法住寺殿に還御など起こる筈がない」

黒絲織の腹巻に白い頭巾の大坊主が強いて否定した。

「いえ、清盛殿は既に都を京へ戻す決心をなさいました。還都の行列は数日の間に福原を離れるでしょう」

信乃と賀集子の所持品を調べていた者達が何かを発見した。

「永覚殿、これは何であろう」

「あ、それを奪らないで」

永覚と呼ばれた大坊主を中心に、武士や僧兵が一枚の紙に額を集めた。

「信濃国伴野庄ヲ賜フ。これは一院の御直筆だ。本物なら法皇の御使者という事になる。確かめずばなるまい。還都の兆候が見えるかどうか、この坂四郎永覚が福原を窺って来る故、それまで動いてはならぬ。この二人の怪しい女も逃がさぬよう、繋いでおくがよろう」

× × ×

十一月十九日。清盛は還都を発令した。

発輦は二十三日。四日の余裕しかない。

全福原に大騒動が捲き起った。

元の京へ戻る歓喜と移住準備の慌しさ。

御所、中宮、両院、摂関以下の卿相雲客、

平家の一門、郎党舎人の端に至るまで凡ゆる階層が突然の変化に沸き返った。

× × ×

信乃と賀集子は荒縄で後ろ手に縛られ、猿轡を噛まされた上、納戸の柱に厳しく繋がれている。警戒の為か邸内には火の気もない。中世の建築は隙間だらけ。寒気は壁と床を通して浸み亘る。

「永覚殿が戻られたぞ」

低い声だが口伝えに隅々まで行き届いた。潜んでいた人数が待ちかねたとばかりに表の方へと駆け集る。

× × ×

十一月二十三日。安徳天皇内裏を出御。

宝算三才の幼帝は国母建礼門院の膝の上。

幡旗先に立ち、奏楽従い、宝器を擁する公卿

や剣戟を帯する武士。前駆後衛の武者数千。

行幸の列は生田を出て肅々と東へ進む。

後白川法皇、高倉上皇の御一行も御所を出

て京へ向いつつある。公卿百官は慌だしく新都の館を捨てて京へ急ぐ。

「さしも憂かりつる新都に誰か片時も残るべき。我先に我先にとぞ上られける」と古典平

家物語は記している。それ程に福原の新都は不評判だった。清盛の理想は遂に理解されなかった。

この日、午前中は晴天なるも寒気膚を刺し夕方から夜にかけては氷雨が降りだした。

「還都は事実かと思われる」

永覚は瓢の酒を一杯仰いで、語りだした。

「福原から西宮にかけて路に溢れる人馬。騎馬武者、歩卒、牛車、輿、荷駄の列、又列。

日月の幡旗と思われるものも見えた。明らかに主上行幸の模様だ」

「して、行先は京に違いないか」

「淀川に数百般の川舟が繋いであり、人足は山崎にかけて待機している。そのみではな

い。時忠の手と思われる庁の武者数百騎は先駆して此方へ向って来るぞ」

× × ×

納戸の柱には信乃と賀集子が縄尻を繋がれている。時間の経過は解らず、手首の縄は全然、解けそうにない。

しかし猿轡だけは緩んできた。

「お姉様、みんな集っているわ。逃げるなら今の内よ」

「手提袋に足が届きそうですか」

「壁際までは届かないわ。届いてもペンナイフはもうないのよ」

「それでは逃げられないではありませんか」

「この柱、音がするわよ。腐っているのではないかしら」

水路、陸路に分かれた移住者の大群が寒風の中を京へ京へと向っている。

一八四九年移住者も、かくや。

ゴート族、大移動にも勝る。

この日清盛も親衛隊と共に福原を発した。

× × ×

信乃が足を踏ん張って柱ごと縄尻を引く。

大きな身体を揺すって柱に打ち当てる。

「お姉様、しっかり」

住む人に見棄てられ、雨洩りに腐朽した法住寺殿の柱は信乃の重量に抗し得なかった。

× × ×

「ここに留るわけには行くまい。我等は堅田の庄へ帰ろう」

山下義経以下、柏木、錦織等の近江源氏が立ち上った。

「拙僧達も南都の寺へ戻って時節を待つと致そう。さて二人の女の始末だが……」

永覚等の僧兵も京都撤退を決意した。

「やあ、何の音」

館の奥で木の裂けるような響き。

駆けつけると信乃と賀集子の姿は見えず。

「逃げたぞ。遠くは行くまい、捜せ」

「いや、その必要はないし隙もない」

永覚は一同を制した。

「今は一刻も早く京の外へ出よう」

近江源氏の武者や南都、北嶺の僧兵達は、法住寺殿を出て、散り散りに雪の中へ。

× × ×

西八条の館に入った清盛は諸將に命じた。

「知盛、忠度は兵三千を率いて近江の溢れ源氏を討伐せよ。重衡、通盛は悪僧共を警戒して京を守れ。時忠は検非違使庁の武者を以て

浮浪の輩を洛中洛外より掃蕩せよ」

× × ×

信乃と賀集子は雪の大文字山を踏み越えて

三井寺の焼跡に潜入していた。

「お姉様、寒いわ。凍えて死にそうよ」

「何とかして伊東へ行きましょう。この世界で永く生きられそうにはありませんもの」

× × ×

「荒れたのう。朕のいない間に、何者かが住

み荒らしたものと見える」

後白川法皇は法住寺殿に入御せられ、荒廃した館内を隅々まで巡り歩かれた。

「やや、朕の数珠が落ちているぞ。さては二人の巫女達、一度はこの館に入り、納戸に潜んだものと思われる。さて、どうやって尋ね出したものか」

—(未完)—

随 想

ル　ー　ル　違　反

予 世 場 良 三

先日、所用があつて悪友の一人を訪ねたところが当人が不在。あんなくしょうめ、電話での打合わせを何と書いてやる。と内心ムッ。カッパをたてたが、済まなざる奥さんに当りも出来ず、「すぐ帰るはずですから」と止められるのをいいことに、大らかな態度で待つことにした。応接間兼仕事部屋兼寢室のフル使用は私の家と同じ

利用法だ。勝手知ったる他人の家だから、奥さん独りといえども遠慮はない。ウチのカカアより四つ下でキレイだからサシで話すのもまた悪くはない……と思う間もなく現われた奥さんは、コーヒーを置くなり「済みませんが……」ときた。急に主人が出て行ったし、あなたがみえるから留守にするわけにいかなかった。チョット市場

へ行きたいのでお留守番を……という。この忙しい中をヒトの家の留守番に來たわけじゃねえといったが、相手はキレイだからそんなことが口に出せるものじゃない。肚の中とはまるで逆だが仕方ない。つくり笑いをして、これも大らかな態度で勤めることにした。

待つ間にムカッ腹も手伝って片中の飯沢匡氏の「直接表現」と題「一代記」の見出し。坐り直して読み出したのは勿論だが、高橋鉄氏の奇人紹介文というだけのこと。尚もパラパラとやると「漫画賞発表」が出て來た。受賞者は「小島功」だとか。奇ク賞てなものは出来ねえかな、と思ひながら「選評」なるものに何気なく眼を通して見て、ハッとなった。選考委員

隅に積み上げてある雑誌類をひっくり返してやる。ヌード集や週刊誌の間から『漫画読本六月号』が顔を出す。パラパラとやると、目についたのが、残酷画家伊藤晴雨

しての短文である。

“小島功氏への授賞は……”から始まるホンの寸感的なものに何かを感じるのは、およそケタ違いではあるけれど、私にも何か通じるものがあつたからだろう。

“……ただ今回まで、何故に授賞のことがなかったかといえば、それはエロティシズムの表現という点であつたことを申し添えて置きたい。誰でもお色気は歓迎するが常に直接表現は避けたい。そこが漫画という知的遊戯の困難なところで、安易な途を通過するのは、一種のルール違反であろう……”

この著名な漫画家が初受賞？と意外だが、数語の中に深い意味を盛り込む選者はさすがと思う。とにかく厳しい。

近頃、中間小説とか呼ばれるセックス対象文学が盛んだが、文学的価値からいうと、この厳しさは変らないだろうと思う。読んでみると、なるほどと納得出来るもの

もたしかに多い。

プロとアマの巧拙の相違は当然だし、その採り上げ方は根本的に大きな格差があるのだから、と承知した上でペンをとつても、どうしても進めない理由がわかつたような気がした。勿論、奇ク目標に書こうとした私自身のことだ。

赤裸々な告白的なものこそ尊く如何に一流作家の表現技術をもつてしても及ぶものではないと信じてガムシヤラに書きたいことを書いたこともあつたが、後になって読み返してみると、私自身の日記的秘蔵の価値はあつても、とうてい活字にして欲しいといえる性質のものではないことを思い知って自身でオクラにしている。“ルール違反”という言葉を読んだから思いついたわけではないが言論、表現の自由主張と、それが妥当であるかどうかは別にして、出版というものの現在のルールとは全然別個のものだから……などと、小

生意気にもいっぱしの執筆家気どりで考えこむカッコウは、傍からみればさぞかし噴飯ものだろうが私は真剣に思案に余るのだ。くだらないものでも書くことは好きだが、深く突込んで創造する能力のない私は、私ごとき者の作品？でも無視されることなく採り上げて貰える可能性のあるのは奇ク以外にないから、何とかして思うのだが、いかんせん。砂にヒツカカッて一向にかんじんの筆が進んでくれない。

承知の上で“ルール違反”をしておいて、あとはあなたまかせにすればいいとも思うが、やはり不本意である。素人は素人なりに、立人にならない良さがある筈だし、素人でなければ描けないもの、しかもルールは犯さないものも可能だとは思ふが、思うだけでなかなか書けない。

誌上に載った多角的見地からの感想、意見も読ませてもらって、

私なりに参考になっている積りだが帰するところは非才の悲しさを嘆ずるのみだ。もっと虚心になればよいのも分るが、いざ机に向うといつも非常に難産なのだ。そのくせ陣痛だけは激しく感じるから始末に悪い。ろくに書いた実績もないのに、ムヤミに深刻ぶるのも、私の性癖の一部かも知れないけれど“平凡こそ非凡”の意味がヤタラに頭の中で踊るのである。

こうなると自分に都合よく書けるはずの創造物でも、マゾのガールフレンドを、捜すのと大差はない。

どなたか、この迷える小羊ならぬ、アブマニア・アンド・コントリビューションマニアの指針となるような“活”を入れてくださる篤志家はおられないものか。

こういうことを書くこと自体、奇クにとっては“ルール違反”かも知れないが……。

緋

ひ

縮

ちり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第七回)

白鳥大蔵

ヤレツケの岩松

ヤレツケ、ソレツケという見世物は、きわめて卑猥な仕掛けになっていた。

幅六尺ほどの小さな舞台に、下半身をまる裸にした女が二、三人、両足をひろげた形で坐っている。むきだしにされたのをめがけておよそ一間半手前の距離から、客がタンポ槍で突くという遊びである。

三味線と太鼓で「ソレツケ、ヤレツケ、八文じゃ安い。上見て下見て八文じゃ安い。上突いて下突いて八文じゃ安い」と、にぎやか

に囃しながら客に突かせ、ときに命中すると女はけたたましい嬌声をあげ、ひととき高く太鼓がドーンと鳴った。

女は客に突かせまいと腰を前後左右にゆりうごかす。自然、それが卑猥きわまりない見世物になった。

タンポ槍でそれを狙う男はもとより、見物している者たちが、きくにたえない野次をとばしながら笑いこける。

岩松は、その見世物に、さらにアクの強い趣向を加えて、舞台の三人の女を、それぞれうしろ手に縛って、客の前にさらした。

緋色の襦袢をきせられ、上半身を縄で縛り

あげられた女たちは客のくりだすタンポ槍を避けて、いっそう卑猥にせわしく腰をうごかした。

むろん、木戸銭を払うのは男ばかり、の見世物である。東両国におけるこの種の見世物の木戸銭は八文であるのに、この岩松の「ヤレツケ」だけは、倍の十六文をとった。

それでも好色男どもの人気を呼んで、いつも押すな押すなの盛況であった。

もともと泥臭い、品の悪い見世物である。

それを、いっそう品を落とし、あくどい趣向で見せて儲けている。このヤレツケの岩松という香具師も、したたかな男にちがいな

った。

立花屋久六が、その岩松を、自分にあてがわれた部屋である、奥の離れへ呼び寄せた。

「ふいに押しかけてきて、世話になるな、岩松」

と、寝床の上に半身をおこして、久六がいった。

この深川扇橋の岩松の家へ、いきなり押しかけてきたのは、久六ひとりではない。大切な人質の大津屋の娘お雪、女掏摸のお京、用心棒の寺尾半九郎、そして、めかけのお仙まで引きつれての居候一座だ。

「なあに、日頃、兄貴にはいろいろと面倒をかけている。いざというときには、役にたつてえと思っていたのさ」

と、岩松は如才のない返事をする。

「ありがてえ。そう言ってくれと、おれも気が楽だ。おめえも大方察しているだろうがおれはここところ、ちょっとした仕事にとりかかっているんだ。相手をあまくみて、この通り片腕を無くしちゃったが、なあに、まだ負けたわけじゃねえ。本当の勝負はこれからだ」

と、久六は片腕のない肩をそびやかした。しかし、斬られた右腕の傷口の痛みに、思

わず顔をしかめる。

「無理しちゃいけねえよ、兄貴。くわしい事情は、あとでゆっくりきかせてもらうさ。それより、おれで出来ることなら、なんでも力を貸すぜ。遠慮なく言ってくんねえ」

岩松は、顔の筋肉をうごかさずに口のなかで、ぼそぼそといった。

この男は、その名の通り、いつも岩のように無表情で、感情を外にあらわさない。

顔色も赤黒く、巨大な団子鼻が顔のまんなかについていて、久六よりもさらに醜い容貌をしている。

久六がこれまで、この男にとくべつに目をかけてやってきたのも、自分よりも醜い顔つきをしているせいかも知れない。

「じつはな、岩松。そのことで、おめえをこへ呼んだんだ。さっそくだが、ちょっと面倒な頼みがある。……日本橋伊勢町の廻米問屋、大津屋の女房で、お静という女をひっさらってきてもらいてえのだ」

「そんなことか。雑作もねえ」

と、岩松は、そくざにうなずいた。

あまりあっさり引き受けたので、久六のほうに不安になって、岩松の赤黒い大きな鼻をみつめた。

「今夜のうちに、ひっそらってくる」

「大丈夫か？」

ときく久六へ、

「兄貴、かどわかしか、おれの商売みてえなものなんだ。ヤレツケの女たちだって、無理やりひっさらってきたやつを、男のからだで往生させて、見世物にだしてるんだ。その気になりゃ、公方さまのご息女だって、ひっそらってくるぜ」

ぶすりとした顔のまま、岩松は大胆なことをいった。その無表情が、久六にはやっぱりたのもしく思える。

新助も銀三も源次も、みんなおれを裏切つて死んだ。あいつらにくらべりゃ、さすがに一本立ちの見世物師として世間を渡っているだけに、この岩松のほうにすこしはたより甲斐がある。

いざというどたん場になったら、敵になるか味方になるかわからねえが、まあいまのうちはせいぜい利用してやれ。久六は腹のなかでソロバンをはじいている。

岩松のたのもしい言葉通り、その夜のうちに、大津屋彦兵衛の女房のお静は、深川扇橋の、この卑猥な見世物師岩松の家へ運ばれてきたのだ。

人妻みだれ

熱でもでたのか、またからだは火照っている。右腕を斬り落とされたその傷口が、まだふさがらずに疼いている。あるいは化膿したのかもしれない。

しかし、お静を前にした久六は、寸時、傷の痛みを忘れていた。

いや、いまは、なにもかも忘れて、お静の以前よりも美しさを増した容貌を凝視している久六だった。

お静は動けない。逃げる事ができない。縄でうしろ手に縛りあげられ、おまけに、べつの縄で柱に縛りつけられているのだ。

口には、汚ない手拭いのさるぐつわが噛まされていた。それが、息もつけないほど苦しい。

あつという間の出来事だった。

お嬢さんからの使いの者だという男に、裏堀の外までこっそり呼びだされ、とたんに、いきなりとびかかられて、さるぐつわを噛まされた。うしろ手に縛りあげられ、駕籠の中に押しこめられると、当て身がきて気を失った。

気がついたときには、妙に埃っぽい汚ない座敷の柱に縛りつけられていて、目の前には久六の顔がニタニタ笑っている。

悪夢をみているとしか思えない。しかし、肌身にいくこんでくるこの縄の痛さは、夢ではなかった。乳房の上と下にかかっている縄が、呼吸をしめつけてくる。

「しばらくだったなあ、小静」

と、お静の顔をのぞきこむようにして、久六がいった。

お静は目をあげて、久六の顔をみた。

自分の名を、小静と呼ばれたことで、この男への記憶がよみがえった。ハッとして、みるみる瞳孔がひろがっていく。

「フフフ……。どうやら、おれがだれだか思いだしてくれたいらしいなあ。そうだよ、久六だよ。香久師の元締の立花屋久六だ。お前が柳橋で左轡をとっていたころ、お前に惚れてさんざん通いつめた男だよ。フフフ……」

「……」

お静は無言だ。返事をしたくとも、さるぐつわが固く口のなかにねじこまれている。眉のあたりが、こまかくけいれんしている。

「惚れて惚れて通いぬいたこの久六さまを、よくも嫌いぬいてくれたなあ。おまけに、お

れを袖にしたあげく、なんのことはねえ、大

津屋彦兵衛の後妻におさまってしまいやがっ

た。おれは、くやしかったぜ、小静。お前の

ためには、ずいぶん金を使ったからなあ。金

を使ったわりにゃあ、口も吸わせてもらえな

かった。……あのときの礼を、ここでたっぶ

りとさせてもらおうってえ寸法だ。どうだ、

わかったか。わかったら返事をしろい」

久六は左手をのばして、お静の膝の上を、着物の上からぎゅうツとつねった。執念ぶかい男の嫉妬だ。

「ううむッ」

と、お静はさるぐつわのなかで、せつない悲鳴をあげ、縛られている身をよじった。

「そうか、こいつはおれが悪かった。口をふさがれてちゃあ、返事をしようにもできねえ道理だ。よし、とってやる。おとなしくしていろよ」

左手だけを使って、久六は器用にお静のさるぐつわを解いた。

口が自由になると同時に、お静は切れ長の鋭い目で、久六をにらんだ。

「卑怯者！」

ほそいが、火のような激しさでいった。

「卑怯者だど？ べつに卑怯とは思ってはい

ねえな。人それぞれ、生きていくには流儀がある。女を抱くにも流儀がある。おれが女をかわいがる流儀は、つまり、こんな具合さ。もっとも、お前にここへ来てもらったのは、お前にあのとときの礼をするためと、もうひとつ、人質になってもうたためもある……」

舌なめずりして、久六はいった。

青ざめたお静の美貌を、なめるようにして眺めている。すぐに手をのばすのは、惜しいような気もする。

長年の思いが、やっとかなったのだ。

お静のからだを、やっと自由にすることができののだ。

芸者に出ていたころよりも、いっそうなまめかしさを増し、しっとりと落ちついた女の色香が、白い咽喉首のあたり、腰の肉づきのあたりからにじみでてくるようである。

人妻らしいゆたかな胸の盛りあがり、着物きていても、よくわかる。その胸を縄がしめつけている風情は無残だ。

この無残な風情に、久六は目をほそめる。かわいさあまって憎さが百倍とは、よくいったものだ。もっとも、この女をいじめてやりたい。

『大津屋彦兵衛に毎晩抱かれて、女としての

色気と美しさに磨きのかかったこのお静を、もっともっと責めさいなんでやるのだ。

くそッ。彦兵衛のやつは、どんな抱き方でこの女のからだを濡らし、しがみつかせ、泣かせるのか。

お静の顔を、穴のあくほどみつめながら、久六はじりじりと膝で這って近寄った。

「そばへ寄らないで、寄らないでッ」

片腕のない不気味な久六の接近に、鬼気せまるような恐怖をおぼえて、お静は首を横にふりながらあえいだ。

「寄らないでッ、あっちへ行行って！」

うしろへ逃げることはできないのだ。固い柱に縛りつけられている身だ。

「ふふふ……いい女の顔ってえものは、そうやって、おびえているときも、またオツなもんだぜ」

そんなことを、わざときかせるようにいいながら、なおもいざり寄ってくる久六だ。

久六の額には、べっとりと脂汗が光っている。それがこの男の人相を、いっそう不潔な野卑なものにしている。この顔で、柳橋の売れっ子芸者をくどいたところで、もてるはずがない。

顔も醜悪だが、やることなすこと全部が野

暮で泥臭い久六なのだ。それを自分で承知しているからこそ、よけいに邪念がふくれあがって、横車を押し通したくなる。

お静の鼻さきの、息のかかるところまで近寄ると、久六は歯をむきだして、ニヤリと笑った。汚ない歯だ。おまけに、魚の腐ったような口臭が吐きだされる。

あまりのいやらしさに、お静はかたく目をつぶり、顔をそむける。すると、その顔をそむけたほうへ、久六の口臭がしつこく追ってくるのだ。

「いいにおいがするぜ。人妻のにおいだ。女盛りの肌のにおいだ。男ごころをとろかせるにおいだ。てへへ……たまらねえや」

犬のように鼻をクンクン鳴らして、久六は顔を寄せて、お静の胸から腹の下のあたりまで嗅ぎまわる。

「け、けだものッ、あたしにさわったら、舌を噛み切って死んでやる！」

お静は、唾を吐くようにしてさげんだ。芸者のころの、気の強い、鉄火な女にもどっていった。

「舌を噛んで死ぬだど？ ほほう、おもしれえじゃねえか。おれはまだ、女が舌を噛んで死んだところを見たことがねえんだ。こいつ

はおもしろえ。やって見せてくれ。舌を嚙んで死んでみせてくれ。ただし、お前が死んだそのあとで、その白いからだを、ゆっくりと頂戴するぜ。この久六さまはな、惚れた女だったら、つめたくなった肌だって、よろこんで抱く男だ。みそこなっちゃ困るぜ」

久六のほうが、一枚も二枚もうわ手だ。

お静は、おぞましさに身をふるわすと、くやしげにうつむいた。

久六は、せせら笑った。

「まあ、いいってことよ。ここまできたら、おれはもう、あせらねえ。お前のほうから、久六さま、どうぞ私を抱いてください。この通りお願いします、と頭をさげるまで待っていてやる。嘘じゃねえぜ。かならず言わせてやる。そのための道具だって、ちゃんと用意してあるんだ。まあ、みていろ」

久六は左手を畳につき、不自由な恰好で、よろりと立ちあがった。

「楽しみに待っているよ。なに、すぐもどってくる」

いいのこすと、障子をあげ、廊下へ姿を消した。

不安が、お静の胸の底からわきあがってきた。久六のことだ、なにを考えているのか、

なにをされるのか、わからない。絶望的な恐怖に、お静は気の遠くなる思いだった。

蛇の腕

久六は、二人の女を連れて、まもなくこの部屋にもどってきた。

一人は、めかけのお仙である。

そしてもう一人は、緋縮緬の腰のものをたった一枚身にまとわされただけのお雪であった。

しかもお雪は、左右の細い腕をたかだかと背中へひとつに縛りあげられた、むごたらしい姿だった。

十六歳の可憐でういういしい乳房が、胸にかけられた縄によって痛々しく盛りあがり、そのうす紅色の頂天は、小豆粒ほどの大きさにとがっていた。

縄じりをつかんでいるお仙が、そのお雪の肩さを、背後から乱暴に突いた。

よろめいて、お雪はこの部屋に入った。

柱に縛りつけられているお静が、思わず顔をあげて、突きとばされて目の前によろけてきたお雪の姿をみた。

つぎの瞬間、お静は首をのばしてさげんで

いた。

「あっ！ お雪ちゃん！」

自分の名を呼ばれて、お雪は反射的にお静の顔をみた。寸時、わからなかった。が、瞳をすえて相手をたしかめると、たちまちお雪の顔が、くしゃくしゃにゆがんだ。

「あっ、おっかさん！」

お雪は、もう泣き声になっていた。お雪にとって、お静は、ものわりのいい、やさしい美しい継母だった。お雪は心の底からお静を母親と思い、慕っている。

お静もまた、素直で気だてのいいお雪を、自分で腹を痛めた娘のようにかわいがっている。

「おっかさんまで……」

泣きながら、お雪はいった。家にいるはずのお静が、なぜこんな所に縛りつけられているのか。お雪にわかることは、なにもないのだった。

杖代りの青竹を左手に持った久六が、その青竹の先をお静の白い頬に寄せながら、小気味よさそうにいった。

「どうだ、お静。お前が自分からすすんで、おれに抱いてくださいといわねえかぎり、この小娘は、ひどい目にあうんだぜ。しかも、

母親のお前が見ている前で、とんでもねえ目にあうんだぜ……」

青竹の先が、お静の片頬をピタピタと叩いた。

「ひ、卑怯者、あんたという人は……」

憤怒のために、お静の目が血走った。

その血走った目の奥を、のぞきこむようにして久六はいった。

「お前を力づくで手ぐめにしたくとも、おれはこの通りの片腕だ。だから、お前が自分のほうから、おれにやさしく寄りそってくれなけりゃ、おれはなんにもできねえんだ。わかったかい、ええ、お静」

「ち、ちくしょう！」

噛みしめた歯のあいだから、無念のうめき声もれる。

そばで二人のやりとりを眺めていたお仙がふいにゲラゲラ笑いだした。

「こいつはおもしろいや。片腕の親分が、どんな恰好で女を抱くのか、こいつは一番みものだねえ」

お仙は赤い顔をしてだらしく笑いころげる。女のくせに酒好きのお仙は、もう一杯ひっかけているのだろう。

旦那の久六がほかの女を抱こうというのに

平気でゲラゲラ笑っている女だ。もともとお仙には、久六に対しての愛情なんか、小指の先ほどもない。ぜいたくができて、うまい酒がのめるから、久六のそばにくっついていっただけである。

「お仙、バカ笑いしてねえで、手伝え」

さすがに、にがい顔になって久六は叱りつけた。お仙は、まだ口をあけて笑いながら、

「手伝うって、なにをするのさ？」

お静の胸もとを、青竹の先端でぐいぐいこじりながら、久六はいった。

「まず、この女の縄を解くんだ。こんなに固く縛っておいちゃ、抱きたくとも抱けねえじゃねえか」

「ちくしょう、だれが、あんたなんか抱かせるもんかい！」

鉄火な言葉が、お静の唇からほとばしる。縛られてはいるが、それは柳橋に出ていたころの、歯切れのいい江戸っ子芸者の姿を彷彿させた。

「そうか、おれには抱かれたくねえか」

「あ、あたり前だい！」

「なあに、抱いてやるさ。いやだというのなら、こっちは、こういう結構な責め道具がある……」

久六は、お仙に目くばせした。

待ってましたとばかり、お仙は、お雪の縄じりを、ぐいっとな自分の手もとに引いた。

「あッ」

と、小さく悲鳴をあげて、うしろへよろけるお雪のからだを、お仙は待ちかまえていてぎゅうッと抱きとめる。

そして、お雪の愛らしい耳たぶへ、熱い、酒臭い息を吐きかけるのだ。

「さあ、お雪や、旦那さまのおゆるしがだよ。また楽しませてやるよ。おっと、楽しませてもらうのは、あたしのほうかねえ。いひひひ……」

卑しい笑い声をあげながら、お仙のむっちりした白い腕が、蛇のようにお雪のからだに巻きついていく。

「あッ、ゆるして、ゆるしてッ」

お仙の魂胆のおそろしさは、存分に肌身の奥まで知りつくしているお雪であった。

背筋をはかなくのけぞらせ、小さな乳房をふるわせてお雪は哀願する。いくら首を左右にふり、肩をゆすつても、うしろ手に縛られている身では、からみつくお仙の手から離れることができない。

のけぞればのけぞるほど、緋縮緬の腰のも

のが、いたずらに割れ、太腿までがあらわになる。

「あばれるんじゃないよ。こうして、また楽しませてやろうというんだよ」

クッククックと咽喉で笑いながら、お仙の手は、きわどいところへのびるのだ。

お雪は必死になって腰を折り、前屈みになる。しかし、いくら避けようとしても、お仙の手は執拗で巧妙な動きをみせて、ねっとりとのびてくる。お雪の唇がひらき、齒の奥で小さな悲鳴をあげた。

「やれやれ、お仙、遠慮するな」

久六が、にたにたしながらいった。

「だれが遠慮なんかするもんかい」

よけいに勢いづいたお仙は、酒の酔いも手伝って頬を上気させ、お雪のからだをまさぐることに、もう夢中である。

「あッ、やめて、やめてください！」

お仙の手が、どこをどうさわったか、お雪はひと声高くあげて上半身を前に折り、畳の上に両膝をついた。

小さい唇を花びらのようにふるわせて、羞恥の悲鳴をあげる。お仙は、その背後からのしかかるようにして、腕をのぼすのだ。

お雪は花をむしられるようにして無残にひ

らかれ、悲鳴はすぐに黄色い泣き声と変わっていく。

お仙の指が、べつの生きものになって呼吸しはじめると、お雪の皮膚はすぐに粘っこい汗をふきだしてくるのだ。

目の前で、突然展開した光景に、お静は動転した。

「な、なんということ……やめて、やめてください！」

思わず顔を前につきだして、お仙のあらぬ所業をやめさせようとしたが、お静もまた、柱を背に縛りつけられている身では、肩をふって声をあげるのが精いっぱいだった。

自分の目の前で、娘のお雪が、世にも痛ましい狼藉に苦しんでいる。自分の腹を痛めた娘ではないが、それだけに、彦兵衛に対して大きな義理のある娘なのだ。

いや、娘とか母親とかいう間柄でなくとも管通の神経をもつ一人の女として、それは正視できない恥知らずの光景だった。

お仙は背後から首をのぼし、お雪の耳たぶを噛みはじめた。火のような戦慄が、お雪のからだの中心を走りぬける。

「あッ、ひいッ……も、もう、ゆるして。あッ、や、やめて……」

お雪の齒が、カチカチと鳴っている。お仙の舌のさきがまるくなって、お雪の耳の穴をなまぬる、くくすぐりはじめる。

「あッ、あッ……」

おぞましき、羞恥、苦痛。そして、その苦痛のなかからにじみ出てくる妙な感覚。

十六歳のお雪にとっては、生まれてはじめての感覚だった。その感覚は、この数日間、お仙のねばっこい愛撫によって生まれ、育てられてきたものだった。

お雪の唇が、熱いなまぐさい息を吐きだして大きくひらかれ、縄のかかっている胸が、ひととき激しくのけぞった。

「や、やめて、ぬぎます。自分でぬぎますから、もうそれ以上、お雪を、お雪を苦しめないで……」

お静は、前後を忘れてさけんでいた。

この一瞬、ためらいも自尊心もかなぐりすてたお静だった。

お雪を攻撃するお仙の手を、寸時でもやめさせたい衝動で、お静は無我夢中でさけんでいたのだった。

「お仙、やめろ、お静がとうとうあんな泣き顔になって降参したぜ。自分からぬぐと言いだしやがった」

ヒヒヒ……と、久六の卑しく勝ち誇った笑い声が、この部屋にひびきわたった。

母 娘 涙

お静は、玄人あがりの女だ。

十五の年に、すでに生娘ではなくなっている。しかし、男嫌いといっふのよきで、評判をとってきた女である。

羞恥の心は、いいかげんな堅気の女よりもよっぽど多く持ち合わせている。

そのお静が、義理ある娘の危難を目の前にして、自分から脱ぐといいだしたのだ。

「ぬぎますから、この縄を解いてください」
そういつて、お静は血のどろどろと強く唇を噛みしめた。

「おい、お仙、お静の縄を解いてやれ」

と、久六が命じた。

「あいよ。このきれいな大店のおかみさんがお前さんみたいな男の前で自分から着物をぬぐなんて、ずいぶん、はしたない真似をするじゃないか」

そんなことをいいながら、お仙は、お雪への粘っこい攻撃を惜しそうに中止した。

そして、左手につかみっぱなしにしている

お雪の縄尻を放し、こんどはお静の縄尻を解きはじめる。

背中に縛りつけられていた左右の手首は、強くからみついた縄のために血行がとまって紫色になっている。手の指の尖端は、ほとんどつめたくなっているのだ。

くいこんでいた縄が離れると、胸のあたりがふいに自由になった感じで、お静は思わずふうっ大きな息をついた。

「さあ、約束どおり、ぬいでもらおうかな。柳橋の芸者小静の……おっとちがった、いまは廻米問屋大津屋女房お静の、亭主のほかにだれにも見せねえ雪の肌を、じっくりと、すみからすみまで、拝ませてもらおうじゃねえかい」

ことさらに意地悪い声音で、お静の胸や腹をじろじろと眺めまわしながら、久六はいつた。

縄を解かれたお静は、ふわりと力なく立ちあがった。

帯に手がかかる。が、そこで手の指が、ためらいをみせてとまった。この野卑な男と、その情婦の目の前で肌をさらすのは、よほどの勇気がいることだった。

「どうした、なにを考えているんだ。考える

ことは、なにもねえんだぜ。おれはなにも、むずかしいことを注文しているわけじゃねえんだ。だれでもできる、一番かんたんなことをやって見せてくれと言ってるんだぜ」

久六が、齒をむきだして笑う。

しかし、お静の顔は、羞恥と無念さに自然にうつむき、久六の卑劣な言葉に、思わず反抗の姿勢をとるのだ。

したたかな久六には、その反抗が、また楽しみの道具になる。お静が素直に帯を解いては、あまりおもしろくない。

どうせしまいに解くことになるお静の帯だ。いまさら、あわてることはない。

「そうかい。わかったよ。いやだと言うんだ。義理の娘の泣き声を、もっとききてえというんだな？」

「そ、そんな……」

「いいんだ、いいんだ、おれも本当のところは、お前にそんなむごい真似はさせたくねえんだよ。まあ、もうすこし、お雪がどんな顔をして泣いたり吠えたりするか、そこで見物しているんだな」

そういうと、久六はお仙にチラと目で合図をした。

「あいよ」

お仙の手が、またお雪の愛らしい羞恥への
びた。たちまち、お雪の痛切な悲鳴があがる
のだ。

「あッ、ひッ、ひいッ……おっかさん、助け
て、ゆるして……ああッ……いやです、やめ
てッ、そ、そんな……」

お雪は、身を紐のようによじって悶えるの
だ。いくら悶えて逃げようとしても、お雪を
縛った縄尻は、またしっかりとお仙の手に握
られている。

お仙の右手の先端は、さっきよりもせわし
くうごめきはじめる。それがどんなに残忍で
巧妙な攻撃をしているのか、お静の目には、
はつきりとは見えない。

しかし、お静の耳に入る悲痛な泣き声で、
およそは察しられるのだ。

「あッ、い、痛いッ。お願いです、おっかさ
んの前で、もう、そんなことは、やめて……
ああ、やめて、やめてッ……」

お雪は、髪をふりみだして、ぎくんとけ
ぞり、また前に倒れるように屈身する。

「待ってください、ぬぎます。すぐにぬぎま
すから、お雪ちゃんをそんなに、そんなにい
じめないで……」

お静は耐えきれずに、さっきと同じことを

もう一度さけんでいた。屈辱の涙が、ポロポ
ロとお静の頬を伝わった。

お雪も、うめきもだえながら涙を流してい
る。その母と娘の顔を見くらべながら、久六
がいった。

「本当か。すぐにぬぐかい？」

「ぬぎます。だから、もうお雪は放してやっ
て」

「ふふふ……そうかい。よしよし、お仙、や
めろ。大津屋のお内儀さんが、着物をぬいで
くださるとよ」

お静は、歯をくいしばって、帯紐から解き
だした。こんどは本当に決心したらしい。

芸者あがりの美しい女房のからだから、つ
ぎつぎに着ているものがすべり落ちていく。

「みんなだぜ、おい、お静。着ているものを
みんなぬぐんだぜ」

念を押すように、久六はいった。

おれの夢が、やっとかなえられる。久六は
ぞくぞくした。この女をすっ裸にひんむいた
ら、両手を背中にねじりあげて縛りあげてや
るのだ。一片のなさけ容赦もなく、力をこめ
て、肌がくびれあがるほど、ぎりぎり縛り
あげてやるのだ。

芸者とお客のとき、さんざんふられた腹い

せに、思う存分の辱ずかしめを加えてやるの
だ。この久六さまの男らしさを、いやという
ほど思い知らせてやるのだ。

お静のまるく白い肩さきが現われた。久六
は、それだけでもう、うっとりとして、濁っ
た視線を、むき玉子のようなその白い部分に
集中させるのだった。卑猥に光る久六の目の
色におびえたお静は本能的に、くるりと久六
に背を向けて着物をぬぐ。

「なにも、壁を向いてぬぐことはあるめえ。
やい、お静、こっちを向け。こっちを向いて
その長襦袢をぬぐのだ。もうそろそろ観念し
たほうが身のためだぜ」

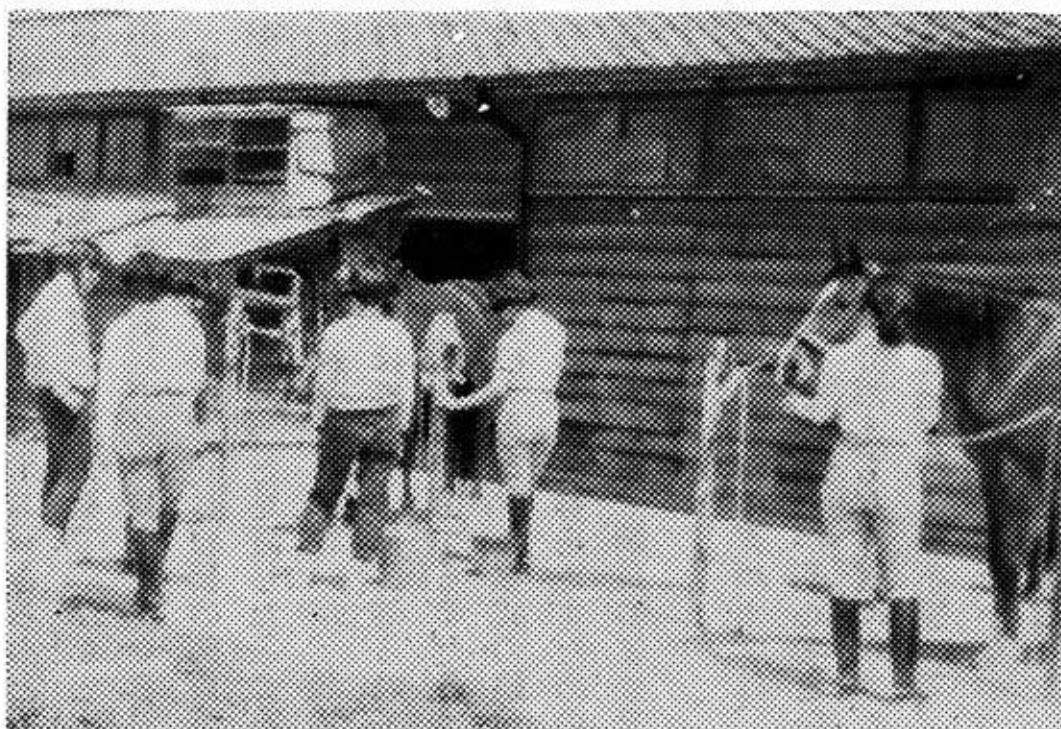
久六のこの言葉に、お静の全身は羞恥とく
やしきで、わなわなとふるえるのだ。

お雪が捕われていなければ、久六の咽喉笛
に食らいついても反抗してやるのだが。

いまは、じっと耐えるより仕方がない。義
理のある娘を、たとえ一時でも、毒牙から遠
去けねばならないのだ。

「こっちを向かねえと、またお雪が泣くぜ」
鬼のような久六の声に、お静は目をつぶっ
て、また久六とお仙の前に向き直った。

あとお静の肌に残っているのは、腰に巻か
れた水色の布きれ一枚だった。(つづく)



ルポルタージュ・・・

女子大馬術部探訪記

佐野 寿

今年の春頃であったか、ある週刊誌に女子学生のスポーツクラブ訪問記なる連載物が載ったが、私の知る限りでは、種々のスポーツが紹介されたが未だ乗馬部の記事はなかったようだ。それでというつもりではないが、私が九州旅行を兼ねて見学させて貰った、カトリック系ミッションスクール（女子大学）乗馬部の模様についてルポしてみたい。

この女子大の本部は長崎だが、まだ全学部を統一するところまでいっていないのか、学部によっては二十五キロも離れた処にあり、クラブ活動のグラウンドも方々に点在しているようである。私が訪れたのは晩春の頃だったが、かなり暖い日に恵まれた。

長崎北部のターミナルから、目的の女子馬術部の馬場まではバスで二十五分程かかるという。仕方なく揺られる羽目になったが、窓から見ているうちに、却ってよかった気がし出した。道々すれ違う人々の中で、ハッと眼を凝らすような美しい人が少くなかったからである。すでに長崎駅で感じていたことだが土地柄かどこか異国情緒豊かで、オランダ系を想わすスラリとした色白美人が多いように思う。

バスを降りてから松林の間を数分歩くと、目指すグラウンドが見えたが、ここもまだ未完成だった。だが、その外れに設けられている馬場は整備済みらしく、既に調教が始まっているし厩舎特有の臭いが流れて来て、遠く眺める私の鼻をくすぐる。私の足は自然に早くなって吸い寄せられていった。

馬場では、はつらつとした女子大生のリリしい乗馬姿があった。馬は八頭出ていた。適当に開けた距離を保って輪を描く真中に、鞭を片手のキャブテンらしい一人が立って、号令をかけ注意を与えている。馬上の各騎手は注意を受けると元気よく返事をしている。この声がいかに新鮮な感じで、テキパキと実に気持ちよく響く。

全員が揃いの白いユニホーム、きちんと折目のついた乗馬ズボンに黒長靴で、かかとの拍車キラキラ反射して私の胸をくすぐる。

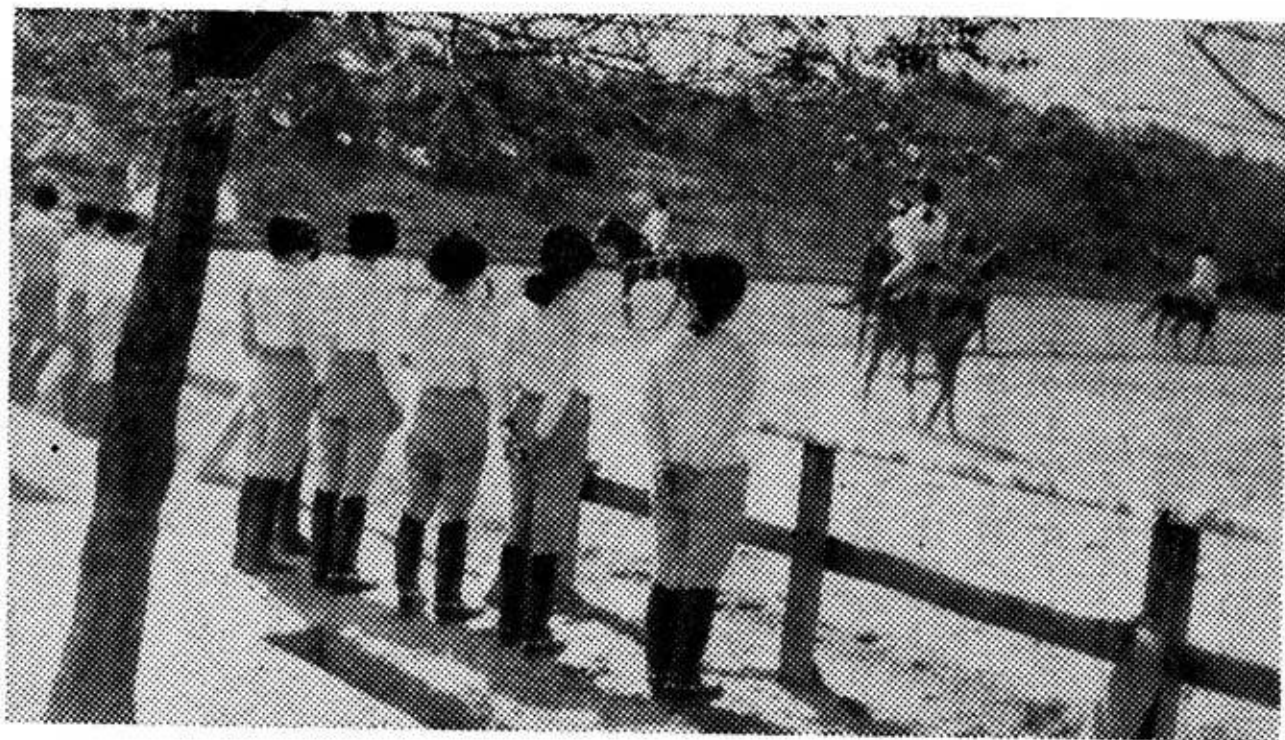
広い馬場の柵の処には、同じ服装の部員が並んで見詰めている。ざっと見渡したところ二十人は下るまい。マネージはないが、馬場は大きな長方形で、ほぼ三等分に区切られている。恐らくは熟練度別に使用するのだろうと思えるが、最左端に大きなツイ立式の鏡があった。勿論、各自の乗馬姿勢を正すためのものだろう。この大きさなら、騎乗のままで十分に全身が写る。

後で聞いたのだが、この時のグループは、一年生だったそうで、その殆どが初心者という。そのわりには、介添えもなく堂に入ったものだった。ただ、駆足に移る際不揃いで、号令一下、一斉にというわけには行かなかったから、技術的には新米さんとわかる。

キャプテンは四年生の英文科の人だそうでキビキビと号令する姿や、叱咤する度に土を蹴るようにする細めの長靴が、私にはなやましく迫る思いだ。

大学の性質上、彼女達はきつと上流家庭の令嬢ばかりと思うが、見ている限りでは仲々に荒っぽい。乗馬をオシトヤカには出来難い

だろうが、言葉だけ聞くと男子顔負けの感じである。……「姿勢が悪い！ 背中をしゃんとするッ」「ハイッ」……「手はちゃんと下



ろす！ 何度云わせる気！」「ハイッ」……「こら又下を向くッ！」「ハイッ」……「拍車を入れるっていったのが聞えないのッ！ ばやばやしないでッ！」「ハイッ」……といった調子だが、これがまたソプラノ調でなんとも私にはセクシーに感じるのだ。ただその厳しさは、仲々のものだ。私は欧米で、向うの女子学生グループの練習風景を幾度か見せて貰って来たが、この調子だと、この方がずっと厳しいように思う。

新米アマゾンに代って、柵の処に居た二、三年グループが調教を始めた時に、私は幸運に恵まれた。尤も、これも後で聞くと、ここではとり立てて珍らしがることもなかったそうであるが、落馬があり、癖馬懲戒の場が目撃出来たのだ。

上級生達の騎乗ぶりは、さすがに前グループとはどことなく違っていた。輪の周り工合もスムーズだし、歩足の切り換えも新米さん達のように乱れない。中央の人副キャプテンに代ったが、一年生ほどではないが、やはり叱責の声は飛ぶ。

やはりキャリアの違いは大したものだと私が感心していた矢先に変事？ が起った。突然に一頭がギャロップし始めたのだ。



矢継早に副キャプテンの注意がとび、ば声に変わった。女騎手が必死に手綱を引きしめようとしているさまがよくわかるのだが、馬は一向に止まる様子がなく、全速で馬場を駆け廻る。柵の前を駆け抜ける時、私は思わず後退った。大したポリュームと勢いである。

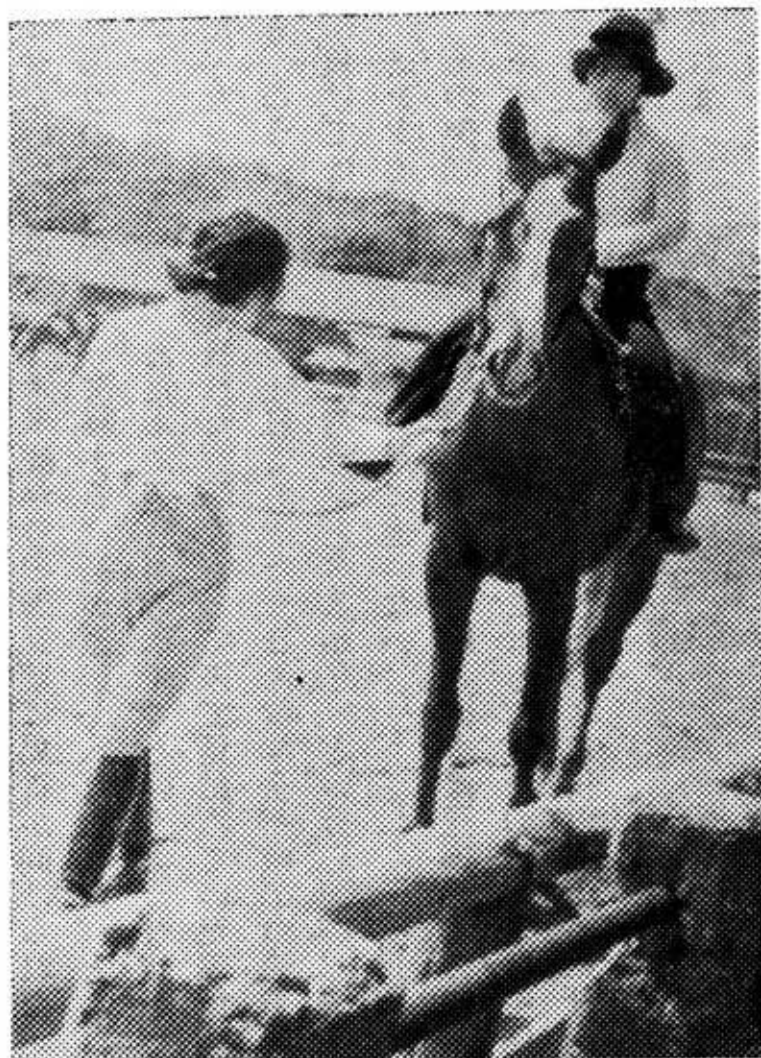
「キャア」という声が、その馬の行手で起きる。四、五周も走り抜けて少し勢いが静まったが、女騎手は平衡を失ったものか、鞍の前に体がはみ出し、両手で抱きつくようにたてがみをおさえ、脚は馬腹をねじるように挟みこんでいた。静まったとはいえ停止した訳ではなく、馬は頸を振り振り駆け回っているのだ。そのまま二周ほど廻ったが、騎手はじりじり下ってついに左前方辺りに振り落されてしま

った。私はハッととなったが、女騎手はしりもちをつきながら両手で必死に手綱をひっぱった。落ちてても手綱を放さないところはさすがである。皆が駆け寄っていったが、それまでに馬はどうやら停止していたようだった。それでも真先きに駆けつけたキャプテンに手綱を預けて起き上った彼女は、きれいだったユニホームは汚れ相当のショックを受けた表情だった。幸いどこも怪我はなかったらしい。

欧米でも、落馬場面に行き合ったことは幾度かあったが、こんなに迫力のあるのは始めてのことです。ヒヤヒヤした。

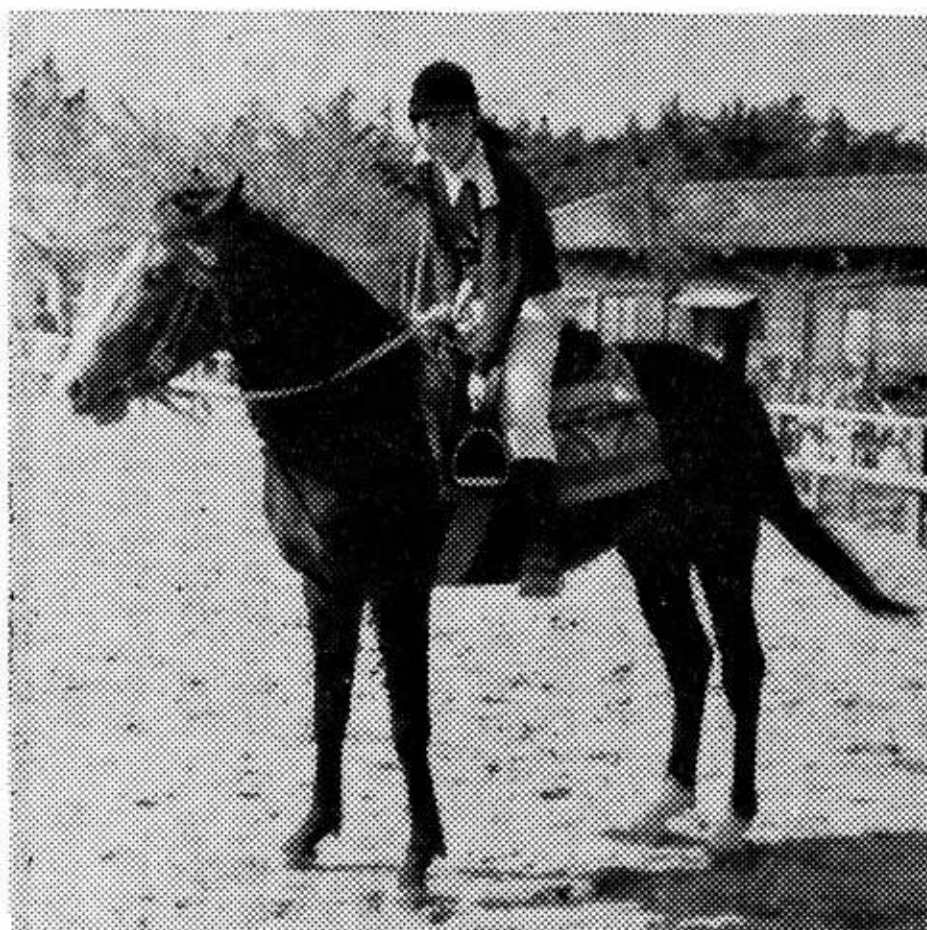
幸運だったのはそれからこのことで、キャプテンの見事な調教ぶりが見られたのだが、これだけでも、はるばる来た甲斐があったと思うのだ。

キャプテンは、尚も首を振っては足掻いている馬に人参を与え、額を二、三度軽く叩くと勿ち鞍上のアマ



ゾンと化した。皆が心配気に見上げるのをニッコリと受けて、馬の気を晴らさせてでもやるのか、ギャロップさせ始めたのだ。先程と同じように柵に副って馬の疾走が始まった。ただ違うのは、鞍上のアマゾンの姿勢だけだ。さっそうとした馬上の麗姿を見てみると、私にはその馬が、今やキャプテンの豊臀下で無理に走らされているように思えた。

全速ギャロップで輪を描きながら、馬は背をくねらせてキャプテンを振り落そうとしているのがよくわかるのだが、それが激しくなり始めると、アマゾンの、あらゆる扶助を使



っての馬責めが開始されたのだ。拍車がグサリッとはかりに幾度か蹴り込まれ、答の連打が間断なく続く。馬はますます反抗する。全員がこの馬と女王の格闘姿をじっと見詰めている。全く手に汗を握る場面だった。

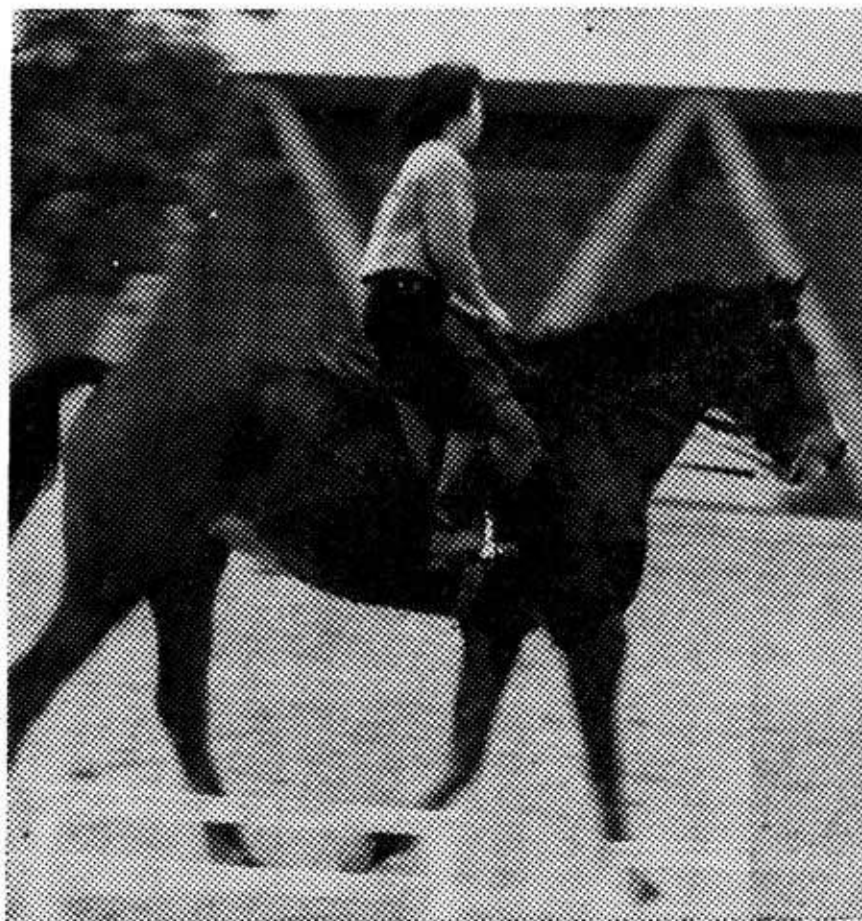
狂ったように走り廻る馬は、轡のわきから白い泡をふき出し、栗色の皮膚が汗で光り出しても、まだ鞍上の女王を振り落そうとしている。どの位の時間だったのか、夢中にな

っていた私には思い出せないが、次第にキャプテンの顔に怒りの表情が浮かび上がったのがわかり、答の音も激しさを増したようだった。

キャプテンとしても、こういう場合、全員の眼前で馬に負けてはコケンにかかわるだろう。メンツの関係があつたと思うが、その懲罰よりは激しかった。だが、私の眼では、馬はまだまだ参りそうに思えない。

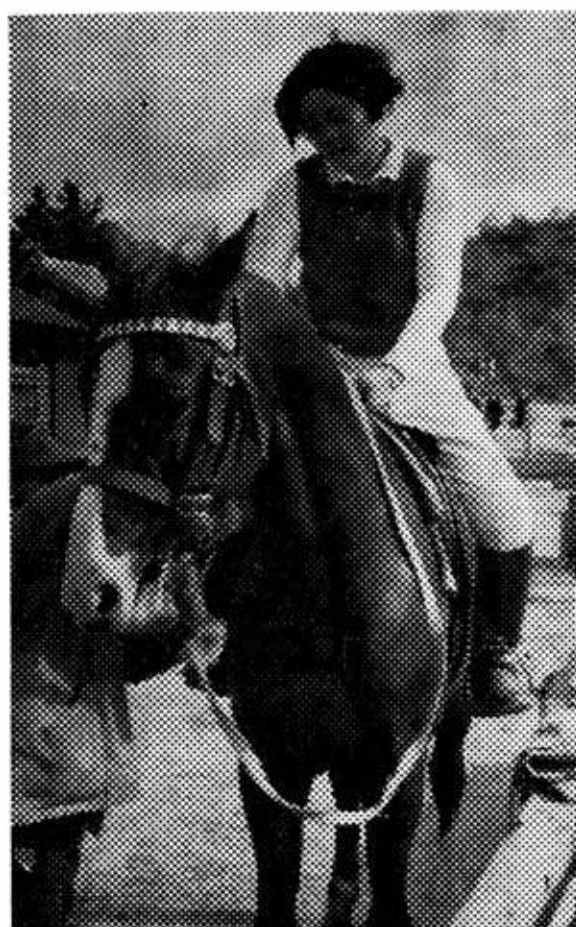
あのままでは手に負えなくなるという危惧が、それまでの恍惚境を吹き消し始めた。それを裏付けるように馬は輪を描いていたのを崩して区切りの向う側へ走り込んだ。私は思わずヒヤッとして柵の手前を歩いて走った。

しかし、これは馬が勝手に走り抜けたのではなかったとわかってホッとした。アマゾンの手綱さばきがこちらへ向けさせたのだった。馬はこの馬場で二、三周させられたが依然として暴れている。この区画には障害物が設置されていて、その内の約



一米半ばかりの煉瓦壁に馬首が向けられた。疾駆する。答が激しく入れられた、とんだとたんに辺りからホーッというような吐息が洩れた。駆け寄って来て見詰めていた部員達の吐息であつた。こんな場合、誰の危惧も同じだろう。とべるか？ という心配を、皆抱いていたに違いない。

キャプテンの手綱さばきは見事なもので、狂う馬を巧みにこなして、その障碍とびを何回も何回も繰返し行わざる得ないように仕向



けていったのだった。

タフだった馬も、ついにネを挙げたらしく障碍の前で停止し、暴れる気配を失った時、期せずして拍手が起り、走り寄った部員にタオルを貰い上気した顔を拭き、馬の上で軽く首を叩いてやっているキャプテンの勇姿を見て、私は安心と同時に、途切れていた恍惚感が急速に戻って来て、しびれるような気持で立ち尽したものだ。

思わぬ大場面だっただけにその感激は一入深く、希ってもない幸運に心から感謝したい気持であった。

さすがの馬もあれだけ責められては疲労しきったとみえ、水浴した後のように汗にまみれ、顔を地面につく程垂れてゴボゴボとせき

込んで、全く降参のテイであった。彼女は勝利者の笑みも美しく、跨ったまま静かに水飲み場まで歩ませ、一年生部員に渡して世話を命じたのであった。

これも後で聞いた話であるが、このクラブでは乗馬だけでなく、馬の飼育全般にわたってもすべて部員がするそうで、深窓の令嬢たちと思えるだけにチョット意外な感じがしたのだが、後で、皆がいそいそしく馬の世話を

しているのを見て、その熱心さには感じ入った。

既に何回か関東に出向いて対抗試合をし、幾つかの優勝カップもあるというところであり、米国カリフォルニア州立女子大の馬術部とも交流深く、姉妹校の親密さを続けている由で、留学生の交換もしているそうである。そういえば、三年生グループの中に確かに一人外人が交っていた。体はさほど大きくはないが、上品

な美しさのある人で、乗馬テクニックも秀逸であったのが印象深い。

その後にベテランメンバーの見事な高級練習を見ることが出来、このクラブの技術水準の高さに感心させられて後、休憩兼更衣室へ招かれていろいろの話を聞いた訳だが、席について見廻した途端、シャワー室の横の窓辺に干されてあった、四、五枚のハンカチ、ズロース、靴下が眼についてドキッとなった。彼女達の私にしてくれた話や、何気なく交す会話も紹介したいが、次の機会に廻す。



漫 談 千 一 夜 物 語

薔 薇 と 蜜 蜂

(11)

第五章 い ざ な い

田 代 俊 夫

39

幾万という群衆の見守るなかで、栄光と屈辱の分れ道たる答案用紙を前にして、サファイヤはしばし瞑想。試験地獄に苦しむどこかの国の子供たちの心情がよく理解出来る。もっとも、こんな問題ばかりなら平気だろうけど。なにも子供に無理させてまでエリートに仕立て上げなかったっていいと思うけどねえ……てなことを考えながら書き上げた用紙を待従長に手渡す。子供の受けさせられる試験はむつかしいがこの程度の問題なら博学のサファイヤにとっては居眠りまえのことです。

待従長が忽ち足下にひれ伏し、群衆がどつとどよめいて歴史的一頁が加えられました。

国王採用試験に合格したサファイヤは、早速、王としてその都を統治することになりました。元姫君のサファイヤにとっては、いわば魚の水を得たようなもの。次々と斬新な施政を立案実行して優れた政治的手腕を発揮いたしました。

まず王宮の宝庫から莫大な金銀財宝を引き出し、人民や兵士達に惜しみなく分け与えました。また、宮廷の大臣や待従達には高価な御衣を下賜したり、各種の勲章を授与するなどの配慮も忘れません。次いで税制を改革、

重税や貢物の制度を廃止し、牢獄の囚人達を放免し、その他、数多くの善改を行なったので、住民の信頼と敬愛を一身に集めるようになりました。酒と女専門で腹上死をとげた先代の王は、後宮に何百人という美女を囲っていたのですが、美人は自分一人で充分だから財政の硬直化を口実にハレムを断乎閉鎖し、女達を宮殿から追い払ってしまいました。サファイヤの正体に、だれ一人気づかない臣下の者は、新しい王様の道心堅固な禁欲ぶりに一層、畏敬の念を抱くのでした。というのも常に男装して髪型を変え、あごひげをつけるなどの万全の対策を講じていたからです。た

だし、身辺の世話をさせる二人の侍女にだけは真実を知らせて、その協力を求めました。

この二人は、姉をドロップ、妹をシロップという姉妹で、いたって不美人ながら気立てはよく、口の堅いことに定評のある侍女なのでした。

さてサファイヤは、こうして住民達から名君と尊敬されておりましたが、心の中では、いつもメロンのことを考えていました。秘かに手を尽してメロンの行方を探せましたがその消息は少しも知れません。いつしか半年近くの月日が経過しました。

ところで、いつも月末になると、サファイヤは前記の侍女二名をお供に、人里離れた山中の別荘へ休養に出かける習慣でした。骨休めのかたわら、好きな狩りをしたり、森の中で乗馬を楽しんだりして思う存分、鋭気を養うのです。この別荘というのは、深山の奥深く周囲を緑の山々に囲まれた谷間にあって、白い円天井と高い塔を持つ、華麗な小宮殿なのでした。

そんなある日のこと、サファイヤは森の中で狩猟に打ち興じておりました。すると、猟犬が一匹の鹿を森の奥から追い出してきました。馬上のサファイヤ、素早く弓に矢をつが

えて、その鹿めがけて射込みましたが、残念ながら急所を外しました。鹿は一声鳴いて逃げ足を早め、犬は必死にそのあとを追う。サファイヤも負けじと馬を走らせ追跡します。だが容易に捕えることができず、何時間も執拗に追いかけたものの、結局不首尾に終わりました。

気がつくともう夕方です。あたりの景色から判断すると、それまで来たことのない地点にまで無駄足を運んだらしい。息を切らしてしまったサファイヤは、馬上でしばし呼吸を整えました。

突然、何かを発見したらしく、犬がまた走り出します。その姿が木立に隠れたと思うとわんわんと激しくほえかかる声が聞えてきました。獲物を見つけたときの声とは少しちがう。不審に思ってサファイヤは、馬をその場所へ進めました。

立木の幹に、一人の男がしがみついています。地上、約三メートルほどの高さです。夕方なので年恰好は定かでないが、後姿から推測すると、まだ年若い男のようです。よほど臆病な性質とみえて、幹に抱きついて、がたがた震えているさまが、よく分ります。その樹の根元で犬が執念深くほえつづけているの

です。サファイヤは思わず吹き出しました。「怯えるにはおよばぬ。この猟犬は危害を加えぬゆえ、安心して降りて参れ」

犬を叱りつけたサファイヤは幹を見上げてそう呼びかけました。樹上の若者は、ほっとして、するする幹を伝わり降りてきました。瞬間さっとサファイヤの表情が変わります。

思わずわが眼を疑い、同時に一首成る。

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや

馬ふみこんで君をみむとは

メロンなのです。まさか、こんな所で再会できようとは――。サファイヤは呆然と立ちすくみました。驚愕のあまり、しばらく声が出ません。

だがメロンの方は眼前の人物をポカンとした表情で見上げるばかり。それも道理、りりしい狩猟服に身を固めたサファイヤ、髪型を変えあごひげを生やした一かどの男装スタイルなのです。馬上の騎士が何故、自分の顔を穴のあくほど凝視するのか、メロンにはその理由が分かりません。

ある考えが稲妻の早さでサファイヤの胸中をかすめました……。

「これ、その方ここで何をしておったのか」

と、感情の高ぶりを押えながら、何食わぬ表情で尋ねます。

「はい、柴刈りをしていました」

「ふむ。で、どこに住んでおるのかな」

どんな思惑があるのか、サファイヤは押し殺したような含み声で質問を続けます。別に返事する義務もないわけだが、馬上の騎士はみるからに高貴な顔立ち、眼光鋭く白哲の額秀いで、あごひげに威厳備わる堂々たる美丈夫ですので、メロンはすっかり恐れ入ってしまいました。

だがサファイヤならずとも、どんな事情でメロンがこの山中に柴刈りなどしているのかだれしも気にかかるところでしよう。そのわけを簡単に説明すれば、次のとおりです。

——第35節末尾で名句を残して急流に消えたメロンでしたが、その河の下流に一人の老漁師が魚とりの網を張っていてその網に溺死寸前のメロンが引っかかったという次第です。だが川の水のがぶ飲みで、すっかり弱っていたメロンは、悪性の風邪をこじらせ余病を併発して、それから六カ月近くも寝込んでしまいました。それでも、親切な漁師の手厚い看病のおかげで少しずつ快方に向い、やがて元どおりの健康を取り戻すことができました。

この漁師は木こり兼業の老人で、午前中は川へ魚とりに、午後は裏山へ柴刈りに出かけるならわしなのでした。

で、病気全快したメロンは、命の恩人の恩義に報いるため、しばらく柴刈りの勤労奉仕に従事することとしました。そして山中での作業中、奇蹟のご対面と相なった次第です。

「——ふうむ。ではあと数日、このあたりへ参るのだな」

「はい、その予定です」

「ときにその方、わしに見覚えはないか」

「いえ、そのようなことは一向に——」

サファイヤは、かすかな微笑を鼻先に浮かべました。むろんメロンは気がつきません。

「では、わしの後姿でも、よく見ておくがよい。その方とわしは浅からぬ因縁がありそうじゃからな。——さらば」

役者気どりでそういつてサファイヤは、くると馬首を返えすと、馬に鞭をあて一路、森の中へと消えていきました。その様子をぼんやり眺めていたメロンは、馬の背にもくもく弾む騎士の臀部に何やら親しみ深いものを感じましたが、結局、何の記憶も呼び起すことはできませんでした。

次の日山中の宮殿で王様のサファイヤが二

人の侍女と実に奇妙な話を交していました。

「わたし、結婚することに決めたの」

「王様が、でござりまするか」

「むろん、そういうこと。……ちょっと耳を貸してごらん」

さて、これは一体、何のことでしょう。

40

数日後、その同じ場所へ、メロンがやってくると、奇妙な光景が目にとまりました。一本の立木の樹皮が鋭利な刃物で削りとられ、傷口も生々しい白い木肌に、次の文句が墨で書かれていたのです。

北々西へ針路をとれ

小さな布切れが傍の枝に結んであり、手に取って眺めると、それは白地に赤い薔薇を刺繍した絹のハンカチです。メロンは急に胸騒ぎを覚えました。これと同じ柄のをサファイヤが使っていたことに気づいたからです。その匂いを嗅げば、これまた、なじみ深い薫香が焚きこめてあります。胸の鼓動が一層早くなりました。

これはサファイヤのと同じだ。でも、どう

してこんな場所には？

メロンは予定の柴刈り作業を放棄して、樹木の茂った森の中を北へ向って歩きはじめました。いつしか夜となり、月明りをたよりになおも進んでいくと、やがて朝の光が木の葉越しに射しこんできました。

するとそのとき、前方が急に開けて、美しい小さな宮殿が忽然と眼前に現われました。空に聳える尖塔と白い円天井が朝日に燦然と輝いています。四方を小高い山々に囲まれ、青く澄んだ深い堀の水がその御殿の周囲を取り巻いているのです。堀には吊橋がかかっています。あたりは森閑として人の気配がありません。好奇心にかられたメロンは、その橋を渡って城館の内部へ侵入しました。

しんと静まりかえって、無人の館かと思われる。おかしいなあ、だれも住んでいないなんて、そう思って御殿の中を歩きまわっていると、華美な造りの螺旋階段が目にとまりました。で、その階段を登っていくと、宮殿の平屋根に出て、そこから、樹々が茂り花の咲き乱れる美しい庭が見下ろせるのでした。メロンはこの景観に見とれて、さてこれからどうしようかなどと、香気なことを考えます。

突然、軽い衣ずれの音がして、一人の人物

がメロンの背後に迫りました。

「あら、あなたは何故、ここにいますのです」
ぎくりとして振り向けば、それは年の頃、三十前後のおかめ面に団子鼻という一向見栄えのしない女性です。だが、きらりと光る眼の輝きは鋭く、反面どこことなくユーモラスな感じも与えます。

「森の中を歩いていたら、偶然この御殿が目について——」

「はて面妙な。ここは深山の奥ゆえ、絶えて人の来ぬところ。きっと他にわけがおりでしょう」

その女は何か気がかりなようです。メロンは本節冒頭の事情を話しました。

「ああ、やっぱり——」

と、女は沈痛、且深刻な表情で天を仰いで長嘆息。何やらただならぬ気配です。

「そのキジルシは獲物をおびきよせる罠だったのです。もうここから出られませんよ」

メロンは、たちまち顔面蒼白、震え声でそのわけを聞くと、女は急にはらはらと落涙して、次のような戦慄すべき真相を明らかにするのでした。

——メロンが森で出会った騎士というのは、実はさる国の王様で、その名をユーテラスと

いう。自分はドロップといって、同王の忠実な侍女である。ユーテラス王には大変困った悪趣味があり、それは、女に少しも興味を持たず、もっぱら美しい少年を愛好するということだ。単に愛好するだけでなく、さんざんもて遊んだ末、最後にはある部分をチョン切って後宮宦官にしてしまう。その目的のために、わざわざこんな深山の奥に御殿を建てたのである。ここから外部へ出るには吊橋を渡る他ないが、常に屈強な門番が交替で厳重に監視している。なお、堀には無数の人食いわにが飼ってあるから、泳いで渡ろうなどという料簡は起こさぬ方がよい——。

「そんなわけで」

と、侍女ドロップは、玉葱の皮をそっとポケットへ戻しながら、

「この宮殿から逃げ出すことはできないのです。ああ、何とお気の毒な方でしょう！」

などと空涙を拭い、哀切なる挽歌を時期尚早にも、かなでるのでした。

さあ大変、メロンは失神しそうになりました。あの馬上の騎士の謎めいた言葉は、そういう意味であったのか！ 恒例にしたがい、メロンはしくしく泣き出します。

王に忠実な侍女ドロップが何故、事の真相

をわざわざ打ち明けるのか、仰天したメロンにはそこに思い至りません。ドロップはそこで、さもさも同情したふりを装い、

「もうお泣き遊ばすな。私は、あなたがとても可哀想になりました。何とか算段をしてあげましょう」

と、お芝居の筋を進展させました。

「どうか、どうか、お願いです」

メロンは必死の表情。葉がよく効いているようです。ドロップは少し考えてから、

「方法は、たった一つ。それは」

と、いかにも風変わりな逃亡手段を提示します。長持の底に隠して搬出するがとき月並みな方法ではない。

「若い女に変装して、門番の目をくらますのです」

「若い女？」

「ええ、そう。つまり——」

この宮殿にはシロップという自分の妹がいるので、それに化けるのだ。メロンは顔つき身体つきが若い娘そっくりだから、女装して髪型を変えヴェールをかぶれば、見破られる心配はなからう。王様は夕方ここへ来られる予定ゆえ今から仕度すれば間に合うだろう。さあ、善は急げ——。

ドロップは有無をいわずメロンの手を取って、小走りに階段を駆け下り、自分の部屋へ連れていきました。

まず、若い娘用の衣服に着替えさせ、即席パーマをかける。そして、いやがるメロンを説得して、口紅をつけ、お白粉を塗るなど入念な厚化粧をさせるのでした。ヴェールをかぶれば、こんなことは不要のはずだが、ここがお芝居の眼目なのであるから、省略は許されない。もともと水も滴る美少年のメロンのこと、にわか化粧もあでやかに、たちまち花も羞らう美貌の乙女へと変身いたしました。

とそのとき、部屋のドアを乱暴に叩く音。

「おい、ドロップ。ここを開けるのだ」

これぞ、王様の声です。ドロップは予定どおりギクツとして、メロンに事態の急変を告げます。メロン嬢の方は本当に腰を抜かしてしまいました。

「ここは私に任せなさい。さ、平伏して！」

ドロップの激励に必死の勇を振り起し、メロンはガマ蛙よろしく床に頭をすりつけました。王様が、ずかずかと室内へ闖入します。第三幕の開演です。

「いつになく、お早いお着きで——」

「これ、その方、職務怠慢であるぞ」

「は？」

「門番が居眠りをしておるではないか」

このあたりの科白は相当にきわどい。実際は門番などいないのだが、いなくても居眠りだけはしていてくれないと、お芝居が全く成立しないのです。

「申し訳ございません。以後、充分に注意いたさせます」

ドロップは口先だけ恐縮したふうを示しました。門番こそいい面の皮でしょう。

「ときに、例の若者は、まだ来ぬのか」

「はあ、まだのようでございます」

床に平伏しているメロンを横目で見ながら王様と侍女は、お互いに赤い舌を出したりウインクしたりの不真面目な演技を続けます。

「いずれやって来よう。よもや、余のたくらみに気づくことはあるまいからな」

王様は自信の程を示しました。

「何ともご熱心なことぞ」

「今回の飛びきりの上玉であるぞ。顔、身体とも一点非の打ち所のない美しい少年ゆえ一刻も早く賞味したいものじゃ」

これはむろん、メロンに聞かせる目的でいっているのですが、この一事をみても、女とはよくよく残酷にできているらしい。さて、

これくらいでよかろうと、王様は矛先を転じて本題に入りました。

「ときに、その方の横は何者じゃ」

「はい、私の末の妹にございます」

ドロップは平然たるもの。演技もうまいがうそもうまい。

「ふむ、妹とな。だが、何故にこの宮殿へ参った」

「実はでございます、王様——」

ドロップは脚本どおり、次妹シロップが急病になったから、その代役として連れてきたと、まことしやかに答えます。

「なるほど。で、名前は何と申す」

「はい、メロ……、いやその、ウソップと申します」

調子に乗りすぎて、トチリそうになりました。三人ともヒヤリ。

「これ、ウソップとやら、面を上げい」

王様は、そう命令しました。メロンは、がたがた震えて顔を伏せたままです。すると王様は、つかつかとメロンの前へ来て、その手をいきなりあごにかけ、ぐいと上を向かせました。可哀想にメロン嬢、まるで血の気がありません。王様は、しげしげとメロンの化粧ぶりを点検しながら、内心のおかしさを噛み

殺して、

「ふうむ。なかなか器量がよろしい。だが、どこかで見たような気もするな」

などと、とぼけます。自分の方は、つけひげなどで変装しているから、正体を見破られる気づかいはない。王様は、あっさりいいました。

「イソップとやら、余はその方が殊のほか気に入った。夜伽を申しつけるゆえ、今宵、余の寝所へ参れ。分ったな」

メロンにとっては晴天の霹靂です。少年愛好家の王が、今日に限って若い娘に関心を示すとは、そもいかなる心境の変化か。メロンの顔は土色になりました。

「いえ、滅相もないことを」

ドロップが大あわての様子で抗弁します。

「妹はまだ世間知らずの小娘にて、夜伽など的大役はとても……」

「なに、生娘とな。よいよい、その方が万事好都合というもの」

王様は不謹慎きわまることをいって、ドロップの発言を封じました。

「さりながら王様」

「だまれ、余の厳命なるぞ。きっと申しつけるにより、さよう心得よ」

王の権力を最大限に活用して、そういい捨てた王様は、すたすたと部屋を出ていきました。これも台本どおりです。

「どうもまずいことになりましたね——」

とドロップは、いかにも困惑した顔つきで溜息をつく。メロンは、とくにウロが来ています。だが、ここで卒倒されては今までの熱演が水泡に帰する。ドロップは窮地に陥った少年を激励し元気づけるのでした。

「でも心配しないでいいのです。王様は時折り、ああいう気まぐれをされるのですから」

夜伽といっても、肩叩きぐらいのものだ。

生れつき女嫌いの王様だから、万が一にも変な気を起こされることもあるまい。ただメロンとしては、態度、物腰、言葉使い等に気をつけて、できるだけ女らしく振舞えばよい。

ドロップは、このような忠告を与え、弱気のメロンを励ますのでした。

さてその夜、満艦飾に化粧したメロン嬢は内心びくびくして、しゃなりしゃなりと尻を振り、王様の寝室へ伺候いたしました。男装のサファイヤと女装のメロンの騙し合い、果していかなる結果と相なるか。



「俺にはもう、現実とまぼろしとの区別がつかなくなった……」
 こんな書き出しによる、井堂則夫の「奇ッ怪」な手紙を受け取った私は、早速、車を駆って彼の邸を訪れてみることにした。

「昨夜もまた、あの悪魔のような女はあらわれた……。この俺を、あの嫌な嫌な鈴の音と共に散々に責め苛んだ。そして、半死半生となった俺に、また次の夜もあらわれるであろうことを冷たい声で宣告し、かき消すように消えていった……」

おりから、霧のような雨がじめじめと降りつづく、暗い夕刻のことである。

秤

蕩

也

鈴音の影

妖 談

私が着くと、蔦蔓がみだれて這う塀際に傘を差して突っ立っていた男が、待ちかねていたかのようにして門をあけてくれた。はいったところで降りると、車をガレージに入れておいてくれるようたのみ、その傘を借りた。

「……いまもこの部屋に、その悪魔のような女が残っていたに。おいが、不気味な笑い声がただようている。いくら俺が拒んでも、窓にもドアにもしっかりと施錠していても、ま

るで煙のようにはいってくる女。そして幻灯を消すように消えていく女。俺はもう、このことが夢なのかそれとも現実なのか、それすらも判らなくなっている。しかし、その女が『何処かの世界にいる』ということは、たしかだ。証拠は……俺の、この身体だ。顔や胸や背中や足の……皮膚を裂き肉をはじいていくこの傷だ。これが、証拠だ……」

広い、風致式の庭であった。

敷きつめた砂利のむこう——早や点した常夜灯に濡れ濡れとひかっている陽樹陰樹。それが、色んな形でうずくまりそびえている。

その茂みの横手に枯山水（石庭）も見え、手入れ不充分的な観は否めないが、いやそれ故かえって、このような雨の日は風趣ある思いにさせられるとあってよからう。私は、傘の雫に身をせばめながらも、フト心安まる思いのまま立ちどまって、ゆっくりと四囲を見まわしてみた。

たしか、いまここにこうして立つのも半年ぶりの筈であった。だが残念ながら、私の行く処にこんな味わいを覚えさせてくれるところはない。けだるく、茫洋として、そのくせ何かの歯車に噛み込まれているような私の生

活に、こんな場処はなかった。

凝っと立ちつづける私に、そのとき忍ぶような足音が近づいてきた。

首だけをねじてふりむくと、先刻のあの男が、今度は花柄の洋傘を差して立っていた。

私は、眉に落ちた雫をそっと指先で拭い、立関のほうへ歩きはじめた。

「井堂は、いま……なにをしています？」

歩きながら、私は訊ねた。

「はい。先刻お目ざめになり……いまはお部屋で、抄子さまとご一緒に貴方のお越しを待ちわびておられます……」

男は、なにか唸りを思わせるような、くぐもった声でこたえた。

「すると、眠っていたの？」

「はい」

「とすると、よほど疲れているのかな」

「いえ……それもそうですけど、最近の旦那さまは……昼間眠られて、夜はずっと起きていられるようです」

「どうして！」

「知りません。——私には、わかりません」

立関に着くと、私は傘をたたみながら、また訊ねた。

「抄子さんは、ずっとこの邸にいるの？」

「いいえ。今日も午後二時過ぎに来られたのです」

私は、フト微笑をうかべた。

「すると、その傘は……」

言いかけて、だがそれ以上は、やめた。

来客の傘を、平気な顔して差している男。

私は、その老人めいた——分別がかった顔のむこうにある、この男の図太いものをみたような気がした。

「じゃ、彼のいるその部屋まで案内してもらいましょうか——」

「こんなおそろしいこと、自分でも信じられないような話、どうして他の人間に打ちあけたりなど出来るものか。どうしてタスケテクレなどと言えようか……。たのむ。……お前が来て、この怖い悪夢……いや呪われた事実から俺を救ってくれ。早く、一刻も早く来て、この俺を救ってくれ。あの悪魔みたいな女は今夜もきっと、かならず、あの鈴を鳴らしながら俺の前にあらわれる……」

何者かが息をひそめているような薄暗い廊下を幾度も曲って、やがて私が案内されていたのは、黒い絨氈を敷いた階段に面した、

洋室の前であった。

私より五センチほど背の高いその男は、こちらをチラリと窺うように見てから、ドアをノックした。しばらく間を置いてから、はいという応えが微かに聞こえた。が、男は把手に手を掛けることもなく、うっそりと突っ立っている。私は、

「井堂がそんな状態だし、抄子さんも看護やらで手が放せないのかも知れない。こちらから開けて入っていったら？」

と言ってみた。しかし男は、また窺うような眼で私を見おろし、ただニヤリとその口辺に笑みらしいのを浮かべただけである。

そのとき、ドアの向う側で鎖の触れる音がし、施錠をガタつかせている音と共にしばらくくつづいた。私は、応えがあっても男がそのまま突っ立っていた理由を知った。

「……抄子も、お前に来て貰うことは賛成だと言ってる。この事は絶対だれにも口外するんじゃないと俺がいつも言うものだから、彼女としてはいても立ってもいられない思いだったろう。最近では俺の顔をみると、かならず涙ぐんでしまう。だから、俺がお前に何もかもぶちまけて、友人としての力を借りてみ

ようと言った時、彼女は始めて……いや、このひと月みたこともなかった笑顔で、即座に賛成してくれたのだ……」

ドアが開いた。

「加藤さまが、お見えになりました」

男が言って、慇懃に頭をさげた。私は、その男と入れ替るようにして立った。

「おじゃましますよ……」

眼の前に、何やら思いをいっばいにこめたような、美しい抄子の顔があった。濡れてもいないのに、黒々とひかった髪が肩先まで垂れているのは、半年前と全く同じであった。

その髪に限どられたように、白く映えて浮いた美貌も、やはりあの頃と同じであった。

「か、加藤さん……」

絶句したまま、彼女は長い睫毛の眼をゆっくりと瞬かせた。

私は、こんな場合でも、間近にある美貌にどうにもならない眩しさを覚えながら、

「井堂は？……」

と、われながらちよっぴり上ずった声音で訊いていた。抄子は、なにも言わぬままに身をひるがえして、その裾の優雅にひろがったシルクオーガンジのワンピース姿を舞わせ

た。

部屋の中央に、半透明のレースのカーテンにつつまれた豪華なベッドがあり、井堂則夫はそのカーテンをひらいているような恰好でベッドの端に腰かけていた。

「井堂！……一体どうしたというんだよ」

私は言いながら入っていき、そんな彼を見おろした。

「加藤……よく来てくれたなア」

彼の表情は、暗然、そのものといったよかった。私が訪ねて来たら、せめて笑顔ぐらいは浮かべてくれるだろうと思っていたのに、そんな気は、さらさらない。言葉とは、うらはらに沈滞した、物憂げなそのくせ、この時でも何かに怯えているような顔つきだった。

特にその顔……彼の手紙に書いてあったから左程に驚きはしなかったが……額に頬に、首すじにまで縦横に走っている傷が、より以上に陰惨を周辺にただよわせているのだった。

そこからは、六カ月前の彼を見出すことは、むずかしかった。白晳美貌、賢才にして清冷の感ある彼のかつての顔を見出すのはむずかしく思えた。

「たのむ加藤ッ。オ、俺をたすけてくれ。俺を、あの女から守ってくれ！」

不意に彼は、私に双手をのぼして叫んだ。

「ま……落着けよ。落着いてくれよ」

私は、鉤のように曲がって迫ってきた指先をつかむと、自分自身をおちつかせる意味でも、その肩をたたいて、しずかに言った。

○

身動きもしない井堂則夫の前で――。

抄子からこの一カ月の彼の様子などを聞き終えた私は、やがて黙ったまま椅子から立ちあがると腕組しながら、ベッドの回りをゆっくりと歩きはじめた。

抄子の何かを憚るような、それでいて綺麗に澄んだ声のつづきがプツリきれたこの時から、私の歩くやわらかい足音につれて言いも得ぬ重くらしい空気がもどりはじめた。歩きながら部屋中をじろじろ見ていた私は漸くドアのところまで行くと、

「今夜は……私をこの部屋の近くに泊めてもらいましょうか」

と抄子の顔を見つめて言った。

「どうしてですの――」

無意識のように、井堂の背をやさしく撫ぜてやっていた抄子は、びっくりしたような声で訊ねてきた。

「このお部屋に……泊まっていただけなので

はありませんの？」

「いや、それでもいいんだが……そうなるとその女は、僕の一緒にいることを嫌って今夜ここへはあらわれないかも知れない。ということは、あの女は明らかにそこにいる井堂だけを狙ってあらわれている、と思うからです……。そうじゃありませんか？」

「……」

「現に、貴女がこの部屋にお泊まりになった夜は無事だったという……」

「はい、それはそうですが――」

彼女は、つりこまれるように頷いてみせたが、一呼吸ほどのあと、その白桃のようだった顔に、さっと紅味がさした。あまり端的にこたえ過ぎたことが、こんな場合でも堪えようのない、はずかしさを覚えさせてしまったのらしい。しかし、私は全くそんな心算で言ったのではない――。

「その女のあらわれる夜は、そうなると井堂ひとりがこの部屋に眠るときということになる。事実、そうでしょう？」

「は、はい……」

「ところで、ちょっと訊きますが、さっき僕を出迎えてくれた人、この邸の何処で寝泊まりしていますか？」

「いいえ、あの人は……午後七時を過ぎると×町の自宅へ帰ってしまいますわ」

「なるほど。通い――ですな、それも遠い距離の……」

「はい」

「では、他にこの邸にいる人は？」

「だれもいませんわ」

多分そうではないか、と私は思っていた。

半年前の時だって、この邸にはそのような男どころか、住む人間はただひとり、井堂則夫だけであった――

「この鍵穴……」

私はドアの前でかがみ、鍵穴に眼を近づけながら言った。

「今夜はふさがずにおくよう、井堂に言っておいてください」

「え、鍵穴を？」

「そうです。もちろん施錠はしっかりしてもらわなくてはいいけませんね。あ、それからそちらの窓も全部、もう一度よくたしかめておいてください」

「わ、わかりましたわ」

「それから抄子さん……」

私は腰を伸ばすと、ぴったり身を寄せている二人に近づきながら言った。

「貴女も今夜は、ここに泊まっていただけでしょいうな？」

すると抄子は、視線をおとし不意に小さな身もだえをしたかと思うと、

「それが……駄目なのですわ。今夜あたしがここにいと、父が……父がきつと怒鳴りこんで行ってやるって……」

「お父さんが？ それはまた、きつい——」

「……」

「しかし貴女と井堂は、婚約者どうしではありませんか。その婚約者がこんな目に遇っていて、しかもその彼がこんなに貴女を必要としている場合なのに」

「父は……こんな事が則夫さんの身に起っているなんて、知らないんです。それに、父はもともとあたし達のことは……」

「そうですか、どうしても帰らなくてはいいないんですか」

「加藤さん！ あたしは、あたしは父に思い通りにする口実を、与えたくはないんですの……あの父にあたしたちのこと、好き勝手にされてしまいたくないんですの！」

「——」

「でも、加藤さんがそう言うてくださるなら……あたしはもう父の事なんか構わない。今

夜はここにいさせていただきますわ」

私は、あわてた。

「いや、ちょっと僕は言い過ぎたようです。貴女のそんな気持も判らないままに。——よろしい。今夜のところは僕にまかせて、安心しておかえりください。なあに、今夜は大丈夫です。いえ、今夜で、そんな奇怪な事は、なしにしてみせます。きつと、そのまぼろしみたいな女とやらをつかまえて、そのまやかなど見破ってやりますから」

そして身を反らし、胸まで叩いてみせた。

その時——。ふとドアの向うで誰かが立ちどまるような気配を感じた。

「だれッ？」

「わたくしでございます……」

例の、唸るような声が聞こえた。

「あのう……わたくし、これで帰らせていただくかと思ひますが……」

時計をみると丁度七時だ。私と眼の合った抄子は、ユラリと立ちあがると、わざわざドアまで行って言った。

「ご苦労さまでした……」

私は、私の今夜寝る部屋をその男に考えてもらおうと思つて訊いた。

「はあ……お客さまがお泊まりになるとする

と……部屋は、二階にしかございませんが」

「二階？ 階下にはないの？」

「はい。運わるく何やかやが詰まっております……やはりそのお部屋しか」

「そう、じゃ仕方ないね、その部屋に泊めてもらうとするか。——あ、いいよ、教えてもらったら僕が勝手にさせていただきます」

「そうですか。じゃ、お部屋は……こちらの階段を上ったところの……ちょうど旦那さまのお部屋の真上にあたるお部屋で……」

「え、この上？」

「はい、左様でございます」

私はその二階の部屋の窓辺によりかかり、暗くなつてもなお降りつづく霧雨のなか、定かではないが二度三度と此方をふり返りながら去る様子の——抄子の自動車を凝つと見つめていた。

そして、自動車が闇に見えなくなったのと同時にカーテンを閉めると、灯りを消し、上着だけを脱ぎすてると鍵を掛けていないドアのほうを足にしてベッドに寝ころんだ。

——静かな邸が、より静寂となつたことを身にひしひしと感じとりながら、ゆっくりと煙草を啜え、火をつける。

間もなく、庭園からの微かな灯りで馴れてきた眼に、左手からたちのぼる煙草のけむりが異様に白く、ゆらゆらとして見えた。

私は、ふっと吐息を洩らし、耳を澄ましながらも、あの井堂からの手紙にあった一節を今更のごとき思いおこした。

“……あの悪魔のような女は、今夜もきっとかならず、あの鈴を鳴らしながら俺の前にあらわれる……”

○

ふと、目がさめた。あれから三時間ばかり暗い部屋の中で凝っとしていた私は、何事も起こらず、物音ひとつしない心の緩みから、いつのまにやら眠ってしまったらしい。

そっと寝返りをうち、ライターをとめて腕時計をみると午前一時十分……

(なにかを……聞いたような)

そんな気がする。そして。

寝呆けていた頭ではどうもハッキリしなかったけど、やがてそれは、

(確かに……なにかを聞いた！)

という信念にかわってきた。聞いたからこそ、こうして目がさめてしまったのだ、と思った。まさか———と思い、ベッドを降りると

床に俯伏せとなり耳をつけて真下の部屋、井堂則夫の様子をうかがった。

が、しかし、何も聞こえない。

針ひとつ落とした音すらしない。

(確かに、何かが鳴った筈なんだがなア)

私は、息を詰めていた苦しさに、ホウツと

深呼吸をしながらベッドに戻ろうとした。

その時である。

……リ、リリン……と、微かに、どこかで

鈴の鳴るらしい音がした。

(あ、やっぱりそうだったのか……)

これが、この微かなひびきが、私の目を醒ましてしまったのだ。

私は、また俯伏せになり、床に耳をつけて井堂の部屋に変化はないかを知ろうとした。

だが、やはり物音ひとつしていない様子。

私は四つん這いになって床を這うと、ドアを僅かに開けて首を出し、廊下の左右はおるか、この邸全体を聞き澄ますかのように、真剣に耳をかたむけた。

リリン……リリン……

今度こそは、まさしく鈴とわかる音が、しかもドキリとするくらい近くで鳴った。

私は身を起しながら、廊下の向うを透かすようにみつめた。

そこは、私の部屋の前の階段、その降り口に点った灯りさえも、とどいていない闇であった。だが私は、そのとき、その闇の中でユラリと揺らいだものを知った。

黒い、闇よりも黒い「影」だ——。

(フフ、いたな！)

階段の灯りにさえぎられている形だが、たしかに、たしかにそこに何かが揺らぎ立っている。私は、いつでも抜け出せるように身構え、そして尚もその一点を凝視した。

リリ、リリン……

三たび鈴が鳴った。死のような静寂のなかで余韻をひいて鳴った。しかもそれは、数メートル先の何かが揺れるところだ。

(ちくしょう——この階段のほうへは来ないで、離れていきやがるな！)

揺れる「影」が、その形が、なお微かになりつつあるのを知って私は唇を噛みしめた。見失ってはいけない。咄嗟に判断した私は「影」を追うことにした。

相手は離れていくといっても、かならずしも向うをむいているとはかぎらない。後退りに、こちらを見つめているのかも知れない。廊下のただひとつの灯りの中に浮いてしまふのは私のほうであり、まず相手に姿を見ら

れるかも知れない、ということを考えねばなるまい。が、かまうものか、と私は思った。

こうでもしなければ、相手を追うことは不可能なのだ。私は僅かに開けてあるドアから身を細くして廊下に出ると、爪先だち、まるで漫画の忍び込みのような恰好で、灯りのなかを横切った。

そんな私を知ってか知らずか「影」は既にさっきまでの位置にはなく、廊下の、ずっと向うあたりで……リリン……と微かな鈴の音を鳴らしている。

私は左腕を前に、右腕を後に突っ張るような恰好で、壁やドアを背で擦りながら後を追った。

——廊下をつきあたると、外のおぼろな灯りでそれと判るガラス窓だ。足許をみると左右に降りる階段がついている。

右は前庭脇のガレージのほうへ、左は多分中庭のほうへだろう。私はじっと耳を澄ました。「影」が動いているかぎり、あの鈴は揺れて鳴りつづけるのだ。

(あいつが宙を浮いて移行しないかぎり、鈴はきつと階下で鳴る……)

このとき、案の定、左側の、それは多分、中庭あたりだろうと思われるところで、鈴の

鳴るのを聞いた。

私は、あくまでも足音をしのばせ、さほど広くない階段を、しずかに降りて行った。

——うッ、いたな!

あと二、三段というところで、ふと見た中庭の真ん中あたり、そば降る雨の夜空を見あげるかのように立つ黒い影を認めて私は胸中にうめいた。

暗闇のなかから外に出れば、それが夜であっても妙に白っぽく物々が透かしたように見える。私は、相手が裾ながくひいた薄地の黒衣を頭からすっぽり被ぶり、手には紐……いや凝視するうちにそれは革鞭とも見えよう物を、地に垂らして持っていることを知った。

(フン、ご大層な身装いをしゃがって!)

だが私は身動きしないで、そのまま相手を見まもっていた。

すると不意に相手が、こちらをふりむき、手のものを一閃させた。同時に鈴が鳴った。

それは何かを測っていて、突然起こした動作でしかなかった。私は、鈴の音と共に虚空を裂いた「びしゅ!」という熾烈な音に眼をまるくした。

(まさか……その鞭を……当ててくるんじゃないかろうな?)

私は足を踏んばり、身構えてしまった。

その時である。

飛び掛かってくるかと危懼したその相手は——とつぜん身をひるがえし、かたわらの園池を向う側へふわりと飛び越えた。それは、まさしくフワリと、魔物の浮泳でしかない黒い曳行であった。

私はまた、それに曳かれたように、階段から、ふわりとはいかないまでも一足跳びに、庭先へと降り立っていた。そして、

(逃げるな?——)

と感じたときには、もう黒衣の影はまるで私を嘲笑うかのごとく、腕を上げ鞭についた数個の鈴をコロコロと振り鳴らしながら、呆れるほどの身軽さで後退りをはじめていた。

待て……と叫ぶも胸のうち、私は数歩助走するや、眼の前の暗い水を湛えた池を、渾身のちからをこめて跳んだ。

が、実際というものは話のようにうまくいかない。跳び越えたと思ったのに、そこには地面がなかった。ストーン! と、馬鹿の棒立ちみたい池に落ちた。まだしも、ひっくり返らなかつたのが幸いともいえようか。

私は膝頭までつかった池にキョトンとして立ち、なぜこれぐらいの池が跳び切れなかつ

たのか？ と小首をかしげた。だが、すぐにあわてた……。見ると相手は、せせら笑うかのよう大げさに肩をゆすり、そして彼方の、低木生の樹が闇のうねりを形づくっているほうへと、踊るような跳躍をはじめたところであつた。

「こんちきしょ！ とばかりに私は池から元氣よく……這い出た。這い出て、すぐさま追おうとした。

ところが、立ちあがった時にはもう、相手は私の前から掻き消すごとく、その姿をくらましていたのである。

茂みの陰か、邸の中か、それとも裏庭のほうへとまた跳んだか、消える瞬間を見ていなかった口惜しさが、私を熱くさせた。氣持わるく足にへばりついた、濡れたズボンをひっぱたきながら、私は眼を剝いてしまったが……この間、約十秒——。

そのときであつた。突如、館の内部……それも、井堂則夫のいる部屋とおぼしきあたりから、

「あア、あ——ッ、だ、だれかア！」
と凄まじい声があがったのは——。

私はもう、走らなかつた。

ゆっくりと、あるいていった。

そして、井堂の部屋の前まで来ると、濡れたズボンの裾を「氣にしながら」……腰をかがめ、片膝をつき、それからソツと鍵穴に眼を押しあてた。

煌々として明かるい部屋、僅かにみえるベツドの端。そのベツトの下に、くずれ落ちたように全裸の男が、うずくまっていた。

男にしては随分と肌理きめのこまかな、色白の肉体である。

しかし、それはむしろ、部分的であつたと言わねばなるまい。何故なら——その肉体には、その美しい裸体には縦横無数の生々しい傷がついていたからである。

古い傷がある。それは薄黒く、肌に染みこんでいる。

あたらしい傷がある。それはいま加撃され皮膚を裂かれたように——いや、よくみると今も血を噴き垂らし、鮮やかな肉のいろを見せる傷さえもあつた。

そして男は、そのうえ無惨にも太いロープで両腕をうしろに縛りあげられ、口唇には瘤つきの厚いゴム製の猿ぐつわを掛けられていた。奇妙なのはその猿ぐつわで、中央にダラ

リと垂れた袋状のものがついている。何かが詰まっているらしいが、まるで男が苦しまぎれに胃ぶくろを吐き出しているようにさえみえる。この袋状のものは多分、口中にふくませるものだろうということは、この猿ぐつわには両面にこれがついていて、今もその男は片方の袋状のものを噛まされている——ことになる。

そういえば、男の後頭部にまわっている厚い瘤つきのゴムは、二枚重ねだ。もしこれを一枚にすると、二人の人間が顔を「繋ぐ」ように、同時にくっつけて、猿ぐつわを噛ませることが出来る……そして瘤が無数についているのは、すべり止めの役目をさせるためであろうか……

男は乱れた髪をゆらし、大きく肩で喘ぎ腹を波うたせ、荒々しく鼻で呼吸をしていた。

女性がよくするような横坐りの、ぐったりした姿勢が、その男の抗いきれぬ打ちしおれ方を示していた。

——鈴が鳴り。

不意に、ばしッ！ とするどい音がした。男の膝がしら近くの床に鞭がふりおろされたのである。

男はびく！ と縛られた身をすくませ、顔

をのけぞらした。他の傷とおなじような傷がその顔にもついている。

男は横を仰ぎ見、眼をいっぱいに見ひらかせて、すぐに電動に掛けられたように烈しく顔をふりはじめた。

ゆるしてくれッ。打たないでくれッ……

その眼が、そう言っている。

すると、ふふふ……と、なにかで口を覆うたような濁った笑いがきこえた。どうやら男の視線の先にあるところから洩れてきた嘲笑らしい。

と、黒いものが横切ったかと思うと、またも鞭がふりおろされ、今度はその男の太腿あたりに喰いこんだ。

男は必死の動きで——いま打たれた太腿をかばいながら、背をみせて逃れようとした。

両肩からおりてきたロープが、見た眼にもひどく手首を吊りあげ、なおも胴にまわって締めあげ、うしろ手にもどっている。

手首から先もすでに色が変わっている。なにかを掻きむしるかのようにその指がふるえ、うごめいている。

——男は、追いつめられた足掻きそのままに膝で床をにじり、どうにもならないことは判っている筈なのに、部屋の隅へと逃げた。

リ、リン……と鈴が鳴り、そんな男の悲しい姿を楽しむかのような笑いと共に、やがてユラリと立つ黒衣の後姿が見えた。

右手に、四個の金色にひかる鈴をつけた鞭をにぎりしめ、またそれを弄ぶようにちいさくうちふるわせている。

追いつめられてどうにもならず、部屋の隅から凝と恐怖の眼で見あげる男。それを冷然とした後姿で、手の鞭を弄びながら見おろす黒衣の加虐者。——緊迫した、不気味な光景であった。

と……瞬間、床上にながくねってながれていた黒い鞭が、生きもののように走ったかと思うと、またするどい音と共に、その先端は男の肩のあたりを襲った。

男は満面朱と染まり、のけぞると咽喉もとをはげしく、びくつかせた。

悲しむべきは声のふさがれていることであろうか、歎くべきはいましめられた身の不自由さであろうか——そのとき突然、噴水が現われた。人間は、極度の恐怖なり苦痛の最中こういう現象を起こすものらしい。水が床をばたばたに濡らしはじめた……

黒衣の影は、すべるように男に迫り、何をするかと思えば、やおらその長い裾をたぐり

はじめた。そして、やはりそれも黒い靴^{ヒール}で、その「濡れびたりし」床を踏んだあと、矢庭にその靴底を男の顔に押しつけたのである。壁の角でどちらへも顔の除けられない男はその我が廃液の浸る靴底を、まともに受けたが、これは一度で終ったわけではない。

顔から放されたかと思うと、靴はまた床上の廃液を付着してから男の顔へ——。それが幾度となく繰り返されたのである。

やがて、被虐者の肩が、胸が、腹が、徐々に濡れて光りはじめた。

そのころにはもう、男は顔を除けようとする気振りもみせず、むしろ茫然とした眼をあけて、ただ凝っとしてそれを享受していた。

「……どう？ すこしは、顔が洗えた気がするかい？」

笑いを含み、いたぶる言葉が黒衣からもれた。低く押し殺したような——この黒衣の加虐者がはじめて口にした言葉であった。しかし、それは、まさしく女の……それでしかなかった。

そして黒衣の……女は、突然、火が点いたような猛りをみせて、跳ねあがるようにして男を打ち据えはじめたのである。

まるで乱舞、悪魔の狂舞であったが、これ

と同時に男は我れに返り？ その身体にもものすごい恐怖のいろを浮かべた。

身を「丸く」ゴムマリと変化させると、鞭の間を縫ってその追いつめられていた箇所からころがり出たのである。

切羽づまった、すさまじい躍動とも言えようか——

しかし、女のふるう鞭はするどい。

その転がり出た男を、まるで鞭ホッケー？でもするかのように、横にすべり、反復しては間断なく打ち据えた。

ごろん、ごろん……とひびくにぶい音。

鈴の触れる……金属の音。

するどく空を割り、肌を搏つ音。

こうして、こんな妙にして不気味なコントラストが可成りつづいた。

やがて。

女は何を思ったか不意に鞭を投げ出すと、息も絶え絶えに……だが漸くにして上半身を起こしたばかりの男へ、その裾をふわりと舞わせて、つまり、スッポリと男を包みこんでしまったのである。

男の虐げられた肉体は黒衣の裾につつまれて完全に見えなくなった。どうされているのかを見ることは出来ない。ただその苦しさに

身もだえするらしい動きが、僅かに黒衣に付たわっているのみである。

ふたりは……そのままで停まった。今までの烈しい苦しみを忘れたかのように、ぴたりと静止まってしまった。

そして、どれくらいの時間が経っただろうか？

「うふ、ふふふ」

と、次第に高くなる女の例の笑いが、この奇態な光景に異様な彩りを放ちはじめた。

見事に隆起している胸のふくらみが、笑い声につれて、ぶるッぶるッと早い波をうちはじめた。そして間もなく、

「ハハ、アハ……」

という女の、残忍ともよろこびともつかぬ声が哄笑と変った瞬間、見た眼には魔術のようにならぬ「水」が、その黒い裾の隙間から、ふたたび床上にひろがりはじめた。

「アハ、ハッハッハ……」

女は笑いつづけた。高らかに狂気じみた笑い声が続いた。

そしてその果てに、女は胸もとにあげた拳をふるわせながら、舞い上るようにとびのいた——。

あとに残ったのは、あわれにも無残な濡れ

ネズミ一匹。死んだような囚人のうずくまったままの姿である。

女は、投げ捨てていた鞭をひらうと、抜けるように白い二の腕も露わにして、また飽くこともなくそれを打ち振りはじめた。

飽くことを知らぬげな、魔女の乱舞が、鍵穴いっぱいに拡ってとびはねた。

○

——さて。

ここまでくれば私の出番である。

いよいよ、私の「登場」である。

私はドアから離れると、身構えて、

(うおうッ！——)

とばかりにそのドアに体あたりを始めた。

一回目は駄目。されば再び、とばかりに肩先から、ぶつかっていった。

また駄目。——その次も効果なし。

次第に本気になってきた。

体力を誇る私が、薄っぺらなドア一枚、打ち破ることが出来ないなんて！ と、ついに頭にきた。

「やあッ！……」

とうとう掛け声つきで、体あたりした。

金具の吹っ飛ぶ音がしてドアが開いたのはその時である。

私は勢いもそのままに部屋にとびこんだ。

「い、井堂ッ。だ……大丈夫か？」

私は床上に長々と伸びている井堂を足許にして、烈しい声で訊きながらも、じろじろと部屋を見回していった。

窓の一個処、カーテンが微かに、揺れている。どうやら開いたままだ。

私は、ゆっくりと視線をもどした。

もどして、縛られたままぶっ倒れている井堂を、つくづくとながめた。

そして、やがて私は言った。

「——待っている、井堂。いまからあの悪魔みたいな女をつかまえてやる。なあに、きつとこの僕がつかまえて、その化けの皮を引ん剥いてやるさ……」

言い終ると同時に、私は彼をとび越え窓辺に走った。

カーテンをはねると首を出し、その真下の白砂利にくっきりとついた足跡を認めて、大きくうなずく。

うなずいて、私は窓を跳び抜けた。

——雨は、やんでいた。

あれほど降りつづけた雨も、もうこれで降りつくしたのか。

夜明けに近い白夜が、つめたい空気が私を

待っていた。

——樹々は、この「渴いた一夜」だったことも知らぬげに、まだ静寂のうちにねむっている。それは、やがて吹き初める雨上りの風にしか、目ざめることはないであろう。

私は、チラリと後の窓を仰いでから、足音を忍ばせて玄関のほうにまわった。

約束通り、扉は開いていた。

そこから入ると、今夜の私の「待機室」だった部屋へと、尚も足音を忍ばせて階段をのぼる。

間もなく私は、上衣やら靴やらを抱えて、また元の玄関に戻って来た。

外側から扉に施錠すると、上衣を着ながらゆっくりと歩きはじめる。

そして、足の裏できしむ砂利の音をたしかめながら、庭園をまっすぐに抜けると——。

門灯の陰に、黒い影が立っていた。

近づいていく私に気づき、ユラリと灯りの下に立つと、手をあげ、その手を微かに振ってみせた。

「まだ、そんな恰好を……」

近づきながら私は言った。

黒い影……悪魔のような女？ は首をかしげ「何か言ったか？」というような素振りを

しめした。聞こえなかったらしい。

私は、すぐ前で立ちどまると、

「……ご苦労さん。だが、早く脱いでもらいたいね、それを」

と言った。

女は、覆面の陰でフフと笑ったようだが、すぐにその黒布を、かなぐり捨てた。

——そこには、門灯に映えた美しい笑顔の抄子があった。

まだ上気が残っている、生き生きとした、そのくせ新鮮さをそこなわぬ羞らいをいっばいに刷いた笑顔であった。

「あら、どうしましたの？」

彼女は黒衣を脱ぎながら、ふと私の濡れているズボンに気がつき、言った。

なるほど、そう言えばあの時の黒衣の「魔物」は、この彼女ではなかった……。

が、私は、

「そんなことよりも、早く着換えのほうを済ませてしまいなさい。やがて……あの男が車をここへもって来てくれるから」

と言った。

「はい」

彼女は素直にうなずき、ちょっと私の眼を気にしながら、傍に置いた小さな包みをあげ

下着と洋服をとり出すとそれを着はじめた。

「あのう……則夫さんは？」

何気なくふるまいながら、彼女が訊いてきた。ちょっと、気になったらしい。

「もう縄は解かれて、いまごろはセッセと自分で自分の身体を介抱しているだろうよ」

私は、車庫のほうをみつめながら答えた。

「でもあたし……こんな、四人が四人とも筋書きを充分承知していてするお芝居だなんてずいぶんと可笑しかった」

「……」

「奇妙な——お芝居だったこと！」

「いい。それ以上は言わなくていい」

「でも、則夫さんて方、演出もすごいけれどあのほうも徹底して、自己の満足を得ようとする方なのね」

「……」

「あたし、しまいには思わず本当のような気持ちにさせられちゃった——」

「なアに、本気で、よかったのさ……」

そのとき光芒が差し、自動車近づいてきて私たちの前に停まった。

老人のような顔が降り立ち、

「旦那さまの手当てにツイ手間取ってしまいました。おゆるしく下さい」

と丁寧な言葉を言った。

私たちは会釈しながら車に乗った。男が素早い動作で、門を開けてくれた。

「では……」と男のほうに目礼して、私は静かにアクセルを踏んだ。

「あら、もう夜明けなのね」

抄子が空をのぞくようにしてつぶやいた。

東の空が、やや白みはじめている。

——車は、その方向にむかっている。

「あのう、次の……あたしのお仕事は、決まっています？」

「ああ、次は——関西の方に行つて貰うつもりだ」

「どのような方？」

「うん、今度は井堂さんのようなわけにはいかない。ぐんとお年寄りだ」

「いつ発^たてばいいんですの、会長さん」

「明後日だ」

私は言いながら片手で煙草をまさぐり、それを口にくわえた。

間を置かず火を点けてくれる抄子に、

「可奈子さん——」

と、彼女の本名を言った。

「はい」

「きみは……本当に可愛い、美しい悪魔」

さんだね」

「まア、嫌だ、会長さん」

「いや本当だ、俺は心底から——」

「心底から、なんですか？」

「感謝している」

「なあんだ、感謝だけ？」

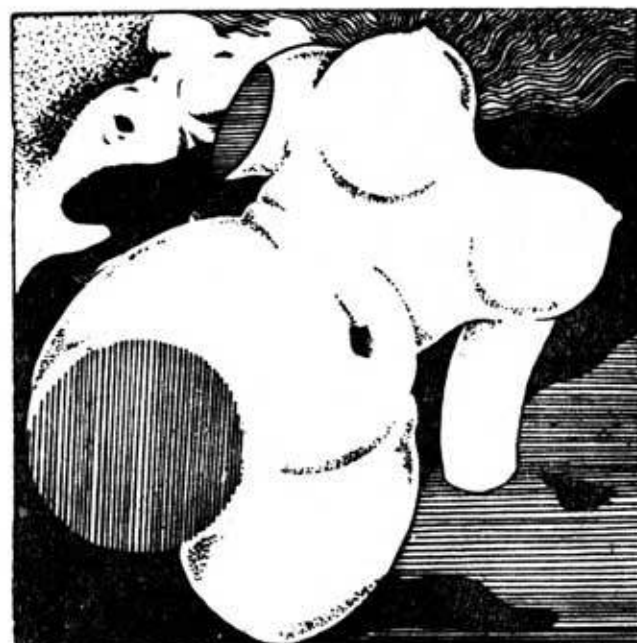
私たちは、街に近くなりつつあった。

もうこの辺で私も、あの井堂氏の——真面目といえば真面目、独善的といえば、独善的な——あの『一夜の演出』に踊った『友人加藤』のことも忘れて、本来の反町伸治にもどらなければならぬ。

秘めるが故に、より烈しくなる欲求心が故に——身悶え、人知れず苦悩している諸氏。

それらの方々に敢えて『貢献』しようとして斯界に生まれたプロフェッショナル、SMプレーの帝王と称ばれる本来の反町伸治にもどらなくてはならぬ。いや、別に意識して気取つて言うわけじゃない……

とまれ。私は、可奈子の甘ったるい香りにフト臉が重たくなるのを、前方に、残り火のように点滅する街の灯をにらみつけることによってまぎらせながら、煙草を深く深く、吸いこんだことであつた。



里子の物語・・・

瓦

(がれき)

礫

芳野眉美

里子のはじめての男は、三つ年上の兄の進一なのか、それとも義父であったのかはつきりわからない。

石堀で囲まれた広大な屋敷の一隅に、里子の家はあった。物置を改造した家とは名ばかりの粗末なものだったが、一家四人にとっては独立した自分の家であった。ただ、便所と台所は屋敷の使用人用を使うことになっていたので、多少の不便はがまんしなければならなかった。里子は、子供心にどうして自分の家だけ天井がないのだろうと不思議に思ったことをおぼえている。

瓦葺の職人であった野上元造が、仕事に

屋根から足をすべらし、右脚を折って跛になつてから、屋敷の下男とも守衛ともつかぬ雑役にやとわれて、女中の伸子と結婚し、当主から守衛小屋という名目でもらったものであった。元造は廿四才、伸子は十九才、翌年長男の進一が生まれている。

里子は屋敷の当主が政府の高官というだけで、くわしいことは知らない。勝手口に近い屋敷の便所と台所のほか、屋敷の奥の部屋を覗いたこともなければ、奥庭さえ入ったこともなく、不自然と思われるが、当主の顔さえ数えるほどしか見たことがないのである。

空襲が激しくなり、里子が小学校六年の夏

の集団疎開が始まったが、里子は残留組に編入された。自分のところだけは絶対焼けないという単純で頑迷な父親の反対のせいだったが、一人で遠い温泉地などに離れるより、死ぬなら親子四人で死にたいという素朴な愛情もあったのかもしれない。

この頃の元造の役目といえば、奥庭の一隅を残しただけの家庭菜園から、主食としてのサツマイモを栽培したり、わずかな野菜をつくったりするほか、田舎に米や麦の買い出しにいくことであった。

跛というだけで、病气らしい病氣もしたこともなく、ずんぐりした屈強な身体をこまめ

に動かすだけの、愚直な男であった。趣味らしい趣味もなく、楽しみといえば、夜、空襲のサイレンを気にしながらも、夫婦の営みを欠かさないことぐらいであった。

元造は体質的にも、女がなければおさまらないたちなのかもしれない。だが、女好きとは少し違うようにも思われた。

「またかい」といううるさそうな母親の声を里子は何度も聞いているし、「たまには遊んでおいでよ」と伸子が元造にいくらかの金を渡して、夜遅く父親を送りだしているのを見たこともある。そのときは遊びの意味がわからなかったが、後年になって、元造に赤線へ行くことをすすめていたのだと知った。「しつこいといったらありやしない」というのがその頃の伸子の口癖であった。

二人の夫婦生活が頻繁であれば、それだけ偶然子供達に見られてしまう機会も、また多いわけである。

物置小屋を改造した小さな家は、家具が簞笥と茶簞笥しか無かったものの、二つ布団を敷けばそれで一杯であった。一つの布団に両親がやすみ、もう一つの布団に兄と妹が寝るという習慣が、走ん坊の頃から続けられていれば、里子が不自然に感じなかったのも当然

であり、簞笥の環がかたかた鳴る音で目が覚め、小山のように盛り上った掛け布団がずり落ちて、見てはならない奇妙な情景を見てしまったのも、また自然の成り行きであった。

父の仕事をついで瓦職人になった元造も、小さい頃から女中奉公にだされた伸子も、棟割長屋で両親のそれらを見てそだった、環境が男と女の関係に対する羞恥心をとぼしいものにさせた理由だろうが、結婚してもやはり同じことを繰り返す原因になったのは、親子で、二つしか布団を敷けない家のせまさにあると思われる。

深夜であっても、闇に目が慣れれば、両親が何をしているのかぐらいわかるのである。伸子は声を殺しているが、殺し切れないこともあって、幼い兄妹を驚かせ、里子が迷い込んだ犬の鳴声と間違えてむっくり起き上り、笑いをさそったこともあった。

サツマイモの蔓や葉でもたべさせられるような食糧状況が悪化する頃になると、空襲はますます激化し、サラサラという無気味な音をまきちらしながら焼夷弾が全都にふりそそぎ、死者が増大するにつれ、跛のために兵隊にはとられなかったものの、いつ死ぬかもわからないという恐怖感が、ますます欲情に拍

車をかけるらしく、元造は露骨に伸子を求めるようであった。

家の中では、元造は二人の子供を気にしているのか、布団の中でちぎこまり、掛布団を気にしていることが多かったが、子供たちが熟睡しているとみると、かなりきわどい要求を伸子にしたらしかった。側に寝ている子供達の手前、伸子はさすがにいやがったが、元造もいつも同じようでは不満らしく、掛布団をはねのけてしまう大胆なことをするのである。そんな時、伸子は子供達の寝息の変化にさえ敏感になり、顔を歪めるのであった。

元造はたまには妻の身体を見なくなるらしく、二人の子供が登校し、仕事も休みになる昼食のあとなど、部屋を閉め切って無理に伸子を畳に寝かせて身体を露出させ、鼻をくつつけるようにしてしげしげと見ることもあった。「いやだねえ」とか「恥ずかしいよ」と始めのうちは抵抗する素振りを伸子は見せるのだが、いつしか元造の要求を許してしまうのである。

こんなときは見ているだけでは物足りず元造は伸子を四つ這いにさせて犬のように荒々しくあつかうのだが、誰もいない気安さのせいか、伸子もまた大胆になるらしかった。

この頃の伸子は、小学校六年の娘と、中学校三年の息子を、かなり気にしてきたように見受けられた。

サツマイモの葉や蔓でも、伸子は身体に合っているらしく、やせてはいなかった。大豆だけで一日をすごすことがあっても、伸子はけっこうほどよく肥っていたのである。

夜半・屋敷の便所に行くのを面倒がって、庭の畠で平気で用を足す伸子だったが、豊満な尻はむっちりとし、色白で綺麗であった。

警戒警報の最中、里子も母親と並んで畠にしたことがあるけれど、ゆうゆうと一機上空を飛んでいるボーイングB29が、小さく銀色に見えて美しかったことをおぼえている。

元造のあくことのない慾求を、たまにはいやがって拒絶したりする伸子であっても、父親に内緒でよその男と情を通じたことのあるのを里子は知っていた。

残留組で編成された六年の男女組は三十人ほどこしか生徒はいなかったし、空襲々々で授業どころではなかった。

警戒警報にもすっかり慣れっこになり、里子が二時間だけで打ち切りになった学校をひけてくると、家の入口に見慣れない長靴が脱

いであり、家の中から異常な気配が感じられ、変な物音が耳に入ったのである。

早朝元造が米を求めて田舎に買い出しに出かけたことは知っていた。家にはいるのをためらった里子は、窓から家の中をそっと覗いてみた。

昼間から布団が敷かれ、母親が見慣れぬ男といふのを里子は見た。丸坊主の男の頭にくれて伸子の顔は見えなかったが、四本の足の裏が掛布団からはみだし、奇妙に白いのが男の足の裏で、泥で汚れているのが伸子の足だと気づくまで、里子は何がなんだかわからぬまま、窓に鼻を押しつけていた。

布団のまわりに、伸子のモンペや着物が脱ぎ捨てられ、下穿きまで足もとに投げ捨てられていた。

壁に男のものとされる略章ぶきの軍服が吊るされており、軍刀がたてかけられてあった。男の肌着は丁寧にたたまれて、はぎとられたような伸子のものとは対象的であった。うるさそうに男が掛布団をはねのけ、驚くべき光景がまともに里子の目にうつった。

里子は思わず首をすくめて窓の下に坐ったが、再びおそるおそる首をもたげたとき、男の声が耳にとびこんで来た。

「伸子も、いろいろとしこまれたらしいな。なかなかやるじゃないか。元造はさぞおまえにくびったけだろうよ」

里子は窓を離れて勝手口から外に出た。別に遊びに行くところはなかったが、学校から帰る時間に戻れば、母親の変事を見たことにもならないし、家もあいていと思ったのである。大人の世界がようやくわかりかけた年頃でも、男女関係の複雑さを理解する年令にはまだ達していなかった。

久し振りに白い御飯のあたたかい匂いに包まれたことのほうが、里子にとっては、うれしいことであった。四人で夜食の膳を囲み、両親の話から、屋敷の二男坊の陸軍大尉が、一日休暇で遊びに来たことを知った。

翌日も授業は午前中で終り、里子は空腹をかかえて戻ったのだが、家には誰もいず、庭の畠で掛け肥をしている元造の姿が見えた。この頃では屋敷の便所の汲取りも元造の役目になってしまったが、けっこう家庭菜園の肥料に役立つので、始末にそう苦勞もしていなかった。

父親一人で母親の姿はなく、屋敷の用事でもしているのだらうと、元造が焚火で焼きいもをつくっておいてくれたのをほうばりなが

ら、里子はいらいらと広い庭を歩いた。

庭には見事な桜の老木が一本あったが、その下に防空壕の入口がぽっかり穴を開けていた。壕を掘ったとき、無数に張っていた根をかなり痛めたらしく、桜は年々生彩を欠いてきたようであった。里子は子供心に、このまま枯れてしまうのではないかと、花が少なかったのを心細く思ったことであった。

その防空壕の中で、人が争っているような声を里子は聞いたのである。かなり抵抗しているらしく、荒々しい息づかいが手に取るようにわかった。

「いけません」という、母親のおしとどめている声が聞こえ、「いいじゃないか、伸子」と母親を呼びつけにする男の声が聞こえた。

昨日、里子が驚かされた大尉は、今朝方帰営している。登校するために勝手口を出た里子は、大尉の軍服姿をただ怖ろし気に見守るだけであった。

誰だろうと里子は思った。屋敷にいる男とえば、屋敷の当主と父親の元造と兄の進一だけであった。聞き慣れない男の声は、母親を呼びつけにしている。

「夫が畠にいます」
「いてもかまわん」

男はかなり強引であった。

そのうち、争い声は絶え、防空壕は何事もないかのようにひっそりと静まりかえった。里子は一步、二歩入口から穴倉の中に身体をこめた。

壕の中から何かが軋む音と一緒に、激しい争いの気配が外まで洩れるということは、昨日家の中で行なわれていたことが、再び繰り返されているのでは、とおぼろげながら里子にもわかってきた。

里子は足音を忍ばせて壕にもぐり、階段の途中で地面に手をつき、顔を低く屈めて中を覗いてみた。母親が、また父親でないほかの男と一緒にいたと知っても、ふしだらなと思う気持や、母親をいやしむ気持など、小学校六年の里子にはなかっただろうと思われる。

貴重品を収めた箱の上にむしろを敷き、腰掛けて壕の板の壁に背中をもたせかけ、しどけない恰好の伸子が、男の大きな体の陰にかくされるようにして、腕いているさまは、やはり里子を驚かせた。

不意に男は伸子の両脚を肩に担ぎあげた。膝が腹に押しつけられ、ゴムマリのように身体を内側に折り曲げられて呻めいた伸子は、男の広い背中にかくれて見えなくなった。

母親がいじめられていることを、畠の父親にいいつけにいかなかった里子の気持はよくわからない。なんとなく母親の秘密と感じたのを父親に話すことは、母親を裏切るような気がしたのかもしれない。また、父親が激怒した時のことを想像すると、そのほうがもっと怖ろしかったのかもしれない。

里子は畠の父親の側に坐って、元造の仕事を見ていた。防空壕の方から男の姿が見える。と、里子は緊張で身体がすくんだ。その男に気がつく、元造はあわてて挨拶にとんでいった。

男に対し、丁寧にも何度か頭を下げ、「伸子伸子」と母親を呼んでいる元造の声が里子にも聞こえてきた。男は手を振りながら、屋敷に消えた。

里子は、父親の話から、壕の中で母親をいじめていた男が、当主の末弟であり、里子が生まれる前、当主の兄の家から大学に通っていたこともあることを知った。女中の伸子とはその頃から面識があったわけであった。検事という弟の肩書きが、当時の里子に理解出来なかったとしても無理はない。

この頃の屋敷には、当主夫妻の世話をする老婆と、台所をきりまわす伸子の外に女中は

いなかった。

その夜、検事の布団を敷きにいったまま伸子は二時間あまりも戻ってこなかった。ようやく帰ってきた伸子に、元造は不気嫌な様子で何かぶつぶついついていたが、「お酒の相手をしていただけよ」という伸子のなげやりなものうげな声がし、「今夜はつかれているから寝かせて」と、元造に背中をむけてしまった。

兄の進一が里子の横にもぐり込んだのは、両親のそんなさわぎがおさまり、伸子が軽い寝息をたて始めた頃であった。何が気にさわるのか、元造ひとり、やけに寝返りを打っていた。

里子の兄の進一は、家から歩いて二十分位の所にある都立中学の三年生だったが、軍需工場に動員されて授業はなく、帰りはいつも遅かった。工場にかりだされても、別にこれといった仕事もないらしく、やたらと防空壕を掘らされてうんざりしていた。それでも工員たちから聞く、女の話が面白いらしく、ずる休みをすることなく工場に通勤していた。学校の友達の中には、工員にさそわれて、赤線の女と遊んだのもいたのである。数少い

タバコや酒や、女を教えられるのも、共通した話題だから当然のことであった。オナニーは五六人並んで砲列をひくという稚氣あふれた遊びでもあった。

それらは悪友から教えられたが、夢精は現実に体験してみてわかったようなものであった。ある朝、異常を認めた。進一は驚き、悪疾にかかったのではないかと思い、泣きべそをかけた。

母親は知らなかったが、父親が伸子から聞き、「馬鹿、病気じゃねえ、それは」と教えられ、そんなものかと思ったが、「お前ももう一人前の男になったんだな」とからかわれて、急に恥ずかしくなり、母親の顔が見られなかったものである。

進一の横で両親が一つ布団にくるまって寝なければならぬという環境が環境だけに、進一は仲間より少しはませていた方であった。男女の関係がどんなものか、目の前で見せられては、うすうす感づいてしまうのも無理はない。

小学生の頃までは、そう気にならなかった両親の同衾が、中学に入ってから急に目ざわりになってきたことは確かなことであった。それは不快を感じると同時に、進一にとって

は快感でもあった。

両親の布団と進一の間、里子をはさまるのがいつもの習慣であった。両親の夫婦生活に敏感になった進一が、目聡くなり、元造と伸子のあられもない姿態や独特の空気を、妹の里子を盾にしてひそかに窺うようになったのは、進一が肉体的に成長し、工場での体験や悪友から女の話聞かされて好奇心が強まったからにはかならない。

元造と伸子の秘めやかでかつ大胆な睦言を耳にするにつれ、成長しきっていない里子の細い身体に触れている手に力が入ってしまうことさえあるようになった。意識してさわっているわけではないが、やわらかくあたたかい里子の身体が、進一の手の平に生々しく伝わるのである。

里子はどちらかといえば浅黒いほうであった。母親に似たのか、小学生にしては体つきが人より大きかった。進一は三つ年下の妹の里子と一緒に寝かされていたので、里子を女と感じることはなかった。冬の寒い夜には抱き合って眠り、夏の行水では裸の里子を見慣れていた。

それが、進一が妹の胸のふくらみに気がつき、女に近づいた妹をいやらしく思い、「女

くさい」と里子を泣かしたのは、性の関心が増すにつれ、妹に女を感じてきた自分の狼狽をかくすためもあったことだろう。

工員たちの間では、どこから持ってくるのか春本のまわし読みもあり、その中の女のセリフを真似する者がいたり、それに合わせて男の分を受け持つヤツが出て来たりで、授業より面白いとわあわあいつている仲間に、進一はいつも加わっていたのである。

進一の級友の中では、両親のそうしたことを見たものは少く、進一のきわどい話をせがまれたものであった。春本も面白いが、実地に見た者の経験話のほうが、よけいに迫力がある模様であった。

工員たちにしろ、中学生たちにしろ、こんな話をしているときは、両親を侮辱していることなど、念頭に置いていないのである。

工員に誘われても、進一が女遊びに行かなかったのは進一に金がなかったからである。遊んできた仲間の話に刺激され、俺も早く女を知りたいと思うものの、元造はそれだけの小遣いを進一にあたえてはくれなかった。

従って進一は童貞であり、女の裸体を見た、女と遊びたい、という欲望は、進一の心の奥深く、ぶすぶすとくすぶり続けた。

休日が進一は苦手であった。決まって元造から家庭菜園の手伝いをいつけられるからであった。伸子は屋敷の台所の用事のほか、老婆一人ではかたづけかない奥向きの雑用も多く、畠までは手が廻らなかった。

ある日曜日、進一が最も嫌う便所の汲取りを命じられて、いやいや重い腰をあげた。いうことをきかなければ、白い飯を食わせないというのだから仕方がない。使用人の便所は元造が受持ち、屋敷の当主夫妻の使用する奥の便所を進一が受持たされたのは、屋敷の人数が少なくなって量がそんなになかったからであろう。

屋敷のガラス戸が並ぶ長い廊下のわきを、進一は肥桶をかついでうんざりしながら歩いた。屋敷の奥座敷から珍らしく明るい笑い声がし、来客がある様子であった。

無花果が茂って仄暗く、じめじめした屋敷の隅にある便所の汲取口は、コンクリートの蓋に苔が生え、進一をますます不気嫌にさせた。手拭で鼻と口をおおい、目だけをだして体を弓なりにし、手だけを一杯にのばして、汲取口から肥柄杓を突き出すようにした。

畠の肥溜に捨てて戻ってくると、便所の中

に人の気配がして進一は訝かった。液体の飛沫があげられたままの汲取口にはね、呟いとも嘆息ともつかぬ声が出た。作業中なのを気がつかなかったのかもしれないが、ずいぶん人を馬鹿にした行為だと進一は思った。誰だろう。不満とも憤懣ともつかぬ怒りが進一を襲った。

奔流が終っても、人の気配は便所を去らなかった。上の窓はわずかばかり開いていたが中の人が誰だかわかるはずはない。進一はしばらく作業を中断したほうがよさそうだと考えたが、「いやだなあ」という女のひとりごとで驚いた。

親戚筋にあたる外交官に嫁いだばかりの、当主の末娘の声だったからである。端正で上品な外交官夫人の顔を進一は思い出した。使用人の子供である進一にとっては、近づくことも許されない高嶺の花であった。

進一の半分やけになっていた心に、好奇心がよみがえり、ある期待に胸は膨れ上った。進一は汲取口に膝をついた。そんな行為はあまりにも大胆で危険なことであったが、見つかつたとしても、作業中であることを力説すれば、いいわけは立つと咄嗟に考えたからでもあった。

汲取口に膝をつくことを進一は、今は少しもきたならしいとは思わなかった。飛沫が輝く土に進一は顔をこすりつけるようにして、中を覗き、首をひねった。

暗かった。物体がうごめく気配だけが、かろうじて感じられるだけであった。

無花果でおおわれた庭は進一の期待をあっさり裏切った。だが、進一は満足だった。

美しい外交官夫人の尻の下に自分がいるという想念だけだったが、偶然そうなれたという意外な結果に、進一は激しい胸裡の騒ぎを覚え気が遠くなるようであった。

息を止め、身じろぎもせず、汲取口にうずくまっている進一の目の前をゆっくりと一直線に落下していくものがあった。

進一が首を突っ込むようにして溜壺を覗いた時間は、長くもあり、短くもあった。一瞬のうちに過ぎ去ったようでもあった。進一の動悸は早まり、何をなぜ見ようとしているのかわからなかった。

紙の音に、進一はあわてて身体を起こし、無花果の蔭にかくれた。便所の窓からでは見られないが、そこからなら廊下を歩く外交官夫人の横顔が見えるはずであった。

その夜、進一は目が冴えて眠れなかった。

結局は血の騒ぐのを覚えた想念だけのことだったが、それでも思い出すだけで身体がふるえてくるのである。

進一のとなりに寝ている里子も、熟睡しているようであった。仕事疲れの元造の軀だけが耳ざわりであった。

進一は自分の手が、無意識に妹に伸びているのに気がついた。里子の寝相は悪く、寝巻の裾はまくれ、洗いざらしの下穿きのぬくみが進一を狼狽させた。

進一は布団を脱け出し、奥庭の木戸を開けて屋敷の便所の前に立った。廊下のガラス戸は雨戸が閉められ、庭の木立ちの間から星空が見えた。警戒警報もない静かな夜であった。屋敷全体が呼吸を止めたように静まり返っていた。

月明かりをたよりに、進一は汲取口のコンクリートの蓋を開け、その前にしゃがんだ。「いやだなあ」といった外交官夫人の言葉の意味が、下がいやに明かるくて、汲取口が開いているのに気がつき、作業中なのに知らずに入ってしまった気色の悪さで思わず声をあげたのか、とぎれとぎれに、進一の目の前に落下した、便秘とも思えるその気色の悪さに腹を立てたのか、進一にはよくわからない。

外交官夫人が去ったあと、開きかけた蕾のように、白い柔らかな紙が、二つ、浮いているのを進一は見た。まるめられた紙が、外交官夫人の化身のように進一には思えたのである。

その白い蕾が美しく開花し、夜目にもはっきりと見えるような幻覚にとらわれて、進一は頭をかかえた。

不意に便所に灯がつけられ、外交官夫人が扉を開けるのを進一は期待していたのかもしれない。だが、便所の窓はいつまでも闇であった。

あきらめて、再び布団に戻った進一は、寝巻をだらしなく乱した妹の寝ざまにも白い蕾を幻覚した。

くたびれてようやくまどろんだ明け方、進一はいつか経験した異常現象を認めて狼狽した。

進一が里子を女として感じ、禁を破ろうとした直接的な原因になったのは、母親の姦通を目撃したことであった。

その日、工場から帰った進一は、里子から防空壕の中での、母親と、屋敷の当主の末弟との一件を聞いた。父親に話せないと思った

ことを兄に話したのは、二日続いた母親の奇怪な行動が、里子にとっても、やはり異常な事件であり、一人で胸におさめておくことが出来なかったからに違いない。

話を聞いた進一は、露骨に不愉快な顔をした。信じられない顔で幾度も里子に念を押した。当主の息子との一件も聞きだしたのである。

「二日続けてか」きたないものでも吐き出すように進一はいった。両親の夜のことは、それが自然であり正当だけに寛容できた。夫婦

というものの一面を進一は理解したつもりであった。しかし、母親を女と感じたことはない。母親は進一にとっては無性であった。伸子に女を感じることは、母親への最大の侮辱であると思っていた。その母親がこともあるうによその男と。進一は母親を許せないと思った。父親の女買いは、男の特権として認めているのだから、男親と女親に対する進一の比重がわかるのである。

遅い夜食が終った頃、屋敷から老婆が伸子

を呼びにきた。お客様のほうまで手が廻らないから手伝ってくれ、ということであった。お客様とは当主の末弟の検事のことである。伸子は、いそいそと老婆のあとに従った。

伸子はなかなか戻らなかった。布団を敷き着換えを手伝うくらいだから、そんなに時間はかからないはずであった。

当主の息子の太尉からもらったという土産の酒を、元造はおしだまつたままちびりちびりやっていた。元造は妙に不気嫌であった。

里子はおびえたように布団を頭からかぶって寝てしまった。そのとき、進一は、家族三人が、同じことを考えているのではないかと思った。伸子が屋敷に行ってから、小一時間たっていた。進一は父親の丸められた背中を見ながら、家を出た。

いくら暗くても、木戸を開けて奥庭に入ることに進一は慣れていた。外交官夫人の刺激的な記憶が、深夜、奥庭の便所のあたりを夢遊病患者のように歩かせたからであった。

廊下の雨戸は閉められていたが、雨戸の小さな穴から洩れる灯りをたよりに、足音を忍ばせて進一は屋敷の中を窺った。当主夫妻も老婆も寝たらしく、屋敷全体が一つの大きな闇の塊であった。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

便所に近く、奥座敷のあたりに一つだけ灯りがついていた。進一の動悸が早くなった。だが、奥座敷は意外にひっそりと静まりかえっていた。進一が空想していたような異様な気配は全く感じとれなかった。

進一は守宮のように雨戸に吸いついた。奥座敷の障子は、中央にガラスがはまっている二重障子であったが、障子の一つだけが完全に閉められていず、ガラスを通して奥座敷の一部がかるうじて見えたのである。

電気をつけたままの座敷の中央に、敷布団が二枚重ねて延べられ、掛布団は二つ折にされたまま、男と共に居る母親を見た。

しかもその二人の姿は、進一がまだ一度も見たことのない奇妙なものであった。

進一の体中を、憎悪と共に得体の知れないものが、吠え狂い走り抜けた。

進一は伸子が家に戻ってから、しばらくして妹の横に興奮をおさえた身体をすべり込ませている。

伸子と里子の寝息は聞こえたが、元造は再び起き出し、何か考えこみながら、コップ酒をあおっていた。伸子と当主の末弟との間を疑っているようにも見受けられた。

仮りに伸子が白状したとしても、主筋にあたる男のことでは、抗議はおろか、一笑に付されてしまふだろうし、当主と元造の長い主従関係を考えれば、元造は何も出来ないじりじりした腹立しさを、わずかばかりの酒でまぎらわせるより仕方なかったことだろう。やっと寝ついた元造の軀はまるで破れかぶれのように進一には聞こえた。

家族が寝静まるのを待っていた進一は、熟睡している里子の下穿きを少しずつ下ろし始めた。寝返りを打つ里子に、はっとして手を休めることはあっても、辛抱強くその作業に熱中した。里子としては、いつでも兄の進一の身体に触れて寝ていることに安堵感があるのだ。進一が少々さわったとしても、驚いて声を立てることはなかったのに違いない。

なにやらくすぐったくて目を覚ました里子は、進一ににらみつけられ、「だまっていろ」とおどかされ、何がなんだかわからないままくるりと背を向けた進一に首をすくめた。

後年、里子の記憶が再生されるまで、里子は兄がその時、なにをしていたのか、「だまっていろ」といった、その意味がよくわからなかった。

花火のように焼夷弾が弧を描いて屋敷のあ

る町に落下したのは、それから一週間後のことであった。

子供だましのバケツリレーや火たたきなどの防空演習が役に立つわけではなく、燃えやすい木と紙の家並は、まるで焼夷弾のためにあるかのように、面白いように焼けた。

やがて、焼夷弾に交って爆弾が投下され始め、無数の焼夷弾で屋敷にも火がつくと、防空壕から飛び出した元造一家四人は、一塊になって逃げだした。

四方八方が火の海であれば、逃げるのも目茶苦茶であった。群集にもまれ、爆弾の炸裂におびえて走るうち、いつしか伸子と里子は元造と進一の姿を見失っていた。

明け方、手をしっかりと握り合ったまま、泥だらけの伸子と里子が屋敷にたどりついたとき、こうまでさっぱり焼けるものかと思うほど、屋敷はきれいに焼け、里子の小さな家と防空壕のあたりに、直撃弾があたったものか桜の大木もふっとんで、蟻地獄のように大きな穴がぽっかりあいていた。

母娘二人は瓦礫の中にうずくまって、当主夫妻に老婆、父や兄を待ったが、三日たっても誰も帰って来なかった。

(未完)

告

白

禁じられた楽しみ

並 原 新 一

ぼくのエッチ遊びは、禁じられたことを破るとき、あの何ともいえない快感と結びついています。これまで本誌に、ズロースやオシメなどを用いての遊びや、浣腸プレイについて述べてきましたが、よく考えてみると、どれもしてはならないことをしてしまうときの快感について、くり返していたようです。そのときの恥かしさ、みっともなさ、けいべつされる感じが、マゾと結びついてぼくを楽しませてくれます。

ぼくの好きなこと――

一、男のくせに、女のズロースを穿くということ。このとき、できるだけ女性用の下着きであることが誇張されているような下着が好き。最近では、男のブリーフと女のものとよく似ているので普通のパンティでは駄目。できるだけ大腿にくいこむ、裾口にヒダの多いズロースやブルマーか、レースのついたものもいい。前ボタンのついたメンスバンドもいい。パンティでも、はでな花模様のついたもので、明らかに女性用のなまめかしいものや踊り子用のサテンのパンティや金色や銀色のパンティでもいい。こんなふうな女性特有の下着きを、男のぼくが穿いているところを他人に見られて恥かしめられたいのです。

二、男のくせに女の下着をつけて女装させられること。

女だけのメンスバンドを穿かされ、動きたびにゴボゴボと音がしたらいい。(アンネは駄目。できるだけ昔式のがいい) ふわーっと柔らかなシュミーズをつけたい。黒や網のストッキング、赤いガーターをつけ、ハイヒールを履きたい。ミニスカートを付けて、サテンのブラウスを着たい。ブラジャーで、キューッとしめつけられたり、コルセットでしめられるのもいい。これらは、嫌がるのに無理矢理つけさせられるのがいい。不良少女のグループに、いんねんをつけられて、地下室か公園のトイレに連れこまれ、けいべつの視線にとりかこまれた中で裸にさせられ、女の下着を一つ一つ自分でつけてゆくぼくの手は、喜びにふるえるにちがいない。あるいは、パンティを盗みに女子寮にしのびこみ、女子大生に見つかってつかまえられ、罰として縛られて下半身をつぎつぎに女性化させられてゆくとき、ぼくは興奮して失禁するかもしれない。恥ずかしい恰好のままで公園の木に縛られたり、椅子に手足を縛りつけられるのもいい。セーラー服もきせられて、夜道を監視つきで歩かされてもいい。

三、大人のくせに、赤ん坊のようにオシメをはめたいこと。

いい年をした中年男が、色鮮かなオシメカバーや、あめ色の総ゴムカバーを強制的に穿かされる喜び。ゴムのヌメヌメした、ムンムン臭うオシメカバーをあてさせられて、晒しものにされてみたい。メンスバンドでもいい嫌がるのに強制的に、ピッタリとあてがわれてゴボゴボ妙な音をたてながら歩きまわされたり、縛られてもてあそばされる。

四、大人のくせにオシッコを洩らしてしまうこと。

大衆の面前、電車の中、教室、運動場などで、ついに我慢できなくなって、ジョーツという音とともに溢れ出る生ぬるい液体。あるいは、堪えられなくなって、ついにししと小さきさみに洩れはじめる瞬間！ 囲りの者の好奇と嘲笑的な視線を浴びて、真赤になりながらもどうすることもできず、生理作用に身をまかせてしまわなくてはならないほどの辛さと喜び。足もとに次第に広がる黄色い洪水の中に立ちつくしている。あるいはベッドの中の生暖い感触にうっとりとなっている。

五、大人のくせに大便も粗相してしまう。浣腸されて、いじわるな看護婦さんに時間

ぎりぎりまで堪えさせられ、やっと許可がでて廊下を走ってゆきながら、ついに間に合わなくて、そのままズロースの中かズボンの中におとししてしまう。また、宿題を忘れた罰に大量のグリセリン浣腸をされて、教室の隅に立たされる。十分とたたないうちに、足をバタバタさせ冷汗を流しながら、しかし、ついに悪魔は奇妙な音とともに突き出してくる。若い女性が浣腸責めされているのを見たい。ハデなオシメを幾重にもあてられ、アメ色の不恰好なカバーをはめられて不良少年のグループから、さんざんこつまわされる。そのうち、ついに女は泣きながら、しやがみこんでしまう。体操をサボった女高生に罰としていちじく浣腸を三本する。バレーボールをしながら、ブルマーの中で汚してしまう。昔のハリッケ台の上に若い女の囚人が手足を大の字に開けられた姿勢で、数日間、街角に放置されている。そして、みんなにみつめられている中で粗相してしまう。

多くの好きな言葉――

「いや、いや、許して……」「どうか、そればかりは、お許し下さい」「ああ、恥かしいけどがまんできません……ああ、下に何かあてて下さいませんか」「お願い、トイレに行

かせて」「洩れそうなの、いやだわ、早く、ゆかせて下さらない。だめ」「たまらないのよ。許して。汚すわ、ああ、だめ、ズロースが濡れる」「看護婦さん早くオシメして下さい。洩れそう、ああ、早く。恥かしいけどオシメカバーをあてて」「先生、許して下さい。あの、もうがまんできません。ああ、少し、早く、洩りました」「いやーん、早くほどういて。早く、早く。ああ、もうだめ。がまんできない」

多くが人から浴びせられたい言葉――

「まあ、この人ったら、男のくせにズロース穿いているのよ」「嫌らしい、あれ、メンスバンドよ」「これ、なーに？ ゴワゴワしているけど、マアバンドじゃない。どうして、こんなの穿いているの」「この人、男のくせに、このブルマーを穿くつもりなのかしら。ねえ、きつと、こっそり穿くのよ、きつと」

「あらあら、大変。オシメがびしょびしょじゃないの」

「どうしてこんなに粗相したの。何もかもすっかり汚してしまって。早くいえばオシメをあててあげたのに。大人用の、かわいいのを

S.C.R. (性問題相談室) 開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

私もっているのよ」

「いやな人！ よほど、こらえていたのね。ズロースもシミーズもシャツまで、びっしりよ」

「さあ、安心して、もう汚してもいいわ。特別のゴムパンティを穿かしてあげたから」

「さつきまで変だと思っていたらあなた、パソツの下に何を穿いているの？ まあ、どんなつもり。ピンクのズロースなんか穿いて？ しかも、びっしり濡らして」

「あの人、ブルマーを三つも買って、どうするのかしら」

「ビニールのシートも、お尻の下に敷いているから大丈夫よ。派手に洩らしてみせてよ」

「だめよ、さあ、三〇〇CCを三本もしたのだから、ちゃんとオムツ当てましょうね」

「オムツが恥かしければ、ブルマーで隠してあげますよ」

「大丈夫よ、ちゃんとオムツ三枚あてて、特別製のカバーで、ぴっちり締めてあるから、安心して汚していいのよ」

「どうしたの、何だか少し臭うわね」

「とうとう洩らしちゃったのね、赤ん坊みたいに。ウフフフ」

—おわり—

鬼 六 談 義

秋 の 風

団 鬼 六

夏も終り、そろそろ秋風が立ち始める頃になると、毎年の事ながら、私は一種の無常感に落ち入ってしまう。

やっている仕事つまらなさとか、日常生活の変りばえのしない下らなさみたいなものが、妙に鬱積してきて、自分自身に均整がとれなくなり、変に足もとがふらつくようなのだ。とりわけ、冷ややかな秋風の吹く朝、庭木の枝がさらさら寂しげに揺れ動いて、初秋の柔らかさをかもし始めると、何か胸の中が索漠として、次の仕事に着手するのが億劫になってくる。こういうのがスランプというの

だろう。

ピンク映画のお粗末な脚本を五十本も書き続け、これで飽きのこない方が不思議だが、一年ばかり前に人にすすめられて着手した翻訳アテレコの仕事も、責任者の私がこんな具合に二足のわらじをはいているため思うに任せなくなり、人間を三人も四人もつかってそれで儲けがあるのかないのか、さっぱりわからず、面倒くさくなつて解散してしまつた。事務所をかまえ、人を使って仕事をするという事が如何にむづかしく面倒なものかということを感じ知ったわけだが、自分一人で原稿

と取り組み、その報酬を受取っている方が、どれだけ気が楽であるか知れない。

だが、徹夜がつづき、身心ともに疲労して来た故か、そうした三文原稿に立ち向かうことすら苦痛になり、実に意味のない下らないことに時間を空費しているように思われ出してくるのだ。たとえば、下らない唾棄すべき仕事であるにせよ、人間はただ盲目的にわずかの報酬を目的としてコツコツ働くべきものであり、そこに意味もあれば内容もあると思うのだがさっきいったように秋風が吹き始める頃になると、こうした現実にくと嫌気がさし



現在の生活圏内から逃れて、身心を解放させてみたい欲求にかられ出す。そこで期日の迫っている仕事も放棄し、最近、親しくなったマニヤの人達と融け合い、いわゆる彼等の言う遊びの仲間入りをしてみたのだが、結果は下らない事に肉と神経をすりつぶしたという悔恨に落ち入っただけのことであった。

A氏、B氏、C氏などは最近、私がふとしたことから知り合ったその種のマニヤで、つまり、金のある有閑紳士、時折、二人、または三人がかりで、いわゆるプレイを行っている。といっても、キャバレーやアルサロなどのホステスにいくらかの金を与え、納得づくで賜りものにするわけだが、これ程、見ていてつまらないものはない。女は、この変態連中にいたずらをさせてやれば、かなりの金になるから辛抱しているわけだが、それをA氏やB氏が交代し合いながら縛りあげ、特別にあつらえたらしい綿で出来た鞭で、なるたけ痛くならないように、くすぐるような調子でぶつのである。そうしたプレイを私に見物させてくれるのは有難いが、何だか子供だましいみたいで、彼等が女に気を使って、そつとぶったり、軽くつねったりしているのを眺めていると、ふと情ない気分になってきた。有

閑紳士連のプレイというものは、金で買った女をこんな風にして、SMプレイとは名ばかり、これれものにもでも触るようにして、いじめ出し、いや、いじめているつもりになって演じ、けちくさい欲情を満たしているだけなのだ。といっても彼等の遊びでは、それ以上望むことは無理だろう。ピンク映画の撮影を見ているよりつまらなく、もうこんな会には二度と出るまいと思つたが、何よりも不愉快なのは、彼等の相手になる女の容貌、スタイルのお粗末さであった。しかし、こうした紳士連にとっては、女の容貌、スタイル等の多少の欠陥はがまん出来るらしい。緊縛プレイが出来るといふのが何よりの魅力なのだ。

こうした定期的な緊縛パーティーを持つ紳士や、以前から親しくしているマニヤの友人に時折、M女性を紹介して貰えまいか、という相談を私はよく受ける。商売柄、私が色々な種類の女性と親しくしていると思ひこみ、そんな事を切実に頼みに来るのだが、最初からMだとはっきりしている女性なんて、そういうものではなく、S的男性に飼育されてM的な喜びを女性は感じ出し、M化する事になるのだから、他人に飼育されてM化した女性をつかまえプレイするなど恰好悪い話だ。一個

の女体をMに育てあげていく所に楽しみがあるのである。ピンク女優の谷ナオミや辰巳典子など映画に出るたびに縛られたり吊られたりしているの、あれはMだ、と断定するようなそそっかしいマニヤもいるけれど、あれは商売だから縛られているのであって、本人は決してMではない。といっても女は多分にM的要素は持っているから、あれでも飼育すればM化するだろうけれど、少なくとも現在では、マニヤを悦ばせるようなM女性ではないわけだ。しかし、中には、生まれながらにして本質的にM的性情を持ち、普通の性行為と緊縛された性行為とは、その興奮度が倍以上違うなどとはっきり断言し、女学生時代は、緊縛され悪党に賜られる光景を想像して自慰行為に浸ったという、はっきりした女性がいる。こんなのにくぐり合ったS派の男性は実に幸せといわねばならないが、何時かK誌に「花と蛇」の愛読者という女性が登場し、自らすすんで緊縛モデルになったというのがいたけれど、あれと同じように、ピンク映画の方にも「花と蛇」の愛読者だという女性が私を訪ねてやって来、緊縛女優を志願するというのが最近あった。ピンク女優難の折から、これは有難い事だと早速、私の脚本

「肉体手形」に役をつけ足し、祝マリと連縛してみたが、役者としては全くの素人だけれど、辰巳典子そのけの見事な乳房、容貌も十人並み以上だし、これは一寸した掘出し物かも知れない。今月号に間に合うか合わぬかわからないが、脚本とフォートを編集部に送る事にする。KK誌のモデルになってもいいと云っているの、辻村氏が上京された時はまた紹介するつもりだ。

今までピンク女優の中で、こいつは、根っからのMだと私が感じた女優は、以前、少し話した滝リエと、このニューフェイス、京マコだけである。とりわけ、京マコは「花と蛇」の愛読者という所から、緊縛女優を志願してきただけに、ふと物凄さを感じるが、しかしこうしたM女性をさっきいった、好色グループ、といつては失礼だが、金のある有閑紳士連に紹介するのは妙に気持がひかかる。いや、紹介するのはいいんだが、僕はS、貴女はM、それではプレイしましょう、というのが、何か動物的で気に喰わない。小遣いは充分与えるからなどと彼等はいうが、それがまた、こっちにしては面白くない。また、金を支払ってプレイするなど、この場合は場違いの感じがするのだ。金を受取って、S男性の

欲求を満たすというのは、まず十中九までMの女性ではあるまい。インチキしてM的に振舞うだけで、S派の男性は、すぐにそれを観破出来る筈だが、とにかく、そのムードに浸ればいいのだと、つまりプレイしながらマスターベーションに、浸っているようなものだ。性行為である限り、一方的であるのは、いわば違犯行為であり、双方共に性をエンジンメントするべきだ。マスターベーションなれば、トルコ風呂に行くようなもので、それに金を支払うのは当然だが、自分のMの性情を満足させ得る男性を待ち望んでいる女性に、S派の男性が何も金品を支払い、それを商取引にする事はないのである。

つまり、SとMという風に条件が揃ったのなら、双方、積極的に好意を持ち合うよう努力すべきだ。Mの女性というものは、男性の強い愛情を求めるもので、精神的にも自分をきびしく緊縛してくれる男性を求めるものだ。どちらかといえば、やくざっぽい、強引さを持つ男性にあこがれている。

そういう風にマニヤの友人に話して、以前M女性を一人紹介したのだが、どういうわけか、その友人、肉体的には女体に対し、どんな事をやってのける男だが、普段は猫のよ

うにおとなしく女性的で、このM女性の氣を引く事は出来なかった。性的にSの男は、どうしてこう女性にもてないのだろうと、これは以前から、私が不思議に思っていたことだが、何時か談義に書いた事もあるけれど、S派の男性は助平のくせに表面、助平らしくないよう振舞うというような、みっともないごまかし方をするのが多いようで、これはM型の女性からみて、むしろ、いやらしく受け取られる。

人を見て法をとけ、というが、まだ海のものとも山のものともわからぬ女性を緊縛し、自分だけ酔ってみたいと思う時は、紳士的に振舞う方が良いかも知れないが、はっきりMとわかっていて女性なれば、何も遠慮することはない。Mの女性とプレイを開始する場合は私は自分をやくざに置きかえてしまい「フザケルナ、コノアマ」なんて言葉をなるべく使うようにしている。いささか関西訛りがあるのあまり歯切れがよくないが「俺がいなきゃ日本は駄目だ」といった調子で横柄な態度をとり、何でも高飛車に出て、強引に女を引きずるべく努力するのだ。自尊心の強い男にM女性は弱い、ということを含までの経験で私は知ったから、わざとそんな風に振舞う

わけだが、プレイするといっても何かの口実を作って彼女をいじめなければ面白くない。それは、どんな些細なことでもかまわない。

責めの口実になり得るからである。「近頃、貴様、少し態度が生意気だ」とホテルへ入る前、どこかの酒場でまず彼女に難ぐせをつけ糞面白くないような顔を作って、グイとウィスキーをひっかけ「今夜は一寸折檻してやっからな」と、すでに肉体プレイに入る前から心理プレイに入り、これから、どれくらい目にあわせてやるぞということをはのめかす。Mのけのある女性なれば、これだけで、もうすでにM的ムードにまきこまれ、ふと肉体にもうずきを覚える筈だ。ホテルへ入れば、そこで再び色々と彼女を取るに足らない理由で難じ始め、私なら私好みの柱に全裸の立縛り、そこで、最近、お前のつき合っている男の名を云え、とか何とか、そんな調子で小突き廻し「よしどうしても云わなきゃ浣腸責めだ。近くの薬屋で浣腸器を買ってくるからな。おとなしく待ってるんだぞ」と云い捨て、襖を開けて、わざと出て行く。そんな風に間をとるというのも、一つのコツだ。襖を細目に開けて、床柱に緊縛されている彼女を盗見しているのも、また面白い。次のおぞましい責め

を待つ彼女の肉と心に、M的な陶醉がじわじわこみ上り、ぴったりと閉ざした太腿を大抵もじもじと揺らせている。

SMプレイを始めるにも、こうして一応ストリーミたいなものを作って、心理的な責めを加味すれば、M女性をかなり満足させ得ると思うのだが、有閑紳士のプレイを拝見すると、金で買った女を、なごやかなムードで縛り、鞭打ち、次はこんなことをしてみようとニコニコしながら、別の手を考えたりしてまるで辻村氏のカメラハントの如く、妥協し合ったプレイなので、どうも迫力がなく、それに、さっきいったように相手の女の容貌が冴えないので気分が出ない。M女性を紹介してあげるのもいいが、何日か交際して、何か精神的なつながりを持ち、欲をいえば愛人関係となつて、二人だけのSMプレイを享受すべきである。

秋風の吹く愚痴をこぼしているうち、奇妙なSM話に筆は脱線してしまつたが、Yプロの仕事の途中で投げ出し、愛人を伴って関西へ一種の逃避を試みた話を実は最初から書くうと思つたのだ。自分を頹敗させ続けているような不本意な仕事を途中で放棄し、むしろくしゃするまま当てもなく関西へ遊びに出か

けたというのではなく、私も現世主義者であるから逃避は逃避でも、ちゃっかりと別の仕事の打ち合せを兼ねての関西旅行だ。京都の東映撮影所に或る仕事の打ち合せと、それにもう一つは、カメラハントの辻村氏を東映のプロデューサー、監督に紹介する為である。

というのは「徳川女刑罰史」という拷問残酷映画が、八月二十日よりクランクインすることになったが、先日鬼六談義で少し触れたように全くそのけのない人達が脚本を書き、監督をするわけで、誰か関西方面で拷問緊縛というものに詳しい人があれば紹介して欲しいと、この映画のプロデューサーに頼まれていたのである。これは正しく辻村氏に打つつけの仕事だと思い、関西へ逐電する何日前に彼の所へ連絡してみると、大変、乗気の様子。つまり彼は、緊縛拷問指導という役で、その撮影期間、東映に召しかかえられることになるわけだ。辻村氏を東映に紹介する名目のもと、私は女を連れて関西へずらかったことになる。

殺陣師というのはいるけれど、辻村氏は、緊縛師という所か。

京都で辻村氏と落ち合い、すぐに彼の車で東映撮影所に出かけることになったが、東京

を出発間際、愛人に急用が出来、夜の新幹線で彼女は直接大阪へ行き、そこで私と落ち合うことになった。京都で男と落ち合い、大阪で女と落ち合い、随分と忙がしい話だが、その上、時間を両方とはっきり示し合わせてあるのだから、私は久しぶりに辻村氏と会い、歓談する悦びに駆られながらも、気忙しく腕時計ばかり眼にするのであった。愛人といっても、赤坂の酒場で働いているホステスで、つい二カ月ばかり前からねんごろになり、誘惑すると、関西へ連れて行って欲しいというのであった。大阪でなら、ものにされてもいいということである。大阪で待ち合わせることにしたが、私が約束の時間に顔を出さないと見知らぬ土地で彼女は心細さにおろおろするだろうし、それだけならいいが、大体が気の短い女だから、勝手に一人でどこかへ行ってしまふようなことにでもなれば、せっかくのチャンスがパーになり、かなり元手がかかっているだけに腹が立つなどと、そんなことを私は考えて落ち着かない。

京都撮影所でプロジューサー達に辻村氏を引き合わせたなれば、早々に退散するつもりだったが、辻村氏は石井輝雄監督達と話がはずみ出し、中々腰が上らず、撮影所でも相変

らず私は腕時計と睨めっこであった。

仕事のことで、女のことになり、うのは我ながら浅ましかったが、実際、私は東映において大切な打ち合わせが別にあつたのである。それは以前、私がプロジューサーに提案した伊藤晴雨の映画化であった。東映の企画会議で、よもやそれがパスするとは思わなかったが、何日かして私の所にプロジューサーから連絡があり、企画会議において伊藤晴雨がパスしたという。克蘭クインは本年末か来年早々ということで、東映では、この所、見世物映画が続いているだけに、この晴雨物語は文芸作品のレベルに持っていきたいという意向であった。

私は企画を映画会社に出し、成功してみたものの、晴雨翁に関する知識というものは、ほんのわずかしき持ち合わせていない。現在三文エロ作家に墮していることを理由に、そのシナリオ構成の手伝いは辞退したものの、プロットを書くよう命令されてみると、企画した私にとって、それぐらいはやらねばならないような責任といったものを感じるのだ。私のプロットの出来上りを待って、東映直属の実力のあるシナリオライターが仕事を開始することになっている。つまり、シナリオラ

イターにせよ監督にせよ、伊藤晴雨に関しての知識は全くなく、私のプロットを頼りにするより方法はないということになる。そこでこの仕事をするとなれば、やはり私流の伊藤晴雨ということになるだろうし、映画である限り、かなり事実を曲げたものになるのは仕方がない。伊藤晴雨と親交のあった人や研究されている人もかなりあることだろうし、そうした人々から叱責を受けることになるかも知れないが、娯楽映画だと割り切って頂くより仕方がない。もうすでにこの話を聞きつけた、晴雨翁をよく御存知の人から連絡があり、一体、何という役者が晴雨をやるのだと聞くので、未定だが三国連太郎あたりが候補にのぼっているようだと言え、冗談じゃない。晴雨さんは三国とは似ても似つかぬ風貌で、小柄でコロコロした感じ、小川虎之助あたりがいいのではないかと、親切に教示して下さるのだが、何も本人の人相まで映画の方で考慮はしない。明治大帝とか乃木將軍とかいう風に、一船に浸透しきっている人物なら話は別だが、たとえば王将の坂田三吉にしろ、本人は、どんぐりみたいな小男だが、映画の方では、阪妻や辰巳、三国など大男が演じているではないか。とそんな風に云っても、私の所

へ連絡してきた人は、ふに落ちぬような顔をするのであった。

しかし、この生涯を責め一つに打ちこんだという偉大なる奇人を冒瀆するということは私にとっても不本意な事でもあり、晴雨翁と親交のあったKK誌に対しても申しわけないことである。そこで映画のプロットとはまた別に、プロットに合わせた小説、伊藤晴雨を読切りにして来月誌上に発表させてみる故、関心をお持ちの読者の批判を仰ぎたく思っている。といっても目下、何やかやと忙がしい身故、出来るか出来ないか、いささか危かしい話なのだが。というわけで、来月号は、Y

掲載させて頂くことになるかも知れないが、何卒笑わないで頂きたい。

そんなわけで、今回の関西旅行は、辻村氏の東映推薦も無事終え、伊藤晴雨の映画化打ち合せも一まずすませたが、何しろ女のこと

が気になって、気になって、辻村氏とも妙にあわただしい別れ方をし、それが残念であった。それで箕田氏とも遂に逢わずじまい。大阪、神戸、宝塚と遊び、久方ぶりに身心を解放させることが出来たが、東京へ帰る時の気分

の重苦しいこと。仕事を渡さねばならぬ相手の怒った表情や、その応待に当惑している家族の顔色が浮かんできて、気分はめ入るばかりだ。

しかし、その道のファンより、ほめられることか、叱られることかわからないが、伊藤晴雨を五社の一つで映画化決定に成功させた

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下さい。報酬その他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下さい。好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇ク編集部▽

そして現在、私は再び現実関係に引き戻されて、間抜け面で、ぼそんと自宅の机の前に坐っている。どこどこプロのピンク脚本、何日まで何本、芝居が何本と、机の前に張り紙し、一体何から手をつけていいか弱っている。こうした二束三文の仕事を続けることで、自分を情なく意識することはやめようと思うものの、女連れで不健康な消費面に沈溺したあとでは倍加的に立ち直りにくく、秋風に揺れる樹を窓越しに眺めるばかりだ。

しかし、その道のファンより、ほめられることか、叱られることかわからないが、伊藤晴雨を五社の一つで映画化決定に成功させたということは、三文エロ作家としては何か、どえらいことをやってのけたようで、ニヤニヤしてみたりする。だが考えれば、これからが大変だ。まず晴雨研究の権威者、斎藤夜居氏に色々教えを乞わねばならないし、その不世出の浮世絵師の御家族にも一度はお目にかかる必要はあるだろう。考えれば色々と厄介なこと、生来無精の私がそんな仕事に協力出来るかどうか怪しいものだ。何だか、とてもないことをやらしたような自責の念もわいてくるのである。「もの云えば唇寒し、秋の風」という所かも知れない。



法律雑誌考

レイ国裁判

井上俊彦

「戦後強くなったのは女と靴下」という言葉が日本を襲い、嘆かわしく思っていたところ近頃では「女上位時代」とまで言われ、また「家つきカーつきババヌキ」を何と四割の婦女が賛成していると言う。全く言葉につまってしまうのは唯私一人だけであろうか。私が聞いたところによれば、日本男子は他のどの国の男子よりも根性があり、努力し、努力しそして努力する人間だということだが……。

そもそも男子と女子では性質上はおろか、肉体の上でも大なる差異があり、これを同じ

人格として扱う態度そのものが、すでに間違っていると言わねばならない、同じ人間であっても実質的に差異が認められる以上、これを合理的に差別することが、法の正当なる態度だと思う。

元来レイ国に於ては、婦女は大切な商品であり、これをその限りに於て尊重し保護してきた。そして婦女を所有することは男子の基

は次の実質的理由によっても裏づけられる。すなわち婦女は先天的に支配されることを望むものであり、男子に捕われることに大いなる喜びを得るものである。いかなる動物に於ても男子から婦女に挑むのが通常であり、反対は極めて稀である。人間も動物である以上例外ではない、男子が支配的であり婦女が被支配的であってこそ、自然界の調和が保たれるのである。この実体を法的見地までに高め、男子の人格と婦女の人格は異なるものと為し、男子の基本的人權に婦女を所有する権利

を含め、女子の基本的人權に男子によって所有される權利を含ませしめたレイ国憲法は、全人類の模範となるものと信ずる。

しかしながら、このことは通常考えられるほど婦女にとって酷なものではない。婦女を商品として保護することは、婦女に一定の財産的価値を認めるものであり、それが財産的価値があればこそ、所有者から棄てられた、

(日本では離婚) 場合、国家は婦女を收容してこれを養い、一方では新たな所有者を捜してやろうとするのである。男女平等を唱えその制度下で婦女が離婚された場合のことを考えれば、レイ国の制度が遙かに勝っていることを容易に想像できるであろう。

私はこれからレイ国に於て裁判に現われた若干の問題を取りあげ、よって婦女の保護されている様子を報告すると共に、日本男子が再び「男上位時代」の自然状態に戻ることを期待するものである。

(尚、レイ国に於ては政党の書記長ともなれば数人の妾を囲い、いやしくもそれを批難する者は毛頭いない)

〔事例1〕

甲は乙女(二十才)を競売で落札し使用していたところ、新たにA女を買い入れたため財産状態が悪化し、丙との間で乙女の売買契

約を為し、内金二十万円を契約と同時に、残金十万円をその一年後に支払う、ということにした。しかしながら甲は使い慣れた乙女がいと惜しくなり、なかなか丙に引渡そうとしない。そこで丙は乙女の引渡しを請求した。原審は乙女の所有権がすでに丙に移転したと認めて、丙の主張を容認した。甲は残金完済まで乙女の所有権は移転しないと争って上告した。

◎判決理由 棄却「売主の所有に属する婦女を目的とする売買においては、特にその所有権の移転が将来なされるべき約旨に出たものでない限り、買主に対して直ちに所有権移転の効力を生ずるものと解するを正当とする」

一、この事例によって提起される問題点は、婦女の売買では所有権はいつ買主に移転するか、ということである。これを明らかにすることは婦女権変動の時点を一般的にとらえることになる。レイ国裁判所は婦女売買の所有権移転時期については次のような原理を一貫して堅持している。

イ、当事者が婦女の所有権移転時期について特別の定めをしているときはそれに従う。ロ、右の定めがないときは、直ちに所有権を移転させることに別段の障害がない限り、

所有権は売買契約の効力発生と同時に買主に移転する。

ハ、直ちに所有権を移転することに障害がある場合(他人の婦女であったりした場合)は、この障害が除去され(他人の婦女を買い受け)て所有権の移転が可能となると同時に、あらためて別段の意思表示を必要としない、所有権は移転する。

二、以上のような判例理論は婦女取引界の実情に、必ずしも合致してはいないが、取引される婦女の保護を考えれば納得できないことはない。一般に取引界では、婦女の所有権移転は、売買契約の効力発生と同時にではなく婦女の引渡、登録または代金の支払いの為された時に生ずるとする。しかしながら婦女について考えれば、売買契約が成立した以上、旧所有主から新所有主へ愛情を移し、新たな希望に胸躍る状態なのが普通であろう。自分を買った所有者に、婦女は未練をもつものではない。婦女にとっては旧所有主に使用されることは苦痛であり、また新所有主にすまないと思うものである。婦女がいかに商品とは言え、その期待を裏切ることには自然的秩序に反するものである。レイ国では婦女を財産と認めたことが自然に合すると考えたからこそ婦女と男子を合理的に差別したのである。しかれば売買に於ても自然を守るということ

が重要なものではあるまいか。

私はかように考え、判例理論を肯定したいと思うのである。本事例についての判決はよって妥当だと思ふ。

〔事例2〕

A女が青信号で横断中、信号は黄色に変わった。それにもかかわらずA女は走って渡らなかったため、信号待ちしていた車から甲乙丙が飛び出し、A女を道路交通法違反の現行犯で逮捕すると、A女を車に押し込め約三K走り、公園に降ろすと同女を裸にして立木につき、大量流腸を施して塞いでしまい、約一時間にわたりA女を苦しめたものである。A女の所有者Bが、甲乙丙を告訴した。

裁判所は本事例について、甲乙丙に傷害罪の共同正犯を認めたが、疑問が無いわけではない。以下判例を批判しつつ、自説を述べてみようと思う。本事例を具体的に詳しく観察すると、甲乙丙の罪責として、不当逮捕罪、監禁罪、強制猥褻罪、傷害罪の四つが考えられる。

（不当逮捕罪について）

裁判所の認定した事実によれば、A女は青信号で横断歩道を歩いていたら、信号が急に黄色に変わったにもかかわらず、駆け出し

て渡らなかったものである。明らかにこのことは道路交通法に違反する。しかしながらA女の所有者Bは、当時A女は、その最中であり容易に走ることができない状態にあったのであり、駆け出さなかったことは不可抗力であるとして主張している。甲乙丙も、そのことは確認しており、A女の身体検査の結果も、そのことは証明している。よってA女が駆け出さなかったことは不可抗力に基くものであつて、これを逮捕したのは違法ではないか、が問題とされるのである。すなわち不可抗力の場合、A女は道路交通法違反の刑責に問われないものではないのか。

この点について判例は、道路交通法違反の罪は客観的にみて婦女が違反をしていると認められれば充分であつて、婦女が違反当時どのような状態にあつたかは問われるべきものではない、としている。すなわち、本事例に於てA女がその最中であり、甲乙丙がその事実を認めていたとしても、A女は道路交通法違反罪に問われるものであつて、甲乙丙の逮捕行為は法の定めたる正当な行為と認めることができる。とするのである。

そもそも婦女が男子と同じ道を歩くこと自体が自然の秩序に反するのであつて、本来ならば婦女は歩くことのできないものである。しかし婦女専用の道路が無い以上、婦女に男

子の道路を貸さなければならず、同じ道路を歩いてもよいとする法律は、進歩的だと言わねばならない。そうであるならば、婦女は定められた規則は厳守すべきであり、男子の障害とならぬように歩行しなければならない。以上のことを考えれば、客観的にみて、婦女が道路交通法違反罪を犯したならば、婦女の事由のいかんを問わず、処罰することができると言うことができ、甲乙丙が、処罰、のためにA女を逮捕したのは正当な行為であると思ふ。よって判例の態度は正しい。

（監禁罪について）

本来ならばA女の処罰（流腸）はその場で行なわれなければならない。事例では現場より三K離れた公園で処罰しており、その間、車の中に閉じ込めていたことが監禁罪になるのではないか、が問題となる。しかし当時、甲乙丙は処罰のための流腸具を持っておらず三K走ったのは薬局を捜すためであり、また現場は交通の難所であつて、その場でA女を流腸することは交通渋滞に拍車をかけるものであると思ひ、甲乙丙は公園を処罰の場所にしたと認定されている。そうであるならば甲乙丙の行為は妥当であつたと思われ、A女を車の中に監禁したのは違法ではない。

（強制猥褻罪について）

処罰は通常、婦女が自発的に下半身裸とな

って四つ這いになり、浣腸を施されるのである。事例に於ては、甲乙丙はA女の下半身のみならず上半身の衣服も全て無理矢理に脱せしめ、A女を生れたままの姿にして、後手に縛り、木の枝からつり下げて懲罰したのである。

判例は猥褻の定義として、羞恥心を害すること、性欲の興奮刺激を来すこと、善良な性的道義観念に反すること、の三つを要件としている。そして浣腸は美容ないし医療のために行なわれるものであって、その行為は猥褻の概念にあたらないとしている。

そしてさらに本事例の場合は、処罰のために法が認めたものであって、いかなる態様の浣腸であっても正当化されると猥褻性を否定した。

しかし本事例の場合、甲乙丙はA女を全裸にした上で浣腸を施したのであり、A女は堪えざる恥しめを受けている。その上浣腸の量も多く、甲乙丙は処罰の目的よりも、興味本位で浣腸したものと認めざるを得ない。すなわち所有者でない者が婦女に浣腸する権利の限界を越しており、私は権利の乱用であると思う。そして甲乙丙の行為は猥褻目的の浣腸と認め、甲乙丙に強制猥褻罪の刑責を負わしめたいと思うのである。

(傷害罪について)

猥褻目的の浣腸であることは次の事実によっても裏づけられる。すなわち通常の処罰としての浣腸は、施してから五分間は堪え、それ以後は排泄の自由を有するし、また施した後、すぐおむつを着用して帰宅を許されるものである。しかし甲乙丙は、大量に施した上に塞いでしまい、婦女の排泄の自由を奪ったのである。裁判所もこの事実を重くみて、A女が生理的機能の障害を起した(下痢が数日間続いた)ので、甲乙丙に傷害罪としての刑責を認めたのである。

私もこの裁判所の態度に異論はないが、傷害罪を認めるなら、もう一步前進し、甲乙丙が猥褻目的で浣腸したことを認めて欲しかったと残念に思うのである。

また判例は傍論として選択権につき述べている。すなわち本事例では、A女は浣腸を施される前に

「……おむつを……」

と、おむつの着用を選択したのであるが、甲乙丙は当時持参していなく、また毛頭おむつを着用させる考えがなかったため、A女を選択権(その場で排泄するか、おむつをするかの選択権)が侵害されたのではないか、が争われた。

判例はそのことにつき

「……その選択権は婦女に与えられた奪うべ

からざるものだが、婦女が選択権を行使する際には、自らおむつの用意をしておかなければならない。すなわちA女は、おむつを持っていたり始めておむつの着用を選択できるのであり、本事例の場合、A女は所持していなかったから、選択権そのものを考えることができない……」

という結論を下した。またA女の所有者Bが、おむつと生理帯は同じ目的を有するものだから、当時A女は生理帯を有しており甲乙丙はA女がおむつを選択した以上、生理帯を着用させなければならなかった、と主張したことについて、裁判所は

「取るに足らない空論である」と判示した。正当であると思う。

以上掲げた二つの事例だけでも、レイ国の男子と婦人の実体が少なからず解っていたただけたと思う。

判例はまだまだ沢山あり、いずれも日本男子の参考となり興味となるものばかりで、私はそれらが日本男子の質の向上に非常に役立つと確信するので、時を改めて報告したいと思っている。尚「事例1」の婦女を特定物と置き変えると、日本の実際にも適用できるであらう。

(カット・磁戒秋人画)

少女



マニアのノート

私は、その香りに酔う

甘く、にがく、香気に満ちた花の蜜よ

かず・とやま

『おばさん、あそびましょ』

ドアのブザーが鳴り、インターフォンからそんなかわいらしい声がきこえる。2DKのせまいわが家のどこがお気に召したのか、団地の子供がよく来る。いまでも、ブザーを堂々と鳴らしてやってきた三人の女兒が、キッチンの横の間に、もう店をひろげた。

『おじちゃんおしごとだから、あまりさわがないで』

といいながら、でも妻は、ちょうど切れたお菓子でも買ってきましよう、いそいそと団地内のスーパーに行った。

三人の女兒は、やはりおんなの子らしく、おままごと之余念がない。

なかの一人、こずえちゃんという、小学校二年のが、お母さん役。

この児、すばらしい美少女で、婦人雑誌の女兒服の着衣モデルにまで登場するほど、かわい。どうかしたひょうしに、まるで一人前の女性のような表情で、私をみつめたりす

るオマセなもの、モデルとしてカメラのまえに立ったりするためだろうか。

わが家のキッチン、マイホームに見立て、ここが入り口、ここがおへや、ここがベランダ、などと、みんなで勝手にきめて、キヤッキヤツとさわいでいるのが、かわいらしい。と、こずえちゃんが、

『ここが、ベビーのトイレ!』

と、サイドボードの左側のせまい空間を指さし、お人形を向うむきにだっこし、両足を八の字に開いて、さながら、ママが赤ちゃん

に、シイシイをやらせるような恰好をした。仲々うまいものだ。

あとの二人は、これを見て、キャッキャッというさわぎ。こずえちゃん、調子にのり、『ついでに、ママも、しましうね』

と、おませに、向うむきにしゃがんだ。

シイシイごっこが、意外に受けたので、いささか、とくいになり、もうひとつわらわせようとしたあたりタレント根性まるだした。

そのとき、アッという声がかきこえ、やがてさわやかな、せせらぎの音がおこった。

お調子にのって、トイレごっこやるうち、そこはまだこども、ついお洩らしをしちまったのだろう。

『アラアラ』

と、仲間の二人はうろたえ、本人もベソをかいたが、せせらぎの音はまだやまず、板の間には水たまりができてしまった。

予期しないできごと、ママごとはおじちゃん。三人はコソコソとかえっていく。

こずえちゃんの、濡れた尻がかわいそうでただだまって見送った。家へ帰っても、ママは雑誌社へおつとめで、ぬれてしまったパンティを、かえてくれる人はいないのだ。

さて、問題は水たまりだ。

こどもといえども、女性も女性。でたものの成分には、変りはないだろう。

さいわい、妻はまだ帰ってこない。

あたりを見まわし、私はイヌが水を呑むように、その水たまりの前にひれ伏した。

思った通り、それは、成人女性のそれと、まったく変りがなかった。

新鮮な、けがれない香りであった。

中年おとこが幼女に魅力を抱く、名作『ロリータ』の主人公みたいに、私はそこにひれ伏した。こずえちゃんが神さまに思えた。

水たまりの大部分は、わが腹中におさまり少量が床板に吸われて、わずかに、ぬれあとを残した。妻が帰ってきた。

『こんなに濡らして、どうしたんですの？』

『ウム、水差しを引っくり返したんだ』

何もしらぬ妻は、あわてて雑きんを持ってきた。

惜しかったが拭いた。少女といえども、こんなチャンスは、めったにあるものでない。

(このつぎは、こずえの固体だ)

私は心にきめた。へたをすると、少女暴行罪にもなりかねない行為になるうが、かまうものか。心にきめ、入手を願う気持は、それを持ちつづけければ、いつか叶うものだ。私は

そう信じている。

ハッカのようなスースーするこずえのアムモニアの味は、まだ舌端にとどまっていた。

たしか、サドの『ソドムの百二十日』にも五才の幼女のそれを呑みくだす、ケンランたるスケッチがあった。

神父さまが、お小使いを与えて、拝受するすばらしいシーンだった。

おとなとちがって、まったくけがれを知らぬこずえのそれは、神聖な味感だった。

(さて、固体のほうだが、どうやって手にいれようか)

たのしい空想のひとつきだった。

処 理

『なにか食うモノ、オマヘンか？』

勝手知った他人の家で調子でルス中にあるがりこんだおときさんのアパートで、持参のビールのつまみをさがそうと、一人用のちいさなサイドボードをのぞく。

さすが、おんなひとりの住いは、よく整頓され、チーズだの、ピーナツだの、サケかんだの、保存のきく食べものが、それぞれ少量ずつしまっている。

おときさんとは、もう十年來のつきあい。

彼女、いまの料亭の仲居のまえは、ある印刷会社の事務員で、そのころ印刷の注文ぬしだったボクとは、しごとのうえのつきあい。印刷会社がつぶれ、縁故をたどって、東京芝浦の、一流料亭いりし、現在では昔の苦労もユメ。のんきな一人ぐらしをたのしむハイ・ミスである。

男ざらいだそうで、結婚の意志はさらになく、この十年のおつきあいに、わずかに、くちびるを許したことが二回だけ。

こちら割りきって、たがいに異性を越えたおつきあいである。しごとの性質上、彼女は一日おきに料亭へ泊り込み。月の半分は、もったいなくもアパートは空き家。

空いてる日は、泊るのは困るけど、原稿かきなら留守番がわりに、つかってもいいわと特別のおゆるしを得てある。

ただし、大掃除だけはボクの受けもち。これが、空室の使用料ということに、互いに諒解してあるのだった。

さて前おきが永すぎた。

きようは、偶数日。おときさんは、お店におとまりの日だ。

依頼された、ある自動車部品会社のダイレクターの原稿つくり、材料をバッグに

つめて自宅へかえる調子で、ボクは大森の山手の、このアパートへやってきた。

ひとしごと終えて、持参の品は吞んじまった。ビールでも飲もうと、冷蔵庫をあけ、ついでに、サカナを求めてボードをのぞいたわけだ。

ボードの下段の片すみに、ちいさなヌカミソの小おけが置いてある。故郷秋田の思い出をしのんでか、おときさんは、ヌカミソには年中かなり手をかけ、あのくさいオケにもかまわず手をつっ込むと何を何回もみている。

あの強烈なおい。いうなれば、ボクの大すきな、女神の賜物を連想させる、あのくさを、ふしぎに彼女、いやがらない。

ふと気がついて、その小オケを移動させてみた。

うすぐらいその奥のほうに、なにやらビニールに包まれたキャベツ大の品物を発見。

『なんだろう?』

こうなると、好奇心旺盛なボクは、酒のサカナなどどうでもよく、そいつを引っ張りだした。

案のじょう、それは、おんなの生理を物語るモノ。しかも使用済みのものだった。

開いてみれば、くるむのに使用した新聞紙

の日付は二カ月前のもの。紙わたはゴワゴワにこわばり、ドスグろくよごれたハンケチが丸めこまれてあるのだった。

さらにさぐれば、イチジクのからケースが三個ばかり。おときさんの生理のウラ側を露骨に物がたる品がころがりだした。

このアパートは、木造二階建て。住人の頭数のわりには、共同トイレが階下にひとつでそれも殆ど年中満員のありさま。

二階のおときさんの室からは、そこへゆくだけでも面倒なのに、いついっても、満員御礼だったら、いく気が、はじめからしないのもムリはなからう。おときさんは、かつて言った。

『大のほうは、お店へいってするの。それにあたし、ベンピ症でしょ。ちいさいほうはホホ……洗面器にとって、台所の流しにあげちまうの』

つまり、トイレの用は室内で片づけちまうので、共同トイレを使用することはないのに掃除だけは順番でやらされると、よくこぼしたものだ。

掃除だけは、管理人のおばさんに日当払って代行してもらってるけど、バカらしいたらないわ、とフンガイするおときさんだった。

そのトイレの不便が、現在のボクには、たいへんありがたい。

店へ行って、ダストシュートにすてるつもりで包んでおいた生理の汚物や、これも自宅のタタミのうえにビニール風呂敷をひろげ、古新聞紙を底にしいた専用の、ポリの洗面器に、急にもよおしたベンピの手当ての直後の物体をすてた。

さすがに、それは持ち歩くのがいやで階下のトイレに流したが、あとのものの処分には困る。口うるさいアパートのこと、イチジクなどへたにすてようものなら、ひどくうるさいのである。

で、それら人目にさらしたくないものは、一とまとめにヌカミソでカムフラージュできる、ボードのおくへしまいで、つい処理を忘れた—というボクの推理はヘンかしら。

——十年このかた、くちびるを許したのはタッタ二度というなさない記録に、ボクはかわききっていた。

ボクとは、大小の始末まで、おくめんなく語りあうほどの親しさなのに、思えばこの十年、絶対にのぞき見るさえ許されてないのがくやしい。

それが、いまここに、たとえ乾燥してると

はいえ、ボクの自由を待ってるのだ！ ボクは、このひろい物に狂喜した。

目を細め、片手にとった使用済みのイチジクのカラーは、ボクには宝石とみえた。酔い心地で、味わった。なにやら、茶いろのものがちよっぴりこびりつく。細くとがった薬液の出口には、おときさんのくちびるより何倍か甘かった。

か お り

クンクンと妻がハナを鳴らして『またはじまった。いやねえ』

と、マユをくもらせた。

ある暑い日曜日の昼さがり。わが家の窓べに、またれいの、クサヤの干物か、スルメを焼くような香りが、ただよいはじめた。

といっても、この芳香(?) サカナを焼いてるのではない。

四階のM夫人が屋上で、じぶんと、ことし二十二才のOLの、むすめさんの月に一回の天使のおとずれのあとのものを、燃やして処理するけむりのおいだ。

風むきでは、一棟二十四世帯の、一〇〇人を越えるわが団地住宅の一軒に、この妙なる香りは、月に二回プレゼントされるわけ。

これを、芳香と感ずるボクは、しあわせだが、うちの妻はじめ、近所の人々にしてみれば迷惑このうえない。

『まだ脱脂綿をお使いなんですって。ナプキンにきりかえて、おトイレに流しちまえばいいのにねえ』

と、おくさん連中は、井戸端会議のいいネタに、かげではブツブツ言うのだが、この四十才そこそこの未亡人になったMさんにしてみれば、脱脂綿のほうか、経済的というわけで、焼却作業は、まだまだつづきそうだ。

これを、すばらしい芳香と、ハナいっぱい吸いこんでたのしむボクのような存在もあれば、美しいむすめさんのそれを、気体にかえて、ハナから吸収するのは最高だし、これが気になって気になって、

『まるで火葬場で、人を焼くにおいみたい。おまけに、灰がそのまま屋上にすててあるんですよ。うちの坊やに、ママ、これナーニ？と訊かれて返事にこまったわ。ホントにいやらしいにおい』

とフンガイするT夫人みたいな人もある。東京ぼん太のセリフじゃないが、世のなかはまったくフクザツだ。

いまわが家はひるめし中、そのスルメの芳

香をサカナに、日曜のオンザロックを楽しむボクは、幸福そのものだった。

ノミ取り

ハプニングのメッカ、新宿駅の東口広場はきょうも、暑いなかを黒山の人人人でいっぱい。その衆人環視のなかで、乞食族の一団がとつぜん、ショウをはじめた。

だしものは、サルのみとり。

一人の長髪のおとこが、上半身丸ハダカの仲間のおんなの子のせなかにとついで、サルののみ取りのマネをはじめたのである。

オスざるは、のみのかわりに、メスザルの海で焼いてむけはじめた、せなかの皮をむいては口にほうりこみ、むしゃむしゃとうまそうに食べ、食べてはむしって、平然と口にほうりこむ、そのうまそうな恍惚の表情は、みごとであった。

『きたないことを』と、マユをひそめて通りすぎる、おくさまふうの中年のひとに、オスザルは、だまって、いまむいたばかりの『のみ』を、お食べなさい、というふうに、ヌツと差しだす。そんなことを、くりかえしやっている、仲間がマネて、みんなしてメスザルのからだに手をのびし、セッセと、むいた

皮を食いだした。

ちやうどヒルめしの時間。空腹をまぎらわすためにハプニングなのだろうか。私は、ここにコプロラグニックなかるい悦虐を、感じ取ったのだった。

金魚鉢

本業のしごとの資金面で、日頃なにかとお世話になる生田家へ、中元の挨拶に出むく。

生田社長は、広島へ出張中で、マンションに、おくさんだけが留守番。

退くつしてたとこ、あそんでらっしゃい。

といわれ、おそろおそろ居間へ通る。

子どものないおくさんは、子どもさんの代りのつもりだろうか、金魚や小鳥をたくさん飼い、その世話に追われている。

『ネ、これイタリア製よ。デパートから、いま届いたとこ』

それは直径40センチ、高さ50センチほどのブランドー・グラスのお化けみたいな、ガラスの鉢。それが二個で一組。

今流行のものだそう。

『それが、おかしいのよ。チャンとフタつきなのよ』

と、かなり肉の分厚いフタを、みせてくれ

た。重そうな武骨なヤツだ。

『フタなんかいらなと思うけど、ついているもの、しかたがないわね』

おくさんは、これに金魚を飼って楽しもうというのだ。

『夏だけの品。冬はじゃまになるけど、なにか冬の使いみちないかしら』

と、その鉢をハンカチで磨く。

ありますよ、おくさん！

ボクは、胸のうちでつぶやく。

これをベッドの下に忍ばせて、夜のご用に使うのは、いかが。重たいフタで、香いの洩れる心配はないだろう。容量も手頃だ。

この美しいおくさんのそれを、たっぷり満たし、ライトに照らして色をたのしみ、おそろおそろストローを通して味あわしてもらったら、さぞすばらしいだろう。

『そうそう、とやまさんは、ハイボールだったわね』

愛用の、イギリス渡来のビール、ギネスの栓をあけながら、おくさんが言う。

(いいえ、ハイボールより、おくさんのお手製のビールを、たっぷりこの金魚鉢にいれていただくのが最高なんです)

こう切りだしたら、おくさん、どんな表情

をするだろう。聞いてくれるかな。いや聞くまで、ネバってやる。白昼、そんな妄想の世界にあそべるんだから、ボクというおところはまったく幸福だ。

介抱

経済学博士、岡部寛之先生の近著『遊蕩術入門』を読んだら、おもしろい話が二つ三つあった。

女に奉仕するのを商売とする男の行状記。おつきあいの料金が、十分間千円。さいごの介抱までおのぞみなら三千円。この男、東京の山の手で、水商売の女性たちに、ひそかにチラシをくばり、ちゃんとメニューまでつくってあるそう。商売繁盛のよしだ。

博士は、そのチラシを見、体験した女性に面接もしていると、ハッキリ述べている。

ところで『三千円の介抱』とは、いかなるものか。

話は古いが、ボクのコレクションに、昭和29年12月17日、同じく30年2月19日付の『毎夕新聞』がスクラップしてある。

これに、岡部博士の見聞と酷似した男が登場しているのである。

『舌先三寸の悪魔』という、社会の裏面をえ

ぐる、同紙とくいの取材記事で、その見出しからでも、アウトラインはおわかりいただければよい。

なお、本書には『便器代用』とか奉仕の話題が『汚ないマゾ』という項目のなかにおさめられており、軽いタッチではあるが、一読の価値がありそう。

おまじない

観光会社の社長を友人にもっているおかげで、二三日ヒマになった時は、その社の社員になりすまし、団体にくっついて、観光バスに便乗できる特権を、ボクはもっている。

このテで東日本の温泉地を、ずいぶん歩いた。

過日も、上州水上温泉へ二泊の旅をした。

そのホテルでのお話。

バスがホテルのパーキングへ入れば、運転手もガイドさんも用務から解放される。

この日は、一〇〇人を越す団体で、二台、五人の乗務員が、一つ室に顔をそろえた。

便乗させてもらう手前、社長代理としてホテルのマネジャーに挨拶にくくらしいのお手伝いは、やらなければならないボクである。

で、マネジャーとの面談をすまして、こん

どは五人の室へも一応、顔をだした。

そこで、おもしろいことにぶつかった。

二人のガイドのうち、一人はテレビタレントにでもしたような美人だった。

これを、座卓に腰をかけさせ、足もとのタミのうえに小型の洗面器をおいて、そのなかに、ビールをいっぱい満たし、そして、そのビールのアワのなかに、くだんの美女の片足を漬けさせ、それを取りまいて三人の運転手が、ガヤガヤさわいでいる。

もうひとりのガイドは、水上の温泉組合につとめる友人のそこへ遊びにいったとかで、すがたがみえない。

しばらく見ていると、その足を、洗面器からださせ、ややぬるくなったビールを、グラスにとって三人は乾杯した。

『ひとつやりませんか。うまいですよ』

と、一人がボクに言う。ビールは、人肌。

べつに、味に変わりはないけど、美女の足の脂うかべて、観賞するには足りた。

なぜ、こんなことをやるのだろうか。

『こいつをやるとねえ、車が事故をおこさない、ききめがあるんです。つまり、オマジナイでさ』

美女の足を、自動車のタイヤにひっかけて

無事故を祈る。いかにもドライバーらしい遊びだと思ふ。

『こんなのを“サドヒズム”てんだぜ。フランスじゃ、パーティに、ブドー酒を風呂おけ一杯にして、ねえちゃんを放りこみ、それを乾杯といくそうだ』

なかの一人が、ガクのあるところをみせる。マゾをサドをいっしょくたに、新語こしらえたのはゴアイキョーだが、

『でも、カヨちゃんよオ、おまえ水虫じゃねえだろうな。もしカイカイだと、オレの口んなかに、水虫がうつちまうから』

と、一人がいい、みんなは、ちよいとショッパイ顔した。

いいではないか。美女のものなら、たとえ水虫、オデキでも、喜んで頂きましょう。

美人の排したものなら、どんなものでも神聖で、尊いと感じてしまうボクなんだ。こういうのも“サドヒズム”というのかしら。

らくがき

面積の大きな点では、東洋一といわれる、新宿の小田急デパート。

この十一階のロビーは、待合わせにはもってこいなので、週に三回はかならず行く。

まだ昨年暮オープンしたばかりなので設備はあたらしく、ことに十一階から上の、一流料理店、レストランのしみせは、べんりだしデラックスなトイレが、仲々よい。

それは、大ホテルか、有料レストハウスに負けないほどデラックスである。

この十二階のトイレの個室のなかに、すばらしいらくがきがある。

女性への奉仕を図のテーマにしたのだが、誰しも思ひは同じとみえて、行くたびに人を変えて加筆がされてゆき、細部まで精細に描き足されてゆくのが、おもしろい。絵のといかな者は絵を、文章の好きな者は、かたわらに説明文や会話を書き込み、いつのまにか、四〇センチ角のすばらしい絵が完成。私は、行くたびに用もないのに、わざわざここを使つたものだった。

ふしぎなことに、四室あるうちの、このトイレの壁画のある個室にかぎって、ほとんど使用中。それほど人気のあるのは、この絵のあるおかげかもしれない。

私は写し取りたいと思ひ、トレーシング・ペーパーまで持参したが、生地が濃い目の褐色の新建材なので、仲々むつかしい。

トイレのらくがきをテーマに、書物をださ

れた、華房良輔さんのひそみにならって、カメラにおさめておきたいが、ボクのニコンカメラの性能は満点だが、目下のボクのうちでは、このなかでの撮影はムリ。

おまけに、トイレのなかでフラッシュたこものなら、社会問題になりかねない。

何回ながめてもあきない。そのらくがきを目前に、はがゆい思いだった。

そうこうして、モタモタするうち、休日あけのある日、せっかくのケツ作が、突然見えなくなった。デパートが、壁の貼りかえをやつたのだ。（ボクがい、いつも満員にした同好の士も含めて）ささやかな楽しみは、ここにあっさり消えた。

らくがきといえ、新宿三越七階のトイレにも、横がきのくわしい文章があった。

こちらは、フーテンおねえちゃんを女王とし、それにかしづく奴隷の生活が、テーマになつており、しぼりだしたのを、強制的に吞まされるシーンと、ごていねいにその女王の住むマンションの電話番号まで書いてある。

ここへかければ、吞ませてくれるよ、との、添書をたよりに、試みにダイヤルをまわしたら交換嬢いわく、

局ですが、現在この電話は使われておりま

せん。

と、きた。イタズラにひっかかったボクもアホだが、でも楽しい落書きだった。これもさわやかな、ロマンティックなはず。

ひっかかって楽しかった。

そういえば、浅草のデパート松屋のトイレにも直接授与を乞う呼びかけが、ついさいきんもあった。このほうは『篤志のおかたは左記へお電話を』

と、前記三越の例とは逆に、受ける側が、861107×6番と、ハッキリ書いてあった。Sの女性が、このナンバーへ電話したら

さぞおもしろいにちがいない。

おしぼり

こんどボクのオフィスでは、フランスから輸入した美容器の国内むけPRを正式に受注した。フランス語のカタログのホンヤクなどめんどろなごとなのだが、すでに一部は完成し、印刷にもまわすところ。

そのなかに、ステキな一節がある。

器械そのものは、一種の寝ぶくろ。山岳家のつかうシュラフザック式で、変哲もないのだが、これにすっぽりくるまりスイッチを

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、奇クサロンに編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思っております。お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

いれると、電熱がきき、やがてコップ二は水の量が、袋の下方に切られたチューブから流れだす。

これは、人体内で排泄される不潔な水、万一、人体内にとどまると美容上、害があるの、できるだけ、しぼりだすのが、美容の原則に合致するのです。

と説明されている。

考えてみれば、その水は、神酒ときわめて近い成分のように思えてならない。

添えられた写真には、美しいフランス女性が、この袋にくるまり、ほほえみのうちにポタリ、ポタリと、足のほうのチューブから水滴をおとし、それを白衣のドクターふうの男性が、コップに受けている図がみえる。

そこには、そこはかとない、ロマンティック・コプロのムードがあるように、ボクには思えるのだった。

ボクだったら、コップをつかうなど、めんどろなことはない。ボク自身が容器になれば、よいのだ。このまじめな美容器具にも、すばらしい使いみちがあるのだ。

一枚の写真をみつめて、あれこれとたのしい空想にふけたことだった。

☆ピンク映画シナリオ☆

製作 ヤマベ・プロダクション
企画 岸 信太郎・矢野 正富

肉 体 手 形



脚 本

団 鬼 六

登 場 人 物

吉岡	長岡	文二
佐々木	伊海田	弘
葉子	谷	ナオミ
富子	浜	夏子
ユリ	祝	マリ
チエ	京	マコ
有本	瀬川	宏
村田	宮瀬	健二

1 吉岡の家

吉岡、妻の葉子とベッドで抱擁し合っている。

棚の上の置時計、八時を指している。

葉子 あなた、会社へおくれるわ。もう八時よ。

時よ。

吉岡 そうか。

吉岡、腹這いになって煙草を引寄せ。

吉岡の無気力な横顔を見て、

葉子 どうしたの。あなた、近頃、元気がないわね。

ないわね。

吉岡 別にどうってことはないさ。

葉子 会社で何かあったんじゃないの。

吉岡、思いつめた表情で煙草の煙を吐く。

2 同 ダイニングルーム

吉岡、新聞を読みながら、トーストを食べている。

妙に無気力な夫を葉子、不審な表情で見つめる。

葉子 ね、あなた、何か心配事があるならおっしゃってよ。夫婦なのに、水くさいわ。

吉岡 会社がよいよ金ぐりに行きづまったんだよ。来週廻ってくる手形が落とせそうじゃないんだ。

葉子 ええ？ その手形が落とせなかったらどうなるの。

吉岡 勿論、会社は倒産だよ。廻ってくる手形は三百万ばかりだがね。それ位の金が都合つかない程、今の会社には力がないんだよ。

葉子 でも、それは社長の責任でしょう。

吉岡 (苦笑して) 社長の責任といっても営業部員、五人、工員、十人の小さな玩具工場だ。こういう結果になったというのも、誰が悪いってものじゃない。それに僕は、経理を担当している。誰よりも責任は重いわけだよ。

葉子 (溜息をつくように) ここ二カ月、お給料が出なかったのも、会社がそういう状態だったからなのね。

吉岡 ああ、君には、苦勞をかけてすまな

いと思ってるよ。だが、来週のピンチを逃れる事が出来たなら会社は必ず立直る事が出来るんだ。東南アジアの輸出の話もきまってるしな。

葉子、まじまじと吉岡の顔を見て、

葉子 あなた、随分と痩せたわね。

吉岡 (微笑して) じゃ出かけるよ。(立ち上る)

3 渋谷通りの俯瞰

車、車、車。
人、人、人。

ひしめき合って通勤するサラリーマン達に混って吉岡、疲勞した表情で歩き続ける。

吉岡の心の声 今の俺の仕事はただ一つ、三百万円の金策以外にはない。街の高利貸に喰いついてでも会社の融通手形を現金化する事だ。

吉岡、流れる額の汗をハンカチで拭う。
○ 街の金融会社の看板がいくつか画面に現われる。

4 静かな公園

玩具会社の社長、有本、池の端のベンチに放心した表情で坐っている。

鞆の中から、うさぎの玩具を取り出し、ネジを巻いて、ベンチの上に置く。

ぴょんぴょんはねるうさぎの玩具を見て、有本、眼を細めている。

疲れ切った表情の吉岡、近づいて来る。

うさぎと遊ぶ社長を見て吉岡、微笑する。ふと、吉岡を見た有本、玩具を止める。

有本 御苦勞だったね。さすがの君も、この暑さには参ったろう。坐り給え。

吉岡 はい。(坐る)

有本 冷房の入ってる会社に債権者がつめかけて戻るに戻れず、いやはや、進退極まったよ。(哀しげに微笑する)

吉岡 (疲勞した表情で) 実は社長。朝から三、四件当ってみたのですが――

有本 やっぱり無駄骨だったか。

吉岡 は、全く、申し訳ございません。

有本 うちの融通手形じゃ、街の高利貸でも相手にやせんよ。なあ、吉岡君。

吉岡 は。

有本 もう我々、来る所まで来たようじゃないか。人間、諦めが大切だ。倒産を覚悟しよう。

吉岡 (うろたえて) し、しかし社長……

有本 たった三百万円の手形が落とせず、倒産するなんて、みっともない話だが僕は、もう鍋の中のどじょうだよ。いくらあがいてみたって、もうどうしようもないんだ。これ以上、無駄骨折するというのは、かえって見苦しいじゃないか。

吉岡 しかし、僕は、まだ、打つ手が残されてると思います。来年は、東南



アジアへ輸出もきまっちゃった事ですし、このピンチさえ切り抜けければ、前途は洋々と――

有本 (苦しそうに) 僕は、君がそうして

苦勞する姿を見るのが辛くてね。

吉岡 何をおっしゃるんです社長。とにかく僕は、最後の最後まで、ねばり抜

きますよ。

有本 吉岡君――

有本、ベソをかきそうな表情で吉岡の手を握る。

5 アパートの前の空地(翌日)

吉岡、流れる汗を拭いながら、重い足で歩いてくる。

吉岡の心の声 今の俺には、もう見栄も体裁もなかった。三年前に別れた女、富子の所を訪ねる気になったのも、彼

女の口ききで、彼女のパトロンである不動産業者の佐々木に、金策の相談を持ちかけるためだ。

6 富子の部屋

ベッドの上で、富子、佐々木と濃厚な抱擁をくりかえしている。

佐々木、大きく息を吐いて上体を起す。

富子 汗で体中、ベトベトだわ。

佐々木 仕方がない。明日、この部屋へクーラーを入れてやるよ。――ところで

富子、吉岡とはその後、全然、逢っちゃいないのか。

富子 逢うわけじゃないの。彼とは三年前きっぱり別れたんですからね。それに、彼の今の女房、随分と美人

だそうじゃない。

佐々木 ああ、ナイトクラブのホステスをやったそ

うだが、たしかに美人だ。うまくやりやがったもんだよ。

富子 フン。(腹立たしげに煙草をすい始める)

佐々木、ベッドから出て、服を着ながら、

佐々木 ところで奴の会社は、

今月から来月あたりで、どうやらパンクらしいぜ。

富子 へえ――いい気味だわ。

7 同アパートの廊下

吉岡、歩いて来る。

富子の部屋から出て来た佐々木を見て、吉岡、反射的に体を隠す。

佐々木、啞え煙草しながら、悠然とアパートの階段を降りて行く。

8 富子の部屋

富子、三面鏡の前で化粧している。

ノックの音。

富子 だーれ。

吉岡、ドアを開け、そっと入って来る。

鏡に写った吉岡を見、富子、びっくりして振り向く。

富子 まあ、お珍しい。どういう風の吹きまわしなの。

吉岡 突然、伺うのも何だと思ったが、実は君に――

富子 ま、そんな所に突ったっていず、お入りなさいよ。

吉岡、うなずいて部屋の中へ入って来る。

富子、冷蔵庫よりビールを取り出して卓の上に置く。

富子 ほんとに久しぶりね。どうお元気？(ビールを抜いて吉岡にすすめる)

吉岡 それが、あまり元気でもないんだ。

富子 そういえば、あんた、少しやつれた

ようね。フフフ、でもそりゃ、無理もないわ。随分とおきれいな奥さんと暮しているんだから。

吉岡 冗談いわないでくれよ。実は会社が

大変なピンチに追いこまれたんだ。そこで俺、恥を忍んで君に相談に来たんだが――

富子 (ビールを飲みながら) 一体、どう

吉岡 云い出し憎い事なんだが(一息にビ

ールを飲んで)君から佐々木さんに頼んで、うちの会社の手形を割ってもらってくれないか。

富子 (ふと陰険な眼で吉岡を見る) あん

たの会社の手形をねえ。それで一体いくら位――

吉岡 三百万。

富子 (笑い出す) なんだ。たったそれば

っちのお金で、あんたの会社は、うろたえているの。

吉岡 (情ない表情)

二、三千万といえは佐々木も少しは困るだろうけれど、そんなはした金なら大丈夫よ。

吉岡 (喜色を表わし) 実は俺、薬でもつか

かみたい気分でここへ来たんだよ。すまないが、一つ、よろしく頼む。

吉岡、富子に頭を下げる。

富子、煙草に火をつけながら、

富子 でもそれには、条件があるわ。

吉岡 条件?

富子 そう。はっきりいって、私は貴方に恨みこそあれ、貴方を救わねばならぬような義理はないんですからね。

吉岡 そ、そりゃよくわかってるよ。三年前、どうしようもない性格の相違から、君と僕は別れたんだが――

富子 今更、そんな事、聞きたくないわ。貴方は今、美しい奥さんをもらって

家庭的には幸せなんですよ。ところが私は、佐々木のような男の二号にな

って、家庭的には全く不幸な女。(酸っぱい表情)

吉岡 (ニヤリとして) 貴方が私と、よりを戻してくれれば貴方の頼みを聞いてあげてもいいわ。

富子 そ、そんな――

吉岡 フフフ、別に今の奥さんと別れて、私と一緒になってくれ、と云ってるのじゃないわ。月に二度か三度、私と逢ってくれるだけでいいのよ。

富子 |

吉岡 つまりね。佐々木って男は、商売に

かけちゃベテランだけど、肉体的にはつまらない男なのよ。一度だって

富子

私を満足させてくれた事がないわ。

少し変態で、しつこいだけ。お金の

ため、私は辛抱しているのよ。

富子、立ち上ると、ベッドの上に横臥し、

吉岡に対し、挑発的なポーズをとる。

富子 ね、いらっしゃって。

吉岡 (狼狽して) し、しかし、何も、こんな所で――

富子 (艶然として) ギブあんどテイクというじゃない。貴方、お金がいるん

でしよう。

吉岡 (苦しい表情で立ち上る)

富子 ね、早く。

吉岡、富子の上にかぶさっていく。

9 酒場「ムーンライト」その表

靴をかかえた吉岡、やって来て、看板を見上げる。

10 同 酒場の中

佐々木、スタンドに坐って、女給のユリ、

チエの二人とダイスをやり、笑い合っている。

ドアが開き、吉岡が気弱な表情で入って来る。

ユリ いらっしゃいませ。

佐々木 そのボックスにでも坐ってくれ給え。

吉岡 は。

吉岡、さも恐縮したように頭を下げ、ボックスに坐る。

佐々木、女給達とダイスを続けている。

吉岡の心の声 この男は、俺と同じ年だが、学校を出て、すぐ不動産金融の仕事を始めもう一億近い資産を作ったという。物質の原則だけを信じて、世渡りしている男だが、金を握ってる男にあり勝ちな横柄さが鼻につく。こんな奴に頭を下げなきゃならない俺が情けなくなるよ。

女給達とキャッキョウ笑って、ダイスをつづける佐々木を見ながら、吉岡煙草をすっていたが、急にあわてて煙草を灰皿にねじこみ、腰を上げる。

佐々木が一勝負すませて、ボックスの方へ近寄って来たのだ。

佐々木 いや、どうも失礼。

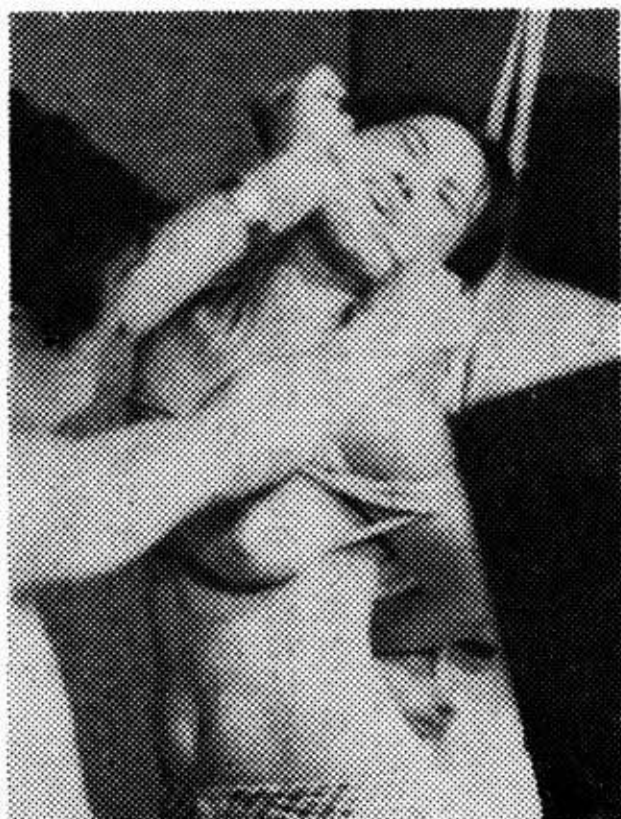
吉岡 お忙がしい所、御無理申し上げまして。

佐々木 富子から話は、きいたよ。ま、坐り給え。

吉岡 は(と坐って)実は、その事なんですが――

吉岡、鞆を開いて書類を取り出す。

吉岡 手前の会社は、代表取締役が、有本健作――資本金はわずか八百万円ですが――



女給のユリ、近づいて来て、

ユリ あの、何かお飲物は――

佐々木 水割りをもらおうか。こちらにも。

ユリ はい。(スタンドの方へ戻る)

吉岡 (つづいて佐々木に説明する) えー今申し上げました通り、資本金はわずか八百万円の玩具製造会社であります。来年度はフィリッピンへの輸出が決定致しまして――

佐々木 ま、待ち給え、そう一時にベラベラまくしたてられても、こっちは面喰うだけだよ。つまり、僕が君の会社の手形を割ってあげればいいわけだろう。

吉岡 は、そ、そういう事なんです(ハシケチで額の汗を拭きながら) 実は

先々月、問屋の一つから多額の不渡りを喰い、大変な違算を生じてしまったわけでした――

佐々木 (ニヤニヤして) 君は、僕が二号にしている富子の元、亭主なんだからな。何だか他人のような気がしないじゃないか。何とか、お力になってあげたいと思うんだよ。

吉岡 (そわそわしながら) 全く、何と聞いていいか。こんなお願いをして、さぞ、厚かましい男だと思われるでしょうけれど――

佐々木 (皮肉な微笑をして) いやいや、そんな事、気にする事はないよ。それに今の君の細君は、以前、かおる、という名で、クラブ・エリートに勤めていた事があったね。

吉岡 (驚いて) それを御存知だったのですか。

佐々木 ああ、俺は一時、あのクラブの常連でね。というより、かおるが見当で通いつづけていたんだよ。いや、こんな事いっちゃ君に失礼かな。君は一寸した僕の恋仇、いや、妙な因縁だよ、君と僕とは。ハハハ

吉岡、奇妙な表情。

ユリとチエが、水割りを運んでくる。

ユリ お邪魔していいかしら。

佐々木 いや、今、一寸、商売の話をしてい

るんだ。少し遠慮してくれ。

チエ いいわ。そのかわり、あとで遊びに

連れて行く約束、忘れないでね。

佐々木 (笑って) よしよし忘れやせんよ。

佐々木、スタンドの方へ戻る女二人の後姿を面白そうに見ながら、

佐々木 女は二人いるよ。俺一人じゃ手にお

えんからな。そうだ。一人、君に譲ろう。今夜俺と付合ってくれ給え。

吉岡 ええ？

佐々木 どうしたんだ。女は嫌いじゃないだ

ろう。何もそう女房に義理立てする事はないじゃないか。

吉岡 はあ、しかし、現在、僕はそういう

気分には一寸――

佐々木 何を云ってるんだ君。僕は君と、こ

の際、肉のつながりを持って、肝胆相照す仲になりたく思うんだよ。そ

の方が君にとっても有利じゃないかね。

吉岡 ―と、云いますと――？

佐々木 何もむつかしく考える事はないさ。

大いに君と仲良くなりたいたいという事だよ。男と女の関係というものは、

肉体関係がないよりあった方が親密となる。男同志の友情も同じ事だ。

女の肉を媒体として、男と男が肉体

関係を結ぶ。親愛の情、これに過ぎるものはないぜ。

佐々木、大口をあけて笑い出す。

吉岡、苦り切った表情。水割りのコップを取り、一息に飲み干す。

11 吉岡の家

電話が鳴る。

葉子、受話器をとる。

葉子 もしもし、ああ、貴方。今、どこに

いらっしゃるの。随分とお帰りがおそいじゃありませんか。ええ？ 湯河原ですって。

12 温泉旅館の廊下

吉岡、電話している。かなり酩酊し、足もとがふらついている。

吉岡 ああ大事なお客様のお伴でね。とうとう、ここまで来ちゃったんだよ。

(うるさそうに) わかってるよ。だからその手形問題でお客様と話し合っ

てるんじゃないか。今、会社は潰れるか潰れないかの瀬戸際なんだ。少

々の屈辱はしのいで、俺は何とかこのピンチを――すまない。俺は少し

酔っぱらったようだ。

廊下の向こうから、ユリが酔っぱらい、ふらふらする足でやってくる。

ユリ ね、ヨーさん、一体、どこへ電話してんのよ。

吉岡 (電話) じゃ、いいね。明日は必ず帰るから。

吉岡、ユリと肩を組み合い、フラフラ部屋の方へ歩いていく。

13 吉岡の家

葉子、受話器を静に置く。悲しげな表情。

14 温泉旅館の一室

佐々木とチエ、卓の前で、ぴったり体を寄せつけ合いながら酒を飲んでいく。

チエ 口うつしで飲ませてあげようか。

チエ、盃の酒を口にふくみ、佐々木の口に唇を押し当てる。

襖が開いて、肩を抱き合った吉岡とユリが入ってくる。

ユリ (接吻している二人を見て) まあ、

お熱い事、こっちも負けちゃいられないじゃないの。ねえ、ヨーさんたら。

ユリ、吉岡にしがみつく。吉岡、ユリに引きこまれるよう畳の上に顛倒する。

佐々木 そんな二人を面白そうに見て、

佐々木 土俵は次の間に作ってあるよ。今夜は四人入り乱れて、大いに楽しもう

じゃないか。え、吉岡君。

吉岡、如何にも疲れ切ったようにユリを抱擁している。

佐々木 そうだ。その前に一寸、前座試合が必要だ。



佐々木、チエの耳に口を寄せて何かささやく。

チエ いやーよ、そんな事。

佐々木 何云ってるんだ。俺はお前達二人に五万円出してやってるんだぞ。それ位のサービスしろ。

15 同 次の間の寝室

ユリとチエ、女同志で抱擁し合っている。床の間に腰をかけ、それを見物しながら、酒を飲む、佐々木と吉岡。

佐々木 何しろ、こいつらには五万円も取られちまってるんだからな。充分にサービスさせなきゃ損だよ。

吉岡 (啞然とした表情で、女達の行為を見つめている)

佐々木 もっとも、こいつら二人、レスビア

ンのけもあるらしいんだがね。いわば両刀使いさ。ハハハ(女達に声をかける)すっかりやれ。もっと腰を使えよ。ハハハ

ユリとチエ、舌足らずに呻き合い、女同志の激しい愛欲図を展開させている。

佐々木 さて、次は——
佐々木、のっそり立上る。

16 同 元の部屋

天井から吊り下がった二本のロープのそれぞれに緊縛されたユリとチエが背中合わせになって立っている。パンツ一枚になった佐々木が手に皮バンドを持ち、ニヤニヤしながら、二人の女の周囲を廻っている。卓に坐り、ウイスキーを飲みながら、ぼんやり見つめている吉岡。

吉岡の心の声 この男は、完全な変

質者だ。単に普通の性行為ではあき足らず様々な方法で女体を貪欲にむさぼろうとしている。あの異常な狐火のような眼の光り、俺は背筋が寒くなってきた。

佐々木、残酷なものをジーンと眼の底に沈めて、女二人を見つめていたが、いきなりバンドを高く振り上げて力一杯、打ち下した。チエとユリ、同時に悲鳴を上げ、

顔を歪める。

佐々木 そら、もっと苦しみ、わめけ。どうだ、この××猫共。

佐々木、何かにとり憑かれたようにバンドを振りつづける。

ユリ、耐え切れなくなって佐々木を睨む。

ユリ ひどいわ。いい加減にしてよ。もう嫌っ。

チエ お願ひ、縄を解いて、私達を殺す気なの。

佐々木 今更、弱音を吐く事はないだろう。俺の趣味はお前達よく知ってる筈じゃないか。だから俺は先渡しで五万円も——

ユリ お願い、もうこれ位で勘忍して。

佐々木 (笑って、吉岡の方を見る) どうだい。君も少しこの女達を痛めつけてみないか。ストレス解消になるぜ。

佐々木、手のバンドを吉岡の傍へほうり投げる。

吉岡 残念ながら、僕はどうもそういう趣味がわからないんですよ。

佐々木 そうか、それは残念だな。

佐々木、女二人に向かって、

佐々木 よし、それじゃ次に尻相撲だ。

ユリ ええ?

佐々木 押しつくらするんだよ。その位置から前に動いた方が負けだ。

チエ そ、そんな――

佐々木 ぐずぐずせず早くしろ。負けた方は逆さ吊りの刑だ。しっかりやれ。

ユリとチエ、ベソをかきそうな表情で、尻と尻で押し合いを始める。

佐々木 そら、もっとしっかり押し合って押し合って。そうだ、はっけよい、のこった、のこった、ハハハ。

17 同、次の間の寝室

雑魚寝で抱擁し合っている四人の男女。

佐々木、チエから上体を起すと、ユリと抱擁し合っている吉岡の方をニヤリと見、枕元の小型カメラで撮影する。

泥酔してユリと抱き合っている吉岡。

佐々木、カメラをしまうと、吉岡の抱いているユリにからみつき、その太腿に接吻する。

18 渋谷あたりの俯瞰

19 国電駅前のラッシュ

サラリーマン達の間混って、吉岡、鞆を抱えて歩いている。その表情には、一層の疲労と焦燥のかげが濃い。

20 富子のアパート

富子、鼻唄をうたいながら、三面鏡の前で髪をといている。

富子 どうぞ。

吉岡、入って来る。

吉岡 富子。佐々木さんは、どこへ行ったんだ。いくら会社の方へ電話しても――

富子 あら、知らなかったの。九州へ出張してるのよ。

吉岡 九州へ？

富子 あの人、儲け仕事なら、沖縄でも台湾へでも飛んで行くわよ。――どうしたの。そんな所へ突っ立っていずお入りなさいよ。

吉岡、虚脱した表情で力なく椅子に坐る。富子 何だか元気がないわね。どうしたのよ。

吉岡 手形の期日は、あと五日しかないんだ。佐々木さんは本当に俺を助けてくれる意志があるんだろうか。

富子 だって、貴方、この所、ずっと佐々木と逢っていたんでしょ。

吉岡 ああ、逢う度に下らない遊びのお伴をさせられるだけで、一向にらちがあかないんだ。話が問題にふれると彼はのらりくらりと体をかわしてしまふ。

富子 金を持ってる人間というものは、みんなそうしたものよ。相手をじらして喜こんでるんだから。

吉岡 (元気がない)

富子 ね、それより、それに見込みない会社

社なんか見限っちゃったらどう。佐々木に金を出させて、私と組んで水商売でもやろうよ。その方が、ずっと――

吉岡 (むっとして) 馬鹿な事いわないでくれ！

富子 (びっくりする)

吉岡 このピンチさえ切り抜ければ、会社の見通しは充分にたってるんだ。俺が佐々木さんのあとについて、幫間のような屈辱に耐えているのも、何とかして今の会社を――

興奮して頬を硬化させる吉岡を富子、何とかなだめようとして、

富子 そういう所があんたのいい所だけだ。どね――ね、お酒でも飲まない？

吉岡 すまないが、電話をかしてくれ。もう会社へは今日で三日も顔を出してないんだ。

吉岡、電話のダイヤルを廻し始める。

富子、うしろから、そっと吉岡を抱きしめるようにして、

富子 貴方、大分疲れているわ。だめよ、そんなに神経質になっちゃ。

吉岡、受話器を耳に当てる。

吉岡 (電話) もしもし吉岡だ。すまん。

あれからずっと例の件で走り廻っていたんだが、何か変わったことは、うんうん、ええ

？ ほんとか。じゃ俺、すぐに社長の自宅へ行く。

吉岡、苦しい表情で電話を切る。

富子 どうしたの。

吉岡 離してくれ。

富子、吉岡に突き飛ばされて、ベッドに尻もちをつく。

吉岡 社長が工場から工業用の毒薬を持ち帰ったらしいんだ。自殺するかも知れない。

吉岡、あわてて外へ飛び出して行く。

富子 フン、沈没しかかった船にせいぜいしがみついているがいいわ。全く、あんたって馬鹿よ。

21 吉岡家 居間

吉岡、腕組みし、疲労しきった表情で卓の前に坐っている。

卓の上に小さな瓶が置いてある。

襖が開いて、妻の葉子が入って来る。

葉子 貴方、お食事の仕度が出来ましたけど。

吉岡 何も食べたくないんだ。すまないがウイスキーだけ持って来てくれ。

葉子 お酒ばかりじゃ体をこわしますわ。

吉岡 (語気を強めて) ウイスキーを持っ
て来いと云ってるだろう。

葉子 はい。

葉子、棚のウイスキー瓶を取り、グラスと

一緒に卓の上に置く。

葉子 今、氷をお持ちしますわ。

吉岡 いや、これだけで結構だ。

吉岡、ウイスキーをグラスに注ぐ。

葉子、卓の上の小瓶にふと眼を止めて、

葉子 何ですの、その瓶は。

吉岡 工業用の青酸カリだよ。

葉子 えっ。

吉岡、瓶を取って立ち上り、机の抽出しの中へ投げこむ。

吉岡 うちの社長が、これを工場からこっそり持ち帰ったんだよ。昨日、社長に逢ってとり返して来たんだ。

葉子 どうして、そんなものを社長が——

吉岡 債権者に逢わす顔がないので、いよいよの時に自殺する気だったんだらう。あの社長は、そういう人だよ。

葉子、悲痛な表情になる。

葉子 やっぱり、手形の方は駄目だったのですか。

吉岡 ああ、遂に打つ手がなくなったね。

吉岡、苦しい表情で一息にウイスキーを飲む。

吉岡 話は変わるが、葉子、お前、佐々木という男を知ってるだろう。

葉子 佐々木さん？

吉岡 お前がクラブ・エリートに勤めていた頃、お前、目当てに随分通ったといってたぜ。

葉子 ああ、金融会社の若い社長ね。覚えてるわ。とっても感じの悪い男、それがどうかしたの。

吉岡 その感じの悪い男に、俺は翻弄されちまったよ。如何にも金の事は引き受けたような口ぶりなので、俺は奴

の幫間みたいになって、あちこちついて廻ったが結局、何にもならずだ。世の中には無責任な奴がいるもんだよ。

貴方がどういうわけで佐々木さんと知り合ったか知らないけど、お金を持ってる人というのは、それを鼻にかけるだけで本

葉子

貴方がどういうわけで佐々木さんと知り合ったか知らないけど、お金を持ってる人というのは、それを鼻にかけるだけで本



当はケチなものよ。貴方がそんな人に翻弄されるなんて——

吉岡

ああ俺は大馬鹿野郎の大間抜けだ。

お前に対しても申し訳ないと思うよ。

吉岡、自棄になったようにウイスキーを飲む。

22 同 寢 室

吉岡、狂ったように葉子を抱擁する。

葉子 嫌っ、貴方、そんな乱暴なの。

吉岡 (自棄になったように葉子を抱擁しながら) 葉子、葉子、俺は、俺は怖いんだ。怖いんだよ。

WIPE

(葉子の夢)

ベッドに寝ている吉岡と葉子。

急に吉岡、むっくり上体を起す。

ベッドから、そっと抜け出す吉岡。

それに気づいた葉子。起き上り、吉岡のあとをつける。

23 同 居 間 (葉子の夢)

吉岡、入って来る。

襖のすき間から葉子、吉岡の行動を見つめている。

吉岡、机の引き出しを開け、毒薬の入った小瓶を取り出す。それを口に当てる。

葉子、悲鳴を上げて部屋に飛びこむ。

24 同 寢 室 (現実)

葉子、声を上げて、ベッドに上体を起す。

隣のベッドに吉岡が寝ているのを見て、ほっとする。

吉岡 (寢言) 社長、死んじゃ、駄目だ。

まだ、期日までには三日ある。社長

葉子、吉岡の寝顔を見て涙ぐむ。

その時、階下で電話の音。

葉子、そっとベッドから起き上る。

25 玄 関 近 くの 電 話

葉子、受話器をとる。

葉子 (電話) もしもし、はい、吉岡でございます。あの主人はもう休んでおりますが、どちら様で。え、佐々木さん？

26 酒 場 ムーンライト

ほろ酔い気嫌の佐々木、スタンドの電話をかけている。

佐々木 (電話) これはこれは、お懐しい。

クラブエリート以来、三年ぶりじゃありませんか。一度、吉岡夫人とな

られた御感想などお聞きしたいと思

っていたのですが、ハハハ。しかし最近、貴女の御主人とは随分と親しく御交際願ってるんですよ。

スタンドに坐っている女給のユリとチエ、顔を見合して、ニヤニヤ笑っている。

27 吉 岡 の 家 玄 関 の 電 話

葉子 (電話、不快な色を表情に見せて)

それより、主人は貴方に手形の件をお願いしたと申しておりますが、その後、如何がなったのでしょうか。主人はそのことで今、非常に苦しんでいるのですが——

28

酒 場 ムーンライト

佐々木

(電話) ああ、御主人の手形の件は色々調査してみた結果、やっぱりむつかしいようですね。はっきりいって、御主人の会社の再建はもう無理だと思ふんですよ。銀行の信用も全くないし、ここで二、三本アンプル注射してみても手おくれのような気がするんですよ。実は、その事を申し上げようと思って、夜分失礼ですがお電話したんですよ。ええ？ そりゃ、お腹立ちはごもっともだと思ひますが、こっちとしても、返金能力のない所へ三百万も融通するわけには参りませんからね。(ニヤニヤして) それとも、奥様が御主人に内緒で、丸一日、私とお付合い下さるなら。ハハハ、それ、魚心あれば水心ってやつで——

29 吉 岡 の 家 玄 関 先 の 電 話

受話器を持つ葉子の手が、屈辱にぶるぶる震えている。

電話の声 僕はこれから、お客様を招待して

車で湯河原へ行きます。大月荘という旅館に二日ばかり泊る予定です。お金は用意しておきます。貴女のためにね。気が向いたらどうぞ。葉子、ガチャリと電話を切る。苦しげに、額のあたりに手をやる。

30 同 ダイニングルーム 翌朝

吉岡と葉子、向き合って食事している。

吉岡 葉子、久しぶりに今日の日曜は、二人で映画でも見に行くか。

葉子 ええ？

吉岡 手形の問題は、もう考えないことにしたんだ。やるだけのことやったが遂に万策つき果てたよ。こうなりや社長と共に城を枕に討死さ。

葉子 貴方は、まさか。

吉岡 うん——ハハハ、馬鹿な。俺が毒でも飲むと思うのかい。

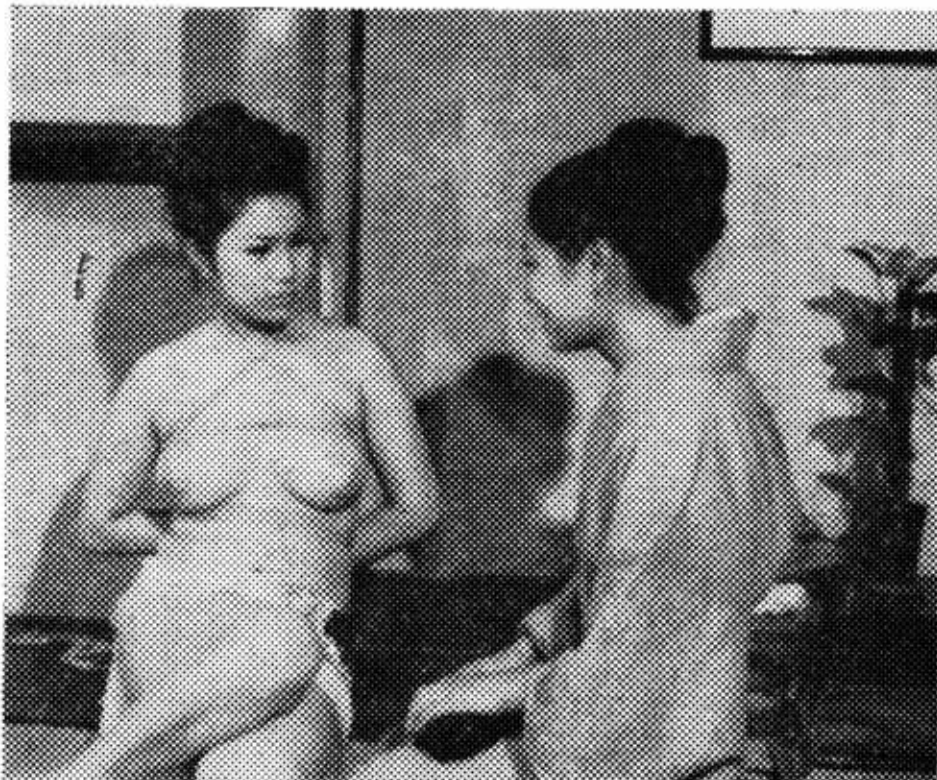
葉子、思い切ったように箸を置く。

葉子 ね、貴方。

吉岡 なんだい。

葉子 私の女学校時代のお友達で、田舎の大金持の所へお嫁に行った人がいるの。その友達に頼んでみれば、ひよっとするとお金が出来るかも知れないわ。

吉岡 (ふと箸を止めて喜色を浮かべる)
今日一日、私にお閑を下さらない。



あの人の家は秋田の方なので、日帰りはむづかしいと思うの。明日の朝には必ず戻るわ。

吉岡 葉子、苦勞をかけてすまないが一度その人に当たってみてくれないか。万が一ということもあるからな。

葉子 (淋しげな表情で) じゃ、行くだけ行ってみようかしら。

吉岡 (生き生きとして) そうしてくれ。期日は、あと三日なんだ。何とか、

一つ頼む、葉子。

吉岡、葉子に哀願的な眼差しを向ける。

31 駅の近く

訪問着姿の葉子を送って吉岡歩いている。

吉岡 お前にまでこんな苦勞をかけてしまつてすまないな。だけどね、葉子。

葉子 ええ？

吉岡 あまり無理はしないように。出来なかつたつてもととんだから。

葉子 (淋しく微笑して) わかったわ。だから貴方も、あまり当てにせず、待っていてね。

吉岡 (微笑して) ああ、そうするよ。

葉子 じゃ、ここでいいわ。それじゃ。

葉子、駅の方へ足を早めて歩き出す。

吉岡 気をつけてな、葉子。

葉子、微笑み、駅の中へ姿を消していく。

32 温泉旅館、大月荘その一室

村田、女給のユリとチエ二人を相手に、夜具の上で愛欲図を展開させている。

ユリを抱く村田の上へチエが甘えかかるように体を押し当て、うねり舞い、三つ巴の変質的な情景。

33 同 別の一室

ここには、佐々木と情婦の富子が泊っている。

佐々木、夜具の上に腹這いになって新聞を読み、富子は鏡台の前に坐って化粧している。

る。

富子

(化粧しながら) あんた、取引先のお客をいつもああいう風にして接待しているの。

佐々木

ああ、女嫌いな奴はまずいないからな。両手に花なら御機嫌だよ。

富子

それなら、何も私まで接待に出すことはないじゃないの。

佐々木

そこがミソなんだよ。とにかく、五千万円からの取引なんだぜ。自分の女まで提供して親愛の情を示す、これは客に対する最高のもてなしだ。彼の気持は大いに動くと思うね。

富子

ほんとにあんたっていう人は、妾の体まで取引の賄賂として利用するんだからね。恐ろしい人だわ、全く。

佐々木

お前にゃ、月々十万からの手当てを払ってるんだ。俺にそれ位の協力したって、罰は当らねえだろう。

ユリの声

入ってもいいですか。

佐々木

襖が開いて、帰り支度をしたユリとチエが入ってくる。

佐々木

ああ、御苦労さん。村田さんはどうした?

ユリ

今、温泉に入ってますわ。

富子

化粧しながら、ふと、ユリとチエの方に眼を向け、フンといった表情。

佐々木 じゃ、お前達、もう帰るのか。

ユリ ええ。

佐々木 それじゃ、これ――

布団の下から封筒を取り出し、女二人の方へ投げる。

佐々木 謝礼だよ。また、頼むからな。

チエ それじゃ、どうも。

ユリとチエ、あくびを噛みながら頭を下げ封筒を拾って、姿を消す。

富子 二人がかりで一回五万円か、いい商売ね。

佐々木 ハハハ、全くだ。――それはそうと富子。

富子

―― 今日、ひょっとすると、吉岡の女房がここへ来るかも知れないぜ。

佐々木

ええ? どうして。

富子

きまつてるじゃないか。身を犠牲にして亭主の急場を救うためさ。

富子

(啞然とした表情) それじゃ、あんたそれを条件に、手形を割ってやるつもりなのね。

佐々木

まあな。あの村田氏の機嫌を彼女が充分にとってくればの話だ。五千万の取引だ。三流手形を割ってやること位、どうってことはないじゃないか。

富子

じゃ、あんた、もし、彼女がここへ

来れば、例の――

(ニヤリとして) そういうことさ。村田さんとは今後とも大いにお付き合ひ願わねばならない人だからな。

富子、鏡の中の自分を見ながら、陰険な微笑を口元に浮かべる。

34 大月荘の近くの道

ユリとチエ、鼻唄をうたいながら、ハンドバッグをブラブラさせ、歩いて来る。

向こうから、和服姿の葉子が来て、すれ違う。

葉子 ああ、一寸、お尋ねしますが。

ユリ はあ。

葉子 大月荘という旅館、御存知ないでしようか。

チエ 大月荘なら、ここを真っ直ぐ行った所よ。

葉子 そうですか。どうも有難うございました。

大月荘の方へ歩いて行く葉子の後姿をユリとチエ、まじまじ見つめながら、

ユリ 美人ねえ。

チエ この土地の者じゃないわよ。

ユリ 逢引きかな。

チエ どうだっていいじゃない。さ行こ。ユリとチエ、再び鼻唄を唄って歩き出す。

35 大月荘 浴場

村田、気持良さそうに湯に浸り、草津節な

ど唄っている。

浴場のガラス戸が開いて、全裸の富子が入って来る。窓の方を向いて気分よく唄っている村田に富子、声をかける。

富子 如何がですか、お湯かげんは。

村田 ああ、なかなかいい湯ですよ（と云って相手が女の声に気づき、びっくりして振り向く）あ、奥さん。

富子 フフ、何も驚く事はないじゃありませんか。お背中を流しますわ。

村田 でも、それは。（うろたえる）

富子 いいの。これは佐々木のいいつけなんですから。

村田 ええ？ 佐々木さんの。

富子 私は彼の奥さんじゃないんですから別に気兼ねなさることはありませんわ。あの人は、こういう風にしてお客を大事に持てなす人なんです。

村田 そ、そうですか。そりゃ、ま、こっ

富子 ちとしては有難い話なんですが――

それに、今夜、村田さんのお相手するの、私なんかと違って、すばらしい美人ですわ。つい、さっき、東京から、この旅館へやって来ましたのよ。うんと可愛がってあげて下さいね。

村田 何だか、竜宮城へ来たみたいだな。
富子 （艶然と笑って）ねえ私、御一緒に

お風呂入っていいかしら。

村田 は、どうぞ、どうぞ、どうぞ。

36 同 二階の一室

卓の前に坐っている佐々木、ビールを飲みながら、北叟笑んで、前に坐っている葉子を見つめる。

佐々木 よく決心して、来てくれましたね、奥さん。

葉子 どうしても佐々木さんのお力を借りないと主人の会社は――

佐々木 （ニヤニヤして）ま、そういう事になりますね。ま、どうです、一杯。

佐々木、ビール瓶をとって、葉子にすすめる。

葉子 いえ、それより佐々木さん。はっきり約束して頂きたいんです。私も覚悟してここへ参りました。三百万円

ほんとにお借り出来るでしょうか。佐々木、薄笑いしながら傍の鞆を引き寄せ

小切手帳を取り出し三百万円を書きこむ。葉子、息をつめて、それを凝視している。

佐々木 このまま御主人に渡すとまずいでしょう。振出人は僕だからね。

葉子 （うなづく）
佐々木 だから、貴女が銀行へ持って行って現金化すればいい。

佐々木、小切手に印を押し卓の上へ置く。
葉子、ほっとした表情。

佐々木 これさえあれば御主人の会社は一ま

ず安泰だ。わかりましたね。

葉子 助かりましたわ。

佐々木 しかし、こいつは一旦、こっちへおあずかりだ。

佐々木、小切手を意地悪く、ポケットにしまいこむ。

佐々木 これは明日の朝、貴女にお渡ししますよ。貴女が僕達の欲求を充分満足させて下さった時にね。

葉子 （不安な表情）僕達とおっしゃいますのは。

佐々木 ハハハ、今にわかりますよ。とにかく明日の朝までは、貴女は僕の奴隷だ。僕の命令には絶対服従してもらう。いいですか、僕は三百万もの大金を貴女に融通するのですからね。慄える葉子を楽しそうに見つめながら、佐々木、ビールを飲む。

37 別の一室

卓の前で、湯あがりの村田、富子の酌でビールを飲んでい

村田 いやあ、酒はうまいし姐ちゃんはきれいだし、全く楽しかったですよ。

富子 あら、本当の楽しみは、これからじゃありませんか。

村田 ああ、そうだったわけ、ハハハ。
富子 さ、お飲みになって。



村 田 どうも、どうも。ああ、それからですね、佐々木さんに依頼された件なんですけど、伊東の土地、三千坪、今月中に契約することに致します。まあ、佐々木がきくと喜びますわ。でも、今夜はそういうビジネスの話は抜きよ。さ、どうぞ。（ビールをすすめる）

村 田 （上機嫌で）ハハハ。

襖が開いて、佐々木が顔を出す。

村 田 佐々木さん。お先に御馳走になっておりますよ。

佐々木 どうぞ、どうぞ。ところで、今夜の

佐々木

村 田 すばらしいですよ、こりやまったく。

村 田、口をあけ、陶然としたように葉子に見とれる。そんな村田を富子、面白そうに見て、

富 子 ね、美人でしょう。お気に召しまして。

引出物ですが——（襖のうしろに向かって）さ、こっちへ。
葉子が顔を伏せるようにして入ってくる。
佐々木、葉子のうしろから、肩に両手をかけて、
佐々木 如何がです。こういうタイプは。

葉子、眼を閉じ、屈辱を必死にこらえている。

佐々木 さて、商品はまず中身を調べるべきだな。それじゃ、裸になってもらおうか。

葉子、狼狽する。
佐々木 どうしたんだ。命令は絶対服従の約

束だよ。さ、脱ぐんだ。
葉子、観念して帯を解き始める。畳の上にとぐろを巻いて落下していく腰紐や帯。

富 子 お酒の肴としては、最高のものじゃありませんか？ 村田さん、ホホホ。

村 田 （大きく眼を開き、唾を呑みこむ）長襦袢姿になった葉子、体を曲げるようにして慄えている。

佐々木 何しているんだ。みんな脱げといっ
たろう。

葉子の慄える指先が伊達巻にかかる。
酒に濁った村田の好色そうな眼。

長襦袢を脱ぐと葉子、両手で乳房を押さえ、たまらなくなったようにその場に身をかがめる。

湯文字一枚の葉子を見て、富子、小気味良さそうに煙草の煙を吐いている。

佐々木、散乱している葉子の衣類を拾い集めて、

佐々木 明日まで、この着物もこっちで預っておくからな、ハハハ

佐々木、楽しそうに衣類を抱えて、村田のいる酒の席に行く。

乳房を押えながら、そんな佐々木を恨めしそうに見つめる葉子。

佐々木、村田、富子の三人、葉子を肴にして盃のやり取りを始める。

富 子 でも、いい体しているわね、女の私

でさえ惚れ惚れしちゃうわ。

村 田 胸といい、腰つきといい申分なしですよ。

佐々木 (葉子に) そんなに小さくなってちゃ面白くないよ。シャンと立ってみろ。

葉子、唇を噛みながら、胸を押えてその場に立つ。

佐々木 腰のものも取るんだ。

葉子、悲痛な表情で、首を左右に振る。

佐々木 どうしたんだ命令がきけないのか。

葉子 お願いです。か、かんにんして!

葉子、耐え切れなくなり、畳にくずれて泣きじゃくる。

佐々木、ニヤリとして、村田の顔を見る。

佐々木 この奴隷は少し教育しなきゃ駄目ですな。一つ、折檻してみますか。

村 田 いいですねえ。僕にも、貴方の趣味が多少あるんですよ。

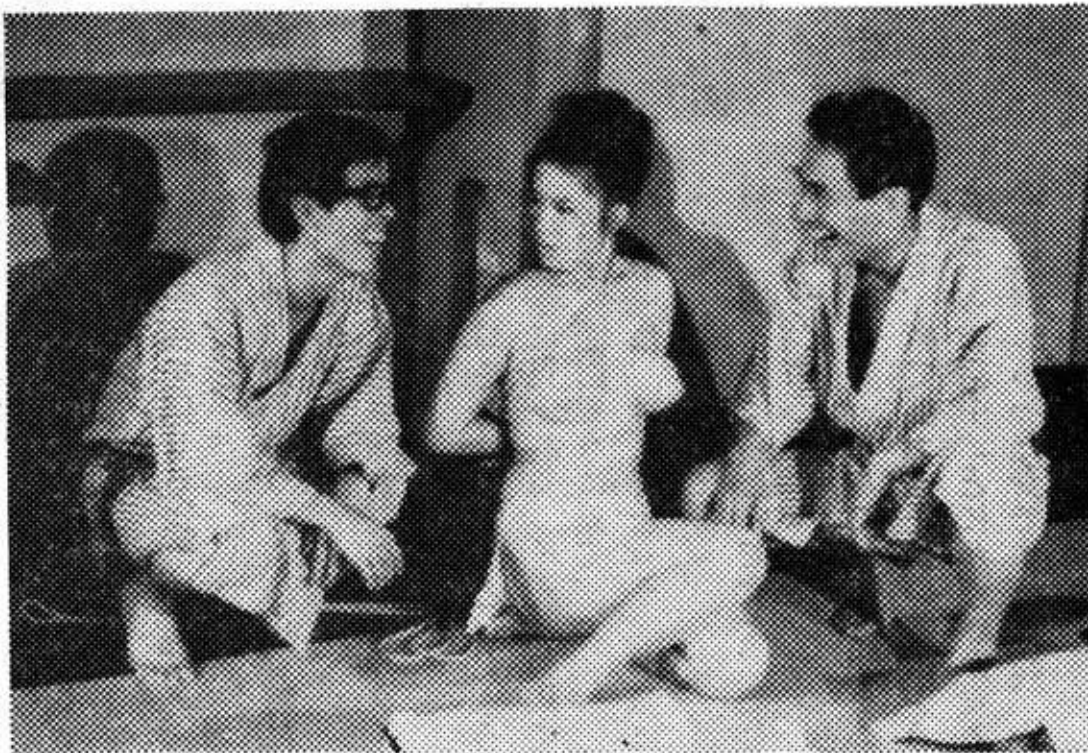
佐々木 ほう、そいつは好都合だ。おい富子 縄を用意しろ。

畳に顔を埋めていた葉子、ハッとして泣き濡れた顔を上げる。

WIPE

床の間の柱を背にして立たされ、キリキリ縄をかけられている葉子。

佐々木、葉子を縛りつけると、ニヤニヤして、カメラを三脚台に取りつける。



顔を伏せていた葉子、それに気づくと、ハッと身を硬化させる。

葉子 な、なにをする気なんですっ。

佐々木 君の美しいヌードを記録しておこうと思っただけ。

葉子 (必死に悶えて) 嫌っ、後生ですっ写真だけはとらないで。

佐々木 今更、何を、うるたえてるんだよ。

(ニヤリとして、ポケットから写真を取り出し、葉子に近づく) そら、これを見てごらん。

葉子、佐々木に押しつけられた写真を見て慄然とする。

佐々木 これは君の御主人だろ。ハハハ、亭主もこんな写真をとってるんだ。妻の君が照れることはないじゃないかハハハ。

佐々木、カメラの位置へ戻って、緊縛された葉子に狙いをつける。

葉子、必死に顔をそむける。

佐々木 顔をかくしちゃ、駄目じゃないか。(舌打ちして、富子の方に眼くばせる)

富子、煙草を灰皿に押しこみ、葉子の傍に立つと、葉子の顎に手をかけてカメラの方へ向けさせる。

閉じ合わせた葉子の眼尻から屈辱の口惜し涙が流れる。

富子 フフフ、可哀そうだけど、私はいささか貴女には恨みがあるのよ。貴女の可愛い亭主の吉岡はね。元はといえは私の――

佐々木 くだらないこというな、富子。

佐々木、カメラのシャッターを切りつけながら云う。

村田も、小型カメラで、色々な角度から写真をとってつけている。

佐々木 さて、生まれたままの姿にしてくれ
富子。

富子、うなずいて葉子の腰に手をかける。
電気が触れたように身を震わせ、抵抗する
葉子。

葉子 や、やめてっ、お願い！

佐々木 せっかくの君の努力が、ここでおじ
やんになってもいいのかね。

佐々木、ポケットから小切手を取り出し、葉子の目の前で面白そうにヒラヒラさせる。

葉子、弱点を佐々木にえぐられた感じですり泣く。

富子、せせら笑って、葉子の前に腰をかかめる。

富子 女は、あきらめが肝心よ。さ、おとなしくして頂戴ね。

富子、湯文字の紐を解き始める。ハラリと落ちる最後の一枚。

葉子、羞恥の極に顔を歪める。

村田、小型カメラをかまえて、コセコセ動きながら、シャッターを切りつつける。

38 同 別の入室

夜具が二つ配置されてある寝室。

その部屋の隅に全裸の葉子、緊縛された身を立膝させて小さく慄え続けている。

富子が、酔ってフラフラする足を踏みしめ

入って来ると、葉子の傍へピタリと坐りこむ。

ハンドバッグから化粧品を取り出す。

富子 さて、おムコさん達に嫌われないようきれいに化粧しましょうね、フ

フ

富子、口紅を取って葉子の顎を押さえる。

葉子、観念したよう眼を閉ざし、富子に口紅を引かれている。次に富子、クスクス笑いながら、葉子の耳や首筋に香水をふりま

富子 これだけいい体しているんだもの。二人の男を相手にしたって、どうってことはないわね。

葉子 (その言葉に慄然とする)

富子 フフフ、あんたも馬鹿ね。佐々木って男は変質者なのよ。これから二人

がかりであんたを騙るだけじゃなくとても羞しい恰好をさせて写真を撮る気にいるのよ。それをネタにされるあんたはこれから骨までしゃぶられる事になる。

葉子 お願いです。助けて、ね、この縄を解いて下さい！

富子 もう手おくれよ。お気の毒だけど。

富子、勝ち誇ったように笑い出し、立ち上る。

葉子、身を慄わせて泣きじゃくる。

襖が開いて、浴衣姿の佐々木と村田が、薄笑いを浮かべて入って来る。

葉子、ぞっとして一層、身をすくませる。

富子 それじゃ、ごゆっくり。

富子、部屋の外へ出て行く。

佐々木と村田、小さくなっている葉子の傍へ寄り、しゃがむようにして、

佐々木 さて、ぼちぼち料理にかかろうか。

村田 一流コックの腕くらべという所で。

二人、顔を見合わせて笑い合う。

二人の手が同時にのびると、葉子、悲鳴を上げて、二人の間をくぐって逃げ出す。

佐々木 (笑って) 毛をむしられたニワトリが逃げ出したぜ。

部屋の中で、奇妙な鬼ごっこが始まる。

夜具の上の枕に足を取られて顛倒する葉子の上に、佐々木と村田、同時にのしかかっていく。

三つ巴のすさまじい愛欲場面が展開する。

39 吉岡の家 応接間

吉岡、ぼんやりとテレビを見ている。

と、やり切れなくなったように立ち上り、

テレビのスイッチを切る。

腕枕をしてソファの上に横臥する吉岡。思いつめた表情で、じっと一点を見つめる。

40 大月荘の入室 朝

佐々木と村田の葉子に対する加虐は、まだ続いている。

卓の前に坐っている佐々木と村田の間に坐らされている葉子。無理やりに左右から口の中へ酒を注ぎこまれている。

葉子、腰に手拭を巻きつけられただけの裸身を相変らず緊縛されたまま、氣息延々となっている。

ようやく二人に解放された葉子、そのまま畳の上に体を落し、大きく肩で息をしている。

それを見て、哄笑する佐々木と村田。

富子も傍で、せせら笑いながら酒を飲んでい

る。
佐々木 朝酒の味は、また格別だろ。どうだい。

佐々木、苦しげにあえいでいる葉子の肩に足を乗せ、力を入れて踏みこむ。

畳に頬を押しつけ、苦悶する葉子。

佐々木 よし、最後の仕上げだ。

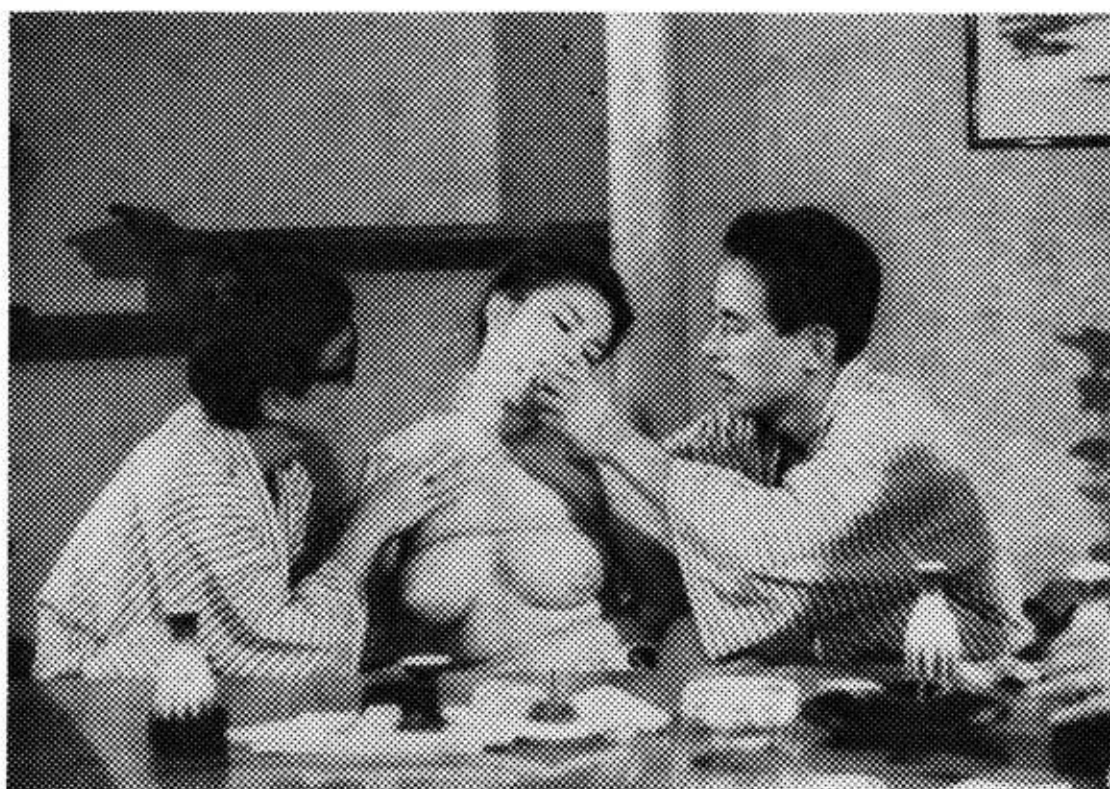
佐々木と村田、さも楽しげに、畳に俯伏している葉子の体を抱き起し、床の間の柱に押し立てていく。

体にまわった酒の酔いのため、足もとがふらつき、柱の根に腰がくだける葉子。

佐々木 しっかりしないか。

再び、柱を背にして縛りつけられた葉子。精も根も尽き果てたようにがっくりと深く首を落している。

佐々木、淫靡な笑いを口に浮かべて、西洋



剃刀を取り出す。

富子 待って、それは私がしてやるわ。

富子、フラフラ立ち上って、佐々木から剃刀を取り上げる。

佐々木 たっぷり時間をかけて、上手に仕上げてやりな、ハハハ。

佐々木と村田、元の場所に戻り、舌なめず

りするように眺めている。

富子、葉子の髪の毛をつかんで顔を上へこじ上げる。

固く眼を閉ざし、反抗の氣力を失っている葉子。

富子 フッフ、さぞ旦那が驚くことだろうね。

富子、剃刀を口に咥え、腰をかがめると葉子の手拭を解き始める。

佐々木と村田、酒に濁った異様な眼で凝視している。葉子の啼泣が聞こえてくる。

富子の声 駄目よ、動いちゃ。フッフ、いい子だからおとなしくしているのよ。

佐々木と村田、たまらなくなったような声を上げて笑い出す。

41 吉岡の家の近く

橋の上を着物もおどろに乱れ、髪も乱れた葉子が狂人のようにフラフラ歩いている。

42 吉岡の家 玄関

戸が開いて葉子が入って来る。上り框に倒れるように手をつく。

43 同居間

葉子、青ざめた表情で入って来る。机の上に、そっと小切手を置く。

思いつめた表情で小切手を見つめていた葉子。そっと机の引き出しを開け、毒の入った小瓶を取り出す。

葉子 許して、貴方。

葉子、水差しの水をコップに注ぎ、瓶の中の毒を投入する。

葉子 私、もう貴方の前へ出られない女になつたわ。

44 踏切

電車が轟音を響かせて走り去る。踏切が開き、鞆を持った吉岡がこっちへ歩き始める。

45 吉岡の家、玄関

表戸が開いて、吉岡、入って来る。敷石の上の葉子の草履を見て、喜色を浮かべる吉岡。

46 同 ダイニングルーム

吉岡、葉子を探している。

吉岡 葉子、葉子、何処にいるんだ。

47 同居間

吉岡、入って来る。

吉岡 葉子っ。

吉岡、机の下に倒れている葉子を見て、ハッとする。

吉岡 葉子！

吉岡、葉子を抱き起す。葉子の口から血が流れている。愕然とする吉岡。

吉岡、茫然自失して立ち上る。

ふと机の上にある便箋を手にとる。

「お許し下さい。葉子は馬鹿でした」

と、葉子の字で走り書きが。

三百万の小切手が便箋の下に置いてある。

佐々木の署名を見て、吉岡、ハッとした顔になる。

口惜しげにキリキリ歯を噛む。

吉岡 葉子！

吉岡、葉子の死体に取りすがり号泣する。

吉岡 お前を、お前をこんな目に遭わしたのは俺なんだ。許してくれ、葉子！

48 富子のアパート

富子、ネグリジェ姿。ベッドの上で週刊誌を読んでいる。

佐々木、電話をかけている。

佐々木 (電話) (喜々として) そうですか

そりゃどうも。契約は明後日ということ、これでやっと肩の荷がおりましたよ。ハハハ、また、昨日のような遊びを計画致しましょう。はいなるべく近い内に。それじゃ、失礼致します。

佐々木、電話を切る。

佐々木 (富子に) おい、村田さんとの取引は成功だ。

富子 よかったわね。じゃ、約束通り、私に酒場を一軒持たせて頂戴ね。

佐々木 (上機嫌で) あ、酒場でも、レストランでも、何でもお好み次第だ。ハハ。

富子 ねえ、あんた、抱いてよ。

富子、両手を差しのべる。

佐々木 ハハハ、昨日は村田さんの接待で、

お前にゃサービス出来なかったからな。

富子 そうよ。だから今日は、この部屋から帰さないわよ。

佐々木 ま、いいだろ、いいだろ。

佐々木、富子を抱きしめる。

佐々木 どうだ、元の亭主の女房をあれだけ痛めつけりゃ、お前も少しは溜飲が下がったろう。

富子 うん、でも一寸あれじゃ、ひどすぎたわね。何だか可哀そうな気もするわ。

佐々木 なにかまうもんか、三百万からの金を融通してやったんだからな。接客用として、これからも大いにあの女は利用するつもりだ。

富子 怖しい人ね、あんたって。

佐々木 怖しいのは、お前の方じゃないか。

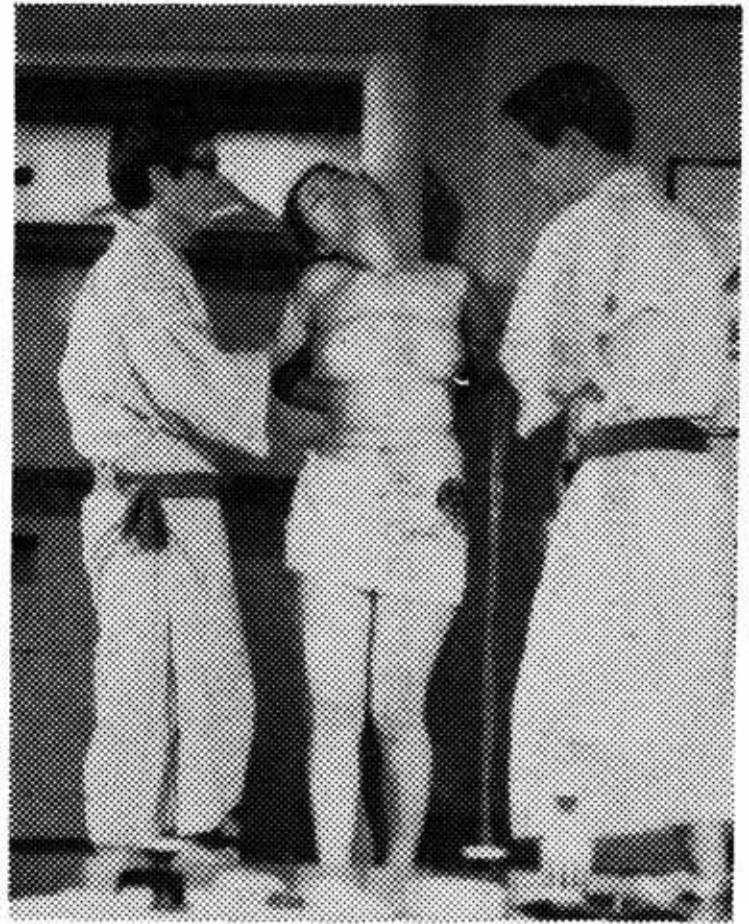
葉子を責め上げる時の眼つきは、まるで蛇のようだったぜ。ハハハ。

ドアがそっと開いて、吉岡が入って来る。

佐々木を抱きしめていた富子、ふと吉岡に気づいて、あっと声を上げる。

佐々木も吉岡に気がついて、

佐々木 な、なんだ、吉岡君じゃないか。困るね、人の部屋へ無断で入ってこられちゃ。



吉岡 葉子は死んだよ、自殺したんだ。
佐々木 えっ。

吉岡 貴様達が颯り殺しにしたんだ。その恨みをいいたくてな。

吉岡、放心した表情でそういうと、ポケットからナイフを取り出す。

佐々木と富子、慄然として立ち上る。

佐々木 待、待ってくれ。吉岡君、話し合おう。話し合えば、わかることだ。

富子 私、私は関係ないわよ。ね、そんな危いもの引っこめて。

吉岡青ざめた表情で二人に近づいて行く。富子、悲鳴を上げてドアの方へ逃げる。吉岡、追いかけて刺す。

ネグリジェが血で真っ赤になり、富子、大きく呻いて、その場に顔倒す。

佐々木、その間に果物籠からナイフを取り出し必死の形相でかまえる。激しく息づき合う二人。乱闘。

佐々木、吉岡を倒し、その上へ乗るかかってナイフを振り上げたが吉岡、下から佐々木の腹をナイフでえぐる。

佐々木、脇腹を押さえ、泳ぐように部屋の中を逃げ廻る。吉岡、それに追いつき、遮二無二、ナイフを突き立てる。

49 ネオン街

流しのギターの音が物悲しく流れて——
吉岡、空虚な眼をしばたきながらフラフラ歩いている。

50 酒場・ムーンライト

ドアが開いて、泥酔した吉岡が危っかしい足どりで入って来る。

ダイスをしていたユリとチエ、吉岡を見て微笑する。

ユリ あら、いらっしやい、ヨーさん。

チエ まあ、随分と酔ってるのね何処で飲んで来たの。

吉岡 (スタンドに坐って) この店が今夜

の終着駅だ。いや人生の終着駅——

ユリ 何だか変な事いってるわ。

チエ 水割りね。バーテンさん、水割りお願い。

吉岡、ポロポロ涙を流している。

ユリ どうしたの、何だか変ね、今夜のヨ——さんは。

チエ はい、お待ち遠様。

眼の前に置かれたウイスキーのグラスを眺めていた吉岡。ポケットから葉子が飲んだ毒薬の小瓶を取り出し、グラスの中へ投入する。

ユリ 何なの、それ？

吉岡 胃の薬さ。少し飲み過ぎたらしい。

酒場のドアが開いて、玩具会社の社長、有本がそわそわした眼つきで入って来る。

有本 あ、吉岡君。

吉岡 社長、すみません。こんな所へお呼び立て致しまして。

有本 いや、それはいいんだが、一体、何だね、急用というの。

ユリ さ、どうぞ、こちらへ。

有本、何かおどおどしながら、吉岡の隣に坐る。

有本 こういう場所は、若い頃からあまり出入りしたことがないんでな。

チエ まあ、お堅いのね。でも、お酒はお嫌いじゃないんでしょう。



有本 ああ、日本酒をもらおうか。
ユリ はい。バーテンさん、お酒おねがい
しますね。

吉岡 社長。

吉岡 内懷から分厚い封筒を取り出して渡
す。

有本 何じゃね、これは。

吉岡 三百万円あります。

有本 えっ。

吉岡 明日の手形はこれで落して下さい。

ギリギリになってしまつて、申し訳
ありません。

有本 吉岡君（すすり泣いて封筒を押し頂
くようにする）有難う有難う。し、
しかし、どうして君、この金を。

吉岡 女房が、昔の友達から借りてくれた
んですよ。

有本 そうか。吉岡君、この御恩は一生、
忘れないよ。

吉岡 そんな、ハハハ。女房と僕の墓に花
の一輪でも供えて下さるだけで結構
ですよ。

有本 ええ？ 妙なことを云うんじゃない
よ、君（笑って）これから君と僕と
は大いに力を合わせ、立派に会社を
立て直そうじゃないか。

ユリ お待ち遠様。

コップに入った酒を運んで来てカウンター
の上に置く。

吉岡 それじゃ社長、会社の前途を祝つて
乾杯しましょう。

有本 うん、乾杯だ。東南アジア
への輸出もあるし、前途は
洋々たるものだ。どうも吉
岡君、ありがとう。

有本と吉岡、コップを触れ合はす
吉岡コップを口に近づけて淋しげ
に笑う。

吉岡 しかし、社長、今度、僕が
生まれ変わって来たならば、
バタ屋をしてでも決して中
小企業の幹部なんかにはな
りませんよ。

吉岡、一息にウイスキーを飲み、フラフラ
と立ち上る。酔っ払い特有のおどけた調子
で両手を上げる。

吉岡 中小企業、バンザイ。

有本、女給達と一緒にそれを見て、ゲラゲ
ラ笑う。

吉岡 有本玩具会社、バンザイ。

女給もバーテンも笑っている。

吉岡 吉岡三郎の馬鹿野郎、バンザイ。

吉岡の顔、苦悶にひきつる。

有本や女給達、それを見て驚く。

吉岡、床に倒れる。

有本 ど、どうしたんだ、吉岡君！

有本、女給、バーテン、一せいにかけつけ
吉岡の体を抱き起す。口から血を吐いてい
る吉岡。

ユリ あ、死、死んでいる。

女給達の顔から血が引く。

有本一人、必死になって吉岡の体を揺さぶ
っている。

有本 吉岡君、しっかりするんだ。おい、

吉岡君。会社は、会社は、これから

なんだぞ。いよいよ立直れるという

のに今、死ぬ奴があるか。おい、吉

岡君、おいっ。

有本、ポロポロ涙を流しながら、赤児を抱
きしめるように何時までも、何時までも吉
岡の死体を揺さぶっている。

（終）

文叢跋渉

女は強い

原 砂 土



小森監督の映画以来、出版界は刑罰ブーム

の観がある。書店をひやかすとき、しばしば刑罰に関する新刊に出喰わす。商業主義の便乗ムードとかその筋の作者の今が潮時とばかりの稿料稼ぎかといってしまうばそれまでのこと。しかし、決して安価ではないその種の書物には、時に写真の中に貴重なものを見出す。さきごろは、書名を忘れたがかなりに分厚い書物であったけれど、三角木馬貴にあう

全裸の女性の写真があった。

学燈社から、五月号を創刊号として「国文学伝と現代」という雑誌が出ている。五月号は特集として処刑が扱れている。「想像を絶する過酷な刑罰の実態を通して、近世社会の世相を探ろうとする特集」である。八頁に亘ってカラーの図がある。図は「刑罰図譜による」とことわりがある。「断罪仕置の図」「磔

刑の図」「火刑の図」「拷問の図」がそれぞれある。この特集中で、立大教授、海老沢有道氏の「キリシタン弾圧と処刑」という記事を遠藤周作氏の「沈黙」や「海と毒薬」等の作品と併せ読めば興味は一層増大するだろう。信仰または宗教団体と、それへの弾圧を通しての、神や仏の实在と信仰そのものについての思索ほど、人間にとって果しない課題はあるまい。そしてこの課題を、エーリッヒ・フロムからさらに遡ってフロイドの学説に及ぶ時、SM的人間研究は自ずと明らかになり、つきせぬ人間存在への愛着となり、哀しみとなるのではなからうか。しかし、人間は愛すべく、SMは理解してプレイ的に人生を潤すべくということとなり、ヒューマンなものはSMに於て自由に展開し、個人といい社会といい相関連して、ダイナミックに回転しているということを確認することとなる。

光文社の「宝石」三月号にカッコしてコメディアンとあるミッキー・安川という、私は何物か知らないのだが、その人の文章があり変態外人の話がある。「ウンコ」の話だから原由貴子嬢や、水城由紀子嬢、園部マリ嬢、南洋子嬢等その道に溺れるマニアの為に引

用しよう。

「……あの香水屋はねえ、変態で、女と寝ると、自分の大便をベッドの中でして、相手の女にもさせてね、それを両手でまぜあわせ、そして彼女の顔から体中にぬるのよ。そして一晩がかりで自分でそれをなめてから初めて関係するんだよ。だから、たいていの女は、何度も失神しちゃうんだって。……あの女よ、くも二週間もがまんしたもんだねえ。……」

同じ号に野坂昭如氏と堤玲子氏の対談がある。この対談中性器のことに触れ、地方で異なる用語法を活字で（伏字でなく、我国は平和ですね）明確に印してある。

文芸春秋社の「漫画読本」六月号に、高橋鉄氏「残酷画家伊藤晴雨一代記」がある。

日本週報社というところから柴野敏江という人の著作「ツンドラの女」というのがずっと以前出ている。「中佐夫人と犬との奇怪な話」という項がある。ロシアの中佐夫人と飼犬のお話で、七歳位になる犬が居て、犬は大きくて強い上、大変利巧だった。奥さんは夫の出張中の、自分の肉体の情欲の炎を慰めるのを、この犬に期待した。

「……犬との愛欲を何回か続けていたが、その熱烈な抱擁の途中で、夫が帰ってきた。犬は自分の折角の楽しみを邪魔されたので、後ろに奥さんをひきずりながら、夫に向って吠えかかり、喰いつこうとする。妻は家中をひきずり廻されて泣き喚く。ついに救急車を呼び、二、三人の医者が、その犬を押えて女を離そうと引張るが、どうしても女の身体は犬から離れない。とうとう、犬に黒い布をかぶせて紐で縛り、女と犬を同じ担荷に乗せて車に乗せた。……」

「オール読物」昨年の十二月号に梶山季之氏の「勝てば官軍」がある。

「なあ、あんた。

あんたは、ホルモン酒ちゅうのを、飲んだことあるかいな。違う、違う。ホルモン注射やない、ホルモン酒や。

若い芸者のな、大事なところで、酒を暖めて貰うて、口をつけて飲むねん。こらあ、大した精力剤やでえ、うん。

まあ、やってみなはれ。必ず効果があるけん。この間、若い女優にそれして欲しい云うたら、えらい叱られたわ。しかし、最後には云いなりや」

女性自身の四月二十九日と五月六日の合併号に、細江英公氏の撮影になる写真がある。レズの写真である。その一人はイメージメーカーというアイディア商売の、ちだ・うい。六月号でしきりにレスビアンを欲していた方があったが、ふたりの女の子がキスしたり、からみ合ったりしているからどうぞ。

朝日新聞五月一九日、日曜版に小山明子の話がある。

「お酒の大きらいな私がよりによって、三度のめしより好きという人（大島渚監督）のところへ嫁にきたのも何かの縁であろう。結婚したばかりのころ、手元が狂ってこぼした私を、つぎ方に誠意がないとどなりつけ、来客にケーキと紅茶をいそいそとだす新妻に、まづビールと教えこみ、わが酒のみ亭主はままと女房の調教に成功したようである。」

五月二〇日小川宏ショーには、園まりや藤原弘達氏等をゲストに迎えて、珍奇な専門家を招じて、ヘソの話、オナラの話、足の話などを談じていた。オナラの話の時など若い園まりや、ホステスの田代美代子の反応をカメラが

映すので観る者の楽しさを倍加した。そこでの話では、オナラに火を点けると燃えるそうである。同席の金鳥氏は或る知人が、それを実演してみせたとか話していた。その時「マツチを近づけ過ぎて毛まで燃したのがいる」と言って一同を爆笑させた。園まり嬢も可笑しそうに笑っておられました。ということはあのお嬢さん、お尻の毛の存在を御存知なのですかね。何時如何なる機会に彼女は知ったか、ということをや豊かな想像力でどうぞ。

「プレイボーイカスタム」誌五月号に「かわい子ちゃんのバス・ルームに侵入」と題する記事あり。吉田日出子という「かわい子ちゃん」は「アタシね、お風呂の中でオナラしたことあるわよ、クッククック……。マツチすると黄色い火がつくってホント?」「……おへソを洗うときって楽しいわねえ」と言っている。前述のTVの説明によれば、点火すれば色の点は不明だが燃えるそうだし、へソのゴマはとらない方がいいとのことである。

「週刊新潮」五月二五日号に桑原幸子の「へソ」騒動という話がある。「台湾も中国同様人前で「へソ」など出すことは禁じられてい

ます」「『いいお天気だからサバサバと歩きたかったの』ブラウスのスソを結び上げおへソを出したまま、台北のメインストリートで「ジョッピング」ロケ隊監視のお役人がカンカン。「でも日本じゃあいいのよ」と答えたそうであるが、その時の写真がある。

「小説新潮」昨年の十一月号に石坂洋次郎氏の「夫婦・この奇怪なるもの」一篇がある。

美代子は正雄の寢床にもぐりこみ、甘え、抱きあい、陶醉して、今夜のことはそれで何もかも水に流したことにしようと考えたのである。そして身体の向きを変えたとたんに、正雄が二度つづけざまに大きな音のガスを発射した。

ああ、最大の侮蔑! 最高の拒絶!
「スカンク……猫よりずっと下等な動物じゃありませんか」

美代子は憤然と怒鳴って、音がするほど強く、完全に正雄に背を向けて寝返りを打った……

「中年すぎた夫婦の場合、有毒ガスの問題はどのように処理されているものであろうか」
「ガスの問題では暴飲暴食の傾向があり、神経も女性より粗雑に出来ている男性——すな

わち夫の方が犯罪者である場合が、圧倒的に多いことと思う。しかし、その方の生理は女性も同じことなのだから、犯罪者が絶無だとは云えない」「で、そこらへんに着眼した誰か篤志の方が、日本に於ける夫婦生活の倫理を高めるために、各年齢層の夫婦間のデータを集めて、『夫婦間のスカンク現象に関する実態とその将来性』とでも題する研究論文にとり組んでもらいたいものだ」この研究は「人間の一生をかけるのに値する、文化的な意義のある適正な研究の主題だと思う」そうである。

同じ作品に次の会話がある。

「恥ずかしがることないわ。……貴女も一人前の女性になったんだから云うんですけど、女をほんときれいにしてくれるものは、そこから売っている白粉やクリームや口紅ではなくて、男性の身体の中の美容液を自分の身体に注入してもらうことなのよ。分るでしょう男性の貯蔵している美容液——ドロツとした濃い……」

作者はこの「会話など、女子高校あたりの国語教科書に採用しても、文部省が許可済のハンコを捺してくれること疑いなしだと信じている。もしも文部省に、新しい国づくり

励んでいる、日本の前途を憂える頭脳明晰なお役人達が揃っているならば——」と意気軒昂で極めて健康な発言をしている。確かに石坂氏の文部省に付けた留保条項がない文部省ならば、心ある大衆の歓んで迎える社会の礎が教育の面から固められていくことになるに相違ない。しかし、奇クの定価幾層倍傾向を横眼でみながら独占欲の充足を満喫している愛読者諸氏には、その辺でニンマリできない事情がでてきそうである。しかし、グラビア復活の歓びが味わえるようになるのは確実である。文部省の頭脳明晰のお役人よ、頑張ってください、である。

「平凡パンチ」五月十三日号に、誌上伝言板「一〇〇人の欲望」という記事あり。

ユニークで入手困難な雑誌「奇譚クラブ」に次のような記事が、載っているかもしれない。原砂土という私の知らない人の「ペンは剣に勝る」という題のオトコの抵抗文だ。かつて作家の石川達三氏は「ペンは剣にまけるのか」という、文明の危機を訴えるような主旨の文を朝日新聞に書いていた。しかし、私は確実にペンは剣に勝ることを実証できる。

私は近い中に女性雑誌社に宛ててペンの暴力を中止するよう訴える趣旨の文書を送ろうと思う。私の心中には文化的使命感と男性の生命の救護者としての義務感で悲壮な勇気が煮えたぎっている。

ペンの暴力は男性の生命を精神と肉体の双方から危機に追い込む作用をしている。男性をこの世から抹殺し女権社会を実現しようと狙う今日の我がニッポン国の現状のそもそも下手人は、実に雑多にして類似の女性雑誌である。殊に私の訴えたいのは、綴じ込みで毎月のように特集して世の女性を煽りたてているセックス記事である。このために、世の妻帯男性がどれほど生命を縮められ、男性の男性たる所以のもの即ち仕事に向けるエネルギーに支障を来しているかわからないのだ。被害者は妻帯の男性ばかりではない。独身の野郎共を見よ。女性上位時代とかの謳い文句に乗って、流行児になり下り、雌雄の区別のないカッコして街を歩き、ブラウン管の中を踊りまわっている。及んではレジスタンスの歴史的イメージを連想させるのかと思っただアングラブームの一角に躍り出たアングラレコードでは、大学生グループが「近頃の女は強い」と、叫ぶように歓ぶように歌ってお

る。若い野郎共もすっかり女性の下僕と化してしまった。こんな野郎に誰がした。

古来、日本男児は女性に優越的地位と意識を持ち、ほんの二十数年前までは法的にも社会的にも男性は女性を従がえておったのだ。

男は女をぶん殴って威厳を保ち、女はその男らしさにシビレてマゾヒズム的服従に甘んじており、それによって精神の安定と至福に酔っておった。武力は腕力として女を圧して居たのだ。ところが現在は武力はペンに押さえられてしまった。「女の平和」はセックスの拒否の原理に因っている。しかし、現代の「女の平和」はセックス攻勢に基いている。その方法、否攻法を伝授したのは、上品な表情が売りものの婦人雑誌だと信じている。

映画「女王蜂」は、世の女性に対する「セックスを控え目になさい、さもないと、アナタのダーリンは死にますよ。貴女の欲求は、ダーリンを殺します。控え目に、ヒューマニズムの精神をもって！」と警告を発したのだ。ところが、この映画の意図は完全に無視されてしまった。鑑賞した女性のほとんどが、ニヤリとして、「貴方も奥さんや愛人に殺されないように注意するのネ」と完全に上位にあって、圧倒するように感想を吐いた。

私は完全に男性の危機を感じる。男性は危ない。このようにして、ペンは完全に武力を圧殺してしまったと考えるのである。この男の意気を抹殺した下手人を教養ある婦人に生活の智慧を運んでいる婦人雑誌にあり、と見定めて、窮状を救うべく使命感を大にして、下手人の許へ訴願し、女性に対しセックスは控え目にし、夫や男性を大切にするのが二十一世紀の女性の美德なのだと指導して貰おうと「豊かな社会」の青写真を提出しようと考えてるのである。読者の賛同多きを信じる。

婦人雑誌社への訴えの案は世の良識に訴えるものであった。しかし、道義で「秩序」や男性の生命、身体、それに貞操が安全に守られないとなると、案の二として法律によって保障されるべく立法運動を興さねばならぬ。

刑法の強姦罪の被害者には「婦女」とあるだけで、他の罪のように「人」とはなっていない。これまでの判例では、この規定は憲法に違反する男女の不平等とはならないということになっている。時が経ればモラルも変遷する。今や時代の勢力図は圧倒的に女性が強い。刑法の強姦罪の規定は違憲である。刑法を改正して、男性の生命、身体、貞操の自由を保障せよとの世論を高めようではないか。

これは目下の急務である。大衆週刊誌で、若い女性が「男性を強姦しよう」と同性に呼びかけているのは女性上位時代のピークの雌叫びと映る。国会議員諸氏よ、役得の利ばかりに血眼になっていないで、この実情を真剣に考えてくれないか。さもないと、アンタ方も女性に殺害されるかもしれないのだ。

久し振りにピンク系館に入る。三本立。その中の一本「みだれつぼ」。つぼとは女性性器を指し、みだれるのは相手の交替の様を称するものと解した。愛情を貫く女の執念が武器たるつぼを利用して、やくざの三下である愛人を目覚めさせるために、つぼをみだれさせて努力するという筋であった。その中でとりわけ出色な場面は、三下の愛人を責めるところで、和服の女主人公が、後手に縛られて仰向けに倒れた男に、和服を端しょって男の上に股がり、次に腰を落して、首にビキニパンティ一枚の臀部をすえて責め、次第に顔面にずらしていくシーンであった。この場面は全体を通してその女の内心を考えれば、愛する男を救い、自分のその男への愛を貫くための、心を鬼にしての演技であることがわかる。心で泣きながら、表情には憎しみと嘲けりを露わにして、自らの下半身で男の顔面に

加虐する。女とは優しい、少くとも男より優しいのだというのが定説である。この優しさが出折、優しさ故の憎しみの形態で露われることが認められる。この映画、ヤクザの世界から足を洗いカガキとなって貰いたい愛人のために、極限状況の最中で、自れのつぼをみだして主体性を維持するという女の一途な愛と執念の物語とみる。世の道学者、先生、そのケンゼンな精神の人々の批判を浴びているピンク系映画にも、私は堂々と拍手を贈り美しいものは美しい、いいものはいいものだと讃えることを辞さない。同時上映の題を忘れたが、男と女、男の肉欲とそれに肉を以て金を制せんとする女の物語の一篇があった。その中で、老金満家に愛される女が秘かにかっている犬がいる。犬とは奇ク読者の願望するイヌ。首輪を着け、クサリでベッドの脚につながれている。醜い顔をして、片腕が効かない、汚ないイヌ。女王様は若々しく美しい身体を犬に誇示し、クサリを引っ張り、クサリで打つ。天然色で、イヌと女王様の場面が上映される。女王様と犬のシーンがカラーで映ぜられるのがミソ。女王様を探し求め、犬を志向する多数男性の夢のシーンであれば、奇ク支持者として書かざるを得ない。



— 告 — 白 —

私の浣腸体験

浅 野 かつみ

マニアとして、浣腸を主眼としてのプレイを望むのは当然のことでしょうが、マニア同志の結びつきを願うことは、今の社会通念ではまず困難なことでしょう。夫婦間であるとか、余程の特殊関係にある者の間などならともかく、普通では浣腸を人に施してもらう事などは不可能に近いのではないのでしょうか。私など、長年望みながら、人に施すことなど思いもよらず、わずかに医療機関で受けることが唯一のことです。しかし、これとてそう簡単にして貰えるものでもなく、かえって惨めな思いをしたり、投薬のみで失望したりのことが多いのです。医師としては肉体的な病氣治療が目的ですから当然かも知れませんが、マニアの中には、私のように目的を果せずしおしおと、薬袋をうらめしく眺めながら医院の門を出た人もきっと少なくないことと思います。

私のような浣腸マニアは、いったい日本全国にどの位居るのでしょうか。仮りに十万人に一人の割合いとしても千人は居る筈ですが、実際にはもっともっと高い率になるのではないのでしょうか。その実態を掌握することはおそらく難しいことだろうし、マニア同志が呼び合うことも不可能となれば、これだけ

の悩める人間のために、という数字は出すわけに行かないのですが、理解のもとに積極的浣腸療法をしてくださる医師なりナースなりの出現は望めないものか、などと考えるてしまします。

看板の隅にでも何かマークをつけて、そのマークのある病院では、申し出た者に特別エネマ施療をしてくれる、などということは、希む方が間違いでしょうか。

それはそれとして、私の今迄に医療機関で受けた二十回ばかりの浣腸施療のうち、特に思い出される時のことを、少しばかり書かせてもらいます。もちろん、ただの便秘症患者としての施療です。

南九州K市の病院

「これだけはると苦しいでしょうな。一度、浣腸しましょう。とにかく出せるだけ出さないと、どうにもならんから」

初老と思える医師が、触診するなり云ってくれた。私は内心でしめたと思う。

「Fさん、一〇〇ぐらいで試してみて。部屋は……っと、二号は使ってるんだネ。じゃ部長と相談してみてナ」

Fさんと呼ばれた看護婦さんが、領いて私を促すと診察室を出た。入れ違いに次の患者

が入った。しばらく待って下さい、と私に云い残してどこかへ行った看護婦さんはまだ若い。二十才前後の小柄な人だ。あの人が浣腸を受け持ってくれたら……と、私は胸のうちで祈る。

「浅野さん、どうぞ。こちらでしますから」しばらく待っていると看護婦さんが戻ってきて私を案内してくれた。レントゲン室だ。

「お部屋が空いてないんです」

といいながら自分が先に入り

「そのベッドにどうぞ。お浣腸なされたことありますか？」

おおありです……とは口には出さず「一二回は」というと、

「じゃ、前になされたようにしてして下さい

すぐですから」

といって出ていったが、言葉通りすぐ戻って来た。白布をかけた器具皿を持っている。

期待通りこの人がやってくれるらしい。私はワクワクする気持を押えて、レザー張りのベッドに横たわる。カチカチいう器具の音も私にはこころよい。首をネジ向けてみると、皿の上にピーカーがあり、液を吸い上げているのは三〇ccの浣腸器だった。

「もう少し足を曲げて下さい。お腹に力を入

れないで、口を少し開けて……」

云われるままにするときの気持もまた、私にとっては楽しいものである。こんな可愛い娘さんが、こんなことをしてくれるのも医療という神聖な職業意識があればこそだろう。

それを人道的、便秘症状をデッチ上げて欺く私は、ナント悪いヤツカツ、と良心？が少し痛んだが、腸をくすぐるような温い感覚が伝わってくるにつれてどこかへすっとなでしまう。

「そのままじっとしてて下さいね」

といいながら、Fさんは空になった浣腸器に再び充液する。

二本目、三本目を続けられ、四本目はごく少量だった。医師の指示通りキッチリ一〇〇ccに合わせたらしい。きちょうめんなひとである。少々多くたって、どうってことはないんですよ、と教えて上げたかった。

彼女は腕時計をみた。

「五分間はこらえて下さいね、効果が減るそうですから……」

私の手をとって、ガーゼで押えさせてくれながら云うと、クルリと背を見せて器具の始末を始めた。私の腹はもう早くから騒いでいる。

「そうはがまん出来そうにありませんが」私は悲壮な声を出す。

「いけません。せっかくのお薬が……」

きちょうめんさんはいいが、この場合は容姿に似合わず冷酷にみえる。

「ト、トイレでなるべくがまんを……」

彼女は、仕方がないといった様子で頷いてくれたが

「なるだけこらえて下さいよ。ね、ね」

と頼むように念を押す。全くいい看護婦さんである。だが私は、トイレに走り込むやいなや、このいい看護婦さんを裏切ってしまったのであった。

横浜のK病院

「では手術室へ行って下さい」

という医師の指示で、看護婦について行くと、手術台に上げられた。

「右を下に横向きになって、バンドをゆるめて下さい。ハイ少し腰を浮かして」

白衣のナースは、総体に皆綺麗にみえる。

テキパキと事務的にやられると、私の狙うムードはとても望めないが、それなりにまた被強制感があって、気高さを伴って尚綺麗にみえるから不思議だ。

余り経験はない人間のようにおずおずとやると、じれったそうに手を貸してくれる。

受け入れ態勢完備のまま、待たされること約二分？ 私以外は無人の部屋とはいえ、幾つもの大きな投光灯のレンズがみつめていようだ。お尻だけがいやに涼しく頼りない感じである。しかしこのムードも悪いものではない。私の中の私が期待に慄えている。

ナースが足速に入ってきた。しかも二人。お待たせしましたとも何とも云わず、二人のナースが私の前後に分れる。一人が、私の膝に手をかけて、曲げ方を変えさせるとグッと押えた。

「いいわネ」という声に振り向いて返事すると、初めてちょっと笑ったが、それは、私の膝を押えているナースに対して云ったらしいのに、私が返事をしたからだだった。その時に見えた浣腸器の大きなこと。一〇〇ccシリンダーで、しかも一杯に液を吸っているではないか。私はとたんにカーッと血の騒ぎ出すのをどうしようもなかった。

「ハイ、お腹の力を抜いて……アーンと口を開けてください。動いちゃ駄目ですよ」

今度は明らかに私に対して云いながら、待望の治療が始まった。

二人がかりでの浣腸も初めてのことだったが、一〇〇ccを一気に使われたのも初めての体験だった。

たちまちにして、表現出来ない程の圧迫感が私を襲ってきた。腸がおどり出すとでもいうべきか、液体ではなく固型物の圧力に似た強力さである。思わず知らず呻く。

「ハイ終わりましたよ。たくさん入れましたから効きめは早いと思います。……どうです、我慢できますか？ なんなら、ここでとつてもいいんですが」

冷酷そうだったナースも、案外に優しく訊ねてくれる。気持だけはウットリだが、腹の中は大騒動している。だが、この調子で、ここでやってしまったら大変だ。医師はそれを見込んで手術室を選んだのかも知れないが、二人のナースの前ではどうにも思い切れないのだった。これは後になって大変に惜しいことをしたと悔まれたが、その時は必死になっ

てしまっていた。

「ト、トイレ……行き……ます」

「そうですか、じゃすぐ向い側ですから」看護婦は急いで起してくれた。彼女達としても、後始末はかなわないと思っ

走り込むのがいつものことだが、この時だけは小走りも出来なかった。ともすれば粗相しそうなのをこらえながら、煮えかえる腹とお尻を押えてのよろめき。ナース二人は、さぞや面白い観物だったことだろう。

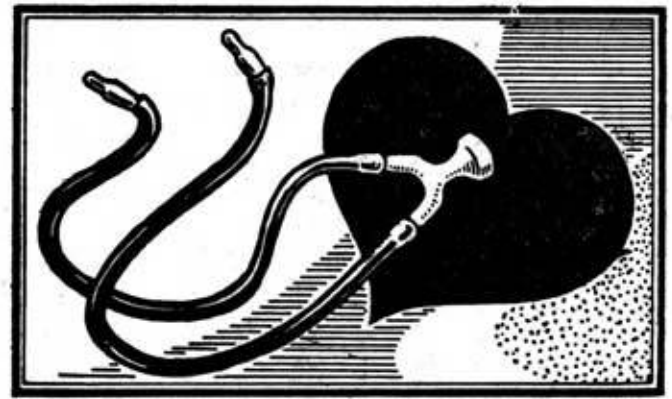
あとで訊くとドナン液だったそうである。改めて一〇〇ccの威力をまざまざと思いしらされたことであつた。

この他にも書きたいことはありますが、医療機関ではよほど事前工作？ をして行かないと浣腸決定をしてくれないようです。かと思ふとあつけない程簡単に受けられたこともありましたが、いずれにしても非合法的な治療を望むのですから、マニアたる者、また薬ではあり得ないと歎じる他はありません。

自分でやればよいようなものですが、私の場合はどうしても不満足なのです。かといって全然やらないとは云いません。

以前誌上で、輸入品のイチジク型浣腸を捜している方の文を読んだ覚えがありますが、東京では販売している店があります。大人用八五〇円で、価は高いが入手は容易です。

神戸でも見掛けたことがありますし、都内の一流ホテルの売店でも置いています。



= S · C · R =

<性問題相談室>

... 回 答 欄 ...

「パイプカット」について

医学博士 弓 削 達 人

質問要旨 (32才、男性、会社員、既婚)

避妊手術として、男性のパイプカットを行いたいと思う。手術後、性欲の減退、性格の女性化などを来たさないか。

職場において、パイプカットをした人達を見てみると、外観や性格が、去勢されたという感じに変わって行くような印象を受ける。

回答

(1) パイプカットとは、男性不妊手術のことであり、正式には「男性優生手術」といわれる。

優生保護法第三条の適用を受け、勝手に手

術を行うことはできない。

(2) この手術は「精管切除結索法」と呼ばれる。これは陰囊を切開し、精子の製造工場である睪丸(副睪丸)から出ている、精子輸送管である精管を切断し、結索してしまう手術をいう。(これを睪丸を除去する去勢手術と混同している人が多いけれども、これは全く別のものである)

(3) 結論からいうと、パイプカットが、性欲、性格に悪影響をおよぼすことはまず考えられない。

あるとすれば「手術した」ということから来る自己暗示の結果であると思われる。

(4) その理由は次の通りである。

性欲行動は、間脳、脳下垂体から、睪丸、副睪丸、あるいは副腎皮質ホルモンなどの、ホルモン全体制と、大脳皮質の興奮、脊髄における反射などが複雑に組合わさったもので

ある。

この場合、手術によって侵襲を受けるのは精子の輸送管が遮断されるだけであって、結果的には、精子が精液の中に入っていないということが生ずるだけである。従って、精液も生産されるし、射精もあるし、睪丸内の男性ホルモンの分泌も、質量ともに変化はないし、精子製造能力は残っているからである。

ましてや、パイプカットが男性的性格の減弱、あるいは喪失をもたらすとか、女性化のおそれがあるとかは、全く考えられない。

(5) しかしながら、某大学のアンケートなどを総合してみると、次のような調査結果が得られている。

性欲減退、性感減少などが約10%。

疲労感、根気がなくなったなどが約30%

(6) しかしこのようなことは、手術の結果というよりは、大切な「キンタマ」の付近に

狙われたバックナンバー

とやま生

手術を加えたといふことの罪悪感、性生活に悪影響があるのではないかという心気症的な自己観察、その結果として生ずる自己暗示といったものだと考えられる。

旧知の古書取次商B君が手みやげ提げてやって来た。別に用はない、というが私にはその目的がわかった。

B君は、店舗をもたない古本屋。おもに大学、図書館、作家など、大口の固定ユーザーをもち、注文をうけては仕入れ、持込み納入をする特殊な営業状態をとる人。

仕入れに当っては東奔西走。大風呂敷一枚をもって、航空機を利用しては全国をマタに掘り出してくる。その入手のうでまえばまさにラツ腕、とか。他の本屋で聞くとところによると、業界では定評がある由。

そのB君が、わが家にやってくるのはほかでもない。「奇譚クラブ」の全冊揃いという、いささか誇るに足るマイ・コレクションを、なんとかとり上げようとするコンタンに違いない。

ズバリ云ってやると、領きながら頭をかく。さる得意先からの求めで、この全冊が完全に揃えば、大へんな価格

それにまた、パイプカットをする人は、年令的に——というよりは心理的にも——退行期にあり、夫婦生活も10年以上で、やや倦怠期的傾向があるといったような、外部因子が

になろうという。

とやかく叩かれながら、ガン張り抜いて来た本誌も、いまやラツ腕業者の注目するところとなったか、の感が深い。置場に困りつつ、秘蔵に苦労した私の努力が狙われたわけ。

大百科事典をスチール書架をつけてオマケするし、もちろん代金も大ファンパツしますからという。しかも、帰りぎわに、送って出た家内に、払い下げをすすめてくれたらと、ダイヤのプレゼントをほめかすカラメ手作戦を布石して帰ったそうだ。

その真意はともかく、B君にとってノドから手が出そうなのは事実らしい話半分にしても大したもの。

しかし私は、いかに好条件でつられ、でも払い下げの意志はない。

置き場に困るぼう大な奇ク誌の山は私にとつては更に高い価値がある。いわば、私のいのちであり、生甲斐なのだから。

関与しているのではなからうか。

(7) なお、再び復元手術をする時の成功率は、40〜60%といわれている。

附、優生保護法

第三条 医師は左の各号の一に該当する者に対して、本人の同意並びに配偶者（届出をしないが事実上婚姻関係と同様な事情にある者を含む。以下同じ）があるときは、その同意を得て、優生手術を行うことができる。但し、未成年者、精神病患者又は精神薄弱者については、この限りではない。

一、略

二、略

三、略

四、妊娠又は分娩が、母体の生命に危険を及ぼす虞れのあるもの。

五、現に数人の子を有し、且つ、分娩ごとに、母体の健康度を著しく低下する虞れのあるもの。

2、前項第四号及び第五号に掲げる場合には、その配偶者についても同項の規定による優生手術を行うことができる。

3、第一項の同意は、配偶者が知れないとき又はその意志を表示することができないときは本人の同意だけで足りる。



あぶ || らぶす || こんと . . .

街 中 で の 発 芽

水 沢

登

夏とは暑い季節である。と同時に素肌が街に溢れる季節である。人間の感覚が自然にホットになってくる。私の胸にあるSM的感覚もハッスルしてくる。SMの種は尽きることを知らない。街の中から発芽したコントの材料を採集しよう。

山へ海へ、レジャーを楽しみに行くのか、苦しみに出るのか判らないが、車は朝夕電車なみのラッシュ。信号三回待ちばざら。マイ・カー族というけれど、ユア・カー族も大分混っているに違いなからう。

信号が変わるのを待つ間、街角で眼につくのはミニのカワイ子ちゃんや、乗り廻したいと思う他人の車ではなく、ピンク映画の看板で

あった。一枚には猿轡をはめられた娘の顔の大写し。もう一枚は集団暴行とも見まがう危機場面。一寸のぞいて見たい衝動に駆られると、信号がゴーにかわった。車をスタートさせようとする、前の車は依然停車したまま見ればそのドライバー、年の頃は二十七、八例の看板に視線がくっついてしまったようにじっと睨みつけたまま。信号の変ったのもトントわからぬらしい。

後続の車もあることなので、クラクションで軽く注意。気付いた件のドライバー、あわててスタートしたが、余程恥しかったのか前走の車を追い抜き追い抜き、視界から消えた。

「誰の気持もかわらないな」と思いながら、

サテあの映画の題名は何だったか、思い出そうとしたがどうもイケナイ。私にはあの若者を笑う資格はないらしい。私はいったい何に見とれていたのだろうか。

プレイ・メイトの女の子にセブン・カラー・パンティでもプレゼントしようとデパートに入っただけで、まさか本当のことを言うわけにもいかない。そこで売子の女の子に余計ないい訳をする。

「ゴルフの試合で賞品を出すのだけれど、幹事仲間の相談でパンティ・セットということになったんだ。クジ運がわるくてね。僕が賞品仕入れ役ときまってるね。たのむよ」

「ショーツでございますね。どんなカラーが

よろしいのでしょうか」

『君のはいてるようなやつでいいよ』とは口に出せない。

「君にまかせるよ。僕にはわからん。うすいやつがいいって、連中が言ってたけどさ」

と他人のせいにする。テレたりニヤニヤしてはバレそうだから、わざと、困った顔をする。ここは演技がものをいうところである。

セットになっているのがないので詰合せてもらう。プレゼント相手と同年輩位の娘が二人、ピンクだのブルーだのゴールドだのバイオレットだの、なまめかしいものを取り出してはセットするのを、見ているのもなんとなく快い。片方の娘は腰をかめる毎にパンティの線がスカートに浮び上る。何色をはいてるんだろなんて考えているうちに、セブン・カラー、ワン・セットできりである。

「賞のノシ紙、おつけしましうか」というのを断ることもできず、とうとうその夜のわがプレイ・メイトは、一等賞のピンク・パンティをつけることになったのである。

東北への旅はただ独り、夜上野を発った。同じボックスの前の座席に坐ったカップルはモミ上げの長い、少々色っぽい青年と少々サ

イケなミニ娘。

夜中の十二時をまわったせいか、電車の振動にさそわれたのか、それとも照明が強すぎるのか、男は背広を脱ぐと娘を抱き寄せて頭からすっぽりかぶる。相合傘ならぬ、相合背広。そしてしばし、寝こんだかなと思っていくとそうではないらしい。男の手が活発に動きはじめたのがよくわかる。御両人は真暗闇の中でやっているつもりだろうが、背広はせいぜい二人の胸の辺までしか掩っていない。頭かくして尻かくさずとはこのこと。

眼前三十センチの所でやられてごらんない。こちらがどういう感情の変化をもたらずか。目をそらすとするが、強力な磁力にはつい負ける。娘が身もだえするたびにミニがまくれ上る。かくも傍若無人のふるまいに至っては、軽犯罪法に触れるではないかとも思うのだが、どういうものか近くの乗客は黙認の形。どなたも紳士、淑女のつつしみ深い方達とみえ、鉄道公安官に言いつけようなどと言いだすものもない。水を打ったように静観するだけである。

それをいいことにかどうかは知らないが、女の喘ぎは大きくなってゆく。これには男もとまどったのか、女の頭をかかえるようにし

て口を押えたらしい。何か口に詰めこんだのかも知れない。これで喘ぎは呻きにかわっていった。

フト気がつくと、隣の席の若奥さん、いつの間にか私の肩に頭をもたせかけて肩で息をしている。おかげで仙台の宿では髪の毛で黒くなったワイシャツをクリーニングに出す始末になってしまった。

友人X氏のプレイ報告

「その娘に君は寝る時どんなんだいと尋ねたら……ブラ・パン・ネグリジェの三点セットよ……と言うんでね、裸にしてから眼かくし猿轡、縦縄の三点セットで責めてやったよ」

「次のデートの時、娘が言うんだ。……この間とっても苦しかったけど今日は一点セットで来たのよ……と大いにそそるんだね。服を脱がせたら、なんとスリー・イン・ワンなんだよ。重装備だな。戦意がそがれちゃってね一本とられたよ」

「それで君は引き下りかい」これは私。

「いやこれからさ。今度は革の拘束帯のスリー・イン・ワンで責めてやるつもりさ。オー・イン・ワンを使って思い切り復讐してやってもいいな」

ただし、オールとはどんな貴具が入るのか私は知らない。

その娘の白いブルマースを脱がすと、下に白い小さなパンティをつけていた。大学生か高校生か知らない。今時の若者達のルールでは住所も名前も聞かないのがエチケットだそう。答えたにしろ偽りの住所であり偽名にしか過ぎない。「SMプレイなら安心してできるから」と割切っている。白い下着がこうもカラーのものよりプレイの意欲に油を注ぐことになるうとは気がつかなかった。夏の夜はむし暑い。自由を奪って猿ぐつわをかませようとすると「暑いからイヤ」と言う。イヤといわれればやりたくなるのが人情(?)。例によってパンティを詰物に紐で吐き出されないように縛る。唇を別の布で掩う。どうも眼が邪魔だ。眼かくしをする。後は責めの進むにつれて別の紐で顔全体をぐるぐる巻きにする。

娘は余程暑いだろう。縛られてないのは鼻だけになった。全頭マスクで責めたい欲望しきり。眼についたのが脱がしたままの白いブルマース。次の瞬間彼女の顔は真白なノッペラボーに変わっていた。酸素供給の大部分を奪

われて、娘の肢体は苦しそうに躍動する。しかし責め手にとってはノッペラボーでは興がうすい。黒いベルベット帯で更に眼かくしと猿轡を重ねた。これで猿轡は六重に、眼かくしは四重ということになる。

プレイが果てて、貴具をすっかり解き放つてやると、娘の顔は蒸されたように真赤に上気して、堰かれていた空気を貪った。

今年、長い暑い夏を経験したのはこの娘だけだろうか。私は、とてもホットか、とてもクールな経験をした娘たちは、案外に多かったのではなからうかと思う。

本題に入る前の戯れが長すぎたようであるこれも小笠原高気圧のなせる業か。ところで今回は表題を省いてみることにした。コントの表題がどんなに内容を、引き立て補うものか、お気付きの人も多いと思うが、作者より優れた題をつけてくださる人もまた多いと思うからである。

私は椅子に釘づけにされたまま、眼前に展開する惨酷劇を手をつかねて見ているしかなかった。猿ぐつわで発声の自由を奪われた恋人は、不自然な恰好に縛り上げられ、今しも

チン入してきた怪漢にはんろうされ凌辱されようとしているのに。手を伸ばしたところで助けることは絶対に不可能なのだ。嵐が吹きまくり、惨忍な爪跡を残して去っていった。

気の遠くなるような数分間、肌は脂汗でびっしょり。しかしそれとは逆に恍惚とした満足感が全身を満した。気がつくあたりは明るくなりつつあった。スクリーンに終の文字が浮き上っていた。

スッカラピンだがハンサムなジョーイは、キャデラックのグラマラスな美人からデートに誘われた。サン・セット・クリフで夕陽の沈むのを待って、人っ子一人いない茂みにパークした。お定まりのキスの後、女は服を脱ぎながら「さあ、何をしてもいいわ。すべてを上げる。欲しいものを自由にして頂戴」と言って、自分から両手を後にまわすと組んで見せた。彼は一瞬とまどったが、後手と両脚首をまとめて逆海老に連結して、絶対解けないようにした。女が更に要求したので、呻きも洩れない様な猿轡。スリップで顔をぐるぐる巻きの荷造りを終えてから「じゃあ遠慮なく頂くものは頂くぜ」ジョーイは異様に笑いルーム・ライトを消すや否や、やにわに彼女

を外へおっ放りだし、車をスタートさせて呟いた。

「こいつはいい車だぜ。世の中には物好きな慈善家もいるものだな」

学資のスポンサーである中年未亡人の相手をさせられているA君。ある夜、黒皮の全頭マスクで責めてやった翌朝。

「マスクって素敵ね、素晴らしいアイデアをありがとう」と感謝され、しっこくキスを要求してきた。A君仕方なく唇を合わせながら思えらく「顔ぐらいくしとかなけりゃ、とてもとても……」

サイケ・ガール二人を相手にハレンチ・ボーイ。

「僕はパンティ・カラーを当てる名人さ。当たったら、つき合うかい」

「うん、いいわ。だけど二人いっしょでよ」

「そいつ面白い。じゃ君はブルー。あんたはピンク。どう」

「当たったわ。その通りよ」

「念のため、拝見したいんだけど」

「あら、私ピンクだわ。あなたは」

「えっ、私、ブルー。おかしいわ」

「当たって、いったじゃないか」

「そうだわ。ここにくる前、きつとあのホテルで、はき違えたんだわ」

手紙が二通きて、ママあてのは『おさそい合せ、御同伴でおいで下さい。お待ちして居ります』という例のワイフ・スワッピング・クラブの秘かな通信。

もう一通は娘あてでチャリテイ・ショウの招待状『当日はお父様と御一しよ下さい』とあるのを見てママ、俄かにきつい顔。

「エミリー行つてはだめ。許しません。第一あなた、未だ十八の娘じゃないの。資格ありませんよ」

海水浴場で溺れかけているビキニの女を誰も助けようとしないので、彼はザンブと跳びこみ抜手を切つて助け上げ人工呼吸を施す。その甲斐あってか女は蘇生した。だが驚いたことに「ウフーン」となまめかしい呻き声を上げると彼に抱きついてきた。衆人環視の中とてドギマギしていると、近くの男、彼の肩をポンと叩き、「君も引かかったね。彼女今日はこれで五度目の遭難だよ」

知り合つたばかりの若い男女、

「ベッドは眼かくしして選ぶものなんですってね。ベッドは構造が大事なんだから、スタイルや型に惑わされない為につて」と彼女。

それを聞くとハッとしたように彼、突然女に強引に猿轡をかけ、押し倒した。……数分後、泣きじゃくりながら女「どうしてあんなひどいことをしたの。許してあげるつもりだったのに」

「いやあね。口を縛つておいた方が、言葉やキスに惑わされることはないと思つてネ」

下宿屋の二階から甘い囁きが聞えてくる。

「僕は君が好き。死ぬ程愛してる」

「わたしもよ。貴方だけしか愛せないわ」

「抱きしめて、目茶苦茶に責めてやりたい」

「わたしも貴方に抱かれたいわ。できたら、私をどんなにでもしてちょうだい」

「愛しあっているのに、どうにもならないなんて、こんな辛いことはない」

……

下宿屋のオバさん、気の毒に思つてそつと障子の穴に眼を押しつけてみると、こはいかに下宿人の大学生、女装姿で鏡に語りかけていた。



続

妻を縛らせるの記

風流極道軒

一

いま思えば、夢——夢としか申し上げられ
ません。悪夢か善夢か、それとも甘い夢か。
ともかくも私は、絹田氏と長谷川氏からおく
られてきた百枚を越えるフォトを前に、妻豊
子と共に、あの三日間を、楽しんでいるので
す。

「これとこれ、どちらが気に入った？」

二枚のフォト。一枚は両手と両足を大の字
に吊られて十字架に縛られ、その下で絹田氏
が愛用の鷺鳥のフェザーを持っているもの。
もう一枚は、パンティ（絹田氏提供）に、三

河君と長谷川氏がいっしょに手をかけ、ひき
おろそうとしているもの。——絹田氏の拷問
部屋でのシーンです。

「いやあ！ エッチ……」

と妻は、私のものをつねりますが、エッチ
もなくでもないものです。百枚以上のフォトは
どれもみな、妻のあからさまな姿態ばかりな
のですから。

「あなただって……」

たしかに、私も男囚になりました。女囚に
紛した妻の相手役を買ってでたのです。が、
私の縛られたポーズは僅か五枚。それも妻と
並んだやつなのです。カメラは当然、さし

みの妻の豊子にのみ向けられ、私の方がつま
なものです。

なかに数枚、若い女のフォトがまじってい
ます。妻と一しょに縛られた映子——前座を
つとめた女です。前座……奇妙に思われるか
も知れませんが、妻はその日、真打ちだった
のです。妻を出す前に映子が縛られました。
と云うのも、絹田氏はさすがにベテランで、
年は長谷川氏よりひとまわりも若いくせに、
その道では先輩らしく、妻を完全に女囚とし
て扱ったのです。

「奥さんは真打ち。まず、ごゆっくりと」
と、私達の目の前で、映子をさんざん賜っ

てのち、

「では……」

と、豊子をさし招いたのですが、それが羞恥責めと云うのでしょうか。

「奥さんは既に人妻だ。普通じゃあ恥かしくないでしょう」

と、亭主の私の前でいい放ち、先ず上半身を責め勵めてのち、みなの前で最後の布を、妻がどんなに懇願しても許さず、見ず知らずの酔客にとらせてしまったのです。

「このときが……やはり……一番」

妻が、その時のフォトを示します。やはり——と私は思いました。フェザーで勵られるよりも、私達に脱がされるときよりも、見ず知らずの男の目に晒されたときが、最も羞恥を感じたといえます。なぜか——それは。

「だって、あなたたちが、見つめているんですもの」

こう言って妻は、私にしなだれかかって、顔を伏せたものです。

長谷川氏の別荘を出てからあとの私達の模様を御報告申し上げるのが、私の義務と云うものでございましょう。

二

念願を遂げた夜というものは、みな、そうなのでございましょうか。期待した以上に紳士的に振舞う長谷川氏の言動に、私はすっかり安心と疲労を覚えて蒲団に入るなり眠ってしまい、妻に起こされたときにはもう正午近くになっておりました。朝風呂にすでに入ったのでしよう、うす化粧をした妻と三河君、それに長谷川氏と朝食をとったあと、午後五時場所は広島市紙屋町近くの広極座という演劇場の前で——という約束で、私達夫婦は長谷川氏宅を出ました。

長谷川氏の奥さんが最後まで顔を見せなかったのが気がかりでしたが、三河君も、まだ一度しかあったことがないとの事で、いささか安心。その三河君の案内で、広島市内を車で見て廻ったあと、正五時に、そこだけ一角数十軒の商店がT字型に並んでいる広極商店街の中央、広極座の前に車をつけました。その入口には、すでに長谷川氏と今ひとり瀟洒な身なりの一見、銀行家タイプの男が立っていました。

絹田氏でした。私に手をさしのべて、ニコニコと握手を求

めた絹田氏は、私のかげにかくれるように立っている妻をみて、

「お美しい……」

と云ったものです。妻が美しいとほめられることは、夫として悪い気持は致しません。長谷川氏を雁治郎タイプとすれば、絹田氏は三橋達也に似ていると申せましょう。

私達は、ストリップの宣伝ビラのがあっている広極座から西に抜けて、広島西警察署横にとまっているクライスラーにのり込みました。運転は三河君です。どうやら三河君、今日も最後までつき合うつもりらしく、先程も流川通りを歩いているとき、少しおくれた妻にきこえないように、

「奥さん、よい匂いをしてますね」

と、意味ありげに言ったのです。返事にとまどう私に、

「肌の匂いというものはいいものだ」

と、傍若無人な言葉を吐き、一瞬、私をむうつとさせました。（この若僧が、何を云う！）と。だが……三河君はすでに妻のあらゆる羞恥の姿を見ているのです。いや、それ所ではありません。……今から一体どこへ行こうとしているのでしょうか。三河君の言葉でムツとする筋合いはないのでした。そのことを

フツと助手席にすわって思い出した私は、バック・ミラーを見上げました。長谷川氏と絹田氏の間で、妻はちいさくなって両氏の間に、「ハア」とか「いいえ」とか答えています。無性に妻がかわいく思われて、何か声をかけてやりたく

「豊子、海田市とかいてあるよ、ほら」

と、山陽本線の、小さな駅を指さしたものです。

絹田氏の本宅は、海田市の山手の大きな邸宅のならんでいる街並みの中央、ひととき大きい五百坪はあろうかと思われる古い歴史を持つてゐるらしい建物でした。

「慶応三年に建てたらしいのですが、今でもびくともしません。勿論、原爆をまともにうけたら処置なしですが、海田市はあの日、影響なしでして……」

門を入ると、松や、楠、それに竹林があり建仁寺垣の向うに、ひととき大きな土蔵がふたつ――。

（あそこだな、拷問部屋は……）

ひと目みてそう思った私は、ためらう妻の肩を押すようにして、広い玄関から座敷に上りました。あけはなれた広い部屋には、す

でに夕食が準備され、女中が二人、手なれた調子でビールの栓をぬいています。

約一時間ばかり、世間話に花がさき、旧家にふさわしい時代がかった時計が、七時をつた時には紫檀の大テーブルの上には、もう一ダースもビールの空瓶が並んでいました。

女中が退ったときを見はからって、

「じゃあ、絹田さん……」

と長谷川氏がまず云い、飲むと蒼くなるたちなの少しも酔った風のない絹田氏が、三河君のさすビールを一息にのみ干すと、

「奥さん、バスを」

まるで、命令するような口調でした。

もうこれからは私が独裁者だ――とでもいう威圧感とその語調に感じられ、私は酔い心地のさめる思い。（まだおそくはない。拒絶することもできる。帰ることも……）とチラ

ッと後悔じみた想念が閃いたことは事実です。その私の心のうちを見すかしたように、絹田氏が立ち上ると文箱をひらき、とり出したのは錦絵――「芳年」と署名された、幕末の浮世絵師のものした「女体拷問図」です。

私は今まで写真を主に愛好していました。

「画」など、たいしたものではないと――ところが、それはまったく新しい美しさに輝い

ている画でございました。責められる女の美しさが、そこはかとなくにじみでている何とも表現できない魅力溢れる「画」だったので

「今まで、この絵の中のような女が欲しいと思っていました。奥さんが、この美女にもっとも近いのです……」

十六枚の錦絵を繰っていく私に、絹田氏はさきほどとはうって変った、哀願するような口調でいいました。

「私はこの女に似ている人が、実際にこのように拷問される所が見たいのです」

その執念にも似た語調のまえには、私は妻に目顔で「行け！」と合図するほかはなかったのです。Sの愛好者だけに通じる気持――絹田氏の気持は、私にもイヤと言うほどよくわかるのです。

拷問部屋にいくことを承知してここまで従ってきた妻も、一目この画をみて、ためらっている様子……私は再び目で合図をし、三河君が、

「奥さん、ハッスルして下さいよ。さあ、さあ、いったり、いったり！」

と、おどけるように叫びました。

三

妻が入浴するために立ち去ってから、どの位の時間がたったでしょう。「女体拷問図」に見とれてしまった私の耳に、

「もう、始まってますよ、奥さんの拷問は」「何ですって……」

と、おおむ返しに尋ねる私に長谷川氏が、

「ハッハッハ。絹田氏は、人が悪い」

「さあ、行きましょう」

と、三河君が云い、

「奥さんが立って三十四分。もう準備はできてるはず……ひょっとすると、もうしばらくしているかも……」

ググッとビールをあおり、さらに一杯手酌でのんだ私は、三人のあとについて建仁寺垣をまわると、土蔵に歩いていきました。「芳年」の錦絵は三河君がもっています。

土蔵の扉は、二分かた開いていました。

それに手をかけながら、

「私の所には、わるい書生がいましたね」

と、絹田氏。

「書生ですか、あれが。やくざという方が似合いですよ」

と長谷川氏がいうと、

「ハッハッハ……あれでも、れっきとしたH商大の学生です。勿論随分と私にしこまれてはおりますが……なあ、三河君」

「まったく、まったく！」

大笑いのうちに、重くきしんで土蔵の扉があき、先ず目に入ったのは二階に上る梯子と格子戸、その向うの行灯でございました。

その行灯——行灯型のスタンドのかげに白くたゆたうものがあり、大きな影がひとつうごきました。男の影です。その影が、

「社長！ 少し早すぎますよ。まだ準備はできてません」

「あと十分」

と、くらやみから別の声。

「……あなた！」

白くたゆたっていたのは豊子でした。消え入りそうな声で叫びます。思わずかけよううとして、私は格子にいやと言うほど頭をぶっつけてしまった事でございます。

「落ちついて、落ちついて」

と、格子の一角にある潜り戸を押した長谷川氏は、私の手をひくようにして、行灯のそばのソファに腰をおろさせました。向い側には絹田氏と三河君。

「よかろう」

と絹田氏が誰にともなく云った途端、

目の前の行灯の光のなかに、よろけるように突き出されてきたのは、豊子でした。

無論——衣類らしいものはなかったのでございます。むらさきのふちどりのある、夫である私もまだ見たことのない薄いパンティをつけているだけ。……うづくまる豊子の縄尻に若い男の手がかかり、正座させられた上半身には、みごとな菱縄がかけられておりまして。

「いい縄さばきですな。さては奥さま、神妙にお縄をうけられましたな」

という長谷川氏に、相づちをうつように、

「いつもは、こうはいかないな。どうしてもあばれたりいやがったりして、縄がずれるものですが、これはこれは、よほど奥さん、すなおに両手を後に廻された——こりゃあ一番最初の縄は私がかけてみたかった」

と三河君。ごくんと生唾をのみ込みます。

「おあらためといてましてな、先ず最初にごでとっくりと拝見して、そのあと二階の方で、堪能して頂くというのが私の趣味。いつもは学生さんたちにやって、もらうのです今日は特別」

とたち上った絹田氏。縄尻がするすると上

にのびて、ライトが天井から一筋、さあっとさし込む。

「拷問部屋での最初のおあらため——これがすんで、やっと私達の仲間……私が剥ぎとりたいのだが」

と、そこまで云ったとき、

「私が……」

と三河君がとび出し、長谷川氏も豊子の背中に手をかけて、

「絹田さん。ここはひとつ私達二人に」

と、絹田氏をソファの上に押しもどす。

「アッアッ……あなた！」

と豊子が、呻きました。

「いまさら、アッアッもないでしょう」

と三河君は、いたぶっているのになぐさめているのか分らぬ調子でパンティに手をかけました。そして三河君が右足をもって、小さな布きれをぽいと投げすててしまいました。

この間、二度ばかり、フラッシュがたかれました。最初に申し上げました、百余枚の写真のなかの一枚——妻が、「エッチね」と私に云ったあの写真が、この時のものだったのでございます。撮影したのは二人の学生でございますいました。

「お美しいかたじゃ」

大きく両肩でいきをした絹田氏は、耳たぶまでまっかにしている豊子に近寄ると、なれた手付きで縄をとき、

「さあ、今から、あなたがスター、大スターです。お着替えをなさって下さい」

と、二人の学生に、目顔で示し、私をうながして、梯子をのぼっていきます。

うづくまっている妻に、かけようとする私に、長谷川氏が、

「大丈夫、大丈夫、あとは、あの二人にまかせて、私達は、私達で」

と、おし上げてしまったのでございます。

四

土蔵の二階は、ふたつにきられていました。梯子をのぼった途端、目に入ったのは、徳川時代のお白洲を思わせる拷問道具の数々でした。さすまた、そでがらみ、突棒、熊手……十数本の手垢に油ぎった十手、各種の御用提灯、そのほか名も知らぬ小道具が、壁にぎっしりと並べられているのです。中央に、一尺高く一間四方くらいの台。そのまわりに四つの赤いソファ。天井を一本の大きな梁がはしり、それにはりめぐらされたたるきにライトや、鎖や、麻縄が、垂れ下って、まる

で、現代と、中世を混淆したような、異様なムードが漂っていたではありませんか。

「こちらへ、どうぞ」

絹田氏は私達をその部屋の向う、格子とカーテンでしきられた奥へと導き入れました。十畳くらいの広さ、一段高く舞台がしつらえられてあり、酒肴が円卓の上にすでに並んでいます。

「まず、一杯」

さされたビールをのみ干す私に絹田氏は、「どんなタイプがお好みかはっきりしなかったのですが、ともかく私達の仲間うちではスターのひとりをお目にかけましょう。名は映子といいまして、年と職業は、云わない方がいいでしょう」

「よい子ですよ。奥さんほどじゃあないが」

と三河君がつけ加えます。

私達は四人なのに、七・八人分の酒肴が用意されてあるのをいぶかりながらも、元来が酒好きの私、さされるままに四・五杯ものんだ時、梯子をのぼる音がして、顔を見せたのは、書生のひとり島田君でした。と、

「今日は、社長！」

と明るい声がして、顔をのぞかせたのが映子とよばれる女の子でした。どこか純日本風

のムードを漂わせていますが、言葉と動作は近代的で、長谷川氏のさし出すビールをぐうーっとひとのみする。

「今夜は誰が、悪役なの……三河さんじゃあなさそうだし、どうやらあなたね」

と、初対面の私にからになったコップをさし出すと、

「さあて、よろしく頼むわね」

と、黄色い上衣を脱ぎすて、舞台の上に上ると腕をうしろに廻すのでした。

あっけにとられていた私に、

「どうぞ、どうぞ。あなたの縄さばきをひとつ、拝見させて頂きますので」

絹田氏が、麻縄を私の膝の上に投げ出しました。豊子の方がチラッと頭をよぎりましたが、事ここに至ってためらうは男の恥。私は一足とびに舞台に上ると、映子を縛り始めました。

若い弾力のある肌でございました。

絹田氏の説明によると、この近郊のS愛好者で著名な人士二十名ほどが、定期的に会合を開き、数人のM女性を雇っているとの事。営利を目的としない趣味の会とかで、まさに理想的なサークルと申せましょう。

映子のスカートを脱がせ、シユミーズの上

半身を剥ぎとって三度目の縄がけをしていた時、妻が入ってきました。今朝と同じ和服姿でした。私のしぐさに驚くのを三河君が目顔で制して自分のそばに坐らせ、早速ビールを注いでおります。

「奥さんは、真打ち。あとでゆっくりと御披露ねがわねばなりません。まずは、ごゆるりと」

絹田氏はそう言うのと、舞台に上って来て私の手助けを始めました。負けじと上りこんで来た長谷川氏が、とうとう映子のパンティに手をかけます。

演技なのか、真剣なのか。とたんに映子が暴れまわります。

これからあと、こまごまと映子の縛りを述べるのは、又、別の機会にいたしましょう。なぜなら、映子はあくまで前座なのだし、私は、妻がはじめて人前で縛られた時の記憶を忘れぬうちに文章にかきとめることを目的にしているのでございますから。

映子の縛りに熱中してるうちに、客は五人ふえて、私も含めて男性が九人になっていました。女は二人。それにちょいちょい顔を出す島田と柳沢両君に女中達。

映子が、のろのろとシユミーズをつけ、服をきているのをよそに、絹田氏は、

「では、愈々、奥さまの出番ですな」

と言ひ、手みじかにみんなを紹介します。

私達夫婦のことは、ただ「F氏夫婦」とだけ云ったのですが、なぜか私は、その瞬間顔のほてってくるのを止めようがありませんでした。ここにいる八人の男達は、妻も愛人も連れてきておりません。私だけが妻を伴っており、その妻を今から犠牲に捧げようとしているのです。いまさらのように羞恥の念がおそってきたのです。豊子も同じ思いなのでしょう、男達の好奇の視線を浴びて顔をうつむけ私の左手をぎゅーっとにぎりしめたままなのです。

「じゃあ、最初は、着衣のままです」

絹田氏が妻の肩に手をかけ、三河君がゴクンと生唾をのみこむと、真新しい木綿縄を手になち上りました。

五

もうどうともなれ——という感情が私の酔った頭を支配し、ビールをさらに二杯たてつづけにのみ干させました。どうともなれとは無責任のようでございます。私はこうなるこ

とを予想して、ここまでできたのでございますから、この場に及んでしたばたすることは何ひとつないのでございます。しかし、この複雑な心境は、愛する妻を人前に曝けだした夫のみにわかる、感情のうごきなのでございます。どうともなれ——とは、決して捨鉢な感じではなく、自分もそのなかに飛び込んでゆくという、悲壮(?)な決意のあらわれ。妻が裸にされるならこちらでも……という気持の表現に近いと申せますでしょう。

いずれにしても、読者諸賢の大部分にはお判りにならないことでしょう。いや……ぐちを云ってるときではございません。私はありのままを、なるべく主観をさけて報告するためにペンを執っているのですから。

目の前では妻が、三河君の手で縛られています。男たちはビールをのみ、何かささやきながらそれをみています。

縄は、高手小手縛りでございました。ぐいと、とめ縄をした三河君は舞台をおります。

次は長谷川氏。手ぎわよく縄をほどくと、稚子縄をかけていきます。昔、高貴の少年を縛るに用いたという縄のかけかたでございます。

す。目を閉じたまま、豊子はなすがままになっていきます。とどめを腰のあたりでした長谷川氏が舞台をおりようとする、

「色気、色気！」

酔った声、

「まず、裸にせんかい、絹田君。もう十時をすぎとる。夜は、短かいんじゃ」

白髪頭の六十年配の男でした。

「そう、そう。せめて、湯文字いちまいにせんにゃあ」

と、これは若い声でありました。

その声が耳に入ったのでしよう、豊子のうつむいた顔に、ぽお——とあかみがさすのがありありとわかりました。

うなずく絹田氏も相当に酔っています。

「では、どなたの順番でしたかな、今宵の与力役は？」

「儂じゃ」

と進み出たのは、さっき「裸にせい」と叫んだばかりの白髪頭、田川氏でした。

あとで知ったことですが、このグループには、奉行、与力、同心、岡っ引きの四役があり、順繰りに夫々のつとめを楽しむようになっていたとの事でした。奉行は「女」を紹介した者——今夜は絹田氏——がなり、おあら

ための特権とショー終了後の独占権を持つ。

与力は腰のもののいち枚をのこして裸にする権利。岡っ引きはその布をはぎとる特権。そして二人の同心が拷問役に廻る。勿論これは形だけに終ると云うのですが、ショーの最初のうちはこの特権が守られるようでした。

「田川さんか……はたして、うまく今夜の任務を果たすことができますかな」

「何を云う、絹田さん。この道のベテランに向って」

「なにせ、今夜のヒロインは、縄の経験豊かな人妻、ちよつとやさつとでは、恥かしがったり悲鳴をあげたりはしませんぞ」

「まかせて、もらおう」

つかつかと、舞台に近づいた田川氏という見ず知らずの老人は、妻の縄尻をとると、

「奥さん、では拷問を始めますぞ。その前にお白洲へ出てもらおう」

といい、縄尻を、ひき上げました。

「……いたっ！」

顔をゆがけた妻は、よろよろとたち上ると円卓のそばを、格子の潜戸をぬけて、周囲の壁に所せましと責道具の並べられてある部屋の中央、一尺高い台の上に正座させられ、男達がこれに続いて、台のまはりのソファに腰

をおろしました。

「あなたは、そちら！」

一番最後に潜戸を抜けようとする私に、田川氏はこともなげに云うと、私を格子のなか今までビールをのんでいた部屋に押しかけました。

「近くにいると、奥さまが恥かしがるでしょう。それに君だって……わかるでしょう。そちらの部屋から、格子ごしにちらりちらりと御覧なさい」

と云われて、私には一言もありませんでした。先程から、ものを言わないだけでなく目を閉じたままの妻が何を考えているのか——ふと（私を恨んでいるのでは）という想念が私をおそいました。これもまた、今更どうしようもないのです。私はビールの大ジョッキを手に、格子にすがりつくようにして、二メートル先の台の上で展開されるショーをみるほかはなかったのでございます。

まったくバカな夫と申せましょう。私は異様な興奮におそわれてさえたのです。

台上では何が行われているのか田川氏がわざとこちら側に背をむけて両手をいそがしそうに動かしています。ときどき、帯のはしや

細紐のはし、縄などが見えて、

「ウッ！ イ、いや、いやです」

と妻が叫び、あらわになった左脚が視野にとび込み、どこをどうされたのか、

「キャッ！」

という悲鳴——。それもほんの二、三分の事でございました。

「ほれ、御主人様。これが奥さまの姿」

と、田川氏が横に廻ると、始めて妻の全身が見えました。

好んで私がつけさせているうすもも色の湯文字ひとつ。左の膝を立てて、蹲まっていたのでございます。

「奥さま、両手を神妙に後に」

今夜の同心のひとりなのでしよう。和服姿の男が、壁から十手を外すと妻の肩を二度たたきました。

ぴくっと、全身をふるわせた瞬間、

「あなた……」

と、妻は、大きな眼をひらいて私を見上げましたが、それと同時に三河君——彼がいまひとりの同心役に当たっていたのです——が右手首をとり、背後にねじ上げました。豊子の身体が半回転して湯文字がめくれ上り、それを反射的になおそうとする左手を、和服の男

が押えて、

「よっこらしょ」

と、正座させてしまったのでございます。

和服の男——忘れもしません。名を関弘次氏 K 町出身の政治家。

その関氏が、朱房の十手を口にくわえ、左手から繰り出した捕縄を豊子の左手首に二巻き、三河君のさし出す右手首と合せて、くるくるとひとつにする。と左に廻して左腕に二巻き、のしかかるようにして乳房の下をとおして右の二の腕へ、そこでぐいっとひとしぼりして、腕に喰い込むようにまきつけると、背後の右手首にとどめをして、いま一度、今度は乳房の上をとおして、ぐいぐいと高手小手に縄をかけてしまったのでございます。十手を口から外した関氏は、その口をそのまま右肩に、そしてうなじへと寄せてゆきます。

「あっ……ああ、や、やめて！」

この叫びに、耳をかすものはありませんでした。四方から伸びた手が、白布の敷かれた台上で妻の身体を「人」の字型に、押し広げてしまったのです。

「いよいよ、私の出番ですな」

岡っ引き役の貴島氏でした。三十八歳、土建業。もうすっかり酔っぱらっていて、たち

上ると、ふらふらする足取りで近寄り、真紅の紐をふるえる指で解こうとしました。

「いや、いやよ。やめて！」

妻は、泣き声に近い叫びをあげました。その真剣さに、ちらっと、ためらいの色を貴島氏が見せたとき、

「ハッハッハ……奥さんは人妻。普通ではおいやでしょう。ひとつ自分から、お願いしますと云わせますかな」

やはり絹田氏でした。田川氏を押しつけるように妻の背後に廻ると、氏独得の責めが始められたのです。しかも絶えず耳元へ何事かささやきつづけているのです。

(女の身体って、変なものね)——あとで、

妻が申しました。絹田氏の責めは実に巧妙でささやかれる言葉と共に一種の催眠術とでも云うのでしょうか、はりつめていた気持ちがいっつのまにか陶醉に変わっていったと云うのです。何の事はありません、私がハラハラしている間に、妻は縄の痛さも羞恥もどこかに忘れて楽しんでいたのでございます。だが、それはあとで知らされたこと。目の前で白い肌をぴくぴくとけいれんさせ、あかい唇をあけて喘いでいる豊子の姿は、拷問をうけて、苦悶と死にもの狂いで斗っている女以外の何も

でもありませんでした。

やがて、貴島氏が

「もう、よかろうて」

といい、絹田氏がうなずいてたち上りました。

妻は無抵抗だったのでございます。無抵抗で、つまり失神に近い状態でうすも色の、身を守る最後の布を貴島氏の手に渡してしまっただけでございます。私は脳が一度に溶け去ってしまったような虚脱感に襲われてしまいました。

そして八人の、合せて十六本の手が同時に豊子に襲いかかるように乱舞するさまを、まるでスクリーンにうつったもののように眺めるだけだったのでございます。

六

(妻とってはいけない。ひとりの女、女盛りの女だと思え……)

私は、何度も自分に言いかけました。

三河君と関氏は、鬼のような同心になりきって拷問に熱中し始めました。

「芳年」の「女体拷問図」を片手に、田川氏が次々とポーズを取らせていきます。

海老責め、吊り責め、そろばん責め、逆海

老責め、あぐら縛り、鉄砲責め……。

妻は抵抗らしい抵抗もしめさず、男達のがすがままになっていきます。時々、

「あっ！ あう！」

という呻きが唇から洩れますが、それは一層男達を挑発する結果になるだけだったのでございます。

何時間経ったことでしょう。三河君が嘆賞していた妻の体臭が、土蔵の二階中に甘ずっぱく充満した頃、ふとざわめきがしずまり、男達の目が一点に集まりました。

私も、そのひとりであったことを、ここに告白しなければなりません。

それは、美しくも妖しい、光景でございました。

台上、大の字に、右手を長谷川氏、左腕を田川氏に持たれ、右足首を三河君に、左足首を、いつの間にかシヨーに加わっていた柳沢君に押えられ、豊満な腰の下に脇息をあてがわれた妻は、鮮かな曲線美を描き出していました。

関氏の手には鷺鳥の羽がにぎられ、その白い羽が徐々に舞い始め、それにつれて妻は十本の足の指をひきつらせ、手の指を大きく開いて、何度か、

「あう、あう……」

「あう、や、め、て……やめて」

と、呻いてはいましたが、その声は、甘くやるせないため息に似ています。

「奥さん、お美しい……」

耐えきれなくなったように絹田氏が、妻の頭をかき抱くと、顔中にキスを始めます。

「ペッ！ ペッ……」

と、最初は、それをさけようと頭をふり、キスされた唇から、さもきたないものを吐き出すように、唾していた妻も、ついには抵抗をやめ、真白い歯並みを見せて、じっとしているようになりました。

「奥さん！」

と関氏が、せきこんだ口調で、

「奥さん、聞えてたら返事をなさい。私が誰か、判りますか、奥さん、返事を……」

「ええ、ええ……」

「ええ、ええ——ではわかりません。今、奥さんをこうして責めているのが、誰か、名前を仰言い！ 仰言らないと、ほれ、ほれ！」

「あら！」

妻の全身が反り、よこ腹が大きく波立ち、

「せ、せきさん……でしょう」

と、呻く。

「そうです。よくお聞きなさい。女は、男と違う。男は、縛りあげてぶったたきのめすほかないけど、女は、女の拷問はまた別。判りますね。その拷問というのは？ 答えなさい奥さん……」

「わ、わかりませんわ。そ、そんなこと」

「いま、奥さんが受けているのが、女に対する本当の拷問ですぞ」

といいながら、関氏の責めは続きました。

脇息の上で、海老のように二度三度躍った妻は、やるせないような呻きと共に、抵抗力も尽きたとみえ、全身の力をぬいてしまいました。十一人の男たちが居ながら、しばらくの間は、呼吸ひとつきこえなかったのでございました。

「御苦労でした。奥さん」

「結構、結構」

などと皆が口々に云い、どうやらこの一幕は終わったらしいのでした。

関氏がやさしく妻の両肩を抱きます。

夫である私は、完全に無視されつづけていました。

柳沢君の持ってきたジュースを、のみ干した妻が、やっと、私の方を見ました。

妻の身体が一瞬くねくねと動きました。そ

れは、うらむような、甘えるような、羞かしかるような。そうです、新婚旅行第一夜を思わせるポーズでございました。

「Fさん、こちらに、いらっしやいませんか」

与力役の田川氏が、妻と燃えるような視線をかわしている私によびかけました。ようやく私の存在を思い出してくれたようでございます。

七

「奥さん、両手をうしろに」

という関氏の言葉に、妻はもう何のためらいも見せず、両手首を後に廻しました。

フラッシュが閃めきます。

関氏がその両手首に縄をかけている間に、正座した妻の前面では三河君が首縄をかけ、本格的な菱縄縛りへと移っていきます。

「奥さん。どうです、御気分は？」

「ここは、こう横に廻して」

「旦那さまの縄さばきと、どちらが上手ですか」

男たちは妻に勝手なことを質問し、妻もまた、低い声ではありましたが、あれこれと答えていました。

妻を、不貞な女などと思わないで下さい。

たとえどんな女性でも、こうなればおそらく妻と同じようになるでしょうから。そして妻を、このように、飼育したのは男であり、夫である私なのですから。

菱縄がすむと、けん縄、おんな縄、ひっくり縄……と、縄がけのすべてが、妻をモデルに行われたのです。そのひとつひとつを聞いていくだけで、数十枚の原稿用紙が必要でございました。

やがて、奉行の絹田氏の命令で、いままで見捨てられていた映子と島田君が、かりの夫婦ということになり、土蔵の下で拷問をうけ始めました。

それを、妻の豊子は十字架の上で、眺めさせられたのでございました。

やがて、絹田氏が、

「皆さん。この女。厳罰に処すべきだとは思いませんか」

といい始めました。

「そうだ！ そうだ！」

と三河君が叫び、

「もっとひどい拷問をしろ。妻の罪は夫の罪

F氏と一しよに責められるべきだ」

と、関氏がつけ加えました。

「それともこの奥さん、御主人はいや、誰かよその人となら……なんて言いだすんじゃないかな。ひとつ、どうです、奥さん自身にきいてみては」

と、これは、田川氏。

「よかろう」

と、神妙に、貴島氏に縄尻を持たれ、ひきすえられている妻に、絹田氏が、

「奥さん、拷問をうけますね」

「……ええ……」

と、顔をあげてかすかにうなづくのを、
「ええ……では、わからないな。受けるなら受けるとはっきり仰言い」

貴島氏の十手が、胸にくいこむ縄目をこじあげました。

「受、受けますわ。拷——問を」

「誰と一しよに、どんな、拷問を！」

貴君氏の声に、

「僕と、どうです、奥さん」

と云ったのは、柳沢君でした。

「僕、奥さんとなら、拷問されてみたい」

「……いや」

はっきりと妻は、頭をよこにふると、

「私、神妙に拷問をお受けしますわ。相手は夫」

といったことでもございました。

私にとって、これは、予想されたことでもございました。

「ハッハッハ……。柳沢君。やっぱりふられたね」

と云うみな笑いのなかで、私は上着とズボンを脱ぎとります。

その時でした、

「御主人を全裸にするのですか、奥さん」

と、関氏、

「もし、全裸にさせなくなったら、奥さんが、今から私達のどんなにひどい命令にでも従うこと。どちらをえらびますか」

関氏が、含み笑いをしながらいいました。

「夫を許して……あげて。代りに私が、私が出来るだけのことを……」

「出来るだけじゃあいけない、はっきりと、

私達の命令をきくと仰言い！」

妻は、とうとう、そのとおり言わせられたのでございました。

早速、妻の縄がとかれ、揮ひとつを許された私と妻は、台上に並んですわりました。両手首をうしろに廻し、胸をはった妻は、

「関さん、三河さん。お縄、神妙に受けさせて頂きます」

と、いったことでした。

それから私達夫婦が、どんなに責められたか。それは「日本拷問刑罰史」という映画のなかの江戸時代末期の、うら若い強盗夫婦のまじめな姿態によく似ていたことでしょう。

しかも、あの映画の女優さんは、台詞らしい台詞もなく、ただ肉体上の苦痛を甘受するだけでよかったのでございますが、妻の場合は、その道のベテランである絹田氏を始めとする男達から、女の羞恥のすべてを口に出しその豊富な肉体で示すことを余儀なくされてしまったのでございます。

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

時計が四時を示し、やっとショーは終りました。田川氏を始め五人の人々が、それぞれ名残り惜し気に去ってゆき、映子も持前の明るい笑顔をを見せて関氏とともに去っていきました。

書生の島田君と柳沢君も部屋に引きあげ、残ったのは、私達四人。

絹田氏が、奉行の特権——ショー終了後の独占権を主張。私達がそれに反対し、結局は四人一緒にということと、格子にあぐら縛りのままの妻を前に酒をのみ直し、妻にものませ、やっとバスに入ったのが、あけ方の頃でございました。

「是非、もう一度、頼みます」

正午、絹田家を辞し去ろうとする私達夫婦に、絹田氏は、懇願するように何度もくり返しました。

その声を背後に、三河君の運転する車に長谷川氏と乗った私達夫婦は、疲れも忘れてうなずき合ったことでした。

「奥さん。では、近いうちに」

と、駅まで見送ってくれた三河君がいい、長谷川氏が、

「是非、是非……」

と、手をふりました。

長谷川氏の姿が、車のカーブと同時に視界から消え、私は思わず、ホーツと大きなため息に似た息を吐いていました。

三河君は気付いたかどうか。

当然、隣りに居る妻は気がついていないはずですが、私が顔を向けても、じっとうつむいたまま、眼を閉じていました。

何を考え、何を想っているのか。私はわかるような、わからないような気持で、美しい妻の横顔を見詰めたものでございます。

どうやら、私は、私の義務をはたしたようでございます。私が、この手記をかくに当たって、もっとも苦勞した点は、嫉妬心をすて去るということでした。もうこれで、賢明な皆さまには、お判りになって頂けると思います。

嫉妬心を捨てなければ、ダブル・プレーのだいご味は、味わえないもののようにございます。

まだ、かき残していることもあり、新しい冒険の体験もお知らせしたいのですが、それは、また、いつか、機会を見てにいたしましょう。

(カット・獅子内謙画)

千代は、そんな事を云って、それで上氣した夫人の頬を突き、形のいい優雅な鼻のあたりを、くすぐるのだ。

「ああ、千代さん。お、お願い——」

「——もう、が、がまんが出来ないの。ね、お願いっ」

「ホホホ。あわてる乞食は何かっていうじやありませんか。もう少し、準備工作をしてからよ」

千代は、そう意地悪く云って、そっと夫人の背後に廻ると、うしろから夫人の豊満な二つの胸の隆起に手をかけた。

「ひ、ひどいわ。ああ、そんな——」

夫人は美しい顔を歪めて狼狽を示す。

ゆっくりとした動作で、千代が夫人の乳房をなぶり出したのを見た和枝と葉子は、それに調子を合わせるよう、夫人のムチムチと引き緊った肉づきのいい太腿や、内腿を陰湿にくすぐり始めた。

静子夫人の口から洩れるすすり泣きも、緊縛された裸身をくなくと揺するその身悶えも、一層、甘美で、そして次第に狂気めいたものになり始める。

近くでそれを凝視している二人のシスター

ボーイは静子夫人の裸身の美しさと三人の悪女にいたがられて、のたうつ夫人の官能をそり立てる身悶えに、全身がしびれたようになってしまった。

「——千、千代さん」

静子夫人は、息もたえだえになって呻くように、背後から乳房をいたぶる千代に声をかけた。

「——静子は、もう決して、貴女のおっしゃる事に抗いはいないわ。ですから、ね、お願い——ああ、ほんとに、静子、気が、気が狂いそう——」

そのように、のたうち、齒を噛み鳴らし、狂ったように哀願する静子夫人を千代は頼もしげに見ながら、

「その言葉を忘れちゃ駄目よ」

と北叟笑んで、陶然とした面持で傍に突っ立っている二人のシスターボーイに眼を向けるのだった。

「一寸、あんた達、ぼんやりしていないで少し手伝って頂戴よ」

ふっと我に返った春太郎と夏次郎はニヤリとし、

「勿論、喜こんで、奥様のお手伝いをさせて頂きますわ」

と、近寄ってくる。

「違うわよ。あんた達、銀子達を探して桂子嬢をここへ連れて来て頂戴。銀子に云えばわかるわよ」

それを耳にすると、薄く眼を閉じたまま、全身を揺さぶる火のようなものに耐えていた静子夫人であったが、はっとしたように顔を上げた。

「おや、何も驚く事はないじゃない。私のする事に一切文句は云わないで従うという約束だったわね」

「でも、桂子を、どうしてここへ——」

「元、遠山家の若奥様が、元、遠山家の女中の私に、どのように親切にされているか、それを桂子嬢にはっきり目撃させるのよ。桂子嬢がここへ来れば、奥様の悩みは解決してあげるわ」

静子夫人は、涙でうるんだ上の空のような潤んだ瞳をしばたきながら、悪女の声を物悲しげに聞いている。

「——ああ——」

と、夫人は、再び、錐でえぐるように下半身にこみ上って来た痒感に美しい顔を歪めるのだった。

「——千代さん、もう我慢が出来ないわ。欲

しい。欲しいのよ」

「駄目駄目。いくらいったって、桂子がここへ来るまでお預けよ」

千代は、箱の中身のもので、夫人の乳房を押したり、ヘソをくすぐったりして、笑いこけるのだ。

——桂子が、春太郎と夏次郎に引き立てられて部屋に入って来、床の間の柱に立位で縛りつけられるまでには、ほんの十数分ぐらしかかからなかったが、その間もずっと三人の鬼女の淫靡ないたぶりを心身ともに加えられた静子夫人は、その乳白色の全身にねっとり脂肪を浮かべ、ゆるやかに美しい曲線を描いた腹部から腰部にかけて、時々、ブルブルと痙攣させ、正に氣息奄々といった状態に追いこまれていた。

それで桂子が床の間の柱にがちりとつながれて、真正面から対峙する形に仕組まれても、もう、羞恥や屈辱を感じる余裕もない静子夫人である。

「このお嬢さん、これから文夫さんと夫婦関係にしなきゃならないから、用事がすめばすぐに返えしてくれるよう銀子さんが云ってましたわ」

春太郎と夏次郎は、千代に指示された通り

桂子を床の間に縛りつけると、思い出したように、そう云った。

「わかったわよ」

千代は、含み笑いしながら、床柱にかちり体をつながれた桂子の顔を面白そうに見つめた。

連日のおぞましい調教のため、桂子は、人間の意志を喪失したように暗く沈んだ表情で眼の前に緊縛された身を立たせている静子夫人へ悲しげな眼を向けている。

「桂子さん。静子を、静子を笑わないで。ネ笑っちゃいやよ」

静子夫人は、訴えるような陰影を湛えた眼で桂子を見、その次には、全身を揺さぶるような痒痛に顔を仰向かせ、齒ぎしりながら泣くように呟くのだった。

千代は、道具で、夫人のヘソをたたきながら桂子の方を向いて云った。

「ねえ、あなたどう思う？ こんなものを使ってくれといって、奥様ったらうるさく催促するのよ。全く嫌な感じ」

千代は、さも困ったわというようにそっと当てる、夫人は、火のような一心になってもう前後の考えもなく身をよじらすよう押しつけてくる。さっと、手を引いた千代は、ぶ

っと吹き出し、

「まあ、はしたない。元、遠山財閥の令夫人という肩書が泣きますわよ」

葉子や和枝と顔を見合わせて笑い合うのだった。

静子夫人は、血走った思いで、衝動的に受入れようとあせった自分の浅ましさが死にたい位に羞しく、さっと上気した顔を横へそらせ、狂おしいばかりの涕泣を口から発して、肩まで慄わせるのである。

「少しずつ悩みは解いてあげるわ。あわてちゃ駄目」

千代はそういつて、道具を葉子に預け、指で薄絹をなぜるような愛撫を加えては、じらしつづけるのだった。

全身を揺さぶるばかりの狂おしい痒み地獄に投げこまれた上に、憎みてもあまりある千代の淫靡な方法で、わざとらしい軽い刺戟を加えられる、この口惜しさは何に譬えればいいだろう。

「いかがでございましょう奥様。少しは気分が落着きました——」

千代は、愉快そうに夫人の上気した美しい顔を見上げながら、陰湿な刺戟を加えつづけるのだ。

「ああ、じ、じれったいわ」

静子夫人は、耐え切れなくなったよう赤らんだ頬を横に伏せて

「もっと、ねえ、お願い。強くしてー」

そう口走って夫人は、消え入るようにシクシクと、すすり泣く。

そんな光景を眼前にした桂子は、見てはならぬものを前にしたよう全身を硬化させ、固く眼を閉ざすのだった。

「一寸、眼を開けて、ちゃんと奥様の悦ぶ姿を見てなきゃ駄目よ。でないと、貴女も、この奥様と同じような中国の秘法を教わらなくちゃならないのよ」

千代は、夫人を愛撫しながら、顔をそむける桂子に浴びせる。

「桂子さん、お願い。静子のこの浅ましい姿を見ていて頂戴」

桂子が千代の云う事に抗えば、このあと自分に加えられる恐ろしい責めを、桂子も共受させられる事になるのだと思うと、夫人は、必死な思いで声をかけるのだ。

夫人の頼むような調子に、桂子が泣き濡れた瞳を開くと、千代は満足げにうなずいて再び、いたぶりを開始する。

夫人の生々しい呻きと、切れ切れに上ずっ

た涕泣とが更に高まっていく。

「私が遠山家の女中だった頃、奥様に対し、こんな事をしてあげるようになるなんて、夢にも思わなかったわ」

千代は、クスクス笑いながら、水底の柔かい藻草をかき廻すように、夫人をいたぶり続けるのだった。

「ホホホ、いやーな奥様」

やがて、千代と交代して、和枝が夫人をいたぶり始める。

熱い悦びと戦慄に、夫人は火柱のようになった全身をひきつったように慄かせながら、もう備えも構えも忘れて、女の生理のもろさを三人の悪女の巧みなリードで次から次へとさけ出して行く。

やがて、陶酔の火照りに全身汗だくとなつた夫人にマイクが当てられた。続いて、おぞましい攻撃が開始される。

火のように熱い吐息と舌足らずの悲鳴をあげながら、夫人は、口惜しくも、その羞しい涕泣を録音されていくのだ。

笠にかかって千代が責め、和枝がぴたりとマイクを押しつけると、夫人は、鬼女達の仕事にあたかも協力を示すかの如く、美しい曲線を描く量感のある双臀を躍動させ、官能

味を湛えた妖しい悩ましさを持つ太腿をくねらせて、死ぬよりつらい羞しい唄を、うたいつづけなければならぬのだ。

「ねえ、ねえ」

静子夫人は、何かを必死に耐えるようカチカチ歯を噛み合わせながら、何かにとり憑かれたよう激しく夫人を責めこんでいる千代に声をかけた。

「どうしたの」

千代は、攻撃の手をゆるめ、和枝と交代して立ち上ると、夫人の肩へ手をかけるようにした。

「静子、ーそうなの。ねえ、お願い、もう、もうこれ以上は、とても我慢出来ないわ」

桂子夫人は、こみ上って来た情感の昂まりに耐えられなくなったようねっとりとした瞳を千代に注いで、次に上気した頬を甘えかかるように千代の肩へ隠れさせていく。

千代は、口元を歪めて、夫人の美しい繊細な横顔に見入っていたが、衝動的に夫人の両頬を手で押さえ、その花びらのような唇に唇を押し当てた。どうして、そんな行動に出たのか千代は自分でもわからなくなったが、妖しいばかりの夫人の美貌にふと心を吸いとられたのだろう。

静子夫人は、もう完全に意志を喪失し、官能の炎に身をこがすだけの一種の軟体動物であつたから、そのまま、骨のない無抵抗さで千代に口を吸われ、熱い吐息を混ぜた甘い舌を千代に吸わせるのだった。

心も溶けるような甘い感触にしばらく浸つた千代は、やがて、静かに唇を離すと、ふと照れたような笑い方をして、

「もう少し、辛抱するのよ」

千代は、和枝と葉子に、夫人に対する責めを一旦中止させた。

責めの矛先が退くと、夫人は、ふと狼狽して、「ひ、ひどいわ。嫌よ、嫌っ」と甘えかかるように鼻を鳴らし、優美な腰を悶えさせた。再び、痒みがよみがえってきたのだ。寸前に責めを中断された口惜しさ故か、柔軟な白い肩を慄かせてシクシクとすすり上げる。

品よくアップに巻き上げられた黒髪の珊瑚玉の簪が夫人の嗚咽に合わせて、ブルブルと震えるのだ。口惜しくはあるが、この痒痛地獄から脱出するには、それに頼るより仕方のない静子夫人なのだ。

「このあとは、これを使って頂こうと思ひますのよ」

千代は、先程、夫人の眼の前にちらつかせ

た、紫の布をねじり合わせて作った一本の長い紐を取出した。

千代と葉子、和枝の三人は、金で作った大小二つの鈴の音をチリチリ鳴しつつ、夫人を取り囲み、素早く仕事にかかり出す。

臍の上下に紫の紐がかたく結ばれ、それを女達が股間へ通そうとすると、夫人は、頬を真っ赤にし、眼はかたく閉ざしたままだが、身体を宙に浮かすようにし、もはや痒痛には耐えられない風情で、はつきりと彼女達の仕事を受入れるべく努力しているのだ。

「ホホホ、ぴったりね」

千代は、夫人のうしろへ廻って、キリキリ紐をたぐり上げ、腰の紐に結びつけると、さも愉快そうに夫人の周囲を和枝と葉子と廻りながら、自分達の手で行った股間縛りを点検するのだった。

二つの鈴によって思い知らされる、狂おしいばかりの陰密で淫靡な屈辱と錯乱。静子夫人は、痺れとも悦びともつかぬ戦慄めいた口惜しさに優美な全身を慄わせている。

「さ、お尻を振るのよ。お待ちかねの痒み止めじゃないの」

千代は、わざと邪慳に夫人の紐をきびしく喰いこませた双臀を手でたたいて、ニヤリと

意地悪く笑うのだった。

「一寸待って。ね、猿轡を噛ましてみない」
押入れの中をこそごそやっていた和枝が、豆絞りの手拭を見つけ出して、千代に声をかける。

静子夫人にしてみれば、むしろ、猿轡で、顔を少しでも覆われる事を望んだ。眼前に立縛りされている桂子に、喜悦にのたうつ自分の表情や声を監視される事が何よりも辛いのだ。

「まあ、こうすると、ますます色っぽいわ。美人は何んでもよく似合うのね」

和枝は、夫人に豆絞りの手拭で猿轡をはめると、少し、離れた所に立って、しげしげと夫人の肢態を凝視する。

品よく巻かれた髪に、立人好みの珊瑚玉の簪。ミルク色に霞んだ艶やかな首筋には麻縄が巻かれ、つづいてそれは、見事な胸の隆起の上下を二巻き三巻きに緊め上げて、柔らかそうな腹部には紫の紐がかかり、それは縦縄となつて、息苦しいばかりにムチムチした乳白色の二つの太股の間を真一文字に割っている。そして、彫りの深い、美しい容貌の三分の一は豆絞りの猿轡で覆われたが高貴な感じの美しく緊まった鼻筋が、それで少し隠され

たものの、二重瞼の黒眼勝ちのきれいな瞳が色っぽく強調されて、夫人の容貌は、ふと可憐さも含めて、妖しいまでに美しく映えるのであった。とりわけ、無残にも、縦縄をかけられて深く溝を作り上げている、ムッチリとした腹部がバラ色に息づいて、眼に沁み入るように悩ましく、欲望の疼きを感じさせるのだ。

「まだ痒みは止らないんでしょ。さ、あとは自分で悩みを解くよ。大きくお尻を揺すってね」

千代はそう云って、和枝達と肩をたたき合って笑いこける。

静子夫人は、鬼女達に幾度も催促され、遂に、薄く眼を閉ざしたまま、つつましやかな仕草で、かすかに身を動かせ始めた。

「ホホホ。まあ、呆かれた。桂子嬢の見ている前で、よくそんな浅ましい真似が出来るものだわ」

千代は、そんな事を云って笑いこけながらも、夫人の動作が鈍ったりすると忽ち大声で叱咤し、麻縄の切れ端をつかんで、夫人の尻を激しくぶつのであった。

一方、床柱に緊縛され、夫人の一挙一動に眼をそらす事を禁じられている桂子は、その

青白く冷たく冴えた表情を齒を喰いしぼるように歪めさせ、夫人の悶えを凝視している。「如何が、桂子さん。これが貴方の継母だと思つと、情なくならない？」

千代は、涙にうるんだ悲しげな視線を夫人の方へ向けている桂子にそんな事を云って、クスクス笑いながら、再び、女三人の貪るような視線に堪えつつ、全身を揺すり続ける夫人に対した。

「もっとしつかり、お尻を振るのよっ」

と、麻縄の切れ端で、夫人の背や尻をぶち続けるのだ。

静子夫人の全身は湯気が立つばかりにギラギラ汗ばみ、豆絞りの猿轡の中で、夫人は、切れ切れの繊細なすすり泣きの声をあげつつける。やがて夫人は、欲望の疼きに心も肉もどろどろに溶かされて、もう押さえもきかず夢中になっていくのだった。

心をそり立てるような優雅な線を描く腰と双臀は、大胆な躍動を見せ始め、夫人は、もう堪え切れなくなったよう、美しい眉を八の字に寄せ、ぐっと削いだように顔を仰向かせた。

夫人が限界に近づいた事を感知した三人の鬼女は面白そうに周囲から夫人の火柱のよう

になった肉体にまといつた。

胸の見事な隆起の頂点にある蕾や、ねつとりと脂汗を浮かせた優美な太腿、内腿を鬼女達の指がまさぐり始める。

夫人は、獣の咆哮に似た生々しい声を猿轡の中で上げ、狂気したように激しく首を左右に打ち振った。そうした断末魔のあがきを演じたあと、夫人は、自失したようがっくりとなり、深々と首を垂れてしまう。

「ホホホ、とうとう私達三人の軍門に下ったというわけね」

三人の鬼女は、ふと好奇心にかられて、その場に身を沈めた。縦縄を挟んで、ぴったりと閉じ合わされた優美で官能味を湛えた太腿は、濃厚な体臭を発しながら、ひくひくと痙攣し、あからさまに最後の美酒を、口惜しくも元女中の千代を始め、三人の悪女の視線の前に晒け出している。

千代は、してやったりとばかりに口元を歪めて、しばらくそのままうまそうに煙草を吸っていたが、ゆっくりと立ち上って、ぐたりと首を垂れている夫人の肩に手を廻した。

「ホホホ、嫌な奥様。桂子さんの見ている前で、こんな——でもいいわ。絶世の美女と騒がれた、元遠山家の令夫人が、元女中の眼の

前で、こんな、ホホホ」

千代は、狂気めいた笑いを飛ばしながら、身も世もあらず顔を横へ伏せている夫人の顎に手をかけ、夫人の顔を自分の方へ向けさせるのだった。

猿轡で、高貴な美しい鼻筋まで覆われている静子夫人は、情感をねっとり浮かべた翳の深い、にじんだような瞳の中に、さも羞しげな、もの哀しげな色を湛えつつ、じっと千代を見つめ、そっと切なげに眼を軽く閉じ合わせるのだった。そのやり切れないばかりの憂愁を帯びたぞっとするばかりの夫人の美しい容貌に、千代は、ふと眼まいさえ起りそうになる。

そうした思ひは、少し離れた所に立って、このすさまじい光景を凝視していた二人のシスターボーイも同じであった。全身、官能の疼きでくたくたになり、と同じに、静子夫人の美貌と伸びのある優美な肉体に魅せられ、ふと、犯し難い気高さのようなものさえ感じて、これから、千代の命令通り、この美女の菊の花の個所に、そうした調教を果して施してよいものやら、といった自責の念にかられ出したのだ。

静子夫人は、そのままの肢態で、深い陶醉

の余韻に浸りながら、バラ色に染った頬をさも羞しげに伏せて、絹紙をふるわせるようにシクシクとすすり上げていたが

「如何が、痒みはとれたの、奥様」

と、和枝が夫人の伏せた顔をのぞきこむようにして、からかうと、夫人は、すすり上げつつ、消え入るようにうなずいて見せるのである。

「じゃ、これで奥様の唄の余興も、たっぷりテープにとらせて頂いたし、私達の仕事は、これでひとまず終りってところね」

千代は、そう云って二人のシスターボーイの方を向いた。

「あとは、あんた達の仕事よ」

そう云うと、和枝や葉子達と一緒に夫人の縦縄を解き始める。

「まあ、凄いわ。どう、これ」

「これで、元、大財閥の御令室様だなんて、あきれてものが云えないわ」

三人の鬼女達は口々にそんな事を言いながら、ようやく二つの鈴を外し、夫人の口を固く覆った豆絞りの猿轡を取った。

「何から何までみんなこちら任せで、気楽なものね。さ、お掃除したげるわ」

懐から、チリ紙を出した千代が身をかがめ

たが、夫人は、不明瞭な意識で何か遠い幻でも見つめるような物悲しげな瞳を前方に向けてたまま、微動もせず、千代の行為を甘受しているのだ。

「毎日、こんなすばらしい思いに浸る事が出来て、ほんとに奥様って幸せよね。もう奥様はこの屋敷から一生世間へ出る事は出来ない運命だけれど、むしろ、それが嬉しいんじゃない」

千代は、そんな事を樂しげに口にしながら丹念に後始末をすますと、再び、シスターボーイの方を見て、「あんた達、ぼんやりしてるけれど、奥様に流腸する支度は出来ているのね」と念を押すのだった。

「ね、お婆様、そんな状態になった奥様にすぐ流腸なんかするの少し酷いよ。しばらく休養させてあげましょうよ」

と、夏次郎が見るに見兼ねたように云うと千代は、きつときつい顔になった。

「何云ってんのよ。私達は折檻したのじゃないく奥様のお望みによって痒み止めのお手伝いをしてあげたのよ。一寸したお遊びじゃないのさ。遊びは遊び、仕事は仕事じゃないの。かまわないからすぐに調教にかかって頂戴。三日以内にこの女へ、中国の秘法を伝受しな

いと、あんた達、大変な損をする事になるのよ」

この千代という女は、あきらかに頭が狂っている、夏次郎も春太郎も、それではつきり覚ったが、千代は、更に、ふと何かに気づいたよう淫靡な微笑を口元に浮かべて、ぐったりと萎えたよう首を垂れている静子夫人に眼を向けるのだった。

「さっき、三杯もお酒を飲んだので大分貯っちゃったんでしょ。いいわ。面倒だけれど、させてあげる」

そして、千代は、春太郎に、「おまるを持って来てよ」と命じたのだ。

春太郎と夏次郎がバラの模様を描いたピンク色の女児用の便器を持ってやって来、千代に命じられるまま、それを立縛りにされていく夫人の前に当てる。

「そら、桂子さん、よく見ているのよ。ママさんが立ったまま、上手におまるを使って見せてくれるわ」

千代は、思わずはっと顔をそらせた桂子の顎に手をかけて、強引に顔を正面にこじ上げさせると、次に夫人に向かって口を開いた。

「さ、奥様、桂子さんに見本を示して頂戴、鬼源さんに教わったようしっかり肢を開いて

外へ洩らさないようお願いするわね」

静子夫人の左右に腰をかがめ、二人がかりで便器を持ち添えるようにしながら、夫人の腿の付根のあたりに当てがっていた春太郎と夏次郎は、ほんのりと淡い翳を作っている、幻想的な柔らかなふくらみをムズムズした思いで凝視しながら云った。

「さ、奥様、ぐずぐずすると桂子さんまでとばっちりを喰う事になるわ。さ、勇気を出して——」

静子夫人は、そうシスターボーイに催促されると、世にも哀しげに眼を閉ざし、わなわな慄える美しい頬に大粒の涙をばたばた流しながら、血でも吐くような思いで、のけぞるように優美な太腿を大胆に割って見せたのである。

そして、大きく呻きつつ、夫人は狂おしいばかりの昂ぶった声で

「桂子さん。お願い、静子を、静子を笑わないで！」

それと同時に、全身を牽らせたように弓反りにし、夫人の体からは水しぶきが——。

千代、和枝、葉子の三人は、手をたたいて笑いこける。

夫人は、息の根も止まるような屈辱の戦慄

に身悶えし、優雅な哀泣を發して、鬼女達とシスターボーイの貪るような視線に耐えつつ最後の一滴までそのまま放出し終ったが、同時にスーと気が遠くなりかけた。

「さ、早く次の間へ運んで、調教して頂戴」千代は、胸のつかえがおりたとしてもいったサバサバした顔つきで、シスターボーイに云った。

春太郎と夏次郎は、夫人のものが入った可愛い小児用の便器をさも大事なものを扱うように手にし、ビールの空瓶の中へ流しこんだ。検尿用に瓶詰にするよう千代に命令されたからである。

そして、夫人を縛った麻縄の縄尻は天井のロープから春太郎の手で解かれたが、夫人はもう自力では立つ気力も喪失したよう、フラフラとその場へ膝頭をついてしまう。

「しっかりするのよ、奥様。さ、立って」

シスターボーイ二人は、夫人の優美な肩や背に手をかけて、無理やりに立ち上らせた。

千代と和枝が、先に立って、襖を開けるとそこには、すでに夫人を浣腸するための支度が出来上っている。

円卓の上に布団が敷かれ、その上には、ビールカバー。そして、丁度、その真上には

無気味な二本の皮紐が、かなりの間隔をおいて垂れ下がり、ゆらゆら揺れているのだ。

生贄はその円卓の上に仰臥させられ、両肢を極端に割られた形で、天井より垂れ下がる二本の皮紐につながれるのだと、それは千代や和枝達にもわかった。

「さ、奥様のためにすっかり用意は出来てるのよ。ぐずぐずせず、早くいらっしゃい」

千代は、笑って、二人のシスターボーイに体を支えられ、辛うじてその立に立っているような静子夫人を手招きする。

静子夫人は、そのおどましい舞台を眼にすると、さっと顔を伏せ、切なげに身を振りながら、声をひそめてすすり上げるのだった。

「あら、どうしたの」

と、千代はとぼけた声を出し、

「奥様は浣腸はどうも苦手のようね。でも、これから教わる技術のためには、どうしてもこれをしないとまずいのよ。そうだね、春太郎さん」

静子夫人は春太郎と夏次郎の二人に背中を抱かれるようにして、量感のある双臀をかすかに動かしつつ、更に円卓の前へ押し進められたが、急に耐えられなくなったよう身を顛わせながら、その場に腰を落とし、円卓の隅

に額を押し当て、シクシク泣きじゃくるのだった。

そんな夫人を打ち捨てたまま、春太郎は、布団の中央に大きな枕を配置し、夏次郎は、太いガラス製の浣腸器、脱脂綿、合成樹脂で出来た便器などを、何か展示会でもするように卓の横に配列させる。

「この枕の上にお尻を乗っけて下さいね、奥様。何しろ、中国の秘法を伝授するんだからその所はまずお夏と二人でくわしく調べさせて頂くわ」

そういうと、春太郎は、強引な調子で、再び、夫人の肩に手をかけ、抱き起した。

「―ああ、こわい、こわいんです」

静子夫人は、悲しげに、消極的な身悶えをなよなよとくり返したが、

「心配しなくていいのよ。私達は、こう見えてもその道にかけちゃあベテランなのよ。うんと奥様に楽しい思いをさせてあげながら、鍛えてあげるわ。まあ任せてよ。きっと浣腸されるのが待ち遠しくて、うずうずするようになるのよ」

さ、台の上に乗って頂戴、と、夏次郎も手を差しのべて、おびえきっている夫人を台の上へ押し上げた。

千代も和枝も葉子も、キャツキャツとはしやぎながらそれに手伝って、きびしく後手に緊縛されたままの夫人を台の上へ仰臥させるのだった。

素早く春太郎の手で、豊満な夫人の双臀の下あたりに枕がはめこまれると、夫人は「ああ、そ、そんな」と甘えかかるように鼻を鳴らし、身を振った。

「さ、もうすっかり観念する事ね」

千代と和枝は、まるで、ふざけ合うような調子で、妖しい悩ましさを持った夫人の太腿を左右から、からめ取るようにした。

台の上に立上り、二本の皮紐をたぐり寄せながら、夏次郎が

「駄目、駄目、もっと大きく開かせなきゃ、足首が紐にとどかないわ」

それを聞いて、力をこめ、更に千代と和枝は引き裂いていく。

「あっ」

と夫人は絹を裂くような声をあげ、
「―ひ、ひどいわ。そ、そんな、ねえ、お願い」

「駄目よ。元遠山夫人の貫録を示して頂戴」
鬼女達は、吹き出しながら、極端にまで夫人を割って、シスターボーイと一緒に夫人の

足首を皮紐に縛った。

「やれやれ、一汗かいちゃったわ」

千代達は、額の汗をハンカチで拭いながら円卓から降りる。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二二〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらいいという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊

夫人は、程よく脂肪の乗った美しい両肢を極端なまでに割り開け、皮紐に吊られ、天に向って突き上げてゐるのだ。

悪魔達の飽く事を知らぬいたぶりに夫人は

一〇五〇円、半年分六冊二二〇〇円、一年分十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

大きく吊られた二肢を憐れ、枕の上に乗せられた双臀をくねらせながら、号泣する。

「いよいよこれから、あんた達の仕事ね。しっかりやって頂戴」

千代は、春太郎に、そう云って、ふと、夫人の肢態に眼をやったが、まあ、と口を押さえて吹き出した。夫人の羞恥は、もう包みも隠しもならず、堂々とばかりにはつきりと二人の好きな眼の前にさらされている。

「ホホホ、いくら美人でも、こんなにこれ見よがしにされては、二の句が継げないわ」

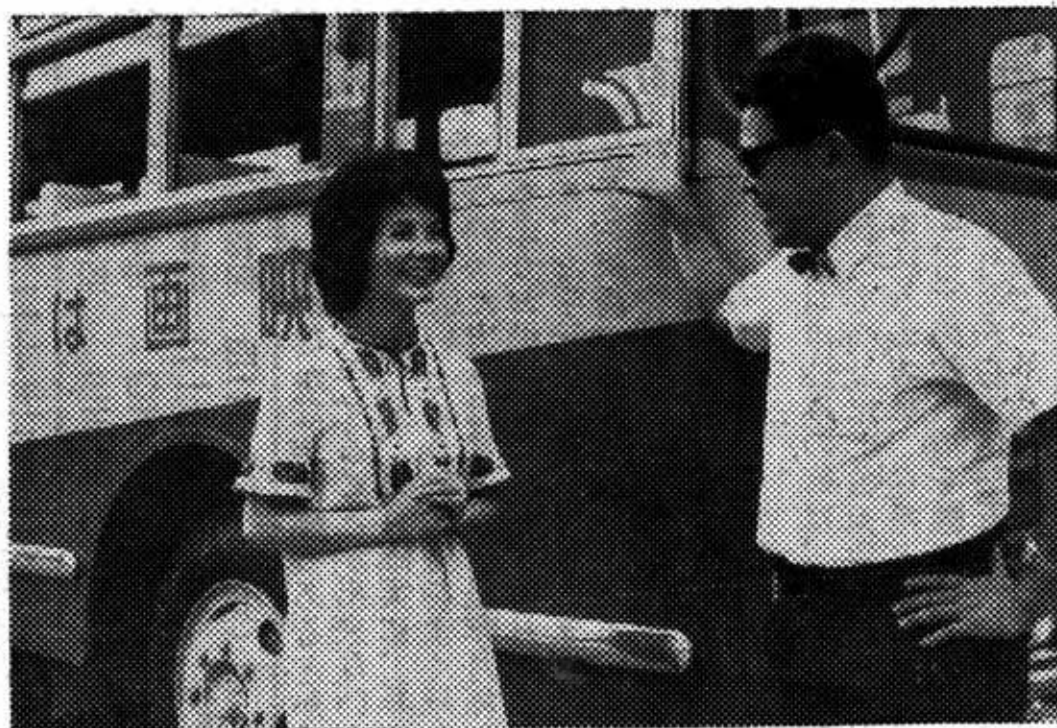
和枝も葉子も、わざとらしく呆れ返ったような顔を、大仰な身振りで面白がるのだ。

一時の興奮がおさまった静子夫人は、もう泣くのもやめ、しっとり涙をにじませた翳の深い眼をかすかに閉ざして、悪魔達のそれに対する射るような視線を甘受している。

「それじゃ奥様、これから、シスターボーイさんの調教をしっかりと受けて三日の間に、その中国の秘法というのを身につけるのよ。いいわね」

千代は、そう云って、和枝達をうながし、部屋を出て行った。

(未完)



(スタッフ及びあらすじの紹介) 敬称略
 企画 田岡 茂・天尾 完次
 脚本 石井 輝男・荒井美三雄
 監督 石井 輝男
 宣伝 岸村 晶三
 登場人物及び主なる出演者 第一話
 大工新三 吉田 輝雄
 新三の妹みつ 橋 ますみ

緊急ルポ

東映京都作品

『徳川女刑罰史』の

スターを縛る

辻村隆

権造 沢 彰謙
 巳之助 上田吉二郎

第二話

珠光院々主代 玲宝 賀川 雪絵
 珠光院の若い尼 妙心 尾花 ミキ
 玲宝の付き役尼僧 燐徳 白石奈緒美
 院主 岡島 艶子
 珠光院の尼僧 行恵 小島 恵子
 尊栄 英美 枝
 周智 牧 淳子
 月照 美松 艶子
 善福 並木 玲子
 院主の看護役
 案内役尼僧

本寺の僧 町 娘
 柳橋芸者 刺青師
 風呂屋下男 料亭おかみ
 白人女 A

第三話

春海 林 真一郎
 花 三笠れい子
 君蝶 沢 たまき
 彫丁 小池 朝雄
 三助 由利 徹
 南風 夕子
 ケ イ
 ア ニ タ
 ハ ニ イ
 リサロリイ
 ジエーン

F

女囚 甲

その他女囚多数

長崎吟味役人多勢

全篇出演者

奉行所与力吉岡頼母

吉田 輝雄

同(後に寺社)奉行与力 南原一之進

渡辺 文雄

奉行山野淡路守

中村 錦司

(製作意図) 好評の「性愛路線」に強烈な刺激を加えて放つ錦秋を飾る大作。徳川時代の想像を絶する苛酷な刑罰の種々相と、その下で呻吟し抵抗し、消えていった男女の哀歓を描いて、「刑罰」の在り方を現代の人々に訴えたい。

「徳川女刑罰史」 タイトルが流れる。

「目には目を」「歯には歯を」——悪に対する報いが重視された江戸時代には、刑罰は極めて苛酷であり、残酷であった。今日では、刑罰の主目的が犯罪者を善導することにあるとされ、当時の苛酷な有様は、もはや想像を絶するものとなった。だが、私達は残酷な時代の姿を忘れてはならない。

ある法学者は警告している「江戸時代の刑罰は滅び去ってはいない。今日でもあり方如何によつては、現実のものと成り得るのだ」と。

刑場——。

後手に緊縛された女囚が、大木の横枝に宙釣りに吊るされている。白刃一閃！

首・胴・下半身に切断された凄絶な三段斬り。首が宙を飛ぶ——。

刑場——。

宙吊りの女囚が引下げられてくる。地上に三角形の木馬。左右に拡げられた両足に重石がつるされ、激しい責折檻。

刑場——。

若い女囚が全裸に、紙布一枚腰にあてがわれた姿で立柱に緊縛される。女囚の囲りにカヤが積み重ねられ、油がぶちまけられる。忽ち火が女囚を包み、燃えさかる火炎の中で悶絶してゆく女囚、凄惨な火あぶり——。

刑場——。

全裸の女囚が、二頭の牛に左右の足を縛



りつけられる。鞭と共に、左右逆方向に走り出す牛。凄絶目をおおう股裂きの極刑。

刑場四シーンでタイトルが終る。

第一話 肉親相姦事件

奉行所白州に、若い女囚のみつが縛られて頭を垂れている。奉行山野淡路守の宣告。

「黒門町、家主吉兵エ方、店子みつ、その方病弱の兄新三を邪魔者として殺害し、しかも神仏を恐れず、兄新三と只ならぬ関係を結んでいた所業、不届至極。よって引き廻しの上死罪申付くる」

与力南原一之進、嗜虐の欲びをニタリと顔に泛べて、

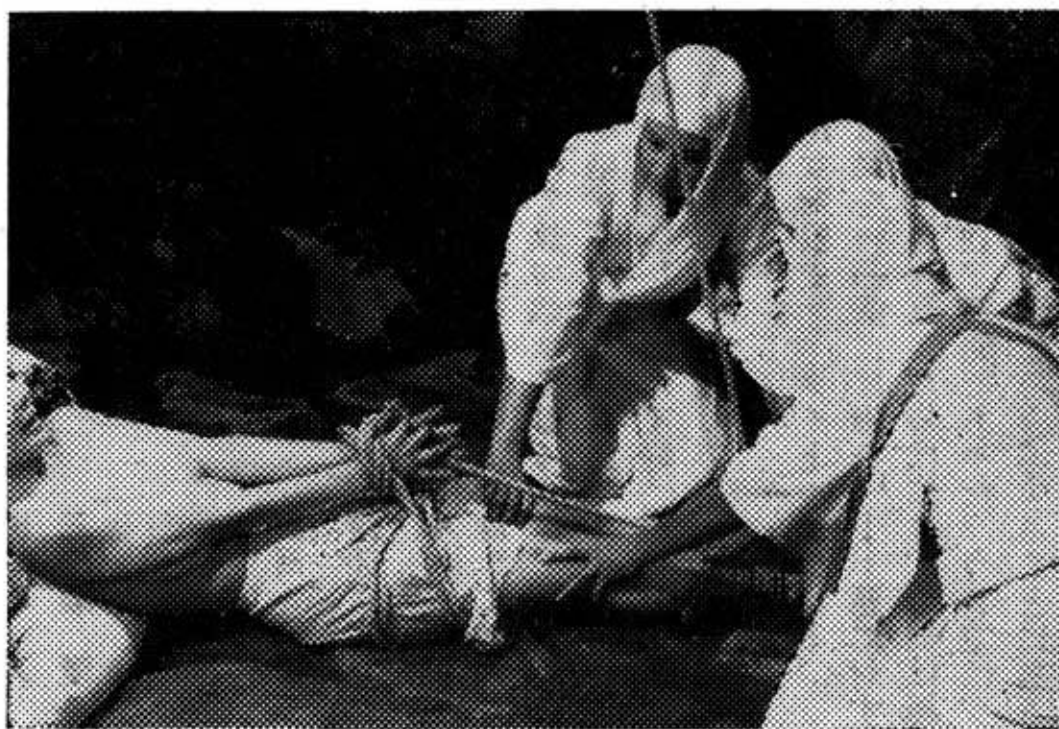
「刑の方法に関しては、それ相当の手段をとる。その覚悟でおれ」

江戸の町を裸馬に乗せられて、引廻されてゆくみつ。野次馬の罵声、石を投げる者——。

事件とは、みつの兄新三が大怪我をして、医者にかかったが、みつの体を狙う呉服屋の巳之助が、新三の兄貴株の権造とはかって、金をかたに恩を売る。みつの賃仕事では、仲々治療のその大金を返せない。それを楯に権造は妾奉公を強要してくる。料亭に連れ出されたみつは遂に力づくで操を奪われる。兄の新三はそれを知り、自分のた

めに操を失なつたみつを哀憐と驚愕で抱きしめるうち、いつしか狂った抱擁にかわる。異常な肉親相姦——。

それを知つた巳之助が、兄、そして愛人？の新三の眼前でみつを犯してゆく。絶望の新三は自害する。その咽元の剃刀を引抜き、折から入ってきた巳之助の背に剃刀が流れる。巳之助の自白で、みつは兄殺しの濡れ衣を



きせられ、しかも肉親相姦までも曝き出される。与力南原一之進の激しい責め。

みつに海考責めの拷問が行なわれている。双肌脱ぎの緊縛された体が、太股の中に頭を入れ二つに折れ曲っている。息もたえだえのみつ。南原の鞭は容赦なく鳴る。優しい与力吉岡頼母の取調べの時、彼が兄新三に瓜二つなのに愕然とし、吉岡頼母に新三の俤を見出したみつは、新三とのすべてを白状する。

南原の工夫した極刑水磔——

みつの軀が、波打際に設けられた逆コの字型の台から、逆さに吊るされている。満ちてゆく潮が、みつの逆さの顔にしぶきを立て、風が強まると共に、波は荒々しくみつの体にしぶきを散らし、そのとどろきは高まって、彼女は絶命する。

第二話 尼僧破戒殺人事件

犯科帳が繰られて、第二話が始まる。『寛文八年、珠光院尼僧の首切りの件』と記された頁が出る。

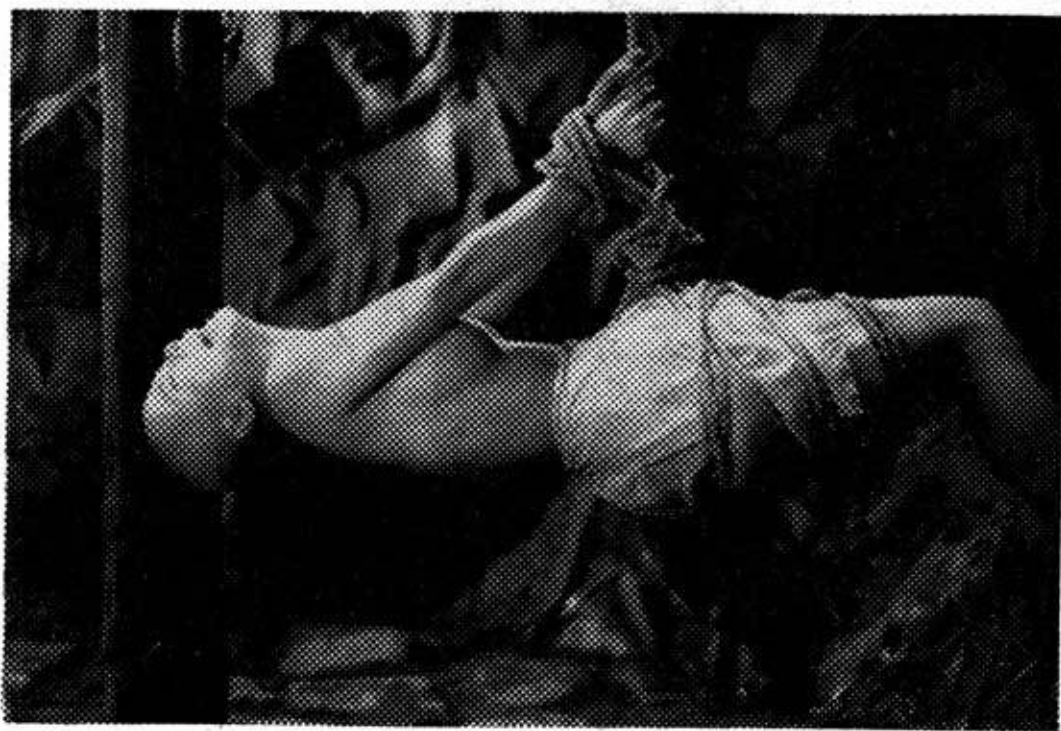
病弱の珠光院々主彰尊に代って、京の公卿出身の院主代、玲宝の取澄した冷たい顔がゆく。影のように従がう、お付きの憐徳の妖しい笑み——。

山の中腹で本寺の僧春海を認めた玲宝の眼は、怪しく燃えた。

夜——。玲宝の寢室に忍びよる憐徳。二人

の尼僧はレスビアンの関係だったのである。

玲宝の燃えた眼に嫉妬した憐徳は、昼間のお付きの僧の風情からは想像もつかぬ荒々しさである。憐徳は玲宝を全裸にむき双つの盛り上った尻を打つ。果ては床の間の鞭をとりあげ、打って打って、打ちまくる。苦しげに悶える玲宝の顔に、被虐による恍惚の歓喜が流れる。憐徳の手が、唇が、全裸の玲宝の肌



を、爬虫類のように這い廻る、激しくすさまじい異様なレスボスの愛撫——。

本寺と尼寺の境界の木蔭で、身をひそめて立つ玲宝の眼は妖しく光っていた。その彼方に、本寺の春海と、尼寺の若い尼僧妙心の清純な恋が展開していた。

林の中で、妙心の僧衣を脱がせて、一糸纏わぬ姿にして春海は、激情にかられて自分の僧衣も脱ぎ始める。からみ合う二人の裸身。互いにまさぐる手、春海の背に喰い込む妙心の手。彼は若い尼僧の肩をガブリと噛んでいった。妙心の呻き、そして真昼のハレンチな情事がつづく。

脂汗を浮かべ見入る玲宝の妖しくひきつった瞳。それは慾情にかられた一匹の牝獣の目であった。

玲宝は巧みに春海に近づく。仏門の掟を破ったことをたてに、滝に打たせて、裸形をみせて、春海の裸身をゆさぶる。

春海、浅瀬の中に玲宝を倒し、凌辱するか如く犯す。それも妙心を救うため、



玲宝を同罪にする男の苦肉の策であった。

怒りに震う玲宝。その能面のような顔に、陰湿な嗜虐が流れる。怒りは当然若き尼僧、妙心に向けられていった。

どじょう責め——。滑車から吊るされた緊縛の妙心が大釜一杯に泳ぎ廻るどじょうの只中へ沈められる。次第に湯が熱くなり、活潑に泳ぎ廻るどじょう。妙心の奥深くもぐり込もうと先を争う。憐徳、必死にもがく妙心を押えつけている。

唐辛子責め——。地下の岩室に全裸の妙心が宙吊りにされて激しくぐるぐると振り廻されている。責め役は三人の同僚尼。見つめる

玲宝と憐徳に嗜虐の悦楽が泛んでいる。

行恵、尊栄、周智の尼達は、散々に責め抜く。股の割れた妙心の奥に、幾度も真赤な唐辛子が押し込まれて行く。苦悶する妙心——。

焼鉄棒責め——。緊縛されて転がる地下岩室の妙心。炉に炭火が真赤におこり鉄棒が灼熱している。妙心の前に縛られて、春海は責めのさまをまさまざと見る。妙心をあきらめぬ彼に、激怒した玲宝は、妙心の股間に鉄棒をつきたてる。絶叫する妙心の股間から、肉の焦げた煙が立ちのぼる。

一撃、又一撃。玲宝の振りおろす鉈の下で春海の首がポロツと胴から離れる。一面の血しぶき——。妖しい手付きで首を抱き上げる玲宝は、物云わぬ首を憑かれたように愛撫する。妙心は憐徳と同僚の尼僧三人によって滝つぼへ投げ込まれる。

ハレンチきわまる破戒——。寺社奉行与力南原一之進を筆頭に捕方達が尼寺を襲う。

玲宝は、春海の首を袖に包み、月光を浴びて立つ。とり出した懐剣で、己が胸を刺しつらぬく。どっと襲いかかる捕方に囲まれて既に玲宝は絶命していた。

日本橋袂の晒小屋に、春海、玲宝の遺骸が晒されている。川から上った妙心の遺骸が運ばれてくる。女犯の相手と、苛しゃくのない南原は、妙心も晒そうとする。町奉行与力の

吉岡頼母の顔に怒りがこみ上ってくる。

刑場に五本の磔柱——。既に死んだ玲宝を中央に、燐徳、行恵、尊栄、周智の四人が、はりつけになっている。見せ槍が行なわれ、グサグサと槍が尼僧達の体をつらぬき、血しぶき上げて、次々と絶命してゆく。幾度も幾度も刺し貫かれる玲宝。冷たい美しい死顔が、その度にかすかに揺れる。

第三話 地獄絵刺青殺人事件

犯科帳の頁がぐらぐらと、「寛文十一年、名人彫丁の地獄絵刺青の件」

柳橋の芸者君蝶の背に、キリシタンのリンチを描いた、異様な図柄が名人彫丁の彫針によって画き上げられてゆく。評判をきいて、一夕、料亭に遊んだ与力南原一之進は君蝶の絵柄を嘲笑する。きおい立つ彫丁。

「彫丁、このキリシタン処刑の白人女の顔は何だ。これはただ苦悶の表情をつくっているに過ぎない。ありふれた銅板画の真似だ。ただ、醜い顔が並んでいるだけだ。人間が本当に苦悶する時の顔は、このような醜いものではない。そう……苦悶の中に、悦楽というか、悶えの中の快楽というか、一種異様で不思議な陶酔が浮かび上るものなのだ」

南原一之進は、酔う如く喋りつづける。満座の中で恥をかかされ、身体をふるわせる彫丁は、彼が何故そこまで適確に言えたかを

考える。

詮索所にて、南原は女囚を拷問している。呵責のない凄絶な責め——。苦悶の女囚の、失心寸前に浮かぶ、一種独特な陶酔にも似た表情。責めを愉しむ南原の顔は悦虐にひたっていた。

彫丁は、刺青の対照の美女を求めて、三助に頼み込んで銭湯をのぞく。入浴する女達の赤裸々な姿——。

そこに絶好の肌の、町娘花をみつけ、奸策を弄して、花を奪う。女の隠しどころに刺青して花の体を自由にする。

彫丁は南原に頼んで、一生一代の地獄絵刺青を花にはるため、長崎へ足を運ぶ。キリシ



タン女の拷問の極刑をみるためである。

長崎奉行所の拷問蔵に、六名の外人女が引き出される。漂流して長崎に辿りついた女達であった。南原はこの白人女達を、思いの尽に拷問にかけ、呵責ない責めをするつもりであったのだ。

木馬責め、水車責め、駿河責め、算盤責め、石抱き、つるべ責め、火責め、引伸し責め、とあらゆる拷問が白人女に襲いかかり阿鼻叫喚の地獄絵図が果てしなく続く。

彫丁の下絵は完成し、花の体に、地獄図の針が打ちこまれてゆく。苦悶する花——。

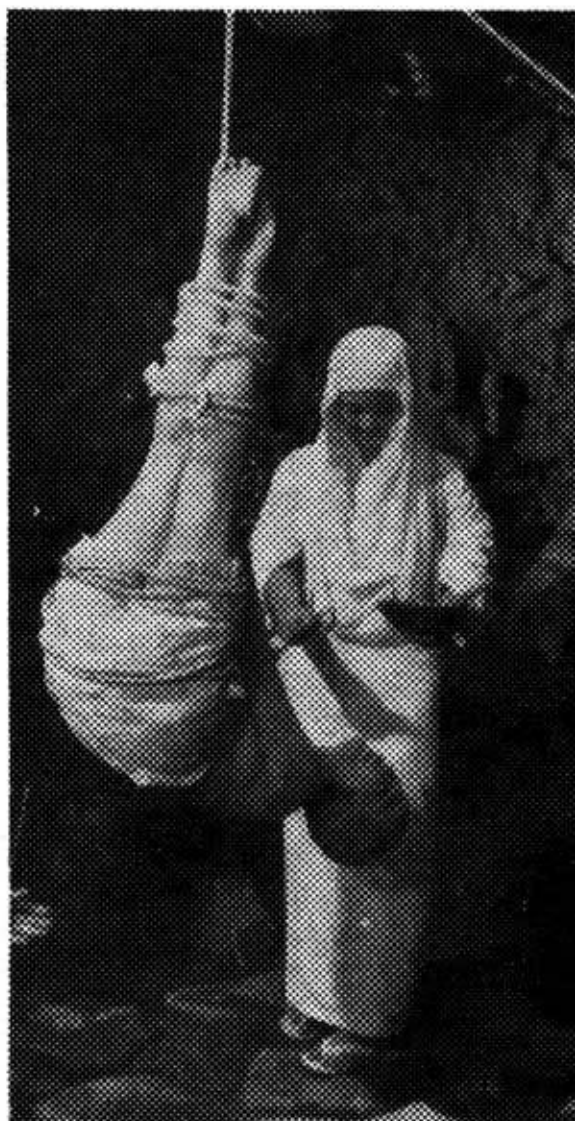
南原に最期のときが来た。駿河責めで、拷問をたのしむ彼の脇腹に、彫丁の抜いた脇差がぐさり——。南原の苦悶の絶頂にじっとみいる彫丁。その断末魔の様相を、全裸の花に彫丁の針が鮮かに動いてゆく。失心する花。

その時、役人の踏み込みで彫丁は花を引きずり乍ら、半ば狂人となって暴れ廻る。燭台が投げつけられ、火は火を呼んで、忽ち火炎につつまれる。逃げまどう全裸の白人女達——。危うく花を助けた吉岡頼母の、じっと火炎にみいる彼方に、花の全裸の地獄図絵がほのお

に妖しくも美しく浮かび上がっている。「完」

以上が、シナリオから要約した、『徳川女刑罰史』のストーリーだが、私のフィクションは何一つ入っていない、シナリオそのものである。

最初にこれを、企画の天尾さんからいただいて一読した時、これは又、恐ろしくも嬉しい、とてつもないドエライ映画だと思った。全篇ふんだんに縛りや責めが出てきて、カメラ・ハントのSMプレイどころの騒ぎではない。過去、この種の映画は、大抵かかさずみているが、スケールの大きさといい、俳優の多彩さといい、且は拷問、責め、緊縛の本格的な刑罰映画に私は眼を瞠る思いであった。恐らく日本の映画史上始まって以来の、異例の映画であるといっても過言ではないと思っ



たのだった。

企画や宣伝からの、私への依頼は、

「免も角、奇クのファンの方や、こうしたマニアの方が見ても、十分満足するような、ごまかしのない責めや縛りをやして下さいよ。世間があっ！ というような映画を、この東映でつくりたいんですよ」

と仰有る。なかなかの意気込みである。願ってもない幸せと、団鬼六氏の紹介を衷心より感謝しつつ、喜んでおうけた次第であるが、責任も又重大である。何しろ、東映の作品にも、過去縛りや責めの入った映画は数限りなくあったが、所詮それは本筋に対するひとつの綾に過ぎない。それだけに縛りといっても、謂わばお座なりのもので、俳優さんらに対しても遠慮や気兼ねもあったのか、みせかけのものが殆んどであった。これは何も東映に限ったことではなく、五社作品に出てくる緊縛はこの程度のもが多かったのである。真向上段から、拷問、責め、緊縛と取組んだ、SMプレイを主体とした映画は、五社作品の中ではこの映画を嚆矢とするだろう。しかも刺青あり、覗き趣味あり、レスビアン

ありと、すこぶる盛沢山で、あらゆるマニアを堪能させるように出来ている。

私の身边は、にわかに慌たしくなった。

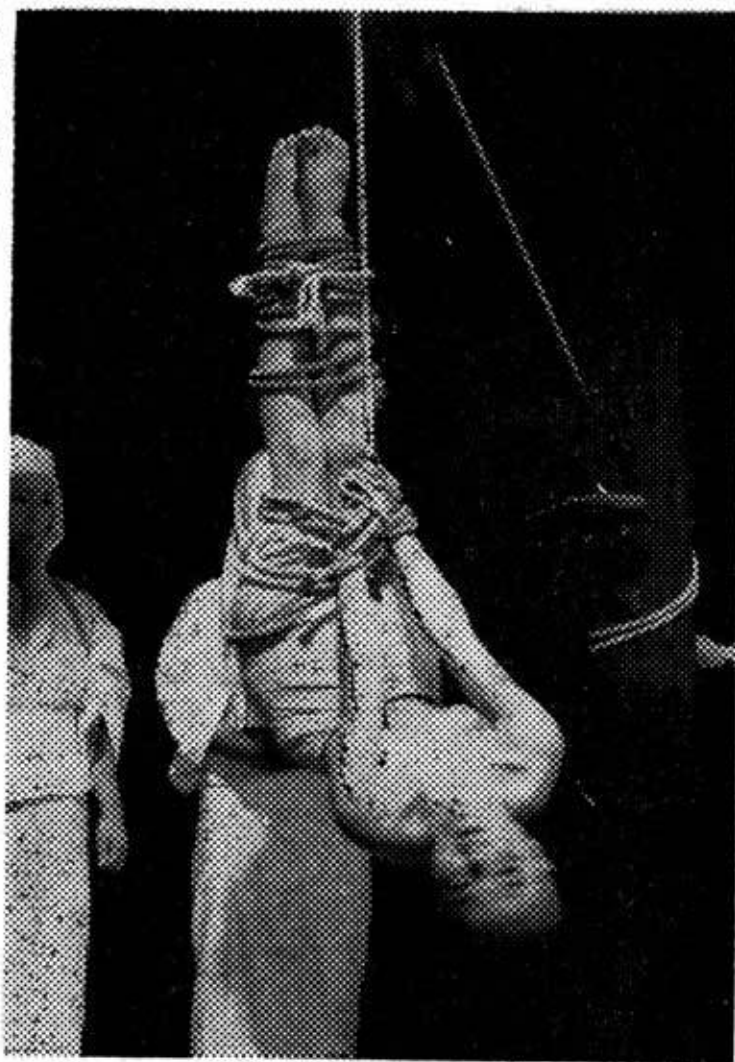
一世一代の緊縛ぶりを発揮するのはこの秋と本職はそっちのけで、刑罰史や古書を片っ端から拡げ、膨大な緊縛フォトを取り出しき、てその構成に腐心する。美術、撮影、装置、助監督、シナリオのスタッフが私の家を訪ねてこられて、資料や構成、装置の打ち合せをする。もうこうなると、私の脳裡はシナリオを中心に渦を巻いて、緊縛の構成と、刑罰の拷問のやり方で一杯である。アングラ的な辻村隆の存在は、この一作で急に脚光を浴びてきた感があった。

クランクインまでに、免も角、私式の考えで緊縛の構成は出来た。果して女優さんが、私の考えた通りに縛らせてくれるかどうかである。石井監督さんは、

「縛る方はすべてお任せしますから、思う存分やって下さい」

と仰有って下さるのであるが、M気のないスターを緊縛することが、この第一の難関であった。ハプニングでゆこう。その場になつて咄嗟にどう構成が変わるか分らないが、縛り屋専門の辻村隆という人間で、臆せずおじず押ししてゆくことに腹をきめた。

『徳川女刑罰史』のスタッフの方は皆親切で、気持のよい方許りで、辻村隆という人間に、



案外、敬意を表していただき、私の率直な意見も、いつもスラスラと文句なく通っていた。脚本と助監を担当する荒井さんとも度々意見を交換して、大体の構想も煮つまり、固まっていた。

克蘭ク・インは八月廿三日に始った。その日、私は撮影所を訪問して、緊縛や責めのシーンのある日の製作日程の打合せをした。

大体の用件を済ませ、石井組の部屋でスタッフ一同と雑談をしていると、一人の若い女優さんが入って来た。紹介されて、この人が今度抜てきされて、若い尼僧の妙心に扮する尾花ミキさんだと知った。はたち前のピチピチした小柄の可愛い、愛想のいい娘さんで

ある。

「責めの第一番がこの人ですが、二十七日にうんと虐めてやって下さい。尾花さん覚悟しておきなさいよ。この辻村さんは縛りのベテランだからね」

カントクさんは、柔かい言葉で、冗談まじりに仰有る。照れた笑いを泛べ私は彼女に挨拶の視線を送る。

「辻村さん、驚いてはいけませんよ。彼女はネ、この尼僧役のために、頭をクリ

クリに剃っちゃったんですよ。尾花さん、みせてあげなさいよ」

「恥かしいわあ——」

「PR、PR。三十日にはアフターヌーンショウに出て、小金治さんの司会で全国にその頭を見せるんだし、そのあと、坊主頭で銀座を歩いてもらうつもりなのに、何をいつてるの」

宣伝の岸村氏が、横からハッパをかける。精巧な人工ヘアが出廻っている時代とはいえ、尾花さんのキチンとセットされた美しい髪がまさかカツラとは、私も全然気付かなかった。若い娘のツルツル頭が猛烈に見たくなかった。しかし役柄とはいえ、よくも思い切っ

たものである。小娘に近い彼女の、どこにそんなファイトが秘められているのだろうか。「見たいですね、お願いしますよ」

ペコリと一礼すると尾花ミキさんは、はにかんだ微笑をうかべて、髪に手をやると、スボツと脱いだ。青光りするチンマリとした、見事な青坊主の頭が、突然そこに現出する。

青黛の眉、えんじの唇、ピンクの爪、ミニのノースリーブのブルーの服に、その頭の何とまあ異様な対照であることよ。しかしそこには一種独特の奇妙な倒錯した美しさが醸し出されていた。芸能誌はこの奇抜なトピックに一樣に飛びつくに違いない。私は唯、啞然として眺め魅入っている許りである。

「もういい？」

「ああ、有難う。すごいね」

シナリオに剃髪の儀がないのが、残念ながらである。かつていつか、寺内大吉氏原作の、筑波久子の主演のピンクものの映画で、一ストリップパーが思い切って剃髪し、そのシーンをブツツケ本番で撮っていたのを思い出して、この人なら、もっと可愛い、もっと可憐で嗜虐的なのに、と惜しく思った。縛って押えつけて、無理矢理に頭を剃るシーンなど、うまくシナリオに挿入出来たら最高だったのにと……。そう思うのは、あながち私人ではあるまい。尾花ミキさんの、この根性に惚れて、彼女の今後の活躍を祈るや切なる

ものがあつた。

何でもこの役、最初有名な某スターに話があつたそうであるが、剃髪となると次の映画にも困るので降りたというが、抜擢に応じて尾花さんが剃髪まで思い切ったのだから、きっと緊縛の方にも協力してくれると考えた。東映ロケバスの前で、ヘアーをつけた彼女とのスナップを、宣伝部の方にとってもらつてその日は別れた。

(附記。八月三十日のアフターヌーンショウで冒頭にカツラを脱いでビキニスタイルになる彼女と、小金治の一問一答があつたが、堂々としていたのには感心した)

× × ×

八月廿七日――。

午後九時より、尼寺の岩室での若い尼僧妙心の唐がらし責めが、始まることになっていった。岩室のセット、正面に石仏が刻まれてあつて、その前に門の字型の吊木がしつらえてある。クランクインしてからの、最初の緊縛シーンである。映画の撮影に参与した人なら御存知と思うが、すべての準備がととのうまで、なかなか遅々として捗どらない。

尾花ミキさんが、青道心のきれいな坊主頭で、浴衣をきてセット入りする。つづいて、彼女を責める役の三人の同僚の尼僧も支度をととのえて入ってくる。

覚悟の上とはいえ、流石に尾花さんは緊張

した顔付であつた。

「撮影に入るまでに、一度縛ってみましょうか――」

装飾の布部君の促がす言葉に、ぐっと心がひきしまる。いよいよ私の出番だ。

「お手柔かくして下さいね」

小柄な尾花さんが、私を見上げて怖そうにいった。

最初宙吊りにしておいて、そのあと同僚尼達が見縄をといて、股を押しひろげ、唐辛子



を押込むという設定である。

「責めるのが見せ場ですからね、我慢して観念して下さいよ」

「わたくし、今迄縛られたことなんて一度もないんです。痛いでしょうね」

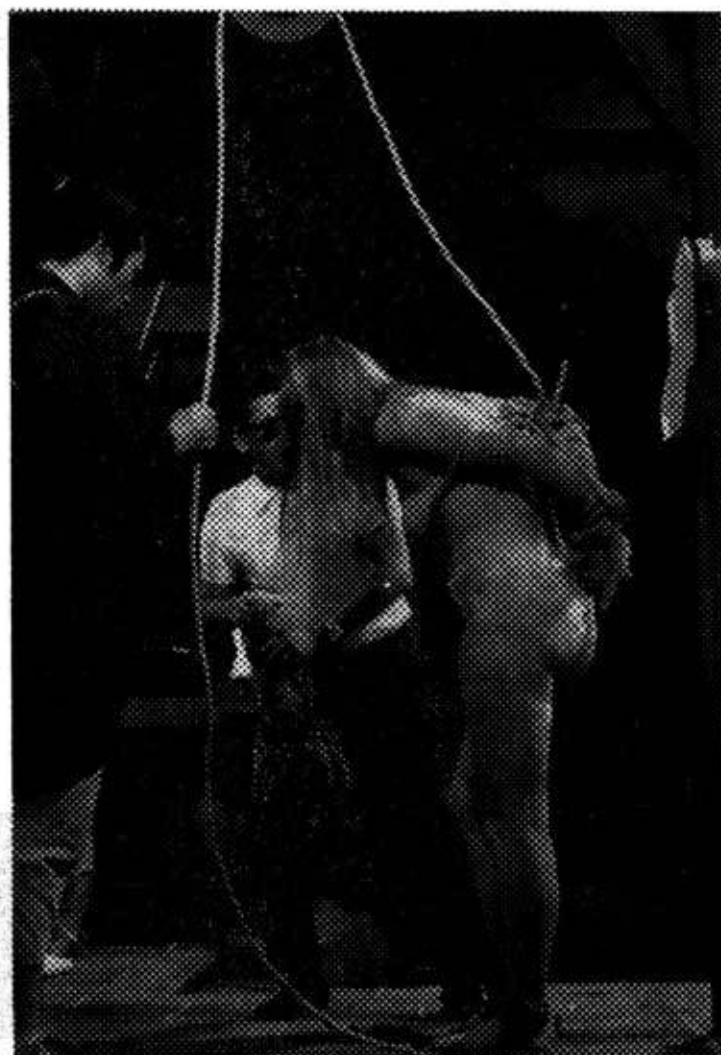
「縛り方にもありますが、痛くないっていうとウソになりますが、十分気をつけて縛らせていただきますよ」

「覚悟していますものの、いざとなると何だか怖いわ」

彼女は青々と剃り上げた小さい頭を微かに振つて、そつと首をすくめた。

昨日の撮影で、玲宝と憐徳の、レスボスの濡れ場に使った、僧院の一室のセットの中へたくさんの人眼を避けて、私と四五人の関係スタッフの人だけが、どじょう責めの大釜の据えてある、珠光院の台所セットを横切つて出掛ける。

小道具の方の持ってきた太縄は、どれもこれも新品で、ゴツゴツと固かった。ぐっと抱きしめれば、なよなよと消え入りそうな、柔かい尾花さんの小っぱけな女体には、余りにも酷なような気がしたが、使い馴れた古縄など、このセット内にはない。昨日から敷きつ放しの夜具の上で、彼女は、観念して浴衣を脱ぐ。ぽつちりと初々しい処女の乳首が覗けて、その胸の隆起は小柄な体に似ず豊かであった。彼女は遠慮し勝ちにそつと両手で胸を



抱いた。

私の最初の構成は、後手縛りの胸縄にして両脚を開かせて、太腿に縄を巻き、左右の二の腕に太腿の縄をぐっと引きつけて、胸に別に一本の太縄を通して、後手開股縛りを考えていたのである。

逸る心を鎮め乍ら、数人のスタッフの人達の見守る中で、私は頭に描いた通り、ゴワゴワした縄をかなり強くしめて縛っていった。

尾花ミキさんは、しばしば眉をしかめ、太縄の痛みをぐっとこらえていたが、縛り終って、三人許りで、そのポーズで吊り下げた時余りにもきつくしまる新らしい太縄の痛みに耐えかねてか、泣き出してしまった。本番は

おろか、緊縛第一号の最初に、既に、一人の女優さんを泣かせてしまったのである。ポロポロと大粒の涙をこぼし乍ら、尾花さんは声を立てずに泣いていた。私達一同顔を見合わせる。微かながら、批難めいた気色が周囲の人に浮ぶ。

「辻村さん、こりゃ無理ですよ。第一撮影は一日中かかるんだからとても持ちやしない。何とか持ちそうなやり方を考えましょう」

小道具の年輩の方が見かねていった。

「じゃあ、前手縛りにして、その縄に吊縄をつけて、両脚と一緒に縛った中へ通しましょう、腹にかなり巻いて、体重をそこへかけたらどうでしょう」

「どうかな。それより、落下傘を使いましょう。その方が長時間保ちますからね」

落下傘とは、鉄環のついた吊り用の安定バンドである。懇願するようなミキさんの瞳。

ごまかしたくない、まともな緊縛で真向から行くつもりであったが、遂に私は折れざるを得なかった。縄のこのゴツゴツした固さだけでも、私は譲歩せざるを得なかった。

乳房の下辺りに落下傘の鉄環を装置し、バ

ンドを隠す為に、その上をぐるぐる巻きにして、手足を縛って、落下傘にとりつけた吊縄に添わせると、軽量の尾花さんの体はラクラクと上った。

「これなら我慢出来そうですわ」

私から視線をそらせて、彼女は誰にともなく呟やいた。第一步にして、私の夢の完全緊縛は破れた。しかし尾花さんのその呟やきに私は内心ホッとしていた。

午前十時頃から始まった撮影は、午後の五時半まで、昼食の間を除いて、ずっと続行された。賀川雪絵さん、白石奈緒美さんも現われ、皆んなよってたかって妙心役の尾花さんを責めるのであるが、無慮十数回、このポーズは解かれ、又縛られるという動作をくり返し、宙吊りで、激しく前後左右から押され、宙に大きく揺れる彼女に、迫真の演技があった。剃毛のせりふがあったが、これはカットされた。青々した頭で、これ以上の剃毛といえば、おのずから理解出来る筈である。

十数回同一の縛りをしたが、矢張り、その都度僅か乍ら微妙な変化があった。機械でなく、人間が縛るのだから、同じ縛り方に見えていても、多少の相異は出てくる。緊縛シーンを細密に見られたファンの方が、縛り方が違っているといって文句いわれたら、それは緊縛指導した私の責任である。第一目のとでかなりアガっている私であったし、無我

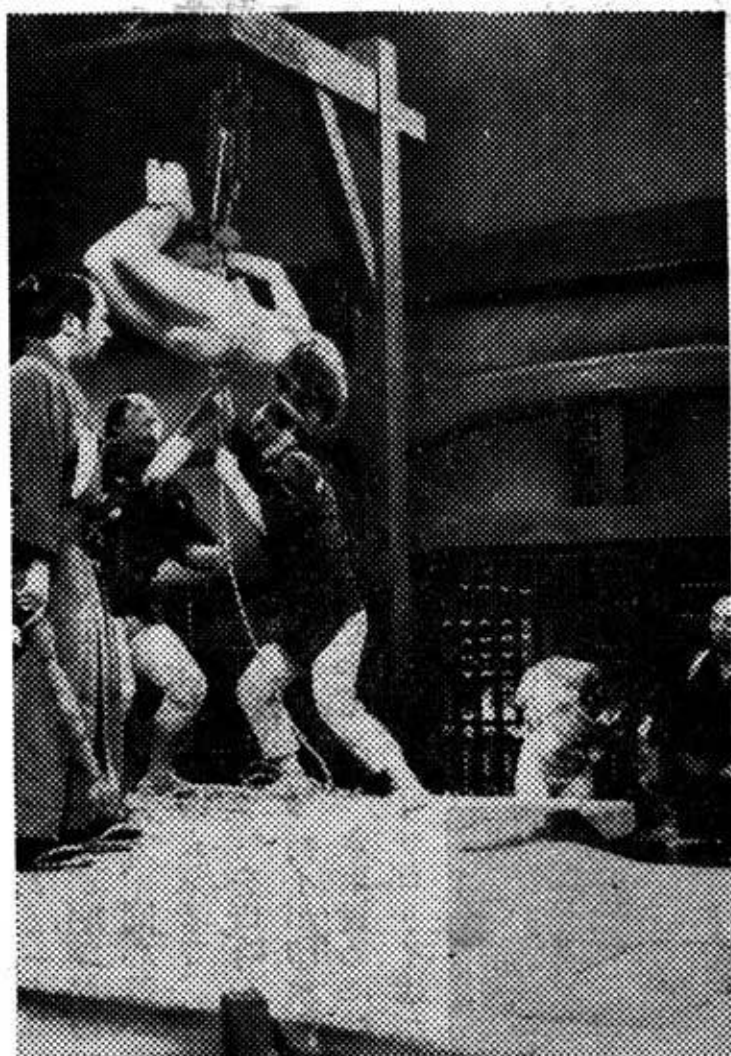
夢中で縛りつづけたので御諒承願いたい。

午後からは落着きを取り戻した尾花さんはこの度重なる緊縛ポーズに、易々として協力した。この小柄な若い娘の、どこにこんなフアイトがあるのかと思われる程の奮闘振りであった。この日の主役は紛れもなく尾花ミキさん自身に外ならなかった。

昼食後のひとときのエピソード一つ――。

三人の責め役の同僚尼の一人で、一番若い英美枝さんが、スタッフにきいているのである。

「赤唐がらしなんて、おうどんにふりかけるものと思っていたけど、これをどこへ入れるのかしら？」



他の二人の尼さんは、奇妙な笑い方で口を押えている。スタッフの一人がからかい気味に、

「これを使うと新幹線なんだよ」
「早いのか？」

まるでトンチンカンである。赤唐辛子を握って、その役になっていて意味がのみ込めないのだ。唐辛子を実際にいれられた女性なんてそうザラにはあるまい。若い娘は妙に思うのも無理はない。

「いれて御覧、分るよ――」

スタッフがいうと、辺りがドッと笑う。

「カチカチ山の狸さ。飛び上るよ」

若い娘さんをカラカウことが、スタッフの

若い連中にとっては、忙中閑の肩の凝りをほぐすひとときだったに違いない。

× × ×

八月廿九日――。

台風十号の影響で怪しい雲行きである。

企画の天尾氏は朝から転手古舞である。今日の撮影で予定されている外人女性が、撮影所の門を潜るまでは、オチオチしてはおられない。七人の予定が、一人減って六人になったが、兎

も角九時半頃到着し、天尾氏はホッとした様子であった。

私は奇クの箕田氏に連絡して、この日撮影所で落ち合い、宣伝、企画に紹介する。大々的に奇クの方にPRしてほしい話であった。次々と速報とフォトを奇クに送って、スペースの許す限り、撮影状況をのせてゆく事に話は決まった。

スタジオ一杯に組まれたセットは長崎奉行所の詮索所である。数々の拷問道具が辺り一面にひしめいている。

漂流した外人女をキリシタンの嫌疑で、さまたまの拷問にかけ、それを彫丁が垣間みているといった趣向である。

日本語の通じる女性は、グラマーのケイ嬢と、一番若い、少女のようなハニ嬢の二人だけで、あとの四人は全然チンプンカンプン専ら通訳のピーターさんの手を煩わさねばならない。

緊縛や拷問指導の腕の見せどころで、私の活躍は始まる。何しろ六人の外人女性が、何らかの責めをうけているのだから忙がしい。両手足を縛って、手の縄を捲取機で巻き上げてゆく引伸し責めは、グラマーで色気たっぷりのケイ嬢である。

いきなり私の頭を掴み、ボインの谷間にぐっと引つけて、あっともがく私に囁やいた言葉がなんと

「ツジムラシャーン、シッシンサセテーエ」である。ようようとはやし立てられて私はマゴマゴする。彼女はMタイプでかなり協力的である。体を引伸された上、背の間に石を入れられ、尚、六尺棒でぐいぐいこじ上げられて、派手に絶叫していた。

数段高い石だたみの四方に拷問柱が立っている。そこへ三人の外人女性が昇る。私は工夫を凝らし一つ一つ形を変えて縛っえゆく。

後手縛りの吊り責めがアニタさん。無口のおとなしい被虐タイプの人で、かなり強烈な責めにも我慢した。

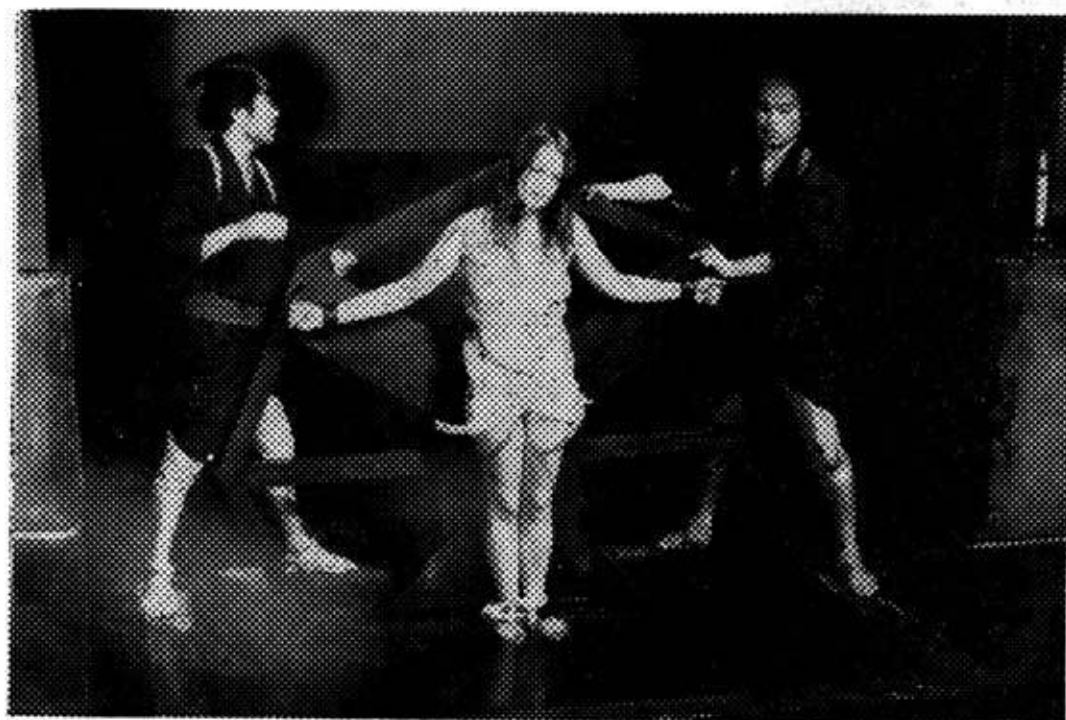
その前面は後手縛り片足吊りのジェーンさん。いたいたいといとよく文句をいって、通訳のピーター氏の口を煩わす。それでも最後まで頑張っていたが、気がついた時には、いつの間にか抜いたのか、後手縛りの縄を抜いて両手でしっかり柱を握っていた。

正面のT字型の柱に、爪先立ちの両手吊りは、一番年増の大柄なドミノさん。始終にこにこしているの、度々注意したが、分っているのかいないのか、相変らずニコニコしている。本番になったら、途端に激しく絶叫して体をゆすり、ギャーギャー喚いて苦悶の形相を現わしていた。結構心得ているのだ。

一番若いハニ嬢は、明日が駿河責めなので、今日は比較的ラクな、あぶり責めの台上に手足に鉄環をはめられて横たわっているだ

けである。日本語が出来る上、若くてやんちゃで、明朗なので、若いスタッフの連中や、捕方、同心等、皆彼女を取囲んでいる。一番の人気者で、どこで覚えたのか「星影のワルツ」を口吟んでいる。剃き出しの可愛いオッパイが印象的である。

水車責めには、銀髪の外人中一番の美人、リサロリ嬢がしっかりと水車に鉄環で、手



首、胴を固定され、ガンガン釘を打ち込まれている。両脚は揃えて縄で縛られて、水中に没している。本番で水面スレスレに水車は左右に横転し、魂切る悲鳴が大きく轟き渡る。明日は顔を逆さに水につけ、ぐるりと一回転さす予定であるが、いきなりやると怖がるので、今日は横転に止めた。

拷問や縛りに関しては、石井監督さんは殆んど私に一任されていた。やり易いようで、そのくせ責任があるので、いい加減なことは出来ない。

「責めの専門家が来て、縛ってるぜ。と、誰かが囁やいてたよ。あんたも有名になったもんだよ」

箕田氏は半ば感嘆し、半ば冷やかすように言った。奇クの知名度によって浮かび上がった私だから、奇クを離れたら辻村隆という人間はない。私という人間が、こうした映画に登用されたことは、それだけ奇クが有名になったバロメーターでもあるのだ。彼もしきりにカメラを構えてシャッターをきっていた。このスケールの大きい、一大拷問場が、彼にしてみても私にしてみても、いつか一度はこんな処でという憧憬の現実の姿であった。

雷鳴がとどろき、篠つく雨ものかは、部外者立入厳禁の貼紙のある、このスタジオ内は、妖しい異様な雰囲気をつندانにまき散らせて熱気を孕み、夕方まで、数々の責めを



くり返していった。最初は隠すようにしていた、オッパイも、時と共に今はむき出し、リアルに全裸で一糸纏わずに行こうといい出した彼女達に、嬉しい悲鳴をあげながら、それでも映倫を考慮して、あわててデルタを蔽う三角巾を準備すると、かろうじてその部分を蔽い、隙間から洩れてもいけないので、セロテープで張る厄介さであった。セット内には

六つの白い女体が、プンプンと妖しい体臭をまき散らしていた。最初はボインのオッパイや肉体に、唾をのみ込んでいたスタッフも、すっかり裸体に馴れてしまい、平然となっていた。

最後は、首におもりをつけ、四つ這いになって、手足に鎖錠をはめられた銀髪のリサロリ嬢が、捕方の割竹に尻を叩かれながら、よたよたと石だたみに上り、這いずり廻るシーンであった。本番を終わって、フト彼女の臀部を見ると、よほどきつく打ったのか、白い肌を割り竹の条痕が幾筋も赤くみみず腫れとなって、その激しさの名残りを止めていた。

カントクさんはこのシーンがお気に召し、もう一度、予告篇に挿入する部をとることにきめた。手ひどく打った捕方が恐縮して、割竹を毛の鞭にかえて予告篇をやった。

痛そうにお尻をさすりながら、やっと自分の使命を果たして降りて来たリサロリ嬢に、私は思わず近寄り、ベリイナイスサンキューを連発した。にっこりうなずいた彼女は、私に握手を求めて、アリガトウと日本語の片言でいうと、パチッと片眼をふさいでウインクし、腰をふりふり去っていった。その腰の赤い割れ竹の条痕が、一入強く私の脳裡に刻み込まれた。彼女もあるいはマゾであるかも知れない。一対一で撮る機会があればと、私は既にスタッフの大半が立ち去ったライトの消

えたスタジオ内で、そんな感懐にふけりつつ独り立ちつくしていたのである。

× × ×

八月三十日――。

昨日につづいての外人責めである。今日のシーンが、この『徳川女刑罰史』のラストにつながる最も盛り上りのある重要なシーンであった。

「あのチビちゃんを一番に行きましょう。疲れない内にやって下さい」とカントクさん。

予定通り一番若いハニー嬢が、駿河責めの型通り、背中で手足を縛り合わされて、捕方の力任せに引く綱で、サーッと地上高く吊り上り、宙にぐるぐると体は舞う。

渡辺文雄さん扮するサジストの与力、南原一之進が、悪鬼のように少女を鞭打つ。果ては、刀で顔をそぎ始める、その模様を見ながら彫丁の針は、町娘花の背に運ばれてゆく。三笠れい子さんも上半身裸体で、背一杯にキリシタン火責めの地獄絵の刺青が描かれてある。パッチリした瞳の可愛い人だ。彼女の顔立ちの中に、私は若き日の伊吹真佐子の顔をほうふつとさせた。よく似ている。

この日の責めは次々と捗る。アップダウン責めといった、ひとつのつるべに二人の女が吊られ、捕方の引く綱に、宙に上り、下り苦悶する。この役は、最初被虐的なタイプのアニタさんと、銀髪のリサロリ嬢が予定さ



れ、長い時間をかけて二人を縛ったが、一度リハーサルをやったら、大柄なおとなしいアニタさんが泣き出してしまった。腹が締まって苦痛に堪えられぬというのだった。何もいわず唯泣くアニタさんが、可愛そうになったが、その涙の顔に私ははつきりと被虐のタイプをみ出した。急拠グラマーのケイ嬢と交替ウンウンって二人はよくやってくれた。アニタさんはその代り水車責めをうけることになり、本番で再三、再四、逆さに顔を水につけられ、最後には一回転して、息もたえだえにもがいていたが、大役を果たしてくれた。この人は受難の日で、ついで首枷の後手縛りの尻打、ヒイヒイ喚いて、被虐の感情をよく出

してくれた。
水車責めには、昨日のつづきで、銀髪のリサロリ嬢が入れかわる。二、三回水中を逆さに回転して、水から上った彼女の顔は黒い滴が流れていた。アイシャドウがとけて涙と共に流れているのだ。それでも息を弾ませながら、この銀髪の美女は活発に笑って

いた。
ドミノさんは重石を背に縛りつけられての石責めと鉄棒の下から体を焼かれる火責め。ジェーンさんは元気がなく寝込んでいた。昨日雨に当って発熱したらしいが、本番には起き上って来て、石抱きのローソク責めの役を果たしてくれた。

少女ハニイの、そろばん責めの石抱き。そして最後のシーン、南原一之進の刺されるラストで、全員総縛り態勢に入って、時間で中断。あとは夜間撮影となった。

私はこの日夕方より、どうしても手の抜けぬ用事がかかえていたので、スタッフ一同に悪いと思ったが、夕方撮影所を去った。

拷問オンパレードの場面。さぞかし皆さんご苦労だったとお察ししている。
夜には、少女ハニイの逆吊りもある筈であったが、どうしても手が抜けなかったのは残念である。

× × ×

明日は彫丁の、風呂場の覗きシーン。彫りものに合った美肌、町娘花を見出すくだりである。九月三日は丹後半島のロケに随行して第一話の橋ますみ扮する「みつ」が、波打際に逆さはりつけになる重要なシーン。

冒頭の刑場の責め場、台所のどじょう責め女囚の責めと、私の出番は未だ未だ残っているが、スペースの関係もあって詳細に書けず締切間際ぎりぎりまで待ってもらって、やっとここまで辿りついた。事情の許す限り、ロケ日記として、緊縛と責めの模様を、スペースを最大限にさいていただいて書きつづけて行きたい。

辻村隆という私の名前もタイトルに出るはずである。世の奇クファン諸氏、刑罰マニアの諸賢、こぞって必見をお奨めする映画である。

◎九月廿四日のイレヴンPMに、出場が決定した。アングル作家の私も、いよいよ、皆様の前へテレビを通じて、顔を曝さねばならなくなつた。ハプニングでゆくが、SM談義がテーマであって、東映のスターや企画の方と御一緒である。どうかみてやって下さい。



白人娘を責める

編集子

「六人の白人の女性を責める場面を撮影するから是非見にくるよう」ということだったので、八月二十九日、折柄台風10号の襲来で集中豪雨の中を京洛太秦の東映京都撮影所を訪ねた。

降りしきる雨の中を次々と白人女性が到着してセット入り。百平方米はあろうかと思われるセット

いっぱい邪宗切支丹責めの拷問倉が、石抱き責め、水車責め、股裂き、吊り責め、木馬責め、伸し責めなどの空怖しいばかりの数々の処刑具を取り揃えている。

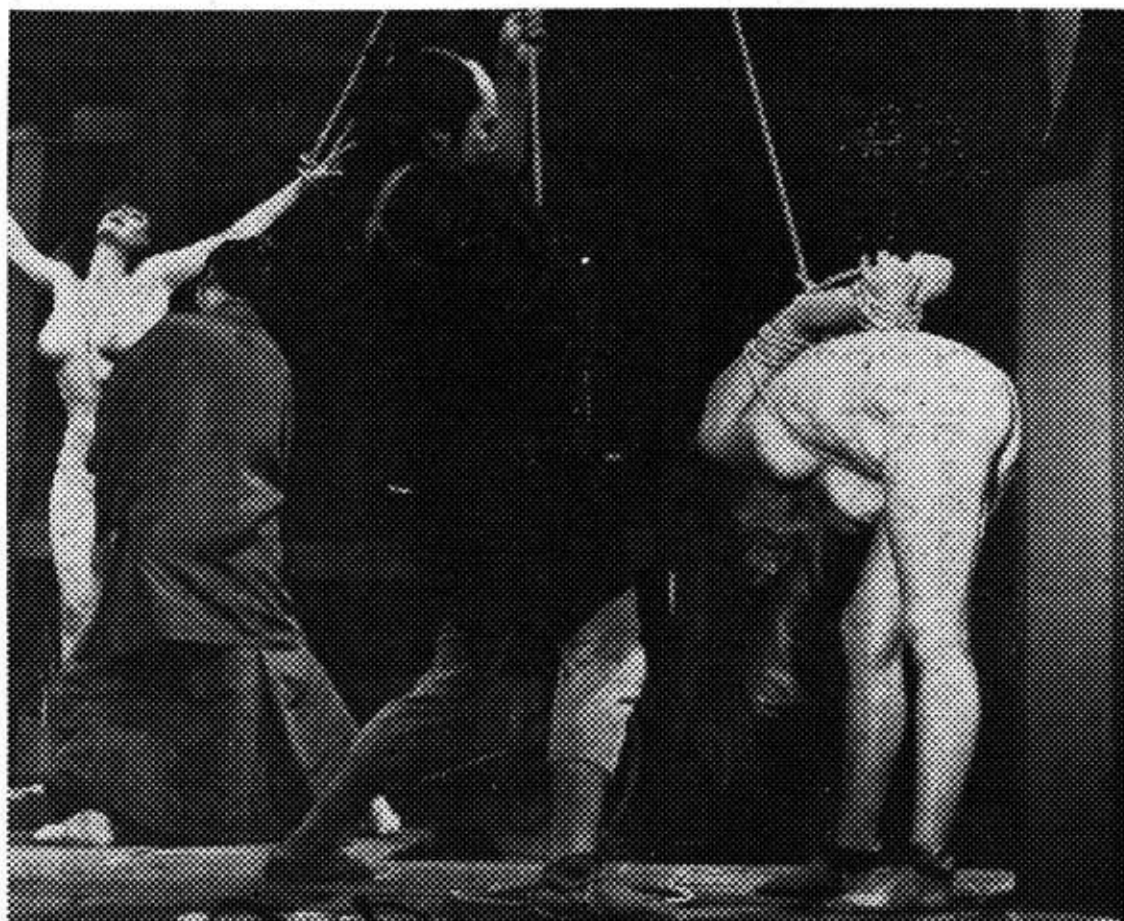
さす又や拷問用の伊豆石、分銅などがゴロゴロしている中に、束になった太いロープや縄が堆高く積まれてある。なにしろ、この撮影に使う縄類は十万円分買ったというのだから、女性緊縛に対しての並々ならぬ配慮が伺えるというものである。

カメラが格子のはまった牢屋の中に据えられると、緊縛係の辻村隆が伸し責めにあう白人女性を台上に仰向けに寝かして、両足首を揃えて縛り台に固定する。次いで両手首を頭上で縛り上げてロクロで伸し責めにするのだが、なにしろ生れて初めて、拷問される女優さんの方は大変である。テスト、テストの連続で悲鳴の方も、これまた連続である。

アップになる伸し責めのテストがOKになると、次は背景になる水車責め、磔、焼ゴテ責め、笞打ちなどの縛りに移る。ここで六名の白人女性が総登場ということになるのだが、辻村式の厳重な後手縛りで高手小手に縛り上げてゆく

と、三人目四人目となつてゆくに従って最初の女性が苦痛を訴えてくる。十数個のライトに照らし出されて、セットの拷問倉はムンムンとした妖しい熱気が充満してくる。

本番になると、責められる女性の悲鳴も一段と高くなり、責める役の与力、同心、下役なども魅せられたように演技以上の力が籠って、まことに迫力に満ちたシーンの展開となった。特に、はっきりと後手縛りの縄目にカメラの焦点を合せた場面は、かつてない圧巻だと思う。



金髪娘を容赦なく責めまくる東映の八徳川女刑罰史Ⅴは、今までになく超弩級の異色作品として、きっと本誌愛読者の方々のSファーンとして見逃すことの出来ない映画となるのではなからうか。



(第五十三回)

辻村 隆

過日、団鬼六氏より同好のよしみで東映京都撮影所の企画の天尾氏を紹介され、マニアにとっては必見の映画「徳川女刑罰史」の緊縛指導をさせていただくことになった。正に私にとっては趣味と実益を兼ねての、一石二鳥の仕事である。シナリオをいただいたが、本格的な責めや拷問、緊縛が全篇いたるところにふんだんに出てくる。奇クマニアを充分に考慮されての企画であって、十月第一週封切の予定であるが、更に来年正月には「元禄女刑罰史」。三月には「伊藤晴雨の生涯(仮題)」とSMマニア垂涎の企画が続々並んでいる。今後、或いはそうした映画にも緊縛指導で参画するかも知れないが、五社の映画への招聘は私のSM遍歴を顧みても初めてのことであり、私の真価を問われる試金石にもなりかねないと、大いに

張切っている。こうした面で参画した以上、かつての映画によく見かける、お座なりの緊縛(というほどでもないが)にならぬ様、十分御期待にそうよう努力するつもりである。(別稿「徳川女刑罰史」のスターを縛る"参照)尚、「伊藤晴雨の生涯」のシナリオは団鬼六氏が、これも初めて、五社製作の映画に進出される第一作であって、その物語の骨子は、いずれ奇クに掲載される予定である。

× × ×
激しい公演の連続で倒れた青木順子さんが、休養してもうかなり久しい。先日その相棒の向井一也氏から珍しくお便りを戴いた。青木順子さんが再起不能の模様で、今回新らしく、劇団「新しい波」というサジズム劇団をつくった。主題の素材として、SMの人間本能をとりあげ、新劇方向の実験的な

SMを追求してゆくそうである。男女演技者を募集しておられるので、SMを探究される方は左記に御連絡下されば、委細通知がある筈である。

劇団「新しい波」

本部 東京都保谷市中町四一五—一八

小泉 徹

連絡(A) 東京都新宿区新宿二—五七

一五七

実験小劇場モダンアート
連絡(B) 名古屋市中種区小松町二—一

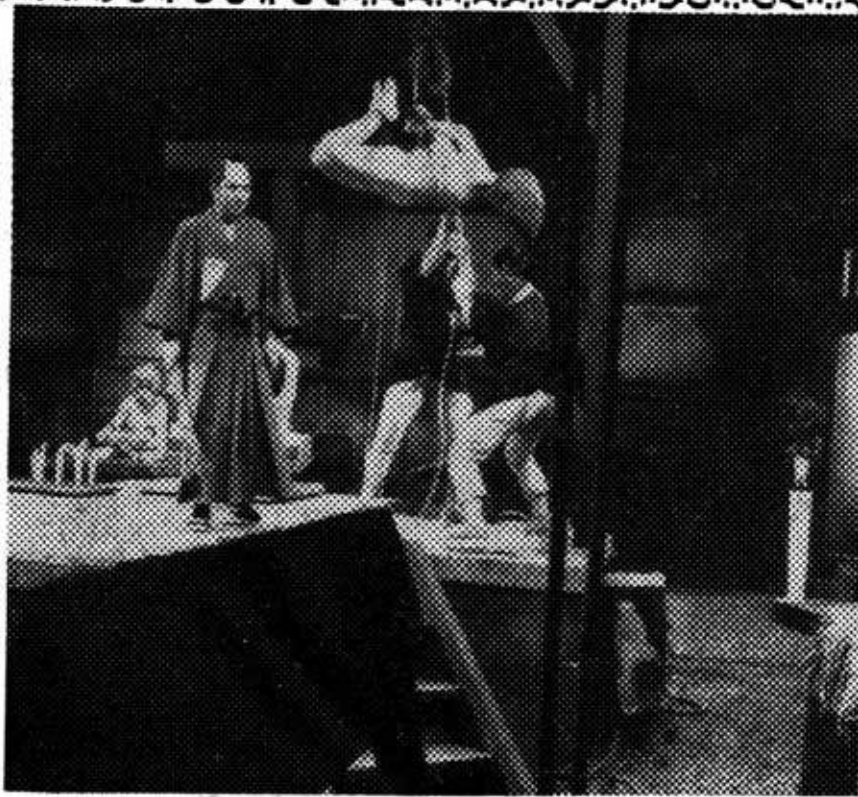
今池アングラ劇場内、向井

尚、希望者は、履歴書、写真、動機を述べた作文(一一二枚)、十五円切手同封の上申込まれること。

× × ×
数日前、増田喜代司氏がひょっこり訪問された。「連縛無惨像」を撮って以来、音沙汰がなかったが、今般、大阪から札幌へ転動することになったので、当分お目にかかれないので挨拶にきたということであった。急拠赴任するのでみゆき夫人と二人のお嬢ちゃんを置いてゆくそうで、いずれ落着いたら呼び寄せるとかいていた。(子供さえうるさくなかったら、

編集部だより

○団鬼六作「東映」映画化決定作
品「伊藤晴雨物語」(仮題)「読切百枚」が本誌に掲載できることになった。目下鋭意執筆中とのことなので、多分十二月号に発表できることと思う。ご期待を乞う。
○この「伊藤晴雨物語」は文芸作品として東映でも大変力を入れているそうなので本格的なS傾向の映画が五社の映画化となるわけだ。本誌としても劃期的な映画化決定作品の発表ということになる。
○八月二十日より東映京都撮影所にてクランクインした「徳川女刑罰史」の緊縛指導として辻村隆が登場した。従来の映画の縛り場面のようなまやかしないで本格的な辻村式縛りを画面に展開したいと張切って連日緊縛指導に余念がないので、きつとファンの方々の満足される縛り場面がふんだんに出てくることだと楽しみにしている。
○切支丹信者の責めに登場した白人娘の一人が大いに緊縛のアイデアに共鳴、本誌のモデルになって、もよいというご托宣であったが、果してS好みかM好みか、いたく



プレイしに行っちゃって下さい。何なら泊って行って夜っぴて虐めてやっても構いませんよ。みゆきも、辻村さんなら構わないっていつていましたから——と、女房のプレイや浮気公認の有難いお言葉であったが、まさか、ハイそうですかと喜んで行けない。奥さんだけで困ったことがあれば、いつでも相談にのる旨を約したが彼の言葉が心に引っ掛かったのか

次の夜、ものの見事に年甲斐もなく妖しい夢を見た。その夢の内容は言えない。

昔は、女の名前を使つての、冷やかし半分、面白半分の偽モデル応募が多かったものだが、時代が変わったというのか、女性の奇クファンが殖えたのか、それとも大胆な刺激になれてきたのか、本ものの、女性モデルの応募がかなり多

徳川女刑罰史

『ロケ日記』

辻村 隆

八月廿日 夜

午後が続いて駿河責めが続く。ハニイ嬢の耐久力には感嘆のほかはない。捕手二人により宙に引き上げられる白い体。与力(渡辺文雄さん)の厳しい鞭打ち。その都度、真に迫った絶叫が挙る。リサロイ嬢の水車責めも激しい。

くなった。しかし応募の方が全国的に亘っていて、編集部でフォトを見せてもらって、食指の動くのも数多あるが、その人ひとりのため、遠隔の地へゆくほどの気力もない。松江の東田さん、佐賀の田中さん、仙台の並川さん、旅費、宿泊費を負担しますから、上阪しませんか。もし来られるようならプレイのあと、何処かドライブにでもお供しますが——。

× × ×
先日のPM11に辰巳典子さんが出演していて、久し振りに懐かしかった。そういえば彼女の活躍はめざましい。武智監督の『浮世絵残酷物語』でも、彼女は主演級である。彼女や、谷ナオミのプレイがさらにとしていたのか、鬼六氏の話では、機会があれば、又いつか会いたいといっているそうだがその思いは私も同じこと。ピチピチと若さ溢れる谷ナオミさんと、心ブラでもして、秋の一夜をしみじみワインをくみかわしてみたいなどと考えていた私の願望もあながち夢ではなさそうである。『徳川女系図』に出演した彼女の評判が、東映内でも非常によい。天衣無縫、明朗な彼女の人柄が、誰にも好かれるからであろうか。

興味のあるところである。我と思わんM人士は勇敢に神酒拝授と立候補されては如何だろうか。

○今月号に掲載したシナリオ「肉体手形」に出演している京マコは△花と蛇△のファンと称して団先生を訪れた女性でM性たっぷりの可愛い子ちゃん。特に乳房が見事とのこと、本誌のモデルになってもいいと言っているそうなので機会があればカメラハントの対象として登場して貰いたいものだ。

○木戸悦子さんの妊婦モデルとしての登場に刺戟されてか、引続いて三人の妊婦の方から便りを貰った。中には二十才の若妻から大胆にもカメラの前に立っててもよいというお申出を受けたが、地理的に遠くてチャンス逃してしまつたのは至極残念である。

○東映京都撮影所の宣伝課から徳川女刑罰史の企画に際し座談会をという話があったが、十月一日の封切に間に合うよう十一月号に掲載させることは無理なので中止になった。長い間、座談会の開催も行っておらないので読者有志の希望によつては、美貌の女性の登場を願って、誌上に掲載できるような、内容のある△座談会△を催したいものだと考えている。

小竹一浩様に……『私のM感』

愛知葉子

十月号、小竹一浩様の、『私のSM日記』を読み、私は少しばかり異なる意見を持ちますので筆を執りました。

小竹様の意見に、全面的に反論するものではないことを、最初に申し上げておきます。

とくに夫婦プレイでは、セックス・ムード・プレイであることが大前提であり『SSMP』も、まったく同感でございます。

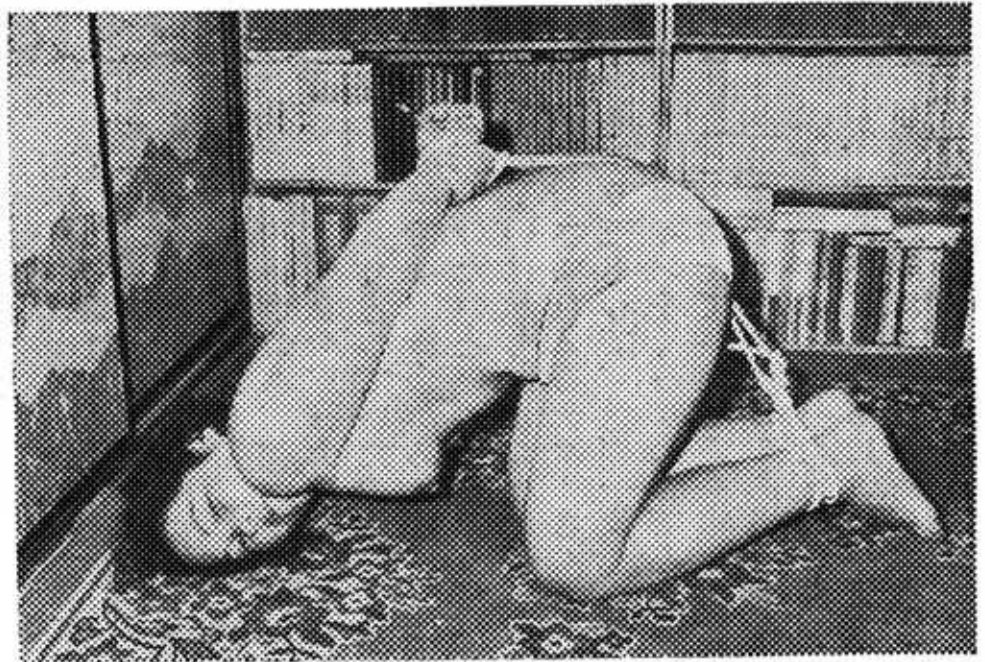
それでは、何を反論するのかと云々と、羞恥心の薄らぎ、又は、これを無くしてしまつては、プレイの意義が無くなると、おおせのようですが、Mの立場から申し上げますと、羞恥心が無くなると云々について、いささか疑問に思うわけなのです。

私共は子供も有り、SMプレイについても、夫婦生活とほぼ同等の歳月を過ごして来ました。特に結婚後まもなくから、生活の記録と楽しみとを合わせて夫婦生活のアルバムを作つて来ました。その関係からかも知れませんが、羞恥

というものは夫に対してはあまり感じないように思うわけです。でもSMプレイは折にふれ楽しんでおります。

小竹様の云われるとおり、一時は過激な方向へ進んだことは確かです。しかし、それはほんの一次的でした。私がMとしての喜びをまだ知らなかった時期の事で、Mの喜びを味わえるようになって来ると、逆にプレイの方は、次第に手軽に出来る簡易な方向に変つて来ました。と申しますのは、私がMで味わうものは羞恥心より感じるものではなく、拘束され自由意志の働かない処での、忍耐の限界で味う喜びが非常に大きなウエイトをしめるからです。勿論、それがセックス・ムード・プレイと云う範囲の内のことであるためかも知れませんが。

緊縛され動けなくなっている私を、夫が愛してくれる時、喜びと苦痛に対応する動作が拘束されて



いるための、はがゆいようないらだたしさ。自分から行動出来ない一方通行の内に、忍耐の限界がくずれそうになり、くずれまいとする気持と、逆に体の方だけが勝手に先に先にと進み、どうしようもない状態になった時こそ、本当にMの味わいが有るのではないかと思うわけなのです。

最近、とくにそれを感じるので

すが、気持とはまったく別に、体は、緊縛され固定された四肢を支点に身もだえし、不自由さの中に得も云えぬ悦びを味わつてしまうのです。自由で自然なままだと、自分をコントロールすることも出来ませんが、拘束されての一方通行だと、体と気持が交錯し、意識は混沌として、天地が動揺しても分らない状態になってしまします。

そして、全然自分とは関係ないものがどこまでも勝手に突走つてしまつて思うに思います。このような状態に馴れたせい、今ではもう条件反射で動く動物のように、夫がその拘束具を持ち出しただけでも、はや充分に受入れ体制が整った気持になるのを感じます。

以上申し上げました事は、私個人の意見で多くの方々に適用できることとは思いませんが、私と同様に思つていられる方も有ろうかと思ひ、小竹様の、羞恥心がなくなるとSMの意義がなくなる、と云われる意見に対し、私の意見をのべさせて頂きました。

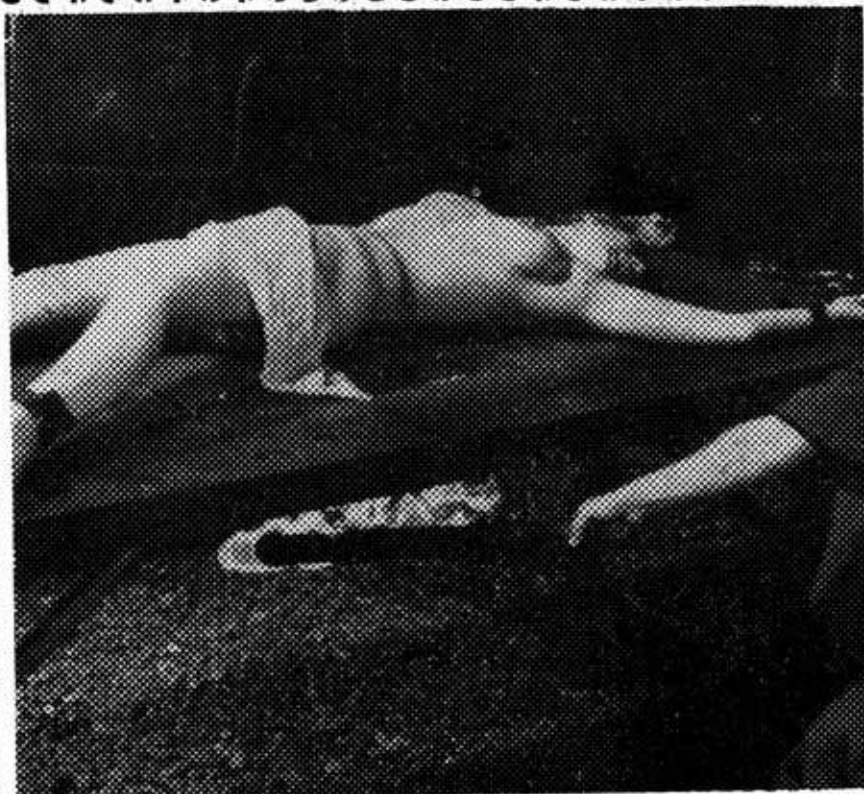
小竹様はSの立場からであり、私はMの立場からであるので、当然、いくらかの意見のくい違いの有る事は当然と思ひます。

奇特な男

汚物掃除

岩田浩二郎

大きなビルや病院の女子用トイレには、ボックスの隅にプラスチック製の容器が置かれているところが多い。



近頃は水に溶ける生理用品が出廻ってはいるが、今だに従来の物を使用している婦人がたも多いために、パイプの流通保存のための自衛手段である。つまり、水溶性以外の使用済のものは、この容器に捨ててチヨウダイというわけだ。従順性のある女の人は、この「お願い」を素直に諾く。

ある病院に、ひんぱんに出入りする一人の男がいた。患者でもなさる。ドミノさんの火あぶり責めのシーンでは、与力の手の迫るたび、燃える炎で、本当に白い肌焼けはすまいかとハラハラ。本番開始と同時に、苛酷な刑罰の場が再現。嗜虐の血を沸き立たせて、私はただ陶然と見守るのみであった。炎上する私刑場を、刺青娘が逃げるシーンで徹夜撮影を終る。

いし、病室を訪れる風でもない。大きな病院だから人の出入りは激しいが、何度も便所で顔を合す日が続く。掃除婦のオバサンが不審に思い出すのも無理ではない。オバサンの、男を監視する目が光り出した。

知ってか知らずか、男は病院へ来ると幾つかある便所を、何気ないふりをしながら廻り始めた。オバサンの不審はますます深まったが、便所で怪しげな事件が起ったこともないし、聞いたこともなかった。ひよっとすると痴漢？と思ったオバサンの推量は外れた。その内、男の持っている包みの大きさが、出てくる度に少し違っている様子に気がついた。掃除する恰好をして便所内まで行って見ていると、男はやはり女子用ボックスから出てくる。

オバサンはすぐそのボックスを調べてみたが異常らしいものはない。だが思いついて、便器の傍に置かれている容器を調べてみた。異常はそこにあったのだ。自分が受持ちで捨てなければならぬはずの「汚物」がないのだ。昨日からの分だから、無いはずがない物が、ないのだ。オバサンは、今まで気にしては

いなかったが、入っているべきはずの容器が空であったり、一杯でもないのに外にこぼれていて、行儀の悪い、と思ったことのあったのが想い出されて来た。じゃあ、あの男は……？ オバサンはヘッドが出そうな気持ちに襲われた。

「あれにやいろんなモノが捨てられるからナア。汚れきったパンティや、替えたばかりの脱脂綿なんか欲しいものらしいよ。しかも生理中の女のネ……」

オバサンの話を聞いた病院の事務長は、困った顔付きで腕を組んでそう話した。

「男子の立入りを禁ず」と書いた貼り紙が、ことさらのように女子用トイレの入口に貼られた。

男の姿が現れないようになってからオバサンは、気味は悪いが、考えてみれば自分の仕事をひそかに手伝ってしてくれたのだ、と気づいて、事務長に告げたことをかすかに悔んだ。

その男は、またどこかでだまって奇特なトイレ掃除の手伝いをしているに違いない。……えっ、お前じゃないかって？ その「男」が？ まあ、自由謳歌の世の中だから、どうお考えになろうとご自由……

映画通信

大映映画 「秘録おんな蔵」

東山映史



て出した。

長襦袢一枚にされた上、前手縛りで引きずられていた安田道代の扮する遊女お夏。

両手、両足を一つに束ねて縛られ、猪吊りに下げられたり、逆さ吊りにされたりしている美女達のあらわな姿のスティールはなかなかサジステイックな雰囲気を出しているものである。

「おんな蔵」とは、昔各遊女屋に設けられてあったという折檻部屋の異称であって、廓から逃げだそうとしたりしきたりを破った遊女が、この部屋で、責められたという。

物語りは、この吉原の廓に売られてきた町娘お夏を通して、彼女自身が目で見、身体で覚えていく昔の遊女の生態を、ショッキング

大映が「秘録おんな蔵」という江戸伝馬町の女牢での、女囚たちの特異な生態を、ショッキングに描いてヒットしたのに味をしめたものか、「秘録おんなシリーズ」として「秘録おんな蔵」を、続け



な蔵にはうり込まれて半裸にされサシザン答でなぐられる。この時には縛られてはいなかったが、答に叩き伏せられる半裸の悶えぶりが、凄まじく感じられて迫力があつた。

リンチシーンでは、廓の辛さに耐えかねて逃げだそうとした三木本賀代扮する遊女琴系が、湯文字一枚にされて手足を一つに縛られ、天井から吊り上げられて棒でなぐられるという折檻シーンがショッキングだった。

ただ、スティールにあったようなハシゴ縛りとか、さかさ吊り、裸女の二人連縛などの場面が、かんじんのスクリーンには出てこなかったのがさびしい。

以前にも、こんなことがあって誌上に大分不満が出ていたが、天下の大映さんだ。何かの都合でカットしたのなら、スティールも出さずにおいて欲しいものだ。

にくりひろげていくもので、廓特有の女くさいリンチの数々。思いらん同志の凄まじい血斗。自分ゆえに罪を犯した男のために、小指を切る遊女。日夜の責苦にたえかねて自殺する妓等々の、花やかな廓の蔭で行われて来た陰惨な悲劇が描かれている。

ヒロイン、安田道代のお夏は、父親を自殺においやった男に、手紙を証拠にして復讐しようとするのであったが事前にバレて、おん

映画観賞感

拷問シーン 早木夢二



やっと「極秘女拷問」を観て、男の拷問姿というものは、なんと小汚ないものか、と感じた。菱縄に縄がけしてもらい、慶子からさまたまの拷問を受けては、苦悶したり喜悅したりしていた心

の裏には、女とはまた異質の、男の責められる美しさがあるものだと信じこみ、自分自身で描いた幻想に浸りきっていたのだ。それが、画面に現われた男責めに、ああ俺もあんな風なのかと、

九月一日

彫丁が女風呂を覗き見る場面。刺青の地獄絵を彫るにふさわしい娘を物色するといふのだが、三笠れい子さん扮する町娘を中心に、ムンムンする女風呂風景。フォートに現れない全裸像が右往左往。勿論部外者は立入り厳禁。裸女には自信のある私も、いささかタジタジの態。

何だか急に心細くなってきた。こんなことでは、今後の私たちの折角のプレイにも、心理的に気おくれがするに違いない、と思わざるを得なかった。しかし、また、綺麗に菱縄をかけて、もっとマトモ(?)な拷問なら、あんな小汚ないはずはない、などと、無理に考え直したりした。

女の方は、それこそゴクロウサンといいたくなるほどの拷問の連続で、私のお目当ての菱縄をかけられていられるのも含めて嬉しい限りであった。

ただ、いかにも一日で撮りました、とはっきりわかるようだったのが難点。

始めのキツチリした菱縄はよかったが、次は両手は自由で体だけの菱縄、その次には、もう縄がけはくずれてしまっただけ、首から縄をかけ下ろしているだけ、となってしまうのは気に入らなかった。

全篇を通じて、実にさまざま拷問が出て来た中で、私の一番いいと思えたのは、菱縄縛りで水平に吊られ、刺又でのどを責められる場面だった。いかにも昔の拷問らしい感じがあった。

海老縛りでの笞打ち場面もよかったが、背中のがんじがらめとは

まるで逆に、前面には縄のかかっていないのが残念。

何か菱縄縛りだけがよかったとっているようだが、実はその縄がどうみても太すぎる感じだったのだ。女の体には、もっと細目の縄の方が美しいと思う。尤も、拷問映画だから、縄がけも拷問だといえどそれまでだが、太目だと締りが悪く、始めの乳首隠しのよう縛り方が、責めにつれてだんだんとズレ、しまいはとび出してしまっていた。

後で思ったことは、私たちは無責任にいたい放題にけなしてはいるが、拷問を主体とする映画の難しさはわかるような気がする。拷問の迫力を出すのにキレイ事だけでは済まないだろうが、責め方によっては、美しい迫力も出せそうに思うのは、やはり無責任な人間だからだろうかとも思う。

責めればいい式の、変則的拷問場面、アビキョウカンの連続では見る方が疲れるのではないか。

最後に、腰巻一枚で責められ続けていた女が、着物を返して貰って嬉しそうに頬ずりする場面があったが、見ていた私には何か「花と蛇」ずれしているようにも思えて仕方なかった。

投稿者並に編集子に望む

徒 然 子

面白い雑誌だと思って、奇クを読み始めてから三年になる。

初めて奇クを見たのはそのかなり以前だったが、グラビア写真や挿絵が盛り沢山で、ナントマア、という驚きが強く、その時には現在のうちに月極読者になろうとは思ひもしなかったことである。終戦後十年そここの頃で、性のタブーが解かれた街には女の裸形がハンランし、活潑に生きる者の悦びがうたわれていたようだし、手許には毎月変った例の写真が廻ってきて、その収集に忙しかった。

最近、世情の安定と共に官憲の取締りによってそれらは影をひそめたようだが、なんとか連などのつき上げか、性に関するものなら真面目なものまでに、眼が光りだしたようである。最近の奇クを読むと、編集子は憶病と思われるほど、それに気を遣っているのが察せられる。

古くからの読者の投稿であろうが、昔にかえれとか、グラビア写真、との要望も多いようである

が、もう元に戻ることはむづかしいのではなからうか。視聴覚に直接訴えるのは、たしかに強烈な力があるが、読む雑誌ならば必要度が違う。ただ、読む雑誌のむづかしさが昔の何倍かの重さでのしかかってくるだろう。諸者の投稿によってもつ雑誌ではあっても、読者が味読するに足る内容、表現のある文章が要求される。

一つの事実、一つの幻想感覚がある。それを読者に提供するためには、読ませる為の文章化の努力を作者に望まねばならなくなる。その内容にとび込める文章化、表現化が必要となってくる訳だ。その事実に通じつくるまでの冗長さ（九月号で系振昇氏は、親切すぎる描写、といっている）は切り捨てて欲しいものである。あまりクドクドしいものは編集部において削除してはどうだろう。勿論その際作者の意図は尊重しなければならぬのだが……。

千葉青鬼氏のいわれるように、万人の共感を呼ぶものは不可能に

イメージ画「ブランコ」

春川ナミオ



しても、簡潔にして余韻を感じさせ、想像をたくましく出来る工夫がほしいものである。プロ作家の洗練された文章を投稿者に求めるのは無理だろうが、それらを真似ても、気持よく読めて、強く訴えるべきことや、事実が浮き彫りにされたものを読ましてほしい。

三島由紀夫氏は、読者は狂人であるとして評したそうであるが、その小説を読んで、いかに感じ、いかに想像をたくましくしようとも、それは読者の勝手であろう。斎藤夜居氏は、艶本書は読む媚薬であると評している。奇クを艶本視するには問題があるが、これだけ

の雑誌にして、読むに耐えるものが四、五篇ぐらいしかないように思えるのは情けない。

九月号の「愛妻記」は、感傷的だが、泌々と読まして貰った。この程度のもので全頁を埋めることは無理なことだろうか。

簡潔を望むことをクドクドしく書いたが、これらの嫌味も奇クを愛するからであって他意はない。一流文壇人の如き洗練さを望むとはいわない。余り冗長に陥らないで、マニヤの心を慰めてくれるような努力を投稿氏に願ひ、更に添削に充分な意を用いられるよう、編集子に強く望むものである。



十月号 「狂執」について 呪 諦夢

先達も書いておられましたが、倒錯として闇に葬り去られている唯一無二の、マコトの情念を、汎エロスの立場から、それ自身を目的として表現するか、或は、性の解放とかで他の物を表現する手段とするのか、貴誌の方針に今一つ

スッキリしない、何かを感じるのでございます。例えば、10月号の「狂執」についての《後記》でございます。

ネクロフィリア（屍体愛）と申しますれば、ポーや乱歩、或は、夢野久作ら、先人達の間では、日

九月三日

刺青師彫丁が、うまく拐かした町娘花（三笠れい子さん）に、地獄絵の下絵を書くシーンの撮影。見事な肌に描かれてゆく下絵の線は、想像以上に艶かしい雰囲気をかもし出し圧倒されそう。この日、丹後半島へのロケで、波打際の水礫の場を撮る予定であったが、準備の都合で延期。

常として取り扱われた、人間本質への、生々しいアプローチの思想形体なのだと思えるのは、私だけなのでございましょうか。「狂執」が、後半に於て、一慣性を乱し、説得力の欠如を来たしているとは云え、その、垣間見られた、死の逆説的リリズムには、確かに、人間の存在の何たるかを、少なからず感じさせたのでござい

が、それを、《本誌では冒険》と後記されてあるのを見て、ショックを受けたのでございます。「花と蛇」ならば、他国からの出

歯亀も、垂涎いたしましたように、「告白」記事となると、これはくだらない、と云って一笑に附すのでございます。どちらに真実のマコトの叫びがあるのでしょう。生き続けるという贅沢を、必死に背負って彷徨う姿は……。

雑魚どもに、何の感性がござい

ましょう。何も無いのが現代ならば、確としたものは、この重い肉体でしかないのかも知れません。

しかし、それすらも、忌むしい意識の派生態であるのなら、確としたもの、マコトとは、無の意識、澱んだ情念以外の何物であり

ましようか。

肉体に縄目、アヌスに感性を帯びてしまった生まれにとって、それ以外のマコトが、どこに存在するでございましょう。

観念で空無を埋めようとする徒勞よりも、次の一撃を待つ、〇・五秒の空白に喘ぐ女性にこそ、重たい生の神秘、悪魔的な死の本質があるのではないでございましょうか。全てを無に帰す死を見つめる、激しいせめぎ合いがあつてこそ、生が豊饒になるのです。

確かに、人生は演技でしょう。ドラマは完璧なのでしょうけれど、たった一つ、この澱んだ怨念を孵化し続ける実感主義者達には、擬制を超越する特権的肉体と、特権的時空を所有することが可能なのです。

貴誌こそ、その《場》として、喘ぎ蠢く私達に、存在しているのではないでございましょうか。

人間もどきには到達出来ない、不可能性、宇宙の神秘性の世界に己が存在を浸すためにのみ。マコトの愛を触知せんがためにのみ。

「狂執」から、すくなくとも《冒険》と云う名譽のレッテルが剥脱される日を待ち乍ら。

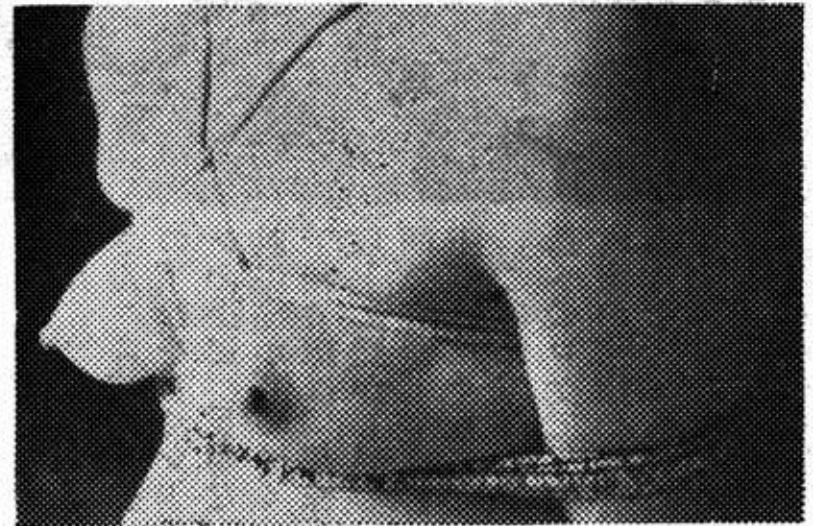
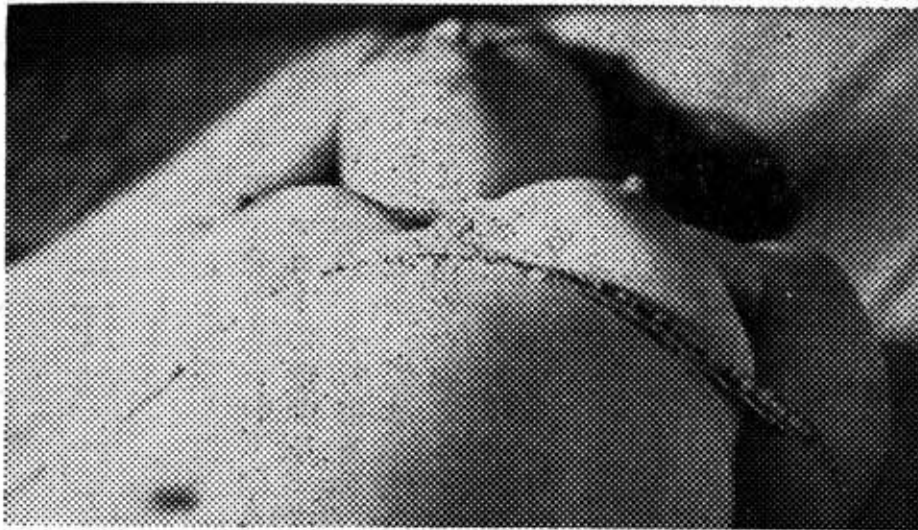
私達の記録

ゆりこのポーズ

山口 登

誌上で夫婦プレイの記事を拝見する毎に、私達も名のり出たいと思いつながら、もう長い間がたつてしまいました。

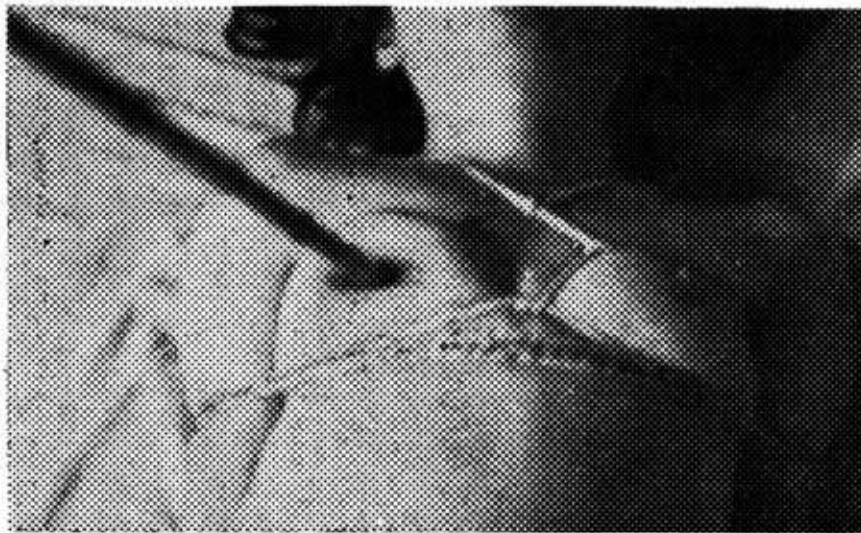
私達の住むところは大変に田舎



でして、寒村につきものの、はた眼のうるさいところです。サロンに通信したくても、どうしても万一、村の人に知れたらなどと考えてしまつて今迄出来ませんでした。が、私達の唯一とでもいうプレイの楽しさは、二人きりの世界でひそかに行つていますので、妻ゆり子があまりトシにならない内に、本誌に載せて戴きたく、思いつて写真を同封致します。

家もまばらで、もちろん一軒家です。から、思いつたプレイも出来るようですが、もし他人に知れ

たらという心配があつて、いつも静かに、妻の体を縛ることぐらいが精一杯になつてしまふのです。それでも、今のところ私達二人は、十分に楽しめます。なにもそんなにビクビクしなくてもノゾカレているはずもないと思う時もあります。が、田舎に住む者のみじめさを痛感します。本名の方は、お知らせするのを今少しお許し下さい。まだその勇気がありません。



＜短歌＞

「さらし刑」

高村 初子

うなだれて縄尻とられひかれゆく娘の腰にミミズ脹れ見ゆ

一枚のむしろの上にすえられていましめのままさらされており

素裸の身を後手にくくられて晒しの責めに悶えつついぬ

黒山の人垣の中かこまれて晒さるる身の後手かなし

用便もむしろの上で強いられぬさらしの刑の定めと云われ

心なき人々の声あざけりぬ晒される身に針とささりて

覚えなき無実の罪に捕われて泣きつつ晒す乙女の素肌

浅ましく前をさらしてさかさまに括られし身にあざけりの声

あえかなる白雪の肌いまむざんみだらの縄に女さらして

私たち・

夫婦の・

・プレイ・

渡辺定春

奇くは毎月確実に受領、拝見してはいますが、近頃とくに、夫婦緊



縛プレイ／＼SM一〇〇問の記事が思い出され、私たちも是非安井喜久子夫人の仲間に入れてもらいたいと思います。

私たち夫婦は、毎夜のようにプレイを致しておりますが、サジズム性の私より、妻のマゾヒズム性のほうが強いかもしれません。私が早くネをあげる傾向があるので、私の妻をご存知の方はあります。渡部千代と申します。

九月四日

刑罰史のトップを飾るハリツケ。

高いハリツケ柱に縛りつけられた女囚二人。自分の手で縛ったのではあるが、下から見上げると、悲哀感がそくそくと伝わる想い。ハントの際のそれとは感じが違う。やはりセツトと扮装によるものか。刺されての演技も、さすがに真に迫ったものだ。

「夫婦緊縛プレイ」の妻を写した写真もありますが、だれにでもご覧に入れるというわけにはゆかない、私たち二人だけの秘密写真です。「安井喜久子夫人」のお写真と交換などしたいと思いますが、いかがでしょうか。またお互いにプレイはどうでしょう。

引伸したのもありますが、私たち二人きりのもので、写真もプレイも、どこことなく同じような感じがして、私にはアキアキしたものにみえてしまいます。

私の本職は服装デザイナーで、三年前までは大阪市内におり、都合で、こちら出雲路に移って来ました。仕事は毎日多忙ですが、私の妻は毎夜プレイを求めます。主に縛りですが、いつも同じことばかりでいやになっていきます。彼女の好むプレイは縛り上げたうえに流腸し、そのまま次々に責め、注入した流腸液を吸い出すプレイが一番気に入っているそうです。私は自分の口で吸い出してやりますが、とても全部というわけにはゆきません。

また彼女は昔から切腹マニアでもあります。白い肌に鮮血が流れだすのを、苦痛を味わいながら見るうれしさが忘れられないと申

します。けれど本当に切腹したらとても、余り美しい写真にはなるまいなどと言いますが、一昨年の春に本当に腹を切って自殺しようとしたことがあり、私が発見したときには血まみれで、苦しさにのたうち廻っていたのを見ていますので、驚きも一緒になってとても美しいなんてものではないように思います。後になって、血がいくらでも出て来て、ぬるぬるするので思うようにゆかないものだと言っていました。いくら好きだといっても、本当に切腹されてはたまったものではありません。

そこで、そんな危いのはやめろといって、縛りプレイに力を入れるようにしたのですが、あの時にはまったく驚いてしまいました。今ではほとんどキズもおおってしまいますが、彼女も切腹のかわりに縛ってくれるようにセガムらしいのです。

冬はさすがにハダカになると寒いので、昨年は近くの温泉によく行きました。すぐ近くですので手軽に行けます。温泉でのプレイも私たちには楽しみです。安井喜久子夫人はじめマニアの方。一度ご一緒に温泉プレイなどいかがでしょうか。

提 案

本誌読物の

アンコールを

香川 泳三

わが奇ク誌の、古本市場における価格は、さいきん一段と高くなつた。内容によつては、白表紙当時のナンバーでも千円をよび、今となつては入手困難の号も多い。すでに、海賊版の横行もうわさされる。文献資料としての価値がいよいよ出てきたのである。

そこで提案がある。

十数年以前からの本誌記事、読物のなかでも、ことに好評だったものを採り上げ、もういちどアンコールにこたえて、誌上に再現してほしいことだ。

『ネクター』なる名訳語を世に紹介した、沼正三氏の『家畜人ヤプー』を私は、ある必要上いま読み直しているところだが、この小説の、すばらしさは知る人ぞ知るところ。エンサイクルペディアに模して、家畜どもの生態を活写するなど、大胆な手法に目をみはら

せられる。

この小説が一流出版社の目にとまり、単行本刊行の話も当時あったと聞くが、実際に読んでみるとその評価の正しいことが痛感される。貴重な誌面ではあるが、こうした名作を埋もれさせて終るのはいかにも残念だ。

よつて前述のとおり、毎月一本『リバイバルのページ』を設け特選の名作を（とくに複刊いぜんの評判作を）順次、よみがえらせてほしい。グラフがなくなつた今日せめて、なつかしの文章は、二度三度と、装いをあらたに、再登場させてほしいものだ。

新造品 「高級ジュース」

香 気 放 亭

（材料）

ビール小ジョッキ一ぱい。アジシオ少々。化学調味料少々。塩、酢、酒石酸、アムモニア少量。ハッカ液少々。

（つくりかた）

ビールは栓をあけて二十四時間放置し、これに前記材料を適量加える。加える順序は、前記の順でよい。

（呑みかた）

あればカクテルシェーカーでよく振り、トロ火で人肌にあたためる。あなたの好きな映画スタ―や、あるいは、あこがれのひとの顔を思い浮かべながら、自分はいま、これを無理に口につぎ込まれるのだ、というシーンを設定し、味わう。アムモニア臭と、ハッカ液が舌を刺戟。ま

ずくて口にさからうジュースを目をつぶつてのみくだす被虐感
は、最高です。

さて、こんなインチキ材料でごまかされず、ほんものを、手にいれられる幸運なあなたは、供給してもらつた「ホンモノ」をベースにして、これにカルピス、レモン、ドライジン、紅茶などを加え、その味をいっそううまくする加工をすることです。尚、固体のつくり方は目下研究中。うまくつくれたらこの欄で報告しましょう。

イメージ画 「SM流生花」

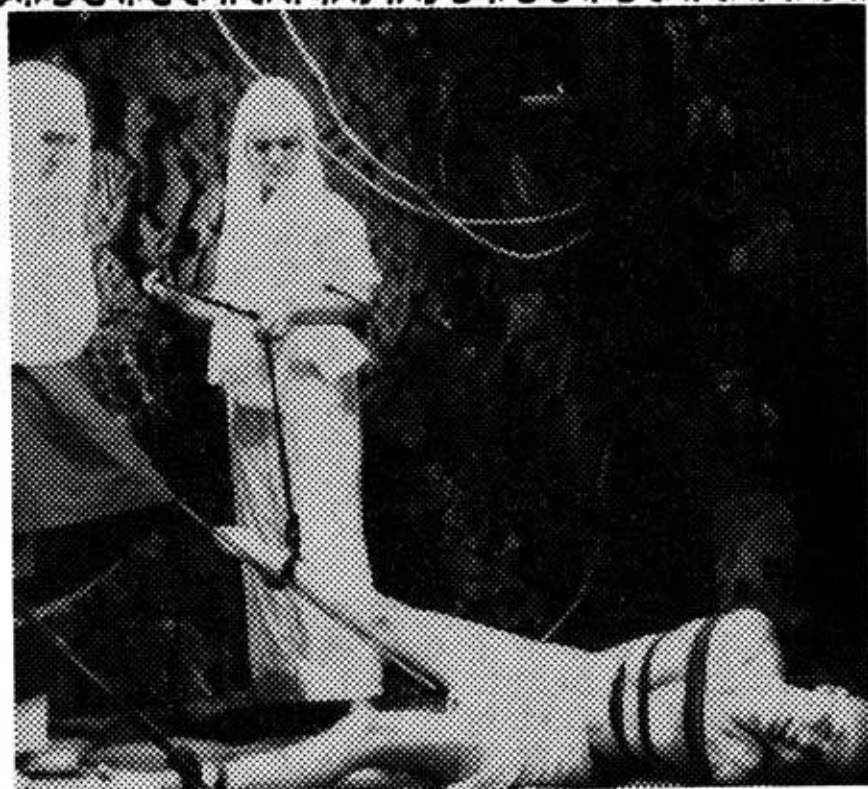
さそり達也



ひっそりと

清瀬 某

ひっそりと眼の前にある白い背に、ひっそりと組み合わされし白魚が、ひっそりと動いて吾を呼ぶ。ひっそりと捌く紐にも深き蔭、ひっそりと喘ぎをみせる愛し肌。ただそれだけのことで、吾が胸底に花が咲く。ひっそりとほえみ交し、次間を窺う。



『本誌自粛の徹底』について一言

大島 三十七

私は貴誌を九月号からしか読んで居りませんので『本誌自粛の徹底』なる条文が、いつ頃から掲載されているのかは存じませんが、その内容からして、編集部から正式の申し開きはなかったのではな

九月五日

尼寺、地下での尾花キミさん。焼け鉄棒で虐殺されるシーンだが、鉄棒で皮膚を焦す危険性あり、検討のため延期。

尾花さんと、林真一郎さん、終日縛られっ放し。オッパイを出さぬ縛りに一苦労したが、さして緊縛感なく残念。

九月六日

高尾、ボタイの滝へロケ。

いかと推察して居ります。もしこの条文を、貴誌編集部が読者をも代表して述べたものであるとうぬぼれていらっしやるならば、非常に読者をバカにした話といわなければなりません。

伊藤整氏の「チャタレー夫人」

裁判。武智氏の「黒い雪」裁判等の問題によって、公権力の問題は一つの社会問題となりつつあるのです。映倫は、ピンク映画を取り締るだけで生れてきたものではありません。「黒い雪」が、普通のピンク映画よりエロだったでしょうか？ 心ある映画監督やシナリオライターなどは、映倫一つに限らず、これらの不当な圧力と戦っています。貴誌として圧力を受ける者として、その立場は変らないものと推測いたします。このような立場にあって貴誌だけが自分の殻に閉じこもり、イイコになるのは他の同じ立場にある人々との連帯を乱すことになるのではないのでしょうか。社会的にイイコになるのは

正しいことなのでしょう。社会的枠を乗り越えないで、特殊（正しくは、特殊だと思われる）な思想（あえて思想といえます。サディズム、マゾヒズムは、シュールレアリスム等の思想を踏台にして、一つの発展を見ることが出来ると思います）は成立して行くことが出来るのでしょうか？

権力側が、風俗的なものを踏台として、政治的に何か試みようとするなら、貴誌を含めた側は政治を踏台として、大きく飛躍すべきです。

いろいろ偉そうなことを述べてきました。私も新参ながら貴誌の熱烈な愛読者に過ぎません。折角つけた貴誌が消えてしまったら、きっとオロオロしてしまうだろうと思う、気弱な男の一人なのです。しかし、貴誌を青少年の目からおい隠すことが、果して真に健全なことなのかどうか、一般的健全さが、サディズム、マゾヒズムと合致するのか、社会的な枠内でおとなしくしていることが良いことなのか、というようなことに素朴な疑問を持っているのです。貴誌には消えてもらっては困るのだが、余り卑屈な態度はとって欲しくないのです。

人間の残忍性に思う

西山尚志

文化という言葉すら知らなかったから、という理由ばかりでなく日本人もまた残忍性の強い野蛮な人種であつたらしい。昔、学問を修め、指導的地位に居た「さむらい」達は刀という人斬り包丁をひっさげて町を闊歩して、理由もなく町民の上位に立って特権的ふるまいを不思議ともせず、氣に入らぬからと町民を斬り殺しても、無礼討ちなどという奇妙な理由もまかり通つたようだ。

学問を修めても、本来が、自分たちの都合のよいように歪めて利用するだけだつたように、武士は戦争をすることが任務であつたから、剣の修業もまた、その精神と

かなんとか難しいことはそつちのけで、いかにして人間を上手に斬り殺すか、を日夜研究していたようである。

そしてその風潮は、明治維新とともに消えたさむらいから「帝国軍人」にバトンタッチされた。日本軍の戦地における残忍な行動の

かずかずは、未だに生々しい記憶を残しているが、戦地という特殊環境といいわけをしても残忍性に変わりあるまいし、非戦闘員たる婦女子に対するものは全くいいわけの余地はないだろう。

しかし日本人ばかりでなく、米国ではピストル等銃砲による不祥事件で死ぬ人の数が、自殺や過失死を含めて年に二万人にも達するそうだし、ベトナムでの殺し合いも続いている。フランスは、先日も南太平洋上での核実験を行ったが、あの地域には原住民が住んでおり、死の灰による脅威におびえ続けているようだ。

敗戦直前から直後にかけて、わが国の女性達をふるえ上らせた男に「小平義雄」があることはご承知だろう。十指に及ぶ強姦殺人の犯人である。当時の混乱していた捜査当局の弱点から、次々と起り得た事件で、現在の当局の充実さを以ってしたら、被害者があればほど出ることはまずなかつたろう。

僕のイメージ画集

『哲学的な舌』

室井亜砂路

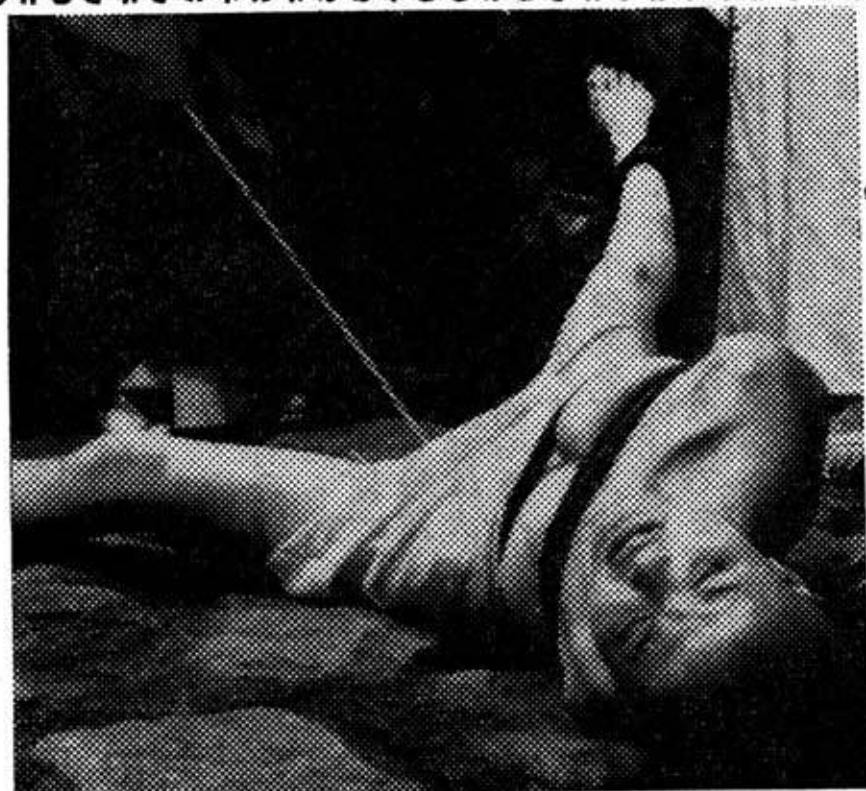


いずれにしても、当時混乱し切

圧倒した。

った人心をさらにふるえ上らせた残忍極まる犯罪で、このようなことが実際に行われたということ。今の小生は信じられない。しかしこれは本当にあった事件なのだ。この残忍極まる犯罪に材をとった小説、宇野鴻一郎著「血の聖壇」が昭和四十二年九月に講談社から発行され、その詳細な描写は私を

なるほど、残虐無残な犯罪である。しかし、前記の国家的な大規模な残忍行為と較べてみたとき、なんとその影の薄くなることよ。「小平義雄」この名を聞いて怖気をふるわす人も多いであろう。と同時に、善悪を別にして、ひそかに彼のなした行動を夢に描いてみる人間も少なくないのではなから



うか……子供の夢に王や長島選手が現れ、新入社員の夢に専務や社長がポストが描かれ、娘の夢に有名な歌手やスター、もしくはシン・デレラの玉の輿が浮かぶように。

街中でふと見かけた美しい女性にあんな美女を思いどおりに出来たら……と思ったことの一度もない男が、はたしてこの世に居るだろうか。あの女をひっそらって、こうしてあおしてと、とめどもない想いに耽ったようなことは、男なら一度や二度の覚えはきつとあるだろうと思う。「小平義雄」はそれを実行に移し、夢に描きながら実行しない大部分の男は、理性でその欲望を打ち砕く力があるかもしれない。己れが社会から葬り去られることを恐れているからではないか。何れにしても、人間社会では絶対に許されないことだと分っているからだ。

九月七日

妙心が火釜に吊り下げられ、薪を燃やす。釜が熱くなるに従い、千匹近いどじょうが逃場を妙心の体に乗めるといふ場面。どじょうが逃げ込み易いように後手縛り、両膝下に棒を縛って胸に吊り上げる。お尻から沈めたが、悲鳴に慌てて吊上げるとソソパに四、五匹入っていた。写真間に合わず残念。

小生もそんな幻想はよくするし原稿用紙には平気で楽しみながら書く。小生の持つ変質的要因がなさしめることだろう。しかし、それらの幻想が最高ではない。その上に、重い精薄者とか不具者で、一生、人間としての喜び、本能の喜びを知らずに死んで行く可能性の強い女性達に強く惹かれる。い

ことで……とは世間の人はいうまいと思う。いずれにしても、同好者同志の特定範囲内の楽しみならともかく病こうもうに入って他人に迷惑がかかるようでは大変である。すくなくとも我々文化人は、小平義雄的要因は心の檻にとじ込め、大きな鎖と錠と錘で捕えておく必要がある。ありそう。

『ある会話』

山下一夫

「ネエー、あなた」
「バカ、まだ早過ぎるぞ。人でも来たかどうかするんだ」
「意地悪ウ。いいじゃないの。もう誰もこないわ」
「あわてるな。今にたっぷりカワイがってやる」
「イヤよ。今でなきやイヤ。あんなに云ってすぐ焦らすんだから」
「仕様がなないな。じゃ一寸待て。戸締りするから」
「ネエー、今日はどんな責め？」
「どんなのがいいんだ？」
「恥かしいわ。……云えない」

「云わないと後でひどい目に会っても知らないぞ」
「マア……。意地悪ね」
「早く云わんか」
「ンー。やっぱり云えないわ」
「よし覚悟はいいだろうな」
「ま、待ってエ。あのねえ、ア・ヌ・ス・ゼ・メ」
「フフフ。いいだろう」
「さあ、早くしてエ」
「今夜はたっぷり時間をかけて、イジメぬいてやるからな」
「いいわ。好きな様にして」
「いい覚悟だ。今の言葉、忘れるなよ」
「ンーん、おねがい。思いっきり料理してエ……」
「テナことをせがんでくれるヒトはどこかにいませんかえ。」

K・K誌の今後と文学的向上

無田 口 一 郎

「性」(あるいはセックス)を主題にした文学は、時代の旧新を問わず多数存在する。K・K誌もある意味では、新しい内面的「性」文学を支柱に編集されている雑誌と言えよう。しかし現時点では決して、新しい「性」文学的モラルを樹立した雑誌とは言えない。

私自身、将来小説家を志す人間として、K・K誌は内面的比重も重く、時として創作意志の全てをK・K誌に委ねることも度々である。二十才前後から現在(二十八才)までの私の読書の三、四十

書けない者の負けおしめ

SM小説とは?

予 世 場 良 三

一、SM場面描写とは、実況中継的レポなのか?
一、性衝動は、作者の感覚によって描写してよいものだろうか?
一、読まれることを前提に、SM心理を煽るべきか?

パーセントをK・K誌がはたしてくれた様に思える。が、この間に私の「性」文学に対するモラルの進歩性を考えると、はなはだ疑問がある。すなわち、K・K誌自身この間(私が手にした時から現在まで)にどれ程進歩(あるいは退歩、又は変化)したであろうか。残念ながらノーとしか答え様がないと思う。

私はべつにK・K誌を、又K・K誌愛好家を軽んずる気持は毛頭ない。この点はいくらぐれも誤解なきようにお願いしたい。結局、私
一、探究を主とするべきか、興味的に心掛くべきか?
一、「告白文」との相違を、どの程度まで強調すべきか?
一、自慰的描写で終始して、共鳴者のみに訴えるべきか?
いつも疑問に思う点です。プロではないのだから必要ない、と打ち消しながら、ペンを執るとどうしても引っかかる。どなたかご教示下さい。

自身が熱愛するがゆえのことである。はつきりと申し上げよう。このままの状態が今後も続くなら、い

づれは世間からK・K誌は消えて亡くなると思われる。編集諸氏はおろか、愛読者である私達一同が現状のK・K誌を客観的に見つめ批判する精神を持たぬ限り、この状態から脱するのは至難だろう。この状態とは次の二点である。

一、K・K誌自身、事業化の一途に有る現状。

一、現在、K・K誌に掲載されている全ての文章の現状。

先の一点は、編集諸氏の誌に対する熱情の問題であり、いちにK・K誌だけがそうなのでなく、今の日本出版界自身に源を発する問題なのかも知れない。

「功成りて初期の熱情忘れぬ者こそ大を成す」この言葉をそのままK・K誌編集部一同に送りたい。勇気が必要である。打算が全てではない。金は人間生活の必需品にすぎない。真の初志を思えば誌は救われると思っている。

あとの一点は、私達自身の問題である。愚にもつかぬ雑文(本人は創作品だと思っているだろう)を長々と、同じ表現、同じモラル

で書かれては、私でなくともいつしか読む気がなくなるであろう。

団先生には大変失礼と思うが、あの「花と蛇」はいいなにか。先生は小説家だと言うかも知れぬ。私は同業(少なくとも私自身、自分を半人前の小説家だと自負している)者の一人として「花と蛇」を小説とは呼びえない。先生の實力からみて、居眠りしながらのペンであらうと思う。食わんがための雑文書きに等しい。初期のものはまだ「文学」と呼ぶオブジェクトに包まれていたようだが、現在は完全に「雑文」になり下っている。K・K誌発展のためにも先生の實力を発揮したものを願っていたものである。

ただ一つの救いは、辻村氏の、「カメラハント」ぐらいだろう。氏自身、文章書き屋ではないといった信念を持っておられるように見うける。それが生々しい文章となるゆえんだろうと思う。

私には「才」はないかも知れぬが、しかし新しい「文学的「性」小説」を創り出す努力だけは一生続けるつもりである。

団先生、及び皆様に失礼なことを申しましたが、K・K誌の発展を願うのとお容下赦さい。

印画紙焼付極鮮明写真

「新しいモデル強烈縛り」

Y字型宙ハリツケ

大手札四枚一組 略号八ちねV
左近麻里子

開股逆さ吊り姿態

大手札三枚一組 略号八ちてV
左近麻里子

強烈菱縄柔肌縛り

大手札四枚一組 略号八ちやV
左近麻里子

豊満な臀部への責め

大手札四枚一組 略号八ちみV
左近麻里子

猪吊りの滑車責め

大手札四枚一組 略号八ちつV
左近麻里子

悶々たる尻立て縛り

大手札四枚一組 略号八ちなV
左近麻里子

股間立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちすV
左近麻里子

全裸立縛りの表情

大手札四枚一組 略号八ちさV
左近麻里子

豊満な体緊縛のあえぎ

大手札四枚一組 略号八ちにV
左近麻里子

緊縛と柔肌の交錯

大手札四枚一組 略号八ちこV
左近麻里子

投げ出された裸女

大手札四枚一組 略号八ちくV
左近麻里子

輝美表と裏の二態

大手札二枚一組 略号八ちけV
左近麻里子

美女の鼻をもてあそぶ

大手札四枚一組 略号八ちるV
左近麻里子

美女の鼻孔を鑑賞する

大手札四枚一組 略号八ちれV
左近麻里子

開孔器で美女の鼻腔検査

大手札四枚一組 略号八ちきV
左近麻里子

開股拷問椅子正面縛り

大手札四枚一組 略号八なたV
中河 恵子

甘美な椅子縛りプレイ

大手札四枚一組 略号八なあV
中河 恵子

のけぞる痛打の果て

大手札四枚一組 略号八なちV
関谷富佐子

臀部に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号八なつV
関谷富佐子

痛打による絶妙表情

大手札四枚一組 略号八なてV
関谷富佐子

絶妙なるバック姿態

大手札四枚一組 略号八せきV
左近麻里子

強烈猿ぐつわ哀歎

大手札四枚一組 略号八せかV
左近麻里子

息づくポリウムを縛る

大手札四枚一組 略号八せもV
左近麻里子

左右に開股を縛る

大手札四枚一組 略号八せみV
左近麻里子

ゴムカバの猿ぐつわ

大手札三枚一組 略号八せなV
左近麻里子

羞恥椅子開股縛り

大手札四枚一組 略号八せけV
左近麻里子

黒布の猿ぐつわと緊縛

大手札四枚一組 略号八せこV
左近麻里子

甘美なる開股椅子プレイ

大手札四枚一組 略号八せまV
木村 洋子

開股吊り縛りの極致

大手札四枚一組 略号八せむV
木村 洋子

菱縄雁字搦目縛り

大手札四枚一組 略号八せえV
木村 洋子

私を虐めて下さい

大手札四枚一組 略号八せろV
中河 恵子

豆絞りの猿轡縛り

大手札四枚一組 略号八せれV
中河 恵子

悶える全裸の表情

大手札四枚一組 略号八せりV
中河 恵子

麗身の裏と表の表情

大手札四枚一組 略号八せとV
中河 恵子

竹棒と猿轡と縄と

大手札四枚一組 略号八せてV
中河 恵子

豊満な緊縛全裸を晒す

大手札四枚一組 略号八せゆV
左近麻里子

陽光に映える亀甲裸身

大手札四枚一組 略号八せいV
左近麻里子

縄で弄ぶ豊満緊縛女体

大手札四枚一組 略号八せたV
大島 照代

後手縛りに狂い泣く

大手札四枚一組 略号八せのV
大島 照代

遅ましき臀部責め

大手札四枚一組 略号八せねV
大島 照代

強烈縛りに喘ぐ裸身

大手札四枚一組 略号八せにV
大島 照代

大の字笞打ちの悶え

大手札四枚一組 略号八わりV
関谷富佐子

絶妙の尻立て鞭打姿態

大手札四枚一組 略号八わもV
関谷富佐子

鞭打ちの女王昇天す

大手札四枚一組 略号八わめV
関谷富佐子

狂い咲く鞭打の妖花

大手札四枚一組 略号八わみV
関谷富佐子

大の字ハリツケで鞭打

大手札四枚一組 略号八わまV
関谷富佐子

蒲団に狂いまわる女王

大手札四枚一組 略号八わとV
関谷富佐子

〔美人モデル緊縛フोट〕

印画紙焼付極鮮明写真	鉄砲縛りに鞭打の雨	八カ月妊娠の太鼓腹の美	猿轡の裸身を晒す
鞭打ちによる感溺の表情	大手札四枚一組 略号 (めせ) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わさ) 五〇〇円	大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円
股裂縛りで痛打する	関谷富佐子 略号 (めち) 五〇〇円	突き出した腹部の妊孕美	安井喜久子 略号 (おふ) 五〇〇円
海老縛りの鞭打地獄	大手札四枚一組 略号 (めひ) 五〇〇円	両手吊りの妊婦正面	後手縛りで引回す
尻立縛りで強打に泣く	関谷富佐子 略号 (めぬ) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わし) 五〇〇円	大手札四枚一組 略号 (おふ) 五〇〇円
ムチは臀部の双丘に炸裂	大手札四枚一組 略号 (めし) 五〇〇円	縛られた妊婦の艶姿	片足吊り上げ責め
鞭に悶える鉄砲責め女体	関谷富佐子 略号 (めけ) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わす) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おて) 五〇〇円
逆手吊りで晒す臀部	大手札四枚一組 略号 (めま) 五〇〇円	両手一本吊りの妊婦	憂愁夫人の菱縄縛り
鞭の縛りに夢心地表情	関谷富佐子 略号 (めむ) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わち) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おや) 五〇〇円
鞭は美体からみつく	大手札四枚一組 略号 (めり) 五〇〇円	恵子の妊孕美緊縛	柱対向立ち縛りの夫人
狂う鞭に狂い泣く女体	関谷富佐子 略号 (めも) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わに) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おあ) 五〇〇円
両手吊りの女体に強打	大手札四枚一組 略号 (める) 五〇〇円	初妊娠の太鼓腹の美	片足吊り股裂き責め
関谷富佐子 略号 (めさ) 五〇〇円	中河 恵子 略号 (わく) 五〇〇円	裸身縛りの妊孕美	安井喜久子 略号 (およ) 五〇〇円
		中河 恵子 略号 (おぬ) 五〇〇円	逆エビ責めに泣く女
		大手札四枚一組 略号 (おす) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おわ) 五〇〇円
		身籠った裸身責め	柱正面立ち縛り媚態
		中河 恵子 略号 (おも) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おの) 五〇〇円
		麗わしの妊婦縛り	股間縛りにもかく女体
		中河 恵子 略号 (おひ) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おう) 五〇〇円
		膨満の腹部緊縛美	豊満の女体をくびる
		中河 恵子 略号 (おみ) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おれ) 五〇〇円
		立縛り髪責め引回し	開股前屈愛撫責め
		安井喜久子 略号 (おけ) 五〇〇円	安井喜久子 略号 (おね) 四〇〇円
			逆エビ縛りの愛撫
			大手札三枚一組 略号 (おな) 四〇〇円
			愛知 葉子 略号 (おな) 四〇〇円

〔最近作緊縛傑作フォト〕

開股竹棒羞恥責め	大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円
逆エビ責め手足縛り	大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円
竹棒開股強烈繋り	大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円
鼻責めと鼻孔大写真	大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円
首縄後手強烈縛り	大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円
全裸開股膝頭縛り	大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円
菱縄縛り竹棒責め	大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円
柔肌に喰込む縄目	大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円
豊満な全裸を弄る	大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円
逆エビに痛める魔手	大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円
黒髪をいたぶる手	大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ	大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円
強烈後手縛りの狂態	大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円
牝犬奴隷の醜態	大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円
全裸二つ折り縛り	大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円
菱縄しばりの表情	大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円
八の字開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円
菱縄縛りの全裸を晒す	大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円
奴隷捨札開股縛り	大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円
菱縄強烈開股縛り	大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円
柱立縛り晒し者	大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円
柱宙縛り苦痛表情	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円
猿轡股間縛り歩き	大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女	大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円
身動き出来ぬ強制浣腸	大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円
竹棒開股苦打ち縛り	大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円
後手吊りにもがく女体	大手札四枚一組 略号「つて」 五〇〇円
逆エビ縛りの色々	大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円
逆さ吊りと足吊り	大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円
片足吊り上げ縛り	大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円
美しい臀部を晒す	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
階段に晒す全裸身	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
花瓶を太股で挟む裸身	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
麻里子の裸身をあばく	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円
柱に立縛りの全裸身	大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ	大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円
悶える白肌を俯瞰する	大手札四枚一組 略号「つぬ」 五〇〇円
両膝頭開股宙吊り	大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円
片足挙げ吊り責め	大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円
両手吊りに悶える女	大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円
開股責めを悦ぶ女	大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円
両手万歳吊りにもがく	大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円
静子夫人への羞恥責め	大手札四枚一組 略号「くと」 五〇〇円
雁字搦目縛りにうめく	大手札四枚一組 略号「くね」 五〇〇円
九力月の妊婦に革具責め	大手札四枚一組 略号「くわ」 五〇〇円
増田みゆき	大手札四枚一組 略号「くわ」 五〇〇円
増田みゆき	大手札四枚一組 略号「くわ」 五〇〇円
激痛に耐える鞭打ち表情	大手札四枚一組 略号「くわ」 五〇〇円



望するものです。連絡方法はどうしたらよいのですか。お知らせ下さい。鶴首してお待ちします。

(岐阜郊外・佐藤生)

○ 八月号に載りました北山はじめ様。奇クは小生の真の生き甲斐です。十三年間殆ど愛読しています。岐阜近郊に住む、一商店主の小生です。一度お会いしてS・Mについて話し会いたいのですが、いかがでしょうか。田舎のこととて今までプレイのパートナーは一人も見つけられず、貴女を羨しく思っています。一度でよいから若い女の子とプレイをしてみたいと念願している者です。一度お会いできませんか。良識と責任を以って、絶対ひみつ厳守は、小生の最も希

奇ク十月号拝見。先ず最初に御礼を一言。私のつたない一文が始めて読者通信に掲載されました。どうもありがとうございます。全国の読者がこれを読むのかと思うと、一寸てれてしまいます。巻頭の「此見亭漫語」なかなかたのしめました。ストリップのくだりなどは特筆ものです。今後、大いに期待します。「茶の間の戯れごと」カメラ8ミリになかなかくわしく参考になりました。「狂執」たしかに異色作です。「緋縮緬地獄」いよいよ面白くなってきました。欲をいえば、さし絵があればなおいいと思います。「花と蛇」依然として人気ナンバーワンのS小説の傑作なのですが、このところ一寸マンネリの感あり。そんな気がします。今月の出色は「ふおとあんどむーびー」(カタカナでないのがにくい)と贋作シナリオと銘打った「縄つき芸者」です。前者の分譲写真の件は大変、参考になりました。二百五頁のフォト気に入りました。又、毎月できる

だけ団先生のシナリオをのせて下さい。先月、ピンク映画「陰乱」を見ました。捕まった女が全裸にされ、両手吊りでムチ打たれるシーンがありました。なかなか口を割らぬと見た二人の男は、ライターの火を股間に近づけます。女は気絶します。一寸したSシーンですが、この女を演じているのが、「肉魔」の桂奈美です。彼女のボリュウムたっぷりのオッパイとヒップが、とても印象的でした。

(東京・木本英夫)

○ 山本直美様。はじめてお便り申し上げます。私も浣腸、ゴム、ゴムカバーが大好きで色々持っておりますが、山本様がご希望のものをプレゼントしたく思います。私のコレクションは脛パンティ前開き型一枚、オムツカバー生ゴムダンロップ一枚、他のゴムカバー一枚(オムツ)ゴムパンティ、肛門用体温計、浣腸器三十cc三本、五十cc一本、イリリガートル、アメリカ製一個、カテーテル十四号、十六号各一本、生理パンティの特殊型、フンドシ型一枚と色々あります。

(川崎・新井)

○ 奴隷妻へ。福岡の緒方則子。俺

はお前を責めて責めて責め抜いてやりたい。そして一生、俺の女奴隷として生活の楽しみを与えてやりたい。先ず一通りの縛りが済んだら木馬責めである。お前を上から吊り、その上に乗せてあげる。お前は泣き叫ぶことだろう。しかしそれで終ったのではない。今度は逆さ吊りにして皮鞭やホースを使い、思う存分いためつけ、失神するまで許せん。もし途中で失神などしたら、頭から水をぶっかけて目を覚まさせ、また続行するだろう。夜は三時間ほど寝かせるが逆吊り、狸縛りの恰好で寝かせるのだ。このような日課が毎日つづくのだが、たまには奴隷にも自由を与えてやろう。だが外出してもお前は俺の女奴隷だということを忘れないために、がっちりした貞操帯をとりつけてやる。それからもし帰る時間が遅れたら、その理由を白状するまで責め抜き、泣き叫ぶのを見ながら俺は酒をのむのだ。お前は俺の奴隷になる運命なのだ。それがわかったら、お前は便りを出すのだ。夢でなく現実になるのも、もう近いのだぞ!

(東京・サド公)

○ グラビヤが廃止されてから大分

たった。あの美しいグラビアのあった時は楽しかった。当時の類似誌とは比較にならないほどの、上品な美しさを持っていた。本誌のグラビアには、時にはどんな芸術も及ばないような作品があった。しかし残念ながら、私の手許には一冊も残っていないのである。「花と蛇」は少々マンネリの状態におちいった感がある。一応そろそろ打ち切って、新たな構想で出発したらどうだろうか。最近、女学生に関する作品がなくなったのはさびしい。大人への転換期としての複雑な心理を表わしてくれるような大作を心待ちしています。

(横浜・若桜富美)

○ 九月号には、女すもうの記事がなくて、がっかりいたしました。何しろ多種多様の風俗の世界を編集されるのは、大変のことと拝察します。女すもうの文献は、年々入手しにくくなってきていますので、奇クでは廃絶した、かかる文献の再録をやってもええないものでしょうか。「オリジナル」な雑誌の意味ばかりでなく、こういう入手困難な資料の再録なども大切な「風俗誌」の役割と存じます。たとえば平井蒼太氏の「見世物女相

撲のかんがえ」(歴史公論、昭和十一年五月号)など、私は掲載誌を秘蔵しているのですが、今回古河三樹氏の「江戸時代大相撲」の中に再録され、諸氏の目にふれやすくなりました。この他、多数の資料が入手を渴望されながら不可能になっていくでしょう。私は村松梢風氏の「仇討女相撲」を探求しており、いまだに見られませんが、単行本で出たものが、読物雑誌に連載されたままなのか、わかりませんが、古河氏の文献目録にも出ていますが、ぜひ見たいと年来、念じながら果しておりません。村松梢風の死去したとき、やがて全集がでたら見られると思ったのですが、それも果たせぬよう残念ですが、それでも果たせぬようで残念でなりません。連載物を単行本にするときは、挿画はとってしまいう習慣ですから、これもできれば元の雑誌連載の形で見たいと思います。どなたか、この連載雑誌を見られる図書館、又は個人蔵書家など御存知なら、お教えねがえませんか。日本中、どこでもけっこうです。次に読者諸氏にお願いしたいことは、山形、秋田、佐賀、長崎などの女すもうの現状をご存知の方、記事で教えていただきました。いわゆる中年婦人のシャツと

パンツのすもうでなく、新庄や別府には、じっさい揮一本でとり組んでみせる二人組の若い女すもうがあることを友人からききました。が、くわしいことを御存知の方がありません。御教示下さい。東映の「徳川女系図」も外国雑誌にまで紹介されて大分、有名になりましたが、この昭和元禄の世のどこかに本式の女すもう団でも、復活しないものでしょうか。

(京都・北浩介)

○ 柳瀬慶子様、貴女はいつか、そう、もう六、七年前、指折り数えて見ますと早やそのぐらいになりました。どうか。読者通信を通じてお便りを下さり、そして忘れることのできない羞恥責めとしてのエビ責めを、二十号のキャンパスに描かせて下さった、京浜地区にお出になったM女性のような気がいたしてなりません。私は独身の画家です。今でもそっと、その絵をアトリエの中二階の戸棚から引っぱり出して、誰もいないアトリエで眺めると、今以て、その想いを新らたにいたすものです。エビ責めに緊縛し、ゴロンと仰向けにし更に逆エビ、そして臀部責め、股間縛り。やがては開股縛りにしたま

まバイブレーターに触手が、彼女のふくよかな乳房へ、乾ブドウのような可愛い乳頭へと、そして責めの魔手は、そろそろと桜色に輝く餅肌を、まるで体中をヌメヌメと這うようにのびて、彼女の許しの哀願にも容赦なく、羞恥の的へと……。堪忍してえ堪忍してえーもう……。許してちょうだい……。ここで、一服。そして最後にゴロリとうつ伏せにする。三回のプレイで、キャンパスに定着させたのが、このエビ責めの絵です。絵筆を握って十数年、奇クを愛して十年。SMの世界は月刊の奇クを通じて現在のところ空想の翼は限りなく、シュール絵画の内面へと深く浸透して行くものです。開股縛り、股間縛り、股裂き責め、臀部責め、エビ責め、検温等々。貴女のお好きな、どんな羞恥責めにもお応えできると思っております。私は社会的には名ある者であり、私は紳士的に責任を以て、固く秘密は厳守いたすことをお約束いたします。お便り下さい。

(横浜市・松原一)

○ 十月号を拝見、早速、感想を述べさせていただきます。黒淵嬰一氏の「富士川」は、いつもながら

歴史的考証の深さには感心させられます。「ばらと蜜蜂」は、余り盛り上りのないのは、物語りの形式上なので、いたし方ないでしょう。播野弘三氏の「狂執」は、よくまとまって読みやすいと思います。町陽一氏の「金星の怪」は、物語を金星にまで発展させて面白く思います。私はマゾ的なものは余り興味はありませんので、少し目を通す程度です。「花と蛇」は、だんだん美女を責めることに新鮮味がなくなってきたと思います。毎回、同じ羞恥責めにしても同じ言葉を使わせるのは、飽きてくる原因だと思えます。それは「カメラハント」にも言えると思います。どうか新しい方がでられて、新鮮味の溢れるものを書いて下さい。

(兵庫県・勝田一郎)

私は特に女性の乳房に興味を持っています。最近の女性の体位の向上はめざましく、夏になると薄着になるので、いやでも大きな胸や腰が目につきます。街を歩いていて、ブラジャーをしていても乳房を上下にゆさゆさと、ゆらしている女性もいます。そんな女性の乳房をわしづかみにして引っぱったり歯をたてたりしたら、どんな

に良い気持ちだろうと思うことがあります。本誌十月号「私のSM日記」なる手記を書いた小竹一浩氏などは非常に幸せな人だと思う。写真で見ると限りでは、小竹氏の奥様の体は、私の理想としている女性にピッタリだ。豊満な体、大きな乳房、こんな女性といつてもプレイできる男性は本当に幸せである。しかし、あれだけの乳房をもつ女性に対する乳房責めは、もつと責めてよいと思います。私の考えでは、乳房責めとは何も乳房を縛ってムチで打ったり揉んだり引っぱったりするだけではないと思います。自由がきかないようにして、乳房をかんんだりパイプレーターをあてたり、刷毛を使って愛撫しても良いと思います。私もできたら小竹氏のようなフォトを作製して読者の皆さんに見てもらいたいと思っています。

(埼玉・鈴木太一郎)

奇く愛読の女性の皆様、私は二十六才の目下独身、社会的には何のくつたくもない生活をしている者ですが、内面生活では、生来のマゾ性向者として人並みの結婚も望まれず、ただSMにご理解のある女性にお会いして、忠実な下僕

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しう▽ 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△した▽ 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しち▽ 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しつ▽ 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△して▽ 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しと▽ 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しや▽ 五〇〇円

痛打にもかく美女体

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しゆ▽ 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 大手札四枚一組 略号△しよ▽ 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とは▽ 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とに▽ 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とほ▽ 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とへ▽ 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とち▽ 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とり▽ 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とぬ▽ 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とる▽ 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とか▽ 四〇〇円

浣腸液の注入直後

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とま▽ 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とみ▽ 四〇〇円

浣腸責めの美態開陳

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とめ▽ 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

中河恵子 大手札三枚一組 略号△とも▽ 四〇〇円

となり御奉仕いたしたいのです。Mにめざめて、はや十年。その間年とともに色々気持も変化し、このごろでは、ただひたすら、女性を絶対的な女神様として心から敬愛し、女神のために一身を投げうってつくしたいと願っております。尊い女神からさげすまれ、なぶり者となり、折檻され、耐えがたい凌辱を与えられても、なお一層、誠実に御奉仕する奴隷の境遇を得たいと、日夜なやんでいる次第です。広い世間にはM男性も多いと思いますが、又私どもの渴望してやまない高貴な嗜虐のセンスを持たれる女性の方も、かなりいられることと察します。気のおもむくまま遠慮えしなく男性をいじめ、はづかしめて存分に征服してやろうと、心ひそかに願う女神がおられましたら、どうか私をおためし下さい。もちろん秘密は厳守し、ご迷惑をかけることなく、奴隷としてのすべての義務を果します。今の私には、自分のM的な好みを申し上げるのも恐れ多い次第です。ただただ女性崇拜の心情を思いきりぶっつけて礼拝し、高貴な女神様の、生活の一助にでもと願う気持でやみません。尊い女性の足下にひざまずく奴隷をご存分

に征服して下さいますれば、最高のしあわせでございます。必ずやご期待にそうべく一生けんめい努力いたします。どうか奴隷の頭上で力強く行動される尊大な女神様からのおたよりを、心からお待ち申し上げます。

(東京・木村良夫)

読者の皆様、いかがお過ごしですか。私も永年本誌を愛読しているうちに、いつの間にかMを好むようになりました。以前、二、三回、女王様にお呼びかけ申し上げましたが、いつもカラカイ半分のご返事で、住所も名前もでたらめで、お便りすることもできませんでした。さて私は、本年三月頃、ふとした機会に名古屋市内でS好みのご夫婦とめぐり合い、今まで三回ほどプレイをいたしました。しかし遠方のため、そうたびたびプレイのために出かけるわけには参りません。どなたか神戸近辺のお方で、M男をいじめて屈辱的な行為で責めてみたい、又、奴隷を飼育してみたい、と思われる女王様は、お便り下さい。二、三人のグループでもよろしい。ご夫婦であれば、なお結構です。私は女王様、ご主人様のご命令には絶対、

可憐表情の全裸縛り 大手札四枚一組 略号 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆめ	立縛り正面裸晒し 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆえ	両手吊り全裸晒し 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆひ	雁字搦目後手縛り 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆあ	股間縛り柔肌責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆも	猿ぐつわ開股責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆに	豊満な臀部強烈責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆほ	強制全裸開股責め 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆみ	股間縛り悶える 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆろ	全裸縛りに羞らう 大手札四枚一組 五〇〇円 金原奈加子 略号 八ゆへ	私の妊娠腹を見てね 大手札四枚一組 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆわ	縛られた妊婦横臥す 大手札四枚一組 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆよ
被虐に燃える全裸妊婦 大手札四枚一組 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆぬ	尚も見せたい妊婦腹 大手札四枚一組 五〇〇円 中河恵子 略号 八ゆる	股間縛り首縄正面 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よれ	両手吊り正面晒し 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よそ	全裸高手小手の麗身 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よの	全裸股間縛りの媚態 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よや	強烈な変型エビ縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よい	正座猿ぐつわの仕置 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よふ	凄絶海老責め地獄 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よえ	女体二つ折り縛り 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よぬ	あぐら縛り全裸晒し 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よあ	イルリの浣腸責め 大手札三枚一組 四〇〇円 長井葉津子 略号 八よた

服従を誓います。奴隷の宣誓を唱えながら、女王様のお美しい、おみ足の間を股ぐりさされたり、おみ足で蹴られたり、鞭打たれるたびに、お札を言わされたり、人間馬にして調教されたり、犬のようにおみ足を舐めさせられ、最後に御神水をたっぷり飲ませていただければ、奴隷としてこの上ない本望です。本当のことを言えば、名古屋の女王様の御神水と、どちらがおいしいか飲みくらべてみたいのです。九月号の「Mモデルと、その妻」に出てきた妙子女王様、真紀女王様のような、本気で奴隷を酷使できるS女王様、御主人とご相談の上、私をお呼びつけ下さい。私は真心をこめて、喜んでご奉仕申し上げます。

(神戸・林孝一)

○ 街で見かける女性で、あのひとはM的性格の持ち主でなからうかと、ふと感じる雰囲気は漂よわせている女がいる。しかし、それを実証することはできない。むしろそれは私自身が心の中に描いている被虐女性の空想像に近似しているからであらうか。編集部では多くの被虐願望の女性と接する機会があるのだから、その女性たち

に共通する精神的、肉体的、あるいは環境的、先天的など、いろいろの条件を設定して、その最大公約数的な類似点を統計的に研究、発表されると、私達S男性にとつて、街を歩く楽しみが倍加するところになるのだが。私が、すれ違う女性にMを感じるひとは、どんなタイプかといえば、先ず顔のかたちは三田佳子や松原智恵子のような細面。髪は長くしているか又は自然に垂らして、余りごてごてしていないこと。胸はよく発達し、胸は目立つほどに細くしめつけている。足はすんなりとして、黒いストッキングや網のストッキングの似合うというよりは、それを好んで身につけている女。靴は少し歩き難いぐらいに高いハイヒールをはく女。色は朱色かオレンジ系統のものを身につけている女。ものを言うとき、何でもないことでも、多少はにかみながら頬をあからめる女。手首、足首、首ともに程よく細く。指はやわらかく充分にそりかえる女。外見的には細そりしているが、脱げば必要なところには豊かにふくらんでいる女。とこのように書いてくると、結局、それは美人である。S男性にとつて、その嗜虐の相手の女性是一部

大手札印画紙焼付

「緊縛女体美のシリーズ」

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 略号△もえ▽
関谷富佐子 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号△もゆ▽
関谷富佐子 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号△もよ▽
関谷富佐子 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号△もす▽
関谷富佐子 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号△もせ▽
関谷富佐子 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号△もれ▽
関谷富佐子 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号△もる▽
関谷富佐子 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号△もて▽
関谷富佐子 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号△もな▽
関谷富佐子 四〇〇円

私をムチ打って頂戴

大手札三枚一組 略号△もね▽
関谷富佐子 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号△もむ▽
関谷富佐子 四〇〇円

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 略号△もう▽
関谷富佐子 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号△もき▽
関谷富佐子 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号△もこ▽
関谷富佐子 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号△もみ▽
関谷富佐子 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号△はゆ▽
中河 恵子 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 略号△はよ▽
中河 恵子 五〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 略号△はて▽
中河 恵子 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号△はお▽
中河 恵子 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 略号△はの▽
中河 恵子 五〇〇円

神妙なブレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号△はひ▽
中河 恵子 四〇〇円

の例外はあるにしても若く美しいことが必須の条件であらう。その上に自分の好きなタイプであれば最高である。

(東京・佐藤しげる)

○ 城山ほずみ様、貴女の再度の呼びかけを見ました。私は四十三才ですが、精神年齢はズツと若く、現代っ子とも意見は合います。私は頭の中で、いろいろな縛りのアイデアを考えているのですが、実際に女の柔肌に縄をかけたことはなく、長年の夢を貴女によって、かなえさせてもらえば、これ以上の幸福はありません。私の希望をぜひとも、かなえさせて下さい。私は社会的地位もあり、又他人のプライバシーを侵すようなことは誓って致しません。多大の信頼を乞う次第です。私のアイデアで貴女の希望通り、満足させて上げます。

(新潟・山口正彦)

○ 十月号、拝読致しました。夏も終り、そろそろ辻村氏のウデもなってくる頃と思います。体力的にも心配がいらないし、モデルの縄目跡も、気にせずすすむでしょうし、私達読者は特出を待つ、かぶりつきのごとく、その見事なハン

トぶりの出を待っています。ところで、近頃のS、Mの氾濫ぶりというのはすさまじく、こんなところに出ていいものかという、きわめつきの感のする、この頃です。一つは、日本経済新聞の朝刊に連載中の「蜜蜂」。八月中旬に二週間ぐらい「美男奴隷」というタイトルで展開されました。内容は、奴隷というほどのものではなく、一週間ぐらい裸で軟禁され、その女性の相手をさせられるという話しかし、こういうタイトルで、平然と茶の間に入ってこられると、かえってこちらがとまどいを感じる始末です。二つ目はティーン・ルック。これは、お嬢さんの週刊誌というキャッチフレーズで最近でた雑誌だが、この八月二〇日号の九十九頁、心理テスト「男の子への関心度」という記事で絵が書いてあり、自由にへびを書き入れろという問題。答の解説を略記しますと、次の通りです。(1)木に巻きつけて書いた(2)草むらのクボ地(3)岩の上(4)その他の空地。七十八人の男女にこのテストをしたところいちばん多いのが草むらや岩に書いた人で三十九人。空白のところを書いた人は二十四人。木に巻きつけて書いた人が十五人だった。

開股縛りに喜ぶ女	大手札四枚一組 略号△はわV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はわV
全裸の女体立ち縛り	大手札三枚一組 略号△はふV 四〇〇円
中河 恵子	略号△はふV
黒縄は白肌を酷に彩る	大手札三枚一組 略号△はほV 四〇〇円
中河 恵子	略号△はほV
悦虐に身もたえる美女	大手札四枚一組 略号△はあV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はあV
菱縄は白肌をくびる	大手札三枚一組 略号△はうV 四〇〇円
中河 恵子	略号△はうV
柱に立縛りでさらす	大手札四枚一組 略号△はさV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はさV
卓上の開股羞恥責め	大手札四枚一組 略号△はめV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はめV
無防備の女体を開陳	大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はしV
遠山静子夫人の立縛り	大手札四枚一組 略号△はもV 五〇〇円
中河 恵子	略号△はもV
若妻の魅力を発散する	大手札三枚一組 略号△はむV 四〇〇円
関谷富佐子	略号△はむV
後手縛り全裸身の魅力	大手札三枚一組 略号△はめV 四〇〇円
関谷富佐子	略号△はめV
悶える猿轡の裸身	大手札三枚一組 略号△はもV 四〇〇円
関谷富佐子	略号△はもV
ムチ打ちの陶酔境	大手札三枚一組 略号△はさV 四〇〇円
関谷富佐子	略号△はさV
両手吊りで痛める女身	大手札四枚一組 略号△はしV 五〇〇円
大島 照代	略号△はしV
後手縛りの竹棒責め	大手札四枚一組 略号△はすV 五〇〇円
大島 照代	略号△はすV
強烈開股強制縛り	大手札三枚一組 略号△はせV 四〇〇円
大島 照代	略号△はせV
両手吊りであえぐ女体	大手札四枚一組 略号△はゆV 五〇〇円
大島 照代	略号△はゆV
竹棒強烈開股責め	大手札三枚一組 略号△はたV 四〇〇円
大島 照代	略号△はたV
厳しき緊縛の正坐責め	大手札四枚一組 略号△はちV 五〇〇円
大島 照代	略号△はちV
責めの魔手に屈伏する	大手札四枚一組 略号△はつV 五〇〇円
大島 照代	略号△はつV
竹棒の胴絞め責め	大手札四枚一組 略号△はてV 五〇〇円
大島 照代	略号△はてV
竹棒開股胴絞め縛り	大手札四枚一組 略号△はとV 五〇〇円
大島 照代	略号△はとV

また木に巻きつけて書く人は男の
コには、ほとんどない。(A)木に巻
きつけて書いた人―男のコに異常
な興味と関心があり、サディスト
的、相手をいじめることに興味が
わいてくる。(B)草むらに書いた人
―日本的に女性で、男のコに消極
的、マゾの傾向がややある人。(C)
岩に書いた人―男のコには関心を
もたず、性質も冷たい。その他の
空白に書いた人は異性への関心も
健全である。また舌を書いた人は
男のコへの興味は、非常に強い。
以上です。この読者は大体、小学
校高学年から、高校低学年どまり
で今の女の子は、こんな小さな時
から教育されてるんでしょうか。
この出版社は主婦と生活社。どう
してこんなに、奇クの読者だけが
小さくなっていきやならんのか
と考えるほどです。井の中の蛙で
大海でどんなことがあるのか、と
んと知らなかったんですなあー。
私自身、SとかMとか、勿論SE
Xなどの自由化を叫ぶ方ですが、
どうもこのようなマスコミのやり
方には賛成できません。つまり、
彼等のやっていることは扇動で、
健全な方向性というものが見られ
ません。そして常に歴史より先行
してほしい理論、そんなむずかし

いものでなくても、論理、どちら
もむずかしくなってしまうが、
そのための先駆者のな役割を
ひそかに、奇クに期待するもの
です。商業的性文学に埋没してい
る文学者などに任すのでなく、実
験から真正面から取り組む姿勢
をもつ一人一人の声によって。

(東京・中川泰)

越智かおり様、あなたのおたよ
りを見て、ふと呼びかけてみた
くなりました。と言うのは、同じ
国ですから、ひよっとするとお
いして話したりプレイしたりす
るチャンスに恵まれるかもしれ
ないと思うからです。私は実際の
プレイは、まだ一度も経験した
ことがありません。一度プレイ
をしたいと思っています。もしよ
ろしければ文を通して、気が進
める段階になったら、実際の
プレイをしませんか。ああ、申
しおくれましたが私は三十五
才の公務員です。秘密は厳守
いたします。おたよりください。

(徳島市・宮本一也)

私は古くからの読者です。特に
マゾの読物が好きです。「濡れ
ぞ濡れし」「レモンいろの雨」
又「マニヤのノート」など、いつ

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号△てき▽ 大塚 啓子 略号△てき▽	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号△てか▽ 大塚 啓子 略号△てか▽	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号△てく▽ 大塚 啓子 略号△てく▽	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号△てこ▽ 大塚 啓子 略号△てこ▽	後手高小手縛り 大手札三枚一組 略号△てま▽ 大塚 啓子 略号△てま▽	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てみ▽ 東浦 啓子 略号△てみ▽	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てむ▽ 東浦 啓子 略号△てむ▽	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号△てめ▽ 東浦 啓子 略号△てめ▽	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号△ても▽ 東浦 啓子 略号△ても▽	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号△てん▽ 東浦 啓子 略号△てん▽	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号△てる▽ 東浦 啓子 略号△てる▽
真紅の腰巻着用姿態 大手札二枚一組 略号△うお▽ 大塚 啓子 略号△うお▽	真紅の腰巻着用縛り 大手札二枚一組 略号△うて▽ 東浦 啓子 略号△うて▽	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号△うこ▽ 大塚 啓子 略号△うこ▽	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号△るむ▽ 大塚 啓子 略号△るむ▽	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号△るお▽ 大塚 啓子 略号△るお▽	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号△るま▽ 大塚 啓子 略号△るま▽	羞らしいの真正面縛り 大手札三枚一組 略号△るけ▽ 大塚 啓子 略号△るけ▽	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号△るふ▽ 大塚 啓子 略号△るふ▽	高小手後手縛り 大手札三枚一組 略号△るや▽ 大塚 啓子 略号△るや▽	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号△るよ▽ 大塚 啓子 略号△るよ▽	羞らしいの股間縛り 大手札三枚一組 略号△るに▽ 大塚 啓子 略号△るに▽

食い入るように読みます。私は実際に女の人（特に美しいグラマーで量感のある）にいい感じてもらいたいと思いつながら、まだ一度もそのような経験はありません。いつも本誌の読物を見て想像しているだけです。一度どなたか女王様に奴隷としていじめていただいたらどんなに満足だろうと夢みています。太股で首をしめられたり、大きな尻で顔をつぶされたり、首にくさりをつけて引きずり廻わされ足をなめさせられたり、色々ないじめられ方をせられたいと、毎日考えています。

（大阪・宮野一郎）

女性の緊縛肢態は美しいが特に美しいのは正座で縛しめられた女である。正座の姿は観念的で詩情がある。逆海老や、あぐら縛り以上のものだと思う。勝気な女や強い女（柔道や空手、合気道の心得のある女）が、男に敗れて裸にされたのではなくて、たまたま裸でいるところを襲われ、裸であるが故にヒケ目を感じ、弱気となりついに捕われてしまう。そんな女が口惜しさと羞かしさを内に秘め神妙に正座している様は、天下の絶品であると思う。最近のフォトに

正座姿を余り見ないように思う。どうか一考をおねがいします。

（小曾根伸二）

川崎の柳瀬慶子様。八月号にて拝見しました。私も川崎に住むエソジニアで三十九才のS男です。奇くは十年前から時々読んでおりましたが、プレイのチャンスがなく、空想のみにて自らなぐさめていました。貴女の文面は、私の夢見ていたパートナーのイメージとピッタリで、正に理想の女性像として受け取りました。慶子様と交際できるならば、私の人生をかけた。貴女の好みが私の希望と同じです。具体的プレイの行動は述べませんが、貴女が私にお便りを下さる気持になられることを宇宙支配の根源の生命神に秘にかつ真剣に祈っております。

（川崎市・松木槍太）

十月号の小竹氏の「私のSM日記」に感激いたしました。全くいともぼくが夢に描いている責め方と完全に同じなのです。氏のプレイ観に女性特有の羞恥心はとり除いてはいけない、とあるが、全くその通りであると思う。それより

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れや▽

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れゆ▽

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れえ▽

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河恵子 略号△れぬ▽

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れね▽

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れの▽

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村洋子 略号△れむ▽

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やか▽

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やき▽

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やく▽

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やも▽

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やし▽

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原清子 略号△やみ▽

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号△なる▽

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 二〇〇〇円
中河恵子 略号△ぬめ▽

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 二〇〇〇円
中河恵子 略号△ぬね▽

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しい▽

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しみ▽

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しけ▽

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しこ▽

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しら▽

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しれ▽

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知葉子 略号△しわ▽

お申込みは大阪阿倍野局私書箱第14号箕田京二宛へ願います。

も、氏の夫人に対する敬愛の念が深いには一層敬意を表したい。プレイには、これが一番、大事ではないかと思う。ぼくはSの一人として、こうありたいと思う。愛読者のM女性とプレイをお願いしたい。城山ほずみ様、柳瀬慶子様片野初枝様、愛読者の女性の皆様ぜひ、お会いしたいと思います。私は小竹氏程度の責めはするかも知れません。あなたのプレイパシは必ず守ります。あなたの勇気を私の方へ向けて下さい。申しおくれましたが、ぼくは二十四才、独身の誠実さがとりえの男です。

(東京・石井茂行)

○ 城山ほずみさん。十月号の貴女の文を読み、まずはじめに私は貴女にプレイの申し込みをします。私も夫婦は毎月下旬、奇クを手にすると二人して色々なアイデアについて意見を交しながら、愛読しております。写真は、ありふれた構図ですが私も夫婦のプレイの一面面です。私は、いつも「花と蛇」の鬼源になったり、川田になったり、田代になったりしてプレイを楽しんでおります。ムチは使いませんが、羞恥責めや操り責め等に、自らベテランをもって任

じております。ハケ、ブラシなど手の届くところにあるものは、すぐ責め具に早がわりしてしまします。私は鬼源の姿そのままに赤禪一つで貴女を責めてみたいと思います。責めると言う言葉の感じですと、私一人が楽しむようですが貴女の言葉の中に「その場合には私も楽しいのです」との一節がありました通り、共にプレイによって、その悦びを充分、味わいたいと思います。私は身体中を余りがんじがらめにせず、そしてさるぐつわと目かくしなど好みます。必ずしも、いつでもと言うことではありませんが、羞恥責めの時などは、目かくしをしないと、目がみえる時とは別な味わいのあるものです。写真の姿に固定されて目かくしされた場合など、貴女はどんな責めを、これからされるのかという未知の恐怖と期待とを、闇黒の中で想い悩まなければならぬでしょう。何をどのようにされるかわからない。これぐらい恐ろしいことはありません。しかし互いに理解し合っている場合には、恐怖の反面、期待があります。抵抗のできない無防備の状態で、目かくしによって目が見えない闇黒の世界。そして、そこに鬼源の姿の

全裸後手柔肌縛り 大手札三枚一組 略号△こよ▽ 四〇〇円	乳房強烈膨隆責め 大手札三枚一組 略号△こわ▽ 四〇〇円	海老責めに苦悶する 大手札三枚一組 略号△こお▽ 四〇〇円	全裸の緊縛全身晒し 大手札三枚一組 略号△こぬ▽ 四〇〇円	煙草責めに喘ぐ女 大手札二枚一組 略号△こほ▽ 三〇〇円	緊縛麗姿に映えるライト 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円	臀部強調後手縛り 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円	羞恥に悶える全裸緊縛 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円	ホステスの緊縛姿態 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円	二つ折りで責める女体 大手札三枚一組 略号△ここ▽ 四〇〇円	男が立っている。もし貴女とプレイをすることができれば、そのプレイの様子を写真と共に奇ク誌上に発表したいと思えます。また、ごくありふれておりますが、
脈打つ全裸の臨月腹 大手札三枚一組 略号△こふ▽ 四〇〇円	臨月腹の革紐股間縛り 大手札三枚一組 略号△こや▽ 四〇〇円	猿轡の臨月妊婦腹縛り 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	卓上の股間縛り狂態 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	羞恥の足挙げ責め 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	悦虐責めの女体終着駅 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	片足挙げの鞭打ち責め 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	柔肌に弾ける惨酷な答 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	あぐら縛りの女体鑑賞 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	対談用に縛られた女 大手札三枚一組 略号△ここの▽ 四〇〇円	羞恥責めの一つのアイデアとしては、股間縦縄をしたままで衣服を身にまとい、人が多勢いるところを男に引かれるように歩かせられるようなことなどです。衆目は

一人として自分に注がれていないにも拘らず、衆目のすべてが自分に注がれているような感じ、そして自分自身の内にこみ上げる快い悦。貴女は、きっと顔から火の出るような思いをし、身体中が火のように燃えるでしょう。私は写真も、このお便りも、妻の諒解のもとに投書致しました。若しプレイの御承諾がありますならば、私は喜んで貴女と共にその悦びを分かちあいたいと思います。御連絡をお待ち致します。

(東京・武田矢一)

奇ク愛読者のみなさん、お元気ですか。始めてお便りいたしますが、私は二十一才のS青年で、本誌を愛読して一年以上たっています。私は現在、サービス関係の仕事に従事し、勤務中は充実していますが、私生活の点においては何ら進歩はありません。この理由としては心の底から話し合える人がいないからだと思っています。どんなかM女性の方、私と交際していただけないでしょうか。

(大阪市・井原)

○
ぼくは三十才の独身サラリーマンで、浣腸、オムツ、ズロース、

マニヤです。二十才台の女性と、いろいろな奇クプレイを楽しみたいと思っと思っています。どなたか、ぼくと次のようなプレイを楽しみたい女性はいらっしゃいませんか。(一)いやがるぼくを後手に縛り上げズボンを脱がして強制浣腸三〇〇cc。そしてピンクのおしめカバーを当てて、その上からズロースストッキング……と下半身を女装化させられる。ぼくは広いビニールをしきつめたベッドの上でうめきながら、遂に粗相してしまおう。それをそばで色々ひやかしたり、あざけったりして下さい。「大人のくせに、もうがまんができないの」「汚したら承知しないわよ」「マア、マアこの人ったら赤ん坊みたい。ズロースまで、ぐしょぐしょじゃないの」(二)今度は、その女性にジュースやビールを腹一杯のんでもらって、ぴっちりオシメを当てさせて夜道をランデブー。しかしトイレに行かせないので、ついに我慢がでなくななり、人通りの多い中で爪立ったまま、お洩しをはじめ、溢れたオシッコが糸を引いて足もとに流れるのに無理に歩かせます。(三)同じように、浣腸してホテルのロビーを歩きまわらせたい。そしてエレベーターを待

つうちに、ついに我慢できずに蒼ざめた女性が粗相してしまおう。(四)こんどはビールやジュースを多量にのませてオシメをあてさせ、映画を観に行つて、うす暗がりのシートの上でチビリチビリとしびつていって、ついに堪えられなくなつてジョーツという音とともに洩らしてしまおう。こんなプレイを二人で楽しもうではありませんか。

(東京・松田末雄)

○
毎号、何はさておき真先に開くのが、カメラハントの頁である。私達の辻村氏に対する期待は大きい。それだけに不出来の時は落胆の度合も高いわけである。ここにいくつかの注文を並べてみよう。第一にフォトには出来るかぎりハントの全貌を写し出してほしい。ハントでは、かなりの所まで進んでいながら、肝心のフォトが載っていない。辻村さん、うらみますよ！ 第二に、似たようなポーズが、いくつも出てくるのは困ります。第三に、フォトの肝心の所が画面の外だったり、フォトの中心を神秘的な白いベールが横切るのはいただけにない。私達の興味も半減してしまいます。今の季節なら、ひまわりの大輪とか、アダムとイ

ブのイチジクの葉、大きな八つ手の葉などの小道具を使用して、カモフラージュしては、いかがでしょう。第四は、責めを加えるときは、責め手もカメラに入れてほしい。たとえば、バイブレーターなどを使って責める時は、カメラアングルを考えて、なるべくその場の雰囲気伝えてほしい。辻村さんも堂々と被写体に加わってはいかがでしょう。ハントした女性を夢中になつて責めている氏に対して、注文するのは酷かな？

(東京・早乙女責留)

○
昨日、フォトたしかに受け取りました。皮肉なもので朝でかける時請求のハガキを出したばかりです。一足ちがいでした。奇クさんにしては少々遅いので、一寸じれたのです。ごめんなさい。胸をどきどきさせて封を切りました。やはり左近麻里子は抜群ですね。マスキもいし、体もなかなかグラマラスで、第二の梨花悠紀子だと思います。九月号のサロン楽我記によれば、辻村先生がS・Mカメラハントの回顧談を発表される由大いに期待しております。この機会に梨花悠紀子、絹川文代などベテランの分譲フォトをおねがいし

次号(十二月号)は十月二十五日に発売いたします

たいものです。文芸春秋の漫画読本九月号には梶山季之の「梶山の珍人物パトロール」と称して、「趣味と実益、マゾ商売」という記事がのっています。この話の主人公は強烈なマゾ女です。とにかくある行為の最中に、髪の毛を引っばると何度も何度もアクメに達するという女だそうです。勿論彼女の髪の毛は人一倍長いのですがこの長い髪の毛を使って彼女自身が考案した責めの色々を十二種類も書いてあります。なかなか興味深く、奇クファンの一読をおすすめします。この話は、梶山氏自身の体験談であります。だからこそ梶山氏の小説には迫真的なSMシーンがでてくるのは当然だと思えました。髪の毛を利用した責め方の中、二、三文中より引用しますと、一、髪の毛をひとまとめにして、口の中へ頬ばれるだけ頬ばらせる。二、髪の毛を二つにわけ、猿ぐつわをかませて鼻の穴にコヨリを入れてくすぐる。三、両手を上方にあげ、髪の毛をロープで固定させてから腋の下をくすぐる。この話には後日談があり、彼女は

男からいじめられないと興奮しない自分と反対に、女をなぐり蹴りしないと興奮しない男性がこの世にいてを知ってそれらサジストの金持ち紳士たちから月極め契約して金をもらい向うもたのしみ自分もたのしむ、という新しい生活に入ったそうです。そして今彼女は都心に近い豪華なマンションに住んでいて、そこにはさまざまな責め道具がおかれているという事です。最後に、この主人公の名前は圭子でした。

(東京都・岩瀬繁夫)

奇ク十月号は正に圧巻。初めて奇クを収集したのは、古本屋の店先で増田みゆき夫人の「妊婦シリーズ」を読んでからだ。別にSMではないが、妊娠腹と云う巨腹の重圧感に真の女性美を見出したからだ。発禁本蒐集に専念し、城市郎先生に直接師事して、発禁本の書誌的面の分野確立と云うものを期待して収集一本に専念したが、最近の入手難は焦々させるばかりの時、図らずも奇クを手にして発禁本不入手の渴を癒した。妊婦資

料が一頁でも載っていると求めて約一カ月程で二十五冊は架蔵したが、奇ク十月号は、それらの記事を遙かに凌駕する。項目は「胎児の喘ぐとき」辻村氏のルポもリアルな筆致で立派だし、その写真たるや苦悶と快楽の表情は、戦慄と不思議ないいような美を感じる。この号に限らず(二十数冊の少ない架蔵では口はばったいが)発禁処分のすれすれの限界で、リミットしている編集校正の巧さには、新興風俗誌の真似の出来ない神経の細かさを感じている。「愛書家クラブ」主宰者の斎藤夜居氏の「資料入門」も誠に立派です。最近の、風俗本収集の静かなブームに乗る、新しい蒐集家にとり、良き参考資料になり、東京、小山蒙堂氏の御意見に賛成です。「妊婦資料」という限定されたものだけに、渴望しているファンも数多いと思われるので「特集」として刊行される様、望みます。貴誌の方向にややそれるものでもありますがマンネリ化しつつある風俗誌に、パイオニアとしての誇りと貫禄を示して下されば幸甚です。貴誌の発展と王座の示威を祈り期待します。

(大阪・藤本清造)

最近の奇クに物足りなさを感じていた私は十月号を読んで久し振りに満足感を味わった。グラビアを削除されたり、内容に制限を加えられたりで、手足を挽がれた感のあった奇クがやっと立ちなおったなと思った。本文の内容は毎号々々充実へと歩を進めている。奇クサロンも刺身のつまとしての役を十二分にはたすようになって来た。特にSMカメラ・ハント「胎児の喘ぐとき」は素晴しかった。今年の六月号に載っていた小妻京子さんのイメージ画「恋愛すべからず」以来の迫力ある傑作だと思う。ただ心配なのは内容を豊富にしようとするあまり、それらが雑然となり、統一性が欠けてしまうのではないかとことです。九月号から編集人が箕田京二氏から杉原虹児氏に変わったとのこと、一層の御努力をお願いします。

(東京・藤倉一幸)

片野初枝様。十月号の読者通信を拝見いたしました。私も「花と蛇」を拝読している当年三十才になる独身の一男性です。ぜひ、ご連絡下さい。かねがね誌上で活躍しておられる方々のいろいろの体験など読ませていただくにつけ、

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについて是在庫の僅少ななものもありますから、お早い目に御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりましたが、今後は三カ月以上予約御注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円（の御負担をお願いします。多数一括してお求めの際は、△小包▽にて発送申し上げます。

昭和昭和昭和昭和昭和昭和昭和昭和
4040404040404039
年 年 年 年 年 年 年 年 年
9 8 7 6 5 4 3 2 11
月 月 月 月 月 月 月 月 月
号 号 号 号 号 号 号 号 号
送共送共送共送共送共送共送共
三三三三三三三三
〇〇〇〇〇〇〇〇
円 円 円 円 円 円 円 円 円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
 和和和和和和和和和和和和和和和和
 424242414141414141414141404040
 年年年年年年年年年年年年年年年年
 6 5 4 1 1 1 0 8 7 6 5 4 3 2 1 1 2 1 1 1 0
 月月月月月月月月月月月月月月月月
 号号号号号号号号号号号号号号号号
 送送送送送送送送送送送送送送送送
 共共共共共共共共共共共共共共共共
 三三三三三三三三三三三三三三三三
 七七七七七二二二二二二二二二二二
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 円円円円円円円円円円円円円円円円

昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭昭
 和和和和和和和和和和和和和和和和
 434343434343434343424242424242
 年年年年年年年年年年年年年年年年
 10987654321121110987
 月月月月月月月月月月月月月月月月
 号号号号号号号号号号号号号号号号
 送送送送送送送送送送送送送送送送
 共共共共共共共共共共共共共共共共
 三三三三三三三三三三三三三三三三
 七七七七七七七七七七七七七七七七
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 円円円円円円円円円円円円円円円円

と思うのです。M女性ばかりでなく、男性の方もどうか文通をしようではありませんか。（東京・山田二郎）

東京の青木雄三郎さん。貴男の記事、拝見したわ。もっと近ければ、いじめてやりたいの。あたしは大柄で、ちょっとした男になんか負けない自信があるの。貴男を組み敷いて、一匹の犬として仕えさせてやりたいわ。顔の上にとっかと腰をおろして神水を充分あげる。後仕末も勿論させるわ。両手足を拡げて鎖でくくるし、首輪もはめるからね。以前、あたしが飼育していた一匹の忠実な犬の通

りにしてあげるわ。あなたにできるかしら。恥かしい思いをさせるのが私の趣味なの。今までに、どんなにでもして犬を責めてきたのだわ。犬は、とても喜んで興奮するの。全裸で私に仕えるの。わかっていて、途中で逃げるのなら初めから止めて頂戴。股を大きく開かせて男性をゆっくり観察し、責めて責めて責め抜いて、恥かしい思いをさせるのよ。汚れたパンティを口の中に押し入れてやるのよ。うれしいでしょう。女に征服されて奴隷にされるのよ。犬以下だわ。前の犬も涙を流して喜んでたのよ。転勤で別れ別れになっちゃったの。その後に一匹、

ぜひほしいの。青木さん以外でもよいのよ。近くの人なら、なおよいのですけど、二人だけの秘密としての楽しみよ。あたしのこの全裸のグラマー拜ませてあげるよ。よだれを垂らしながら責められてみたい人、名乗りをあげなさい。

○（大阪市東区の女王）

横浜の片野初枝様。私はしがたい新聞配達人ですが、一度逢ってプレイの楽しさを語りましょう。お互いに秘密に徹し自尊心を重じプライパシーに触れずに接したいと思います。きつと貴女が満足いくよう調教を試みます。お便りお待ちしております。（横浜市・武内正二）

☆編集後記☆

○辻村隆氏が東映作品「徳川女刑罰史」の緊縛指導者ともなれば、本誌としてもその紹介に誌面を割かざるを得ない。既に割付済の原稿を再検討、急拠組み替えをしたが、整理部は辻村氏に振り廻された感じ。成功を祈る。

○懸賞応募の作品も相当数あるが、通読するだけでも骨の折れそうな大作揃い。綿々たる導入描写にお手上げの恰好で、月号の間に合い兼ねた。出来るだけ早く整理発表したいと心掛けていたので、ご諒承願いたい。

○芳野眉美氏の「濡れにぞ濡れし」GRクラブVは、こういうこともあったのか、という興味を持たれる方も多いレポであろう。

○告白記として「ゴムに魅せられて」弾六

夫「禁じられた楽しみ」並原新一「私の流腸体験」浅野かつみ「各氏のものを探り上げた。Sの華々しさ？」とは違った孤独な願望が素朴に語られてはいまいか。

○連載小説陣もいよいよ好調だが、「街中で」の発芽「水沢登」女は強い「原砂土」の二篇は、近頃の世相の、SM的一端がうかがえるものではなからうか。

○鬼六談義「秋の風」は、いつもながら先生のてらいのないブツチャケ話として、楽屋裏を眺めるような親しみを感ぜはしまいか。来月号予定の「伊藤晴雨」に期待しよう。

○サロンに一部掲載したが、本誌に対する種々のご意見には感謝の他はない。今後とも一層参考にさせて戴きたく、更に卒直な投書をお待ちしたい。大いに建設的叱声を乞う。

◎懸賞原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には賞金三千円以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

本誌の内容に適したものでしたら如何なる傾向のもので

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分がありますら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては賞金十万円迄贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンのままとめて下さい。採用篇

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊誌、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されれば幸いです。採用篇には本誌三ヶ月贈呈致します。◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真や御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されれば、贈呈いたします。

☆本誌御購読の榮☆

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

予約に限り

一月分(1冊)	三五〇円	送20円
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共

奇譚クラブ 定価 三五〇円

十一月号

【第二十二巻第十二号】

昭和四十三年十月二十日 印刷
昭和四十三年十一月一日 発行

編集人 杉原虹児
発行人 北村俊夫
印刷人 村俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

〒558 振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されないうち、本誌は充分に注意して編集いたしております。したが、本誌の発行を企図して下さる方には、十八才未満の方には絶対お売り下されません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。